

# 平城宮発掘調査報告Ⅵ

本 文



奈良国立文化財研究所

# 正 誤 表

〔本文〕			
頁	行	誤	正
目次第IV章	2 瓦埦	E 殿舎地域の瓦	E 殿舎地区の瓦
挿図目次	112	243	242
〃	113	248	247
〃	114	250	249
〃	115	251	250
〃	116	254・255	256・257
〃	117	254・255	256・257
〃	118	257	256
〃	119	260	259
表目次	2	第1次大極殿地域東半部 推定工量	第1次大極殿地域東半 部推定土工量
〃	43	245	244
〃	44	249	248
〃	45	254	253
〃	46	256	255
〃	47	256	255
〃	48	260	259
〃	49	262	261
3 P	12 行	47 hr	47 ha
	15 行	133 hr	133 ha
4 P	24 行	本中真人	本中真
13 P	28 行	斜道 SF 9237.A	斜道 SF 9232 A
33 P	Tab.2	第1次大極殿地域 東半部推定工量	第1次大極殿地域東半 部推定土工量
37 P	fig.15	SD7813 SD7813B	SD7805 SD7833 B
41 P	17 行	SD7813	SD7813 A
44 P	12 行	幅 500 m	幅 50 cm
44 P	fig.20	3 SC 5600ハ四	3 SC 5500ハ四
52 P	22 行	SX 9218	SS 9218
54 P	29 行	宮殿地区	殿舎地区
60 P	30 行	える揃桁行	揃える桁行

66 P	10 行	四・五通	三・四通
66 P	20 行	改築につくられた	改築時につくられた
74 P	14 行	SS8828	SS8228
74 P	29 行	西雨落溝SD9226	西雨落溝SD8226
76 P	17 行	南門SB7800	南門SB7801
76 P	27 行	南門SB7800	南門SB7801
77 P	1 行	灰色質土	青灰色砂質土
85 P	15 行	(fig.2-46)	(fig.46-2)
94 P	24 行	(fig.49)	(fig.52)
98 P	25 行		末尾へ 6091
99 P	18 行	中衛府充	中衛府宛
99 P	19 行	木簡の充先	木簡の宛先
99 P	25 行		末尾へ 6091
101 P	5 行		木簡11 (表)
101 P	6 行		(裏)
105 P	1 行	(PL.99)	(PL.98)
113 P	6 行	充先	宛先
114 P	10 行	『宮衛令集解』によれば、 の古記に	『宮衛令集解』の古記によれば
135 P	25 行	東(卯)の58番目	東(卯)の57番目
150 P	2 行	塩基性シュリーレ状	塩基性シュリーレン状
152 P	3 行	飛鳥地方に産したもの	飛鳥地方に産するもの
179 P		Tab.28 SK8316出土土器の 構成	Tab.27 SK8316出土土器の 構成
227 P	注4	「平城京大極殿の調査」	「平城宮大極殿の調査」
228 P	12 行	身捨梁間の寸法	身舎梁間の寸法
231 P	注1	『平城宮木簡概報16』	『平城宮発掘調査出土木簡概報15』
233 P	24 行	それとともに西宮	それとともに西宮
234・235 P	fig.109・110		赤刷は平城宮殿舎
235	5 行	棲鳳閣になつがる	棲鳳閣につながる
249	fig.114	6663 - (KH06B)	6663 - B (KH06)
262	12 行	(I-3期)	(第I-3期)
263	11 行	建築雛型	建築雛形



第1次大極殿 殿舎地区東から

奈良国立文化財研究所30周年記念学報(学報第40冊)

# 平城宮発掘調査報告 XI

## 第1次大極殿地域の調査

本 文

奈良国立文化財研究所

1981

## 序

昭和27年4月、美術工芸・建造物・歴史の三研究室と庶務室とからなる定員15名で発足した奈良国立文化財研究所は、今年で三十周年を迎えた。その間に、建造物・歴史の二研究室、平城宮跡発掘調査部・飛鳥藤原宮跡発掘調査部と庶務部からなる三部二研究室、さらに埋蔵文化財センター、飛鳥資料館を付設する96名の定員を数える組織へと発展した。これはひとえに文化庁はじめ関係各位の御指導と温い御支援の賜物と深く感謝する次第である。

今回の学報は、朱雀門（学報第34冊）の北500mからはじまり、推定大膳職地域（学報第15・17冊）に至る南北約320m、面積約380アールの地域に関する発掘報告である。発掘は昭和40年の第27次調査にはじまり、昭和54年の第117次調査まで前後12回にわたった。この地は古墳時代に小規模な古墳も営まれ、佐紀盾列古墳群の南西端に位置している。歴史時代に入ると下ツ道が中央を南北に縦貫しており、平城京そのものも下ツ道の中軸にして設定されていることが明らかとなった。平城宮造営にあたっては、北部に埴積の大規模な施設がつくられ、中央に木階、左右に斜路を設けた例のない設計を行ない、その奥に大極殿を配する壮大な計画を示している。これに対応して南約220メートルに門を設け、後にこの地を荘厳する巨大な東西楼を増築する。このような宮殿配置は、わが国の古代宮殿に例をみないところである。その後、孝謙朝に埴積の壇を埋めて南北に軒をつらねた殿舎が営まれる。それは平安朝の内裏をしのばれるような殿舎で、個々の建物の独立性が強い東方の内裏地域（学

報第16冊)と大きく異っている。九世紀に入って平城上皇の時期にも再び中心的な宮殿の地に選ばれているが、規模は縮少し、明治以来この地域に残っていた土塁が実は最後の姿を示していることがわかった。

この地域の発掘は、平城宮の中心部の変遷を具体的に明示したのであるが、古い時期の遺構は痕跡的にしか残っておらず、結論も所内で議論を重ねての結果とはいえ、将来異なった解釈を生ずる余地を残している。事実を主とした資料を一日も早く提供することに主眼を置いたものと御理解いただければと考えている。

昭和39年に平城宮跡発掘調査部が発足して以来、この地域の調査が平城宮跡発掘調査の一つの柱となっていた。その調査報告書を、奈良国立文化財研究所設立三十周年事業の一環として出版できたことは大変喜ばしい。また、発掘にたずさわった多くの人々のうち、他に転出された方も数多い。それらの人々に対してもその労を感謝したい。

最後に、内容その他にわたって忌憚ない御批判と、御鞭撻を賜りますことを御願ひ申し上げます。

昭和57年 1 月

奈良国立文化財研究所長

坪 井 清 足

# 目 次

第Ⅰ章 序 言 .....	1
1 最近における発掘の進展 .....	1
2 保存と整備 .....	3
3 報告書の作成 .....	4
第Ⅱ章 調査概要 .....	5
1 調査地域 .....	5
2 調査経過 .....	7
A 第27次調査.....	7
B 第41次調査.....	8
C 第69次調査.....	8
D 第72次調査.....	9
E 第75次調査.....	10
F 第77次調査.....	11
G 第81次調査.....	12
H 第87次調査.....	12
I 第117次調査.....	13
J 内裏検討会.....	14
3 調査日誌 .....	15
A 第27次発掘調査.....	15
B 第41次発掘調査.....	17
C 第69次発掘調査.....	18
D 第72次北発掘調査.....	20
E 第72次南発掘調査.....	21
F 第75次発掘調査.....	21
G 第77次発掘調査.....	22
H 第81次東発掘調査.....	24
I 第81次西発掘調査.....	24
J 第81次中発掘調査.....	25
K 第87次北発掘調査.....	25
L 第87次南発掘調査.....	26
M 第117次発掘調査.....	27
第Ⅲ章 遺 跡 .....	29
1 遺跡の形成 .....	29
A 発掘前の地形.....	30
B 古代の地形.....	31

2 遺 構 .....33

- |                   |                |
|-------------------|----------------|
| A 門・築地回廊地区.....34 | D 東外郭地区.....84 |
| B 殿舎地区.....56     | E 大膳職地域.....92 |
| C 広場地区.....76     |                |

第IV章 遺 物 .....97

1 木 簡 .....98

- |                       |                       |
|-----------------------|-----------------------|
| A SD3715出土の木簡..... 98 | E SD3765出土の木簡.....106 |
| B SD5564出土の木簡.....105 | F SK3730出土の木簡.....107 |
| C SK5535出土の木簡.....105 | G SB7802出土の木簡.....107 |
| D SD5490出土の木簡.....106 | H まとめ .....112        |

2 瓦 埴 .....115

- |                         |                    |
|-------------------------|--------------------|
| A SD3765の瓦.....117      | E 殿舎地域の瓦 .....124  |
| B SB7801とSB7802の瓦...117 | F SD3715の瓦.....125 |
| C SC5500の瓦.....120      | G その他の瓦埴類 .....126 |
| D SC3810とSB7750の瓦...123 |                    |

3 部 材 .....130

- |                      |                   |
|----------------------|-------------------|
| A 柱根と礎盤 .....130     | C 建築雛形部材 .....144 |
| B SE9210の井戸枠.....140 | D 石材ほか .....149   |

4 土 器 .....153

- |                                   |  |
|-----------------------------------|--|
| A SB7802出土の土器 .....156            | G SD8211など第Ⅱ期溝<br>出土の土器 .....167         |
| B SA3777出土の土器 .....160            | H SK8212出土の土器.....168                    |
| C SA109出土の土器 .....162             | I SE9210出土の土器.....169                    |
| D SX6600出土の土器.....165             | J SB8224出土の土器.....170                    |
| E SB7150出土の土器 .....166            | K SD6631・SD6633・SD7175<br>出土の土器 .....171 |
| F SB6633など第Ⅱ期建物<br>出土の土器 .....166 |  |

L	SD3765出土の土器	172	P	SK8316・SK8317・ SK8233出土の土器	178	
M	SD5505出土の土器	172	Q	SK3730出土の土器	180	
N	SD3715出土の土器	172	R	特殊土器類	181	
O	SK3784出土の土器	176	S	SX7800出土の埴輪ほか	186	
5	木製品					188
A	SB7802出土の木製品	188	C	その他の木製品	201	
B	SD3715出土の木製品	195	D	木製品の樹種	205	
6	金属製品・石製品					207
7	銭貨					209
第V章 考察						213
1	第1次大極殿地域の変遷					213
A	平城宮造営以前および 造営時の遺構	213	C	第Ⅱ期の遺構	220	
B	第Ⅰ期の遺構	214	D	第Ⅲ期の遺構	223	
2	第1次大極殿地域の性格					225
A	諸説の検討	225	D	平城上皇の宮殿	231	
B	第Ⅰ期遺構の年代	226	E	西宮の再検討	233	
C	第Ⅱ期遺構の宮殿比定	230	F	唐長安大明宮の 含元殿と麟徳殿	234	
3	建築遺構の復原					236
A	第Ⅰ期建物の復原	236	C	第Ⅲ期建物の復原	240	
B	第Ⅱ期建物の復原	238				
4	屋瓦					242
A	軒瓦編年の改訂	242	B	軒瓦の組合せ関係	243	

C 軒瓦の同范関係 .....	247
5 土 器 .....	251
A 平城宮土器IV・VIIの再検討…	251
B 食膳形態土器の構成 …	258
6 結 語 .....	262
別 表 .....	265
英 文 要 旨 .....	281

# 巻首図版

第1次大極殿殿舎地区 東から

## 別 表

1 主要建物一覧表……………	266	4 平城宮土師器器種表……………	276
2 軒丸瓦分類表……………	268	5 平城宮須恵器器種表……………	278
3 軒平瓦分類表……………	272		

## 挿 図

1 調査地域……………	6
2 第27次調査地の主要遺構……………	15
3 第41次調査地の主要遺構……………	17
4 第69・72次調査地の主要遺構……………	19
5 第75次調査地の主要遺構……………	22
6 第77次調査地の主要遺構……………	23
7 第81次東調査地の主要遺構……………	24
8 第81次中・西調査地の主要遺構……………	24
9 第87次調査地の主要遺構……………	25
10 第117次調査地の主要遺構……………	27
11 現状地形とボーリング調査……………	29
12 第1次大極殿地域の地形変遷(1)……………	30
13 第1次大極殿地域の地形変遷(2)……………	31
14 SB7801基壇の断面……………	35
15 SB7801北面階段付近の礎敷……………	37
16 SC5600礎石据付痕跡と盲暗渠……………	38
17 SC5600基壇の断面……………	39
18 SB7802とSC5600の重複……………	42

19	SB7802の柱掘形	43
20	SC5500とSC5600の礎石据付痕跡	44
21	SC5500の基壇断面	45
22	SA3777の柱根	46
23	SD5560とSD5561の結合	47
24	SD5588に結ぶSD5562とSD5563	48
25	SD3790とSD3770	49
26	SD3775とSB3746	49
27	SB7750AとSC3810A・SA3810B基壇断面	51
28	SC8360礎石据付痕跡とSB8230の柱掘形	52
29	SC6670礎石据付痕跡	53
30	SD3815実測図	54
31	SA3800の地覆石	55
32	SD8227実測図	55
33	SX8332実測図	55
34	SX6600とSX9230の重複	57
35	SX6600とSX6601の埋立状況	59
36	SD7165の断面	60
37	SB6611とSB6620・SB6630の柱掘形の重複	62
38	SB7151A・B柱掘形の重複	63
39	SB6655柱掘形の重複	66
40	SB6622とSB6660柱掘形の重複	71
41	SB8218A・B柱掘形の重複	74
42	SD5590付近の土層堆積	77
43	SE7145の断面	78
44	SE9210実測図	80
45	SX7800濠の断面	83
46	東外郭横断面図	86
47	小規模建物の柱掘形	88
48	SX3720実測図	89
49	SD5530に設けた小橋SX5543	91

50	大膳職地域の遺構変遷改訂案	93
51	『平城宮報告IV』遺構変遷図	93
52	SA109土層断面	95
53	SD8077実測図	96
54	SD3715出土未使用木簡	104
55	SB7802出土未使用木簡	112
56	第1次大極殿地域出土軒瓦の比率	115
57	第1次大極殿地域の軌瓦分布	116
58	南門地区出土軒瓦の比率	118
59	東楼地区出土軒瓦の比率	119
60	東面築地回廊地区出土軒瓦の比率	122
61	第II期南面築地回廊地区出土軒瓦の比率	123
62	殿舎地区出土軒瓦の比率	124
63	SD3715出土軒瓦の比率	125
64	第1次大極殿地域出土の鬼瓦	126
65	文字瓦	128
66	薬師寺出土隅木蓋瓦	128
67	塼状飾板	129
68	SA3777柱根の木口切断面	132
69	木樋材から想定される掘立柱塀	137
70	平城宮出土の柱根直径	139
71	SE9210井戸枠実測図	140・141
72	SE9210井戸枠の組上げ法	141
73	校木の復原	142
74	礎盤実測図	143
75	東大寺法華堂経庫	143
76	建築雛形三手先復原図	147
77	SD109南溝出土礎石	150
78	石材顕微鏡写真	150・151
79	土師器杯皿の口縁部形態	154
80	須恵器の口縁部形態	154

81	SA3777出土の土器	160
82	SD109南側溝出土の土器	163
83	SD109北側溝出土の土器	164
84	SX6600出土の土器	165
85	SE9210出土の土器	169
86	SD5505・SD3765・SK8316・SK8317・SK8233出土の土器	173
87	SK3784出土の土器	177
88	SK3730出土の土器	180
89	施釉陶器実測図	182
90	陶硯実測図	185
91	古墳時代須恵器	187
92	SB7802出土の曲物底板	191
93	SB7802出土の棒状木製品	194
94	SD3715出土の曲物・折敷	198
95	SD3715出土の木製品	198
96	造営前の遺構	213
97	第Ⅰ－1期の主要遺構	214
98	第Ⅰ－2期の主要遺構	215
99	第Ⅰ－3期の主要遺構	216
100	第Ⅰ－4期の主要遺構	217
101	平城宮内における第1次大極殿の地割り	219
102	第Ⅰ期建物の配置計画	219
103	第Ⅱ期の主要遺構	221
104	第Ⅱ期建物の配置計画	222
105	第Ⅲ期の主要遺構	223
106	第Ⅲ期建物の配置計画	223
107	平安宮古図にみえる内裏東北隅	232
108	第1次大極殿地域の変遷	233
109	大明宮含元殿とSB7200の比較	234・235
110	大明宮麟徳殿と第Ⅱ期中央建物の比較	234・235
111	SB7200の寄棟造復原	237

112	第2次大極殿・朝堂院の軒瓦	243
113	6284Fの同範	248
114	平城宮と恭仁宮の同範軒瓦	250
115	6320Aの二種	251
116	平城宮土器表面・断面拡大写真	254・255
117	平城宮土器の偏光顕微鏡写真	254・255
118	土器の蛍光X線分析	257
119	SB7802の食器組合せ	260

## 表

1	調査期間と発掘面積	5
2	第1次大極殿地域東半部推定工量	33
3	SD3715未使用木簡の寸法	104
4	SD7802未使用木簡の寸法	112
5	紀年銘木簡表	113
6	柱根・礎盤の寸法と樹種	131
7	木樋の寸法	134
8	木樋暗渠蓋の寸法	136
9	大地域を画する掘立柱塀	138
10	柱根の樹齢測定	140
11	校木断面寸法の比較	143
12	奈良県下の寺院礎石の石材種	151
13	平城宮土器の大別	153
14	平城宮土器IV・Vの法量	155
15	SB7802出土土器の構成	157
16	SA3777出土土器の構成	161
17	SA109南側溝出土土器の構成	162
18	SA109北側溝出土土器の構成	165
19	SB7150出土土器の構成	166
20	SB6633・SB6666・SB7151・SB7152出土土器の構成	167

21	SD8211・SD8214・SD8216・SD8246出土土器の構成	167
22	SK8212出土土器の構成	168
23	SB8224出土土器の構成	170
24	SD6631・SD6633・SD7175出土土器の構成	171
25	SD3715出土土器の構成	174
26	SK3784出土土器の構成	178
27	SK8316出土土器の構成	179
28	SK8317出土土器の構成	179
29	SK8233出土土器の構成	180
30	SK3730出土土器の構成	181
31	施釉陶器の出土地点	182
32	墨書・墨画・篋書・刻線文・刻印土器一覽	183
33	陶硯の出土地点	185
34	SB7802出土杓子形木製品の寸法	190
35	SB7802出土曲物底板の寸法	192
36	SB7802出土棒状木製品の寸法	195
37	SD3715出土曲物底板の寸法	197
38	SD3715出土棒状木製品の寸法	201
39	SD9210出土曲物底板の寸法	204
40	第1次大極殿地域出土木製品の樹種	206
41	錢貨の計測値(1)	210
42	錢貨の計測値(2)	211
43	第1次大極殿地域の軒瓦組合せ	245
44	恭仁宮軒瓦の分類	249
45	土師器杯A・皿Aの調整手法	254
46	分析資料一覽	256
47	胎土分析資料の時期	256
48	SB7802の食器構成	260
49	SA3777の食器構成	262

# 平城宮発掘調査報告XI

第1次大極殿地域の調査  
本文

1981

# 第 I 章 序 言

この報告は、奈良市佐紀町に所在する特別史跡「平城宮跡」の中心部にあたる第1次大極殿地域における1965(昭和40)年度の第27次調査から、1979(昭和54)年度の第117次調査まで、9次12回にわたる調査の結果をまとめたものである。この地域は第27次調査と1967(昭和42)年度の第41次調査によって、大極殿を取りかこむ東面築地回廊などの状況が判明し、1970(昭和45)年度の第69次調査以降の発掘調査によって北部の建物群地域の状況がはっきりした。そして、1979(昭和54)年度の第117次調査をもってこの地域東半部の調査は完了した。

今回報告する地域に接する南方部の地域は、水田の畦畔や南北に細長くのこる土壇によって第1次朝堂院があったものと推察されてきた<sup>1)</sup>。1976(昭和51)年度の第97次調査から1979(昭和54)年度の第119次調査までの間、4次にわたり南面中央部および東方部の調査を行なって、当初は木堀、のちに築地を築いて、東西215m(720尺)、南北285m(960尺)の区域をかこみ、正面に南門を開き、内郭両脇に2棟ずつの長い南北棟建物がたっていたことが判明した<sup>2)</sup>。それは平城宮第2次朝堂院や藤原宮朝堂院などのように十二堂が並ぶものではなく、特殊な構成を呈しており、その検討は今後の課題である。

## 1 最近における発掘の進展

第1次朝堂院地域とともに近年とくに重点をおいてきた東院地域では、1976(昭和51)年度の第99次調査<sup>3)</sup>で東南隅の園池のほぼ全容をあきらかにした。ついで、1978(昭和53)年度の第110次調査<sup>4)</sup>で園池の北側、1979(昭和54)年度の第120次調査<sup>5)</sup>で園池の西側を調査し、園池の改修状況とこの区域の区画割りおよび建物の変遷状況をあきらかにした。東院西方部の第2次朝堂院東外郭に接する区域では、1977(昭和52)年度の第104次調査<sup>6)</sup>で、もと東一坊大路道路敷とかがえてきたところが、奈良時代とくにその後半に多数の建物が規則的に配置され、しかも再三にわたって建替えていることがわかった。この区域の東側で行なった1980(昭和55)年度の第128次調査<sup>7)</sup>でも同様の状況がみとめられ、とくにこの調査では緑釉埴や墨書土器に注目すべきものがあった。今後、東院の調査は中心部に向かって進展することになるが、それらの調査によって、東院地域の性格が一層明確になるはずである。

水上池堤下の宮域北端部で行なった1981(昭和56)年度の第129次調査では、内裏東外郭の南北大溝北限の状況とともに、皇后宮職に関する墨書土器・木簡が発見され、この地域の性格の

1) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告 II』官衙地域の調査(学報第15冊)1962, p. 97 以下『平城宮報告』IIと略し、同報告書のIII以降についても同じ。

2) 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報1977』p. 22, 以下年報については『年報1977』のように略す。『年報1978』p. 19, 『年報

1979』p.23, 『年報1980』p. 25

3) 『年報1977』p. 24

4) 『年報1979』p. 21

5) 『年報1980』p. 27

6) 『年報1978』p. 23

7) 『年報1981』p. 17

## 第I章 序 言

解明に重要な手掛りをあたえている。

大正年間に植えられた第2次大極殿土壇上の松がかれたことと、基壇の整備計画をたてるため、1978(昭和53)年度の第113次調査<sup>1)</sup>で、第2次大極殿の調査を行なった。基壇と建物の規模を確認し、さらに下層に掘立柱の大規模な建物のあることが判明した。1981年度もひきつづき大極殿後殿と回廊の調査を行ない(第132次調査)、その規模と構成をあきらかにした。

平城宮南辺部の整備は平城遺跡博物館基本構想のなかにも重点的にとりあげられており、特別史跡追加指定と奈良県が先行取得したのを機会に、発掘調査を行なった。1980(昭和55)年度の第122次調査で南面東門(壬生門)と両脇の大垣および二条大路の調査を行ない、本年度の第130次調査で朱雀門東方大垣、第133次調査で南面西門(若犬養門)、第136次調査で第1次朝堂院東南隅の調査を進めている。

宮域の北辺部については、ながらく大規模な調査がなかったが、宮域北方にある土塁状の高まりが奈良県立橿原考古学研究所によって調査された<sup>3)</sup>。その結果、奈良時代の築地痕跡であることが確認され、「松林宮、松林苑」を区画するものという説が提示されている。さらに、平城宮北面大垣と推定松林宮南面大垣との中間が大蔵省の占地にあたるのではないかという見解がだされ、近年この地域がとくに注目されている。

平城天皇楊梅陵の前身である市庭古墳の西北で住宅開発計画があり、その地区の調査を1980年度に第126次調査<sup>4)</sup>として行なった。倉庫群などにあたる建物遺構は存在しなかったが、市庭古墳後円部の周濠が二重であり、内濠は奈良時代に墳丘を削って埋め立てられ、外濠が園池として再利用されていることがあきらかになった。同時に行なった第123—12次調査では、推定松林宮大垣南西隅につづく基底幅2.7mの築地とその北方に幅約5.3m、深さ約3mの大溝を確認し、平城宮北辺部が宮に直接関連する公的な地域であることが強く裏づけられた。しかし、この地域の住宅開発は急速に進展しており、この地域の解明が当面の緊急かつ重要な課題のひとつになっている。

平城京内の開発工事はますます増加し、発掘調査の機会も増加した。当調査部は1965(昭和40)年度の第25—2次(簡易保険奈良保養センター)調査以降、各所で調査を行ない、条坊の割付けや坪内の状況をあきらかにしてきた。1975(昭和50)年度の第96次調査とこれを補足した1977年度の第109次調査<sup>5)</sup>、1979年度の第121次調査<sup>6)</sup>では、左京三条二坊六坪の園池を中心とする類例まれな遺跡が発見され、平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園遺跡として特別史跡に指定された。1979(昭和54)年度の第116次調査<sup>7)</sup>では、左京三条四坊七坪において京内ではじめて和同開珎の鑄造工房を発見した。県道城廻り線の計画にともなって1980(昭和55)年度の第125次調査<sup>8)</sup>と今年度の補足調査を行ない、九条大路北辺部の状況もあきらかになった。開発計画は西市推定地にもおよび、1980年度と今年度に右京八条二坊十二坪内の緊急調査を行なった。

1) 『年報1979』p. 1

2) 『年報1981』p. 14

3) 河上邦彦「松林苑の確認と調査」『奈良県観光』277号 1979

4) 奈良国立文化財研究所『平城宮北辺地域発掘調査報告書』1981

5) 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊

六坪発掘調査概報』1976

6) 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』奈良市教育委員会 1980

7) 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報』1980

8) 奈良国立文化財研究所『平城京九条大路一県道城廻り線予定地発掘調査概報 I』1981

## 2 保存と整備

京北方の奈良山丘陵では、住宅・都市整備公団の平城ニュータウン造成計画にともない、1971(昭和46)年度から1973年度にかけて、大規模な調査を行なってきた。その調査の一環として、1978(昭和53)年度には、奈良市山陵町の石のカラト古墳、京都府相楽郡精華町の音如ヶ谷瓦窯の調査を行なった<sup>1)</sup>。それらの遺跡は保存を前提とするものであって、近い将来団地のなかに保存整備され、文化環境を高める役割りを果たすことが期待される。

発掘調査の進展にともない、遺構・遺物の保存に対する研究開発が重要な課題であることはいうまでもない。保存処理に関する新しい方法として大極殿をはじめとする版築の土層などの断面をそのまま転写することに成功した。これで実測図や写真とともに発掘記録の有力な手段が一つ増加したことになった。一方、発掘で出現した遺構をウレタン樹脂を用いて切り取る方法も簡便化し各種の遺構でその利用を試みている。

## 2 保存と整備

平城宮跡は1922(大正11)年に第1次・第2次大極殿朝堂院、内裏地域を中心に47hrが史蹟に指定され、その後通称一条通り北方部が追加され、1952(昭和27)年特別史蹟指定後も西方地域、東院地域が追加され、さらに1979(昭和54)年に南辺部が追加指定されて、現在の特別史蹟指定面積は約133hrになっている。

国費による公有化は、奈良県教育委員会が事務を担当して、1963(昭和38)年度から開始され、東院地域と佐紀池では従来からの方式による国費直接買上げとともに、1973～74(昭和48～49)年度に奈良県が先行取得を行ない、南辺部の大部分も、1979(昭和54)年度に奈良県が先行取得をして、現在逐次奈良県から再取得を進めている。

宮跡の保存整備は1963(昭和38)年度に奈良県教育委員会により始められたが、1970(昭和45)年度から当研究所が引継いでいる。それは主として第2次内裏・大極殿・朝堂院地域を中心にして行ない、歴史的な景観をそこなくいろいろな方法で活用されている。平城宮跡の保存整備に関する基本的な方針は1968(昭和43)年以来、文化庁の「平城宮跡保存整備準備委員会」、引続き「平城宮跡保存整備委員会」において検討が続けられ、文化庁の依頼により当研究所がまとめた「平城遺跡博物館基本構想案」にもとづいて、1978(昭和53)年に文化庁から『平城遺跡博物館基本構想資料<sup>2)</sup>』が公表され、今後の保存整備はこの構想案にそって進められることになる。

とくに1980(昭和55)年度には発掘調査の成果にもとづいて、第2次大極殿の基壇整備を行なった。遺構の保存はいうまでもなく、南方の朝堂院や北方の内裏地域との調和をはかり、全体を旧地表面から60cm上げ、壇正積基壇の上半部と石階を復原し、上に礎石を並べ、基壇下方を土壇芝張りとしている。

1981年度からは南面大垣の復原事業に着手し、宮跡の保存整備も一段と推進され、平城宮の景観も変化することになる。

1) 奈良国立文化財研究所『奈良山Ⅲ—平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』京都府教育委

員会・奈良県教育委員会 1979

2) 文化庁『平城遺跡博物館基本構想資料』1977

### 3 報告書の作成

長期間にわたる発掘調査にたずさわった関係者は随分と多く、ここではさきに調査責任者(所長・部長)と発掘調査担当者をかかげ、その他の関係者については一括して列記する。

次 数	発掘年度	所 長	部 長	発掘調査担当者
第27次	(1965年)	小林 剛	杉山 信三	佐原 真
第41次	(1967年)	〃	〃	阿部 義平
第69次	(1970年)	松下 隆章	坪井 清足	宮本長二郎
第72次	(1971年)	〃	〃	甲斐 忠彦
第75次	(1972年)	内山 正	〃	吉田 恵二
第77次	(1973年)	〃	〃	田辺 征夫
第81次東( 〃 )		〃	〃	藤村 泉
第81次西(1974年)		〃	〃	黒崎 直
第81次中( 〃 )		小川 修三	鈴木 嘉吉	金子 裕之
第87次北(1975年)		〃	〃	川越 俊一
第87次南(1976年)		〃	〃	中村 雅治
第117次(1979年)		坪井 清足	狩野久・岡田英男	立木 修

横山浩一、岡田茂弘、宮沢智士、猪熊兼勝、小笠原好彦、高島忠平、工藤圭章、牛川喜幸、本村豪章、三輪嘉六、石井則孝、横田義章、村上訥一、沢村仁、河原純之、松下正司、玉井力、藤原武二、伊東太作、八賀晋、工楽善通、森郁夫、西谷正、細見啓三、栗原和彦、田中琢、町田章、佐藤興治、山沢義貴、八幡扶桑、佃幹雄、田中稔、横田拓実、鬼頭清明、加藤優、木下正史、石松好雄、安達厚三、田中哲雄、菅原正明、西村康、山中敏史、沢田正昭、西弘海、岡本東三、天田起雄、東野治之、稲田孝司、山本忠尚、西口寿生、千田剛道、岩本圭輔、大脇潔、松沢亜生、上野邦一、高瀬要一、今泉隆雄、綾村宏、岩本正二、須藤隆、山崎信二、土肥孝、安田竜太郎、松本修自、光谷拓実、毛利光俊彦、小林謙一、井上和人、清水真一、中村友博、巽淳一郎、加藤允彦、安原啓示、亀井伸雄、本中真人、佐藤信、清田善樹、内田昭人

報告書の作成は1979年から開始し、遺構関係の整理については遺構調査室・計測修景調査室があたり、遺物関係については考古第一調査室・考古第二調査室・考古第三調査室・史料調査室が分担した。また全体の構想については、1974年から開始した「内裏検討会」の成果に立脚している。なお、執筆分担はつぎのとおりである。

第I章岡田英男、第II章町田章、第III章1 田中哲雄、2 宮本長二郎・中村雅治・亀井伸雄・清水真一、第IV章1 鬼頭清明、2 岡本東三、3 菅原正明・光谷拓実・秋山隆保・清水真一・岡田英男、4 田辺征夫・安田竜太郎・巽淳一郎、5・6・7 井上和人、第V章1 田中哲雄・町田章、2 狩野久・鬼頭清明、3 岡田英男・宮本長二郎・亀井伸雄・清水真一・山岸常人、4 岡本東三、5 安田竜太郎・巽淳一郎・沢田正昭、6 町田章。英文要訳は、ケンブリッジ大学講師ジャーナ・リー・バーンズ氏をわずらわし、山本忠尚が協力した。

写真撮影は佃幹雄・八幡扶桑が行ない、渡辺衆芳・藤村礼子・池田千賀枝が助力した。また、図面浄書では平井俊行氏の協力をえた。編集は、坪井清足・岡田英男・狩野久の指導のもとにすすめ、町田章が担当した。

# 第II章 調査概要

## 1 調査地域

今回報告する調査地域は、平城宮朱雀門内の北方約500mから展開する「第1次大極殿地域」である。この地域は水田やその畦畔の地割りによって、東西約180m、南北約300mの宮殿区画の存在が推測されていた。小字名には「大宮」・「東大宮」の地名がある。こうした地名と踏査によって、関野貞は「内裏(中宮)」に比定し、その南方に「南苑」を想定したのである<sup>1)</sup>。関野貞らの考証によって、大正年間に史跡として指定されたのは、壬生門の南から北へならぶ朝堂院、大極殿、内裏を中心とする南北約820m、東西約620mの範囲であった。1955年に当研究所が本格的な発掘調査を開始し、遺構の配置状況が次第にあきらかになる。1962年段階においては、朱雀門内にも壬生門内とほぼ同規模の宮殿区画の存在が推測された。この結果、朱雀門内の遺構を和銅創建時の第1次朝堂院・第1次大極殿・第1次内裏にあて、壬生門内の遺構を聖武朝の平城遷都以後の第2次朝堂院・第2次大極殿・第2次内裏に比定したのである<sup>2)</sup>。

ところが、第1次大極殿地域の発掘調査が進行する過程で、この地域には東方の第2次大極殿・第2次内裏地域とは様相がことなることが次第にあきらかになり、和銅創建時には「内裏」がこの地に存在しないとかんがえられる状況がでてきた。以下の章で詳述するように、この報告では和銅創建時の大極殿をこの地に想定し、「第1次大極殿地域」の呼称を用いる。

地形的には北方の約1/3が奈良山丘陵の末端の台地(標高73m)に位置し、のこりの2/3は沖積地形

(調査回数)	(調査区・地区名)	(調査期間)	(発掘面積)
27次	6ABD-D, 6ABQ-B, 6ABE-K, 6ABR-P	1965, 7, 2~66, 1, 17	66.9 a
41次	6ABE-M・P, 6ABR-Q, 6ABS-E	1967, 7, 1~67, 11, 23	42.0
69次	6ABP-A・B・D	1970, 8, 3~70, 11, 21	34.2
72次	6ABP-F・G, 6ABQ-C	1971, 4, 13~71, 8, 11	39.2
75次	6ABQ-C・D, 6ABR-G	1972, 4, 1~72, 6, 20	40.3
77次	6ABR-H・G・J	1973, 1, 13~73, 4, 23	41.2
81次(東)	6ABO-E	1973, 4, 12~73, 7, 18	9.9
81次(西)	6ABO-P	1974, 1, 7~74, 2, 16	8.5
81次(中)	6ABO-L	1974, 6, 12~74, 7, 23	6.8
87次(北)	6ABP-A, 6ABC-U	1975, 7, 2~75, 10, 2	34.0
87次(南)	6ABP-B, 6ABC-V	1976, 1, 6~76, 3, 25	28.3
117次	6ABD-C, 6ABQ-A	1979, 9, 19~80, 1, 12	32.0
			(383.3)

Tab. 1 調査期間と発掘面積

1) 関野貞『平城京及大内裏考』  
(東京帝国大学紀要工科3) 1907

2) 『平城宮報告II』p. 111

## 第二章 調査概要

地の平野部(南限で標高68.5m)にある。第1次大極殿地域の発掘調査は、1958年に一条通り南側の2箇所において、行なったことがある<sup>1)</sup>。しかし、それは小規模な発掘にとどまり、本格的な発掘調査は1965年から始まった。その後1979年まで断続的に12回の調査を進め、383.3aの範囲にわたって土砂を除き、この地域の東半部の遺構をほぼすべて検出しえた。未調査地として、北限の一条通り道路敷と南限の一部がのこる。前者については重要な地域であるが、ここ当分の間は発掘の予測がたたない。後者の約1,600m<sup>2</sup>の区域については周囲の遺構状況から類推することが可能である。今回の調査地域を当研究所の遺構標示記号によってあらわすと、

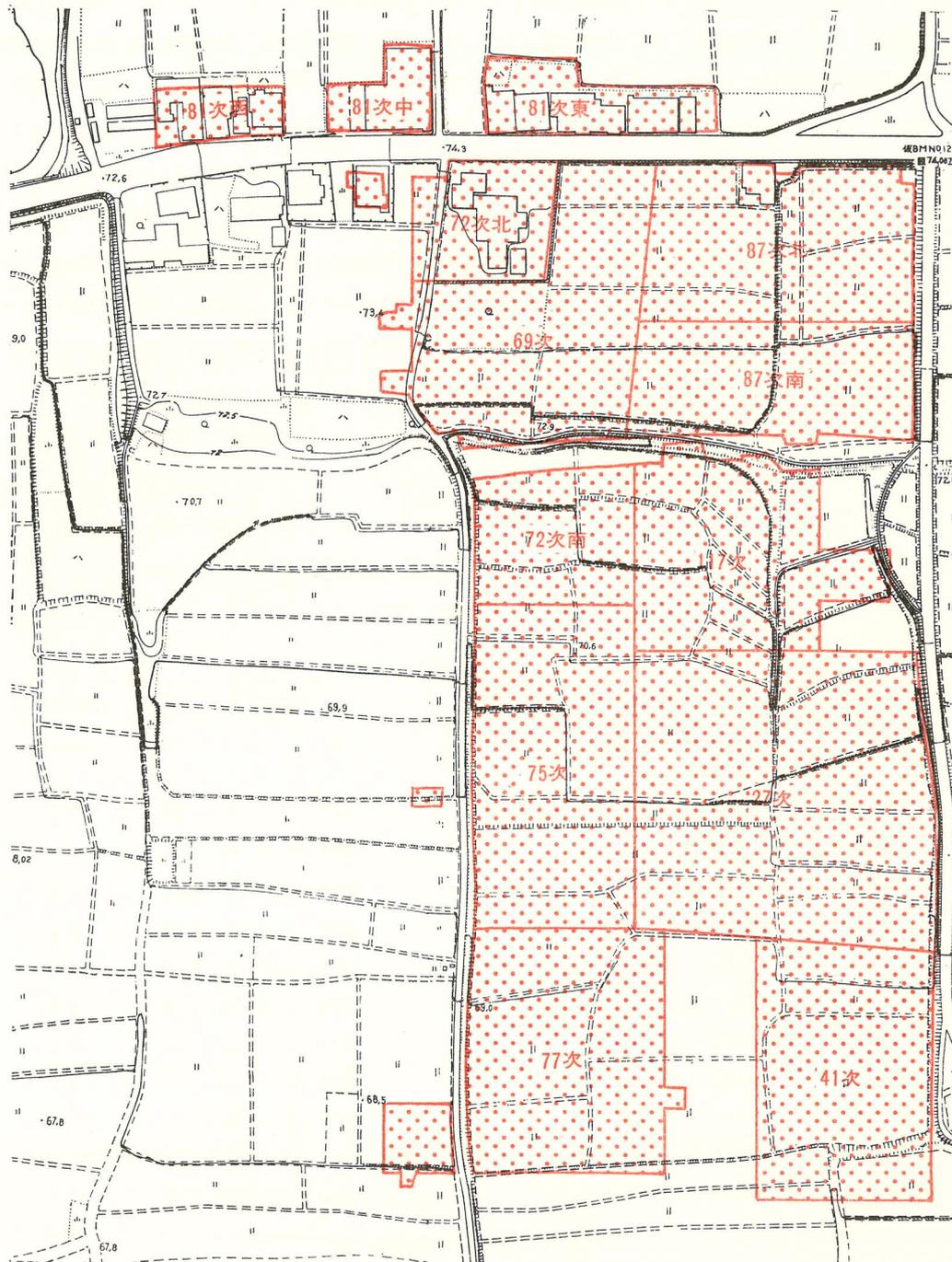


fig. 1 調査地域

1) 『平城宮報告Ⅱ』p. 36

6ABE区K・M・P地区, 6ABS区E地区, 6ABR区G・H・J・P・Q地区, 6ABD区C・D地区, 6ABQ区A・B・C・D地区, 6ABC区U・V地区, 6ABP区A・B・D・F・G地区, 6ABO区E・L・P地区におよぶ (Tab. 1, fig.1)。

## 2 調査経過

15年の間に12回にわけて行なった発掘調査の成果は、発掘面積を拡大するたびに次第に詳しくをましていった。初期には、遺構がまずにしたがって遺構の解釈にも変化を生じた。しかし後半になってからは大まかな変遷の構図を組立てられるようになった。ここでは調査後まもなく作成した調査終了報告や調査概報にしたがって、その間の事情をのべることにする。したがって遺構の名称などについては、つとめて発掘直後のものを用いた。

### A 第27次調査

この調査の目的は、第1次内裏の存在を遺構のうえで確認することにあつた。調査地として、**最初の調査**土塁状の高まりをもつ畦畔が北から南下し、西へ鉤の手に曲る遺構の保存が良好とおもわれる地域をえらんだ。検出した遺構はA・B・B'・C期の4期に分類された<sup>1)</sup>(fig. 2)。

**A期** 発掘区中央を南北に貫通する築地 SA3800 があり、築地の西側には14mの間隔をおいて、東西にのびる2条の堀 SA3805・SA3818 とがある(ともにのち足場に変更された)。およそ SA3805 の位置で築地の西から東へ流れる東西溝 SD3775 もこの時期にぞくし、発掘区東限の大きな南北溝SD3715に注ぐ。また SD3775の北側に平行する東西堀 SA3780もA期にあてた。

**B期** 発掘区中央に南北廊 SC3777があるこの廊は基壇(幅6m)の築成に一部旧築地を利用 **南北廊**して東へ拡張したもので、中心に柱間4.6mの南北柱列をおき、屋根と塗壁とをそなえたものに想定した(SC3777はのち南北堀に変更)。塗壁が強調されたのは、SC3777の東側から多くの壁土(のち築地版築土に推定)の断片が検出されたからである。そして西側にある石敷南北溝SD3790(下層)と東側の南北溝SD3765もこの時期にぞくするものとした。

**B'期** B期の部分的改修とかんがえ、石敷南北溝SD3790(上層)から発して東方の南北溝SD3715(上層)に注ぐ木樋暗渠SD3770が主な遺構であり、南北廊SC3777の東側で南北にのびる5条の堀SA3795を帷舎(仮設建物)の柱列とかんがえた。B期とつぎのC期との間に介在する遺構として、東西堀SA3818の南側に掘り込まれた土壇SK3784、発掘区の東半分全域をおおう礫敷、あるいは轍SX3785を想定するであつた。

**C期** 南北廊SC3777にかえて、発掘区中央で鉤の手に曲る東面築地SA3800・SA3810がつく **東面築地**られ、その東南方向を東西堀SA3740がとりかこむことになる。

時期については、A期=第1次内裏の時期(和銅創建)、B期=第2次内裏の時期(聖武朝以降)、C期=平城上皇の年代にあてた。遺構の認識と時期区分は、後に少なからず訂正をうける。だが東面と南面の築地に想定してきた土塁状の地物SA3800・SA3810が新しく、それよりも古い築地回廊が第1次内裏と朝堂院の東面を画したことを確認したことは予期せぬ成果であつた。

1) 石井則孝・三輪嘉六「昭和40年度平城宮発掘調査概報」『年報1966』p. 34

## B 第41次調査

第41次の調査地は第27次調査地の南側にあり、第1次大極殿回廊と第1次朝堂院築地との接合点をふくむ地域に想定されてきた。この調査でも遺構はA・B・C期にわけられたが、その年代は第27次調査とはことなっている。すなわちA期=和銅創建時、B期=霊亀元年以後、C期=神護景雲3年以前である<sup>1)</sup>(fig.3)。

東面築地回廊

**A期** 東面築地回廊SC5500、南面築地回廊SC5600がある。SC5500の基壇幅は11.6mで、部分的にのこった礎石据付痕跡によって桁行15尺、梁間24尺、梁間中央に築地を想定し、第27次調査地から南下する石敷南北溝SD3790を西雨落溝にあてた。SD3790は暗渠SD5561で南面築地回廊SC5600を横断したのち、方向を東にとり東西暗渠SD5555となって、南北溝SD3765に注ぐ。SD3765は第27次調査ではB期としたが、今回の調査では和銅の紀年木簡が出土し、遺構の重複関係からも、和銅創建時に遡ることが判明した。また、東面築地回廊SC5500の基壇にある6条の南北塀SA3795は、幄舎ではなく回廊構築用の足場としてこの時期においた。

南北幹線排水路の移動

**B期** 東・南面の築地回廊はA期の状態で存続しており、曲折点に朝堂院の東面を画する塀SA5551、SA5550がつけくわえられた。このさい、南北溝SD3765は東へ移動し、新たに南北溝SD3715を掘削している。回廊内からの排水路も北へ移動し、木樋SD5560と開渠SD5558でSD3715に導く。SD3715の開削時に破壊された土壌から霊亀元年(716)の紀年木簡が出土したことによって、この地域における改作年代の1点が定まった。なお、第27次調査では南北廊の中央柱とかんがえたSA3777は回廊修理に関する遺構としてB期に比定した。

**C期** 朝堂院の塀SA5551、SA5550を築地に改修し、回廊内からの暗渠排水路も2回にわたってつけかえる(SD5562、SD5563、SD5564)。暗渠とSD3715との合流点付近を中心にして少なからぬ木簡を発見し、そのうちには神護景雲3年(767)の紀年木簡があった。その後、平安時代にはこの付近に顕著な遺構がなく、南北溝SD5530のみが細々とのこった。

範囲の確定

このたびの調査によって、和銅創建時にはこの地域が築地回廊で囲まれていたことを確認し、構造の一端があきらかになった。一方、すでに調査が終っている一条通り北側、6ABO区を東西によこぎの礎敷の東西溝SD130が、第1次内裏の北面をとりかこむ築地回廊の南雨落溝にあたり、その東端付近にある建物としたSB269の柱穴が、改修時の南北塀SA3777の延長線上にあたるのが再確認された。こうしたことから、和銅創建時の内裏と大極殿をかこむ築地回廊が東西180m(600尺)、南北317m(1060尺)であったことが確定した。

## C 第69次調査

第41次調査後3年をへてから、いよいよ第1次内裏の中枢部にメスをいれることになった。一条通り沿いの民家移転が完了する時期にあったが、中心に位置する旧八木邸にはまだ廃材や樹木がのこり、発掘しうる状況でなかった。そのことから、旧八木邸を南東方からかこむ形で、台地上に発掘区を設定した。検出遺構はA～Dの4期に区分しえたが、ここでは第41次調査で有効な働きを示した紀年木簡などの出土品はなく、A期=和銅創建時、B期=上限は天平

1) 阿部義平「平城宮跡発掘調査」(『年報1968』奈良国立文化財研究所要項) p. 37

末年までさかのぼらず下限は奈良時代末期頃、C期=奈良時代末期から平安時代、D期=平安時代という莫然とした年代観をよぎなくされた<sup>1)</sup>(fig.4)。

**A期** 内裏・大極殿の築地回廊内を南北に3等分した最北の一郭(台地)の前面に化粧した埴積擁壁 SX6600 がある。擁壁の高さは1.5~1.7mで、その前面は礫敷の広場となる。朱雀門中軸線の延長線上に擁壁を登る掘立柱の階段 SX6601 がある。台上は削平され顕著な遺構はなく、木階を登ったところに7間×2間の東西棟掘立柱建物 SB6605があるにすぎない。しかし、これを正殿とするわけにいかない。

**B期** 埴積擁壁を南に拡張し、台上に10尺方眼で地割りした計画的な殿舎が軒をつらねる。すなわち正殿 SB6610 は中軸線上にあり、9間×9間の総柱建物、かつて宮内では例をみない大規模な建物となる。その東方に7棟の東西棟掘立柱建物が整然とならぶ。一方、一条通りぞいに礎石据付痕跡を発見し、この時期の北面築地回廊の南側柱列 SC6670に想定するとともに、それは東方の第2次内裏北面築地回廊とほぼそろっていることが判明した。

**C期** 中軸線上の9間×5間の四面に廂がつく東西棟掘立柱建物 SB6620 を正殿とし、その東南方に南北棟の脇殿 SB6622をおき、東北方に東西棟の後方の脇殿 SB6621をおく。それらの建物は共通して廂を広くとり、溝や塀でかこまれている。

**D期** 正殿と脇殿が建替えられ、小規模な SB6642 と SB6614 がたてられたと想定した。

このたびの調査によって、中心部の状況があきらかになったのであるが、A期の埴積擁壁といい、B期の総柱建物といい、まったく予期しなかった遺構が出現したのである。この地域が第1次内裏にあたるという先入観によって、A期の瓦出土量が少ないことから台上的建物が瓦葺ではなく内裏のように桧皮葺であったろうとか、B期の建物配置と第2次内裏後宮建物配置と類似しているのではないかなどとかがえた。B期の北面築地回廊位置が第2次内裏のそれとほぼ同一線上にあり、A期の築地回廊が縮小した結果であるとしたことも新しい知見であった。一方、正殿と脇殿をコ字形に配置する第2次内裏的な建物配置は、C期においてのみ明確にみとめられた。

## D 第72次調査

第72次調査は、第69次調査の掘残し部分ともいえる台上的6ABP-F・G地区と、台下の6ABQ-C地区で行なった。検出遺構の時期区分は、おおむね第69次調査と矛盾しない<sup>2)</sup>(fig.4)。

**A期** 発掘区中央北寄りに位置する特異な溝状遺構 SD7165, SD7167がある。それは3個所で溝を北へ屈曲させ、凸字状に北へ突出している。中央の突出部は中軸線上にあり、東西の突出部は中軸からそれぞれ15mはなれている。この溝は浅くて水を流した痕跡がなく、凝灰岩の破片が散在していることから、基壇および階段の地覆石の抜取痕跡にかんがえられた。のこりは悪いが同様の遺構が南29mの地点で東西にのびている(SD7167)ことから、徹底的に破壊された大型建物(SB7200)の存在を推定したが、異論もありただちに断定できないという保留がつけくわえられた。

**B期** 第69次調査で検出した正殿 SB6610・SB6611に北接してSB7150(9間×5間)があり、その後方にSB7150と桁行をそろえた2棟の建物SB7151, SB7152が20尺の間隔をおいてならぶ。

1) 横田拓実・石松好雄・田辺征夫「平城宮跡・飛鳥藤原宮跡発掘調査」『年報1971』p. 28

2) 阿部義平・甲斐忠彦「平城宮跡飛鳥藤原宮跡の発掘調査」『年報1972』p. 26

## 第Ⅱ章 調査概要

これらの建物は第69次調査で検出した東方の殿舎群とも柱通りをそろえ、計画的に配置されている。また第69次調査で検出した北面築地回廊 SC6670 の南側柱列の遺構も発見された。

**C期** 第69次調査で検出した正殿 SB6620 の後方に中庭をおき、一まわり小さな後殿 SB7170 をおく。発掘時には中庭の東西が塀によって仕切られるものと判断したが、足場の検討によって身舎を礎石とする南北棟建物 SB7173・SB7172 であることがわかった。SB7170 には貯水設備のような遺構をそなえ、内裏的な居住空間の要素をとどめている。建物配置や柱間寸法を広狭多様に使いわけ、塀などによって敷地内を小さく区画するなどB期の遺構との間に大きな相違のあることが指摘された。

足場からの  
建物復原

6ABQ—C地区の遺構は、台上の遺構にくらべて少ない。A期には南北に発掘区を貫通する素掘りの南北溝SD7142とその東方の井戸 SE7145があるほかは、一面の礫敷広場である。B・C期も広場であることにはかわりはないが、B期には中軸線に東西に長い桁行6間、梁間1間の掘立柱遺構 SX7141がある。C期には台上から導く溝SD7133と発掘区中央でL字状に曲る素掘溝SD7131・SD7132とがある。それらのほか時期不明の遺構として建物 SB7134・SB7140・東西塀 SA7130 があった。一方、発掘区北限に凝灰岩片が散布するところがあり、構内道路を設けている付近にB・C期の擁壁があったのではないかとかんがえられた。

今回の調査によって、台上には殿舎が林立し、その前面が一面の礫敷広場になることが判明し、第1次内裏地域の具体的な姿を適確に把握できるようになった。とくにB期の中心建物の上部構造については、類例がなく苦慮するところとなる。ただし、唐長安大明宮の麟徳殿の柱配置ときわめて類似していることが指摘され、百柱の間という愛称を与えた。検出遺構を史料にあらわれるどの宮殿に比定するかという点になると、以後多くのことになった意見が乱立することになるが、この段階ではその候補宮殿として中宮、中宮院、内裏があげられた。

麟徳殿との  
比較

## E 第75次調査

このたびの調査地としては、第72次南調査地から南方に展開して、第1次内裏南面築地 SA3810をふくむ。第2次内裏との比較から、内裏正殿相当の遺構の存在を予想した。第75次調査ではA期=和銅初年から天平勝宝5年まで、B期=天平勝宝末年から宝亀末年まで、C期=延暦年間から弘仁年間<sup>1)</sup>までとかんがえた(fig.5)。

**A期** 礫敷広場である。発掘区東辺に2棟の南北棟建物 SB7780・SB7790が南北にならび、第72次調査地で検出した南北溝 SD7142 が発掘区を貫通する。他方第27次調査で検出した2条の塀SA3805・SA3818が発掘区を東西に横断する。発掘区の南西隅に南北溝 SD7760 がある。

**B期** 発掘区北半を土盛りし、東西にのびる築地 SA3810Aを築き、その中軸線上に南門SB7750Aを開く。門の遺構としては凝灰岩地覆石の抜取痕跡が唯一のものであった。

南 門

**C期** 南門と築地を改修するが(SB7750B・SA3810B)、このさい門を掘立柱建物(5間×2間)に変更している。また、発掘区南限には第27次調査地とつながる東西塀 SA3740 があった。

このたびの調査の副産物として、平城宮造宮以前の遺構を検出している。発掘区北西隅に方墳SX7800があり、それを削平したのち、南北溝 SD7787が通っている。この溝は朱雀門地区の

1) 吉田恵二・岡本東三「平城宮跡とその周辺の発掘調査」『年報1973』p. 19

発掘調査以来あきらかになっている下ツ道の東側溝にあたるもので、古墳の年代から下ツ道が 6 世紀以降につけられていることが判明した。

この地域には当初予測した殿舎の存在はみとめられず、B 期に築地で仕切られるほかは、一面の広場であったことがあきらかになった。

## F 第77次調査

第77次調査地は、第1次大極殿想定地と南面の築地回廊 SD5600 をふくむ地域である。平城宮造宮以前の遺構として下ツ道東側溝 SD7788 や小さな掘立柱建物があり、造宮時の整地土の下からは木材の削屑などが多量に出土した<sup>1)</sup>(fig. 6)。

**A期** 奈良時代の時期区分は第75次と同じだが、A期が3小期に細分されることになった。A<sub>1</sub>期には中軸線上に南門SB7801をつくり、その両翼に築地回廊SC5600・SC7820がとりつく。ともに丁寧な掘込地業を行ない、盲暗渠をとまなう。SC5600には礎石据付の根石が比較的よくのこっており、柱間寸法がわかった。A<sub>2</sub>期は基本的にはA<sub>1</sub>期の建物を踏襲するが、築地回廊 SC5600に、楼風建物 SB7802を増築している。SB7802は5間×3間の総柱建物で、四周を掘立柱とし、内部の柱には礎石を据えたことをしめす根石がある。掘立柱掘形は平城宮でももっとも大きいものの一つで、発掘当初は井戸の掘形に誤認するほどであった。1穴の柱掘形に柱根がのこり、巨大な柱がたてられていることがわかるとともに、多くの柱抜取痕跡から木簡などの遺物が出土し、紀年木簡からこの建物の廃絶が天平勝宝5年(752)以降であることがわかった。築地回廊の北側には素掘りの東西溝 SD5590 が貫通する。それは東面築地回廊西側にそって南へ折れ、第41次調査でC期に比定した木樋暗渠 SD5562・SD5563 につながって、築地回廊外にぬける。A<sub>3</sub>期には門基壇が少し縮少する程度の改作がなされ、基本的にはA<sub>2</sub>期と同じ建物が存続する。基壇周辺の雨落溝や礫敷に改修がみとめられる。また、東西溝 SD5590 を拡張して、SB7801の階段脇から北上する南北溝 SD7760がつけられた。これは北方の殿舎に至る参道の側溝とかがえられる。

**B期** 南面築地回廊はなく、この地域は一面の広場となり、建物などの遺構はない。しかしながら、発掘区全域に礫敷がみとめられた。

**C期** 身舎を礎石とし、側柱を掘立柱とする7間×4間の東西棟建物 SB7803 が中軸線上にたち、その後方に小さな柱穴の東西堀 SA7815 が発掘区を横断している。この地域の中心的な建物である SB7803 については東方の第2次大極殿とほぼ同位置にあり、大型であることから大極殿に比定された。基壇の存在を示す盛土や身舎の柱位置を示す掘形や根石などの痕跡はなく、はたして完成していたか否かについては問題がある。

この調査の主目的であった「第1次大極殿」がA・B期になく、C期に出現していることについて、調査者達は従来の第1次内裏・第1次大極殿というイメージでこの地を想定するかがえ方を根本的に改めなければならないことになった。一方、C期大極殿の存在を疑問視する意見強く、この地域をどのように理解するかについて混乱を増すばかりであった。

第69次調査ではバルーンを使い、第72次調査ではクレーン車をつかって遺構の空中写真測量

1) 『年報1973』p. 20

## 第II章 調査概要

を実験的に行なってきたが、この調査ではヘリコプターでの空中写真測量を積極的にとり入れ、前後3回の撮影を行なった。

### G 第81次調査

第81次調査はかつて民家があり、部分的に調査せざるをえなかった6ABO区的一条通りぞいについて、整備の事前措置として3回にわけて調査した<sup>1)</sup>(fig.7・8)。この小規模調査は第1次内裏・大極殿地域の北限を再検討する絶好の機会であった。A期の北面築地回廊の南雨落溝SD130とその南側に礫敷がひろがること、B期に縮小したとかんがえられる北面築地回廊の北側柱列の足場痕跡を発見したこと、あるいは第81次中・西調査で、造営時の埋立整地状況を具体的に把握した。一方、大膳職の南面築地SA109の下層整地土から東大寺式軒瓦6732A、6691A、6272型式が出土し、その構築が天平末年から天平勝宝年間にかけての時期と推測され、かつて平城宮創建時に埋立てたとかんがえてきた池SG149の埋立時期について疑念がでた。

北限の再検討

### H 第87次調査

第87次調査地は、第1次内裏・大極殿地域の北辺にあり、第69次調査地に接する西側に展開する台地(6ABP-A・D地区)とそれよりも一段低い東側の低地(6ABC-U・V地区)とが発掘区の中央でわかれる。調査はこの地区を南北にわけ、2回2年にわたって行なった。検出した遺構の時期区分は、A期=奈良時代前半、B期=奈良時代後半、C期=奈良時代末から平安時代初期にわけられ、従来の見解ととくに変化していない。しかし、時期区分を莫然といい、具体的な実年代をさけているのは、絶対年代をしめ有力な遺物が出土しなかったことにもよるが、1974年から開催している「内裏検討会」において時期区分の議論が百家争鳴の様相を呈し統一<sup>2)</sup>的な見解をえられなかったからでもある<sup>2)</sup>(fig.9)。

屈曲する埴積擁壁

**A期** 郭内では南面を画する埴積擁壁SX6600が、直線的にのびず、発掘区西南隅で曲折して東南方にのびることがあきらかになった。東面築地回廊SC5500は第27・第41次調査とほぼおなじ状況で出現し、西雨落溝SD3790のほか2条の暗渠もあり、発掘区中央部には門がある。この築地回廊をはさむ東側は約1m低くなっており、築地本体の想定線あたりから東側の基壇が大きく削りとられ、東側の南北塀SA3777との前後関係についてはあきらかにしえなかった。なおSA3777には柱穴を欠落しているところがあり、東面の門を想定した。外郭には1棟の小さな南北棟建物SB8330があり、それは同じくA期につけられた南北溝SD3715によって破壊されている。また、この時期における大小の土壌が多く、造営時の土取場が想定された。

B期築地回廊

**B期** 北面築地回廊SC6670と東面築地回廊SC8360を雨落溝をふくめて検出した。後者の側柱痕跡はよくのこり、第27・第41次調査とはことなる柱間寸法であることが判明し、B期に再建した別個の築地回廊が存在することがわかった。またA期と同位置に門を開いている。郭

1) 岡田英男・藤村泉・岩本圭輔「平城宮跡とその周辺の発掘調査」『年報1974』p. 26  
宮本長二郎・川越俊一・高瀬要一「平城宮跡と

平城京跡の発掘調査」『年報1975』p. 15  
2) 山本忠尚・岡本東三・綾村宏・中村雅治「平城宮跡と平城京の発掘調査」『年報1976』p. 19

内では、北と東側を小さな素掘溝 SD8214・SD8216 でかこむ範囲内で、4棟の建物 SB8302・SB8245・SB8215・SB8210を新たに検出した。それらの建物は、東西棟建物を配する第69次調査地とはことなっており、いずれも南北棟建物であり、柱間を10尺等間とするきわめて計画性のつ

南北棟建物

よい配置をしめしている。SB8245はそれらのうちもっとも大きく、7間×3間の総柱建物である。外郭では南北溝 SD3715にそって2棟の南北棟建物 SB8320・SB8240がある。

**C期** 築地 SA3800A がその雨落溝とともに発掘区を南北に貫通し、南端部には掘立柱の門 SB8310 を開いている。郭内東北隅には西と南を塀でかこみ、さらにそれを塀で南北に2分したそれぞれに東西棟建物 SB8218・SB8219があり、後になって規模を拡大して建替えている (SB8222, SB8224)。また、発掘区西南隅には2面廂の南北棟建物 SB8300 があり、その北側に小さな東西棟建物がある。外郭には、郭内から南北溝 SD3715に導く排水路 SD8227・SD8607 があり、SD3715の西岸に小建物 SB8325があった。

**D期** 遺構は外郭にある。すなわち築地 SA3800Bと南北溝 SD3715とのほぼ中間に、東西に溝 (SD8237, SD8239) をつけ、中心に南北塀 SA8238をおく施設があり、南端では柱間をひろげて門 (SB8335) にしている。ここでいうD期とはC期の遺構よりも新しいという意味で、C期のある時期に築地の外郭を囲む施設として新設した可能性もあるとかがえた。

今回の調査によって、第1次内裏中核部の構造があきらかになったわけだが、A期の築地回廊 SC5500と南北塀 SA3777 との前後関係については、明確にしえなかった。C期の郭内東北隅の建物配置については、平安宮古図にあらわれる昭陽舎・淑景舎の配置との類似性が指摘され、この地域が内裏である可能性をつよめた。

中心部調査の完了

## I 第117次調査

第117次調査は第1次内裏地区の高台とその南面の礫敷広場とを結ぶ地域であり、この地区の南・西・北はすでに調査を終えている。報告書作成には、この地区の調査が不可欠のものとかがえ、第87次調査後3年をへて調査した。このたびの時期区分は、A期=和銅～天平勝宝末年、B期=天平宝字年間～奈良時代末期、C期=奈良時代末期～平安時代初頭である<sup>1)</sup>(fig. 10)。

台地と広場の接点

**A期** 東面築地回廊は、雨落溝・足場の状況から2時期にわかれることが提唱された。そして、その間に第87次調査で問題になった南北塀 SA3777 がたてられるとかがえた。埴積擁壁 SX6600は第87次調査で検出した入隅部から結局東南へ15mのび、そののち長さ・幅とも15mで南へのび平坦面となる。これが斜道 SF9237A である。

斜道

**B期** 埴積擁壁 SX6600が南へ20mのび、石積擁壁 SX9230となる。斜道は傾斜をゆるめてなお存続するSF9232B。SF9232Bが広場に移行するあたりに建物SB9220がある。この建物は5間×3間の東西棟建物で、壁体のない吹放ちであったことが想定できる。発掘区西端中央部に井戸 SE9210 がある。掘形の1辺が約8mという大きなもので、校倉の校木を転用して井戸枠を組みあげている。この井戸は平安時代まで変形しながらのこる。この時期の築地回廊 SC8360の痕跡は今回の調査地では消失しているようであった。

石積擁壁

**C期** 前後2小期に区分できる。C<sub>1</sub>期には東面築地 SA3800Aが、雨落溝をともなつてつく

1) 菅原正明・毛利光俊彦・亀井伸雄「平城宮跡と平城京跡の調査」(『年報1980』) p. 23

## 第二章 調査概要

られている。井戸SE9210の北にある東西塀SA7130がSA3800Aにとりつく。C<sub>2</sub>期になると、築地が土塁SA3800Bに改作される。第87次調査で検出した郭外で東西に溝を配する南北塀SA8238がつくられる。

東半部調査の完掘  
この調査によって、ようやく第1次内裏・大極殿地域の東半分をほぼ完掘した。第117次調査の遺構時期区分は、周辺の調査成果を加味しておこなったものであり、この調査地のみで、時期決定を行なったのではない。たとえば、A期のSA3777の位置づけは、南接する第27次調査の検討によったものである。さらにこの調査では、C期を2小期に分けたが、そのC<sub>2</sub>期の時期を平城上皇の時期ないしは、平城天皇第三皇子高岳親王に平城旧宮を賜ったときに比定した。

## J 内裏検討会

討議集会  
1974年段階で、平城宮の中軸線上に位置する第1次内裏と、東方に位置する第2次内裏の主要部の発掘がほぼ完了した。同じ内裏とよびながら、遺構の配置などにかなり差異がみられることや、両地域の機能上の差異などを比較検討する必要を生じてきた。一方、上述の発掘経過からみてあきらかなように、検出遺構に対する認識が調査地点が変わるたびに変化してきた。調査部員相互の意思疎通をはかるため、部内の討議集会を開催することにした。1975年1月に第2次内裏、1975年7月に第1次内裏、1976年1月に第2次内裏、1978年1月に第1次内裏と都合4回、時々の発掘成果や遺物の整理結果をつきあわせながら、討議をかさねた。

第1次大極殿の確立  
討議の結果、統一的な見解をえるというよりは、いくつかの異論が整理統合された。大勢としては、1奈良時代当初の大極殿はこの地域にありSB7200がそれに比定される、2奈良時代末期から平安時代初期には内裏であったという点については了解しえたのである。1978年の第4回検討会のときには恭仁宮大極殿＝山背国分寺金堂の発掘結果があきらかになり、天平11年に恭仁宮へ移建した平城宮大極殿がSB7200なのか、または第2次の大極殿であったかについて論議がかわされた。翌年、平城宮第2次大極殿の発掘がなされ、その規模が小さく恭仁宮へ移建したのは第2次の大極殿でありえないことが確定的になった。

S A3777の問題  
遺構の時期区分について異論が集中したのは、東面の区画施設についてであった。築地回廊基壇の遺構面が浅く、削平が著しいうえに礎石痕跡などの重複関係が少ないことが、問題を複雑にしたもっとも大きな原因である。第41次調査時の検討によって創建時の東面築地回廊の全長は1060尺であり、6ABO区の東西石敷溝SD130が北面築地回廊の雨落溝にあたるとんがえたのは確定的にみえた。しかしながら、第81次調査において、SD130の下層に通じるとおもわれる整地土層から東大寺式瓦が出土するにおよんで、当初はもう少し南寄りにあったのが後に拡大したとかがえるべきとの説がだされた。他方、東西築地回廊の基壇を掘りこんで建てた南北塀SA3777の処遇については二転三転をくりかえすことになった。

宮殿名の比定についても一様でない。この地域を奈良時代初頭から中宮とかんがえる説、中宮と中宮院は同じとする説、中宮と内裏と区別するかんがえ方などさまざまな意見がでた。

今回の報告にあたっては内裏検討会の成果に立脚し、かつて第1次内裏・大極殿とよんだ地域を第1次大極殿地域とよびかえ、第2次内裏は単に内裏といい、第2次大極殿・第1・第2次朝堂院の語は従来どおりのこすことにした。

### 3 調査日誌

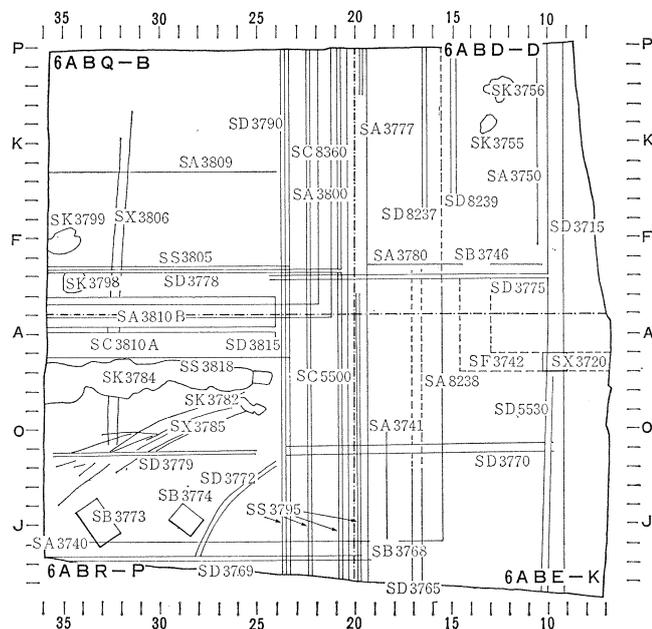
#### A 第27次発掘調査

6ABE区K地区, 6ABD地区, 6ABQ区B地区, 6ABR区P地区  
1965年7月24日～1966年1月17日 (fig. 2)

- 7・24 表土の排土開始。
- 8・21 K地区：発掘区東方から遺構検出開始。厚さ15～25cmの灰色礫混り土を除き、粘土面を出し遺構の検出を行なう。
- 8・23 K地区：南北溝SD3715を発見。この溝は発掘区を南北に貫通する模様。
- 8・24 K地区：SD3715の西岸ぞいに礫敷が南北にのび(幅約3m)、それから西は褐色土となる。部分的に土器溜りの土壌がひろがる。
- 8・27 K地区：褐色土を除いて遺構検出を行なうことにする。
- 8・28 K地区：東西木樋暗渠SD3770の埋土(暗灰色土)を発見。KM16でSD3765と交差する。重複関係ではSD3770のほうが新しい。15ラインで南北塀SA8238の柱穴を検出。
- 8・30 K地区：SA8238の柱穴を南北に追跡。重複関係からみてSA8238が木樋暗渠SD3770よりも新しいことがわかる。
- 8・31 K地区：17ラインから西では褐色土が薄くなり、その下層が黄色砂質整地土となり、この面で遺構検出を行なうことにした。
- 9・2 K地区：南北溝SD3765の西側約5mをへだてて漆喰片が南北に散布している。
- 9・3 K地区：漆喰の散布面で遺構検出。南北塀SA3777の柱穴が現われはじめる。その東に接

- して、SD3802が南北にはしる。
- 9・4 K地区：漆喰散布がとぎれ礫混りの黄色土にかわっていく。SD3770を東に向かって追跡。
- 9・8 K地区：SA3777の西側にそってならば2列の小柱穴列(のち足場SS3795となる)を発見。P地区：SD3770の木樋はPM23でおわる。22ラインで南北にのびる2列の小柱穴列(のちに足場SS3795となる)を検出。
- 9・13 B地区：東南隅で東西築地SA3810を貫通する凝灰岩切石積の暗渠SD3815を発見する。水田の畦畔として、基礎部分のみをとどめる。
- 9・16 P地区：K地区との境になる畦畔は南北築地SA3800の痕跡である。23ラインで玉石を敷きつめた南北溝SD3790がある。PM23でK地区にのびるSD3770と結んで東へ流れる。土壌SK3787を検出。K地区：SD3715を本格的に掘りはじめる。遺物が比較的多い。
- 9・20 K地区：KR09付近のSD3715の両岸には杭を打ちこんでおり、橋SX3720が架けられていたことがわかる。これをはさむ東西の検出面は固く、道路SF3742に想定する。P地区：南辺で東西塀SA3740を検出、さきにK地区で検出している南北塀SA8238につながるものとおもわれる。PQ23で東西築地SA3810の構築状況を探るためトレンチをいれる。築地南面の遺構検出面である

fig. 2 第27次調査地の主要遺構



## 第II章 調査概要

灰褐色砂礫層が、築地の下にもおよんでいることがわかる。

9・21 K地区：SD3715の発掘完了。P地区：18日から検出していた中央部の轍痕跡 SX3785をほぼ掘りおえる。その痕跡の一部はSD3784(のち土壌に変更)のうえにおよんでいることから、東西溝SD3784よりも新しいことがわかる。

9・22 P地区：西南隅で棟通りを北西・南東にとる SB3773を検出、これは平城宮造営以前のものとみられる。B地区：礫敷面で本格的な遺構検出を行なう。

9・24 P地区：北方で東西にのびる SD3784を掘りはじめる。南辺の SA3740にそって乱杭の痕跡あるが、畦畔にそっているので水田に関係するようにおもわれる。B地区：32ラインに南北に走行する轍 SX3806がある。

9・27 P地区：SD3784の北岸にそって東西塀 SA3818(のち足場に変更)があり、SD3784と重複するところでは溝のほうが古い。乱杭の痕跡は28ラインでとまる。SB3773と同じ方位をとる SB3774を検出する。B地区：32ラインにそって轍痕跡があり、これはP地区の SX3806と一連のものらしい。礫がつまっているの、造営時の遺構であろう。

9・30 P地区：PA20の凝灰岩暗渠SD3815の底石は瓦敷の上にすえている。この暗渠は SD3790とはつながらず、築地が2時期にわかれる可能性がある。

10・2 B地区：D地区との境に土塁状にのこる南北築地 SA3800は築地回廊になるらしい。P地区：さきに検出した22ラインの足場と東で相対する南北足場を検出(SS3795)。

10・4 K地区：18ラインにそう黄色整地土の面から南北塀 SA3741を検出、この塀は南側の SA3740と連結する可能性がある。

10・5 D地区：SA3777の北延長部の柱穴を検出しはじめる。

10・7 D地区：18～19ラインにかけて漆喰片が顕著に散布する面がひろがる。築地回廊の壁土であろうか。

10・10 B地区：P地区で検出した SA3800の西側足場SS3795を北に向って追跡。

10・12 K・P地区：写真撮影。

10・14 K・P地区：実測準備。

10・15 D地区：Hライン以南では礫層と暗褐色土をのぞき茶褐色土の面で遺構検出を行なう。

10・18 B地区：土壙 SK3799から埴輪・須恵器など古墳時代の遺物が出土し古墳時代の遺構であることがわかる。

10・19 B地区：南寄りで東西塀SA3805を検出。これは SA3810をはさんでP地区の SA3818と対

応している(のち、この2条の塀は築地 SA3810 Bの前身である築地回廊 SC3810Aの足場になることがわかる)。D地区：K地区から北へのびる SD3715を検出。その西岸に南北塀SA3750がある。K・P地区：実測開始。

10・22 D地区：発掘区南寄りに SD3715に注ぐ東西溝SD3775を発見。素掘の溝だが、DC13・DC14では側と底に安山岩を敷いている。部分的に暗渠にしたのであろう。この北岸ぞいに東西塀 SA3780を発見する。

10・23 D地区：黄褐色礫混り土で遺構検出をつづける。この地区の南半では黄褐色礫混り土層がなく、暗褐色混り土層になっている。

10・25 D地区：16ラインで南北溝 SD3765を検出する。

10・29 B地区：遺構検出を再開。はじめに黄褐色土の面で東西塀SA3805を追跡する。

11・4 D地区：SA3777の西側で2列の足場 SS3795を検出。

11・5 B・D地区：東西溝 SD3775は上下2時期にわかれ、20ライン以西には暗渠の痕跡をとどめる。

11・9 B・D地区：写真撮影。

11・11 B・D地区：実測開始。

11・19 K・P地区：実測終了。補足調査開始。

11・24 K地区：SA3777の柱筋で根石痕跡を3箇所発見する。

11・27 K・P地区：写真撮影。

11・29 P地区：下層遺構の検出をはじめる。

11・30 K地区：SA3800を精査。犬走りをおおる赤褐色の整地土には少量の瓦片を含む。

12・1 K地区：18ラインと19ラインとの間で段がつき東に傾斜する。SA3777の基壇になるか。

12・2 K地区：南北溝 SD3765を掘る。なかから、木簡などとともに第2次内裏と同型式の瓦が多く出土した。

12・7 SD3815とSD3770の写真撮影。

12・8 B地区：SD3790は西方の礫敷面と同じ時期である。それに対して東西塀 SA3805は礫敷面から掘りこんでいる。K地区：SK3730を発掘。

12・10 K地区：SD3770の木樋をとりあげる。建築部材を転用したもの。

12・22 D地区：SD3775の石敷部分を精査。

1・8 D地区：東西塀 SA3780の柱穴はすべてまとまる。13ラインの柱間が広く門になるらしい。SD3715西岸の塀 SA3750とは時期がことなるようである。

1・17 発掘調査完了。



## 第II章 調査概要

10・21 M地区：16ラインで下層遺構にぞくする南北溝SD3765を発掘する。

10・31 Q・E地区：SC5600を横断するSD5561には前身の南北溝SD5556があり、それがSD5560の南にある東西盲暗渠SD5555に連結していることがわかる。

11・1 P地区：PS15～PE15, PE15～EE15に

に曲って南方にのびる堀SA5550とSA5551があることがわかる。

11・8 写真撮影。

11・9 実測。

11・11 現地説明会。

11・13 再度の補足調査。

11・23 発掘調査終了。

### C 第69次発掘調査

#### 6ABP区A・B・D地区

1970年8月3日～11月21日(fig.4)

8・3 表土の排土開始。

8・13 A地区の北辺とB・D地区の北辺とから遺構検出をはじめ。A地区：厚さ約10cmの褐色礫混り土をのぞき遺構検出をすすめる。この土層は整地土らしく瓦片などの遺物をふくむ。B地区：A地区と同じ礫混り土をのぞく。D地区：礫混り土層がない。各地区ともすでに遺構出現。

8・14 A地区：北辺の一条通り沿いに根石をもつ浅い柱穴が現われる。北面築地回廊SC6670の南側柱。AS27～AS31に3間分の柱列SA6635がある。B地区：柱穴が出はじめるが、いまのところまとまらず。

8・17 D・B地区：柱穴多く重複している。

8・19 B地区：BR29～BR34の北側で建物SB6655がまとまる。南北棟建物2棟か、東西棟建物かは不明。Rラインの柱穴の上に東西溝SD6607があり、敷石をぬいた痕跡がある。D地区：東西に規則的にならぶ柱穴が多い。重複あり、建物規模など不明。A地区：床土の残土を除く。

8・20 B地区：BR28～BR34以北の柱穴は、2列にならんだ南北棟建物(のち1棟の東西棟建物SB6655となる)であり、その南妻の柱穴は東西堀に重っている(東西堀に想定した柱列はのちにSB6660Bの孫廂になる)。D地区：Sラインの柱穴検出。2時期以上の重複があり、DS44～DS46では礫を密に詰めた根石状遺構を2間分検出(のちにSB6611とSB6630となる)。DS40～DS40のSB6611の柱穴に重複する柱穴には径20～30cm大の石をつめている(SB6620の柱穴)。

8・22 B地区：Qラインで6間分の柱列を検出。さきにRラインで東西堀とした柱列は、SB6660Bの孫廂となる。

8・24 B地区：SB6655の柱穴はすべて出現、5間×3間の東西棟建物で、中央間に2列の柱穴を設けている。D地区：Rラインでも柱穴が重複し、新しいSB6620の柱穴では根固め石をとどめるものがある。A地区：床土排土終る。

8・25 A地区：Cラインで7間分の東西柱列を発見(のちSB6663の南側柱となる)。BQ35・BR35に3条の東西溝(北からSD6607, SD6609, SD

6606)があり、いずれも敷石の一部と抜取痕跡をとどめている。

8・26 A地区：DラインでSB6663の身舎南側柱を検出。北接する東西堀SA6624は、すでに検出している南北堀SA6623とAE33でT字形にまじわる。D地区：QラインにSB6610・6611(発掘時、南のSB6610と北のSB6611を同一建物にかんがえた)とSB6620の柱列がなお存続する。DQ48では新しい時期の礎石がのこり、その東4間分の柱位置では浅い礎石抜取痕跡がのこる(SB6630の身舎南側柱)。

8・27 A地区：AB27～AB34のCライン以北の建物SB6663は、南北に廂がつく桁行7間の東西棟建物になる。AE31, AF31にはこの建物の東西に間仕切る柱穴がある。AE30から北へのびる南北堀SA6625を検出。B地区：QラインでSB6660の身舎北側柱を検出。

8・29 A地区：AHラインで予測外の東西柱穴列があらわれる。SB6663の孫廂が別建物になるかは不明。D地区：Oラインで9間分の東西柱穴列を検出(SB6610の柱穴)。この付近から南は遺構検出面が一段低くなる。

8・31 A地区：SB6663は孫廂のある建物、Iラインまで足場がつづく。AD35～AG35で西へのびる柱穴3間分をだす(SB6650)。B地区：BQ31～BQ36から南へのびる両廂付南北棟建物SB6622の存在を確認。D地区：現在までに検出した建物は新旧2時期に大別できる。いずれも桁行9間の大建物。新しいSB6620はQラインが南廂となり、それ以南にのびない。北廂は発掘区外。古い建物SB6610・6611は梁間5間分検出したがまだ南へのびる模様。この建物は他に例をみない大規模な総柱建物になろう。

9・1 B・D地区：Oラインで地山と整地土との違いが東西に一直線に走る。つまり、Oライン以北は地山の土で、それ以南は整地土である。理由はいまのところ不明。

9・4 A地区：AM27～AM29に東方から北方へL字形に曲る素掘溝(SD6631・SD6632)がある。AM33～AM35には浅い素掘溝がある(のちに

東西棟建物SB6621の身舎筋の布掘地業となる。  
 B地区：SB6622は桁行5間分を確認するが、南方は発掘区外になる。SB6640は3間×2間の東西棟建物となる。  
 9・7 A地区：AN27～AP27から西方にのびるSB6669は、7間×2間の東西棟建物となり、SB6666とは20尺の間隔がある。D地区：37ライン上の南北玉石溝SD6612は発掘区の南限までのびている。  
 9・8 A地区：南北塀SA6625はAP29で西方に折れ曲る(SA6626)。それにともないSA6625に平行するSD6632もAQ29で西方に折れ曲る(SD6633)。SA6626が重複する素掘溝SD6618を検出。この溝はSB6669の雨落溝であろう。B地区：SB6622は桁行6間以上となるがそれ以上は発掘区外となる。D地区：Lラインからは一段低く、顕著な遺構なし。このため、SB6610・6611は発掘区北限から8間分を検出したMラインでおわる。  
 9・9 A地区：一条通りの擁壁下で先に検出していたSC6670の根石の不足分を探す。B・D地区：Lラインのコンクリート水路の南側では遺構がなくなって、瓦片をふくんだ浅い土壌が所々にある。E・F地区：トレンチを設定する。

9・10 A地区：発掘区東限にある柱列(のちに南北塀SA6629になる)の北限は、発掘区外にのびる。F地区：柱穴が3穴出現するが、予想したSA6624の対象位置の塀ではないようである。E地区：拡張によってSB6620が身舎7間×3間に15尺の四面廂をともなっていることがわかる。SB6610・6611は9間×9間分の柱穴を検出したが、さらに北方へのびる可能性もある。  
 9・11 本日で遺構検出を終え、写真撮影の準備にとりかかる。  
 9・17 写真撮影。  
 9・22 写真撮影。  
 9・26 現地説明会。  
 9・30 実測準備。  
 10・15 実測終了。補足調査開始。  
 10・19 B・D地区：Oラインで東西にのびる整地土の性格を探るためDN42以西と発掘区東限にいたれたトレンチがほぼ掘りあがる。BN28～BO28では、約1.5m下降して北方の地山面との間に段(SX6600)を生じ、南面は礫敷面をなす。礫敷面に埴片が散らばる。DN43～DN46では固い黄色粘土の盛りあがりが出現した。DN44～DN45では礫敷となる。

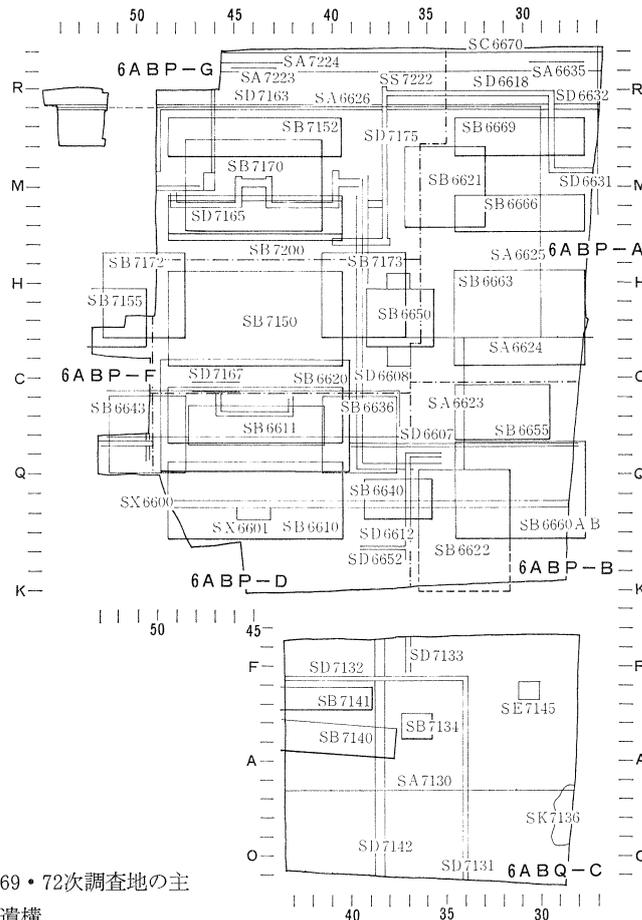


fig. 4 第69・72次調査地の主要遺構

## 第II章 調査概要

- 10・20 B・D地区：SX6600の基部に埴をならべて積みあげた状況が明らかになる。本来は段の前面に擁壁風に積み上げたのであろう。DN43～DN46では階段の可能性を考え入念な精査を加えたが、黄色粘土の盛り上りがパラス敷のうえにあり埴積も左右につながっているため除去することにした。SX6600を明らかにするためB地区にもトレンチを拡張する。
- 10・24 B・D地区：下層遺構の実測。

- 11・5 B・D地区：埴積にそって礫敷を除くと、DO42以西で埴積にそう小溝SD6602がある。埴積の抜取痕跡か。DN44・DN45で2間×1間の掘立柱遺構SX6601を検出、階段か。中軸線は平城宮の中軸線にのらしい。
- 11・8 D地区：SX6601の南に約30cm間隔でならぶ小柱穴列を検出。
- 11・19 発掘終了。埋戻し開始。

### D 第72次北発掘調査

#### 6ABP区F・G地区

1971年4月16日8月11日 (fig.4)

- 4・13 表土の排土開始。
- 5・17 F地区の南辺から遺構を検出をする。旧八木邸の残材の整理に手間どる。
- 5・21 F地区：南北玉石溝SD6608をFB39で検出。Bラインで重複する古いSB6611と新しいSB6620の柱穴列が出現しはじめる。FC37・FC38で切石の凝灰岩が東西にならぶが、性格不明。
- 5・22 F地区：Cラインで新旧2時期の柱穴が重複している。新しい柱穴はSB6620の北廂。
- 5・25 F地区：Dラインで柱穴検出。SB6610・SB6611が北へ1間のび南北10間の建物になる。小柱穴の検出多し。
- 5・29 F地区：Gラインで柱穴列がならび(SB7150の身舎北側柱)、FE44・FF44に間仕切柱の柱穴2つがある。SB6610・SB6611の南北柱間を8間とし、Cライン以北で目下検出している柱穴は、別個の建物に想定すべきことがわかる(のちSB7150となる)。SD6608はなお北上し、その東側は礫敷となる。FE39～FG39の柱穴は、SB6650の西側柱となり、第69次調査とあわせて3間×3間となり完結する。
- 6・1 F地区：HラインでSB7150の北側柱列がでる。また、それらにともなう小柱穴を多数発見する。SD6608はさらに北上し、FH39あたりから左右に浅い掘形をともなっている。
- 6・2 F地区：Iラインで東西にならぶ小柱穴列を検出。G地区：Jラインで9間分の柱穴を検出するが、東西両端の間を除く柱穴には3時期の重複がある。中央の柱筋(のちSB7151Aの南側柱となる)が古く、北と南の柱筋(のちSB7170の南廂とSB7150Bの南側柱となる)が新しい。しかし、埋土の判別が困難で前後関係を誤認した柱穴もある。
- 6・5 G地区：GJ38～GJ41に東西溝SD7177がある。この溝はSD6608よりも新しく、GJ38で北へ流れてSD7175になる。
- 6・7 F地区：SB7150の足場である小柱穴を探す。第69次調査で発見しているSB6621が4間

- ×5間の東西棟建物であることがわかる。
- 6・9 G地区：Lラインで3時期の柱穴が重なっている。古い2時期の柱穴はSB7151A・Bの北側柱となる。新しい柱穴(のちSB7170の南側柱となる)は、さらに北へのびる模様。Lラインの柱穴は溝状遺構SD7165を掘りこんだもの。この溝はGL40、GL44で北へ突出するが、いまのところ掘下げず。GL37で礎石据付痕跡を検出。第69次調査で発見したSB6621の西妻柱列にあたる。
- 6・11 F地区：FD51～FD53にトレンチを拡張する。
- 6・12 F地区：拡張トレンチで、東方のSB6650と同規模に予定しうる建物SB7155の柱穴が出現。
- 6・17 G地区：40ライン以西に重複する2列の柱穴がある。新しい柱穴はSB7170の身舎北側柱であり、古い柱穴はSB7152の南側柱となる。
- 6・18 G地区：SB7170の北廂の柱穴を検出。
- 6・19 G地区：GP40以西でSB7152の南側柱を検出。第69次調査地区から西へのびるSA6626の延長部を発見。またSA6626が重なる東西溝SD7163を検出する。F地区：FD49～FH49の拡張区でSB7150の西妻柱を発見し、この建物の桁行が9間であることがわかる。
- 6・21 F地区：FD50～FD53で東方のSB6650と対称位置に配置されている方形建物SB7155の存在を確認。G地区：SD7175はGQ37でL字形に東へ折れ、第69次調査で検出しているSD6623とつながる。この溝は上下2層にわかれ、上層は暗褐色土が堆積し、瓦片や土器片など廃絶期の遺物を混じえる。下層は灰色礫混り土が堆積し、遺物をふくんでいない。
- 6・23 F・G地区：FG46以北を拡張して建物群の全体を露出することとし、表土排土を開始する。G地区のTラインで北面築地回廊の南側柱を検出する。
- 6・25 G地区：SA6626はGQ49までのび、さらに西へのびる可能性がある。GN49～GP49で南北溝SD7162を確認。GJ48～GO48でSB7170の西妻

柱列を確認。7間×4間の東西棟建物になる。GJ49~GL49でSB7151, SB7220の西妻柱列を確認。GL48・GL49で東西溝SD7195がある。安山岩の石敷とおもわれるが、抜取痕跡しかのこっていない。

6・28 写真撮影。

7・5 写真撮影終了。実測準備。

7・15 G地区：古い溝状遺構SD7165を精査。この溝はGL39・GL40, GL44・GL45, GL49の

3個所で北へ方形に張出しており、付根部に小柱穴がある。階段かそれに類するものだろう。だとすれば、溝が2条に見えるのは一つが凝灰岩地覆石の抜取痕跡で、他が雨落溝の痕跡ともかんがえられる。

7・16 補足調査。

8・6 クレーン車で写真測量を行なう。

8・11 すべての調査を終了する。

## E 第72次南発掘調査

### 6ABQ区C地区

1971年5月8日~8月11日 (fig.4)

5・8 発掘調査開始。赤褐色土の床土およびその下層の灰褐色土を排土。

5・12 灰褐色土の下にある黄褐色礫混り土の面まで排土しおわるが、2番床土らしくおもわれるのでもう一層下の灰色礫混り土まで下げることにする。

5・20 北辺から遺構検出を始める。礫混り砂質黄褐色土の面で遺構検出。石敷の南北溝SD7133を検出。安山岩の多くは抜きとられ、痕跡をとどめるにすぎない。CG32・CG33付近には風化した凝灰岩片が散布している。

5・22 東西溝SD7132はCE33で南へ折れ曲り、南北溝SD7131となって南下する。

5・26 礫敷面で全域の写真撮影。

5・29 礫を除き地山面で遺構検出を行なうことにする。

6・2 CC38・CD38以西で1間×2間以上の柱穴SB7141があらわれる。この柱穴は普通の柱穴とことなり、東西に長い長方形の掘形を掘り、南北12尺、東西20尺等間となる。CC35~CC37に2間分の小柱穴がある(のちSB7134となる)。類似の柱穴はCC42にもあり、そこでは瓦器片を混入しており、中世の遺構とおもわれる。

6・7 CA37・CB37以西で2間×7間以上の東西棟建物SB7140がある。この建物は西北に振れている。Rラインに東西塀SA7130があり、発掘区を横断している。CR38で南北溝らしきもの(のちSD7142となる)を発見する。

6・10 CR38で発見したSD7142は発掘区南限にまでびる。写真撮影。

6・12 写真撮影。

6・14 実測開始。

6・29 発掘区南限にトレンチをいれ、整地状況を調査。地山面は東方で浅く、西方で深い。

7・6 発掘区西限でもトレンチをいれ、整地状況をしらべる。北方では浅いところで黄色粘土の地山があらわれ、南下するにしたがって地山が深くなる。ただし、整地土には遺物が混入しておらず、時期をきめがたい。

7・10~8・3 発掘を休止する。

8・4 発掘西限から遺構検出を再開。整地土は2層にわかれ、上層が暗褐色礫混り土、下層が暗褐色粘質土となる。上層には微量の瓦片や埴輪片を混えるが、下層はまったく遺物を含んでいない。CE38でSD7142の北端を検出する。

8・5 補足調査開始。CQ28で大型の土壙SX7136を発掘する。中世の瓦器をふくみ、井戸の可能性が大きい。

8・6 写真撮影。

8・9 CD30で井戸SE7145を検出。井戸枠は抜かれているが、底部にほぼ正方形の礫混り土がのこり、方形の井戸枠が組まれていたことが推測できる。なお、若干の遺物をふくむ埋土はきれいで、一気に埋めもどしたようである。

8・11 すべての発掘を終了。

## F 第75次発掘調査

### 6ABQ区C・D地区, 6ABR区G地区

1972年4月1日~6月20日 (fig.5)

4・1 表土の排土。

4・12 発掘開始。茶褐色礫混り土を排除しながら、遺構検出にとりかかる。

4・14 G地区：南辺から遺構検出。Bラインに東西溝SD3769がある。Gラインで東西塀SA3740が発掘区を横断する。GC38・GD38に南北溝SD

7142がある。浅く辛うじて痕跡をとどめる。GB42以北に南北溝SD7760がのびる。

4・17 G地区：GF37~GF39に広がる土壙SK7762を検出。GG42・GG43付近でSD7760と重複する土壙SK7767がある。いまのところ両者の前後関係は不明。GG30~GG32に轍痕SX3785があ

## 第II章 調査概要

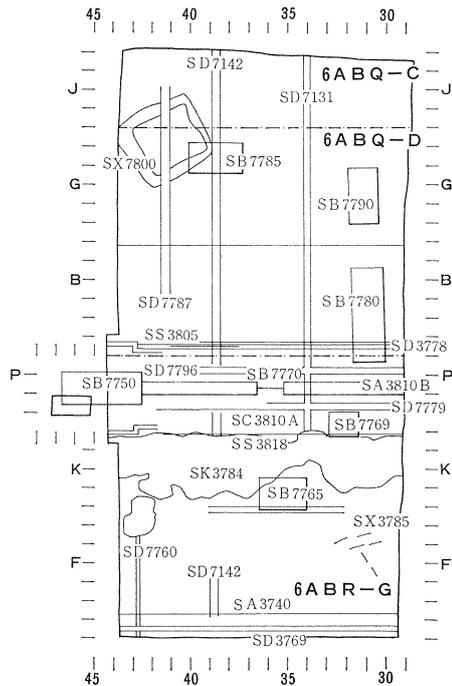


fig. 5 第75次調査地の主要遺構

る。赤褐色粘土に食い込み、暗灰色礫混り土が詰まっている。

4・19 G地区：GI35・GJ34付近に拳大前後の玉石を敷いた石敷面がひろがる。Jライン以北、発掘区を東西に横切る大土塹SK3784がある。土塹の上部には凝灰岩片が混り、上面には礫敷が広がる。一応、下部の木炭層に達するまで掘り下げることにする。

4・21 G地区：SK3784の北岸沿いに小柱穴があり、それは第27次調査で検出した東西塹SA3818の延長部にあたる（のち、南面築地回廊SC3810Aの足場になる）。

4・24 G地区：SK3784の発掘が終わる。Nラインで発掘区を横断する東西築地SA3810の検出をはじめ。GN34にSA3810にともなう南北暗渠SD7799がある。暗渠は切石の凝灰岩製。GN29～

GN35に築地にともなう素掘りの東西溝がある。GM31、GM32で2間×2間の小建物SB7769を検出した。

4・28 G・D地区：GM41～GM43に屈曲する東西溝SD7772がある。凝灰岩片が堆積しており、築地中央門SB7750の地覆石採取痕跡と判明。

5・1 G地区：中央門SB7750の柱穴を検出。DQ41～DQ43に北側の地覆石採取痕跡SD7773がある。Pラインに築地SA3810の北側の雨落溝SD7776がある。この溝は玉石敷だったらしく、河原石の護岸をとどめる部分もある。

5・7 D地区Qラインに東西溝SD3778があり、その北岸に接して東西塹SA3805がある（のち、築地回廊の足場になる）。DQ39、DQ40ではSD3778とこれに重複するSA7776がある。

5・10 D地区：暗渠SD7799から北方に向ってのびる南北溝SD7131が出現しはじめる。

5・11 D地区：DB30・DB31以北の礫敷きを除くと、柱穴が出現する（のち南北棟建物SB7780になる）。SB7750の規模を明らかにするため、GL43～DQ43の西側に拡張区を設ける。

5・15 D地区：41ラインで南北溝SD7787を、38ラインで南北溝SD7142を検出する。

5・16 D地区：DD30・DD31以北の礫敷きを除いて柱穴を発見する。南北棟建物SB7790。

5・17 D地区：DG40にSD7787よりも古い斜行溝がある。堆積土に須恵器・土師器、あるいは埴輪片をふくみ、小古墳のSX7800周濠になるらしい。

5・18 D地区：DG37～DH37以西に小建物SB7785がある。斜行溝を追跡すると、方形にめぐることがわかるSX7800。埋葬施設はない。

5・21 写真撮影の準備をはじめ。

5・24 写真撮影。

5・25 実測準備。

5・27 実測開始。

6・2 実測終了。

6・3 補足調査開始。

6・14 発掘調査終了。

## G 第77次発掘調査

### 6ABR区H・G・J地区

1973年1月13日～4月23日（fig. 6）

1・13 発掘開始。床土の残土を除く。

1・20 H地区：発掘区東限から遺構検出をはじめ。Cライン以北では暗褐色土（二番床土）を除き、礫敷面を出す。礫敷きの厚さは約10cm前後で北方へひろがる。HI26・HI27では東西方向にのびる凹みがある（のちに東西溝SD5590になる）。C～Hラインに瓦片の堆積が多い。T～Hラインでは、玉砂利を含む赤褐色の整地土がひろがり、一段低いSラインでは大粒の礫敷面になる。

1・22 G地区：GS～GAにかけて礫層下に黄色粘土が堆積する。このあたりでは礫層が薄く、黄色粘土面まで下げて遺構検出。

1・24 H地区：G～Iラインにかけて依然として瓦片の堆積多し、瓦片を露出することにつとめる。Fラインでは黄色砂質土が東西にのびる。

1・25 H地区：HG38の礫敷面上に凝灰岩の切石片が散布、ただし旧位置にあらず。

1・27 H地区：D～Fラインの瓦堆積は、HD40

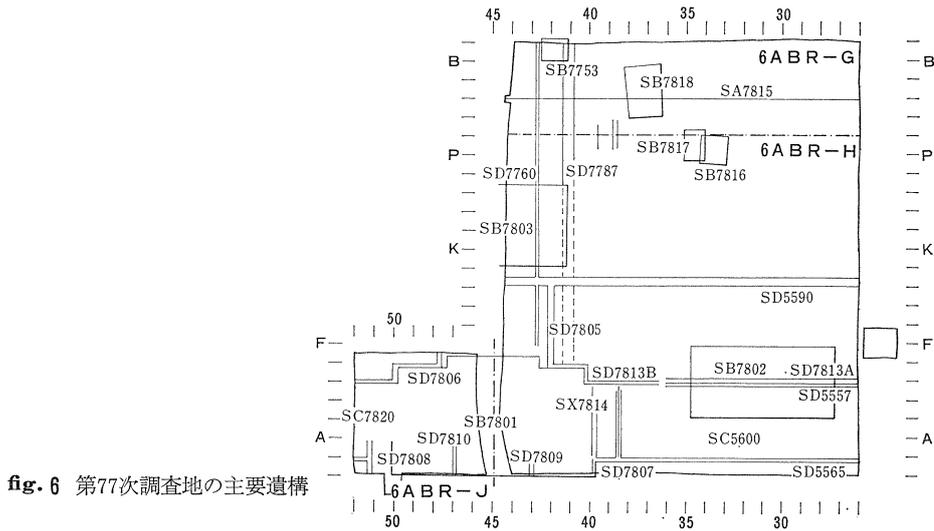


fig. 6 第77次調査地の主要遺構

で北に折れ、また西方にのびる。門基壇 SB7801 の北東隅をしめすようである。

1・29 H地区：42ラインで南北溝 SD7760 を発見。HJ41～HN43で小柱穴を検出（のちSB7803の足場となる）。東西溝SD5590の発掘をはじめ。あまり深くなく、岸辺に礫が落下し、灰色粘質土が堆積する。HD43・HD44に門基壇 SB7801 の北張出し部があらわれる。階段になるか。北面の基壇地覆石採取痕跡には青灰色粘土が堆積し、処々に大型の凝灰岩片が散布する。HC40 から東にのびる築地回廊 SC5600 の雨落溝は瓦散布の下にあるらしい。HE42 には両側に玉石をたてる南北溝 SD7805があり、これは目下検出中の礫敷と同時期である。

1・31 G地区：GJ41・GJ42 で先の第75次調査で検出した小建物 SB7753 の南半部を検出。H地区：HJ41～HN41以西で発見した柱穴は、東西3間以上、南北4間の大型建物 SB7803 となる。身舎の柱穴はなく、身舎には礎石を据えたことを想定しなければならない。

2・1 瓦片の散布状況を記録するため、写真測量の準備を行なう。

2・2 バルーンで写真測量。

2・8 航空写真測量の準備。

2・9 航空写真測量終了。

2・13 H地区：HF26・HF27で井戸らしい大型の土壌があらわれる（のち、東西棟建物SB7802になる）。HC28～HC30に築地回廊の北側柱位置をしめす根石があり、方形掘形内に玉石の根石がある（のちに、SB7802にともなう根石であることがわかる）。HT26～HT32で小柱穴を検出。

2・14 H地区：大型土壌が掘立柱建物 SB7802 の掘形であることがわかる。柱採取痕跡には木簡などの遺物が混入している。HD28～HD23では、

Cラインの根石と柱筋を揃える3間分の根石列がある。

2・15 H地区：HB27～HB35でもSB7802の南側柱を発見する。これによって、5間×3間の総柱建物になる。

2・23 H地区：SB7802の柱位置をすべて確認する。この建物の南側柱列は築地回廊SC5600の心と一致しており、築地回廊の一郭を改修して増築したもののようなものである。HC37で玉石敷の東西溝を検出、SC5600の北雨落溝になるらしい。HT35付近で発見した東西溝は基壇地覆石の採取痕跡であろう。

2・26 H地区：HC37でSC5600の北側柱の根石を発見。HC38・HC39にSC5600の北雨落溝(SD7813)がのびている。

2・27 H地区：北雨落溝に南接して基壇の地覆石採取痕跡がある。

2・28 H地区：南面中央門SB7801を精査する。削平され、根石など柱位置を示す遺構はない。HS41でSB7801の南東入隅部を検出。地覆石採取痕跡と基壇土との違いがはっきりとあらわれる。

3・1 H地区：SB7802の北側と西側に大粒の礫敷面があらわれる。軒の出の想定位置と一致し、雨落溝をかかえているらしい。

3・5 G地区：3月2日以来、H地区のJライン以北を地山面まで下げはじめたが、本日になってG地区41ラインで南北溝を発見する。下ツ道の側溝SD7787の位置にある。J地区：SB7801の西半分を検出することにしJ地区を拡張する。

3・7 G地区：GR36・GR37以北に小建物SB7818がある。いずれの柱穴にも礫が詰り、礫敷の後期にぞくすることがわかる。

3・9 J地区：JD46付近に凝灰岩片が散布。基壇の地覆石ないしは階段の残石か。

第II章 調査概要

- 3・16 ヘリコプターによる写真測量および地上からの写真撮影をはじめ。
- 3・20 H地区：写真撮影に平行して遺構検出。SB7802建設以前のSC5600の北雨落溝SD7813が現われる。底部に拳大の礫をしき、基壇側にやや大きな礫を積む。北岸はなく、小礫敷面に移行する。
- 3・23 H地区：SB7801の階段東北隅で下層の礫敷面があることを知る。HE43付近に幅約80cmの凝灰岩痕跡があり、その北方に礫敷面がひろがる。SB7802の柱抜取痕跡の調査をはじめ。柱

- 根をのこすのは一穴だが、ほかに根固めの残材をとどめる柱穴もある。
- 3・27 写真撮影。
- 3・28 実測準備。
- 4・11 実測完了。
- 4・14 補足調査開始。トレンチをいれ、SC5600およびSB7801の基壇構造をしらべる。HT38でSC5600を横断する礫をつめた盲暗渠SD7807を発見。SB7801の掘込基壇の底には大型の礫を敷く。
- 4・23 発掘調査終了。

H 第81次東発掘調査

6ABO区E地区

1973年4月12日～7月18日 (fig.7)

- 4・12 表土排土の開始。
- 5・21 遺構の検出開始。
- 6・16 EK83付近で凝灰岩切石暗渠SD8077を検出する。この暗渠は土壌SK8079を埋立てたのちにつくられたもの。
- 6・20 第7次調査であきらかになっている東西棟建物SB321の西妻柱が出現する。
- 6・21 発掘区北辺でSB321が重なっている東西玉石敷溝SD130が出はじめる。
- 6・25 EK76以西で東西にのびる溝状の遺構があらわれる(のち、溝ではなく連続する土壌SK8077, SK8079, SK8080となる)。
- 6・28 Jラインに想定される東西築地SA8100があらわれはじめる。築地の部分が高まり、その南北が土壌状の凹みになる。EJ69には門に想定しうる1対の柱穴があるSB8101。

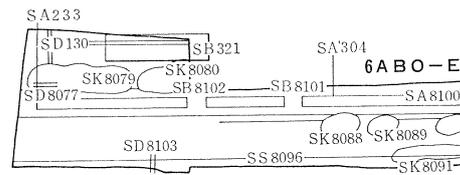


fig.7 第81次東調査地の主要遺構

- 7・4 Iラインの礫層をはずすと東西に長い不整形の土壌となる。
- 7・7 写真撮影。
- 7・9 実測準備。
- 7・10 実測開始。
- 7・12 補足調査開始。
- 7・18 写真撮影。発掘終了。

I 第81次西発掘調査

6ABO区P地区

1974年1月7日～2月16日 (fig.8)

- 1・7 遺構の検出開始。
- 1・11 発掘区東限の含礫黄褐色土面で遺構検出。Jラインに東西築地SA109があり、その南北に側溝がともなう。
- 1・14 PL26で柱穴を検出するが、それはすでにあきらかになっている南北塀SA120の南端にあたり、東西築地SA109にとりつく。発掘区西限でもSA109とその南北側溝がはじめる。
- 1・18 発掘区北限では、第2次調査で発見している東西棟建物SB131の南側柱穴が出る。

- 1・28 すでに検出しているSB145の東南隅柱穴を再度掘りあげる。
- 1・30 築地北側溝の堆積は一様でなく、溝の堆積にいくつかの溜りを生じている。
- 2・1 写真撮影。
- 2・2 実測。
- 2・12 補足調査開始。
- 2・15 この調査地は全体が盛土地であるため、トレンチをいれて整地状況を調査する。
- 2・16 発掘調査終了。

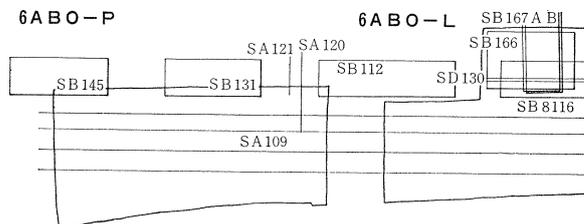


fig.8 第81次中・西区発掘地の主要遺構

## J 第81次中発掘調査

### 6ABO区L地区

1974年6月12日～7月23日 (fig.8)

- 6・12 遺構検出開始。
- 6・18 第2次調査であきらかになっている東西棟建物SB166, およびそれが重複する南北棟建物SB167の柱穴を地山面に出す。
- 6・19 Nラインにある東西玉石敷溝SD130, およびその南方にひろがる礫敷が出現する。礫敷面を切込む新しい東西棟建物SB8116を掘りあげる。
- 6・24 Jラインの東西築地SA109とその南北の側溝を追求する。含礫茶褐色の整地土をはずすと土壌など遺構の輪郭があらわれる。
- 6・26 SA109の南北側溝は, 溝というよりは不整形の土壌が連続した形をとる。南側溝からは溝に落しこんだ礎石2個がでる。
- 7・4 LG14以西では暗褐色の整地土が次第に厚く堆積しており, この土を除去しなければ, SA

- 109とその側溝があらわれない。19ライン以西の観察では, さきに広い土壌状の落ちこみがあり, ある時点において黄褐色土で整地し, 築地SA109と南北の側溝をつくったことがわかる。
- 7・12 写真撮影。
- 7・13 実測準備。
- 7・14 実測開始。
- 7・18 実測終了。
- 7・19 補足調査開始。SA109は側溝だけでなく, 築地本体も2時期にわかれる可能性が出てきた。
- 7・20 Mラインの礫敷面の下からSB166の南廂柱穴が出現する(発掘終了後, SB166が礫敷面を掘込んでいるのではないかという意見がでた。写真等の記録によってSB166のほうを新しくした)。
- 7・23 発掘調査終了。

## K 第87次北発掘調査

### 6ABP区A地区, 6ABC区U地区

1975年7月2日～10月2日 (fig.9)

- 7・2 発掘調査開始。
- 7・11 A地区: 発掘区西辺で, すでに第69次調査で検出している, SB6663・SB6666・SA6624の柱穴を検出する。
- 7・12 A地区: 第69次調査で検出しているSB6669, SA6629の柱穴を検出する。
- 7・22 A地区: 西方から黄褐色礫混り土の面で遺構検出を行ない, 次のような遺構を検出した。27ライン上で南北塀SA6629を15間分, AM18～AM27で東西塀SA8217を9間分。

- 7・24 A地区: AM17～AM28に東西溝SD6631, AE18～AE28に東西塀SA6624がある。
- 7・28 A地区: AJ23～AJ25以北に南北棟建物SB8210がある。AN23～AS23で東西棟建物SB8222の西妻柱列を, AF24～AK24で東西棟建物SB8224の西妻柱列を検出する。
- 7・29 A地区: AP20～AR20以西で2棟の東西棟建物SB8218A・Bが重複している。ともに2間×5間の建物で, 南北にずれており, 同規模建物を建替えたものとおもわれる。SB8210の東約5m

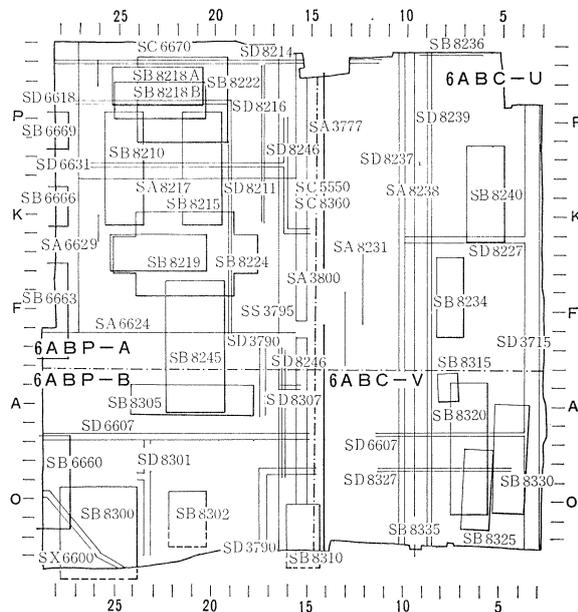


fig.9 第87次調査地の主要遺構

## 第Ⅱ章 調査概要

に、柱筋をそろえる同規模の南北棟建物がある。  
7・30 A地区：北辺の東西棟建物SB8222が、南北廂付きの4間×5間の建物であること、その南方の東西棟建物SB8224も同規模建物であることがわかる（ただし、のちにSB8224には妻側にそれぞれ2間の廂がつく）。AD19～AD22以北で南北3間以上、東西3間の総柱建物SB8245を検出する。

8・4 A地区：AH20～AJ20以西で東西棟建物SB8219が2間×5間でまとり、同位置で重複しているSB8224よりも古いことがわかる。

8・8 A地区：15～16ラインで南北にのびる黄褐色砂礫土を東面築地回廊SC5600の基壇土に想定する。

8・12 U地区：発掘区東辺で南北溝SD3715を発見する。

8・13 U地区：UF05～UH05で土壌SK8235が出現しはじめる。この付近に遺物多し。UJ04・UJ05でSD3715に注ぐ東西溝SD8227を発見。

8・14 U地区：4ライン以西には土壌状の遺構がいくつかあり、凹凸が著しく、木炭や土器片が多く出土する。

8・19 U地区：10ラインに南北溝SD8237があり、さらに発掘区外にのびる。

8・25 U地区：14ラインに南北溝がある。灰色砂層と褐色礫混り土が互層になり、遺物を含んでいないが、ちょうど水田時の地境にあたるので耕作用の水路跡とおもわれる。

8・26 U地区：14ラインで南北堀を8間分検出する。柱間は15尺で、第27・第41次調査で検出した南北堀SA3777の延長線上にある。

8・27 A地区：16ラインでSC8360の西側柱列を検出。約12尺間隔で根石をとどめるが、AE16・AF16の柱間は15尺と他より広く、その東側約12

尺の位置にある柱穴がSC8360の心になるらしい。SD6631はAM16で南におれ、AJ16でさらに東に折れ、凝灰岩切石の暗渠でSC5500をくぐりぬけている。東西堀SA8217および東西堀SA6624が、それぞれ16ラインで終結していることがわかる。

8・28 U地区：UD13～UG13、UE12～UI12でそれぞれ南北堀SA8229・SA8231を検出する。

8・30 現地説明会。

9・1 写真撮影準備。

9・2 写真撮影。

9・3 写真測量準備。

9・4 写真測量。

9・5 補足調査開始。SD3715を掘り下げる。各時期の遺物が混在する。

9・9 A地区：AT23～AT27で北面築地回廊SC6670の南側柱の根石を3間分検出。AT27ではSA6629と重複しており、側柱列のほうが古いことがわかる。U地区：9ラインで南北溝SD8239を発見する。

9・10 U地区：UD07・UD08以北で2間×6間の南北棟小建物SB8234がまとまる。

9・11 U地区：UI04～UI04以北で南北棟建物SB8240が出現しはじめる（のち2間×5間の規模が判明する）。

9・18 U地区：7～11の間、Lライン以北に大土壌を想定しうるが、掘り下げないことにする。

9・19 U地区：9ラインにそって発掘区を南北に貫通する南北堀SA8238は、都合17間分検出したことになる。

9・22 実測開始。

10・1 U地区：北辺で東西柱列SA8236を4間分検出した。

10・2 すべての発掘調査終わる。

## L 第87次南発掘調査

### 6ABC区U・V地区、6ABP区A・B地区

1976年1月6日～3月25日（fig.9）

1・6 発掘調査開始。床土の排土。

1・24 V地区：遺構検出開始。10ラインで南北溝SD8237を検出。

1・26 V地区：9ラインで南北堀SA8238が出現しはじめる。B地区：第69次調査で検出した東西棟建物SB6660の東妻柱を検出。

1・27 V地区：8ラインで南北溝SD8239を発見。B地区：発掘区西北隅で第69次調査で検出した東西棟建物SB6663の南東隅の柱穴を検出。また、Eラインにそう東西堀SA6624を再掘しはじめる。西方からの東西溝SD6607が出現しはじめる。

1・31 B地区：BM23～BM28以北で南北棟両廂付建物SB8300の桁行3間分を検出する。南方は

水路によって破壊されている。東廂に接して南北溝SD8301がある。

2・2 B地区：第87次北調査で発見した南北棟総柱建物SB8245がSラインでおわり、7間×3間の規模となる。

2・6 B地区：BO20～BO22以南で南北棟建物SB8302が現われるが、桁行2間分を除く南の部分は破壊されている。

2・7 B地区：BB17以北に南北に帯状にひろがる礫敷面があり、部分的に瓦堆積をとどめる。築地回廊SC5500の雨落溝か。

2・9 B地区：BS18～BB18以西で東西棟建物SB8305がまとまる。2間×7間の規模だが柱穴

は小さい。

2・10 B地区：写真撮影。

2・19 V地区：14ラインで南北塀 SA3777を検出するが、VM14では他の柱穴が重複している。UC06以北で土壌SK8316を掘り下げる。この付近には不定形の土壌が多い。

2・20 V地区：SD8239とSD3715との間で、3棟の南北棟建物がまとまる。東側のSB8330がもっとも古く、桁行の2間ごとに間仕切柱をおく。つぎのSB8320は2間×7間の比較的大きな建物で、北から3間目に間仕切柱をおく。

2・21 B地区：16ラインで南北溝を検出するが、これは南北築地 SA3800の西雨落溝に比定しうる。その西側に接して築地回廊 SC8360の西側柱列の根石が出はじめる。V地区：VM14・VN14以西に東西2間、南北2間以上の柱穴があり、南北築地SA3800に開く門 SB8310に想定される。なお、柱穴の重複関係からすれば、築地回廊 SC5500, SC8360よりも新しい時期になる。

2・24 B地区：BM17以北で底に礫を敷いた南北溝 SD3790が出現する。BP17で東に曲り、築地

回廊SC5500の基壇を暗渠SX8311で通りぬける。SC8360の側柱が重複しており、SC5500のほうが古いことがわかる。東西溝SD6607はBR16で玉石積みを終わり、SA3800の基壇を暗渠SX8309でくぐりぬける。

2・26 写真測量の準備をはじめる。

3・4 雨天のため延々になっていた写真測量が終わる。写真撮影開始。

3・6 先日の写真測量は失敗したため、本日再度撮影する。午後、現地説明会。

3・8 補足調査開始。BO28から東にのびる下層の塀積擁壁SX6600を発掘しはじめる。

3・11 BN25以北で東西棟建物SB6660の東階段らしき柱穴があらわれる。塀積擁壁は東へ直進せず、BO28から東南方へ斜めにのびている。

3・22 塀積擁壁が完全に露出したので、クレーンによる写真測量を行なう。

3・24 写真撮影。

3・25 本日ですべての発掘を終り、埋戻しに着手する。

## M 第117次発掘調査

### 6ABD区C地区, 6ABQ区A地区

1979年9月17日～1980年1月12日 (fig.10)

9・17 表土の排土開始。

10・20 A地区西辺から遺構検出開始。黄褐色礫に部分的に灰白色礫を混える整地土の上面で遺構を検出することに。西辺中央部で第72次調査で一部検出した土壌が出はじめる。

10・23 AE25に東西にのびる2条の石列あり、溝とおもわれる (SD9236)。内には暗褐色粘質土が浅く堆積。AK22に平瓦を敷いたところあり。

10・26 礫敷面を東方に追う。16ラインの築地に近づくにつれて高くなる。

10・29 南北築地 SA3800の表土を除く。保存が

よく、高いところで遺構面から70～80cm突出している。

10・30 16ライン沿いに南北にのびる築地寄柱痕跡を検出しはじめる (のち東面築地回廊 SC5500の足場であることがわかる, SS3795)。AH17で南北溝を検出 (のち, SC5500の西雨落溝SD3790となることわかる)。

11・1 築地北端部の西側に南北溝あり、両岸に瓦と石をならべるところがある (SD8226, のち築地SA3800の雨落溝と判明する)。AO17付近に南北に長い土壌 SK9226あり、内に凝灰岩の断片

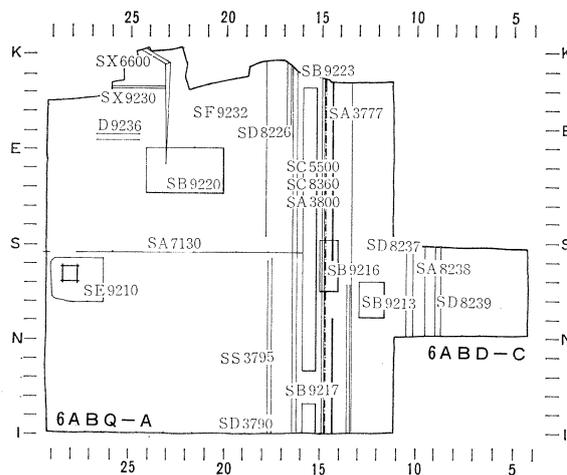


fig. 10 第117次調査地域の主要遺構

## 第二章 調査概要

がある。

11・5 14ラインで南北堀 SA3777 の柱穴が出はじめる。その西側に築地回廊 SC5500 の足場 SS3795が2穴1組となって南北にのびる。

11・6 SA3777の柱穴出揃う。ただしAP17付近には柱穴がなく、門になる模様。

11・7 13ライン南部で南北溝 SD5575 を検出。西岸は地山から掘りこむが、東岸は瓦片をふくむ整地土から掘りこんでいる。足場 SS3795 の柱穴がSD5575に切りこんでいる。

11・10 C地区のN～S、5～10ラインの間を拡張することにした。

11・12 17ラインで、足場 SS3795 の柱穴と南北石敷雨落溝 SD3790を追跡。SD3790のAB17以北は削平されて消失している。

11・14 SD3790以西の礫敷面を精査する。AA21に方形土壇SK9231があり塙がつまっている。AB20の北西に東西棟の掘立柱建物あり、SB9220は梁間3間で北廂がつく。桁行は現在4間目を検出中。柱抜取痕跡はバラス面からみえ、柱掘形は地山まで下げねばみえない。

11・15 SB9220の桁行が5間で終るのを確認。AD23以北の23ラインに段差があり、試掘の結果その線上に塙積が存することがわかる。つまり第87次調査で検出した塙積擁壁 SX6600 がこのあたりでは南北方向の斜道となる。

11・16 SB9220の23ライン以西では礫敷の上下層の差異がよくわかる。下層の礫敷は粒揃いの礫で、その上に瓦片をふくむ土層と黄褐色粘質土が堆積し、その上に上層の礫がしかれている。

11・19 AH22～24を拡張することにした。

11・20 AP27の土壇（のち井戸SE9210になる）の輪郭をほぼ掘りあげる。AH22の拡張区では人頭大の石が東西にならぶ、第Ⅱ期の石積擁壁 SX9230か。

11・2 AH22の拡張区をさらに北へのぼすこととし、構内道路を除去しはじめる。C地区の拡張区では、9ライン以西で南北溝 SD8239、南北堀 SA8238、南北溝SD8237を検出し、第87次調査で

検出した遺構がこのあたりまで及んでいることがわかる。

11・22 AH22でSX6600が南へ折れ曲る部分を発見、地山を削りだしている。その南の整地土からさきに検出したSX9230までは遺構がなく、石積を第Ⅱ期の擁壁としてよいようである。C地区拡張列区をさらに東へのぼすことにした。

11・26 C地区拡張区では北東から南西にのびる2条の溝以外に遺構なし、この斜行溝からは新しい磁器が出土し、水田時のものとみられる。

11・29 写真撮影。

11・30 写真撮影。SX6600の南延長部分の塙は抜きとられて、抜取痕跡のみ。

12・1 現地説明会。

12・3 土壇とみていたSE9210は、その外側に方形の掘形をともなっている。

12・7 空中写真測量。遣方実測の準備。

12・10 実測開始。

12・14 実測終了。補足調査開始。

12・19 築地SA3719をN～Sまで、除去することにした。SE9210を下げる。

12・21 SE9210に木材の井戸枠のあることがわかる。SX9230の石列を西に追う。東側はSX6600につきあたることを確認。石敷雨落溝 SD3790は上下2層にわかれる。下層溝に切りこむ足場もある。

12・24 SE9210の井戸枠は、断面形が三角形の材を用い、内法東西2.3m、南北2.2mの蒸籠組にする。築地の一部を掘り下げる過程で、寄柱痕跡らしきものがあらわれる。CR10にトレンチを入れ、第27次調査で検出した南北溝 SD3765がこの地域におよんでいないことを確かめる。

12・26 写真撮影。補足測量。

1・8 東西溝 SD9236が上層礫敷面から掘りこんでいることを確認。AK17でのSD3790は間層をはさんで2層にわかれ、瓦片をふくむ足場の柱穴は下層礫敷面でおおわれている。

1・10 井戸実測。土層実測。

1・12 井戸枠の取上げ終了。発掘調査終了。

# 第三章 遺 跡

## 1 遺跡の形成

平城宮朱雀門内の北方には、奈良時代の遺構とかがえられる建物跡の土壇や築地痕跡に比定できる土塁状の地物があり、それにしたがって水田の地割りにも規則性がみられた。朱雀門の北250mのところからはじまる東西210m、南北280mの地域、その北側に接する東西180m、南北100mの地域、またその北に接する方180mの3地域に大別することが可能であった。これらの地域が方約1,000mの平城宮の中軸線上の好地を占めていることから、当調査部では南から第1次朝堂院・第1次大極殿・第1次内裏に想定し、聖武朝の平城遷都以前の中心的な宮殿跡に推定してきた。今回報告する地域はそれらのうち、北方の大極殿・内裏想定地域に相当し、そのほぼ東半分とこれに接する東側の幅約40mの地域である。

調査前の推定

発掘調査の結果、この地域は周囲を築地回廊でかこみ、全体の約2/3にあたる南方地域を建物のない広場とし、北辺の約1/3地域に建物が林立する状況があらかになった。また、検出遺

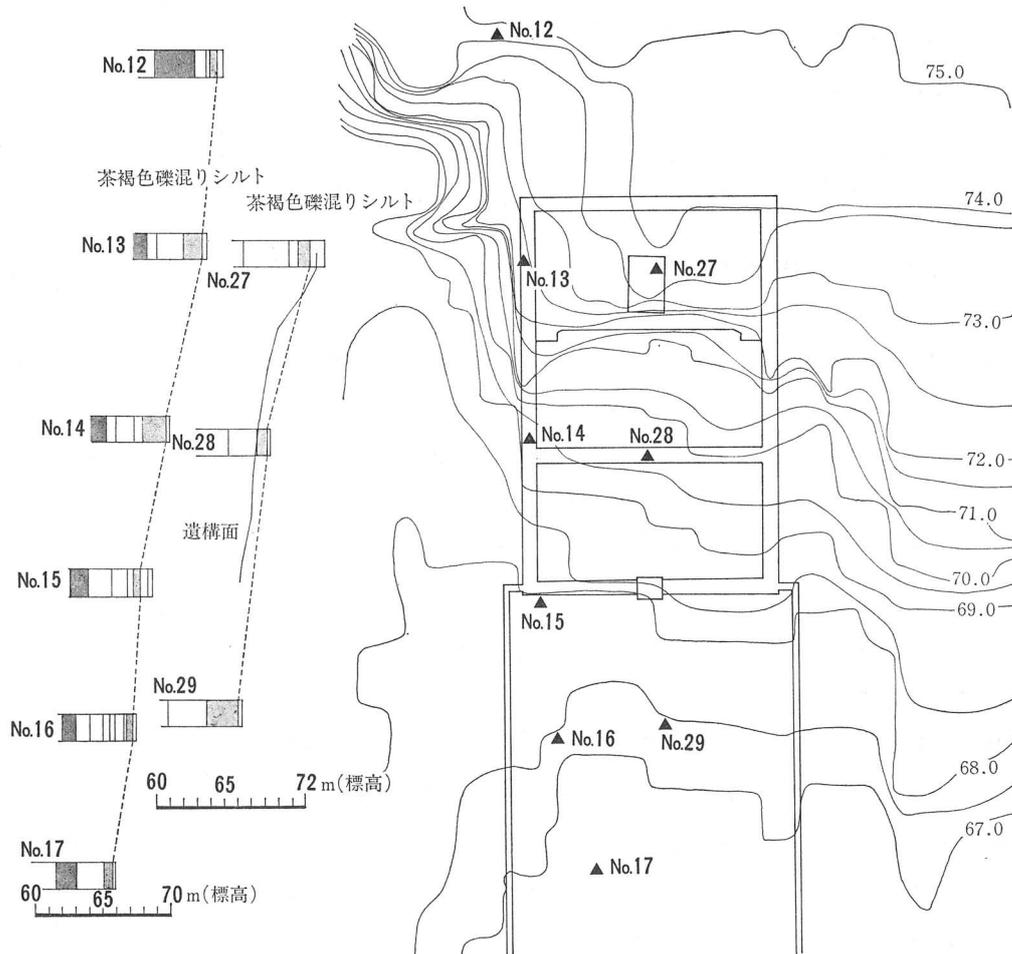


fig. 11 現状地形とボーリング調査

### 第三章 遺 跡

#### 調査地の区分

構は大きくわけて奈良時代前半の第Ⅰ期、後半の第Ⅱ期、平安時代の第Ⅲ期に大別でき、各時期ごとに個性豊かな建物配置をとっている。それらのほか、平城宮造営以前の遺構もあった。ここでは1：門と回廊域、2：殿舎地区(6ABP区)、3：広場地区(6ABQ, 6ABR区)、4：東外郭地区(6ABC, 6ABD, 6ABE区)、5：大膳職地域(6ABO区)にわけて、それぞれの遺構を第Ⅰ～第Ⅲ期にわけてのべることにした。なお、地域の呼称については従来からよびわけている第1次朝堂院・第2次朝堂院、第1次大極殿・第2次大極殿はそのままのこし、第2次内裏は単に内裏とよぶことにした。

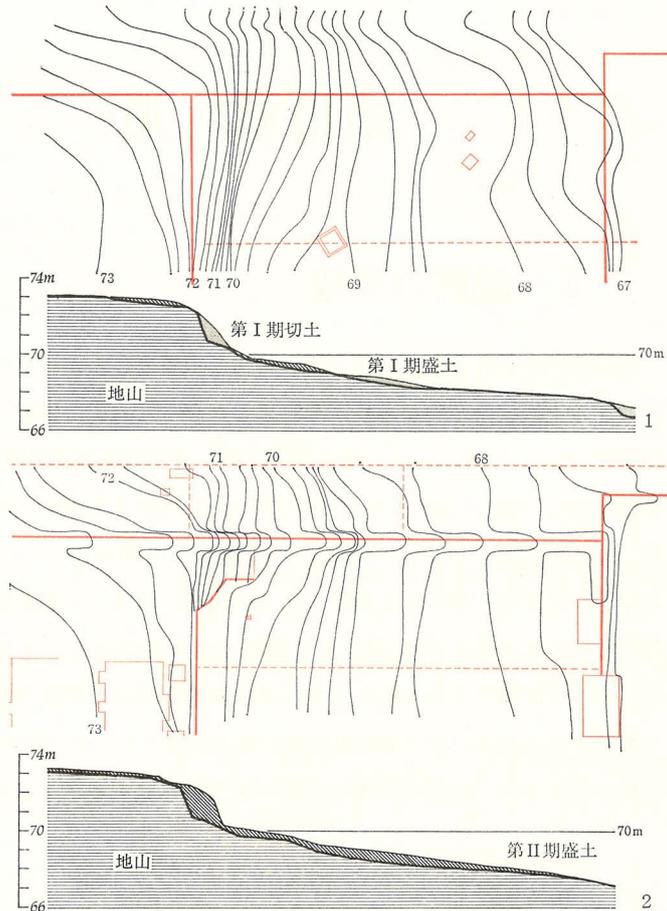


fig. 12 第1次大極殿地域の地形変遷(1)  
1. 造営以前, 2. 第Ⅰ期

#### A 発掘前の地形 (PLAN. 1・2, PL. 1)

調査地は平城・佐保丘陵などの東西に連なる小丘陵の南麓に位置し、北から張り出す標高68～74mの台地を呈している。西側は北西方の御前池・佐紀池につながる谷筋で画され、東側は内裏・第2次大極殿地域との間によこたわる浅い谷筋によって画されている。北部の1/3地域(殿舎地区)は、もっとも高く南方地域と2mほどの比高差があり、西側の低地より約4m高い状況を呈している。また微地形として、殿舎地区と広場地区が接する東西端の部分は南にのびる土塁状の高まりとなり従来から築地痕跡に比定されてきた。そして、土塁痕跡をはさんで内と外へ斜めに下がる地割りがみとめられた。広場と回廊の地域では、東南から西南方向に傾斜している。そして南の朝堂院地域との間に約50cm内外の落差がある。灌用水の水路は、殿舎地区の南辺を東西にぬけ、この地域の中軸線上を南下する水路と東外郭地区の東辺を南下する水路とに分流している。

調査地域の土質調査は、発掘調査時の所見と1961・1962年のボーリング調査結果<sup>1)</sup>によってあきらかである。すなわち、砂礫・砂・シルト・粘土が厚く堆積している大阪層群相当の層が下部にあり、丘陵部では上部を不整合な新期洪積層の礫層が覆い、丘陵の南麓からは沖積層が層厚1～2mで南へいくほど厚く堆積している。遺跡は北部では洪積層の礫層上、南部では沖積層上に形成されていることになる(fig. 11)。

1) 『平城宮整備報告』1979, p. 3

## B 古代の地形

以下で各時期の地形を復原するわけであるが、それはつぎのような手順で行なった。発掘地域の土層図によって、地山(平城宮造営前の地形)と各時期における整地層の厚さを基礎資料とし、ボーリングによる土質調査を参考にした。各時期における整地層の厚さは fig. 12・13の断面図でもわかるように後世の削平が著しいため、旧地形を把握しえない部分も多い。そこで現況の地形図を基本にして、各時期の溝底面の高さ(原則として北から南へ、西から東へと地形に準じて流れる。上部の遺構が削平されていても、溝底勾配によって等高線間隔を調整できる)で修正を加えながら等高線を変更し、等高線間隔 25cm で各時期の地形図を作成した。

旧地形の復原

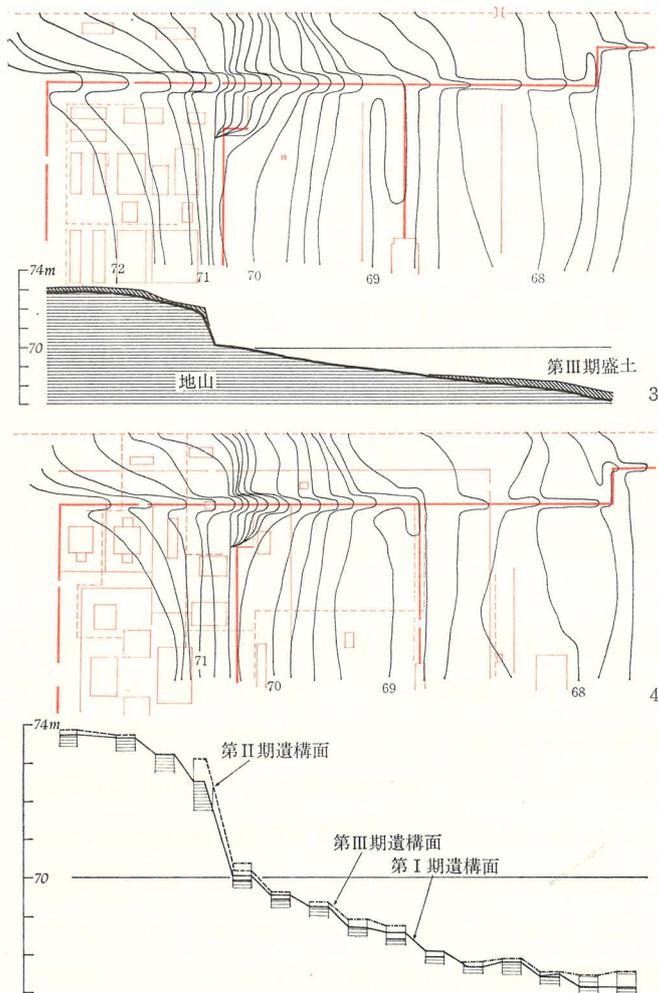


fig. 13 第1次大極殿地域の地形変遷(2)  
3. 第II期, 4. 第III期

**平城宮造営以前** (fig. 12-1) 殿舎地区と広場地区との間(ボーリング No. 13—No. 14, 27—28, fig. 11参照)で、遺構面および下部の土層が他の調査地点にくらべて急傾斜になっている。すなわち、造営以前にも、現況の地形に似た形で北からのびる台地の張出しがあり、殿舎地区の南辺付近に段差があったことが想定できる。造営前の地形図作成にあたっては、遺構面から旧地山面の標高を抽出し、造営時に埋めたであろう下ツ道東側溝SD7787の溝底の高さで修正して、標高点を等高線に置きかえた。その結果、地形全体としては現況地形と類似することになった。

台地と低地

造営以前の地質は、殿舎地区では赤褐色粘質土であり、広場地区北半では礫まじりの黄褐色粘土を主にする。広場地区の南半では、黒色粘土が堆積する浅い流れをとまなう小さな谷筋があり、そこに造営にとまなう木材の削り屑などが堆積している。

**第I期** (fig. 12-2) 第I期の遺構検出面は、殿舎地区においては赤褐色粘土・褐色礫面であり、広場地区北半(6ABQ区)では整地層の黄褐色礫面、広場地区南半(6ABR区)では暗灰色粘土・灰色礫層の整地層である。これら整地層の標高を抽出し、後の整地層削平状況を東面築地回廊西雨落溝(SD3790)と中央南北参道東側溝(SD7142, 勾配1/70)の溝底高によって修正し、等高線図をおこした。

溝の勾配

造営前の地形では殿舎地区と南面築地回廊(SC5600)との比高差 5.5m, 勾配1/45であり、平城宮中央部南北地形の勾配1/80にくらべるとかなり急であった。この段差を利用して、殿舎地

### 第三章 遺 跡

**塙積擁壁** 区の南縁に塙積擁壁 SX6600 を設けて上下二段の土地を造成している。擁壁の構築にあたっては、中央部で約100m幅の切土を行ない、東面築地回廊付近では旧地形をのこして斜道 SF9232A としている。塙積擁壁の高さについては、 検出した擁壁高と東面築地回廊雨落溝 SD3790の底差によって2.2m前後(標高72.8m)に復原できる。SD3790の溝底勾配をみると、殿舎地区での比高は1/60~1/70の勾配であり、斜道 SF9232の部分(長29m)では1/30の急勾配となり、SF9232の裾から約40m南までは1/35となお急勾配をとり、それ以南では1/60~1/70の勾配を呈している。こうした溝の勾配によれば、擁壁の高さ2.2mはSF9232Aで1mの段差を、それ以南40mで1mの段差を処理していることがわかる。すなわち、広場は水平面をなすのではなく、北東方から南西方に向ってゆるやかに傾斜していたのである。

殿舎地区と広場地区との整地は、旧地表に合せて若干の盛土と切土を行ない、平坦に整えたのち一面に礫(厚さ20cm前後、下層礫敷面)を敷きつめている。広場地区の南半では浅い谷筋を黒色粘土を主にして厚さ0.15~1mで埋立てて平坦な土地を造成し、上記の礫をしきつめている(下層礫敷面)。

**新しい擁壁** **第Ⅱ・第Ⅲ期** (fig. 13) 第Ⅱ期の遺構は、殿舎地区では黄褐色礫敷面、広場地区では暗灰・黄褐色礫敷面(上層礫敷面)で検出した。第Ⅲ期の遺構検出面も大体第Ⅱ期と同じであるが、広場地区では茶褐色礫混りの整地面が覆うところがあった。つまり、第Ⅲ期には大規模な地形変更は行われず、第Ⅱ期の地形に準じているとみてよい。整地面の標高を、第Ⅱ・第Ⅲ期の溝底の比高で調整して地形図をつくった。第Ⅱ期におけるもっとも大きな整地は塙積擁壁SX6600をやめて前方15mにわたって盛土し、石積擁壁SX9230を積みあげたことであり、それが第Ⅲ期まで存続する。新しい擁壁の高さは、残存する最下段の玉石と殿舎地区礫敷面(上層)との比高、および殿舎地区から下の広場に流れておちる第Ⅲ期の3本の南北溝(SD8301, SD6659, SD6612)によってきめた。その結果、擁壁の高さは1.6m前後と第Ⅰ期にくらべて若干低くなったようである。3本の南北溝はいずれも第Ⅰ期のSX6600を過ぎる位置から1/30の急勾配となる。それは第Ⅰ期の斜道SF9232Aの勾配と等しく、SX9230の構築に際して、SF9232Aの勾配を基準にしたのではないかとおもわれる。この時期の斜道SF9232Bは段差が低くなったこともあり、SX9230から50m南の間で西南へ向ってゆるやかに下り、1.6mの段差を解消したようである。

殿舎地区の整地は第Ⅰ期に準じて礫を敷きつめる。しかし、第Ⅱ期・第Ⅲ期の区別はほとんどつかない。広場地区では第Ⅰ期の礫敷面の上に平均30cmの厚さで第Ⅱ期の礫を敷く。とくに南半のSC5500の北側では厚く敷いている。広場地区では第Ⅲ期の礫敷整地面を識別できるところがあり、やはり礫を敷きたしたようである。とくに広場南半の中心建物SB7803付近では礫敷が厚く、30cmの厚さをもつ。

**整地と土量** 第1次大極殿地域は、元来北から南へ張り出す台地の急勾配1/45の地形を中心にとりいれている。この急勾配を利用して、敷地を二段にわけその境に第Ⅰ期では塙積擁壁をつくったのである。つまり壇上に立てば下方を見下すことになり、壇下に立てば上方を仰視することになる。そして、旧地形は壇の上下をつなぐ斜道と東面築地回廊の基壇にのこされたことになる。第Ⅱ・第Ⅲ期では斜道の勾配で擁壁を前方に15m移動し、石積擁壁を新設した。その造成工事は台地上の建物基壇の削平などによって容易に行なわれたであろう。

また各時期を通じて、第Ⅰ期の正殿(SB7200)、第Ⅱ期の主殿(SB6610, SB6611)、門(SB7801、

## 2 遺 構

SB7750), 主要建物 (SB7803) などの構築される部分は, 基壇を積みあげて建築したものである。それらについては全体の南への緩傾斜のなかで, とくに平坦に整地が行なわれるように留意して地形造成がなされていることが各期の断面図からわかる。

各時期に要した地形造成のための土工量は, 地形図の中軸線・東面築地回廊・南北溝SD 土 工 量 3715南北方向平均断面によって求めた (fig. 13)。これによると, 全体の土工量はそれほど多くなく, 大極殿地域の 2/3 が広場であることをかんがえると, 旧地形を最大限に利用した造成であったことがうかがえる。第 I 期では, 擁壁をつくるために旧地形を切土する切土量が多く, 第 II 期・第 III 期では擁壁を前へのばすため盛土量が多くなる。各時期の土工量をくらべると, 第 II 期が第 I 期の約 1.6 倍の土量を要し, それに準じて人夫数も増加しており, 第 II 期の造成がきわめて大規模であったことがうかがえる。積算に用いた土工歩掛りは現行のものであり, 使用工具が原始的であった奈良時代ではもう少し人員を要するものとおもわれる。また, 積算した数値は第 1 次大極殿東半部分についてであるから, 全域としては, 第 I 期: 10,000m<sup>3</sup>, 2,200人, 第 II 期: 15,000m<sup>3</sup>, 3,400人, 第 III 期: 7,600m<sup>3</sup>, 1,600人程度の土工量になる。

なお, 第 I 期の 塼積擁壁については, 10m あたり 32個×29段=928個 の 塼 (長さ29.3cm, 幅 塼 積 7.5cm) を積むことになり, これに東西築地回廊間の距離 170m を乗ずると 15,776個の 塼を使用したことになる。

	(盛土) (0.2人/m <sup>3</sup> )	(切土)(0.3人/m <sup>3</sup> )	計
第 I 期	2,630m <sup>3</sup> ( 526人)	1,900m <sup>3</sup> (570人)	4,530m <sup>3</sup> (1,096人)
第 II 期	7,110 (1,422 )	270 ( 81 )	7,380 (1,692 )
第 III 期	3,450 ( 690 )	350 (150 )	3,800 ( 795 )
計	13,190 (2,638 )	2,520 (756 )	15,710 (3,394 )

Tab. 2 第 1 次大極殿地域東半部推定工量

## 2 遺 構

第 1 次大極殿地域で検出した主な遺構は, 築地回廊 6, 築地 6, 擁壁 2, 建物89, 足場19, 溝83, 井戸 2, 土壇18以上などである。遺構の大多数は平城宮方位 (内裏北面築地回廊SC60の北雨落溝の方位を基準としたもので, 国土方眼方位に対して N0°07'47''W 振れている) に近い方位をとる。以下の報告において, N.S.W でしめす数値は, 第 2 次大極殿基壇上の基準点 No.7 (国土方眼座 測量基準 標第VI座標系で, X=-145412.55, Y=-18322.19の値) を基点 (0, 0) にした平城宮方位での値である。たとえば, N100とは No.7 から北へ100m, W200とは No.7 から西へ200mという意味である。建物でもっとも多いのは掘立柱式の建物であり, 以下の記述ではとくにことわらないかぎり単に建物という。また柱穴・柱掘形などの用語については『平城宮報告VII』にしたがうが, 個々の柱穴の呼称については建築修理の方法にしたがい, 桁行柱を漢数字とし梁間柱を片仮名であらわす。そして, 東と南から数えはじめることとする。たとえば, 東西棟 5 間× 2 間の建物のときにロー柱穴といえば東妻柱をさし, ロ六柱穴といえば西妻柱をさすことになる。基壇の「掘込み地業」などの用語については, 『平城宮報告IX』にしたがう<sup>1)</sup>。

1) 模式図の記号 ●柱根をとどめる掘形 ○柱痕跡をとどめる掘形 ○掘立柱掘形  
■礎石 □礎石抜取痕跡 …推定 ▲は北をしめす

A 門・築地回廊地区

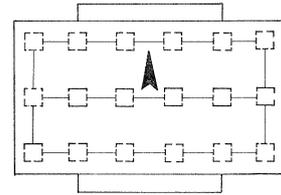
6ABR・6ABQ・6ABP・6ABO区にかけて、築地回廊が当初には南北に長い長方形に構築して第1次大極殿地域をとりかこんでいるが、後には方形に縮少している。第I～第III期のあいだに幾度かの改変がある。

i 第I期の遺構

**SB7801** (PLAN 12, PL. 3~6, fig. 14・15) 6ABR-H・J 地区

南 門 第1次大極殿地域の南門であり、中軸線上(W266.6)に位置する。

基壇の立ち上り部は削平されて、柱位置をしめす礎石据付痕跡などはうしなわれている。また、基壇の南辺は後世の耕作のため深く削りとられ、残存する遺構は基壇の掘込み地業、基壇の北縁をめぐる礫敷の雨落溝と地覆石抜取痕跡、北面階段の痕跡などである。



掘込み地業 南門付近では、地山(黒灰色粘質土、標高67.4m)のうえに黄褐色粘質土(厚さ20~30cm)をしきつめてまず整地し、後に基壇の掘込み地業を行なう。東西31.2m、南北17.45m、深さ50~60cm程度の長方形坑を掘り、四周と中軸線の東西へ5.7mにおいてそれぞれ1条の盲暗渠(SD7809, SD7810, SD7812)をもうける。東辺(SD7812)と内寄りの2条(SD7809, SD7810)は、幅50cm内外で少し掘下げ礫をつめて南へ排水するが、北辺と西辺ではとくに溝を掘込まず礫を带状にあつめておいているにすぎない。掘込み地業の南北心にあたる東西縁に径10cmの杭がある。東端では打込んだ状態で検出したが、西端では遊離してたおれていた。築地回廊および門の地割設定にかかわる基準杭であろう(fig. 14)。

版 築 版築ははじめ一層10~30cmの厚さで、約40cm位まで搗き固める。礫混り粘質土、砂混り粘質土などの色調をことにする土を2・3層にわけて搗く。それより上部は色調のことなる粘質土を厚さ2~5cmぐらいで、幾層にもわけて搗く。ただし、全面に一樣ではなく場所によって層序がことなっているのので、部分的に搗き固めていったことがうかがえる。長方形坑の上端まで版築すると、礫混り粘質土を厚さ10cmで積むが、この層は東西の築地回廊基壇の盛土と重なりあっている。そして、さらに上へ積む暗褐色礫混り土は築地回廊に連続しており、門と築地回廊の地業が平行してなされたことがわかる。のこりのよいところでは深さ90cmの版築地業をとどめ、上面は平坦に削平されて第II・第III期の礫敷面がおおっている。

基壇縁 基壇の北面では地覆石抜取痕跡、雨落溝、階段痕跡などがあり、それらは第I期内での3回にわたる改修が層位的にみとめられた。上層の遺構としては、東北と西北隅の基壇縁にそって、L字形(南へ2m、中軸線に向って6.7m)にめぐら幅60cm、深さ20cmの浅い溝SD7852Bがあり、それは基壇盛土を削りこむように掘り、随所に凝灰岩の粉末をまじえる。基壇の地覆石抜取りの痕跡である。その外縁に60cmをへだてて、やはりL字形にめぐら小玉石列がある。それは玉石を一列に立てならべたもので、内側を密な礫敷とし外側を粗い礫敷とする。小玉石は一種の見切りであり、内側が雨落溝SD7833とかんがえられる。中央寄りの端は、同様に小玉石を両側にならべる南北溝SD7805, SD7806につながって北流し、東西溝SD5590に注いでいる。北面中央部に長さ14.2m、北へ1.2m張出す形で大型の凝灰岩片が堆積しており、そ

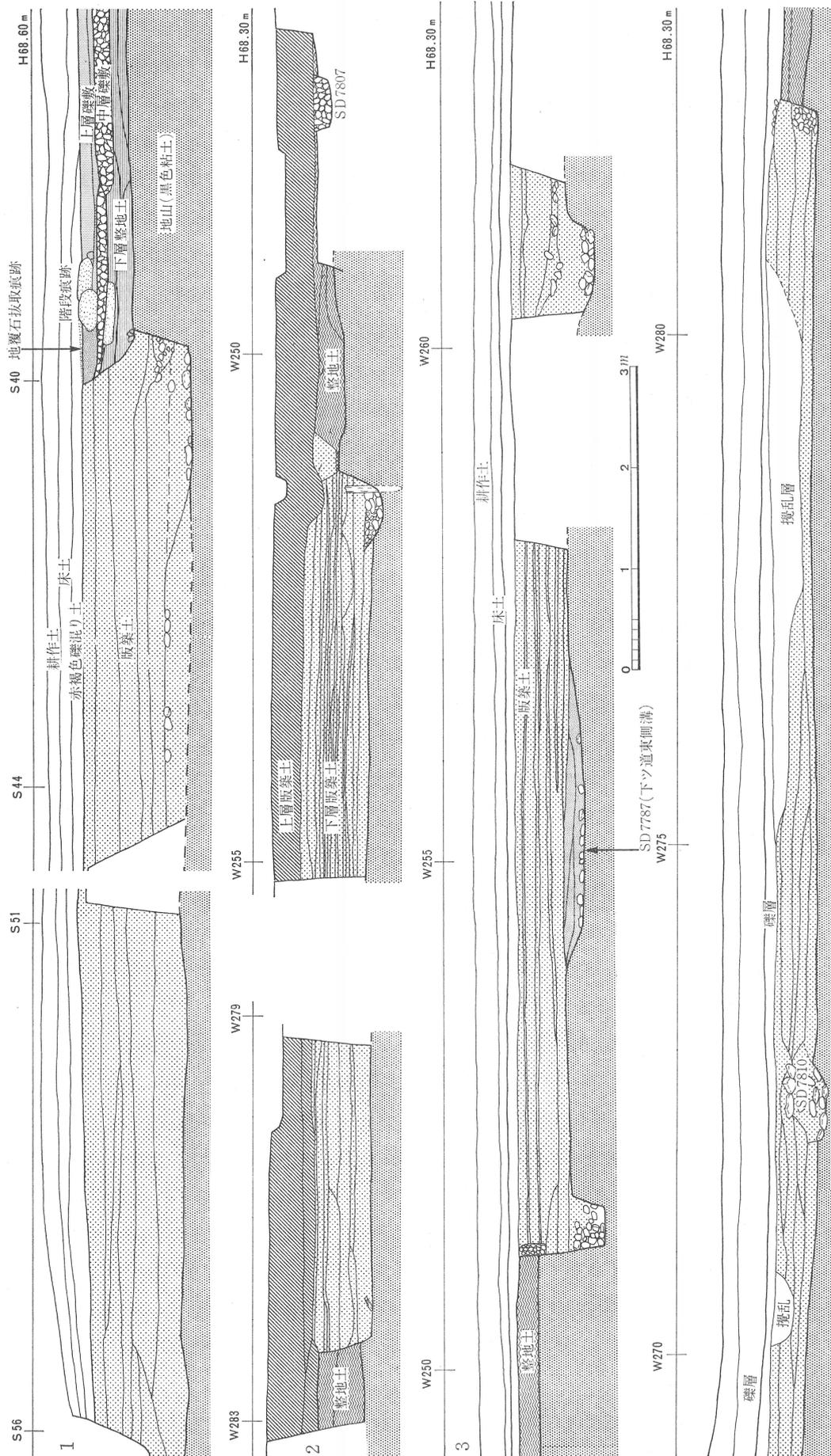


fig. 14 SB7801基礎の断面 1. W266ライン南北断面 2. S48ライン東西断面 3. S57ライン東西断面

### 第三章 遺 跡

の外側は小粒の礫敷となる。北面階段の痕跡である。この凝灰岩の検出状況からは、裏込め用のものなのか、あるいは解体時の廃棄物なのか、いずれとも決めがたい(fig. 15)。

**礫敷** 中層の遺構は部分的にしか検出していない。上層の階段と同じ位置に凝灰岩の堆積層があり、それは上層よりも70cmほど北へのびている。両隅の地覆石抜取痕跡 SD7852Aも同位置にある。この時期にはとくに雨落溝はもうけず、大粒の礫敷が地覆石抜取痕跡の北側に展開する。下層の階段位置もほぼ中層と同じで、凝灰岩片をまじえる暗灰色砂質土として痕跡をとどめる。この階段部ではとくに黄褐色砂混り土を敷く地業を行ない、その外方4mまでに灰白色粘質砂土をしきつめてから、礫敷きを行なったようである。

上層の遺構をおおって、とくに北側では瓦片の堆積が著しく、第Ⅱ・第Ⅲ期の赤褐色礫混り土が基壇上面に堆積しており、第Ⅱ期には基壇が削りとられていたことをしめている。

**復原** このような遺構から推定される基壇の規模は、上層で復原すると東西約28m(94尺)、南北約16.2m(55尺)、階段の幅15m(48~50尺)、同出1.8m(6尺)となる。柱間寸法を桁行5間(81尺・23.8m)、梁間2間(40尺・11.8m)に想定すことができ、この場合の柱間寸法は桁行両端間が15尺、内の3間が17尺等間となる。

**SC5600** (PLAN 2・5・11・12, PL. 3・7~10・14, fig. 16~18)

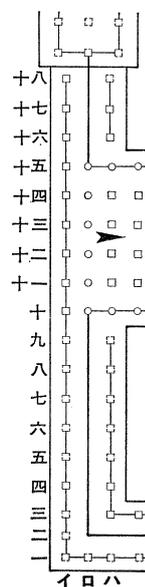
6ABR-H・Q, 6ABR-Q, 6ABS-E地区

**南面築地回廊** 第1次大極殿地域の南面を画する築地回廊東半分である。ただし、東寄りの22mについては未掘である。全域に基壇の掘込み地業を行なう。掘込み地業は整地土から幅11m内外、深さ40~30cmの布掘りであるが、自然地形の傾斜に**基壇** 影響されたらしく、南側のほうが少し深い。W246ラインの基壇断面では、底に礫を混える厚目の土層を1・2層おき、そのうえに色調をこととする粘質土、砂質土を3層(各厚さ5~15cm)ほど版築し、深さ60cmの掘込み基壇をのこしている。基壇南側上部の版築は南に傾斜しており、南側では盛上げるような積み方を行なったことがわかる。東端に近いところでは下部の積土を南半と北半にわけて行なう部分もある。しかしながら、W246ライン以西では東方とことなり、上述の南門SB7801と同じ基壇の状況をしめている(fig. 17)。

**盲暗渠** 基壇の南北縁には幅30~40cm、深さ50cmの溝を掘り大形の礫をつめた盲暗渠 SD5565, SD5557が平行する。西端はともにSB7801にとりつくようである。SD5557の東端はのちの木樋の南北暗渠SD5561によって破壊されているが、SD

5556となって東面回廊との入隅で南下し、南側のSD5565と交わり同じく礫詰め盲暗渠となって東へ20mのび、南北溝SD3765に注いでいる。この入隅部でSD5565が直進せず南に方向を変えていることや、基壇土の状況が東西でことなることから、SC5600の基壇土のほうがSC5500より以前に積まれたのではないかとおもわれる。なお、基壇土の積み方に変化のみられるSB7801の東約6m、W246ラインの西側には基壇を南北に横断する礫詰め盲暗渠SD7807(幅45cm、深さ15cm)があり、その両端は回廊の南面と北面につくる盲暗渠(SD5565, SD5557)につながっている(fig. 16)。

**地覆石** 基壇の北縁では盲暗渠の内側に幅70cm、深さ10cmの東西溝SD7855が平行しており、地覆石の抜取痕跡に比定できる。西端は上述のW246ラインあたりでとまるが、東端は削平をうけてお



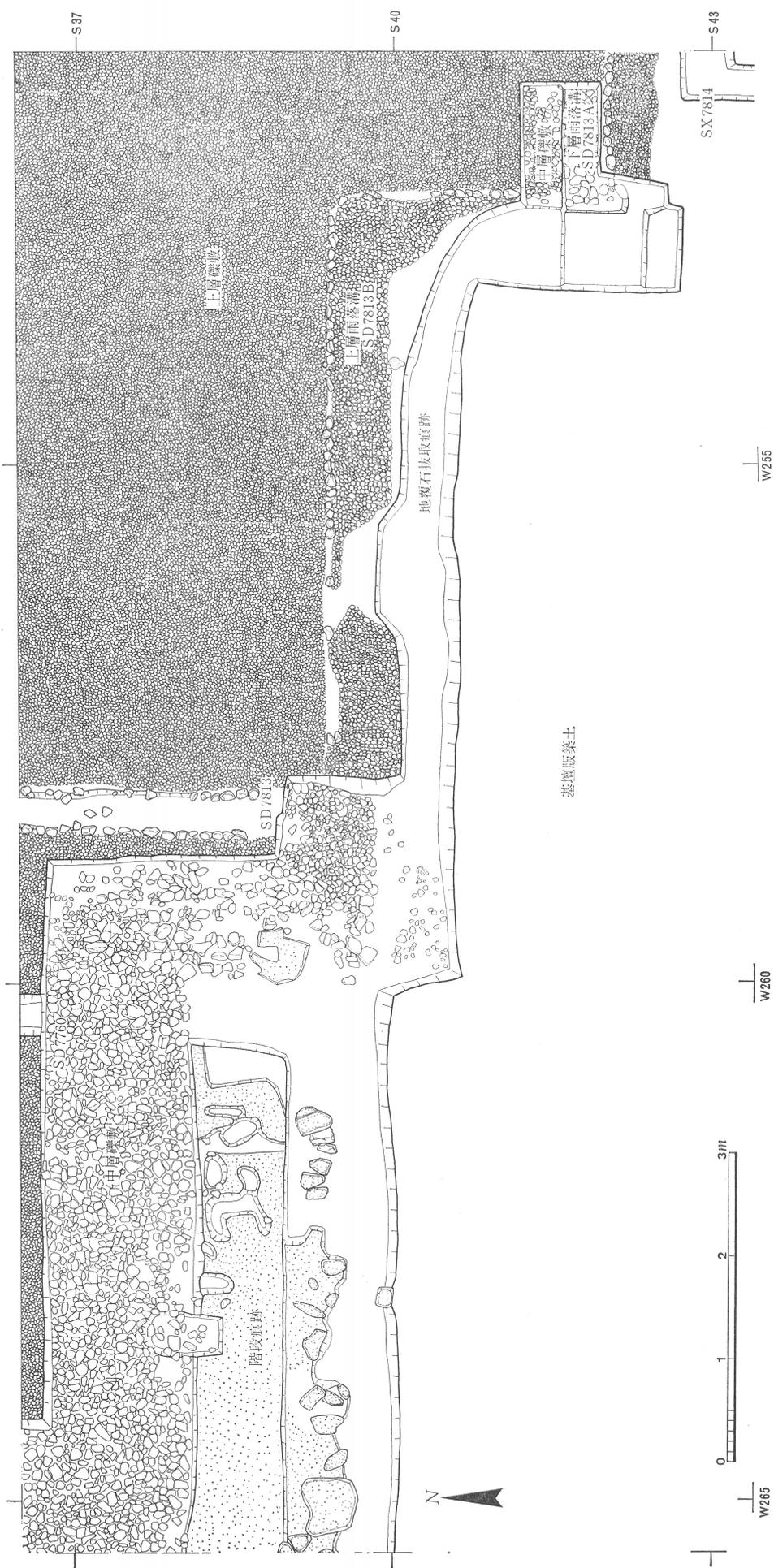


fig. 15 SB7801北面階段付近の様敷

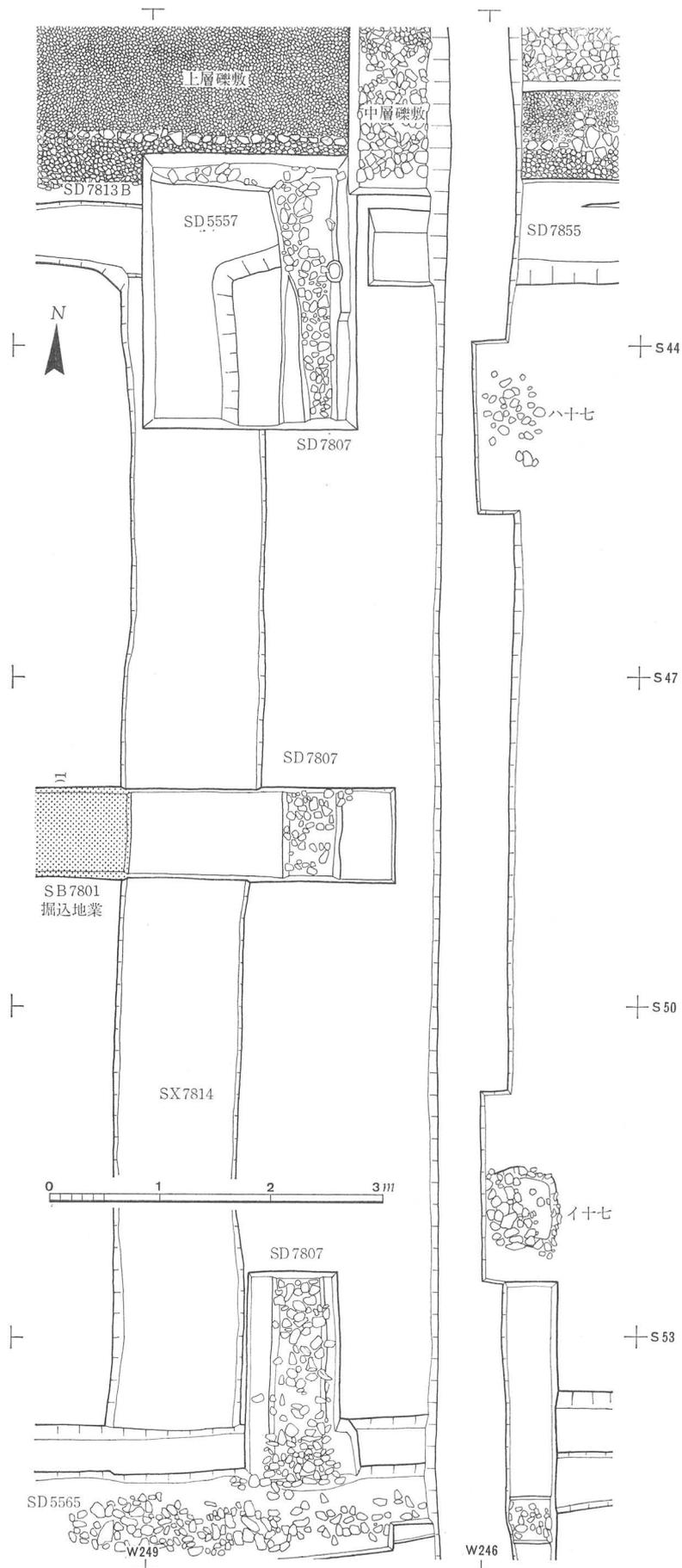


fig. 16 SC5600礎石  
掘付痕跡と  
盲暗渠

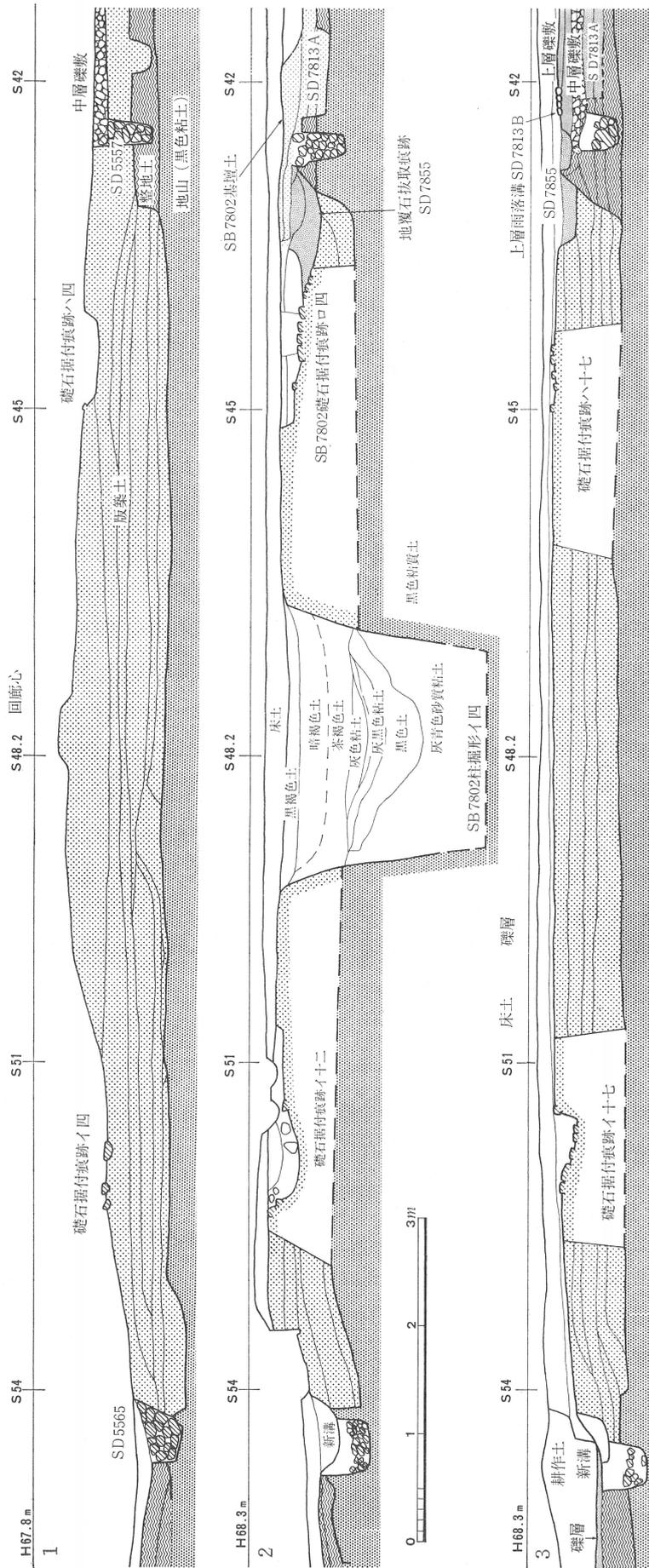


fig.17 SC5600基礎の断面 1. W186ライン 2. W228ライン 3. W246ライン

### 第三章 遺 跡

り不明である。この地覆石の抜取痕跡の心と回廊棟通り(S48.2)との距離は5.4mであり、基壇幅が10.8m(36尺)であったことがうかがわれる。回廊北面における雨落溝とそれにつづく礫敷はSB7801の場合と同じように3層にわかれる。上層の雨落溝SD7813BはSB7801の雨落溝につながり、建物SB7802の軒先でとまる。基壇縁に幅50cmで小粒の礫を敷き、見切りとして拳大の玉石を1列にならべる。見切り石の外側は小粒の礫敷となり、雨落溝とのレベル差はほとんどない。中層では基壇縁に接して外側一面に大粒の礫を敷きつめ、とくに雨落溝をもうけない。この整地はSB7802の増築にかかわるものであり、盲暗渠SD5557の上をおおっている。下層ではSD5557の外側15cmをへだてて幅65cmで大粒の礫をしいて雨落溝SD7813Aとし、その外側にやや小粒の礫敷がひろがる(fig. 18)。

礎石据付痕跡がのこっていた。南側柱列では、東端の3個と未掘部分の5個を除いて9個の痕跡がある。北側柱列では、SB7802の増築でうしなわれた6個と未掘部分の5個を除く4個の痕跡がある。それらは径1m内外のほぼ円形に散布する拳大の玉石で、いずれも中心部が低く、なかには方1.7mの掘形をとどめるものもあった。礎石の安定をはかる根固め石である。この礎石据付痕跡によって、回廊の心をS48.2に決定しうる。SB7802の間口の柱掘形をのぞいて回廊の棟通りには柱痕跡がない。だが、梁間を1間にすると広くなりすぎの遺構としては痕跡を見出しえないが、棟通りに築地を想定せざるをえない。そうすることによって、回廊東半部の桁行18間(80.37m)、梁間2間(7.1m)の南面東半分の築地回廊が推定できる。柱間寸法は桁行で東端の2間が3.54m(12尺)であるほかは、4.58m(15.5尺)の等間となる。梁間は3.54m(12尺)等間である。南側の基壇土の崩れた部分、南側柱の外側1mでは、礎石据付痕跡にそう形で8間(18m)分の小柱穴列SS7804(径30cm、深さ20cm)がある。柱間寸法は不揃いだがおよそ2.1mと2.4mを交互にくりかえし、礎石据付痕跡をさけて掘込んでいる。築地回廊南側の足場である。

以上のようなことから、SC5600はSB7801の基壇からはじまり、東西18間、中軸線と後述の東面築地回廊心との距離は88.3m、東西築地回廊の心々距離は176.6m(600尺)となり、その基準尺は29.43cmである。

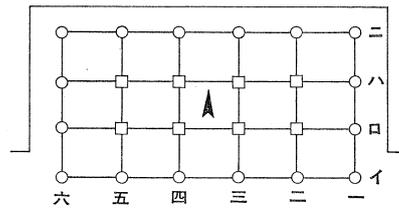
#### **SX7814** (PLAN 12, PL. 5, fig. 16) 6ABR—H地区

SC5600の西端とSB7801との間の基壇上に、長方形にめぐる溝状の遺構がある。南端の部分は後世の攪乱によって痕跡をのこさないが、西溝幅30cm、北溝幅50cm、東溝幅1mで、東・西溝の幅は約3.4mである。北溝はSC5600の地覆石抜取痕跡とそろっており、南北の幅が回廊のそれとひとしかったことがうかがわれる。この溝状遺構は両側壁が垂直に立ち上り、埋土中に凝灰岩片を混入しているので、凝灰岩切石の抜取痕跡とみてよい。すでにのべたように、この部分の基壇土はSB7801と同時に盛られ、東溝の下部には盲暗渠SD7807があった。SB7801は礎石の痕跡をまったくのこさず、回廊には根固め石を良好にのこしていることからすると、両者には高低差があり、SX7814はその中間で中壇を形成し、階段状につくられた回廊とりつき部分とみられる。

#### **SB7802** (PLAN 11, PL. 3・7~11, fig. 17・18・19) 6ABR—H地区

南門SB7801の東にたつ5間(22.9m)×3間(11.52m)で総柱の東西棟建物である。柱間寸法は桁行で4.58m(15.5尺)等間であり、梁間は3.84m(13尺)等間である。総柱のうち側柱は

掘立柱であり、内部の柱を礎石建てとする。柱掘形は3.5m×2.5mの長方形を呈し、深さは2.75mという超大型である。ハ一柱穴をのぞくほかには、漏斗状の柱抜取痕跡がある。イ・ニの柱列は抜取痕跡が連続し、東側に抜きとっていることが推測でき、六通の抜



取痕跡は西側にはみだし、西側に抜きとったことがわかる。掘形の埋土は地山の砂質土であるが、抜取痕跡には瓦、土器、木器などの遺物が比較的多く堆積していた。イ三・ニ三・イ五・イ六・ニ六の抜取痕跡には柱根を支えた角材(17cm角)の断片が2本ずつのこっていた。また、ニ四柱抜取痕跡では、径75cmの柱根がたおれており、それには貫穴が2箇所あって、1箇所には支えの角材をなおとどめている(fig. 19-1)。イ六柱掘形の南壁とそれに接する左右壁には底から約80cm上に傘風の掘込みを6個あけている。足掛け用の穴であろう(fig. 19-3)。ハ二柱穴には抜取痕跡がなく、版築状に埋戻されていた(fig. 19-2)。この柱穴には柱が立てられず、東側北2間を吹放ちにしたのであろうか。礎石据付痕跡は、方形掘形(方2.7m、深さ15cm)の中心にあたる位置に、径1m程度に根固めの礫が散布する状態でのこっていた。なかに礫のまわりに小柱穴(径20~30cm)を配するものがある。足場ともみられるが、性格をきわめることはできなかった。

SB7802は、南面築地回廊の中層礫敷の改修時に増築されたもの。下層の雨落溝SD7813と礫敷面を埋めて東西約29m、南北約8mの基壇を北側につけたし、東・西側では2.5m、北側では2mをおいて中層礫敷として大粒の礫を敷きつめている(fig.17-2・18)。基壇はすでに削平されているが、このことによって軒の出がわかる。南半はSC5600と重複しており、築地回廊の一部を開いて増築されたものとみてよい。南北方向の柱筋は回廊南側柱と一致し、SC5600の南側柱とSB7802の南側柱の間隔は3.6m(12尺)であり、回廊南半を片流れの廂状に扱った建物であることはあきらかである。また、柱抜取痕跡から出土した木簡によって、この建物が天平勝宝5年(752)以後に廃絶したことがわかる。

**SC5500** (PLAN 2・3・5~10・20~24, PL. 13~15・22~24・41・47・49・71・76・78・80・84, fig. 20・21) 6ABS-E, 6ABE-M・K, 6ABR-Q・P, 6ABD-C・D, 6ABQ-A・B, 6ABC-U・V, 6ABP-A・B, 6ABO-D・E地区

第1次大極殿地域の東面を画する築地回廊である。6ABR・6ABQ区では基壇の痕跡をのこしている。6ABP・6ABO区では基壇の痕跡はまったくないが、雨落溝や木樋暗渠が存在していることからその存在が確められる。低地部(6ABR, 6ABE区)の地山が軟い青色粘質土の地域と丘陵部(6ABQ, 6ABD区以北)の地山が硬い褐色粘質土・赤褐色砂質土の地域とでは、基壇形成の状況がことなっている。

低地に属する6ABR-Q, 6ABE-M地区における基壇断面をみてみよう(fig. 21-1・2)。ここでもSC5600と同じく、はじめに整地土(黄褐色粘質土)を広く敷いたのちに基壇の掘込み地業を行なっている。掘込み地業は、中心に約3m幅を掘りのこし、その左右に約3.5m幅の布掘地業を行なう。掘りのこし部分は回廊の心にあたり、その幅は築地の幅をしめす可能性がある。掘込み地業の深さは30cmで下部に礫混り土を搗き固め(厚さ25cm)、上部に礫混り土・粘質土を3・4層に盛りあげる。この段階で掘りのこし部分と東西の積み土との高さが大体一致する

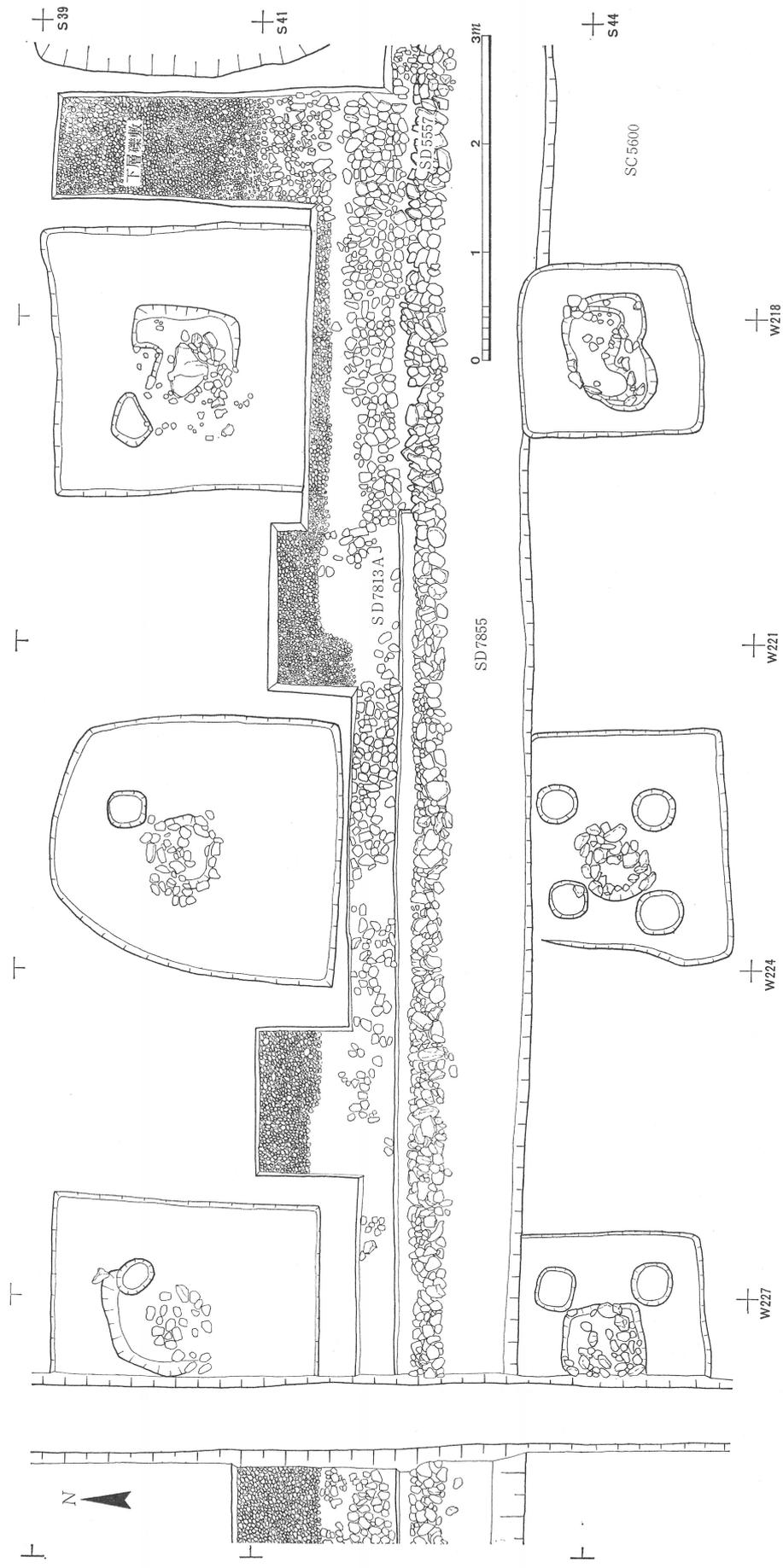


fig. 18 SB7802とSC5600の重複 fig. 17の断面図を参照

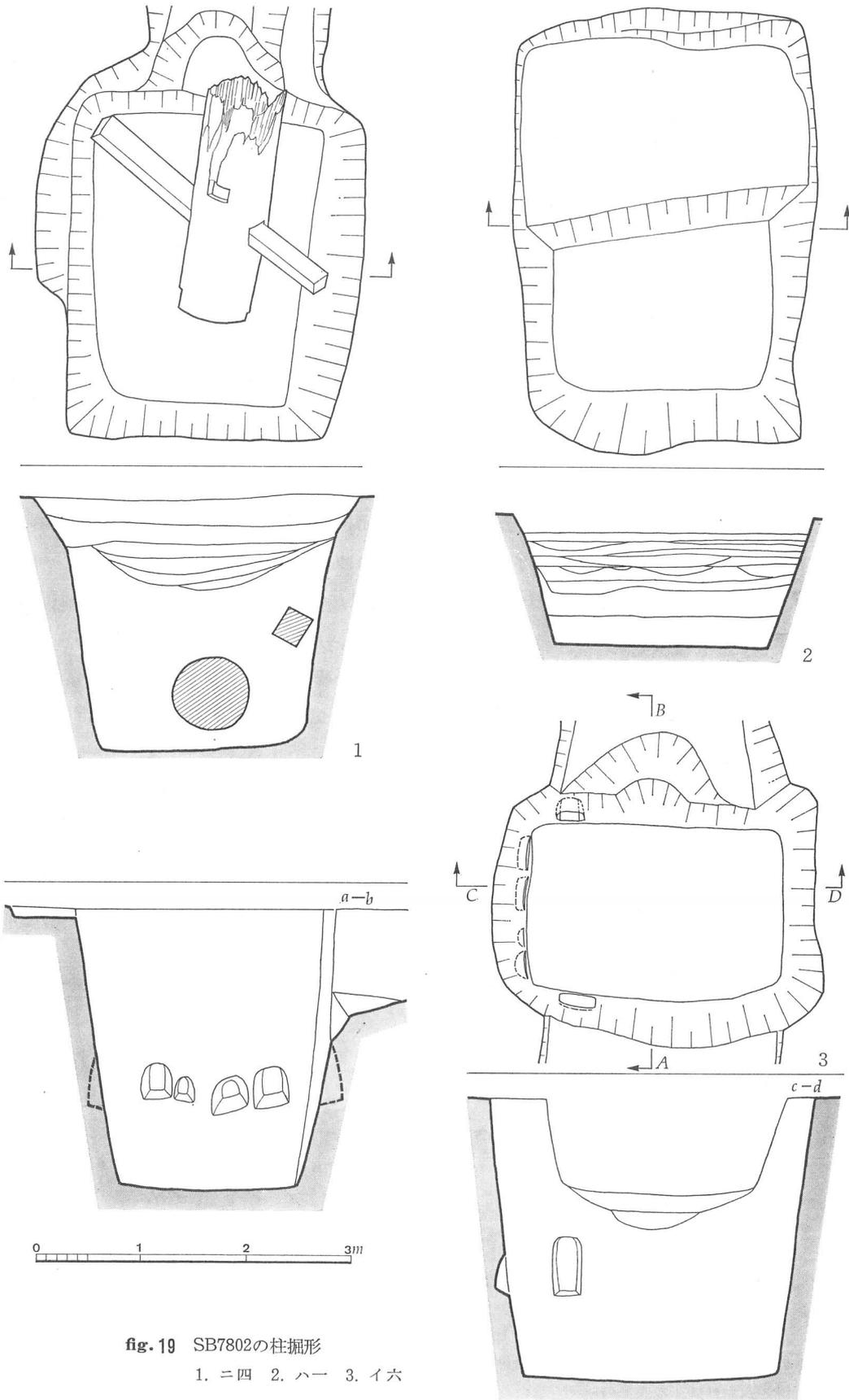


fig. 19 SB7802の柱掘形  
1. ニ四 2. ハ一 3. イ六

### 第三章 遺 跡

と、つぎには築地回廊の全面にわたって土を積み、結局掘込み地業の部分では深さ 60cm の基壇積土をとどめることになる。基壇上面の削平は著しく、基壇の東西縁に想定される地覆石採取痕跡を見出すことはできなかった。しかしながら、掘込み地業の外側 1 m 内外のところに雨落溝 (SD3790, SD5575, SD5588) があり、その間が回廊基壇となる。このことから、SC5600 と

基壇幅 同様に基壇幅を 10.8m とすることが可能となる。

6ABQ-A 地区では N120 付近で地山に傾斜がつき、それ以南では掘込み地業を行ない、以北については赤褐色礫混りの整地土のうえに版築して基壇をつくる (fig. 21-3)。さらに N140 以北では版築を行わず、地山を削りだして基壇を造成している (fig. 21-4)。また、6ABQ-A 地区では第 III 期の築地 SA3800 が比較的良好にのこっており、その基底面が第 I・第 II 期築地回廊の床面と大差ないとするならば、西側の雨落溝 SD3790 との比高は 60cm 内外となり、それが基壇高をしめすことになる。

SD3790 は東面築地回廊の西雨落溝である。幅 90cm、深さ 15cm の溝を掘り、幅 500m 内外に西雨落溝 礫をしくのであるが、礫敷は上下 2 層にわかれる。上層の礫敷は大形の礫を見切りの石列として南北に 1 列にならべその内外にやや小粒の礫をしく。下層の礫敷はやや大粒の礫をしくとどまり、見切りの石列をもうけていない。ともに 6ABR-D 地区の中央では、第 II・第 III 期の東西築地 SA3810 の盛土でおおわれている。6ABP・6ABQ-A・6ABR 区では部分的にしか痕跡をとどめないが、6ABE-M・K 区では比較的保存状態がよい (PL. 24・48)。SD5588 は広場地区を横断する東西溝 SD5590 との合流点から南下した部分の雨落溝である (PLAN. 5)。もっとも古い石詰の盲暗渠 SD5555 の後身として、築地回廊を横断し、東方へ排水する木樋暗渠 SD 東雨落溝 5561, SD5560 につながっている。SD5575 は東面築地回廊の東雨落溝であり、6ABE-M 地区でしか痕跡をとどめていない (PLAN. 6)。幅 65cm、深さ 20cm の素掘溝で、若干の砂を混える黄褐色土が堆積しており、その下で後述の足場 SS3795 の柱穴を検出した。

この時期の基壇の削平は著しいが、西側柱列の礎石据付痕跡 4、東側柱列の礎石据付痕跡 6 を確認し、回廊の棟通りが南端で W178.3 であることがわかった (PLAN. 5, PL. 15, fig. 20)。基壇に掘込まれた足場によって 回廊の柱位置を想定することが可能である。SS3795 は東面築地回廊に設けた足場であり、築地回廊の建設にともなう工事用足場柱の痕跡<sup>1)</sup>とみられる。その配列状況は、回廊の心から東西に 2.3m をへだてた位置に各々 2 列ならんで南北にのび、さらに

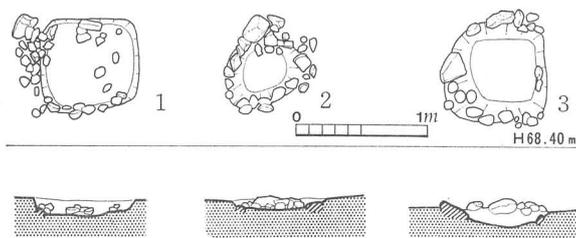


fig. 20 SC5500とSC5600の礎石据付痕跡  
1. SC5600ハ四 2. SC5600ハ三  
3. SC5600ハ四

1) 足場の柱穴と小掘立柱建物・木堀・縁束・床束などを区別する条件としてつぎのようなものがある。1. 柱掘形は方形・円形をとわず小さい。2. SC5600 でもそうだが、殿舎地区の状況からすれば、本建築の柱筋をさけた柱間の中央に柱穴が規則的に配される。3. 規則的と

はいえ、方位や柱間寸法は本建築のように厳密でない。このような条件をそなえた遺構を建築の建設や解体などにともなう足場に比定した。逆に足場をたどることによって、すでに消失した礎石位置などを推測することが可能である。

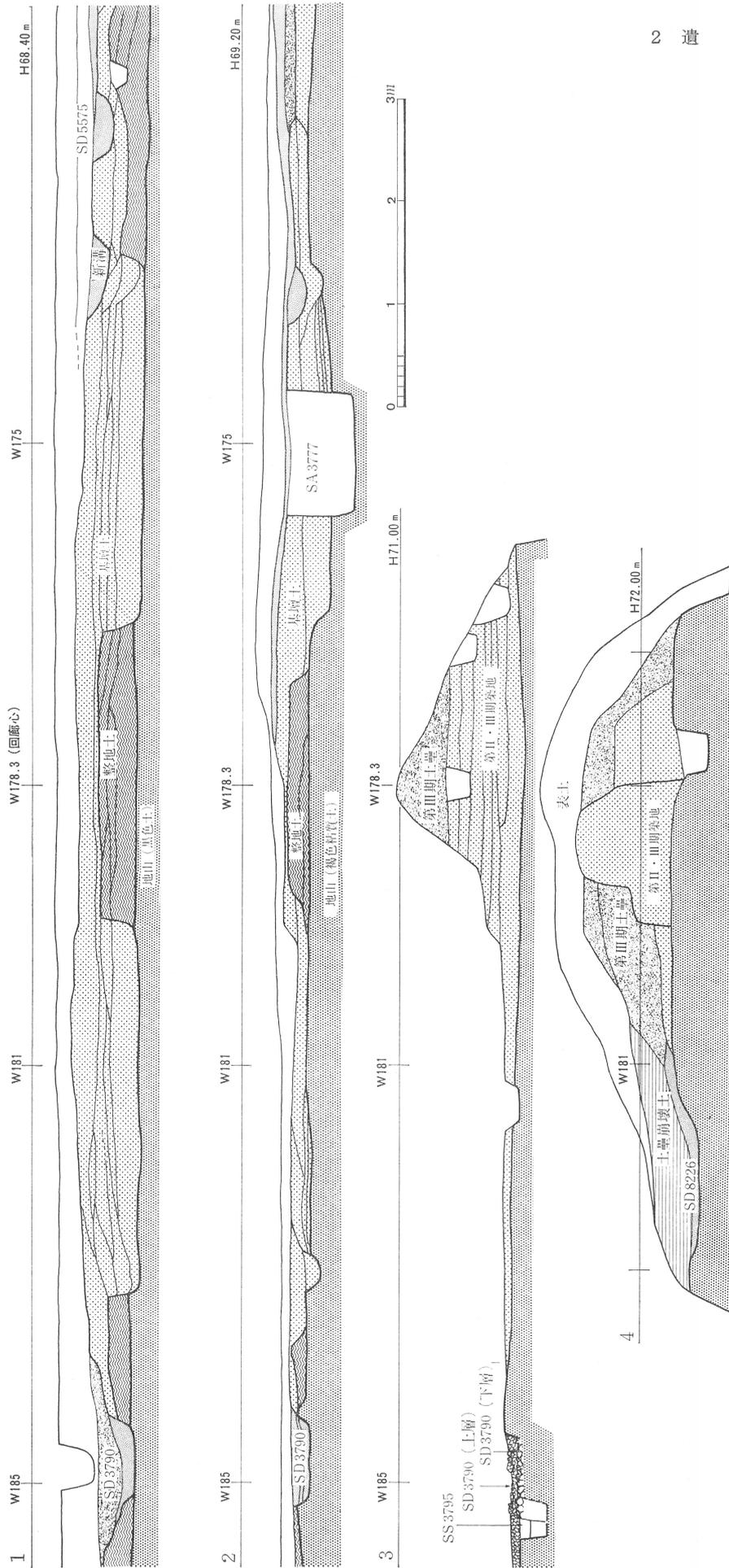


fig. 21 SC5500の基礎断面 1. S30ライン 2. N26.5ライン 3. N100ライン 4. N141ライン

外方4.5mのところを東西雨落溝に重複して、西側では1列、東側では2列の小柱穴列がある。都合7列の足場は掘形の径50cm、深さ20cmであり、柱間寸法は必ずしも一定しないが約2.4mと約2.1mとを交互に配し、梁間の柱筋をおおむね揃える。基壇上で近接している2列には部分的に重複するものもあり、前後2回の作業にかかわるものであることがわかる。すなわち中心寄りの古い列を造営時のものとみなしてSS3795Aとし、外側の新しいほうをSS3795Bとして再建時の遺構に想定した。第I期の築地痕跡はないが、6ABP-A地区の棟通り推定線上に1間分(3m, 10尺)の南北に相対する柱掘形(1.2×0.9m)があり、これを築地にあげた門の親柱に想定することができる **SB8233**。こうした足場とSC5600で確認した側柱の柱間寸法(桁行4.58m・15.5尺、梁間3.54m・12尺)とは矛盾しない。残存する西側柱列を北へ延長し、6ABO-D地区の東西溝SD130を北面築地回廊SC8098の南雨落溝として想定すると、桁行総柱間は72間(南北端各2間の柱間は各3.54m、延324.79m)、梁間2間(7.1m)となり、南北の心々距離は317.7m(1,080尺)となる。この場合基準尺は29.41cmである。

**SA3777** (PLAN, 2・3・5・6~10・20~24, PL. 14・15・22・23・47・76・84, fig. 22)  
6ABE-M・K, 6ABD-A・D, 6ABC-U・V, 6ABO-D地区

東面築地回廊SC5500の東側柱筋に重なる南北塀である。未掘部分があるが、総柱間は65間(307.3m)であり、柱間寸法は4.58m(15.5尺)を基本とするが、6ABD-C地区の第35・36柱穴間と6ABC-U地区の第52・53柱穴間は2間分(9.16m)をあげ、門の役割をはたしている。なお、『平城宮報告IV』で建物SB269として報告した柱掘形は、SA3777の北延長線上にあって、木樋暗渠SD130が掘込んでいるなど、共通点が多いので、SA3777にあらめた。南北両端はそれぞれ南北築地回廊心と5.2mへだたったことになり、少し広いがこの状態で塀の両端は南北築地回廊の築地部にとりついたのであろう。柱の掘形は1.1~1.5mの方形または長方形を呈

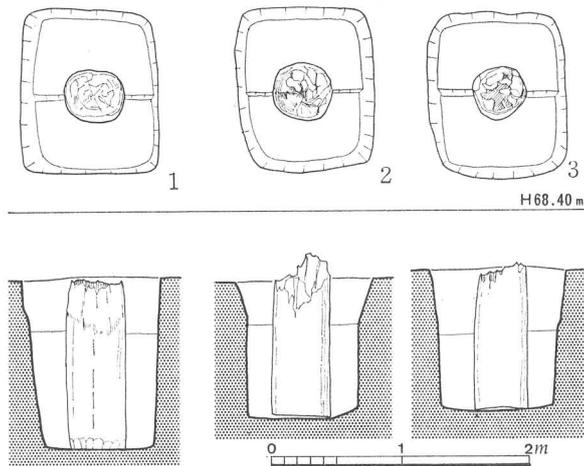


fig. 22 SA3777の柱根 1. 第3柱(南から), 2. 第4柱, 3. 第5柱

**SD5555** (PLAN 5, PL. 16, fig. 23) 6ABS-E地区

築地回廊の東南入隅を南に横断したのち基壇のやや南を東へ流れて、南北溝SD3765に注ぐ東西盲暗渠。全長18.8m、幅50cm、深さ80cmの溝を掘り、大粒の礫をつめている。SC5600を横断する部分 **SD5556** は、後の木樋暗渠SD5561によって破壊されている。礫詰めの上は東端のほうが西端よりも65cm低い。

1) PLANでは推定柱位置を■でしめしている。

**SD5560** (PLAN 5, PL. 16・17, fig. 23) 6ABS—E地区

SD5555 の北約 1m を流れる東西木樋暗渠で、全長 24.7m。西端は SD5561 につながり、東端は開渠 SD5558 につながる。はじめに溝 (幅 1.2m, 深さ 60cm) を掘り、木樋をすえて埋戻したもの。木樋は角材に溝 (幅 23cm, 深さ 13cm) をくりぬいた樋 (長さ 5m 内外, 38×25cm 角) を 5 本つないだもの。継ぎの部分はソケット状に加工し、一端は雄形に削り出し、他端を雌形にくりぬいている。また雌形の木口を水上にむけ、雄形の木口を水下におく。樋の両側には 1.2m 内外の間隔をおいて棧をおとしこむ切りこみ (幅 5cm, 深さ 2.5cm) をいれ、1 本につき 3～5 本の棧 (長さ 28cm, 3.5cm 角) をわたし、そのうえで全部で 9 枚の板 (長さ 2.8m 前後, 幅 31cm, 厚さ 5cm) で蓋している。なお、両端の木口部では北からの SD5561 につなぐために、北側を 45cm ほど切りとっている。東端と西端の落差は 15cm。西端部が南北塀 SA5550 の柱穴にかさなっており、木樋のほうが新しいことがわかる。

東西木樋暗渠

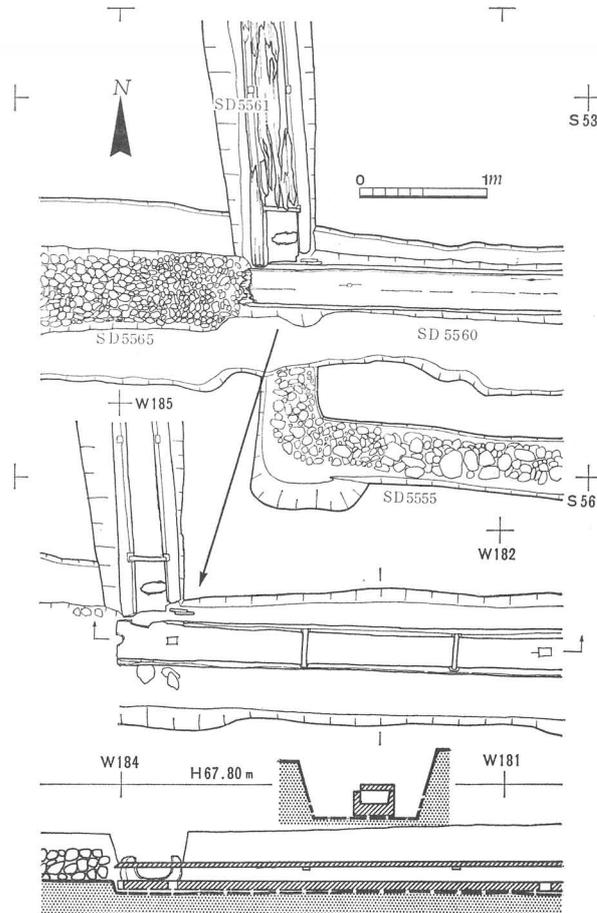


fig. 23 SD5560 と SD5561 の結合

**SD5561** (PLAN 5, PL. 16・17, fig. 23) 6ABR—Q地区

築地回廊 SC5600 の東南入隅部で南下し、南端を SD5560 につながり木樋暗渠。構造は SD5560 と同じだが、この木樋は丸柱 (長さ 6.05m・6.30m, 径 45cm) を転用したものである。棧は 1 本につき、7 本おくが、蓋は著しく腐蝕し原形をとどめていない。南北の落差は 12cm で、南のほうが低い。

南北木樋暗渠

**SD5562** (PLAN 4・5, PL. 16・18, fig. 24) 6ABR—Q・6ABE—M地区

築地回廊東南入隅から東へのび、SC5500 を横断する木樋暗渠で SD5561 の北端と接している。全長は 41.67m で、7 本の木樋をつないで東方の南北溝 SD3715 に排水する。木樋の構造は SD5560 と同じだが、SC5500 の基壇部分では掘形を狭くして (幅 85cm), 長さ 6.2m の丸柱転用材を 2 本おく。その東方には、掘形を広くし (1.95m), 長さ 5.2m 内外の角材樋 (内法幅 23cm, 深さ 15cm) をおく。棧をわたして蓋をかけるのであるが、蓋は腐蝕が著しく原形をとどめない。西端では南面・東面回廊の雨落溝をうけるが、築地回廊の東側では東雨落溝の水をうけず、東雨落溝 SD5575 は木樋の上部を通りぬける。東西の落差は 29.1cm で、東端のほうが低い。SA3777 の柱穴を掘込んでおり、木樋のほうが新しいことになる。

東西木樋暗渠

**SD5563** (PLAN 5, PL. 18, fig. 24) 6ABE-M地区

SD5562の北3.5mにある木樋暗渠で、全長13.25m。西端ではSD5588, SD5589をうけ、東端は東西溝 SD5564 につながる。丸柱転用の木樋2本をつないだもので、上口(幅15.6m)に棧をはめず、長さ2.35m、幅20cm前後の板を3~4枚かさねて蓋する。西端では両側を約10cm低くし、木口を板で塞いで上から水を受けている。東端では木口下面に礫をすえ、両側に板を打ちこむ。東西の落差は13cmで東端のほうが低い。この木樋の上にも 東雨落溝 SD5575 が通り、SA3777 の柱穴を掘込んでいる。

**SD3770** (PLAN 7, PL. 24・25, fig. 25) 6ABR-P・6ABE-K地区

SC5500を横断する木樋暗渠で、全長41.45m。西端は西雨落溝 SD3790 につなぎ、東端はSD 3715 に注ぐ。ただし、この暗渠と直接連続しないが西延長線上に東西溝 SD3779 があり、本来は連っていた可能性がある。蓋のほとんどは腐蝕し、樋も著しく腐蝕し底部をとどめるにすぎない。7本の木樋をつなぎ、基壇下の2本を丸柱転用材とし、それ以外は角材をくりぬいたものである。SD5562 と同じ構造といえる。東西の落差は24cmで東のほうが低い。SA3777 の柱穴を掘込んでいる。

以上、5条の木樋暗渠の丸柱には同一の仕口穴があり、同時期のものである。

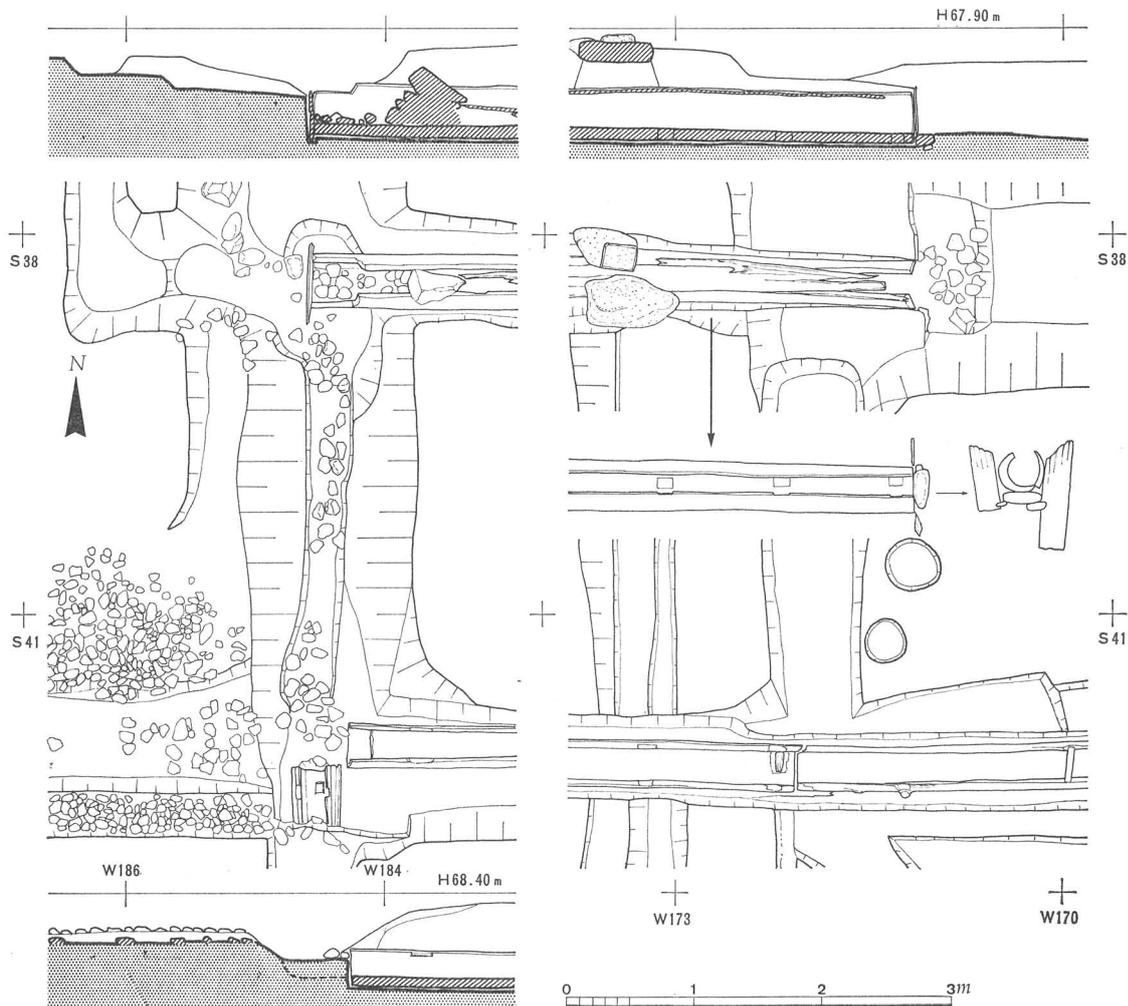


fig. 24 SD5588 に結ぶ SD5562(南)と SD5563(北)

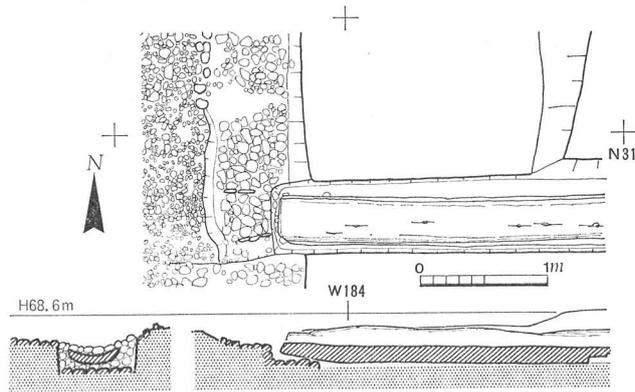


fig. 25 SD3790 と SD3770

**SD3775** (PLAN 8, PL. 28, fig. 26) 6ABD—D地区

築地回廊 SC5500 を横断する東西溝。西は西雨落溝 SD3790 とつながり，東方の南北溝 SD 東西溝と暗渠  
3715 につながる全長40.7mの素掘溝である。基壇部分は幅1.15m，深さ70cmの溝で部分的に凝灰岩の破片がのこっている。南方の状況からすれば，本来は木樋暗渠であり，凝灰岩片はその据えつけ石であった可能性がある。基壇の東方では素掘りの開渠（幅80cm，深さ40cm）となり，基壇の東約16mから，長さ5.2mの石積暗渠となる。暗渠には扁平な安山岩を用い，現在底石と側石をとどめる。側石は北側で一部2段目をのこすほかは，一段目の石しかのこしていない。当初から溝の南北で地盤の高低差があったのかもしれない。両側石の内法幅は40～50cmで，その掘形は両側の開渠部よりも広い（幅1.0m）。この暗渠は後述する門SB3746の柱位置と対応しており，通路の部分のみを暗渠にしたのである(p. 89参照)。

**SD8311** (PLAN 3・20, PL. 78) 6ABC—V地区

西は築地回廊の西雨落溝 SD3790 からはいり，築地回廊 SC5500 を横断し，中断部分があるが，東方のSD8327につながってSD3715に注ぐ東西溝である。基壇部分では幅1.0m，深さ30

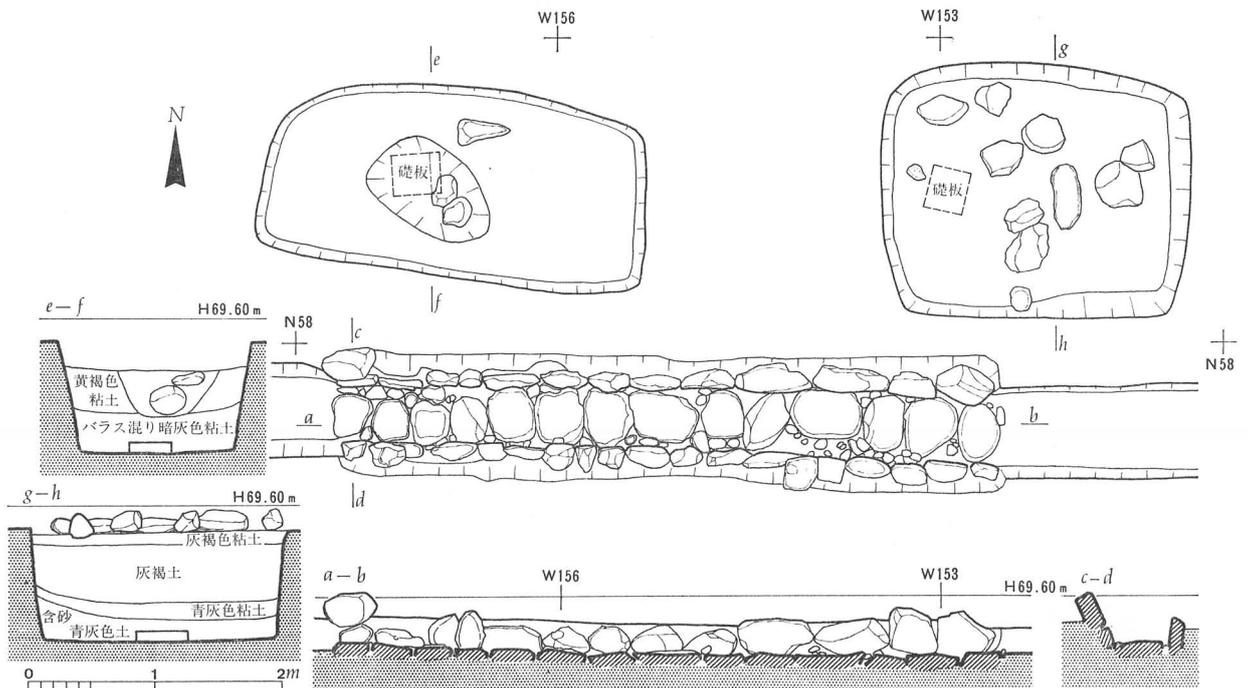


fig. 26 SD3775 と SB3746

### 第三章 遺 跡

**東西溝** cmとなり、中心の幅50cm部分と左右とは土層の堆積状況がことになっており、木樋部と裏込め部分にわかれるようである。基壇上で第Ⅱ期の東面築地回廊 SC8600 の柱据付痕が掘込まれている。また、東方のSD8327には第Ⅲ期の南北溝SD8237, SD8239および南北棟建物SB8325の柱穴が掘込まれている。

**SD8307** (PLAN 21, PL. 78) 6ABC—V地区

**盲暗渠** SD8311の北11mのところにある東西盲暗渠。断面V字形の溝(幅80cm, 深さ40cm)を掘り、大粒の礫を詰めたもの。築地回廊の西雨落溝 SD3790 の水を東側に排水する施設。

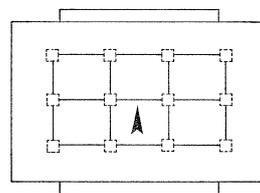
**SC8098** (PLAN 2・24・33・34, PL. 93・94) 6ABB—A, 6ABO—D・F・G・J・L・N・O・R地区

**北面築地回廊** すでに『平城宮報告Ⅱ・Ⅳ』で報告した東西石敷溝 SD130 によって北面築地回廊を推測することができる。SD130 は断続的に残存するが全長 185m, 幅 80cm の東西溝である。溝には礫を敷き南側に見切りとして大粒の礫をなべ, その南側に小粒の礫敷面がひろがる。東端には約12mにわたって木樋暗渠の痕跡があり, 南北塀 SA3777 の柱穴を掘込んでいる。西端は西面築地回廊推定位置の東約 10m で消失している。この SD130 は SC5500, 5600 の石敷雨落溝ときわめてよく類似しており, やはり上下 2 層にわかれる。北面築地回廊の南雨落溝であり, 木樋暗渠の長さは SC5500 の東西幅とみてよい。以上のようなことから, 破壊の著しい北面築地回廊についても, 南・東面回廊と同じく基壇幅 10.8m, 東西心々距離 176.6m (600尺), 総柱間41間(内両端の各 2 間は東西築地回廊の梁間である), 柱間寸法は桁行4.58m (15.5尺), 梁間3.54m (12尺) と推定することができ, 回廊の棟通りは N269.5 となる。なお, 後述するように中央部分にSD244によって軒廊が復原できるので, 中軸線上の 1 間を北門にあてることができよう。

#### ii 第Ⅱ期の遺構

**SB7750A** (PLAN 14, PL. 33・34, fig. 27-3) 6ABR—G, 6ABQ—D地区

**南門** 第Ⅱ期の南門である。礎石据付痕跡や, 基壇積土の痕跡はない。南面と北面に基壇地覆石抜取痕跡 SD7772, SD7773 がある。それは, 幅 70cm, 深さ 20cm 内外の素掘りの東西溝で, 部分的に凝灰岩片が散布する。東半分しか検出しなかったが, 中軸線(W267.0)で折返すと東西長 20.0m, 南北幅 12.7m となる。ただし, 中央部(長さ 13.44m)は南・北面ともに1.05m外側に張りだしており, 階段にあてることができる。第Ⅰ期整地土の上に基壇を盛りあげている。階段の東西幅を門の桁行とすれば, 3間(13.44m)×2間(7.2m)の東西棟建物が想定され, 柱間寸法は桁行4.48m(15尺), 梁間3.6m(12尺)とかんがえられる。なお, この建物と後述する第Ⅲ期のSB7750Bによって中軸線がW267.0であり, 門および南面築地回廊の心がN51.9であることがわかる。つまり, 第Ⅰ期の南面築地回廊位置から北へ100.1m移動しているのである。



**SC3810A** (PLAN 2・8・14, PL. 26・27・32・34・35, fig. 27) 6ABR—G・6ABQ—D地区

**南面築地回廊** 第Ⅱ期の南面築地回廊である。6ABR—D地区の状況によると, 基壇は第Ⅰ期礫敷面の上に直接積上げている。すなわち, はじめに幅約 5m, 厚さ20cmで粘土質の土を盛り, その上に同質の土を薄くつむ。さらに両側につぎたすようにして2・3層をつみ, 結局礫敷面から 50cmの高さに積上げて回廊の床面にあてたようである。部分的に築地の盛土をとどめるところ

もある。ただし、これは保存状況のよい部分のことであって大部分は削平されている。基壇幅は雨落溝と足場によってわかり、また雨落溝などによって、南面築地回廊が南門 SB7750 Aから発して東面築地回廊 SC8360 につながるものが裏付けられる。

東西溝 SD3778 は SB7750A の北面階段の東端からはじまり、東端が SC8360 を横断する全長84.4 mの素掘溝(幅50cm, 深さ20cm)で、SB7750Aの棟通りから北へ6.9m へだたっており、南面築地回廊の北雨落溝に比定しうる。なお、東面築地回廊 SC8360 を横断する部分は暗渠でぬけたものとおもわれるが、顕著な遺構はない。この SD3778 に対応する南雨落溝は痕跡をとどめていない。

SD3778 に北接して東西にのびる足場 SS3805は、19間(68.9m)の小さな東西柱列(柱掘形の径50cm, 深さ40cm)で、柱間寸法は3.25~4.0mと不揃いだが、おおむね3.9mにおさまるものが多い。北側の足場であろう。足場SS3818は、SB7750Aの心から南へ7mへだてて東西にのびる19間(68.9m)の小柱列で、柱穴およびその位置はSS3805に対応している。また柱間寸法もSS3805と同じ傾向をしめしており、南側の足場とみられる。後述するSC8360とSB7750Aの心々距離は88.3mとなり、南面築地回廊の全長(東西築地回廊の心々距離)は176.6m(589尺)となる。柱間寸法を後述の北面築地回廊 SC6670

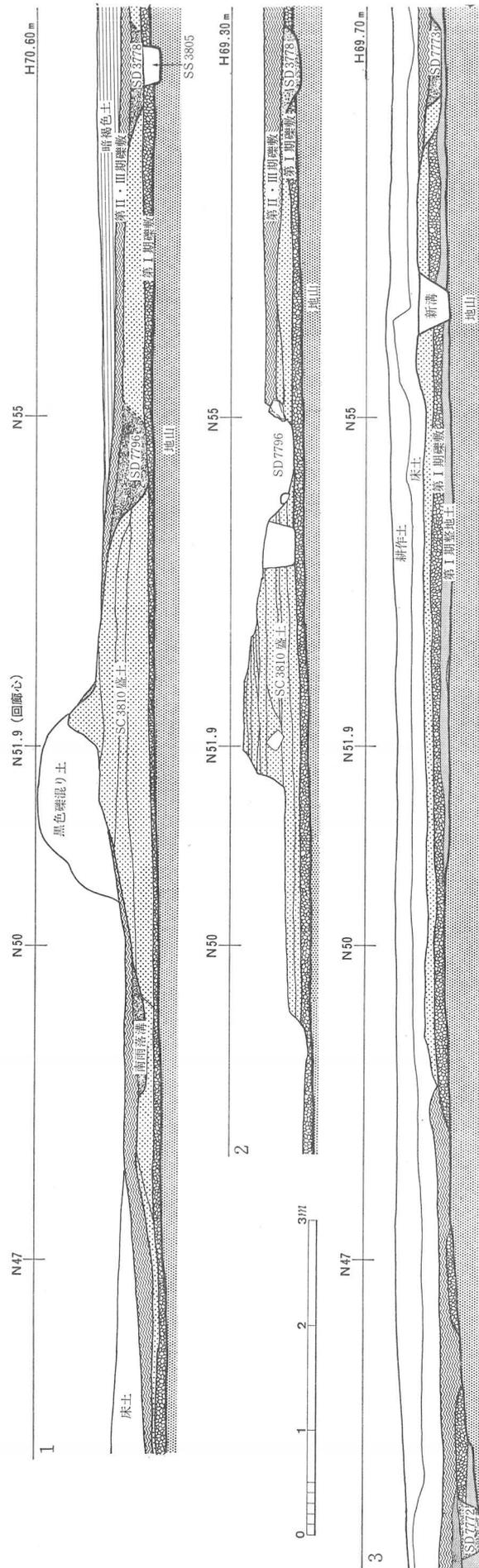


fig. 27 SB7750AとSC3810A・SA3810B基壇断面 1. W196ライン 2. W227ライン 3. W263ライン (SB7750A)

第三章 遺 跡

と同じく桁行3.9m(13尺)、梁間3.6m(12尺)とすれば、南面築地回廊の柱間数は中央に3間の南門を置いて、両脇に22間(内2間は東西築地回廊の梁間)配したことになる。

**SC8360** (PLAN 2・3・8~10・20~24, PL. 22・42・47~49・76~78・84・85, fig. 28)  
6ABP-A・B, 6ABC-U・V, 6ABQ-A・B地区

第I期の基壇を踏襲した第II期の東面築地回廊である。南方では遺構面が削平され、北方の高地にしか遺構をとどめない。6ABP-A・B地区では基壇積土の痕跡を欠くが、側柱列の礎石掘付痕跡と西雨落溝を検出した。礎石掘付痕跡は径1m内外、深さ20cm内外の浅い掘形に安山岩の根石をすえたもので、東側柱位置に2個、西側柱位置に16個が残存した(fig. 28-1・2)。東側の2穴は第I期のSA3777の柱掘形を掘込み、西側の1穴が第III期の東面門SB8310の柱掘形に掘込まれているので、両者の中間の時期に位置づけることができる(PL. 77)。その柱間寸法は、B地区の北寄りの1間が4.49m(15尺)であるほかは、3.95~4.0m(13.2尺)の等間である。柱間寸法を広くとる柱筋の東3.56mのところ、1間分の柱穴(掘形1.1×1.4m)が南北にならぶ。それは門の親柱であり築地にあげた門の存在をしめしている**SB8230**(fig. 28-3)。6ABQ-A地区の北辺でも同様の掘立柱痕跡があり、この位置にも門**SB9223**が存在したことになる。それは南の親柱にあたり、対応する柱穴を検出していないが、北方の側柱列の柱間からすると、柱間6.6m(22尺)程の一間門となる。6ABC-V地区の南辺にある東側柱列相当の礎石掘付痕跡によって、さきの門の親柱位置を心にする梁間2間(7.2m)の回廊であったことがわかる。

6ABQ-A地区では第III期の築地積土を除去して、築成時の遺構を検出した。回廊の心をはさんで幅1.5m程度の間隔をおく小柱列(柱間3m)**SX9218**が断続的にみられ、しかも柱穴が重複するところもある。この時期ないしは第I期の築地版築時の梓板支柱ともみられる。また、この小柱列と同位置に南北小溝**SD9219**、**SD9221**があり、梓板をすえた痕跡とみられる。**SD**  
**雨落溝 8216**はSC8360の西雨落溝(幅45cm、深さ20cm)で、西側柱心から2.5mはなれて南北に流れる。東北の入隅部から26.4m残存するが、それ以南はのこっていない。この雨落溝によって基壇幅が12m程度であったことがうかがわれる。

SB9223の南親柱位置はこの時期の郭内を南北にわける石積擁壁**SX9230**の東延長線上にあり、東面中央門となる(PLAN10)。SB9223と北方のSB8230との間には礎石掘付痕跡があり、この間は桁行10間(40m)となる。東面北門SB8230の北側にこの礎石掘付痕跡からすれば北面築地回廊SC6670南側柱までの桁行は10間(40m)となる。SB9223と南面築地回廊とのほぼ中間、回廊棟通り位置に4穴の小柱掘形があり、その長さ5.1mを東面南

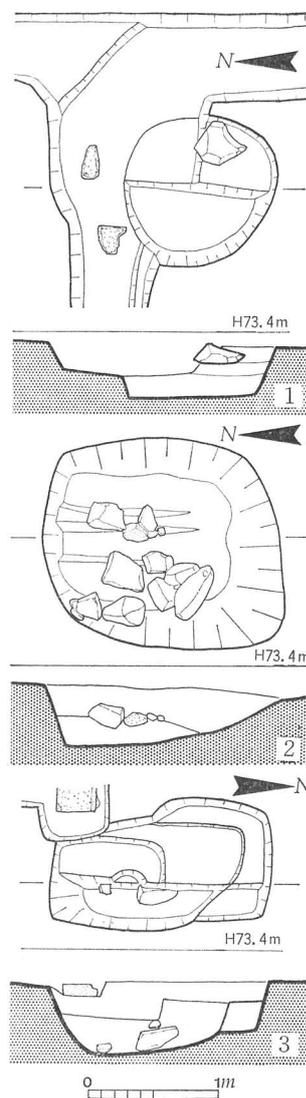


fig. 28 SC8360 礎石掘付痕跡とSB8230の柱掘形  
1・2. 礎石掘付痕跡 3. 柱掘形

門**SB9217**に比定することができる。SB9223 と SB9217 の間を11間に割りつけると柱間寸法は 4.01m となる。さらに SB9217 から南面築地回廊北側柱位置までを10間に割りつけると、柱間寸法は 3.95m となる。このようにして東面築地回廊の総柱間数は48間（門3間、南北築地回廊の梁間4間分をふくむ）に復原しうる。この場合、南北築地回廊の心心距離は 186.08m（620尺）となり、単位尺は 29.9cm である。

**SC6670** (PLAN 3・24・27・32, PL. 60・83・85, fig. 29) 6ABP—A・G地区

北面築地回廊である。中軸線から東半で礎石据付痕跡と雨落溝を検出した。築地及び北側柱列・北雨落溝は一条通りの道路敷にかかり、検出しえたのは南側柱列と南雨落溝である。基壇の痕跡はまったくなく、上記の遺構は地山面で発見した。礎石据付痕跡は15個が断続的に残存している。それらは SC8360 の場合と同じように方 1m 内外の浅い掘形をとめない、うちに2～4個の安山岩の根石をとどめているが、なかには根石の抜きとられているものもあった。

柱間寸法は中軸線上にある中央間とその東1間が4.48m（15尺）であるほかは、3.9m（13尺）等間である。これによって北面中央の門**SB7217**が3間であったことがわかるとともに、北面回廊の東半の桁行柱間は22間（うち2間は東面回廊の梁間）となる。南雨落溝**SD8214**は側柱列から南へ2.75mへだたる素掘溝（幅50cm、深さ10cm）である。G地区では痕跡をとどめないが、A地区での残存状況は比較的よい。東北入隅部分で東西溝SD8216とまじわり、SC8360を横断する。SD8214の南岸位置で断続的にならぶ小柱穴列**SS7222**は約4mの柱間寸法をもち、SC6670の足場とみられる。6ABO—E地区の南辺に同様の小柱穴列**SS8096**があり（PLAN 33）、北側柱の足場にあたる。

築地回廊の梁間については確認の手だてはなかったが、SC8360と同じく幅12m程度の基壇に梁間2間（7.2m）を想定することは可能であり、棟通り心はN237.98に推測できる。東西築地回廊の心々距離は南面築地回廊と同じく、176.6m（590尺）に復原できる。ちなみに単位尺は29.9cmである。

### iii 第Ⅲ期の遺構

**SB7750B** (PLAN 14, PL. 33・34) 6ABR—G, 6ABQ—D地区

第Ⅲ期の南門である。基壇の痕跡はないが、掘立柱痕跡をとどめる。5間（14.7m）×1間（5.4m）の東西棟建物。柱間寸法は桁行中央間3.9m（13尺）、脇間3m（10尺）、端間2.4m（8尺）と推定される。柱の掘形は方1m内外、深さ50cmで、径50cmの柱痕跡をとどめるほか、腐蝕の進んだ柱根をとどめるものがある。南面築地 SA3810B の北雨落溝 SD3778 の西端がロー柱の東1.8m（6尺）でとまる。

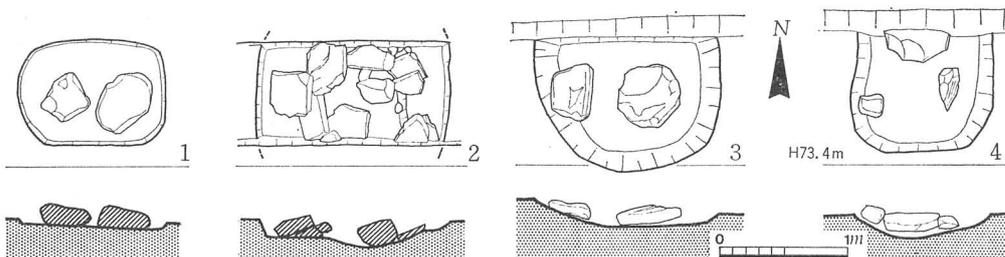
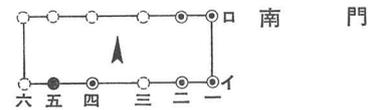


fig. 29 SC6670礎石据付痕跡

**SA3810B** (PLAN 2・8・14., PL. 26・27・34・35, fig. 27・30)  
6ABR-G・P, 6ABQ-B・D地区

第Ⅱ期のSC3810Aを踏襲した南面の築地塀である。現在、土塁状の高まりをとどめる部分  
南面築地 (黒色礫混り土)は中近世に盛りたしたもので、築地幅をしる手掛りをとどめていない。築地基壇は第Ⅱ期の回廊基壇を南北とも約4m縮め、幅5m程度の基壇に改修したようである。それは南北の雨落溝によって推測できる。北雨落溝SD7796は南門SB7750B棟通りの北側3mに位置する幅1m、深さ25cmの素掘溝で、部分的に護岸の安山岩列をとどめている。中軸線の東33mで南北溝SD7131とまじわる。南雨落溝SD7804はD地区で比較的良好にのこっており、やはり南門SB7750棟通りの南側3mに位置する同規模の素掘溝である。

脇門 SB7770 は中軸線の東27.1m (90尺)へだてて、SA3810の心に設けた1間の門である。柱間寸法は3.9m (13尺)。柱の掘形は方1m、深さ30cmで、径50cmの柱痕跡をとどめている。この柱位置によって築地心がきまる。

暗渠 築地の2箇所凝灰岩で組立てた南北暗渠を設けている。SD3815は東南の入隅付近にある暗渠である (fi. 30)。第Ⅰ期の礫敷面に達する幅1.7mの掘形をほり、内に凝灰岩の暗渠を組む。すでに南北の出入口は破壊され、長さ1.55mの部分をとどめるにすぎない。凝灰岩は基壇石を転用したもののように角に溝を刻むものをふくむ。底石(4枚)は方50cm、厚さ10cmの材である。側石(西側5枚、東側4枚)には長さ50cm、幅30cm、厚さ10~20cmの柱状石を主に用いる。蓋石(4枚)は長さ55cm、幅25cm、厚さ20cm程度のものを用いる。そして、内法で幅37cm、高さ27cmの暗渠を組立てる。掘形内は石屑や土器・瓦片をふくむ土で埋めもどしている。こうした残存部分は築地の北側にあるが、本来は基壇の全幅を横断していたものとみられる。南北溝SD7131の築地横断部分も暗渠SD7799がある。それはSD3815と同じつくりであり、築地心から南の部分がのこる。基壇石の転用材をふくむ側石と底石を6枚とどめている。

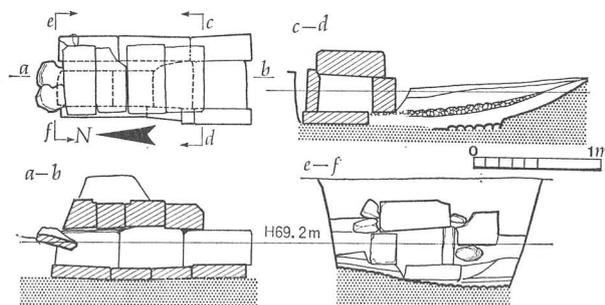
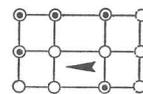


fig. 30 SD3815実測図

**SB8310** (PLAN 10, PL. 76・77) 6ABP-B地区

東門 東面中央門である。2間(6.3m)以上×2間(5.4m)の南北棟建物。桁行の柱間寸法は中央間が3.9m (13尺)、北脇間が2.4m (8尺)で、梁間は2.7m (9尺)等間である。柱の掘形は方1mでのこりのよいところで深さ75cmあり、径35cmの柱痕跡がある。南脇間の柱穴は検出していないが、3間×2間の門とみてよい。3間の門とするとその南北心N157は南面築地の心から北105.1m (350尺)、推定北面築地の心から南80.98m (270尺)にあたり、宮殿地区の壇上に通ずることになる。なお、妻柱筋は東面築地SA3800A・Bの中心にあたる。また、イ二とハ三の柱掘形が第Ⅱ期のSC8360の礎石据付痕跡を掘込んでいるので、SC8360よりも新しいことがわかる。



SA3800A・B (PLAN 2・3・8~10・20~23, PL. 22・47~49・76・84, fig. 21・31~32)  
6ABQ-A・B, 6ABP-A・B地区

SA3800Aは第Ⅲ期当初の東面築地である。第Ⅱ期の東面築地回廊をひきつぎ、回廊部分を東面築地撤去したのであろう。6ABQ-A・B地区においては土塁状の地物として現代まで残存してきた。遺構としては築地のほかに雨落溝・暗渠がある。築地の積土は比較的固く茶褐色を呈する砂礫土で、版築をしめす縞状の層序はみとめられず、第Ⅱ期の築地を踏襲したのか第Ⅲ期に築きなおしたかについては判然としない。そしてまた、崩壊土と本体との識別も困難である。全体に東側からの蚕食が著しいが、のこりのよいところでは1~0.6mの高さをとどめる。

この時期の殿舎地区6ABP-B区を横断する東西玉石溝SD6607は、築地部で暗渠SD8309と築地の幅なって東方にながれるが、第Ⅱ期の築地東側柱筋で玉石溝がおわり、それ以东は暗渠にかえていいる。そして、SB8310の棟通り筋の西70cmのところに入頭大の安山岩がならぶ(PLAN20)。これが恐らく築地の地覆石になるのであろう。SB8310の北側には地覆石想定線上に、寄柱据付痕跡とみられる掘形が4間分(12m)のこっている。同様の例は東西堀SA6624の築地取りつき部でみられ、ここでは東西堀SA6624の柱掘形のうゑに重複して地覆石がならび、第Ⅱ期と同じく築地基底幅が1.5m内外であったことがうかがわれる(fig. 31)。

築地心の西2.6mに、西雨落溝SD8226が断続的にのこっている。大部分は幅60cm、深さ30cmの素掘溝であるが、安山岩の護岸をとどめるところもある。6ABP-A地区では雨落溝がL字状に折れて凝灰岩暗渠SD8227で築地をくぐりぬけている。それは幅1m、深さ40cm程の掘形に凝灰岩板石を組立てて暗渠にしたもので、現状では長さ1mにわたって底石3枚と側石6枚をとどめ、工法は南面築地の場合と同じである(fig. 32)。

6ABP-B地区の犬走り上に、一種の暗渠施設SX8332がある。平瓦7枚を凹面を上にして南北方向にならべ、その上に丸瓦6枚をつないでふせたもので(長さ2.27m、幅30cm)、これにとりつく溝などは検出していない。築地に設けた門にかかわる施設であろうか(fig. 33)。この時

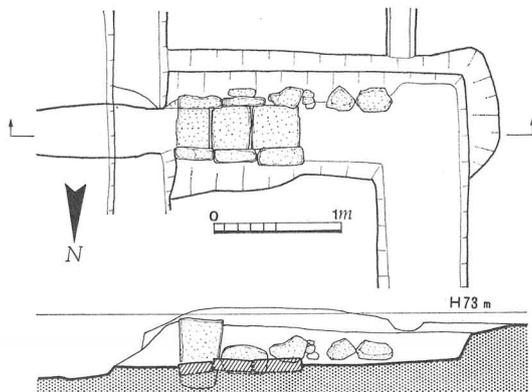


fig. 32 SD8227実測図

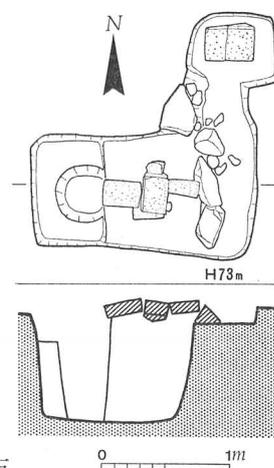


fig. 31 SA3800の地覆石

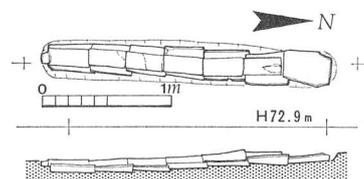


fig. 33 SX8332実測図

## 2 遺 構

付 属 屋 期に必ずしも限定できないが、築地に添って建つ付属屋がある。6ABD—C地区にある南北棟建物**SB9216**は、4間(10.8m)×1間(3m)で小柱穴の柱間寸法は2.7m(9尺)である。6ABP—B地区にある**SB8242**は人頭大の安山岩を礎石にしたもので、7間(10.7m)×1間(1.5m)に復原でき、柱間寸法は不揃いだが1.5m内外となる。

以上のことから、東面築地 SA3800A は第Ⅱ期と同じく南北築地の心々距離が186.08mであり、中心に基底幅1.5m(5尺)の築地を築き、その左右に2.1m(7尺)の犬走りをつけて、雨落溝を設け、犬走りには小規模な付属屋が設けられていたことが想定できる。

土 壘 SA3800B は築地の崩壊後に土塁に改変したもので、6ABD—A・B地区において観察できた。すなわち、築地本体および崩壊土の両側に土を積みたして、断面がカマボコ形を呈する基底幅4.5m、現状での高さ90cmの土塁に修築している (fig. 21-3)。

**SA7223, SA7224, SA7225, SA6635** (PLAN 27・32, PL. 60) 6ABP—A・G地区

目 隠 堀 北面築地は未掘であり、第Ⅱ期の築地をうけつぐものと想定せざるをえないが、**SA6670B**の番号を与えておく。ただし、北面築地にとまなう遺構は検出した。SA7223, SA7224, SA7225はいずれも中軸線 W267.0をまたぐ木堀で、柱穴が小さなことから仮設的なものとみられる。SA7223は2間(7m)、SA7224は3間(9m)、SA7225は2間(6.6m)であり、第Ⅲ期北門の目隠堀とみられる。SA6635は北面築地の東半部中央にある3間(8.5m)の堀。北門の目隠堀にくらべて柱穴は大きく、方50cmの掘形をもつ。第Ⅲ期北面東門の目隠堀であろう。

## B 殿舎地区

第1次大極殿地域の北辺、東西約110m、南北約90mの範囲(6ABP区)を殿舎地区とよぶ。この地区は、調査前から南に接する広場地区よりも約1.5~1.8m高い壇状を呈しており、そのうえで多数の建物を検出した。壇は地山を削りだして造成した創建時のものと、後に南方へ拡張した新しい時期のものが重複しており、現地形は拡張以後の地形にしたがっている。

壇の上面には黄褐色を呈する小礫を一面に敷きつめ、この整地面から建物等の遺構を検出している。ここでは創建時の遺構を第Ⅰ期にあて、拡張以後の遺構を第Ⅱ・Ⅲ期とした。第Ⅱ期と第Ⅲ期の区別は遺構の重複関係や計画性によって行なう。以下、検出した遺構を第Ⅰ~第Ⅲ期に大別し、それぞれの時期にぞくする遺構をまとめて説明することにする。

### i 第Ⅰ期の遺構

**SX6600** (PLAN 2・3・25・29, PL. 43・44・61・62・75, fig. 34・35)  
6ABP—B・D, 6ABQ—A地区

赤褐色粘質土の地山、つまり舌状に南へのびる奈良山丘陵の一支脈の末端を東西一直線に切り崩し、上部を削平して広大な壇(約200a)をつくる。壇の前面は第1次大極殿地域の中軸線 W266.9から東へ49.2mのび、この地点から内角117度5分の角度で東南に折れ、10.9mのびたところでまた30度ほど北に折れ曲る。第2の折曲点から12.4mのびたところでまっすぐ南に折れ曲り、16.2mのびてとまる。壇の前面は約70度前後の傾斜面をなし、外面に埴積みの擁壁を築いている。

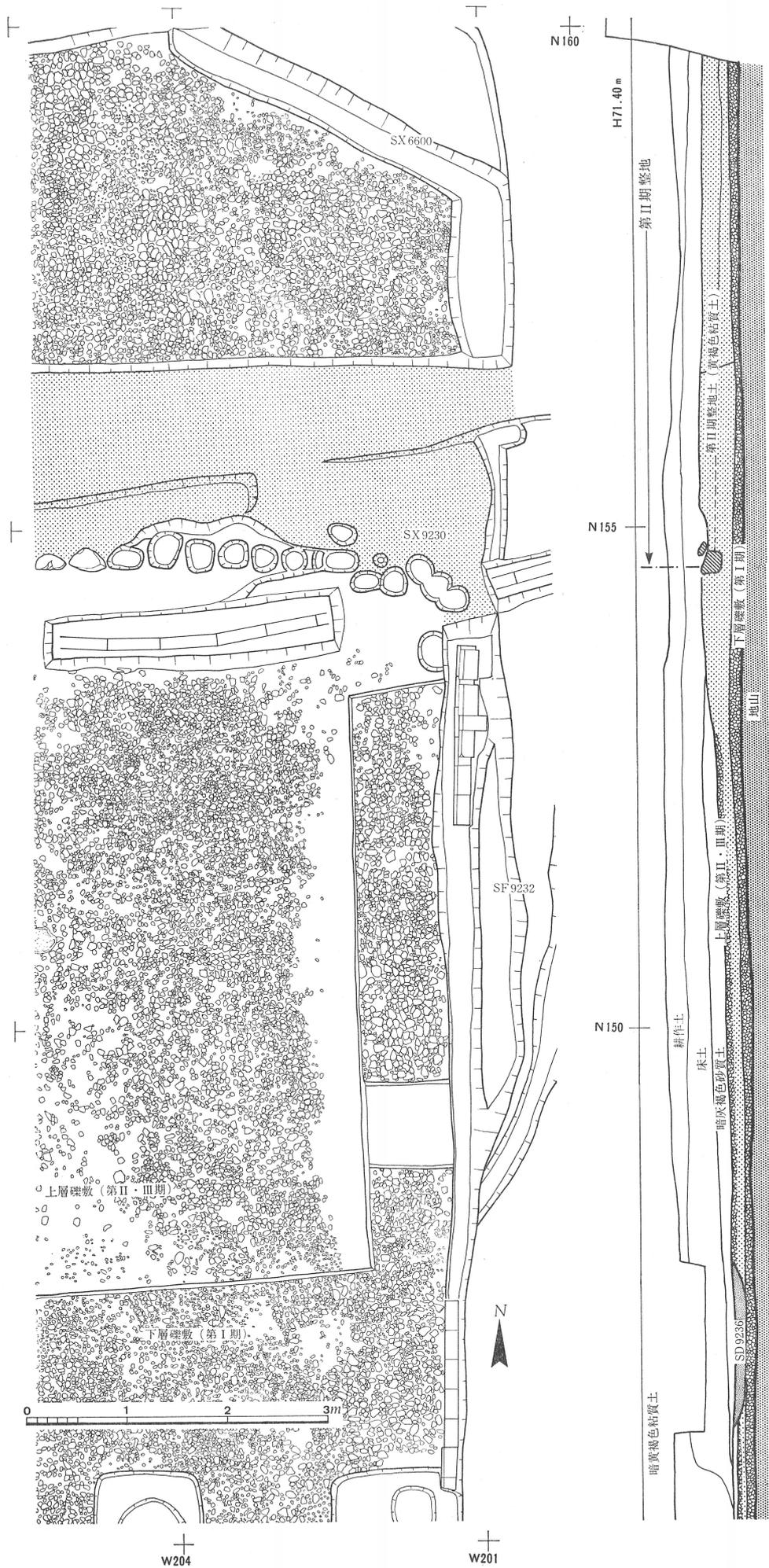


fig. 34 SX6600 と SX9230 の重複

### 第三章 遺 跡

**塼の積み方** 塼積擁壁は第Ⅱ期の拡張時にとりはずされ、大半のところでは下部の1・2段をのこすか、抜取痕跡しかとどめていない。6ABP—D地区では、3mにわたって7段の塼積みをとどめていたが、それがもっとものこりのよい部分であった。塼積みは長方形塼の長側面を外に向けて平積みにしたもので、工字形の目地を呈している。地山の壁体にもたせかけるようにして積んでいるが、最下の平坦面と裏側に粘土を薄くつめるほか、塼と塼の間に粘土などをはさむことはない。折曲点における積み方は、塼が抜き取られているか一段しかのこっていないので、不明である。ただし、南進する6ABQ—A地区では短側面を外に向ける塼が1個あった。長さをそろえるためであろうか。6ABP—D地区では、塼積み前方に5cmの間隔をおいて幅8cm内外の溝SD6602があり、その長さは約21mに達している。これを塼の据付痕跡とするならば、擁壁の基部に地覆状の塼積みをくわえたことが想定される。

**磔敷** 塼積擁壁の南側は厚さ5～10cmの磔敷面となり、その上面に崩れた塼片や若干の土器類、瓦片などが散布していた。壇の高さはのこりのよいところで1.85mをとどめるが、本来は2mをこえるものとおもわれる。6ABP—B地区における第3の折曲点以南は次第に低くなって、壇下の広場に通じる。この東面する塼積壁と築地回廊の間が、一種の斜道SF9232Aとなる(fig. 34)。その東限を仮りに東面築地回廊SC5500の西雨落溝SD3790にあてるとするならば、幅員は16m程度であり、かりに壇の高さを標高72.4mとして、SF9232Aの南側磔敷の標高70.6mを差引くと、比高が1.8mとなるゆるやかな斜道を想定できる。

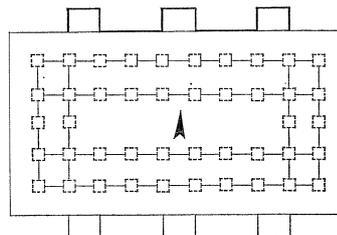
#### SX6601 (PLAN 29, PL. 63・64, fig. 35) 6ABP—D地区

**掘立柱階段** 塼積擁壁SX6600直下のバラス敷を除いて検出した東西2間(5.5m)、南北1間(1.69m)の掘立柱階段である。擁壁に接する北側の柱穴は、方80cm内外の掘形に径約40cmの柱痕跡をとどめる。掘形の北辺は塼積擁壁の下にあり、塼を積上げる前に柱が立ったことをうかがわせる。南の柱掘形は長方形(0.6×1.6m)を呈し、その北辺に径26cm内外の柱痕跡をのこし、中央柱穴の左右におのおの小柱穴をとまなう。中央の柱位置は中軸線にのっており、階段の遺構とみられる。ただし、塼積擁壁に木製階段がそぐわないことや、磔敷面から柱痕跡がたどれなかったことからすると、建設時における仮設的な木製階段であった可能性もある。なお、発掘時においてこの部分の埋土が左右よりも固かったことからすると、木階の廃絶後に土を心とする階段を設けたこともかんがえられる。しかし、それを積極的に証明するほどの遺構ではない。



#### SB7200 (PLAN 3・31・32, PL. 68, fig. 36) 6ABP—F・G地区

**大型建物** 基壇石の抜取痕跡によって推定される大型の建物である。北面の地覆石抜取痕跡SD7165は、6ABP—G地区の南寄りにある幅1.1m、深さ10cm内外の浅い東西溝で、中央とその左右の3箇所以北に向ってコ字形に突出している。溝の深さは場所によって若干ことなるが、底はおおむね平坦である。この溝の南寄り部分の堆積土が暗黄色粘土に微量の瓦片や小磔あるいは凝灰岩片を含んでいるのに対して、北半部は黄褐色粘質土で雑物をふくまない。両者の違いは必ずしもはっきりしないが、後者が前者に掘込んでいることはあきらかである。このことから、後者が凝灰岩の基壇地覆石を掘えつけたときの遺構であり、前者が地覆石を抜取っ



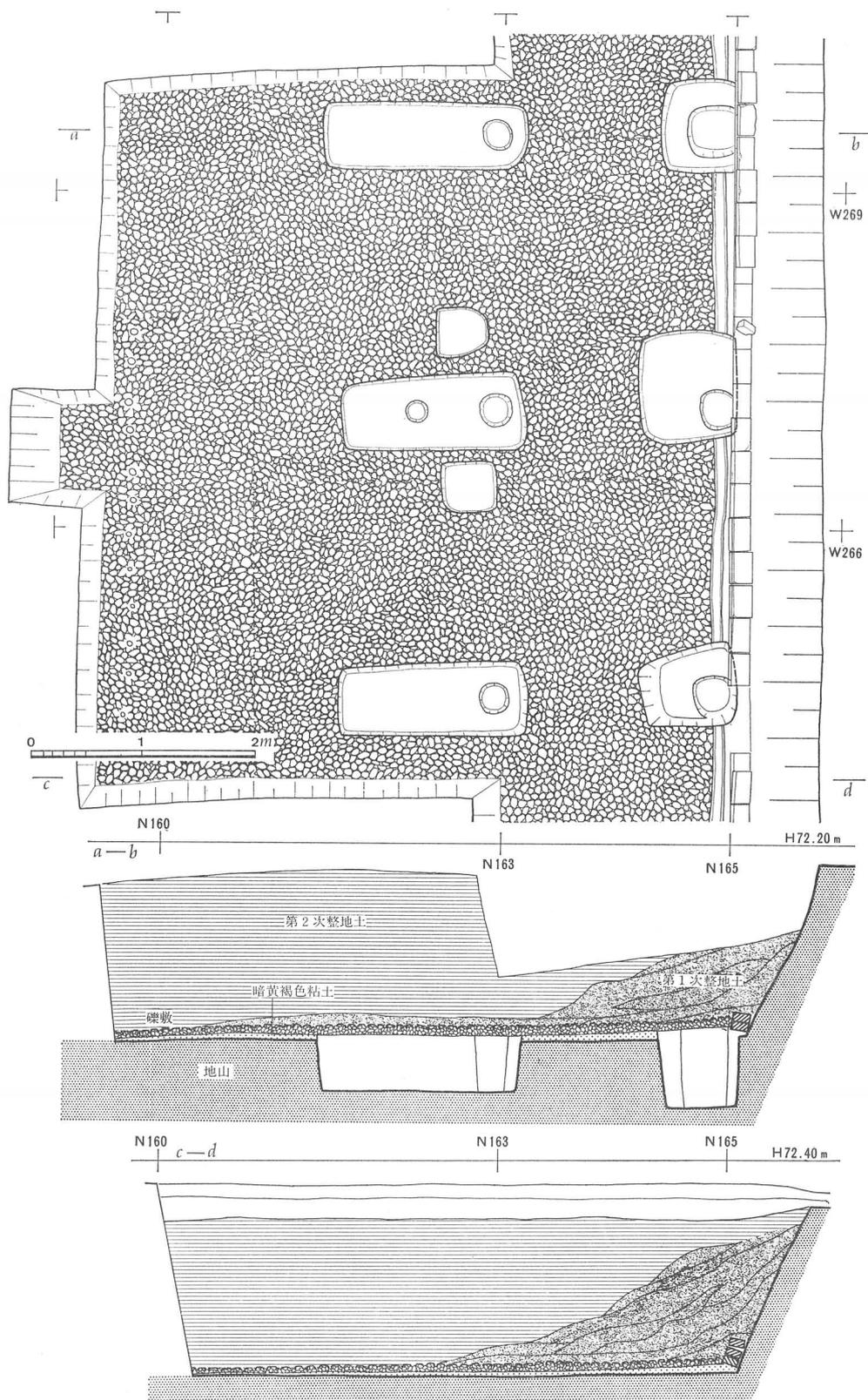


fig. 35 SX6600 と SX6601 の埋立状況

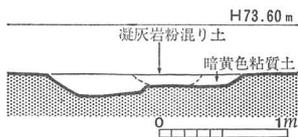


fig. 36 SD7165の断面

たときの痕跡であることがわかる (fig. 36)。突出部の幅約 5 m, 出約 3.5 m で, 中央と左右の心々距離は約 15 m となり, 突出部は階段の痕跡とみられる。なお, 中央階段の心は中軸線 (W267.0) と一致している。

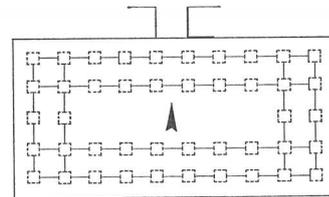
北面の地覆石抜取痕跡から 28.5 m に南面地覆石の据付痕跡 **SD7167** がある (6ABD-F 地区)。幅 1.2 m の東西溝だが, のこりがわるく中央から西へ 7 m 程度しか残存しない。北面の SD7165 にくらべて浅く, かつ第 II・III 期の建物 SB7151, SB7178 の大型柱穴が掘込んでいるため詳細が不明である。この溝の南側にある幅 11 m, 出 3.5 m のコ字形溝は, 南面の階段痕跡であろう。

わずかにのこった痕跡から, 東西長 35 m 以上, 南北幅 29.5 m の基壇には, 階段幅から類推される桁行柱間寸法 5 m (17 尺) の建物がたっていたことになる。わずかにえられた数値は恭仁宮大極殿とよく類似している<sup>1)</sup>。後述するように S B7200 を恭仁宮へ移建した平城宮大極殿にあててみるが, 建物の平面プランは恭仁大極殿よりも一回り大きくなる。その場合, 建物規模はつぎのように想定できる。桁行 9 間 (45.1 m), 梁間 4 間 (20.7 m) の四面廂付建物で, 柱間寸法は身舎の桁行 17 尺 (5.0 m) 梁間 18 尺 (5.3 m) とし, 廂の出は 17 尺 (5.0 m), 基壇の大きさは 53.1 m (180 尺) × 29.5 m (100 尺) に復元できる。この場合の単位尺は 29.5 cm である。

**SB8120** (PLAN 2・34, PL. 91) 6ABO-E・J 地区

『平城宮報告 II・IV』で報告したところであるが, 6ABO-J

地区には北面築地回廊南雨落溝 SD130 と L 字形につながる石敷溝 **SD244** とその下層の東西溝 **SD242** がある。SD244 は回廊の雨落溝の場合と同じく, 大粒の礫を敷き見切りの石をならべ外方が小粒の礫敷面となる。石敷溝の西縁は中軸線の東

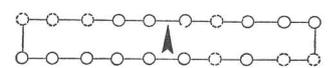


2.2 m で SD130 の南縁から 5 m 南へのびて, 東へ折れる。SD244 の西側の対象位置は土壌 SK 8118 によって破壊されているが, 同様の施設をかんがえることは可能である。このことから SD130 にとりつく SD244 と SD242 は回廊北門に至る軒廊基壇 (幅 4.4 m) の地覆石据付痕跡と雨落溝に推定できる。

東へ折れた SD244 は約 3 m のびたところで土壌 SK8079 によって破壊されている。しかし, E 地区の南辺, 中軸線の東 25 m のところに南北石敷溝 **SD8103** がある。SD8103 は長さ 1.4 m しか検出していないが, SD244 と同様の溝であり東側に礫敷面がひろがるので, SD244 と SD8103 を雨落溝とする建物基壇が想定できる。仮りにこの建物が前方の SB7200 と桁行の柱間寸法をえる揃桁行 9 間 (45.1 m) とするならば, 基壇の出は 2.3 m (8 尺) ほどとなる。一方, 梁間については手掛りを欠くが, SB7200 と同じく 4 間 (20.7 m) とし, 基壇の出を 8 尺 (2.3 m) に想定しておく。この場合, 基壇の大きさは 49.7 m × 25 m となる。

**SB6680** (PLAN 29, PL. 52) 6ABP-D 地区

SB7200 の南側にある 9 間 (45.3 m) × 1 間 (6 m) の東西棟建物。



桁行の柱間寸法は東から 2・5・8 間目を 5.5 m (18 尺) とし, 他を 4.8 m (16 尺) とする。柱の掘形は方 80 cm 内外で, 第 II 期建物 SD6611 の柱掘形によって破

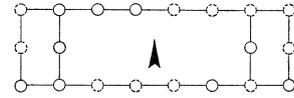
1) 中谷雅治ほか「恭仁京跡昭和 52 年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委

員会, 1978, p. 24

壊されている。中央間とその2間おいた両脇間の柱間寸法はSB7200の面北階段幅と同じであり、位置もそろう、ある時期のSB7200の南面には3道の階段があったことが類推できる。この建物は柱掘形が小さいので仮設的な建物であろう。

**SB6605** (PLAN 29, PL. 52) 6ABP-D地区

SB6680と重複する7間(21m)×2間(6m)の東西棟建物で、東西に廂がつく。第Ⅱ期建物SB6611および第Ⅲ期建物SB6620の柱掘形によって著しく破壊されており、柱掘形の片鱗しかと

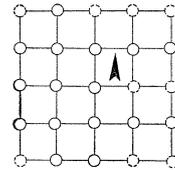


仮設建物

どめない。柱間寸法は必ずしも正確でないが、桁行・梁間とも3m(10尺)等間である。柱の掘形は方1.2mでSB7200の南面階段位置に重複しているので、第Ⅰ期のなかでも新しい時期に位置づけられよう。

**SB6636** (PLAN 29, PL. 52) 6ABP-D地区

SB7200の東南に位置する4間(11.8m)×4間(11.8m)の総柱遺構。柱掘形は60×80cm内外と若干小さい。この場合、建物の上部構造については二通りのかんがえ方がある。その1はたとえば舞台のような仮設物に想定する。その2は足場とかんがえて3間(9m)×3間(9m)、10尺(3m)等間の礎石建物を想定する。いまのところいずれともきめがたい。第Ⅱ期の建物SB6611と第Ⅲ期の建物SB6620の柱掘形が掘込まれている。



総柱遺構

**SB6643** (PLAN 29, PL. 52) 6ABP-D地区

SB7200の西南に位置する4間(11.8m)×4間(11.8m)の総柱遺構。北西部は未調査区にのびる。柱穴の大きさはSB6636と同じであり、同様の3間(9m)×3間(9m)の総柱遺構が想定できる。SB6636とは中軸線をはさんで対称位置にあり、両建物はSB7200の殿前に建つ舞台ないしは亭の類であろう。

**SB7164** (PLAN 32, PL. 67) 6ABP-G地区

SB7200の西階段の北側にある小建物。2間(4.9m)×2間(5.9m)であり、柱間寸法は南北が2.95m等間であるのに対して、東西では3.4m+1.5mと不揃いである。柱穴も小さく、建設時の仮設建物であろうか。第Ⅱ期の建物SB7152の柱掘形が掘込まれている。



仮設建物

## ii 第Ⅱ期の遺構

この時期の建物群は、中軸線W297の上に軸線をそろえる中央建物群、その東方にあって東西棟建物を主とする東第1建物群、さらに東方にあって南北建物を主とする東第2建物群の3列に大別することができる。

**SX9230** (PLAN 17, PL. 43・44, fig. 34・35) 6ABQ-A地区

殿舎地区の壇を南へ拡張したときの石積擁壁である。この部分は近世の地下げが著しく、かつ現在構内道路敷として利用しているので、約9mの範囲しか調査していない。

石積擁壁

拡張部分は第Ⅰ期の礎敷面上に厚さ15cm内外の黄褐色粘質土をしき、第Ⅰ期の磚積擁壁から18.3m南(N144.5)のところに東西方向に人頭大の安山岩をすえつける(fig. 34)。安山岩は最下部1段のうち4個しか残存せず、他は安山岩の抜取痕跡によってその存在をしる。東端入

埽積擁壁の埋立

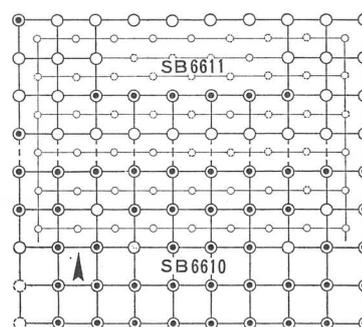
隅部分はわずかに南に曲って第I期の埽積擁壁にとりつく。6ABP-B・D地区における埽積擁壁SX6600廃棄後の埋立て状況をみると、壁面に近いところでは礫敷面の上に瓦埽や土器片を混える暗褐色粘質土があり、小礫混りの土が瓦層になって南へ低く堆積する。まさに上方から土砂を崩しおとした状況である。この埋土が壇の上端ないしはそれに近いところに達すると、その上部に粘りのない黄褐色の埋土が一樣にひろがる (fig. 35)。埋土には若干の礫をふくむだけで、遺物をふくまず、層状にわかれぬ。一気に埋立てたのである。

6ABQ-C地区の北辺に凝灰岩片がかたまて散布するところにSX7138があり、擁壁に凝灰岩を用いた部分もあったとおもわれる。石積擁壁の高さは不明だが、後方の遺構状況からすれば1.8~2mの高さを想定しなければならない。

南の広場から壇にのぼる斜道SF9232Bは第I期の規模を継承するが、すでに路肩の埽はぬかれており、土坡のような状況であったろう。

SB6610 (PLAN 29, PL. 50~54・65) 6ABP-D地区

中央建物群の前面に位置する9間(26.85m)×4間(11.95m)で総柱の東西棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに10尺だが、基準尺は桁行で29.99cm、梁間で29.83cmとなる。方1.5m内外、深さ1m内外の柱掘形に径50cm程度の柱痕跡をとどめる。なお、南側柱列と石積擁壁SX9230との距離は13.4m(45尺)となる。



SB6611 (PLAN 29, PL. 50~54・65, fig. 37) 6ABP-D地区

中央建物群の南から2棟目にある9間(26.85m)×3間(8.95m)で3面に廂がつく東西棟建物。南廂は1間だが、東西の廂は2間である。柱間寸法と柱穴の状況はSB6610と同じで、柱筋も一致し、2棟の建物は2.98m(10尺)しか離れていない。身舎の中央柱筋に小柱穴(掘形70×50cm, 柱痕跡径30cm)がならび、床のあったことがわかる。この建物の直上に第III期の建物SB6620がかさなり、多くの柱穴が破壊されている (fig. 37)。

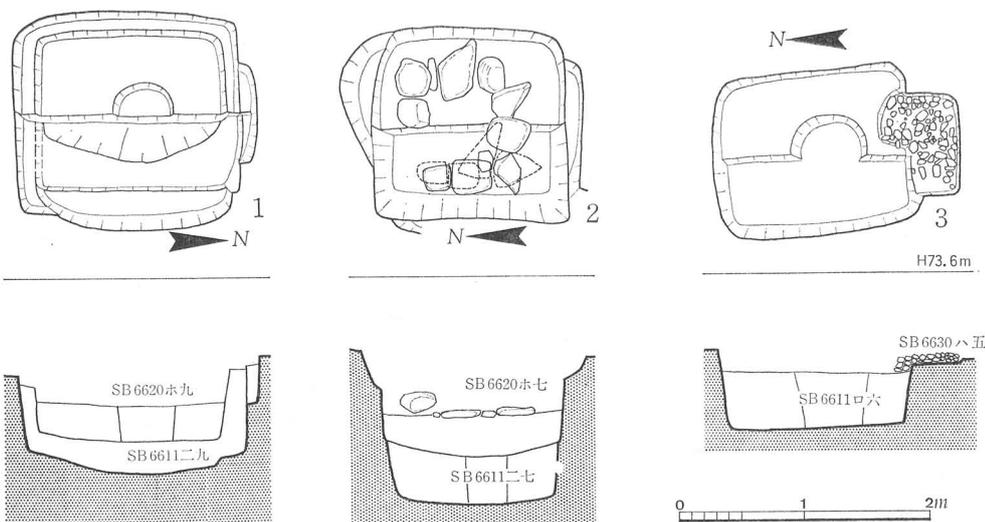
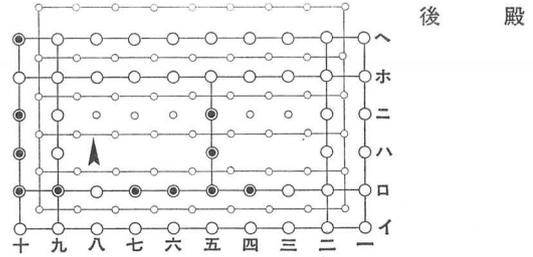


fig. 37 SB6611とSB6620・SB6630柱掘形の重複

SB6610とSB6611の柱間をぬって8間(23.8m)×5間(15m)の総柱遺構SS6642があり、足場場に想定できる。柱間寸法はおおむね3m(10尺)内外だが不揃いである。方55cm、深さ20cm内外の柱掘形に径25cm程度の柱痕跡をとどめるものもある。SB6610の南3間分については著しく削平されており、柱穴が消失したものとみるならば、当然SB6610とSB6611は一連の建物として建設されたことになる。

**SB7150** (PLAN 31, PL. 65・66) 6ABP-F地区

中央建物群の南から3棟目に位置する。9間(26.8m)×5間(15m)で、梁間3間の身舎の4面に廂がつく東西棟建物。柱間寸法は10尺(桁行2.98m, 梁間3.0m)の等間である。柱掘形や柱痕跡の状況はSB6610と同じ。身舎のハ五、ニ五に梁間を3間にわける柱穴がある。この2個の柱穴掘形は1.5×0.6mの長方形を呈し、柱痕跡も径40cmなので身舎の間仕切柱であろう。また、身舎のニ通に7間分の小柱穴があるが、これは床束の東柱穴とおもわれる。ただしその対称位置の南妻柱筋には小柱穴を検出していない。北側柱の外側2.5mの位置に柱筋をそろえる柱列がある。縁東ないしは階段の遺構であろう。



SS7185はSB7150の足場である。8間(24.7m)×5間(16.05m)分の総柱遺構で、方40cm内外の小柱穴からなる。南に接するSB6611とは29.6m(10尺)しか離れておらず、足場を別にするとはいえ、一連の建物であったことがうかがえる。この建物の南側柱列には第Ⅲ期の建物SB6620、東西の入側柱列にはSB7173とSB7172の柱掘形がそれぞれ掘込まれている。

**SB7151A・B** (PLAN 32, PL. 67・69, fig. 38) 6ABP-G地区

SB7151Aは中央建物群の南から4棟目の建物である。SB7150の北側5.92m(20尺)をへだてて位置する9間(26.9m)×2間(5.9m)の東西棟建物。柱間寸法は10尺(桁行2.99m, 梁間2.95m)等間である。柱掘形(方1.5m内外、深さ1.2m)には、径50cm程度の柱抜取痕跡がある。南側柱列の柱穴に第Ⅲ期の

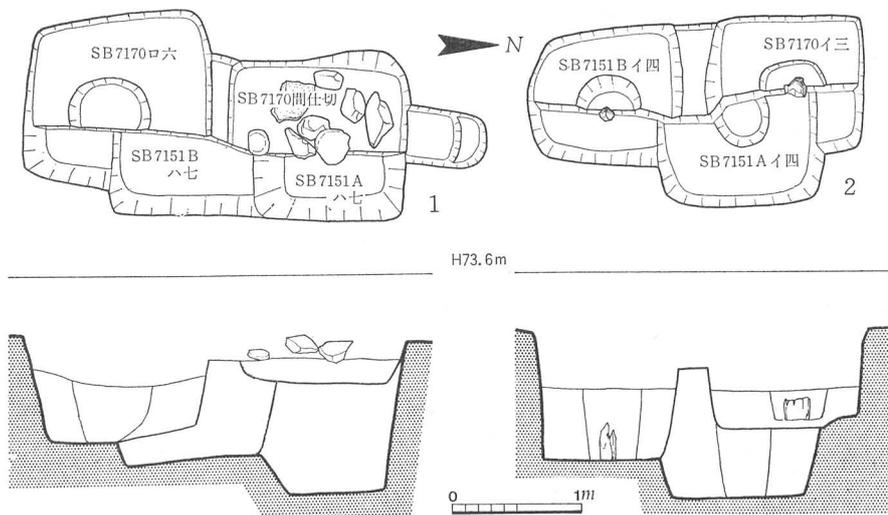
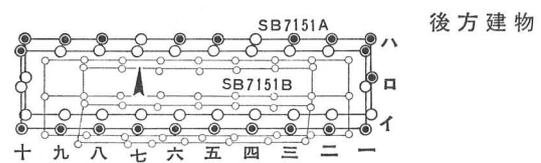


fig. 38 SB7151A・B柱掘形の重複

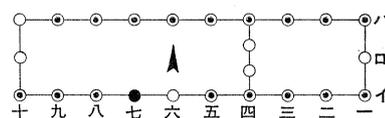
### 第三章 遺 跡

**古い足場** 建物 SB7170 の柱穴が掘込まれている。**SS7161**は SB7151A の足場で、身舎から南側柱列をはさんで 8 間 (23.8m) × 2 間 (5.8m) の小柱穴列 (方40cm) を配する。

SB7151B は SB7151A を約 60cm 南へ寄せて建替えたもの。9 間 (26.9m) × 2 間 (5.9m) で、柱間寸法は桁行・梁間とも 2.97m (10尺) 等間。柱の掘形は方 1.5m で、柱根をのこす柱穴が 5 個あり、うちのこりのよい北側柱東端の柱根の径は 30cm である。**SS7120** は SB7151B の足場で、多少不揃いだが、身舎から南側柱列をはさんで 6 間 (20.85m) × 2 間 (5.9m) の小柱穴列 (方 30cm) を配している。SB7151A・B の柱穴に第 III 期の建物 SB7170 の柱穴が掘込まれている。

**SB7152** (PLAN 32, PL. 66~69) 6ABP-G 地区

**後方建物** 中央建物群の南から 5 棟目の建物である。SB7151A の北側 5.9m (20尺) をへだてて位置する 9 間 (26.7m) × 2 間 (5.94m) の東西棟建物。柱間寸法は 10尺 (2.97m) 等間で



ある。柱掘形は方 1.4m、深さ 1.1~1.3m を呈し、柱穴イ七に径 44cm の柱根をのこす。桁行の四通の柱筋に小柱穴 (方 50cm) 2 個をもうけ、梁間を 1.47m (5尺)、3m (10尺)、1.47m (5尺) に分割している。間仕切りの柱であろう。ただし、身舎の柱筋とそろっていないので、改修時のものかもしれない。**SS7227** は SB7152 の南側 2.5m のところにある足場。8 間 (23.9m) の小柱穴列 (方 35cm) である。

**SD6608** (PLAN 25~27, PL. 54・65・68・69・70) 6ABP-D・F・G 地区

**石敷溝** 中央建物群の東 2.8m をへだてて流れる石敷の南北溝 (全長 66.5m)。北方の SB7152 の東側では破壊されて痕跡をとどめないが、南端は東西溝 SD6609 につながって東へ流れる。幅 1.1m 程度の掘形に、幅 45cm 内外に敷詰めた安山岩の石敷が部分的にのこるだけで、側石は撤去されている。石敷には 30×20cm 程度の扁平な安山岩を主に用い、部分的に凝灰岩や埴片を敷くところもある。底石の高さは北端 (標高 73.18m) にくらべて南端 (標高 72.65m) のほうが低く、北から南へ流れていたことがわかる。

G 地区では第 I 期の基壇地覆石据付痕跡 SD7165 を掘込んでおり、17.3m にわたって溝の幅が 1.8m に広がっている。F 地区では第 II 期の建物 SB6650 の柱掘形を掘込んでおり、建物の建築後にこの溝が設けられたことがわかる。また、第 III 期の足場が掘込まれており、第 III 期には下らない。D 地区では第 I 期の足場 SS6636 がこの溝底から検出された。

**SD7163・SD6618** (PLAN 27・23・32, PL. 58・69・83) 6ABP-A・G 地区

**東西素掘溝** SD7163 は SB7152 の北 1.9m をへだてて流れる素掘りの東西溝。幅 30~60cm、深さ 4cm。東方は削平されて消失するが、約 25m 東で検出している東西溝 SD6618 につながるとみてよい。西端は発掘区西辺で南に折れ、南北溝 SD7162 につながる。SD6618 の東端は同時の建物 SB8215 の北東で南に折れて SD8211 につながる。なお、南北溝 SD6608 の北端がこの溝と T 字形に交る可能性が大きい。直上に第 III 期の東西塀 SA6626 の柱穴が掘込まれている。

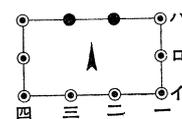
**SD7162** (PLAN 32, PL. 69) 6ABP-G 地区

**南北素掘溝** SB7152 の西妻柱列の西 1.8m をへだてて流れる素掘りの南北溝。幅 50cm、深さ 7cm、長さ 10.1m。この溝と東西溝 SD7163 とは中央建物群の北辺を画する役割りをはたすとともに、SB7152 の雨落溝をかねている。SD7163 の西端よりも SD7162 の南端のほうが 18cm 深く、かつ SD7163 は発掘区外の西方に流路をかかえるようであるから、西南方に排水したことがわかる。

## 2 遺 構

### SB6640 (PLAN 25, PL. 54) 6ABP-B・D地区

中央建物群と東第1建物群との間に介在する3間(10.8m)×2間(6m)の東西棟建物。柱間寸法は桁行が3.6m(12尺)等間。梁間は3m(10尺)等間。柱の掘形は方1.2m、深さ1m内外。北側柱の2柱穴に柱根があり、のこりのよいもので径33cmである。南側柱列の柱穴は他よりも50cmほど深く、凝灰岩や磚などを礎板に用いている。このあたりは埴積擁壁SX6600の埋立地で地盤が弱かったからだろう。



東 渡り 廊

北側柱列中央柱間に溝状の掘形(幅92cm、深さ30cm内外)がある。左右の柱掘形よりもさきに掘られているが、柱筋に一致しているのでSB6640の付属施設に想定した。この建物は西側のSB6610の中央間2間および東のSB6660A・Bの身舎と柱筋をそろえており、さらに両建物とそれぞれ10尺しかへだたっていないことから、2棟の建物をつなぐ廊のような役割りををはたすものとおもわれる。イ二柱掘形に第Ⅲ期の建物SB6622の西廂の柱掘形が掘込まれている。

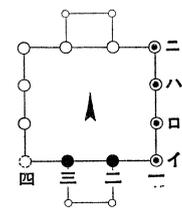
### SD6609 (PLAN 25, PL. 54) 6ABP-B・D地区

SB6640の北2.1mを流れる石敷の東西溝。西は南北溝SD6608につながり、交叉点から東2.5mまでは扁平な安山岩を敷いた底石をとどめるが、それ以东は敷石の抜取痕跡(幅70cm)によって、長さ13m程度の流路があったことがわかる。東端は漸次消失するが、SB6640とSB6660との間を南下するのだろう。

東 西 溝

### SB6650 (PLAN 26, PL. 57・65) 6ABP-A・F地区

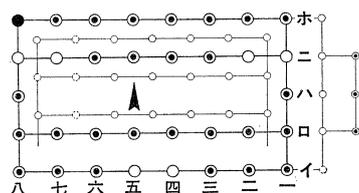
中央建物群と東第1建物群との間に介在する3間(10.8m)×3間(9m)の建物。柱間寸法は桁行3.6m(12尺)等間、梁間3m(10尺)等間である。柱の掘形は方1.4m、深さ0.75~1.26mで、柱抜取痕跡があり、イ二柱穴には抜きえなかった径36cmの柱根がある。南北中央間の外側(南3.3m、北2.4m)に一対の小柱穴(70×50cm)があり、木の階段がつき床が張られていたことがわかる。さらに、南階段柱の前1.1mのところ3個の凝灰岩切石(方30cm)が並び、基壇もしくは水路の存在を予想できる。第Ⅲ期の建物SB7173の柱掘形がニ二の柱穴を掘込んでいる。この建物は梁間の柱筋がSB6640とあい、かつ西側のSB7150の身舎および東側のSB6663の身舎とそれぞれ10尺をへだたてて柱筋をそろえており、左右の建物をつなぐ役割りをもつものとおもわれる。



東 渡り 廊

### SB6660A・B (PLAN 25, PL. 55・56, fig.40) 6ABP-B地区

SB6660A・Bは東第1建物群の南端に位置する7間(21m)×4間(12m)で、南北2面に廂がつく東西棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに10尺(3m)等間である。柱の掘形は方1.5~1.7m、深さ1.7~0.92mで、柱根あるいは礎盤に用いた凝灰岩や木材をとどめるものがあり、のこりのよい柱根は径30cmであった。



東 脇 殿

東妻柱列の東2.4m(8尺)をへだたてて小柱穴列(方50cm)がある。妻柱筋と柱をそろえているので縁東の痕跡とみられる。縁東の東2.65mのところ身舎と柱筋をそろえた2間分の小柱穴(掘形1.15×0.6m)があり、木階段があったことがわかる。階段の柱掘形の深さは35cmだが、柱位置だけを15cmほどふかくしている。第Ⅲ期の建物SB6622の柱掘形がイ、ロ、ニ列の柱掘形

縁東と階段

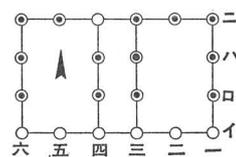
第三章 遺 跡

足 場 を掘込んでいる。**SS6615A**はSB6660Aにともなう足場で、SB6660Aの身舎から北廂にかけて、6間(22.4m)×2間(6.2m)の小柱穴列(掘形は方35cm)がある。南側はすでに削平されたものとみられる。

増 築 SB6660BはSB6660Aの北廂にもう1間(3m)の孫廂をつけたしたときの建物。柱の掘形は方1m,深さ70cm。へ四・へ五・へ六柱穴の北1.5mのところに2間分の小柱穴(掘形は方30cm)があり、縁東の柱穴にかんがえられる。**SS6615B**はSB6660Bの孫廂にともなう足場で、5間(15m)分の小柱穴(掘形は方35cm)が廂の北寄りにならぶ。

**SB6655** (PLAN 28, PL. 55・56, fig. 39) 6ABP-B地区

東 脇 殿 東第1建物群の南から2棟目の建物。5間(15.0m)×3間(9.0m)の東西棟建物で、四・五通の梁間をそれぞれ3間にわけている。柱間寸法は桁行・梁間とも10尺(3m)等間である。柱の掘形は方1.3m,深さ0.7~1.2m



で、径50cmの柱痕跡がある。南のSB6660Aと北のSB6663とは柱筋をそろえ、それぞれ10尺の(3.0m)間隔をおく。この建物は3間×2間の南北棟建物2棟を並置したものとみられるが、東第1建物群の他の建物がすべて東西棟建物であることからすれば、身舎内の柱穴は一種の間仕切柱になる。南側柱列の柱穴がSB6660Bの孫廂柱穴によって掘込まれていることから、SB6660Bの増築時にこの建物は撤去されていたことになる。また同様に、第II期の改築につくられた南北塀SA6657の柱掘形へ四・へ二の柱穴が掘込んでいる。

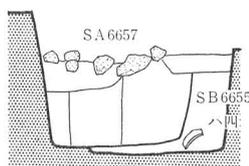
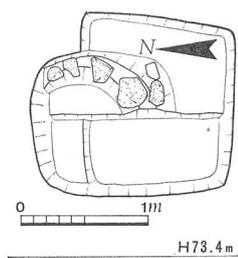


fig. 39 SB6655柱掘形の重複 柱穴が掘込んでいる。

**SA8304** (PLAN 28, PL. 56) 6ABP-B地区

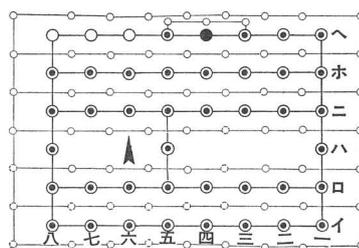
SB6655の東妻柱列の東2.7mに位置する3間(8m)の小柱穴。柱間は2.4~2.7m(8~9尺)と一定せず、SB6655にともなう一時的な遮蔽物である。

**SA6657** (PLAN 28, PL. 56, fig. 39) 6ABP-B地区

目 隠 塀 SB6655の四通の柱掘形に掘込む2間(4m)の南北塀。柱の掘形は方90cm,深さ75cm,掘形の埋土に凝灰岩や瓦片を多くふくむ。SB6655の廃絶後、南のSB6660Bと北のSB6663との間につくった目隠塀である。

**SB6663** (PLAN 26, PL. 57) 6ABP-A地区

東 脇 殿 東第1建物群の南から3棟目の建物である。7間(20.9m)×5間(15.3m)で、南北2面に廂がつく東西棟建物。柱間寸法は10尺(桁行2.99m,梁間3.06m)等間である。柱の掘形は方1.6m,深さ1m内外,径40cmの柱根をのこすものもある。この建物は一見すると身舎7間×2間の北側に廂・孫廂をつけたように見える。し



かし、この場合の廂柱列にあたる柱掘形は他にくらべて小さく、かつ浅く(方1.2m,深さ70cm),また後述の身舎梁間の足場痕跡が10尺方眼になることからすれば、7間×3間の身舎を南北に画する間仕切りの柱列にかんがえたほうがよい。また、五通の梁間中央にも間仕切の柱穴が

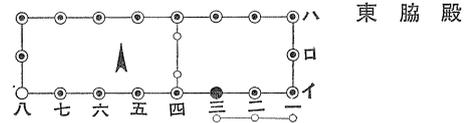
2 遺 構

ある。へ三・へ四・へ五の柱穴の外側2.1mに小柱穴（60×40cm）があり、ここに階段がもうけられたことがうかがわれる。なおこの小柱穴には3回の掘りかえがみとめられる。

**SS6661**はSB6663にともなう足場で、8間（27.3m）×6間（20.8m）の小柱穴（方50cm、深さ20cm）の総柱遺構である。柱間寸法はかならずしも厳密でないが、桁行では両端の2間を4.5m（15尺）とし、そのほかを3m（10尺）にしている。梁間では側柱列から身舎の心にむかって3.9m（13尺）、3.6m（12尺）、3m（10尺）と次第に柱間をせまくしている。

**SB6666** (PLAN 26・27, PL. 58) 6ABP-A地区

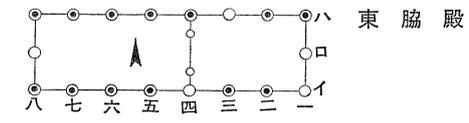
東第1建物群の南から4棟目の建物で、南のSB6663とは5.85m（20尺）の間隔をおいて柱筋をそろえ、西方のSB7151Aとも17.8m（60尺）をおいて柱筋をそろえている。7間（20.8m）



×2間（5.9m）の東西棟建物。柱間寸法は10尺（桁行2.97m、梁間2.95m）等間である。柱の掘形は方1.4m、深さ1.1m内外で、径30cmの柱根をとどめるものもある。柱抜取痕跡には人頭大の安山岩をつめるところがある。四通の梁間に2小柱穴（方70cm）を配し、梁間を1.5m（5尺）、3m（10尺）、1.5m（5尺）に仕切る。棟通りに柱間寸法が不ぞろいの小柱穴があり、床東とおもわれる。南側柱筋一〜三通の外側2mのところを2間分の小柱穴がある。縁ないしは階段の痕跡である。

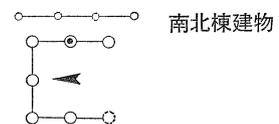
**SB6669** (PLAN 27, PL. 60) 6ABP-A地区

東第1建物群の南から5棟目の建物で、南のSB6666とは6m（20尺）をへだてて柱筋をそろえ、西方のSB7152とも柱筋があう7間（20.8m）×2間（6.0m）の東西棟建物。柱間寸法は10尺（桁行2.97m、梁間3.0m）等間である。柱の掘形は方1.4m、深さ1.1mで、柱抜取痕跡には人頭大の安山岩をいれたものがある。四通の梁間に2小柱穴（方75cm）を配し、梁間を1.5m（5尺）、3.1m（10尺）、1.5m（5尺）に仕切る。



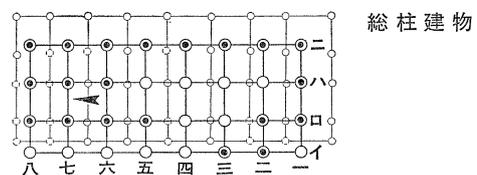
**SB8302** (PLAN 17, PL. 72) 6ABP-B地区

東第2建物群の南端に位置する建物で、西のSB6660とは15.2m（50尺）をへだてて柱筋をそろえている。南北2間（6m）以上×東西2間（6m）の南北棟建物。柱間寸法は10尺（3m）等間である。柱の掘形は方1m、深さ57cmで径30cm程度の柱痕跡がある。この建物の南方は著しく削平され柱掘形をのこしていないが、桁行を5間に想定すると石積擁壁SX9230との間隔（4.5m）が短く東面中央門SB9223の進路を塞ぐことになるので3間に復原するのが無難である。東側柱列の東2mのところを足場らしい柱掘形が3間分（9.6m）ある**SS8312**。重複関係はないが、西方のSB6660と北方のSB8245と柱筋をそろえているので第Ⅱ期とした。



**SB8245** (PLAN 21, PL. 73・83) 6ABP-A・B地区

東第2建物群の南から2棟目の建物。南方のSB8302とは11.95m（40尺）の間隔をおく。7間（20.86m）×3間（9.0m）で、総柱の南北棟建物。柱間寸法は10尺（桁行2.98m、梁間3m）等間である。柱の掘形は外側の柱列が概して大きく、一般には方1.2m、深さ0.57～1mである。柱痕跡はかならずしも明瞭ではないが、径38cmのものが

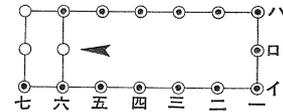


第三章 遺 跡

足 場 岩をつめるものもある。SS8358はSB8245の足場である。8間(25m)×5間(13.7m)の小柱列(掘形は方40cm,深さ35cm)で、柱間寸法は一定しない。SB8245の東側柱列では外側2.4mのところ配し、西側柱列では内側約90cmのところにならべる。一方、内側の梁間2列分の柱列はほぼSB8245の柱筋にそろえている。

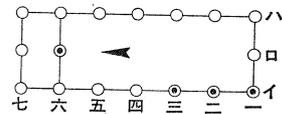
**SB8210** (PLAN 23, PL. 82・83) 6ABP-A地区

南北棟建物 東第2建物群の南から3棟目の建物のうち西側に位置する建物。西のSB6669とは6m(20尺)、南のSB8245とは約9m(30尺)の間隔をおく。6間(17.9m)×2間(5.9m)の南北棟建物。柱間寸法は10尺(桁行2.98m, 梁間2.95m)等間である。柱の掘形は方1.2m, 深さ70cm内外で、径40cm程度の柱痕跡をとどめるものもある。六通の梁間中央に柱掘形があり、間仕切りの柱ないしは北廂の北妻中央の柱掘形である。東のSB8215および西と南の第II期建物と柱筋をそろえているので、重複関係はないが第II期とした。



**SB8215** (PLAN 23, PL. 82・83) 6ABP-A地区

南北棟建物 東第2建物群の南から3棟目の建物のうち東側に位置するもの。西のSB8210とは6m(20尺)の間隔をおく。6間(17.9m)×2間(5.9m)の南北棟建物。平面形、柱間寸法、柱穴の状況などはSB8210と同じである。北妻柱列のイ七・ロ七の柱穴に第三期の建物SB8218Aの柱掘形が掘込まれている。



**SD8211** (PLAN 22・23, PL. 82・83) 6ABP-A地区

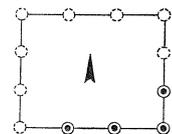
建物を囲む溝 東第1・2建物群の北側1.5m(5尺)に位置する素掘りの東西溝SD7163・SD6618がSB8215の北東部で南におれ、南北溝SD8211となる。SD8211はSB8215, SB8245の東1.5mを南北に流れる。溝には礫混りの赤褐色土が堆積するのみで、遺物を欠く。SB8245の四通の柱筋あたりで消失する。第三期建物SB8222, SB8224, 塀SA8217が掘込んでいるSB8215の雨落溝にもなる。

**SK8213** (PLAN 23, PL. 83) 6ABP-A地区

SB8210の北側にある土壙。長さ6.2m, 幅1.2m, 深さ20cmの浅い土壙で、人頭大の安山岩のほか瓦, 土器片が比較的多く出土した。SA8223, SB8218など第三期の柱掘形が掘込まれており、出土の遺物が奈良時代前半にさかのぼらないので、第II期にした。平城宮土器Vが出土しており、第II期の廃絶時期をしめしている。

**SB7155** (PLAN 31, PL. 51) 6ABP-F地区

西渡り廊 中央建物群と推定西第1建物群との間に介在するとおもわれる建物。SB7150と柱筋をそろえ西3.5mをへだてている。東西2間(7.2m)以上×南北1間(3m)以上の建物。柱間寸法は桁行3.6m(12尺), 梁間3m(10尺)で、柱の掘形は方1.3m内外, 径40cm程度の柱痕跡をのこす。東方のSB6650と対称位置にあることから、それと同規模の3間×3間の建物が想定できる。



**SD6645** (PLAN 29, PL. 51) 6ABP-D地区

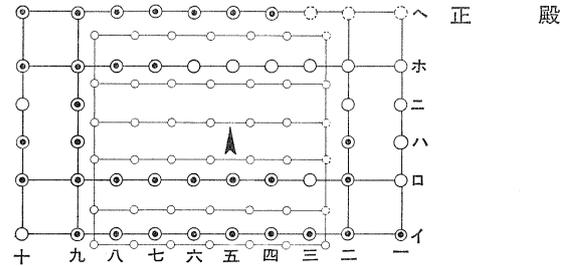
中央建物群のSB6611の西側を流れる素掘りの南北溝。東方のSD6608の対称位置にあり、中央建物群の西面を画する溝とおもわれるが、F地区では検出していない。

## iii 第Ⅲ期の遺構

第Ⅲ期にも石積擁壁SX9230および斜道SF9232Bが存続し、壇上に殿舎が群立する。建物の平面形と配置は第Ⅱ期とはまったく様相をことにし、中軸線上の正殿、後殿を中心にしてその東方に6棟の脇殿を配し、建物の間を扉や溝で区切っている。建物は原則として掘立柱であるが、礎石建物も混えている。

**SB6620** (PLAN 30, PL. 50~53) 6ABP-D・F地区

中軸線(W267)上に位置する建物でこの時期の正殿とみられる。前面の石積擁壁SX9230の後方23.8m(80尺)をへだてて建つ。9間(29.2m)×5間(17.4m)で、4面に廂がつく東西棟建物。柱間寸法は身舎で10尺(桁行2.98m, 梁間3m)等間、廂で4.2m(14尺)である。柱の掘形は方1.6m, 深さ70cmで、身舎の柱穴では柱痕跡

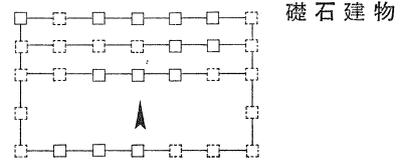


(径55cm)を扁平な安山岩の根固め石がとりまく。ただし、イー・イ十・へ十の柱穴は方1m, 深さ45cmと他の柱穴にくらべて小さくかつ浅いので、本来は隅欠きの建物であったろう。また、西廂の柱抜取痕跡には安山岩が投げこまれている。一通のハ・ニ柱穴にそろえて2間(3.8m, 13尺)の階段がとりついている (fig. 37)。

**SS6675**はSB6620の足場である。SB6620の南北廂の柱間と身舎の内側にかけて、6間(17.9m)以上×5間(16.6m)の小柱穴列(方60cm, 深さ20cm)がある。柱間寸法は必ずしも一定しないが、およそ桁行を2.98m(10尺)等間とし、梁間では身舎の2間と南端間1間を2.98m(10尺)、廂間を3.87m(13尺)とする。

**SB6630** (PLAN 30, PL. 50・53) 6ABP-D地区

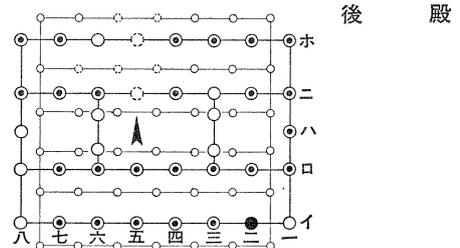
第Ⅱ期建物SB6611の柱掘形にかさなって、径80cm内外の範囲に小礫をつめた遺構がある。それらは9個しか存在しないが、礎石掘付痕跡とみなしうる。そのほかに掘付けの掘形もある。復原すれば7間(21m)×4間(10.2m)の東西棟建物で、北側に廂と孫廂がつく。



本来は南廂も存したであろうが、削平されて消失している。柱間寸法は身舎の桁行・梁間ともに3m(10尺)等間であり、廂・孫廂は2.1m(7尺)である。SB6620の後身建物とおもわれるが、規模は格段に小さい。

**SB7170** (PLAN 32, PL. 65~67) 6ABP-G地区

中軸線上に位置する建物でこの時期の後殿。SB6620とは20.45m(68尺)の間隔をおく。7間(20.98m)×4間(14.4m)で南北2面に廂がつく東西棟建物。柱間寸法は身舎の桁行・梁間ともに3m(10尺)等間であり、南北の廂は4.2m(14尺)である。柱の掘形は方1.3mだが、深さは身舎で80cm, 廂で50cmである。径40cm内外の柱痕跡をとどめるものや、柱痕跡のまわり



わりに安山岩の根固め石をめぐらすもの、柱抜取痕跡に安山岩の塊石を投げ入れるものがある。身舎の三通と六通の梁間に2個の小柱穴を掘り、梁間を1.5m(5尺), 3m(10尺), 1.5m

第Ⅲ章 遺 跡

(5尺)に仕切る。身舎の南側柱列の柱掘形が第Ⅰ期のSD7165を掘込み、南廂の柱掘形が第Ⅱ期のSB7151Aの柱掘形を掘込んでいる。

**SS7214** はSB7170の足場である。6間(18.2m)×5間(19.5m)の小柱穴列(方60cm, 深さ20cm)を配置する。柱間寸法は厳密でないが、桁行は3m(10尺)等間とする。梁間は南北の廂を4m(南北のはじまりはSB7170の廂列の外側2.5m)とし、内の3間を3.6m(12尺)とする。

**SK7193, SD7188, SD7195** (PLAN 32, PL. 68・69) 6ABP-G地区

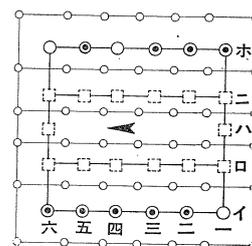
SK7193はSB7170の身舎西間仕切内にある土壌。長辺を南北にとる長方形(長さ3m, 幅1.66m, 深さ47cm)を呈する。下部には粘質土と砂質土が堆積し、上部に若干の遺物をふくむ暗褐色土層が堆積している。

SD7188はSB7170の6通と7通間の身舎から北へのびる素掘りの南北溝(幅55cm, 深さ20cm)。褐色土が堆積している。南端はSK7193に注ぎ、北は発掘区外へのびる。SD7189はSD7188に平行する素掘りの南北溝(幅55cm, 深さ10cm)。暗褐色土が堆積しSK7199につながる。SD7188の後身であろう。SD7195はSK7193の西南隅から西方へのびる玉石敷の東西溝。現状では側石の抜取痕跡しかとどめていない(幅60cm)。

SK7193は一種の貯水施設であり、SD7188ないしはSD7189は北からの導水路であり、SD7195は西方への排水路とおもわれる。SD7188には水が流れた痕跡がなく、本来は木樋暗渠であった可能性がある。そのうちSD7189が第Ⅱ期のSB7152の柱掘形を掘込むことから、第Ⅲ期となり、SB7170に矛盾なくおさまることから、浴室のようなSB7170の付属施設に想定した。

**SB7173** (PLAN 28, PL. 65・66) 6ABP-F・G地区

SB7170とSB6620との間は建物幅の中庭となり、その東西に脇殿を配する。SB7173は東側の脇殿で、5間(13.5m)×4間(13.2m)、東西2面に廂がつく南北棟建物である。現在、東西の廂柱列の柱掘形しか検出していないが、後述する足場掘形的位置関係によって5間×2間の礎石付き身舎を想定することが可能である。柱間寸法は桁行が2.7m(9尺)等間であり、身舎の梁間を桁行と同じ2.7m(9尺)等間とすれば廂は3.9m(13尺)となる。北妻柱通りの東側柱の内側にある浅い土壌は、かろうじてのこった礎石据付痕跡である。掘立柱の掘形は方1.2m, 深さ1.5mで径40cmの柱痕跡をとどめるものがある。また、柱抜取痕跡に石を詰めるものもある。

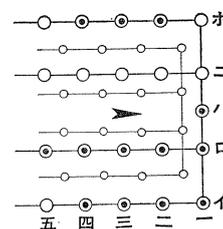


**SS7186**はSB7173の足場で、6間(18.2m)×5間(17.9m)の小柱穴列(方60cm, 深さ25cm)である。外周の柱穴はSS7186の柱穴の外側約2.4mに位置し、柱間寸法は厳密でないが、桁行では南北の両端を3.6m(12尺), 他を2.7m(9尺)とする。梁間は両端の間を4.2m(14尺)とし、内側の間を3.3m(11尺)とし、中央の間を2.7m(9尺)とする。

SB7173の西側柱列の柱掘形が第Ⅱ期の建物SB7150の柱掘形を掘込み、SB6620とSB7170の東妻柱筋に西廂柱列をそろえている。

**SB6622** (PLAN 25, PL. 50・56, fig. 40) 6ABP-B地区

SB6620の南東に位置する。5間(13.3m)以上×4間(14.4m)で、東西2面に廂がつく南北棟建物。南妻柱列はすでに削平されている。柱間寸法は桁行2.66m(9尺)等間、梁間は身舎を3m(10尺)等間、



廂を4.2m(14尺)とする。身舎の柱掘形はやや大きく(方1.5m)、廂は小さい(方1.2m)。径45cmの柱痕をとどめるものがある。桁行は5間ないしは7間と想定されるが、他の脇殿の規模と同じとすると5間とおもわれる。

**SS6614**はSB6622の足場。4間(12.3m)以上×3間(10.3m)の小柱穴(方60cm、深さ20cm)による総柱遺構で、北側の柱穴列はSB6622の北妻柱列の北2.7mのところにある。

SB6622は第Ⅱ期の建物SB6660A・Bの柱掘形を掘込み、SB6620の南側柱筋とSB6622の北妻柱筋をそろえている。

#### SD6612, SD6652, SD6606, SD6659

(PLAN 25, PL. 50・56) 6ABP—B地区

SD6612はSB6622の西1.65m(5.5尺)をへだてて流れる石敷の南北溝(幅1m)。現状では南半に底石の安山岩をとどめ、北半には据付痕跡をとどめる。雨落溝北端は東西溝SD6606につながり、南は石積擁壁SX9230下の南北溝SD7133につながるようである。ただし、SD7133との間には1.8m内外の落差を生じることになる。

SD6652はSD6612に西方から合流する東西溝(幅60cm、長さ7m)。内に玉石がちらばり、本来は石敷であった可能性がある。西端は削平されて不明。

SD6606はSB6622の北2.1m(7尺)をへだてて流れる石敷の東西溝(幅70cm)。現状では玉石の抜取痕跡しかのこっていない。SD6659はSB6622の東1.65m(5.5尺)をへだてて流れる石敷の南北溝(幅65cm)の痕跡。玉石の底石を抜取った痕跡や移動した凝灰岩がある。SD6612・SD6606・SD6659はSB6622をとりまく雨落溝でもある。

#### SA6623 (PLAN 25・26・28, PL. 55・56) 6ABP—A・B地区

SB6622の北妻中央柱からはじまり、北方の東西塀SA6624につながる7間(20.55m)の南北塀。柱間寸法は原則として3m(10尺)だが、北第5・6間を2.85m(9.5尺)に縮めている。東部の仕切塀柱の掘形は方1m、深さ40cmで、なかには柱抜取痕跡に凝灰岩をつめたものもある。

#### SB8300 (PLAN 20, PL. 72) 6ABP—B地区

SB6622の東10.8m(36尺)にある3間(9m)以上×4間(12m)の南北棟2面廂建物。廂は東西につき、南妻柱列は削平されている。柱間寸法は桁行・梁間ともに3m(10尺)等間である。身舎の柱掘形は方1.5m、深さ1mで、径40cm内外の柱痕跡をとどめ、安山岩の礎盤をすえるものもある。廂の柱掘形は方1m、深さ70cmで、径30cm程度の柱痕跡があり、柱根の残骸や柱抜取痕跡もある。桁行を5間に復原すれば第Ⅲ期の東面築地の門SB8335と心がそろう。SB8300の東側柱列の東2.3mに方50cm程の柱穴の3間分(9.4m)の小柱穴列**SS8313**がある。その北端の小柱穴の西3mにも1個の小柱穴があり、それらはSB8300の足場とみられる。

#### SD8301 (PLAN 20, PL. 72) 6ABP—B地区

SB8300の東1.5m(5尺)にある素掘の南北溝(幅1.1m、深さ30cm)。底は南に向って傾斜し、北端で西にのびた痕跡がある。南は石積擁壁下へ流れ落ちるのであろうが、対応する溝を検出してない。擁壁の南7.5mのところまで東西に流れる玉石溝SD9236が斜道SF9232Bの路肩

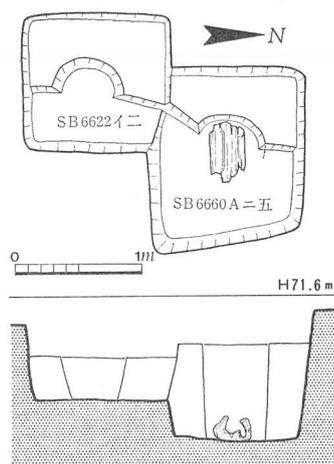
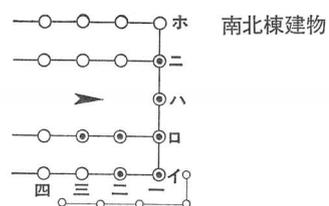


fig. 40 SB6622とSB6660柱掘形の重複



### 第三章 遺 跡

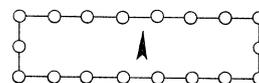
でL字状に曲り、SD8301の水をうけた可能性がある。

#### SD6607 (PLAN 20・25, PL. 55・73) 6ABP-B・D地区

SB8300の北7.8m(26尺)に位置し、殿舎地区の東半部を横断する石敷の東西溝である。西端はSB6620の東廂柱列の東約2mからはじまり、東は東面築地SA3719を暗渠SD8309で貫通し、外郭に出る全長68m(227尺)の溝である。現状では溝を構築した安山岩とおもわれる石材の抜取痕跡のみをとどめ、石敷の原形をのこすところはない。西半部では抜取痕跡の残存状況がわるいが、東半部では良好な痕跡をとどめている。抜取痕跡による溝幅は1.1m、深さ45cmで、側石と底石の抜取痕跡を判別できる。すなわち、底石は両側よりも20cm程度深く掘下げて据えつけ、本来の溝内法幅が30cm、深さが20cm以上であったことがわかる。また、さきに側石を抜きとり、のちに底石を抜きとったことが埋土の堆積状況からうかがえる。東端の溝底(標高72.06m)にくらべて西端の溝底(標高72.50m)のほうが40cmあまり高く、郭内の雨水などを排水する主要水路であったことがわかる。第Ⅱ期の建物SB6655およびSB6660の柱掘形を掘込んでいる。

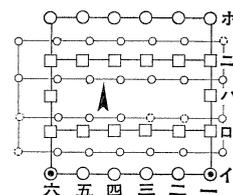
#### SB8305 (PLAN 20, PL. 73) 6ABP-A地区

東西溝SD6607の北3.5mに位置する7間(18.94m)×2間(4.8m)の東西棟建物で、建物の方位が西で北へ少し振れている。柱間寸法は桁行2.7m(9尺)、梁間2.4m(8尺)の等間である。柱の掘形は方50cm、深さ45cm内外である。第Ⅱ期の建物SB8245の柱掘形を掘込んでいる。この建物は方位が振れ、柱穴が小さなことから仮設的な建物とみられる。



#### SB6621 (PLAN 27, PL. 57・58) 6ABP-A地区

後殿SB7170の東13m、脇殿SB7173の北3.6mをへだてて位置する。5間(12.6m)×4間(12.45m)で、南北2面に廂がつく東西棟建物。身舎の柱は本来礎石をすえたらしく、断続する布掘り風の礎石据付痕跡(幅1m、深さ20cm内外)がある。柱間寸法は、桁行2.52m(8.4尺)等間、梁間は身舎が2.8m(9尺)等間で、廂が3.42m(11尺)となる。廂の柱掘形は方1m、深さ40cmで、柱抜取痕跡に塊石を投入するものがある。



SS6665はSB6621の足場である。6間(15.3m)×3間(9.4m)の小柱穴(方60cm)による総柱遺構。柱間寸法は不揃いだが、桁行では東の端間を3m(10尺)とし、他を2.4m(8尺)とする。梁間は3.13m(10尺)の等間である。この足場はSB6621の本体から少し西にずれており、また西妻柱列の礎石据付痕跡が約1.5m西から掘られていることからすれば、誤って西寄りに足場を組んだのち東寄りに建物位置を修正したのであろう。

SB6621の柱穴は他時期の遺構と重複しないが、棟通りがSB7170とそろう、SB7173の東側柱筋とこの建物の西妻柱筋とがそろっているので第Ⅲ期におく。

#### SD7177 (PLAN 27・31, PL. 65) 6ABP-G地区

脇殿SB7173の北1.5m(5尺)を流れる素掘りの東西溝(長さ9.35m、幅1m、深さ15cm)。ところどころに埴や凝灰岩をならべた痕跡があり、本来は石敷ないしは埴敷の溝であった可能性がある。東端は南北溝SD7175につながって北流する。この溝の西3.4m延長線上に凝灰岩抜取り痕跡があるので、後殿SB7170の南面雨落溝の雨水をあつめたようである。第Ⅱ期の建物SB

7220の柱掘形と南北溝SD6608を掘込んでいる。

**SD7175** (PLAN 27, PL. 67) 6ABP—G地区

SB6621の西3mに位置する素掘りの南北溝(長さ23.65m, 幅70cm, 深さ15cm)。南端の溝底素掘溝にくらべて北端のほうが13cm深いので北流する溝であったことがわかる。南端はSD7177とつながり北端はSD6633につながる。溝には平城宮土器Ⅶの土器片が多数堆積し第Ⅲ期の年代をきめる手掛りになった。

**SD6633, SD6632** (PLAN 27, PL. 58・60) 6ABP—A・G地区

SD6633は南北溝SD7175が東へ折れ曲った素掘りの東西溝(長さ26.5m, 幅75cm, 深さ25cm)。堆積土のなかに多くの平城宮土器Ⅶの土器片をふくむ。西端の溝底にくらべて東端のほうが約10cm低く, 東へ流れたことがわかる。SD6632は東西溝SD6633が南へ流路をかえた南北溝(長さ12.7m, 幅70cm, 深さ20cm)。やはり平城宮土器Ⅶの土器片が堆積している。

**SA6626** (PLAN 27・32, PL. 58・65) 6ABP—A・G地区

後殿SB7170の北5mに位置し, SB7170およびSB6621の北面を遮蔽する東西塀。2間分の未掘部分をふくめて25間(73.25m)を検出した。東端は南北溝SD6631の西側で南に折れて南北塀SA6625となり, 西端は発掘区外へのびる。柱間寸法は2.93m(10尺)。柱の掘形は1.1m×0.9m, 深さ60cmで, 径40cmの柱痕跡をとどめるものもある。第Ⅱ期の東西溝SD7163およびSD6618の直上に掘込んでいる。

**SA6625** (PLAN 26・27, PL. 57・58) 6ABP—A地区

SB6621とSB7173の東方を囲む南北塀。全長12間で(36.25m), 北端は東西塀SA6626につながり, 南端は東西塀SA6624につながる。柱間寸法は3.0m(10尺)等間。柱の掘形は北方ではSA6626と同じく長方形(1.1m×0.9m)を呈するが, 南方の3間分は方形(方90cm, 深さ55cm)をなす。ともに径30cmの柱痕跡をとどめるものがあり, また柱抜取痕跡に凝灰岩の破片をつめたものもある。北端の柱痕跡(SA6624の東端柱穴でもある)の位置にくらべて, 南端の柱痕跡(東西塀SA6624の東第7柱穴)のほうが西へ20cmふれている。

東西を仕切る塀

**SA6624** (PLAN 21・26, PL. 57・73) 6ABP—A地区

殿舎地域東半部を南北に画する東西塀。西端を脇殿SB7173の東側柱列南端の柱穴につなぎ, 東端を東面築地SA3800Aにむすんでいる。全長21間(62.3m)。柱間寸法は3.01m(10尺)で, 柱の掘形は方90cm, 深さ50cmである。なかに径40cmの柱痕跡をとどめるものや凝灰岩をつめた柱抜取痕跡がある。西から第3柱は南にのびて南北塀SA6623となり, 西から第7柱および第10柱からは北へのびて南北塀SA6625, SA6629になる。柱穴の重複関係はないが, 第Ⅲ期の建物との間に共通の計画性がみとめられるので第Ⅲ期においた。

南北を仕切る塀

**SA6629** (PLAN 21~23, PL. 82・83) 6ABP—A地区

殿舎地域の北東部を東西に区画する南北塀。南端を東西塀SA6624の西から第10柱に結び, 北端は北面築地にむすぶものとおもわれる。全長15間(45.4m)で, 柱間寸法は北第8間と第12間を3.3m(11尺)にするほかは, 3m(10尺)の等間である。柱穴の状況は東西塀SA6624と同じ。第Ⅱ期の東西溝SD6618と北面築地回廊南雨落溝SD8214を掘込んでいる。

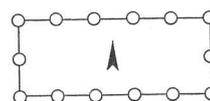
東西を仕切る塀

**SB8219** (PLAN 22, PL. 81・82) 6ABP—A地区

東西塀SA6624の北9.3m(31尺), 南北塀SA6629の東4.8m(16尺)をへだててたつ5間(15m)

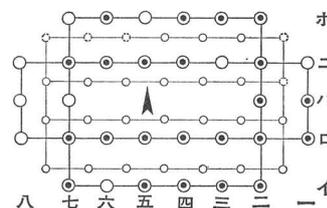
### 第三章 遺 跡

× 2 間 (6m) の東西棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに 3 m (10尺) 等間である。柱の掘形は方 0.8~1.5m, 深さ 50cm, 柱痕跡は概して不明瞭だが, 径 25cm の柱痕跡をとどめる柱穴もある。西妻柱列の柱穴に SB8224 の西廂柱掘形が掘込んでおり, それよりも古いことがわかる。



#### SB8224 (PLAN 22, PL. 81・82) 6ABP-A地区

SB8219と同位置にたつ。7間 (22.2m) × 4間 (13.2m) で, 4面に廂がつく東西棟建物。ただし, 廂の4隅の柱穴を欠いている。柱間寸法は身舎が 3 m (10尺) 等間で, 廂が 3.6m (12尺) である。柱の掘形は方 1 m, 深さ 50cm 内外。径 40cm 程度の柱痕跡をとどめるものがある。身舎の東妻柱の柱穴に



は径 50cm の扁平な安山岩をすえているが, 他の柱穴ではみられず, 礎石建物に想定することはできない。柱の高さをそろえるためだろうか。SB8219の西妻柱列の柱掘形に八通の柱掘形を掘込んでいる。

SS8828はSB8224の足場。6間 (15.8m) × 2間 (6.6m) の総柱遺構。柱間寸法は厳密でないが, 桁行では西 2 間を 3.6m (12尺) とし他の 4 間を 3 m (10尺) とする。梁間では南側を 3.6m (12尺) とし, 北側を 3 m (10尺) とする。柱の掘形は方 50cm, 深さ 30cm 内外で, 径 25cm 程度の柱痕跡がある。

#### SA8225 (PLAN 22, PL. 82) 6ABP-A地区

SB8224 と南北塀 SA6629 との間にある 2 間 (4.5m) の南北塀。柱穴の状況は SB8224 と同じ。柱間寸法は 2.25m (7.5尺) である。この塀に面する SA6629 の柱間が西からの入口とすれば, 一種の目隠塀である。

#### SA8217 (PLAN 22, PL. 83) 6ABP-A地区

SB8219の北 8.8m (30尺) をへだててたつ東西塀。西は南北塀 SA6629 の南から第 8 柱からはじまり, 東は東面築地 SA3800A にとりつく。全長 11 間 (33m) で, 柱間寸法は 3 m (10尺) 等間である。1.0m × 1.3m, 深さ 50cm 内外の柱掘形に径 40cm 程度の柱痕跡がある。この東西塀は, 殿舎地域の東北部の一郭を南北に区画している。

#### SD6631 (PLAN 23・27, PL. 58・83) 6ABP-A地区

殿舎地区の東北部を貫通する素掘りの東西溝(幅 70cm, 深さ 29cm 内外)。西端は SD6632 につながり, 東端は東面築地西雨落溝 SD9226 につながる。第 II 期建物 SB8210 と SB8215 の柱穴を掘込んでいる。

#### SB8218A・B (PLAN 23, PL. 83, fig. 41)

6ABP-A地区

SB8218Aは東西塀 SA8217の北 9.3m (31尺), 南北塀 SA6629の東 5.1m (17尺) をへだててたつ 5 間 (14.1m) × 2 間 (6m) の東西棟建物。桁行の柱間寸法は, 東西両脇間を 3 m (10尺) とし, 内の 3 間を 2.7m (9尺) 等間にする。梁間は 3 m (10尺) 等間。柱掘形は方 1.2m, 深さ 50cm 内外だが, 柱痕跡は明瞭でない。東西の妻柱列の

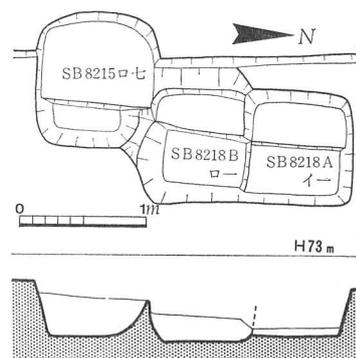


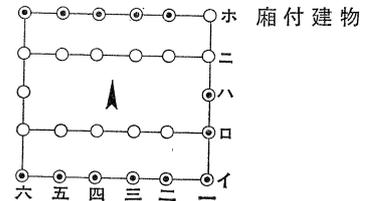
fig. 41 SB8218A・B柱掘形の重複

柱掘形に後身の SB8218B の柱掘形が掘込んでおり、南側柱列の柱掘形にやはり第Ⅲ期の建物 SB8222 の柱掘形が掘込んでいる (fig. 41)。

SB8218B は SB8218A をほぼ同位置でたてかえたもの。5 間 (14.1m) × 2 間 (6m) の東西棟建物。桁行の柱筋は SB8218A と同じだが、梁間の柱筋を 2.1m 北へ移動している。柱間寸法や柱掘形の状況は SB8218A と同じである。

**SB8222** (PLAN 23, PL. 83) 6ABP—A 地区

SB8218B のあとにたつ 5 間 (14.1m) × 4 間 (12.98m) で南北 2 面を廂とする東西棟建物。柱間寸法は桁行の両脇間を 3m (10尺) とし、内の 3 間を 2.7m (9尺) とする。梁間は身舎を 3.02m (10尺) 等間とし、北廂を 3.32m (11尺)、南廂を 3.62m (12尺) とする。身舎の柱掘形が若干大きく、方 1m、深さ 55cm である。柱抜取痕跡に塊石をつめるものがある。廂の柱掘形は、1.2 × 0.7m 内外の長方形を呈し、径 40cm の柱痕跡をとどめる。身舎の側柱列の柱穴が SB8218A・B の柱掘形を掘込んでおり、3 棟のうちもっとも新しい建物であることがわかる。桁行の両脇間を広くとる身舎の柱間寸法が、SB8218A・B と同様である点が注目される。



**SA8223** (PLAN 23, PL. 83) 6ABP—A 地区

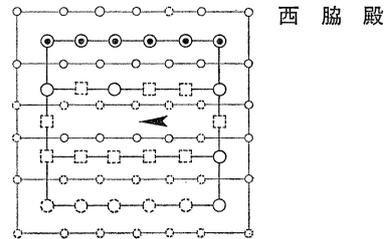
SB8222 と南北塀 SA6629 の間にある 2 間 (5m) の南北塀。柱穴の状況は SB8222 と同じ。柱間寸法は 2.5m (8尺) である。この塀が面する SA6629 の柱間が西からの入口とすれば、SB8223 の目隠塀になる。

**SD6644** (PLAN 30, PL. 51) 6ABP—D 地区

正殿 SB6620 の西側にある石敷の東西溝。底に敷いた安山岩・凝灰岩が部分的にのこるが、石敷の多くは抜取痕跡をとどめるにすぎない。SB6620 の南入側柱列の西端からはじまり、8.5m 西へ流れて南流するようである。石敷の幅は 35cm 内外であるが、両側石はまったく抜き取られている。

**SB7172** (PLAN 31, PL. 52) 6ABP—F 地区

正殿 SB6620 の西北方に位置する脇殿。5 間 (13.4m) × 4 間 (13.2m) で、東西 2 面に廂がつく南北棟建物。柱間寸法は桁行で 2.7m (9尺) 等間。梁間は廂で 3.9m (13尺)、身舎で 2.7m (9尺) 等間。柱の掘形は 1.5 × 1.3m で、深さは 75cm、径 45cm 程度の柱痕跡がある。柱穴のうち身舎の妻柱と 2 個の側柱穴をかいている。後述の足場からすれば柱の存在は予想されるところであり、本来は柱があったとみなければ



ならない。たとえば、当初に古材の柱を再利用し、材の長さの都合で一部の柱は礎石立ち、他は掘立柱としたことがかんがえられる。中軸線をはさんで東方の SB7173 と対称位置にある。東側柱列の柱穴が第Ⅱ期の建物 SB7150 の柱掘形を掘込んでいる。なお、この建物の西半分は発掘していない。

**SS7228** は SB7172 の足場。桁行 6 間 (18.4m)、梁間 4 間 (13.5m) 以上の総柱遺構が想定できる。柱掘形は方 50cm、深さ 30cm である。その外側の柱位置は SB7172 の東 2.0m、南 2.5m、北 2.4m に位置している。

### 第三章 遺 跡

#### SB7209 (PLAN 32) 6ABP-G地区

後殿SB7170の西方に2間分(5.2m)の柱掘形がある。それは東方にあるSB6621の北側柱列西から3本の柱穴と中軸線をはさんで対称位置にある。このことから、西方にもSB6621と同規模のである5間(12.45m)×4間(12.45m)の建物があったことを推測できる。

#### iv 時期不明の遺構

時期ならびに性格をきめがたい遺構が少なからず存在している。その多くは各所に散在する小柱穴および小土壇である。それらの各々についてはふれない。**SK7192・SK7191**(6ABP-G地区, PLAN27)は第Ⅲ期の北辺を画する東西堀SA6626外にある浅い土壇。一種のごみ捨場ないしは土取り跡とおもわれる。

## C 広場地区

築地回廊の内部、殿舎地区の擁壁以南は、原則として建物のない広場であり、朝庭としていたのであろう。第Ⅰ期では東西約167m、南北約205mの縦長の長方形(34,235m<sup>2</sup>)を呈し、第Ⅱ・Ⅲ期では東西約167m、南北約86mの横長の長方形(14,362m<sup>2</sup>)に縮小している。すでにのべたように、北方が高く南方が低い地勢を呈している。

#### i 第Ⅰ期の遺構

#### SH6603A (PNAN 2)

殿舎地区と南門SB7800の間に展開する小礫敷の広場。築地回廊の雨落溝ぎわから埴積擁壁下  
礫敷広場 にまで展開する。6ABR-G・6ABQ-B地区以北では砂礫質ないしは茶褐色粘質土の地山を平坦にして粒揃いの礫を厚さ10cm内外に敷きつめる。6ABR-H地区における地山が黒色粘質土にかわる低湿地では、部分的に粘質砂土をいれて整地したのち礫をしいている(下層礫敷面)。6ABR-H地区の南寄りでは、下層の礫敷面の上に粘質土や砂質土を15cm前後の厚さで堆積し、そのうえに拳大の礫をしいている(中層礫敷面)。中層礫敷面のうえには5~10cmの厚さで灰色の細砂層が堆積し、そのうえに小粒の礫をしく(上層礫敷面)。しかしながら、地山が洪積世の台地かかる6ABR-G地区以北では中・上層の2層を区別することは困難である。中層のうえにみられる細砂の堆積は、広場南部が帯水した状況をしめしている。

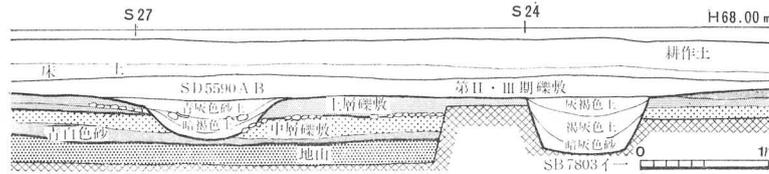
#### SD7760 (PLAN 12・14, PL. 12・32) 6ABR-G・H地区

南門SB7800の北階段東端の位置から発する素掘りの南北溝(幅40cm、深さ10cm)。6ABR-G地区の南辺以北では削平されている。この溝は中軸線から東へ6mへだたっており、西側に同様の南北溝を想定するならば、幅員12m(40尺)の南北通路の東側溝となる。しかし、通路部分にとくに手をくわえた痕跡はない。同時期の東西溝SD5590および第Ⅲ期の東西溝SD3769と建物SB7803の柱掘形が掘込んでいる。

#### SD5590A・B (PLAN 5・13, PL. 11, fig. 42) 6ABR-H地区

南面築地回廊SC5600の心から北へ約22mへだたる素掘りの東西溝(幅1m前後、深さ30cm)。中層礫敷面にともなうSD5590Aと、上層礫敷面にともなうSD5590Bにわかれる。SD5590Aには礫混り灰色砂土が約10cmの厚さで堆積し、東端は東面築地回廊SC5500の西雨落溝SD5588

fig. 42  
SD5590 付近の  
土層堆積



につながる。SD5590Bは底にやや大粒の礫が堆積し、うゑに厚さ20cmの灰色質土が堆積しており、SC5500の西雨落溝から西へ寄せた南北溝SD5589につながる。上下2層の堆積土からは多くの瓦片が出土した。

**SD5588, SD5589** (PLAN 5, PL. 14) 6ABQ-Q地区

SD5588は本来はSC5500の西雨落溝SD3790の一部分であるが、東西溝SD5590Aとの合流点以南でひろがったもの。長さ15m、幅1.8mの素掘りの南北溝で、北端はSD5590とつながり、南部でSC5500を横断する木樋暗渠SD5561, SD5562, SD5563につながる。

SD5589はSD5588を西によせた溝である。長さ11.5m、幅35cmの素掘りの南北溝で、北端はSD5590Bにつながる。

**SD5607** (PLAN 6・7) 6ABR-P・Q地区

SC5500の西雨落溝SD3790の西側に平行する素掘りの南北溝(残存長26m、幅35cm、深さ10cm)である。Q地区の西北隅からP地区の南寄りのにこっており、南北両端はさだかでない。第Ⅲ期の東西堀SA3740がこの溝を掘込んでいる。なお、南北溝SD5589と同一線上にあり、ある時期、雨落溝とは別の排水溝を回廊にそってつけた可能性もある。

**SD7805, SD7806** (PLAN 12・13, PL. 4) 6ABR-H・J地区

南門SB7801の北側の雨水をSD5590に導く石敷の南北溝。SD7805は(長さ12m、幅30cm、深さ10cm)。北部は素掘溝の状態でのこるが、南半では両岸に拳大の礫をならべて護岸する。南端はSB7801の上層雨落溝につながり、北端はSD5590Bに注いでいる。

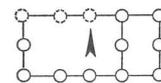
SD7806は中軸線の西側でSD7805と対称位置にある石敷の南北溝。南端の2mを検出したにすぎないが、つくり方や規模はSD7805と同じであり、SD5590に注ぐものとみてよい。

**SD3779** (PLAN 7, PL. 31) 6ABR-P地区

P地区のほぼ中央にある素掘りの東西溝(長さ34m、幅40cm)。ほとんど削平され、東西両端は不明である。SC5500を横断する木樋暗渠SD3770と方位がそろっており、連続する可能性があるのではこの時期にいれる。

**SB7765** (PLAN 14, PL. 36) 6ABR-G地区

G地区のほぼ中央に位置する4間(10.1m)×2間(5.1m)の東西棟建物で、東妻側に廂がつく。柱間寸法は桁行の西端間が2.7m(9尺)であるほかは、2.4m(8尺)等間である。身舎の柱掘形は方70cm、深さ40cmで、径35cmの柱痕跡がある。廂の柱穴は径40cmの円形を呈する。西妻柱および北側柱の2柱が第Ⅱ期のSK3784によって破壊されている。



小 建 物

**SD7142** (PLAN 14~16, PL. 37・38) 6ABQ-C・D地区

広場地区を南北に貫通する素掘りの南北溝(幅1.2m、深さ15cm)。北方のC・D地区ではよくのこるが、南方のG・H地区ではわずかに痕跡をとどめるにすぎない。北端は6ABP-D地区の埴積擁壁SX6600の前にはおよんでおらず、発掘しなかった構内道路のあたりにあるも

### 第三章 遺 跡

のとおもわれる。南端は東西溝SD5590Aに注いだ可能性もなくはないが、SC5600を横断する盲暗渠SD7807と方位がそろっているため、SD5590Aの設置以前においてSC5600の北雨落溝に連結した可能性が大きい。第Ⅱ期の南面築地回廊SC3810Aがかさなっている。この溝は中軸線の東18.5m(62尺)に位置し、中軸線の西にも同様の溝を想定するならば、幅37m(125尺)の通路があったことになる。

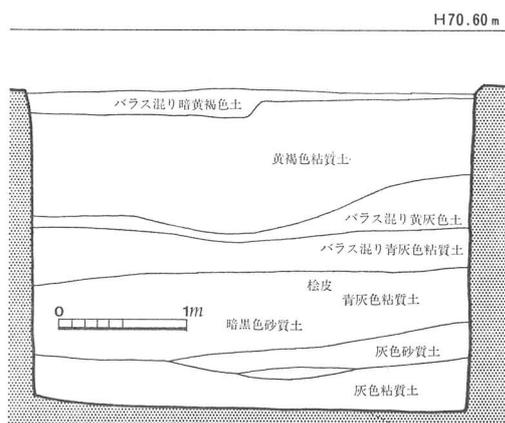


fig. 43 SE7145の断面

#### SE7145 (PLAN 16, fig. 43) 6ABQ—C地区

井戸 C地区の東北隅にある井戸である。3.5m×3.1mの隅丸方形の掘形で、深さは2.5mである。井戸枠は完全に抜きとられ、版築状にていねいに埋戻されている。底部ではほぼ中央に方1mの範囲に木片をふくむ暗黒色砂質土塊があり、その上層の青灰色粘質土上面には栓皮が堆積していた。埋土から少量の瓦片と刀子が出土した。

#### ii 第Ⅱ期の遺構

#### SX3785 (PLAN 7・14・15, PL. 31) 6ABR—P, 6ABQ—B地区

わだち 第Ⅱ期造営時の轍である。幅15~20cm、深さ5cmの細い轍が、この時期の整地土にのこされている。南北方向の痕跡と東北から西南方向にかけての痕跡があり、後者は7~8条交叉している。2条が平行する南北方向の例(B地区)によると1.5mの間隔があり、それが車幅をしめすことになる。第Ⅱ期の整地土にしるされ、この轍のうえに南面築地回廊がつくられていることから、第Ⅱ期の造営時の遺構になる。

#### SH6603B (PLAN 2)

この時期の広場は北方で石積擁壁SX9230を南へせりだし、南面築地回廊を北によせ面積をせばめる。SH6603Bでは第Ⅰ期の礫敷面のうえに黄褐色粘質土を主とする整地土(厚さ10cm前後)をもり、そのうえに再び礫をしきつめる。この状況は南面築地回廊SC3810A以北において明瞭に識別できるにもかかわらず、以南では第Ⅰ期礫敷面との区別が容易でなく、むしろ混りあっているようにもみえた。また、後の第Ⅲ期でもこの礫敷面は存続するが、第Ⅱ・Ⅲ期を層位的に分別できない。

#### SA7815 (PLAN 13, PL. 3) 6ABR—G地区

竿痕跡 第Ⅱ期南面築地回廊の心から南へ48.9mへだたったところで東西にのびる塀(10間、51m)。G地区を横断し、西へさらにのびるようである。東は未掘区にかかるが、6ABR—Q地区に柱筋のそろった柱穴があり、広場地区を横断した可能性が大きい。柱間寸法は5.1m(17尺)等間。柱掘形が径40cmと小さいことからすれば、竿のような仮設物をたてたのだろう。上層礫敷面で検出。東面築地回廊上におよんでいないので第Ⅱ期にいれる。

#### SD7763 (PLAN 14, PL. 36) 6ABR—G地区

G地区中央にある素掘りの東西溝(幅40cm、深さ10cm)。長さ22mをとどめるが、西端の接

続状況は不明である。第Ⅰ期の東西棟建物SB7765の柱掘形に掘込んでいるので、この時期に  
いれておく。

**SK3784** (PLAN 7・14, PL. 26・36) 6ABR—P・G地区

南面築地回廊SC3810Aの南で東西にのびる不整形の大土塙(最大幅5.3m、深さ20~30cm)。東  
端は第Ⅰ期東面築地回廊SC5500の西雨落溝SD3790の西縁でとまるが、西端はなお発掘区外に  
のびるようである。土塙の堆積は上下2層にわかれ、多数の瓦片が出土し、部分的に滞水した  
痕跡をとどめる。第Ⅰ期の建物SB7765の柱掘形を掘込み、南面築地回廊SC3810Aの南側基壇縁  
にそっていることから、回廊基壇造成時の土取場の痕跡である可能性が大きい。東方では土塙  
SK3787、轍SX3785がかさなり、第Ⅲ期建物SB7769の南側柱の掘形によって掘込まれている。

**SA3809** (PLAN 8・15, PL. 32) 6ABQ—BD地区

南面築地回廊SC3810Aの心から北21.8mに位置する東西塙。西端は発掘区外にのび、東端  
は東面築地回廊西側でおわる。13間分検出し、柱間寸法は原則として6m(20尺)であるが、D  
地区では間柱がはいって柱間がやや不規則になる。柱掘形は小さな円形(径40cm、深さ30cm)  
を呈している。柱間が広いことからすると塙ではなく、竿のようなものをたてたのかもしれない。  
上述のSA7815と共通するところがある。上層礫敷面で検出。

**SE9210** (PLAN 16, PL. 46, fig. 44) 6ABQ—A地区

A地区西南にある井戸。井戸の掘形は矩形を呈し、上下2段にわかれる。上段は南北7.3m、  
深さ1.7mであり、下段は上段掘形の西北寄りを深くしたもので、東西4.9m、南北4.5m、深  
さ1.9mであり、遺構検出面から底までの深さは3.6mとなる。下段掘形の底には4段の井戸  
をとどめるが、その上部はすでにぬきとられている。井戸枠採取痕跡は底から約1mの厚さで  
埋戻され(青灰色粘土)、それ以上は埋立てられることなく、放置されたようである。

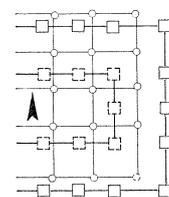
井戸枠の内法は、方2.25mであり、西南と西北隅には木材の礎盤をあてている。枠木の1段  
と3段には板をもちい、2段と4段には校倉の校木を転用している。井戸枠と掘形との間は木  
屑を混えた灰褐色砂土で裏込めし、井戸底には拳大の玉石を敷く(厚さ10cm)。玉石敷の上部に  
堆積する暗灰色土には、10世紀代の土師器があり、ほかに瓦片や木器があった。第Ⅲ期および  
それ以降も使用されたことをしめす(校木についてはp. 140参照)。

**SK7136**はSE9210の井戸枠採取痕跡の後身であり、東西5m、南北8.5m、深さ90cmの土塙  
である。堆積土は3層にわかれ、11世紀頃の瓦器が出土している。一種の泉として長くもちい  
られたのであろう。

### iii 第Ⅲ期の遺構

**SB7803** (PLAN 13, PL. 12) 6ABR—H地区

H地区の西寄りにある3間(9.6m)以上×4間(13.2m)で四面に廂がつく東  
西棟建物。西半は発掘区外にあるが、中軸線で折り返すと桁行は7間(22.5  
m)となる。側柱の柱間寸法は桁行・梁間ともに隅の間を3.6m(12尺)とし、  
それ以外は3m(10尺)等間とする。柱の掘形は方1m、深さ30cmと浅く、  
柱痕跡をとどめていない。おそらく礎石をすえた掘形であろう。身舎の柱位  
置を直接にしめす痕跡はないが、小柱列の足場SS7823の存在によって想定できる。それは2間



大型建物

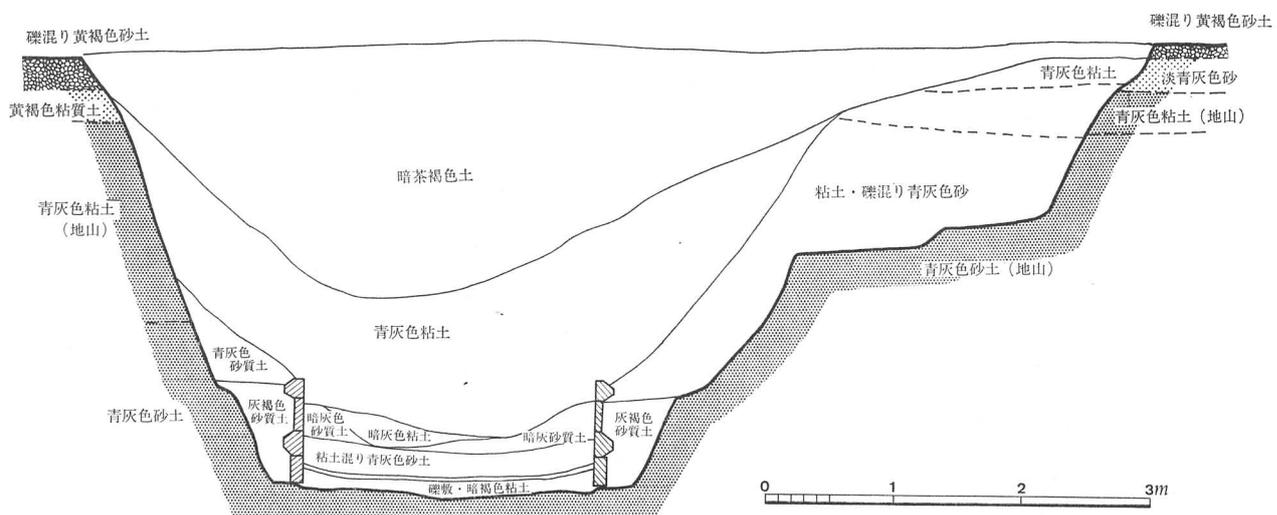
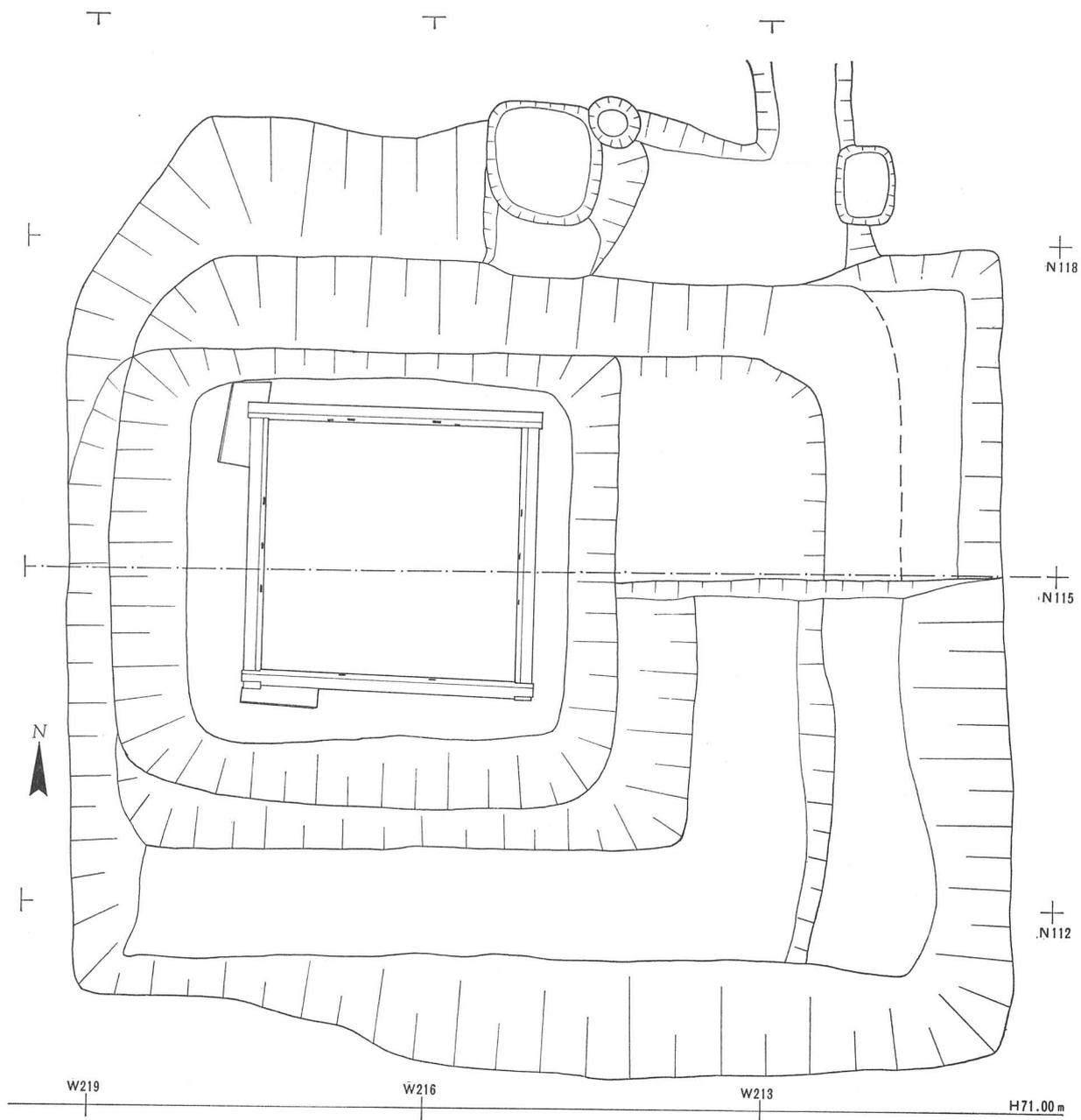


fig. 44 SE9210実測図

(6.5m) 以上×4間(8.2m)の総柱遺構であり、その間に身舎柱を想定すると、5間(15m)×2間(6m)の身舎となる。おそらく身舎も礎石を据えていたのであろう。第Ⅰ期の南北溝SD7760に重複し、上層礫敷面で検出した。

**SA3740, SB3768** (PLAN 7・13, PL. 30・36) 6ABE—K, 6ABR—P・G地区

SA3740はこの時期の南面築地SA3810Bの心から南35.6mをへだてて東西にのびる塀。広場地区を横断し、西は発掘区外へのび、東はこの時期の東面築地SA3800Aの心から東18.7mの東外郭へのび、南北塀SA8238とむすぶ。検出した柱間総数は34間で、柱間寸法は2.4m, 2.7mのところもあるが、おおむね3m(10尺)におさまる。柱の掘形は方70cm, 深さ30cmである。なお、D地区ではSA3740にかさなって無数の杭が打ちこまれた痕跡(長さ20m, 幅70cm)があるが、平城宮廃絶後の遺構とおもわれる。

SB3768はSA3740の東から3間目に開く1間の門である。柱間寸法は5.4m(18尺)で、柱の掘形(方1m, 深さ40cm)には柱抜取痕跡があり、西の柱掘形には角材の礎盤があった。ともに上層礫敷面で検出しており、南北塀SA8238とともに第Ⅲ期の外郭を形成しているとみられる。また、中軸線上にもSB3768に類する門の存在が予想される。

**SD3769** (PLAN 7・13, PL. 30・36) 6ABE—K, 6ABR—P・G地区

SA3740の南2.5mをおいて東西にのびる素掘りの東西溝である。幅1m, 深さ10cmのこの溝は広場地区を横断し、西は発掘区外へのび、東は第Ⅰ期の東面築地回廊SC5500の基壇をとおりぬけている。溝底は東になるにしたがって深くなっており、東方に排水したことがわかる。第Ⅰ期南北溝SD7760を掘込んでおり、上層礫敷面で検出した。

**SB7753** (PLAN 13, PL. 36) 6ABR—G地区

中軸線の東7mにあり、北側がSD3769に接してたつ2間(4m)×2間(3.5m)の東西棟建物。柱掘形は小さな円形(径40cm, 深さ15cm)を呈している。SA3740に設けたであろう中央門にともなう番屋的な性格をもつ建物のようなものである。上層礫敷面で検出し、第Ⅰ期南北溝SD7760を掘込んでいる。



小 建 物

**SB7769** (PLAN 14, PL. 34) 6ABR—G地区

南面築地SA3810Bの南に接してたつ2間(4.5m)×2間(3.9m)の東西棟建物。ただし、西妻柱列は3間(中央間1.5m, 両脇間1.2m)とする。柱の掘形は小さく(方50cm, 深さ35cm), 北側柱の掘形には径25cmの柱痕跡がある。SB7753と同じく番屋的な建物とみられる。第Ⅱ期の土壌SK3784を掘込んでいる。



小 建 物

**SD7131, SD7132** (PLAN 14~16, PL. 32・34・38) 6ABQ—C・D, 6ABR—G地区

SD7131は中軸線の東33m(110尺)で南へ流れる素掘りの南北溝(幅80cm, 深さ10cm前後)。北端は東西溝SD7132につながり、南端は石積暗渠SD7799で南面築地SA3810を貫通する。SD7132はこの時期の石積擁壁SX9230の南8.5mにある素掘りの東西溝(幅50cm, 深さ10cm)で、東端はSD7131につながる。ともに上層礫敷面で検出するが、SD7131が同時期の東西塀SA7130にかさなっており、第Ⅲ期のなかでも新しい時期にぞくする遺構である。

**SA7776** (PLAN 14, PL. 34) 6ABQ—D地区

この時期の南門SB7750の北面東寄りにある4間(5.9m)の東西塀。柱の掘形(方70cm)には径40cm内外の柱痕跡をとどめる。第Ⅱ期南面築地回廊SC3810Aの北雨落溝SD3778に重複している。

第三章 遺 跡

**SB7785** (PLAN 15, PL. 37) 6ABQ—D地区

南面築地SA3810の北34mに位置する3間(8.1m)×2間(4.2m)の東西棟建物。柱間寸法は桁行2.7m(9尺)、梁間2.1m(7尺)で、柱掘形は小さな円形(径30cm、深さ25cm)を呈する。柱位置はやや不揃いで、棟方向は東で南へ約3度ふれている。上層礫敷面で検出。

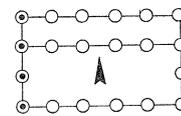


**SA7130** (PLAN 9・16, PL. 40・41) 6ABQ—A・C地区

石積擁壁SX9230の南26mで広場地区を横断する東西塀。27間分の柱穴を検出した。大半の南面の囲い柱間は3m(10尺)だが、東面築地SA3800Aには2.1m(7尺)の柱間寸法でとりつき、井戸SE9210に接する東から13間目の柱間(4.2m、14尺)は広く柱掘形も大きいので、門にあてることができる。柱の掘形は大半が方70cm、深さ20cmで、径30cmの柱痕跡をのこすものもある。それに対して門の柱掘形は他よりも大きい(方1m)。上層礫敷面で検出し、同時期の南北溝SD7133が掘込んでいる。

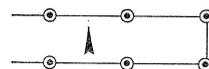
**SB9220** (PLAN 17, PL. 45) 6ABQ—A地区

斜道SF9232Bの登り口にたつ5間(12m)×3間(7.2m)の東西棟建物で、北に廂がつく。柱間寸法は桁行が2.4m(8尺)等間であり、梁間も廂ともに2.4m(8尺)の等間である。柱の掘形(方1m、深さ70cm)には、柱抜取痕跡がある。第I期の埴積擁壁SX6600を掘込み、上層礫敷面で検出した。第IIとIII期を区別する決め手はないが、SF9232Bに食い込み、中軸線上にあるSB7131と北廂の柱筋をそろえているのでこの時期におく。



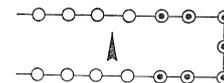
**SB7141** (PLAN 16, PL. 39) 6ABQ—C地区

東西溝SD7132の南側にある2間(12m)以上×1間(3.6m)の東西棟遺構。柱の掘形は長方形(3m×1m、深さ80cm)を呈し、径60cmの柱位置を30cm程度深く掘込んでいる。中軸線をはさんで対称的な柱間を想定すれば、桁行は6間(36m)となり中軸線上に桁行中央の柱がのることになる。このような建物の類例は他になく、構造も決めがたく、棧敷風の遺構かもしれない。上層礫敷面で検出。第II・III期のいずれかを決め難いが、SD7131、SD7132で囲まれていることから一応第III期にいった。



**SB7140** (PLAN 16, PL. 39) 6ABQ—C地区

SB7141の南にある6間(16m)以上×2間(4.8m)の東西棟建物。柱間寸法は桁行が2.7m(9尺)等間で、梁間が2.4m(8尺)等間である。柱の掘形は方70cmで、径30cmの柱痕跡をとどめるものもある。この建物の棟方向は西で北へ約4度振れており、ゆがんだ建物になっている。上層礫敷面で検出。SB7141とは共存できず、方向も振れているので第III期のなかでも時期が下るものとおもわれる。



**SB7134** (PLAN 16, PL. 39)

SB7141の東南にある3間(5.4m)×2間(4m)の東西総柱建物。柱間寸法はととのっておらず、とくに東妻柱列がゆがんでいる。柱穴は小さな円形(径30cm)であり、仮設建物のようなものである。上層礫敷面で検出。



**SD7133, SD9236** (PLAN 16, PL. 40・45) 6ABQ—A・C地区

SD7133はC地区南辺中央部にある石敷の南北溝(幅70cm、深さ5cm)である。側石はすでに

なく、扁平な安山岩を用いた底石およびその痕跡がのこるにすぎない。南端は消失しているが北端は壇上の南北溝SD6612をうけたようである。

SD9236はSB9220の北西にある東西溝（幅80cm、深さ10cm）で、6mをとどめるにすぎない。西岸には人頭大の安山岩をならべている。ともに上層礫敷面で検出したが、著しく破壊されているので、本来の姿をうかがうことができない。しかし、SD9236はSD7132の前身として東西にのび、それにSD7133がつながり、石積擁壁の上からSB8300の東雨落溝の排水をうけた可能性もある。

**SK7135** (PLAN 16, PL. 39) 6ABQ—C地区

SB7134の東側にある方形の土壇（方2m、深さ25cm）である。堆積土は上下2層にわかれ、上層からは瓦器片などが出土した。上層礫敷面で検出。

iv 奈良時代以前の遺構

**SX7800** (PLAN 15, PL. 37, fig. 45) 6ABQ—D地区

D地区の西北隅にある方墳の痕跡である。墳丘はすでに削平され方形にめぐる周濠だけがのこる。墳丘部は9m×8.2mの方形を呈し、方位を東北—南西にとっている。周濠は南西辺でののこりがよく、幅2.5m、深さ30cmであり、のこりのわるい東北辺では幅1m、深さ10cmであった。これは東北が高く南西に低い旧地形の状況をしめしている。周濠内には古墳存続時の黒褐色土が凹レンズ状に堆積し、そのうえに平城宮造営時の埋土がかさなっている。こうした堆積土中から埴輪や須恵器の破片が出土し、5世紀後半の古墳であったことがわかる。

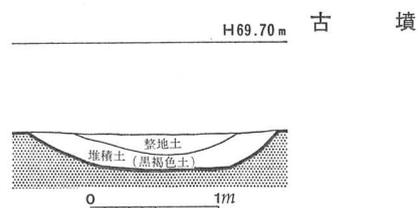


fig. 45 SX7800濠の断面

**SD7787** (PLAN 13・15, PL. 12・37, fig. 14) 6ABR—G・H, 6ABQ—C・D地区

発掘区の西寄り、中軸線の東11mのところにある素掘りの南北溝（幅1.5m、深さ15cm）。下層の礫敷でおおわれており、平城宮造営以前の溝であるとともに、方墳SX7800の上をとっており5世紀以後の遺構であることがわかる。また、第I期南門SB7801の下層でも確認できた（fig. 14）。さきに朱雀門地区で検出した下ッ道東側溝の延長線上にあり、下ッ道がこのあたりまでおよんでいたことがあきらかになった。

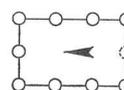
**SB7816, SB7817, SB7818** (PLAN 13, PL. 3) 6ABR—GH地区

SB7816はH地区北辺中央部にある2間（4.5m）×1間（3.3m）の東西棟建物。柱掘形は小さな円形（径30cm、深さ15～25cm）で、棟方向は西で北へ約4度振れている。地山面で検出した遺構で、和銅の造営時ないしはそれ以前の建物となる。つぎのSB7817と重複関係にあるが、柱穴が直接重複していない。

SB7817はSB7816の西に重複して建つ3間（4.9m）×2間（3.3m）の南北棟建物。柱掘形の状況はSB7816と同じ。地山面で検出した。



SB7818はSB7817の西北にある3間（8.3m）×2間（5.2m）の南北棟建物。北妻柱列の柱間は若干広がっている。柱掘形の状況はSB7816と同じ。棟方向は北で西で5度強振れている。地山面で検出した。



### 第三章 遺 跡

#### SA7824 (PLAN 13, PL. 3) 6ABR-H地区

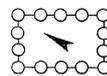
SB7818の西南にある南北塀。4間(長さ4m)で完結している。柱穴は径15cm, 深さ15cm程度であり, 杭を打ち込んだようである。地山面で検出した。

#### SD3772 (PLAN 7, PL. 31) 6ABR-P地区

P地区の東南隅にある素掘りの溝(幅80cm, 深さ13cm)で, 長さ19.5mを検出した。西南から北東方へゆるやかに彎曲している。地山面で検出。

#### SB3773, SB3774 (PLAN 7・14, PL. 31) 6ABR-P地区

小 建 物 SB3773はSD3772の西にある4間(6.6m)×3間(4.1m)の建物で, 棟方向は北で西へ35度32分振れている。柱の掘形は方50cm, 深さ10~20cmである。地山面で検出。



SB3774はSB3773の東側にならぶ2間(4.2m)×2間(3.2m)の建物。棟方向は北で西に約48度振れている。柱掘形の状況はSB3773と同じ。地山面で検出。



#### SK3782, SK3787 (PLAN 7) 6ABR-P地区

土 墳 SK3782はSD3772の北にある不整形の土墳(5m×1.4m, 深さ50cm)。堆積土からは少量の古墳時代の土器小片が出土した。地山面で検出。

SK3787はSK3782の北にある楕円形の土墳(3m×1.9m, 深さ15cm)。西端には第Ⅱ期の土壇SD3784が掘込んでいる。地山面で検出。

#### SK3798, SK3799 (PLAN 15) 6ABQ-B地区

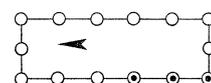
SK3798はB地区の西南隅にある方形の土壇(方3m, 深さ20cm)。第Ⅱ期の南面築地回廊SC3801Aがかさなっている。古墳時代の遺物が少量出土した。地山面で検出。

SK3799はSK3798の北にある不整形の土壇(5m×3.5m, 深さ30cm)。堆積土中に古墳時代の土器があった。地山面で検出。

#### SB7780 (PLAN 15, PL. 37) 6ABQ-D地区

大 建 物 D地区の東南隅に位置する5間(14.6m)×2間(4.8m)の南北棟建物。

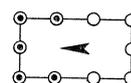
柱間寸法は桁行2.92m(10尺)等間, 梁間2.4m(8尺)等間である。柱の掘形は方1m, 深さ25cmであり, 径35cmの柱痕跡をとどめるものもある。北で若干西へ振れている。第Ⅱ期の南面築地回廊の北雨落溝SD3778と足場SS3805が重複する。地山面で検出。柱の掘形が比較的大きい。



#### SB7790 (PLAN 15, PL. 37) 6ABQ-D地区

SB7780の北7.2mをへだて, 柱筋をそろえて建つ3間(8.7m)×2間(4.8m)

の南北棟建物。柱間寸法は桁行2.9m(10尺)等間, 梁間は2.1m(7尺)と2.7m(9尺)にわかれる。柱の掘形は方1m, 深さ20cmで径35cmの柱痕跡をとどめるものもある。この建物とSB7780の棟方向は北で西へ約3度振れており, 同時期の建物。地山面で検出。



## D 東外郭地区

築地回廊で囲む第1次大極殿地域の東側は, 壬生門内に展開する東方の内裏・第2次大極殿地域と隣接する地区である。調査の結果, 発掘区の東限を南北に貫通する南北溝SD3715を境にして, その西側が第1次大極殿地域にぞくすることがあきらかになった。また, 後の第91次調査によってSD3715の東側, 6ABE-M地区以北は幅12mの南北に長い帯状の区画となって

第2次大極殿地域の外周をめぐる<sup>1)</sup>ことが明らかになっている。この地区の整地は一様ではないが、旧地形の低い南部(6ABE—P・M地区)では1mに達する盛土を行ない、北方に向うに従って盛土がうすくなり、6ABC区では地山を削平しているようである。木樋暗渠などによって築地回廊をぬけ、東外郭地区を横断してSD3715に排水する施設が8条あるが、それについては回廊地区でふれたので、ここでは略する。この地区の時期決定は必ずしも容易でないが、築地回廊内に準じて第Ⅰ～Ⅲ期の3期に区分した。なお、6ABE—P, 6ABS—E地区は第1次朝堂院地域の遺構にぞくするが、便宜上この項にふくめる。

### i 第Ⅰ期の遺構

**SD3765** (PLAN 5~7, PL. 19・30, fig. 46) 6ABS—E, 6ABE—M・K, 6ABD—D地区 初期の幹線水路

この地区の南半部を南北に流れる素掘りの南北溝(幅1.6m~2.6m, 深さ60cm)である。南方で深く、北方で浅い。D地区で消失し、北限をしることができない。南方は、後の調査によって、第1次朝堂院地域内を南下することが判明している。溝の堆積土が比較的厚いM地区から各種の遺物が出土しており、出土した木簡の年記によって和銅年間に存在したことがわかる。また、溝の使用期間は短く、M地区では粘土質の土によって西側から短期間のうちに埋立てている状況を顕著にとどめていた(fig. 2-46)。

ちなみに、中軸線の東102.6m(342尺)、東面築地回廊SC5500の東14.3m(48尺)に位置している。なお、平城宮造営以前の遺構とする見方もあるが、第1次大極殿地域の排水路である暗渠SD5555およびSD5584がこの溝に注いでおり、築地回廊建設時に存在し利用したことはあきらかである。木樋暗渠SD5560, SD5562, SD3770などがこの溝のうえを横断している。

**SD5584** (PLAN 5) 6ABE—M地区

築地回廊の東南隅の北13mで、東雨落溝SD5575からはじまり、南東に流れてSD3765に注ぐ溝(長さ8.5m, 幅1m, 深さ40cm)。SD3765の廃止とともにこの溝も埋立てられており、SD5575からの取付部分には木樋暗渠SD5562が掘込まれている。

**SA5550A・B, SA5551A・B** (PLAN 5, PL. 16・19, fig. 46) 6ABS—E地区

SA5550AとSA5551AはSD3765を埋立てたのちにつくる塀であり、第1次朝堂院地域をめぐる 朝堂院の塀  
 る。SA5550Aは南北塀で6間分(17.7m)、SA5551Aは東西塀で4間分(11.8m)の柱穴を検出した。L字状に交わる東北隅の柱穴は後世の野井戸によって破壊されているが、連続するものとみてよい。柱間寸法は2.95m(10尺)等間である。柱の掘形は方1.5m内外、深さ1.2m内外であり、地山に沈下した柱痕跡(径35cm)を下部にとどめるものがあり、上部には一まわり大きな柱抜取痕跡がのこる(fig. 46-1)。SA5551Aの西端はSC5500の西雨落溝の位置からはじまるので、回廊の東側柱に取付いたことになる。SA5550の南端は発掘区外にのびるが、後の調査によって第1次朝堂院地域をめぐる<sup>1)</sup>ことが判明している。

SA5550B・SA5551Bは朝堂院の木塀を築地に改めたものである。柱掘形のうえに厚さ25cmの砂礫をまじえる黄褐色土の盛土がのこる。ただし、破壊が著しくその幅をしることができなかった。

1) 『年報1975』p. 16

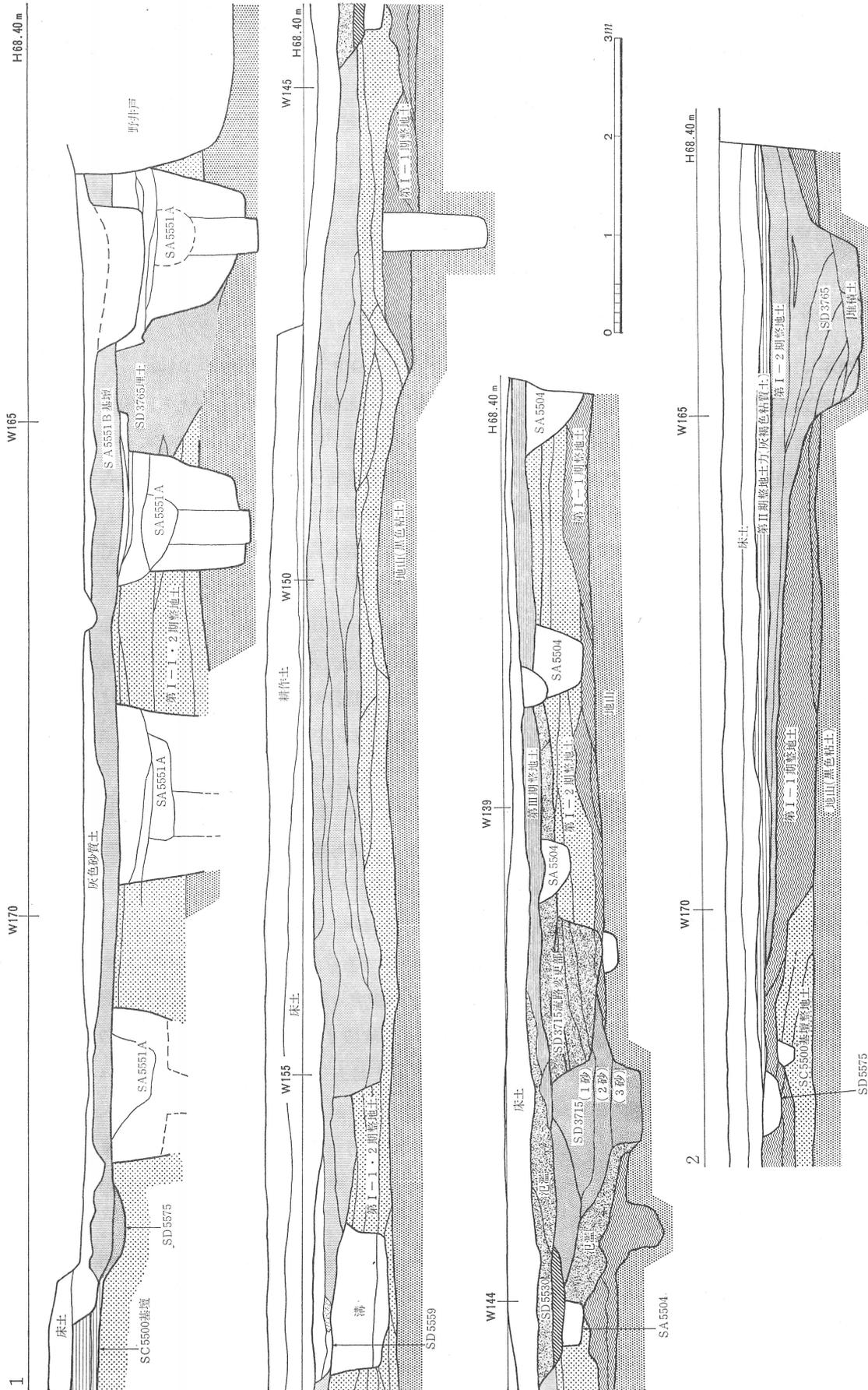


fig. 46 東外郭横断面図 1. S.48ライン 2. S.30ライン

**SD5559** (PLAN 4) 6ABE-P地区

SA5550の東2.1m(7尺)にある素掘りの南北溝(幅1.45m, 深さ60cm)。築地築造時にこの溝も埋立てられており、基壇土が西岸までおよび、堆積土には部分的に凝灰岩片がふくむところもあった。基壇の地覆石据付痕跡ないしは雨落溝の痕跡とみられる。

地覆石据付  
痕跡**SD3715** (PLAN 4・6~8・18・19, PL. 20・29・79・86, fig. 46)  
6ABE-P・M・K, 6ABD-D, 6ABC-U・V地区

東外郭地区の東限を画して南北に流れる素掘りの南北溝(幅2~3m, 深さ1m)。溝底は南に向かって傾斜しており、約300mの間で7.6m低くなっている。この溝は宮内を南北に流れる基幹排水路で、北は6ABO区から、南は6ABH区までの間約530mで存在を確認している。溝の堆積層は2・3層に区分しえたが、流水のために層位に混乱があるらしく、遺物の逆転がみられる。M地区南部では東方から1条、西方から3条の溝が合流しており、氾濫のあとをのこすのであるが、この付近からは木簡をふくむ奈良時代全般にわたる多量の遺物が出土した。P地区では霊亀元年の年記のある木簡が出土した土壌SK5535を掘込んでこの溝をつけているので、上限が715年を遡らないことをしめす。下限は包含する遺物から奈良時代末期におくことができ、奈良時代を通じて存続したことになる。

幹線水路

**SK5535** (PLAN 4, PL. 20) 6ABE-P地区

P地区には不整形の土壌が多数あり、SK5535もその一つ。幅1.8m, 深さ30cmの土壌であるが、東部をSD3715が破壊している。内から霊亀元年の年記のある木簡が出土した。

**SD5490** (PLAN 4) 6ABE-P地区

P地区の東南隅にある素掘りの東西溝(幅1m, 深さ20cm)。東方からSD3715に流入する。後の第91次調査で、この溝がSD3715から東へ18mのびていることを確認している。

第2次大極  
殿東外郭の  
遺構**SA5492** (PLAN 4, PL. 20) 6ABE-P地区

SD3715の東岸にある南北塀。全長4間(8.1m)であり、柱間寸法は2.03m(6.5尺)となる。柱の掘形は方50~80cmと不揃いで、南端の柱穴には径17cmの柱根がのこる。

**SA5504** (PLAN 4, PL. 20) 6ABE-P地区

SD5490の北14mにある東西塀。4間分(11.5m)を検出した。西はSD3715の西岸からはじまり第2次大極殿地区の南面外郭塀であるSA8165にとりつくことになる。ただし、柱間寸法は不揃い。SD3715の東岸地帯を南北に区画している。

**SD5505** (PLAN 4, PL. 20) 6ABE-M地区

M地区の南辺で東からSD3715に注ぐ素掘りの東西溝(幅2m, 深さ50cm)。水流の激しさをしめすように合流点が著しく氾濫している。この溝は第2次大極殿地域外郭の塀ないしは築地に設けた石積東西暗渠をうけていることが第91次調査であきらかになっている。この溝の堆積土から平城宮土器Ⅲが出土した。

**SB5595** (PLAN 4, PL. 20) 6ABE-P地区

P地区の東南隅にある3間(5.85m)×2間(3.9m)の東西棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに1.95m(6.5尺)等間である。柱の掘形は方60cmで、柱痕跡をとどめるものもある。東妻柱列は第91次調査で検出した。



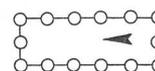
**SB5510** (PLAN 4, PL. 20, fig. 47) 6ABE—M地区

SB5495の北10.5mにある南北棟建物である。6間(11.4m)×2間(4.2m)の身舎北妻に、2間(3.4m)×2間(3.4m)の小室をとりつけている。身舎には棟通り中央に間仕切の柱穴をおく。柱間寸法は身舎の桁行・梁間ともに1.9m(6.5尺)を基準にするが多少の出入がある。小室は桁行・梁間とも1.7m(5.5尺)等間である。柱の掘形は不揃いだが、方60cm内外で、径17cmの柱根をとどめている。小室の身舎への取付きとして、身舎柱の内側に柱を建てた可能性がある。この建物の周辺には地山上に黄褐色粘質土の整地層があり、その上面で検出した。SB5495と柱筋を揃えているのでこの時期におく。



**SB5515** (PLAN 6, PL. 20) 6ABE—M地区

SB5510の北に近接する5間(10.7m)×2間(3.9m)の南北棟建物。柱間寸法は桁行が2.14m(7尺)等間で、梁間は1.95m(6.5尺)等間である。方位は北でやや西に振れているが、SB5495、SB5510とほぼ柱筋をそろえているので同時期とする。



**SB5520** (PLAN 6, PL. 20, fig. 47) 6ABE—M地区

M地区東北隅、SD3715の東岸にある3間(6.24m)×2間(4.16m)の南北棟建物である。柱間寸法は、桁行・梁間ともに2.08m(7尺)等間である。柱の掘形は不整形でおよそ方50cm、深さ60cmである。5個の柱穴には径14cmの柱根があり、北妻柱の柱穴には磚の礎盤がある。



**SB5521** (PLAN 6, PL. 20) 6ABE—M地区

SB5515の北10.5mにある2間(5.1m)×2間(3.6m)の南北棟建物。柱間寸法は桁行が2.55m(8.5尺)等間、梁間が1.8m(6尺)等間である。柱穴は小さく不揃いである。



**SX5528, SX5540, SX5527** (PLAN 4・6, PL. 20) 6ABE—P・M地区

溝に架けた遺構  
SD3715の両岸にならぶ小柱穴列である。P地区のSX5528は溝をはさんで2間(3.6m)×1間(3m)であり、M地区のSX5540は12間(40.2m)×1間(3m)、SX5527は5間(8.5m)×1間(3m)である。柱間寸法は2.33m(8尺)を基準にするが多少の出入がある。しかし、必ず東西の柱穴が対になるという原則がある。SX5528の柱穴が方80cmと大きいのに対し、他は径40cm内外の小柱穴である。東岸の建物群のあるところに限ってこの施設をもうけているようであり、橋のように溝に蓋した施設とかがえられる。西岸の柱列には第Ⅲ期の南北溝SD5530が掘込んでいる。

**SA5525, SA5526** (PLAN 6) 6ABE—M地区

SA5525はSB5520の北側にある東西塀。SD3715の東岸からはじまり東へのびるものよう  
で、2間分(4.3m)を検出した。柱の掘形は径40cmの円形である。SB5520と柱筋をそろえて

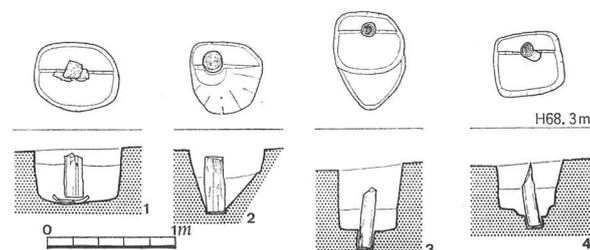


fig. 47 小規模建物の柱掘形  
1. SB5510イニ 2. SB5510イ三  
3. SB5520ハニ 4. SB5520ハ四

いるのでこの時期においた。

SA5526はSA5525の北に位置する東西塀で、2間分(4.3m)を検出した。柱の掘形は方60cmであり、SA5525よりも大きい。両者は建替えの関係にあるものようである。2条の塀の北側には建物がなく、南方の建物群を画した塀とみられる。

**SK3730** (PLAN 7) 6ABE-K地区

K地区中央、木樋暗渠SD3770の南にある土塀(方2.2m、深さ60cm)。埋土から土器片と多量の栓皮が出土し、また2点の木簡もあった。

**SX3720, SF3742** (PLAN 7, PL. 29, fig. 48) 6ABE-K地区

SX3720はSD3715に架けた橋で、溝の両岸に径10cmの杭を打込んだ橋脚がある。橋脚は近橋脚接する2本を一組として打込んだもので、東西両岸に各4箇所ある。間隔は95cmで、全長2.85mを3等分している。この橋脚は護岸をもかねて裏側に板をいれている。

橋をはさむ東西の岸に黄褐色粗砂土の硬い地面が幅5mでのびており、道路敷**SF3742**に想定することが可能となる。時期を決めたいが、橋の北15.3mに位置する東西塀SA3780に開く門との関係からこの時期においた。

**SA3780, SB3746** (PLAN 8, PL. 28, fig. 26) 6ABD-D地区

東西溝SD3775の北1.8mにあつて、東外郭地区を南北に2分する東西塀がSA3780である。南北に仕切る塀と門中央に1間(4.1m、14尺)の門SB3746をおいて、西に5間(14.8m)、東に3間(8.6m)の塀がつく。塀の柱間寸法は東端1間が2.7m(9尺)であるほかは、2.96m(10尺)等間である。柱の掘形はおおむね方80cm、深さ80cmだが必ずしも一定しない。門柱の掘形は横長の長方形(1.5m×3m、深さ80cm)で、塀の柱掘形よりも大きい。底には木材の礎盤をしく。塀の両端はSC5500の東側柱位置とずれており、直接回廊につながっていない。

**SA3750** (PLAN 8, PL. 29)  
6ABD-D地区

SD3715の西にある南北塀。SA3780の北3mから12間分(28.6m)を検出した。北は発掘区外にのびるようだが、C地区にはおよんでいない。柱間寸法は2.38m(8尺)等間で、掘形は方80cmである。第1次朝堂院東外郭ではこの柱筋にほぼ等しいところに和銅造営時に遡る南北塀SA8410が下層遺構として発見されており<sup>1)</sup>、それが6ABE-P地区におよぶことは確実である。同一の塀でなくともそれに関連するものであろう。**SX3729**はSD3715の東岸にある1間(2.7m)の柱穴で方2.1m、深さ30cmの柱掘形。SA3750の南端の1

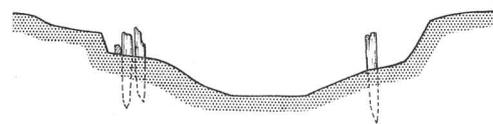
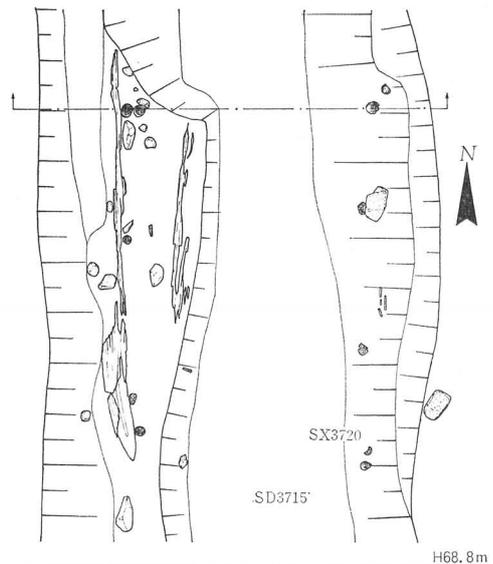


fig. 48 SX3720実測図

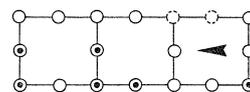
1) 『年報1977』p. 22

### 第三章 遺 跡

間とほぼ柱筋をそろえているので、ここに橋のような施設が想定できる。

#### SB8330 (PLAN 18, PL. 79) 6ABC—V地区

建物 SD3715の西岸に近接する6間(17.54m)×2間(5.26m)の南北棟建物である。棟通りの2間ごとに間仕切柱をおく。柱間寸法は桁行



2.92m(10尺)等間、梁間2.63m(9尺)等間となる。東側柱列の柱掘形はSD3715によって浸食されている。柱の掘形は方60cm～1mで、径25cmの柱痕跡をのこす。第Ⅱ期のSB8320と第Ⅲ期のSB8325の柱穴が掘込まれている。SD3715が開削される以前の建物であろう。

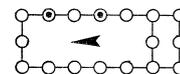
#### SB8315 (PLAN 18, PL. 79) 6ABC—V地区

SB8330の西北にある3間(4.6m)×2間(3.1m)の南北棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに1.5m(5尺)等間。柱の掘形は方40～80cmと不整形で、径22cmの柱痕跡をとどめるものもある。第Ⅱ期のSB8320と第Ⅲ期のSK8317が掘込んでおり、東側の柱穴が破壊されている。



#### SB8234 (PLAN 19, PL. 87) 6ABC—U地区

SB8315の北6mにある6間(12.5m)×2間(4.16m)の南北棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに2.08m(7尺)等間である。二通の梁間中央に仕切りの柱穴を配する。柱の掘形は方50～80cm前後で、径30cmの柱痕跡をとどめるものもある。SB8315と西側柱列がそろう。



#### SA8229 (PLAN 21, PL. 84) 6ABC—U地区

目隠塀 SC5500の東側柱列の東3mにある南北塀。全長は5間(11.66m)で、柱間寸法は2.33m(8尺)等間である。柱の掘形は方60cmで、径20cmの柱痕跡がある。方位を北で西へ少し振れているが、築地回廊に開く門SB8333の正面にあたることから、仮設的な目隠塀とかがえる。

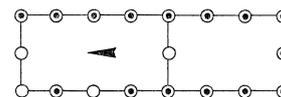
#### SA8231 (PLAN 18) 6ABC—U地区

SA8229の東にある南北塀。全長は4間で(11.24m)、柱間寸法は2.81m(9.5尺)等間である。柱穴は径40cmの円形を呈する。SA3777の間口の広いところに面していることから、目隠塀とかがえる。

### ii 第Ⅱ期の遺構

#### SB8320 (PLAN 18, PL. 79) 6ABC—V地区

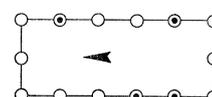
建物 SD3715の西岸にある7間(20.85m)×2間(5.95)の南北棟建物で、北から四通の棟通りに間仕切の柱穴を設ける。柱間寸法は桁行・梁間ともに2.98m(10尺)等間で、柱の掘形は方1～1.2m、



深さ40cmである。大きな柱抜取痕跡をとまうほか、径30cmの柱痕跡をとどめるものがある。抜取痕跡には土器・瓦片などが混入していた。第Ⅰ期のSB8330を掘込み、第Ⅲ期のSK8317, SK8318, SK8319, SB8325がかさなっている。

#### SB8240 (PLAN 19, PL. 87) 6ABC—U地区

SB8320の北22.5mにある5間(15m)×2間(6m)の南北棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに3.0m(10尺)等間である。柱の掘形(方1.5m内外、深さ70cm)には径45cmの柱痕跡をとどめるものがある。柱抜取痕跡



から建物の外側に柱をたおした状況がわかる。この抜取痕跡からは、瓦や土器片が出土した。第Ⅲ期の東西溝 SD8227が掘込んでいる。

**SA8236** (PLAN 19) 6ABC-U地区

U地区の北辺で検出した4間(10.6m)の東西柱列。柱間寸法は2.65m(9尺)等間で、柱の北辺の堀掘形は方1m、深さ70cmである。東西にのびて外郭北辺を画するのであろうか。ただし、北側にのびて東西棟建物になる可能性もすてがたい。北面築地回廊 SC6670 基壇南縁の延長線上にあるので第Ⅱ期においた。

iii 第Ⅲ期の遺構

**SD5530** (PLAN 4・6~8, PL. 20・29) 6ABE-P・M・K地区

南北溝SD3715の西岸にあって、これと重複する素掘りの南北溝で、K地区以南でみられる。新しい水路の上流では幅1m前後、深さ40cmであるが、P地区では幅3mに広がっている。SD3715の流路が埋って、この時期に改修したものであり、K地区以北ではSD3715をそのまま利用したものとみられる。小礫を含む砂が堆積し、瓦片などが混在した。

**SX5543** (PLAN 6, fig. 49) 6ABE-M地区

SD5530に架けた橋。80cmの間隔をおく東西両岸に南北2間(1.35m)の杭(径6cm)を打ちこんでいる。杭と溝肩との間には自然木をわたして護岸している。

**SA8238, SB8335** (PLAN 9・18・19, PL. 23・47・79・86) 6ABD-C, 6ABC-U・V地区

さきへのべたように、この時期の広場地区を横断する東西堀 SA3740の東端の柱穴から北へ東面を画する木堀のびる南北堀SA8238と門SB8335である。

SA8238は東面築地SA3800の心から東17.8m(60尺)に位置する。V地区のSB8335以北では27間分(72.67m)を確認し、その柱間寸法は3.0m(10尺)、2.7m(9尺)、2.4m(8尺)などと不揃いだが、概して2.7m(9尺)が多い。柱の掘形は方50cm、深さ20cm内外であり、円形を呈するものも多い。SB8335の南のD地区では柱穴を検出していない部分もあるが、一連の堀があったとみてよい。

V地区にあるSB8335は1間(5.4m, 18尺)の門である。北側の柱掘形は長方形(1.4×1.1m)を呈し、長軸を南北におき、2段に掘込む。掘形の北側のほうが深く(深さ70cm)、そこに径27cmの柱痕跡がある。また、掘形の北縁にはSA8238の柱穴がかさなっており、門を建てたのちに堀をつくったことがわかる。この門柱と堀の柱とは40cm程度離れていることになる。なお、南側の柱穴は半分しか検出していない。

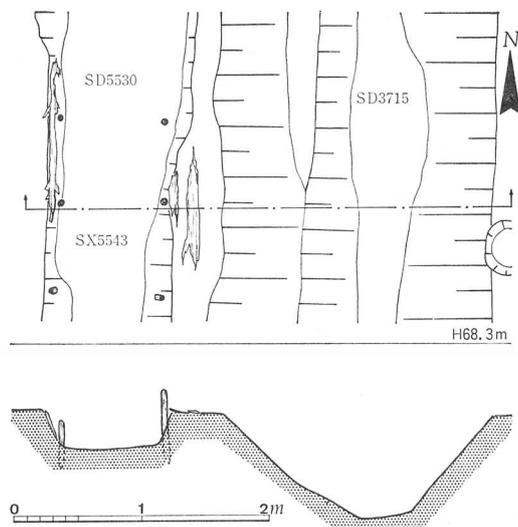


fig. 49 SD5530に設けた小橋SX5543

### 第三章 遺 跡

**SD8237, SD8239** (PLAN 8・9・18・19, PL. 23・47・79・86)  
6ABD—C・D, 6ABC—U・V地区

心々距離4.4m (15尺) をおいて平行する2条の南北溝(幅1m内外, 深さ30cm)。2条の溝は一条通りまで検出したが, さらに北へのびる可能性は強く, 大膳職地域の東面を画する南北築地SA350と同一線上にあることが注目される。6ACD—D地区では未検出だが, 2条の溝の中心にSA8238がおさまり, 堀の側溝とみられる。

**SA3741** (PLAN 7) 6ABE—K地区

門SB3768内にある6間(17m)の南北塀である。柱間寸法は南端の間が2.4m(8尺)であるほかは2.96m(10尺)等間である。柱の掘形は径25cmの円形を呈し, 径18cmの柱痕跡をとどめるものもある。第I期の東西木樋暗渠SD3770を掘込んでいる。ある時期に門SB3768を廃してこの南北塀を設けたのであろうか。

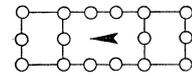
**SB9213** (PLAN 9, PL. 48) 6ABD—C地区

外郭内の建物 SA3800とSA8238とはさまれた地帯にある3間(5.65m)×2間(3.95m)の南北棟建物。柱間寸法は桁行1.88m(6尺)等間, 梁間1.97m(6.5尺)等間である。柱の掘形は径50cm前後の円形。



**SB8325** (PLAN 18, PL. 79) 6ABD—V地区

SD3715の西岸にある5間(12.64m)×2間(4.12m)の南北棟建物で, 南北に廂がつく。柱間寸法は身舎の桁行・梁間とも2.06m(7尺)等間で, 南北の廂は3.23m(11尺)である。柱の掘形は方40~60cmと不整形で, 径25~30cmの柱痕跡をとどめるものもある。第I期の建物SB8330, 溝SD8327, 第II期の建物SB8320に重複している。また方位が北で東に振れ, 東門SB8335の東に想定しうる道路内にかかっているため, 第III期のなかでも新しい時期にぞくするであろう。



## E 大膳職地域

再検討 6ABO地区の大膳職地域については, すでに『平城宮報告II・IV』で報告した。その後に行なった6ABO地区の第81次調査や第1次大極殿地域の発掘成果によって, 遺構の変遷について若干の補足と訂正を行なわざるをえなくなった。その大きな理由の一つは石敷東西溝SD130の解釈である。『平城宮報告II・IV』では, SD130を大膳職地域の南面を区画する築地の南雨落溝に想定したのだが, この溝は前述してきたように第I期第1次大極殿地域を区画する北面築地回廊SC8098の南雨落溝であることが判明した。そこで, 改めて大膳職地域の変遷について検討を加えねばならぬところとなり, 新たに検出した遺構に説明を加えるとともに変更部分についてもものべることにした。『平城宮報告IV』で想定した各時期の建物配置について根本的にことなる点はない。しかし, 時期区分については『平城宮報告II・IV』の第I期と第II<sub>1</sub>期を本報告の第I期, 第II<sub>2</sub>期を第II期, 第II<sub>3</sub>期と第III期を第III期とするのであるが, 後述のように絶対年代の比定については若干ことなるところがある(fig. 50, 51)。

### i 第I期の遺構

『平城宮報告IV』第I期(以下報告IV第I期などという)のうち, 北面築地回廊SC8098推定域に重複する遺構を平城宮造営前と第II期にふりわけると。ただし, SB299, SB370, SB347について

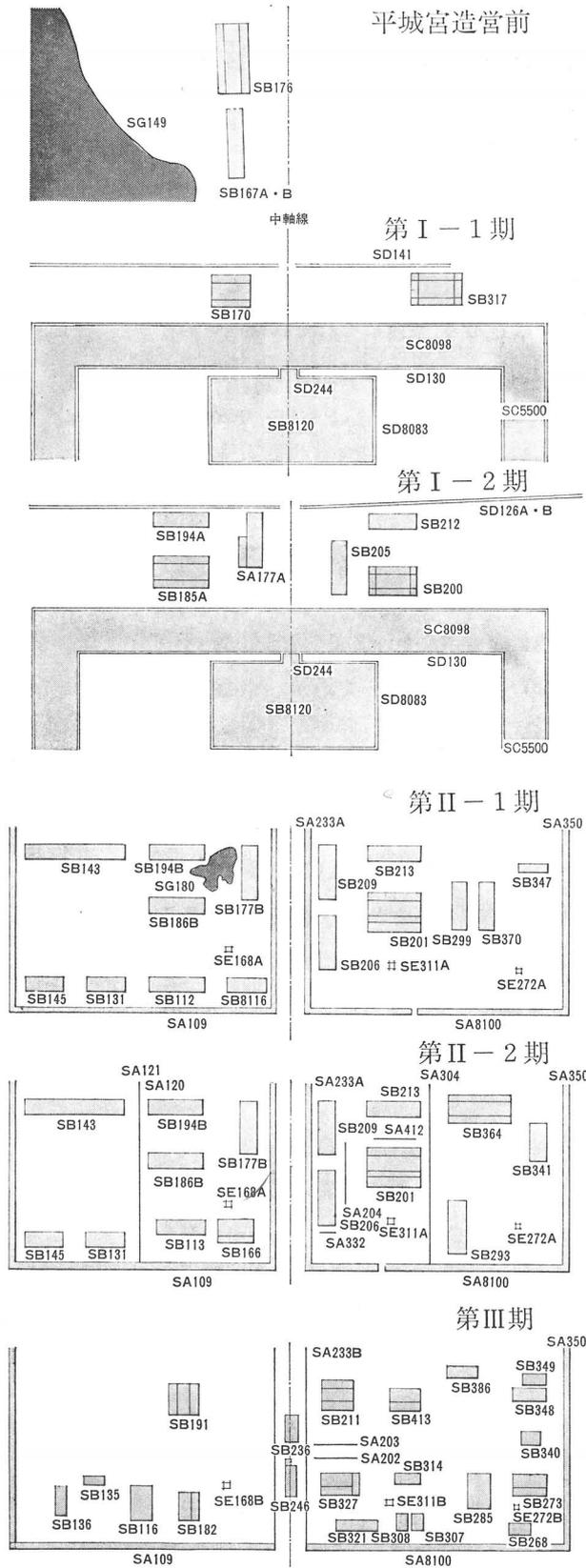


fig. 50 大膳職地域の遺構変遷改訂案

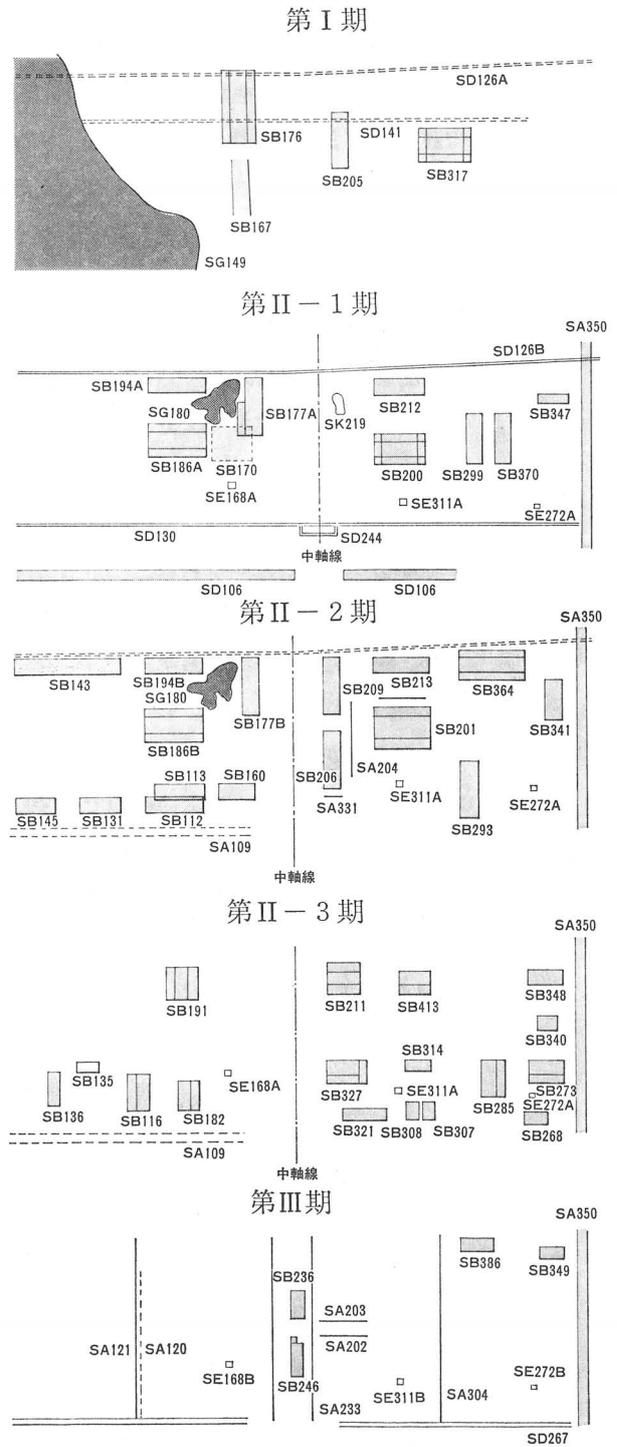


fig. 51 『平城宮報告IV』遺構変遷図

### 第三章 遺 跡

は重複しないが第Ⅱ期にいった。改定案の第Ⅰ期は2小期に細分できる。第Ⅰ-1期は中軸線をはさんで東方に建物SB317、西方にSB170があり、後方を東西溝SD141が画する。第Ⅰ期-2では、後方を画する東西溝SD126A・Bが北方にしりぞき、中軸線をはさんで東西にそれぞれ3棟、東方SB200・SB205・SB212、西方SB185A・SB177A・SB194Aの建物を配する。

#### ii 第Ⅱ期の遺構

第Ⅱ期の細分

第Ⅱ期はSC8098を廃し、この地域に築地で囲んだ官衙を形成する時期である。主として報告Ⅳ第Ⅱ-2期の遺構が中心となる。すなわち、中軸線をはさんで、東西にそれぞれ築地をめぐらし、建物を配するのだが、ここでは東区、西区とよぶことにしよう。第Ⅱ期も2小期にわかれる。第Ⅱ-1期の東区ではSB201を中心にして7棟の建物(SB206・SB209・SB213・SB299・SB370・SB347)が並び、南側に2穴の井戸(SE311A・SE272A)をおく。西区では、ほぼ同規模の建物8棟(SB8116・SB112・SB131・SB145・SB186B・SB177B・SB194B・SB143)を南側と北側によせて配置し、その中間東寄りに井戸SE168Aをおく。第Ⅱ-2期は建物配置を部分的に改変するとともに築地内を木堀で2分する。東区の東側では第Ⅱ-1期の建物を廃し、あらたに3棟の建物SB364・SB341・SB293をおく。東区の西側では建物に変更がなく、3条の堀SA332・SA204・SA412をくわえる。西区の東側では南の2棟SB113・SB166をたてかえるが、西区の西側では建物のたてかえがない。

築地内を画する2条の南北堀SA304・SA121は、報告Ⅳでは第Ⅲ期につくられたこととしており、殿舎地域の状況からすると、区画内を木堀で細分する傾向は第Ⅲ期において顕著であり、第Ⅲ期の可能性もつよい。しかし、今回第Ⅲ期においたSB116がSA121・SA120と重複すること、東区の東側にたてかえるSB364が小区画の中央建物とみられることから、第Ⅱ期に含めることにした。この際、西区の西側では井戸を欠くことになり、この区画が利用されなかった可能性もある。また、東区の西側にある3条の堀は第Ⅱ-1期にさかのぼってもよい。第Ⅱ期の遺構には今回の調査で検出したものがあり、つぎにその主なものをかかげる。

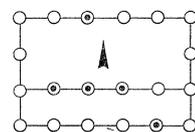
#### SA109 (PLAN 34・35, PL. 92・94・95, fig. 49) 6ABO-L・P 地区

6ABO-L地区以西では、粘土質の地山のうえに約70cmの第Ⅰ期整地(灰白色粘土・赤褐礫混り粘土)がある。第Ⅱ期のSA109はこの整地土に灰黄色粘土・黄灰色粘土を盛って築地基壇とし、南北に側溝を掘込む。第Ⅲ期には再度整地土(黄褐色粘土など)を盛りあげ、築地の改修を行なっている。南北側溝幅が一定しないので、基壇幅をきめえないが、第Ⅱ・Ⅲ期とも幅4m内外であったものとおもわれる。寄柱や門の親柱の痕跡がなく、築地幅も不明である。第Ⅱ期築地基壇上の下部から軒平瓦6282-B, 6284が出土した。L地区の土層観察用の試掘坑では、第Ⅰ期の灰白色粘土の深さと同位置で、軒丸瓦6732A, 6691A, 6721を採集した。このことについては、試掘坑の東に第Ⅱ期以降の土層が重複しているものと解釈した。

#### SB116, SB8116 (PLAN 34, PL. 92・93) 6ABO-L 地区

新たに検出した遺構

SB116は『平城宮報告Ⅱ』で5間×2間の東西棟建物として報告したものが、今回南廂をもつ5間(13.37m)×3間(8.61m)の東西棟建物であることがわかった。柱間寸法は桁行2.67m(9尺)、梁間は身舎で2.97m(10尺)、廂で2.67m(9尺)である。柱の掘形は方80cm、深さ30cmで、径40cmの柱



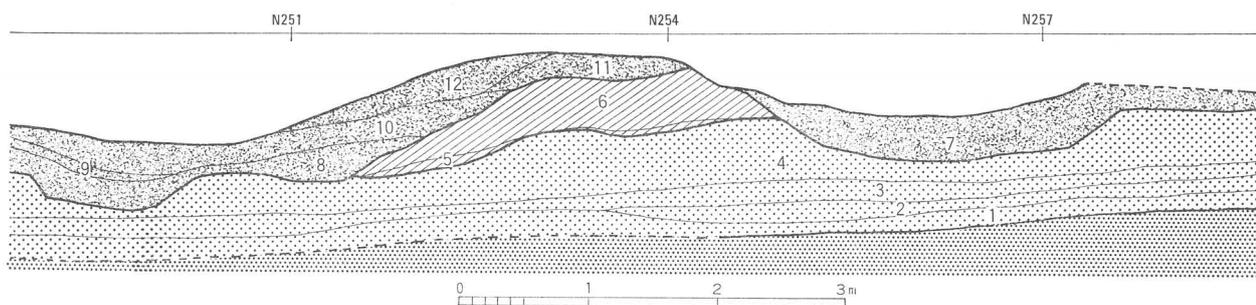


fig. 52 SA109土層断面

第Ⅰ期整地土(1.暗灰色粘土, 2.灰白色粘土, 3.赤褐色礫混り粘土, 4.黄色粘土), 第Ⅱ期整地土(5.灰黄色粘土, 6.黄灰色粘土), 第Ⅲ期整地土(7.黄褐色粘土, 8.灰色礫土, 9.木炭層, 10.黄褐色土, 11.灰茶褐色礫土, 12.茶褐色礫土)

痕跡がのこるものがある。なお、廂の西端柱の穴は検出できなかった。

SB8116はSB116と重複する5間(13.5m)×2間(6.0m)の東西棟建物。SB112・SB131・SB145の東西棟建物と棟通りをそろえる。柱間寸法は桁行2.7m(9尺), 梁間3.0m(10尺)である。柱の掘形は方1m, 深さ80cmで、径40cmの柱痕跡がのこる。



#### SK8079, SK8080 (PLAN 34・35., PL 89・90) 6ABO-E地区

E地区には不整形の大小土壇が多く存在する。時期を決めがたいものも少なくない。SK8079 探土 擴とSK8080は第Ⅱ-1期当初の遺構である。SK8079は長楕円形(17.5m×4.8m, 深さ60cm内外)の土壇。土壇内の堆積土は数層に区別でき、その最上層に第Ⅱ期の築地SA8100にともなう雨落溝SD267, 暗渠SD8077が重複している。SK8080も同様の土壇(24×5m, 深さ50cm内外)である。これらの土壇は、第Ⅱ期第1次大極殿地域の北面築地回廊を造成したときの探土壇とかんがえられ、築地回廊SC6670と築地SA8100の建設が同時でなく、後者が若干遅れることをしめしている。

#### SA8100, SD267, SD8094, SD8095, SB8101A・B, SB8102

(PLAN 33・34, PL. 88~91) 6ABO-E地区

SA8100はSA109の東延長線上にあり、大膳職地域の東区の南辺を画する築地。築地本体はのこっていないが、寄柱痕跡, 門, 南北の雨落溝によってその存在を知ることができる。寄柱痕跡は桁行6m(20尺), 梁間1.2m(4尺)を原則とする。柱の掘形は方50cm内外, 深さ10cm内外である。ただし、門の付近では桁行を縮めている。

東区南面の  
築地

SB8101A・Bは、SA8100の東部に位置する1間門である。SB8101Aは柱間寸法が3m(10尺), 親柱の柱掘形は方60cmで、その内寄りにそれぞれ寄柱痕跡をとまなう。SB8101Bは柱間寸法が同じく3mで、親柱の位置を50cm西へずらしてたてかえる。柱の掘形は方60cm。SB8101Aと同様、寄柱痕跡をとまなう。SB8101A・Bの東西それぞれ桁行1間目の寄柱痕跡も建替えがみられる。

SB8102はSB8101A・Bの西15mに位置する1間の門で、柱間寸法は3m(10尺)である。親柱掘形は径1.3mの円形を呈する。

SD267はSA8100の北3mにある素掘りの東西溝(幅1m)である。東に流れ東面築地SA350

### 第三章 遺 跡

を暗渠でぬけ、東の築地外に排水したようである。

SD8094・SD8095は、それぞれSA8100の南2m、2.9mをへだてた位置にある東西溝。前者は幅35cm、後者は幅65cmである。SD8094は基壇地覆石据付痕跡であり、SD8095は南雨落溝に想定できる。

SA8100の東西両端はあきらかでない。しかし、西端は後述する東西暗渠SD8077の検出によって、築地SA233と直交し、東はSA350とまじわり、大膳職地域の東区を形成してたことがわかる。

#### SA233A・B, SD8077 (PLAN 34, PL. 90・91) 6ABO-E地区

東区西面の  
築地

『平城宮報告Ⅳ』で第Ⅲ期の南北木塀としてきたものであるが、東西暗渠SD8077や部分的に築地の雨落溝が残存することから、木塀の前身として築地SA233Aが存在したことが推定できる。第Ⅲ期の木塀はSA233Bとよぶことにする。

SD8077は凝灰岩の板石を組合せた東西暗渠(長さ2.5m、幅71cm、内法幅47cm、内法高22cm)である。それは長方形(64cm×28cm、厚

さ11cmを標準とする)の凝灰岩板石を用いて側壁とし、天井をかけたものであり、底石を欠いている。この暗渠の北にSA233Bの柱穴が重複する1間(3m)の柱穴があり、これを門の親柱に想定することが可能である。

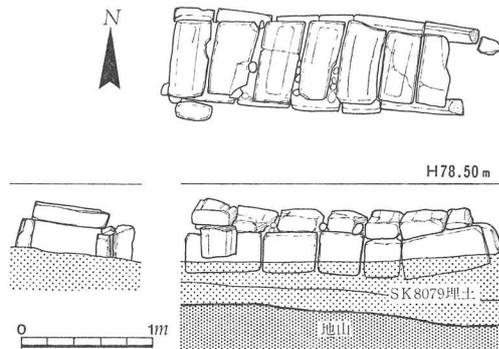


fig. 53 SD8077実測図

#### iii 第Ⅲ期の遺構

報告Ⅳの第Ⅱ—3期と第Ⅲ期をあわした。さきの時期区分では、第Ⅲ期の築地内に建物がほとんどない状況となる。これががもっとも大きな変更理由である。東・西両区の南北塀を第Ⅱ期にくりあげたほかは、今回第Ⅱ期にさかのぼらせた遺構はない。

#### iv 平城宮造営以前の遺構

さきに報告Ⅳで第Ⅰ期に比定した西区のSB167が北面築地回廊と共存しえなくなり、一時期繰上げる必然性がでてきた。またその北側で柱筋をそろえて建つ南北棟建物SB176も同様に古くなる。2棟の建物は他の建物にくらべて方位をことにし、柱掘形の残存状況も良好といえない。とはいえ、SB167には同位置でのたてかえがみとめられるので、仮設建物でもない。一方、南方から北上する下ッ道の延長線上西側にそっており、平城宮造営以前の施設とみなざるをえなくなった。

## 第IV章 遺 物

第1次大極殿地域からは、相当量の遺物が出土しており、それらは、木簡・建築部材・瓦罎類・土器類・木製品・金属製品・石製品などにわけられる。出土遺物のうち瓦罎類の出土がもっとも多く、ついで土器類が多い。他方、金属製品や石製品は少量である。

遺物は土壙・溝・井戸・柱穴・整地土などから出土し、瓦や土器の大部分は整地土のなかに混在するものであり、遺構にともなって発見されたものは多くない。それに対して遺物の性質上、木簡や木製品は滞水状態の遺構でしか出土していない。遺構にともなって発見される遺物の多くは、主としてこの地域の辺縁地区に存在しており、広場・殿舎地区の中心部で発見したものは少なく、かつ保存もよくない。

南面築地回廊上に建設されている第I期の東楼 SB7802 の柱抜取痕跡からは、少ない遺物が出土した。遺物の種類も多岐にわたり、この地域の性格をさぐるうえで貴重である。すでにのべたように、SB7802 は第II期の宮殿建設に先立って撤去されたものであり、その柱抜取痕跡にある遺物はごく短期間のうちに捨てられたものとみられる。遺物のうち、木簡によれば天平勝宝5年以降にこの建物が撤去され、南門を警固した衛門府にかかわる一連の遺物として理解することができる。

平城宮内を南北に貫通する幹線水路である SD3715 から多くの遺物が出土した。遺物は奈良時代後半の比較的長期間にわたり、溝の堆積土層の上下関係と遺物の前後関係とは必ずしも対応していない。堆積した遺物が溝の東西いずれの地域からすてられたかという点が問題になる。軒瓦の文様からすれば、内裏地域や第2次大極殿地域に近似する傾向を示し、木簡からも兵衛府・中衛府に関する文書を含んでいることから東方地域との密接な関係が想定される。

建築遺構と軒瓦が密接な関係で検出されたのは、南面築地回廊である。そこでは建物の周辺に濃密に瓦片が散布しており、建物に使用した瓦が周囲に堆積したものとみとめられた。そうしたことから、ここでは南面築地回廊の使用瓦の形式を明確に限定しえたのである。一方、殿舎区では建物の解体時に柱抜取痕跡に埋込んだ瓦によって時期ごとの瓦形式を決定しえた。

遺物の全体的な傾向については、紀年銘木簡および瓦・土器によって編年を行なうことができる。軒瓦は8世紀前半の瓦(平城宮瓦I・II)がきわめて多く、これに後半の瓦(平城宮瓦III)がつぐ。土器では8世紀前半の土器(平城宮土器I～III)がきわめて少なく、8世紀後半から9世紀初期の土器(平城宮土器IV～VII)が多数をしめている。

今回の報告で注目すべきことは、木樋暗渠や井戸枠に転用された柱などの建築材が比較的点である。すべての材をとり上げたわけではないが、東西築地回廊を横断する木樋は、同一建物の柱材などを利用しており、仕口痕跡の復原から木堀の柱であることがわかった。SE9210の井戸枠は校倉の校木を転用した珍しい別である。柱根の保存状況のよいものがあり、切断して、用材の樹齢をたしかめた。

# 1 木簡

6ABE区と6ABR区で総計1,128点の木簡が出土した。木簡が出土した遺構は、東外郭地区(6ABE区)の溝および土壇の6箇所(SD3715, SD5490, SD5564, SD3765, SK5535, SK3730)と回廊地区(6ABR区)東楼SB7802の柱抜取痕跡である。これら木簡に共通する点は、削屑が多いことである。SD3715では出土木簡の90%以上が削屑であり、SB7802でも48.8%の多くをしめている。記載内容では、中衛府・兵衛府・衛門府など衛府関係のものが多く、宮殿警備の重要な資料であるとともに宮殿の性格を決定するうえで重要な役割りを果たしている。

以下、遺構ごとに出土状況と記載内容の概略をのべ、<sup>1)</sup> 釈文をかけることにする。ただし、ここでは出土木簡のすべてをとりあげることはせず、遺構の理解に必要なものあるいは記載内容の重要とおもわれるものにかぎって報告する。全貌については、おって出版されるであろう『平城宮木簡』に収録する。

## A SD3715出土の木簡 (PL.96~101)

南北溝SD3715は平城宮の第1次大極殿地域と内裏・第2次大極殿地域の間を北から南へ流れる宮内幹線水路で、主として6ABC・6ABE区で検出した。木簡が発見されたのは下流にあたる6ABE区においてであり、769点が出土している。溝の堆積土は上下2層に大別でき、上層からの出土量が多く、下層からは少ない。しかし、他の遺物と同じように層位によって遺物の年代や記事の相違を指摘することはできない。紀年のある木簡では神護景雲3年と記したものが2点、内容によって神護景雲3年と判断しうるものが1点あり、ほかに宝亀元年のものが1点ある。他の木簡の記載内容からみても、この溝から出土した木簡を769年(神護景雲3年)~770年(宝亀元年)頃のものともみ矛盾せず、伴出の土器年代とも齟齬しない。内容には中衛府・兵衛府に関する木簡が目ざされ、ほかに鰯など海産物の食品につけた整理用の物品付札が多い。

なお、SB3715はさらに南下して、今回の報告地域外の6ABF区、6ABG区、6ABH区からも多くの木簡が出土しているが、それらは時期的にみて神亀~天平初年の建設工事関係の木簡<sup>2)</sup>であり、今回報告する木簡とは性格をこととしている。

木簡1 □兵衛府移中衛□<sup>(府カ)</sup>

兵衛府から中衛府に送った「移」の削屑。中衛府は神亀5年に設置され、大同2年に右近衛府に改められた(『続日本紀』神亀5年8月条、『類聚三代格』大同2年4月22日格)。(PL.98)

1) 釈文の右の数字は、木簡の長さ・幅・厚さおよび木簡の形式番号をしめしている。法量にパーレンがついているのは木簡が欠損していることをしめす。型式番号および釈文の表記方法は、『平城宮木簡三』(奈良国立文化財研究所史料第17冊)を参照されたい。なお、主な型式番号について簡単に記しておく。011型式：短冊型。019型：一端が方頭で、他端は折損などによって原形不明のもの。021型式：小型の短冊型。

031型式：長方形の材の両端左右に切り込みをいれたもの。032型式：長方形材の一端に左右から切り込みをいれたもの。081型式：折損、腐蝕などによって型式が決らないもの。091型式：削屑。なお型式番号の第1位の数字は時代をしめし、6は奈良時代である。

2) 加藤優「1976年度発見の平城宮木簡」(『年報1977』p.38)

木簡 2 (表) □衛府移 中衛府 一番正八位下<sup>〔賀茂カ〕</sup>□□□□

(裏) □□仍故移

(192)×11×3 mm 6081

冒頭の一字は外とも考えられるが、木簡 1 からして「兵」に推定すべきであろう。兵衛府から中衛府に送った「移」である。内容は兵衛の編成を記して中衛府に連絡したものか。『延喜式』などでは後述の行夜（ヨマハリ）や宮内各所の警備について近衛と兵衛が共同して行動することが定められており、平城宮でも中衛府と兵衛府が警備の編成（番）について相互に連絡をとったことを示す。『宮衛令』開閉門条の古記に「持時行夜。謂一夜二分番上以番巡行也」とあり、夜警の輪番を一番、二番とよんだことがわかる。上下が折損している。(PL. 97)

木簡 3 (表) 請繩參拾了 右為付御馬并夜行馬所請

(裏) 如件 神護景雲三年四月十七日番長非淨濱 323×25×4 mm 6011

番長である非淨濱が御馬や夜行馬に装備する繩を請求した文書。御馬は年ごとに諸国の御牧から貢がられたもので、節会などの儀式、あるいは行幸に使用される馬である（『延喜式』左右馬寮式御馬条、五日式条）。夜行馬は行夜（ヨマハリ）のための馬で、『宮衛令』開閉門条では「持時行夜者、皆須執仗巡行」とあり、宮内の夜警のことをのべている。同じく『宮衛令』分銜条では「衛府持時行夜」と京内の夜警をのべ、その『令集解』同条古記所引の今行事には「中衛左右兵衛共行夜、一夜巡行一夜停止、衛士不預也」のべているから、奈良時代の実情としては、行夜が中衛と兵衛の職掌であったことわかる。なお、行夜は平安時代でも近衛と兵衛によって行なわれた（『延喜式』近衛式行夜条、兵衛式分配条）。他の木簡に中衛府充の文書があることからすれば、この木簡の充先きも中衛府である可能性がつよく、そうであるとすれば非淨濱は中衛府所属の番長であるともかんがえられる。しかし上引の『延喜式』左右馬寮式では「凡行幸御馬一疋馬子八人」に註して「右兵衛二人、馬部六人」とのべていること、同式衛府馬牛条に「左兵衛行夜二疋」とあって注に「櫪飼加鞍并衛士、毎夜充之」とあるので、御馬や夜行馬に兵衛が関係しており、番長の非淨濱が兵衛府にぞくした可能性もある。左右兵衛府にはそれぞれ番長 4 人、中衛府には 6 人の番長がいた（『職員令』、『続日本紀』神龜 5 年 8 月条）。(PL. 96)

木簡 4 □兵衛等充行夜使如件

兵衛などに行夜の使いを命じた文書。発給者は兵衛府であろう。(PL. 98)

木簡 5 (表) 眞龍列 □部眞神 物部老

(裏) 阿奈石□ □<sup>〔赤カ〕</sup>□□人 合四人

152×13×4 mm 6011

眞龍の列にぞくする 4 人の名前を記した木簡。藤原宮木簡に同類の例がある<sup>1)</sup>。列は烈と同義で『軍防令集解』の古記逸文では、兵士 5 人で 1 列を構成する。列記の人物が兵衛府・中衛府のいずれであるかは不明だが、眞龍を加えた 1 列 5 人のすべての名前が記されている。もっとも、仕丁の列については正倉院文書に 50 人を 1 単位とした例もある（『大日本古文書』4-p. 369）。上端は調整、下端は切断しているが本来の面であろう。(PL. 97)

1) 『藤原宮出土木簡 5』p. 6

第IV章 遺物

木簡 6 (表)  $\square\square\square\square\square\square\square\square\square\square\square\square\square\square\square\square$   
[衛府カ] [人カ]  
 半大初位上若湯坐

(裏)  $\square$   $\square\square$  (135)×23×3 mm 6081

某衛府の発行した文書の断片。上端は折損し、下端は二次的に切断している。右辺は割れている。(PL. 97)

木簡 7 少志 155×15×5mm 6051

少志は衛門府・衛士府・兵衛府・中衛府の第4等官である。他の木簡の例からすれば、兵衛府もしくは中衛府の少志であろう。兵衛府には1人、そのほかはそれぞれ2人づつが配置されている。上端は腐蝕しているが、ほぼもとの削り面をとどめる。

木簡 8 (表) 式部大(輔大伴益立) $\square\square$  伊賀守伊勢子老 遠江介藤井川守 出雲(守布カ) $\square\square$   
 内倉介(倍)安(人主) $\square$ 草万呂 美野守石上息継 周方守弓削秋万呂 勢(人主) $\square\square$   
 伊与守高円廣(世カ) $\square$  下総員外(介カ) $\square$

(裏) 下野介(麻王)當(方) $\square$   $\square$ 守田部息万呂(伊伎カ) 介弓削廣(右兵衛) $\square$  桑原王(方) $\square$   
 能登(守石川人麻呂) $\square$  左馬司頭牟(都支カ) $\square\square$ 王 右大舎人介(文屋カ) $\square\square$ 万呂  
 員外介(弓)  $\square$   $\square$   $\square$  右衛士督備泉 玄蕃(助)相模(波) $\square$   $\square$   $\square$

343×37×3 mm 6011

この木簡にみえる人名のうち右大舎人介某を除く<sup>1)</sup>ほかは、すべて『続日本紀』神護景雲3年任官記録 6月乙巳条にみえる任官記事と一致する。木簡では人名や官名の記入のしかたが整っていないので、同日行われた任官に際しての聞書的な文書とおもわれる。たとえば、官名では内蔵助→内倉介、左馬頭→左馬司頭などと記している。記載順序は『続日本紀』では京官をさきにし外官をあとにするとともに、外官は七道の順にそろえて記す。それに対し、木簡では順序不同である。また『続日本紀』にあらわれる官人の上総員外介があらわれていない。右衛士督備泉<sup>2)</sup>では督と備の間に吉字を省略している<sup>3)</sup>。現在、4片に分かれているが上下端に調整面をとどめ、左右辺も部分的に調整面をのこしており、完形品である。全体に腐蝕が著しい。(PL. 96)

木簡 9 (表) 仕丁合拾五人薪取 $\square\square\square$   
[人カ]  
 (裏)  $\square$   $\square$

(203)×(41)×2 mm 6081

仕丁の仕事の割振りを指示した文書木簡。仕丁が薪取りにあてられたことは、正倉院文書 仕丁 (『大日本古文书』6 p. 462など)にみえる。下端は折損している。上端は腐蝕しているが、調整面をわずかにとどめる。薪取の左の墨跡は削りとられている。

1) 文屋万呂ならば、同人は『続日本紀』の神護景雲元年三月己巳条に右大舎人介に任命されている。あるいは『続日本紀』の誤りか。  
 2) 早川庄八「任官関係文書と任官儀について」

『史学雑誌』90-6  
 3) 藤原本簡では「備道前国」としたり「吉備眞吉備」を「吉備眞備」とする例があり、「備」のみで「キビ」とよませたらしい。

木簡10 (表) 造花所<sup>[人 請カ]</sup>□□□□飯参斗陸升

造花所

(裏) 六月六日雀部石麻呂

(175)×25×2 mm 6081

造花所から飯を請求した文書木簡。造花所という官司名は他の文献にあらわれていない。上端折損。下端は切りこんで切断する。(PL. 101)

木簡11 厨 請飯□□□□  
[依 員 カ]  
□□□□□□□□

四月□□□□

(97)×(26)×3 mm 6081

厨が飯を請求した文書木簡の断片。上端に調整面をとどめ、下端は折損する。右辺は割れている。

木簡12 (表) 請食 石寸建万呂<sup>作日朝夕者</sup>

(裏) 四月廿四<sup>[日カ][廿カ]</sup>□□□東万呂附

6081

食料請求の文書で、石寸建万呂は食料の支給をうける人。「作日朝夕」とは昨日の朝夕料の意味であろうか。東万呂は請求した担当の官人。朝夕料は官人に支給される食料で、諸司常食ともいう。上端は折損するが、下端に調整面をとどめている。

木簡13 (表) 請酒壹斗伍升□□□□

(裏) [将 監 曹 司][請カ]  
□□□□□□□□

(62)×26×2 mm 6081

酒の請求文書。ここでいう将監は木簡1・2などによると中衛府の将監であろう。上端は切 将監曹司  
断され、下端は折損している。(PL. 101)

木簡14 野中大成  
海部稻□

(78)×24×3 mm 6081

兵衛府ないしは中衛府の交名であろう。(PL. 97)

木簡15 三斗九升

6091

穀物の容量か。(PL. 97)

木簡16 主税大允<sup>[住カ]</sup>船□□□□

6091

主税大允

主税大允は主税寮の第3等官。(PL. 97)

木簡17 □田益足 九河内小成

6091

二人の人名を記す。(PL. 98)

木簡18 民金麻呂

6091

民金万呂は平城宮木簡96(『平城宮木簡一』)にみえ、兵衛に推定されているが、この木簡の人物と同一人物か否かは不明。また木簡71にも金万呂がみえる。(PL. 98)



木簡27 (表) □鳳至郡

(裏) □美崎所生

(56)×16×3 mm 6081

荷札の断簡である。鳳至郡は『倭名抄』では能登国に所属している。地名の後に「所生」と 荷 札  
記し、つぎに物品名を表記する貢進物の荷札は、平城宮木簡402(『平城宮木簡一』)などにみえる。  
上端は折損している。(PL. 98)

木簡28 飛驒国□□

(111)×(10)×2 mm 6081

木簡29 蕨甲羸交作鮑一塙

102×50×3 mm 6059

蕨甲羸交作鮑につけた付札。蕨甲羸(ウニ) 交作鮑(コウサクノアワビ)とは、アワビをウニ う に  
であえた食品。塙は算用の単位(土器の名称と推測される)で、平城宮木簡399(『平城宮木簡一』)  
に用例がある。(PL. 97)

木簡30 薄鯪卅七斤<sup>五編</sup>

170×26×5 mm 6031

薄鯪(ウスアワビ)につけた付札。五編とは鯪をまとめた単位をいう平城宮木簡2290(『平城宮 あ わ び  
木簡二』)にみえる。(PL. 99)

木簡31 蒸鮑壹籠<sup>別卅口</sup>

148×24×3 mm 6051

蒸鮑(ムシアワビ)の籠につけた付札。籠別に30口をいれたのだろうか。(PL. 99)

木簡32 蠣腊三籠

160×24×3 mm 6059

蠣腊(カキノキタヒ)につけた付札。(PL. 99)

木簡33 雑魚楚割一籠

130×25×3 mm 6051

雑魚の楚割(スハヤリ)につけた付札。(PL. 99)

木簡34 雑魚腊

106×21×3 mm 6051

雑魚の腊(キタヒ)につけた付札。(PL. 99)

木簡35 押年魚<sup>上</sup>

61×14×3 mm 6031

あ ゆ

押年魚につけた付札。上は品質の上下をしめすか。(PL. 99)

木簡36 鹿穴

68×17×3 mm 6032

鹿の肉につけた付札。(PL. 99)

木簡37 伊知比古

57×20×3 mm 6032

伊知比古(イチゴ)につけた付札。(PL. 99)

第IV章 遺物

木簡38 (表) 「乃止淨麻呂乃官」 (a)

徳足徳徳鳳至 (b)

(裏) 謹淨継継人 (c)

「□□□□□」 (d)  
〔解カ〕

119×30×13mm 6011

習書 登国鳳至郡のことで、木簡27と関係するか。(PL.100)

木簡39 (裏)

飯飯飯飯  
〔飯飯〕  
飯飯飯□□  
〔飯〕  
請□四升四合  
〔飯〕  
飯飯□

「御曹司」中

飯 □□ □□飯三升  
〔造〕

口径262~255, 高さ15mm 6061

木盤の裏面に墨書したもの。中央の「御曹司」はこの器の所属を記したのであろうか。平安宮には御曹司があるが、この御曹司と関係するか否か不明。他は別筆の習書。(PL.145)

木簡40~45

文字を記していない木簡が6点ある。ただし、それらは木片の一端に切込みをいれたり、尖らしたりしたものであり、短冊型の6011型式や小片の6021型式のものあるいは一般的な木片は木簡になりうる可能性はあっても、この項ではとりあげていない。多数の削屑を包括していることから、古い文字を削りとった白木の簡が存在してもよく、ここにあげる6点は付札として使用するためにあらかじめ用意した木簡とおもわれる。しかし、それらが新品の木簡なのか再生の木簡なのかという点については判別できていない。

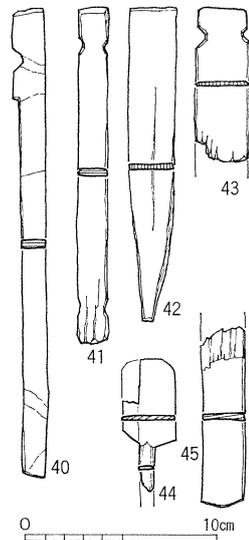


fig. 54 SD3715出土の未使用木簡

木簡40は半分に割れた6032型式。保存は良好。木簡41は両端に切り込みをいれた6031型式。表面の腐蝕が進んでいる。木簡42は一端を尖らせた6051型式。表面は腐蝕している。木簡43は一端を折損するが、一端に切込みのある6039型式。木簡44は一端を圭頭状につくる6019型式。木簡45は題籤(6065型式)の破片である。木簡40がスギの割板であるほかは、すべてヒノキの割板を用いている。(fig. 54, Tab. 3)

番号	型式	長さ	幅	厚さ
40	6032	254	(17)	4
41	6031	183	16	5
42	6051	171	30	3
43	6039	(84)	29	2
44	6019	(97)	23	4
45	6065	(121)	(9)	5

Tab. 3 SD3715出土未使用木簡の寸法 ( )は現存値, 単位mm

## B SD5564出土の木簡 (PL. 99)

SD5564は6ABE-M地区にある素掘りの東西溝で、木樋暗渠SD5563によって東面築地回廊SD5500をくぐりぬけ、広場地区の雨水を東の幹線水路SD3715に排水している。木簡はこの溝の東半部分から出土し、堆積土の状況からするとSD3715が逆流して流れこんだものようである。したがって、木簡の性格もSD3715と同類のものとしてあつかうことができよう。ただし、この溝は第Ⅱ期には廃絶するものと想定されているが、木簡の記載内容からすれば、第Ⅱ期になって木樋暗渠を除き開渠として使用された可能性がある。8点出土している。

木簡46 去勝宝九歳  
奈良□□五 6065  
題籤の断片。勝宝9歳の文書の卷子につけられていたものであろう。 勝宝九歳

木簡47 一升人給□□□又<sup>(料カ)</sup> 6091  
人給は『延喜式』に散見する人給料の意味であろう。平城宮木簡204・2492(『平城宮木簡一・二』)あるいは墨書土器(SD4951出土)に「人給」の語がみられる。また平城宮木簡3535(『平城宮木簡三』)や墨書土器(SD1250出土)には「人給所」という官司名を記したのものがある。

木簡48 熬海鼠 127×17×2mm 6051  
熬海鼠(イリコ)につけた付札。(PL. 99)

## C SK5535出土の木簡 (PL. 97)

SK5535は6ABE-9地区のSD3715の西岸にあり、径1.5m内外の不整形な小土壙である。出土した木簡は17点であるが、判読しうるものは少ない。ただし、なかに靈龜元年の記年を記するものがあって、SD3715の開削時期の上限を知る手掛りになっている。すなわち、SK5535が埋められたのち、その東辺を掘込んでSD3715がつくられているので、SD3715の開削が靈龜元年(715)を遡らないことになる。

木簡49 靈龜元年九月 (151)×(16)×4mm 6081  
左右の辺には二次的な調整面を部分的にとどめる。上端は折損するが、下端は裏から切込み 靈龜元年  
をいれて折っている。

木簡50 靈 (30)×(15)×4mm 6081  
木簡49と同筆で、本来は木簡49の断片であろうか。

## D SD5490出土の木簡 (PL. 100・101)

SD5490は6ABE-P地区にある素掘りの東西溝で、東方の第2次大極殿地域からSD3715に流入している。73点出土しているが、判読できるものは少ない。

第IV章 遺物

木簡51 揖保郡二斗九升 206×20×4mm 6032  
播磨国揖保郡からの貢進荷札。(PL.101)

木簡52 (表) 英多郡  
(裏) 奈羅<sup>[列カ]</sup>□□□□  
□支部力一斗五升□□□□ (98)×20×4mm 6059  
英多郡は美作国にぞくする。

木簡53 (表) 天山司解 進上飛炎州九枝  
(裏) 「勘了」 (236)×38×4mm 6081

天山司から建築部材である飛炎垂木を進めた文書。天山司は天山にある材木をつかさどる官  
天山司 司であろう。天山の地名は伊予国久米郡にあるが、関連するか否かは不明。裏面の「勘了」は  
別筆。材木の数量を照合したときのものか。右下は小刀できりとっている。(PL.100)

E SD3765出土の木簡 (PL.98)

東面築地回廊 SC5500 の東側を流れる南北溝。朝堂院の塀 SA5551 および SA5550 をつくる  
以前に埋立てられている。11点の木簡が出土したが、断片が多く釈読できるものは少ない。

木簡54 和銅□□ 6091  
和銅 木簡は腐蝕のはなはだしい小片で、年号を記したもののようである。(PL.98)

木簡55 一之郡末滑海□ 6039  
伊勢国一之郡(壹志)から末滑海藻(カチメ)を貢進した荷札。下端は折れている。(PL.98)

木簡56 □□以前等三物 6091  
文書木簡の削屑である。

木簡57 (表) □□忍麻呂前<sup>[更科郡]</sup>  
(裏) 謹人□ 「謹□」 140×12×4mm 6081

表は書状の断片か。別筆であとから記す更科郡は、信濃国に所属する。裏面は手習いか。上  
端は折れ、両側面と下端には二次的な調整と切断がほどこされている。

木簡58 □□□□魚八斤五両 (117)×6×4mm 6081  
荷札の断片であろう。

F SK3730出土の木簡

SK3730は6ABE-K地区にある方約2m、深さ約0.7mの方形土壌である。ここから4点の  
木簡が出土した。

木簡59 角俣 198×23×3mm 6031  
角俣（ツノマター海藻）につけられた物品付札。

### G SB7802出土の木簡 (PL. 102~105)

SB7802は、南面築地回廊 SC5600 に増築した楼である。その巨大な 15個の柱抜取痕跡のうち、11個から木簡が出土している。建物の廃絶にともなって瓦・土器・木製品などとともに一括して投棄されたものようである。一方、天平勝宝5年の紀年銘木簡が出土しており、この建物の廃絶が天平勝宝5年を遡らないことを証明している。（出土柱穴の位置は p. 41 参照）

木簡60（表） 應修理正倉□□  
（裏） 「肥後國山鹿郡□  
右 妙法蓮華□」 (87)×24×3mm 6081

文書木簡の断片である。正倉の修理に関連するものらしい。裏の「肥後」以下は別筆であり、落書きか。妙法蓮華の上は墨で抹消している。上下とも折損し、左右の辺も割れている。柱掘形イ一出土。(PL. 104)

木簡61 答志郷奈<sup>(斤カ)</sup> 粟米三□ (105)×20×3mm 6019

貢進の荷札。答志郷は『倭名抄』で志摩国答志郡にぞくしている。奈粟米は海藻の一種であろうか。下端が折損している。柱掘形イ一出土。(PL. 104)

木簡62（表） 殿守二升  
□ 「之國庭 英田郡國□肥後国合志郡<sup>(鳥嶋)</sup>□<sup>(戸カ)</sup>郷余□□□」  
（裏） □□ □ □ □ 「英田郷□ 太□□□□留□」  
(635)×(14)×4mm 6081

「殿守二升」がこの木簡本来の文書。ほかはそれ以下を削りとして書いた落書きとおもわれる。裏面も英田郡以下は表の落書きと同筆である。殿守は木簡76の大殿守と同義か。肥後国合志郡鳥嶋郷は『倭名抄』にみえ、英田郡は美作国英多郡にあたる。上端が折損している。柱掘形イ四出土。

木簡63 右家五 (64)×10×3mm 6081  
上端は調整面をとどめるが、下端は折損している。柱掘形イ五出土。(PL. 105)

木簡64 馬甘赤□ (56)×15×5mm 6039  
人名を記したものであろう。下端は折損している。柱掘形イ六出土。

木簡65 伊豆国田方郡棄妾郷戸主春□□ (176)×32×5mm 6039  
貢進の荷札。下端が焦げている。柱掘形ロー出土。

第IV章 遺 物

木簡66 留散位石村角 215×13×8mm 6011

留散位とは留省の散位をいい、式部省に所属して個別の官司にまだ配属されていない散位である。柱掘形ロ六出土。(PL.102)

木簡67 □□後所牒圖書寮 6091

図 書 寮 某官司が図書寮へ牒した文書木簡の断片。柱掘形ロ六出土。(PL.102)

木簡68 (表) □御輿人□御輿□ □部□ □ □ □  
 □□部□石万呂  
 右四人□月□□日申時  
 (裏) 「 十八  
 □ □□ □ □」 229×78×4mm 6065

御 輿 丁 曲物の側板を転用したもの。上辺に円孔が3個あるのは曲物として綴りあわすためだろうか。表は御輿人に関する文書。裏は別筆の落書きである。御輿人は行幸などに際して天皇の御輿に近侍するもので、『続日本紀』では輿丁(養老2年2月19日), 御輿丁(天平勝宝8年12月21日), 駕輿丁(宝龜11年3月16日)などがみられる。『延喜式』では行幸に際して, 近衛と兵衛から「御輿長」が任命されている(左近衛府式行幸条, 左兵衛式行幸分配条)。この木簡は4人の御輿人が南門SB7801を出入りしたときに使用された文書か。時刻を記した木簡は, 平城宮東院東南隅付近にある二条坊間大路南側溝(6ALS区)から2点, 第1次大極殿地域の西方を画する南北溝(SD3825)から1点出土している。だが, その意味はあきらかでない。ここでは門を出入りした時刻とするのが妥当であろう。柱掘形ニ一出土。

木簡69 山代東人 203×21×3mm 6032

人名を記した付札。山代東人の所持品につけたのであろう。『大日本古文書』25 p. 65に同姓同名の人物がみえる。木簡81・83・84・85・92と同類。柱掘形ニ一出土。(PL.105)

木簡70 (表) <sup>〔衆カ〕</sup>義□  
 (裏) □夜 93×32×11mm 6022

物品付札。上端に一孔をあける。柱掘形ニ一出土。

木簡71 牛養 金万呂 東□ (108)×17×3mm 6019

人名を列記した木簡。金万呂は木簡18にみえる。下端は折損する。

木簡72 □月廿七日付牛甘 (51)×20×3mm 6019

文書木簡の断簡。牛甘は木簡81と同一人物であろう。上端は損傷し, 下端は調整している。柱掘形ニ四出土。

木簡73 丹後國竹野郡木津郷紫守部与曾布五斗 250×30×8mm 6031

五斗とあるので、米の貢進付札であろう。柱掘形ニ四出土。

木簡74 進上郷米六斗□□ (111)×(14)×6mm 6081

米を某所に進上した木簡であるが、文書なのか付札なのか不明。上下とも折損している。柱掘形ニ四出土。

木簡75 物部虫万呂 物部人万呂物部□□ (272)×(22)×4mm 6081

人名の習書である。下端が折損、右辺が割れている。物部虫万呂は『大日本古文書』16-p. 318にみえ、同人万呂は天平19年から勝宝2年にかけて正倉院文書に散見する。柱掘形ニ四出土。

木簡76 (表) 天平勝宝□年□月二日合  
丸子  
丸子豊宅丸子豊額丸子友注丸子友依

丸子□□ □□

(裏) 丸 □夫天文 丸子□□ □子刀千

丸子豊宅 宅

丸子廣宅丸子大田而宅宅 宅宅宅宅 □ (宅) 192×31×5mm 6011

□□ □□

丸子一族の姓名を記した落書。天平勝宝5年6月8日に丸子牛麻呂、丸子豊嶋ら24人に牡鹿 天平勝宝連姓を賜い、同年8月25日に同姓を賜った丸子嶋足らの一族かもしれない。もしそうだとすれば、この木簡は天平勝宝5年6月～8月以前の改姓前に記録されたことになる。左右の辺が割れている。上下ともに折損。柱掘形ニ四出土。(PL. 103)

木簡77 (表) 大殿守四人 □□

(裏) 大殿所四人 右五人 (234)×21×9mm 6081

裏面の大殿所はうえから墨で沫消している。一度記したものを表に書きなおしたものである 大殿守うか。ここでいう大殿は木簡62の「殿守」とも関連し、殿舎地区の第I期の後殿SB8120をさす可能性がつよい。上下とも折損している。柱掘形ニ四出土。(PL. 102)

木簡78 日下部土麻呂 (88)×23×3mm 6039

人名を記した付札。日下部土麻呂の所持品につけた付札であろう。木簡69と同類。下端が折損している。柱掘形ニ四出土。(PL. 105)

木簡79 <sup>〔国カ〕</sup>□□久米郡衛士養<sup>〔物〕〔銭〕</sup>□□六百文 (153)×19×4mm 6081

伊予国もしくは美作国の久米郡から差発された衛士の養物銭600文の貢進荷札。600文は衛 養物銭士、仕丁の国養物にあたる(『大日本古文書』15-p. 24)。平城宮木簡ではこのほかに2例の養物銭木簡がある。<sup>1)</sup>上端が折損している。柱掘形ニ四出土。(PL. 102)

1) 『平城宮発掘調査出土木簡概報四』p. 20上段、平城宮木簡3076『平城宮木簡三』

第IV章 遺物

木簡80 (表) □□□<sup>〔神力〕</sup> 廣道 人成 大□  
 (裏) □五人 常食□ □ 廿五日 (107)×13×4mm 6081

常食の請求文書であろう。25日とのみ記していることから毎日の請求伝票であることがわかる。同類の平城宮木簡として西宮に上番した兵衛の請求伝票がある(『平城宮木簡一』91-118)。この木簡では姓を記していないのが特色である。次の木簡81も同類。柱掘形ニ五出土。(PL. 102)

木簡81 (表) 牛甘 真足 廣道 大倉  
 (裏) 合四人 177×(29)×4mm 6019

人名を列記した木簡。木簡80からみて食料請求の木簡であろう。柱掘形ニ五出土。(PL. 103)

木簡82 荒嶋 合二人 (183)×(15)×9mm 6081

上下端ともに折損し、左右も割れている。柱掘形ニ五出土。

木簡83 懸馬養 (156)×16×7mm 6039

懸馬養の所持品につけた付札。木簡69と同類。柱掘形ニ五出土。(PL. 104)

木簡84 湯坐連野守 276×37×4mm 6031

人名を記した付札。上端がわずかに欠損。木簡69と同類柱掘形。ニ五出土。(PL. 105)

木簡85 (表) 春部氣万呂

(裏) □□□

□ □

(230)×22×5mm 6081

人名を記した付札。裏は天地逆で別筆。上下端とも折損している。木簡69と同類。柱掘形ニ五出土。(PL. 105)

木簡86 (表) □ 日下部久治良□

(裏) □計 □□□ □

(148)×23×2mm 6081

裏は別筆だが、削平されて墨跡をうしなう。柱掘形ニ五出土。(PL. 104)

木簡87 (表) □□□□<sup>〔屋カ〕</sup>解申□□□□□□<sup>〔留カ〕</sup>

□ □□□ □「□□□□」

(裏) 「矢祢万呂所 欲處 珠女」

□ □ □ □ □□□□ (763)×(12)×2mm 6081

解文の上に「矢祢万呂」以下の落書きを記す。上端は折損し、右辺は破損。左辺は二次的に削りこんでいる。柱掘形ニ五出土。

木簡88 衛門府 126×15×4mm 6032

衛門府 衛門府が保管する物品の付札。次の木簡89も同形で同筆。柱掘形ニ五出土。(PL. 104)

1 木 簡

木簡89 衛門府 117×14×3mm 6032  
柱掘形ニ五出土。(PL.104)

木簡90 □勝宝五年正月□ (83)×6×2mm 6081  
柱掘形ニ五出土。(PL.104)

木簡91 授刀所 小竹七十 119×15×4mm 6032  
授刀所の管理する小竹につけた付札。小竹(シノ)は『延喜式』によれば祭祀の用具ないし 授 刀 所  
は竹製品の素材としてあらわれ、篋竹と同義。SB7802 出土の木簡が衛門府と密接に関連して  
いることからすれば、授刀所は衛門府下の官司の可能性もある。柱掘形ニ六出土。(PL.102)

木簡92 春日部國勝 (121)×13×3mm 6039  
木簡95と同じく人名を記した付札。柱掘形ニ六出土。(PL.104)

木簡93 □万呂□ 6091  
柱掘形ニ六出土。(PL.105)

木簡94 日久米□□ 6091  
墨線で抹消している。柱掘形ニ六出土。

木簡95 □丈部□ 6091  
墨線で抹消している。柱掘形ニ六出土。(PL.102)

木簡96 大 6091  
柱掘形ニ六出土。

木簡97 大足□ 6091  
柱掘形ニ五出土。

木簡98 粟田禾□ 6091  
柱掘形ニ六出土。(PL.105)

木簡99 □□ 6091  
□ 合□  
柱掘形ニ六出土。(PL.102)

木簡100~112  
SB7802からも文字を記していない木簡が出土している。それらはSD3715の場合と同じよう

第IV章 遺物

未使用木簡に付札類であり、短冊形のものには抽出していない。木簡83, 84などの人名を記した付札は、あらかじめ用意した木簡73のような貢進付札を再生したものとかがえられなくもない。この点からすれば、貢進付札がこの地に存在しても、直ちにここで貢進物を解いたことにならない。他方一部は掲げたが、人名を墨線で抹消した削屑が多く出土しており、木簡がかなり頻りに削りなおされていたことがうかがわれる。合計13点のうち、完形品は4点(100, 102, 105, 108)であり、各々の寸法および樹種については Tab. 4 に表示した。

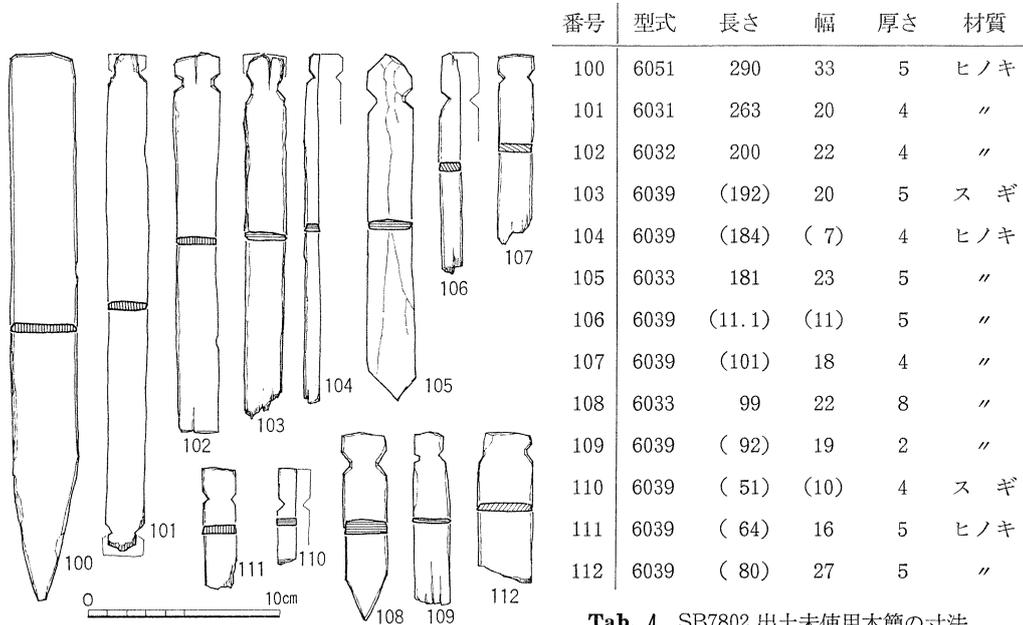


fig. 55 SB7802出土木札未使用木簡

Tab. 4 SB7802 出土未使用木簡の寸法  
( ) は現在値・単位mm

H ま と め

i SD3715出土の木簡について

SD3715 から出土した木簡は、つぎの4種類に大別することができる。第1類は中衛府に  
分 類 連するとおもわれる文書木簡(1~4, 6, 7, 13~15)である。第2類は飯を請求した文書木簡(10~12)である。第3類は人名を列記した木簡(5, 17, 19)である。第4類は食料品に付した付札(29~37)である。以上のうち、出土遺構との関連で注目されるのは、第1類の中衛府関係の木簡である。木簡1, 2, 4はいずれも兵衛府から中衛府へ充てた文書であるから、これらの木簡は中衛府に伝達されたのち、中衛府ないしはそれに直接関連する官衙で廃棄されたものとみてよい。

中衛府は神亀5年7月21日に設置され、その職務は「常に大内にありて、もって周衛に備  
中 衛 府 う」とのべられるにとどまり、宮内のどの施設を守備したのかはつまびらかにしない。『延喜式』では中衛府の後身である右近衛府が閤門を守っているの、兵衛府とともに内裏の周辺を守衛したようである。平安宮古図では内裏の西側にあたる陰明門の南掖に右大将の宿所が記されている。あるいは平城宮にあっても内裏西側に中衛が守衛する施設があったのであろうか。出土地点が内裏地域の西外郭外側にあたっていることは、このような推察を可能にするのであ

1 木 簡

るが、確証はない。ところで、木簡出土地付近に中衛府の詰所的な施設を想定すると、第3類の人名を列記した木簡は、中衛の名前を記したものとかがえられる。ただし、出土地点が溝なので、かならずしも中衛府の一括物が堆積しているわけではなく、なお慎重な検討を要する。たとえば木簡18にみえる民金万呂の名前は上述したように西宮兵衛にもあらわれており、両者が同一人ならば兵衛の名前もそこにふくまれていることになる。

第2類の食料請求文書では、造花所や厨など文書の充先がことになっており、すべてが中衛府に関係するものとはおもわれない。第4類の食料品付札は、宮内では内裏の周辺から出土するケースが多く、特異な性格のものである。平城宮内に搬入される食料品のなかでもとくに海産物の場合には調や贄の形態をとっている。調・贄などの品物が諸国から貢進してくるとき、貢進荷札がつけられており、荷札は荷物が解体されるまで付随していたものとおもわれる。第4類にまとめた付札は、おそらく貢進物の荷物が解体されたのち、小分けして宮内の各所で消費される前に再び整理するためにつけられたものであろう。付札の大きさが、一般の貢進荷札にくらべておおむね小形であることから推測されよう。このような付札が内裏地域の周辺から発見されることは、内裏などで行なわれた宴会用の食料品を保管しておくためにつけた付札かもしれない。

食料請求文書

ii SB7802出土の木簡について

SB7802の柱抜取痕跡から出土した木簡が、短期間に投棄されたものであることについてはすでにのべた。しかし投棄の期日をもう少し限定しえないであろうか。いま木簡のなかから日付のあるものをひろいあげると Tab. 5 のように6点ある。まず年については、天平勝宝5年の可能性がつよい。それは木簡76の丸子一族の人名列記が天平勝宝5年6月～8月以前であることも矛盾しない。つぎに正月が3例あり、20日以後の日付が4例あることからすれば、これらの木簡の中心が天平勝宝5年正月にあることが類推できよう。こうしたことから、SB7802の廃絶が天平勝宝5年2月もしくはそれ以後、6月までの間にあったことが想定される。

木簡投棄時の限定

木簡88・89によって、第1次大極殿地域の警固が衛門府の管掌であったことがうかがわれる。その配下に授刀所があり(木簡91)、衛士を揃えている(木簡79)。進上郷米(木簡74)も衛士のために郷里から転送されたものかもしれず、木簡60・62の地名落書きは衛士の出身地を戯れに記したのかもしれない。人名を列記した木簡(62, 72, 80, 81, 82)も衛門府との関係で検討する必要がある。木簡80に「常食」とありまた「廿五日」の日付があることからみると、官人に対する日毎の食料を請求した伝票であることがしられる。この種の木簡としてかつてSK820

衛門府

(『平城宮木簡一』)から西宮兵衛のものが出土している。そこでは姓のみを列記し、名前を記していない。それに対して、SB7802木簡では名前しか記さないという特色がある。また、支給された食料は「常食」と称するのみで、大糧とか庸米とか記されていないので、衛士に配給したものとはかがえられない。したがって、この木簡を衛門府の機構内でかがえると、衛門府にぞくする衛士・門部のうち後者の食料請求木簡にあて

	記 事
a	正月廿カ(未収)
b	天平勝宝□年□月□日(木簡76)
c	月廿七付牛甘(木簡72)
d	常食…廿五日(木簡80)
e	正月廿八日(未収)
f	勝宝五年正月□(木簡90)

Tab. 5 紀年銘木簡表

#### 第IV章 遺物

るのが妥当であろう。この種の木簡には抹消したものがあり、削屑にも同類のものが比較的多く出土している。

職 掌 殿守(木簡62), 大殿守(木簡77)は門部・衛士らの職務をあらわす言葉である。木簡68は御輿人の出入をSB7802付近で照合したことをしめしている。

1人の姓名を1枚の札に記す木簡(69, 78, 83~85, 92)は比較的多い。それらは列記する場合とことなり、姓名を明記する。他方、この種の木簡に貢進荷札を再生して用いたものがある可能性についてはすでにふれた。

以上のようにSB7802木簡は全体として衛門府に関連させて理解しうる。つまり、天平勝宝5年段階において、第1次大極殿地域の諸門は衛門府によって警固されていたのである。『宮衛令集解』によれば、の古記に「外門、謂最外四面十二大門也、主当門司、謂門部也、其中門、謂衛門与衛士共防守也、門始著籍此門也、内門、謂兵衛主当門之也」とある。つまり、平城宮内の諸門のうち閤門(内門)とよばれる内裏や大極殿院の南門は兵衛府が守ることになっており、それに対して朝堂院門など宮門(中門)とよばれる諸門は衛門府が守ることになっている。この点からみると第1次大極殿地域の南門SB7801は宮門にあたるものとみてさしつかえなからう。天平勝宝5年の段階、この地域は内裏でも大極殿でもなかったのである。

## 2 瓦 磚

今回報告する発掘区からは、多量の瓦磚類が発見された。大半は丸・平瓦，軒瓦であり，なかには篋書きや刻印による文字瓦もふくまれている。ほかに鬼瓦，面戸瓦，熨斗瓦，隅木蓋瓦などの道具瓦と磚が出土した。とくに磚は第 I 期の磚積擁壁 SX6600 に使用しているため，その出土量は他の発掘区にくらべて多量であった。

軒瓦は4,591個体出土し，これまでに平城宮跡から出土した総点数 27,537個体(1978現在)の約 1/6にあたる莫大な量にのぼっている(別表2・3)。

軒瓦4,591個体の内訳は，軒丸瓦2403個体 37型式85種，軒平瓦2188個体 31型式67種である。それらの多くはすでに『平城宮報告 I～IX』で報告するとともに，『基準資料瓦編 I～VIII』<sup>1)</sup>において逐次報告した。ここでは主として，遺構との関連に重点をおいて記述する。

第 1 次大極殿地域は，南方の約 2/3 が建物のまったくない広場であり，瓦は遺構の密集する築地回廊や殿舎地区に分布する。fig. 57 にかかげた軒瓦の分布図をみれば，遺構との関係は一段とあきらかとなる。分布図は，調査時に設定した小地区(3m方眼)にもとづき，その出土が i) 10個体以上，ii) 9～5個体，iii) 4個体以下の 3段階にわけて図示したものである。殿舎地区，東面築地回廊，第 I 期南面築地回廊・南門・東楼地区，第 II 期南面築地回廊・南門地区に分布し，広場地区ではほとんど分布していないことが理解できるであろう。こうした分布は建物や築地回廊にどのような種類の軒瓦が使用されていたかをしる手掛りをあたえてくれる。

つぎにこの地域の軒瓦の型式別出土比率をみると(fig. 56)，軒丸瓦では i 6284 (14.4%)，

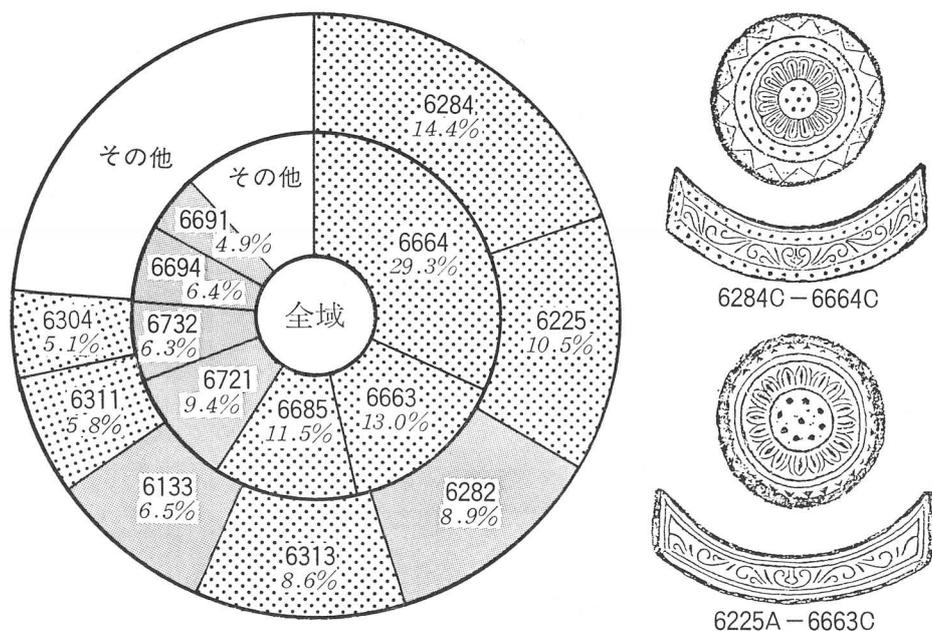


fig. 56 第 1 次大極殿地域出土軒瓦の比率<sup>2)</sup>

1) 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所基準資料 I～VIII瓦編』1～8 1973～1980  
2) 斑文の粗い表示は第 I 期遺構に，斑文の密な

表示は第 II 期遺構にともなう軒瓦であることをしめしている。以下の円グラフも同様である。

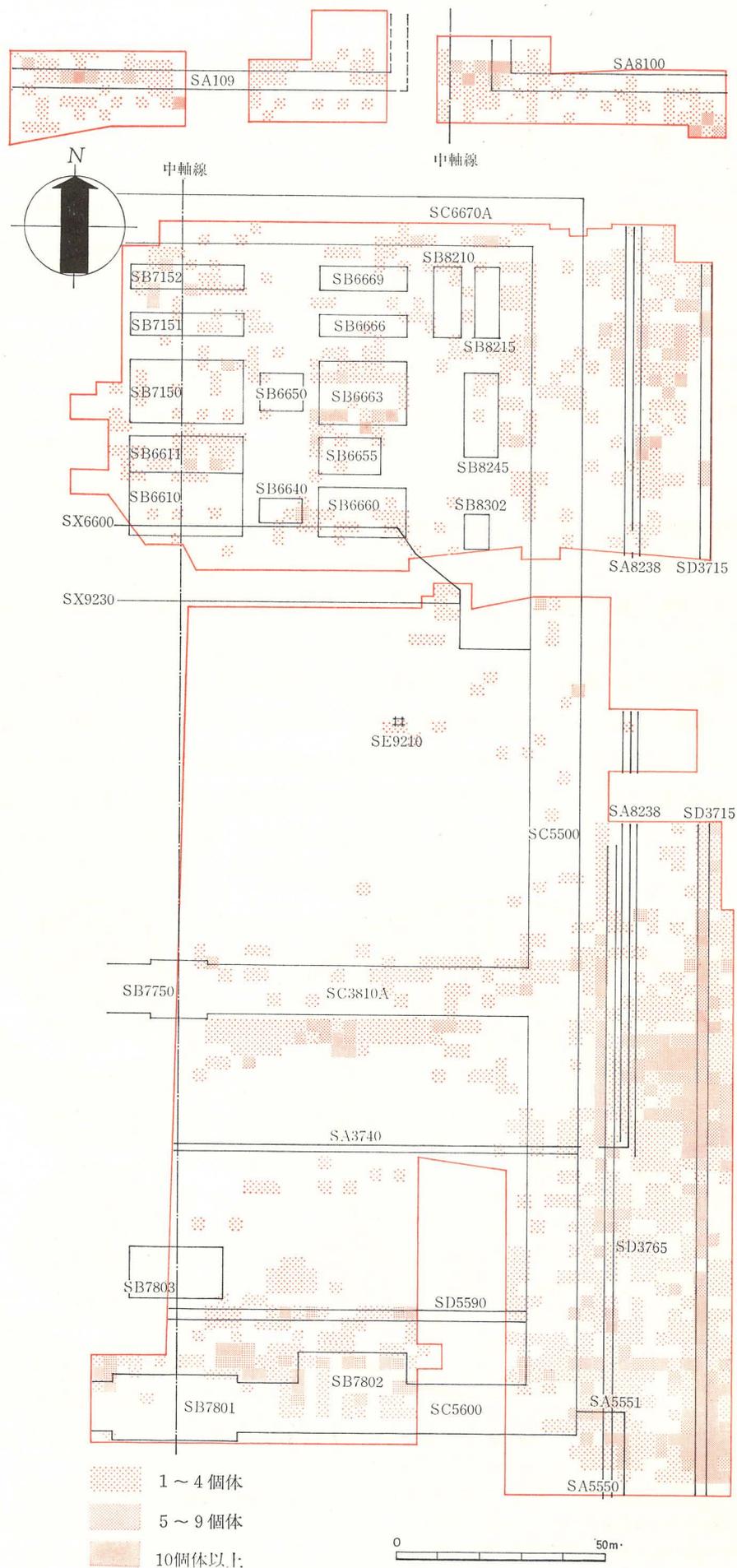


fig. 57 第1次大極殿地域の軒瓦分布

ii 6225(10.5%), iii 6282 (8.9%), iv 6313 (8.6%), v 6133 (6.5%), 軒平瓦では i 6664 (29.3%), ii 6663 (13.0%), iii 6685 (11.5%), iv 6721 (9.4%), v 6732 (6.3%) の順である。この比率によって当地域で用いた軒瓦の組合せの大まかな変遷は、6284-6664, 6313-6685→6225-6663, 6282-6721→6133-6732の組合せが基調になっているといえる。これは、遺構変遷の第Ⅰ期から第Ⅱ期までに対応する。なお、第Ⅲ期の平安時代初期の建物に平安時代の瓦がないことは、前代の瓦を再利用したり、また建物の多くが瓦葺きでなかったからだろう。以上のべたような概観をふまえ、主要遺構と軒瓦の関係についてのべる。なお、軒丸瓦の記述にあたっては、間弁が独立するものをA系統、界線状にめぐるものをB系統、間弁のないものC系統とした。また、瓦型式の特徴などについては初出のところでのべることにする。

間弁の分類

### A SD3765の瓦 (PL. 109, PL. 108, PL. 113)

遺物は全般的に少ないが、軒丸瓦では藤原宮式6273A 1点, 6282A 1点, 6284A 1点, 6284C 8点, 軒平瓦では6664C 1点が出土した。ほかに面戸瓦が6点出土している。軒丸瓦6273Aは珠文帯凸面鋸歯文縁復弁8弁蓮華文瓦で、藤原宮式を代表する一例である。面径が約19cmの大ぶりの瓦で、中房に1+5+8の蓮子を配し、蓮弁・珠文・鋸歯文を精密に割りつけている。6282Aは弁をB系統の復弁8弁蓮華文瓦で、ほかの6282では中房の中心蓮子が大きいのにたいし、このA種の中心蓮子は周囲の蓮子と同じ大きさである。6282Aは、藤原宮式6281の文様構成をうけついで瓦といえる。6284A・CはB系統の復弁8弁蓮華文瓦で、Aは弁区がやや盛り上がるのにたいし、Cは平坦につくる。軒平瓦6664Cは、珠文縁3回反転均整唐草文瓦で他の6664よりやや小ぶりである。中心飾の花頭基部はやや開き、大官大寺式6661の系統にぞくする。SD3765が平城宮創建時に開削され、短期間のうちに埋立てられていることからすると、藤原宮式6273Aと共伴した軒瓦は、平城宮創建時の瓦に比定できる。とくに6284Cと6664Cは第1次大極殿地域を代表する組合せであり、この溝から出土した軒瓦はおそらく第Ⅰ期の築地回廊SC5500に使用したものであろう。

藤原宮式

創建瓦

### B SB7801とSB7802の瓦 (PL. 106~ PL. 113)

南門地区からは、軒丸瓦6282A・G, 6284A・C・E, 6304C, 軒平瓦6664B・C・K, 6665A, 6668Aが出土した。ほかに鬼瓦2点, 面戸瓦などがある。6282GはB系統の復弁蓮華文瓦で、中房に配する1+6の中心蓮子が大きい。6284Eは今回新たに出土したものの、Cとよくており破片では区別しがたい。ことなる点は凸線鋸歯文の数で、Cが16に対し、Eが22となる。また、Eのほうがやや面径が大きい。6304CはB系統の復弁8弁蓮華文瓦で、内区がやや盛り上がり、中房が突出する。軒平瓦6664B・Kは珠文縁3回反転均整唐草文瓦である。Bは新出のもので、他の6664とはことなり、両端の第3単位第2支葉がまきこまず、脇区界線に接している。顎は篋で削り出したような浅い段顎となる。Kは中心飾の花頭先端がやや扁平となり、唐草文左第1葉が右第1葉より大きい。B・Kともに花頭基部が開き、Cとともに古い

軒丸瓦

軒平瓦

1) Eの同範例は恭仁宮大極殿跡から発見されている。恭仁宮軒瓦型式番号KM04。京都府教育委員会「恭仁宮跡昭和52年度発掘調査概要」『埋

藏文化財発掘調査概要1978』1978, p. 1~72, fig. 8, PL. 10

第IV章 遺物

要素をもっている。6665Aは珠文縁3回反転均整唐草文で、第3単位の主葉が、脇区界線に接せず、まきこむことによって6664と区別できる。大ぶりの瓦で唐草文ものびやかに反転する。6668Aは珠文縁3回反転均整唐草文瓦で、中心飾の花頭先端が扁平となる。第1次朝堂院南門<sup>1)</sup>(第119次調査)では6284Cと組合い、創建時の軒瓦の一つである。6685Bは珠文縁3回反転均整唐草文の小型軒平瓦である。

南門地区からの軒瓦の出土は全体に少ないが、6284が77.7%、6664が67.9%をしめる。6284南門地区はEとCが主体で、6664はCが多く用いられている。南門SB7801では、このような創建当初につくられた瓦で葺かれていたことがわかる。また、南門の下限をしめす瓦として、6282Gがあり、その年代は天平17年～天平勝宝年間に位置づけられている。

東楼地区からは、軒丸瓦6131A・B、6225A・C、6281A、6282B・G、6284A・B・C・E・東楼地区F、6296A、6304C・L、6307A、6308A・B、6311A、6313A・C、6314A、軒平瓦6641A、6663A～C、6664B・C・K・H、6666A、6668A、6681、6685B・D、6691A、6721G・Hの各型式が出土した。うち、軒丸瓦6281Aと軒平瓦6641Aは藤原宮式である。6131A・Bは珠文帯凸面軒丸瓦 鋸歯文縁単弁16弁蓮華文瓦で、AはBより面径が大きく、またAは間弁をもつがBは間弁をもたない。6225A・Cはいずれも大きな中房に1+8の蓮子を配したA系統の複弁8弁蓮華文瓦で、外区内縁に圏線、外縁に凸面鋸歯文をめぐらす。6225A・Cは軒平瓦6663Cと組合い、第2次大極殿・朝堂院の所用瓦であることがわかっている。6282Bは弁が短く、外区内縁と外縁を画する界線が太い。BにはBaとBbの彫直し関係がある。6296AはC系統の複弁蓮華文瓦で、外区は珠文帯凸線鋸歯文縁である。弁と弁が接しているため、一見単弁のようにみえる。

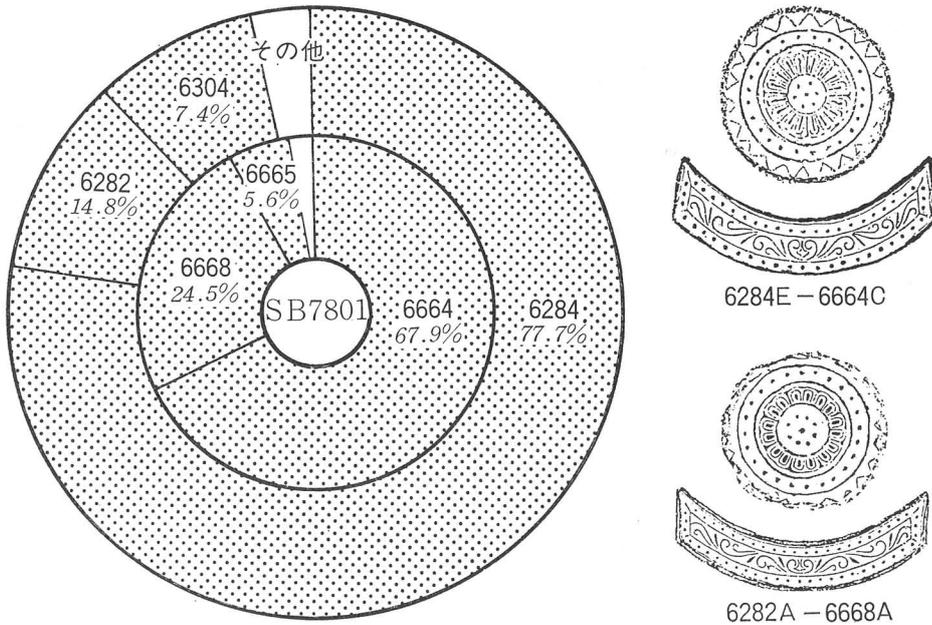


fig. 58 南門地区出土軒瓦の比率<sup>2)</sup>

1) 『年報1980』p. 25～27

2) 南門地区とした軒瓦は、6ABR-H

地区の小地区割 A～F・S・T、39～52の範囲から出土したものである。

6284Fは5種の中でもっとも大きな面径である<sup>1)</sup>。6304Lは、復原径が約28cmの大型の瓦で、大棟や降り棟のなどに飾られる特殊な瓦である。6307Aは間弁をもたないC系統の複弁8弁蓮華文瓦で、弁区は盛りあがり、1+6の蓮子を配した中房が低い。6308Aは珠文帯凸線鋸歯文縁複弁8弁蓮華文瓦で、やや立体感にかけると均整のとれた文様である。瓦当側面に「北」・「井」の刻印をおす例があり、同じ刻印は、軒平瓦6663Aにもみられ、両者が組合うことが、宮北辺地域の調査(第126次調査<sup>2)</sup>)で確認されている。6311は弁が大きく反転するA系統の複弁蓮華文瓦で、Aの弁端は内外区を画する界線より高い。6313A・Cは、中房に大きな珠文を一つ配した複弁4弁蓮華文の小型軒丸瓦である。4種に分かれるがCがもっとも小さい。軒平瓦6685と組合う。6314Aも6313と同様複弁4弁蓮華文小型軒丸瓦であるが、中房に1+6の蓮子を配する。6314は5種に細分され、Aはそのうちもっとも大きく、外縁上端に凸線をめぐらす例もある。

軒平瓦6663A・B・Cは、外区を圏線縁にする3回反転均整唐草文瓦で、A・Cが曲線類で軒平瓦あるがBには曲線類と段類がともにある。なお、さきにGとして報告したものは、Bと同范であることが判明したため消去した。A・Bは唐草文がのびやかに回転するのびやか、Cはやや形式化した唐草となる。A・Bは軒丸瓦6308と組合い、Cは6225A・Cと組合う。後者は、第2次大極殿・朝堂院式である。6664Hは、Kとにており、15種に細分される6664型式のなかでも、古い要素をもつ。6666Aは6685同様の小型軒平瓦で、外区の珠文は小さい。段類であり、軒丸瓦6314と組合う。6681は、6663と同じく圏線縁3回反転均整唐草文の軒平瓦で、6663とのちがいは中心飾に花頭が単線で表現されていることである。小片が1点出土しただけで、細分型式は不明。6685Dには段類と曲線類の2種がある。6691Aは中心飾が逆心葉形となる4回反転均整唐草文瓦である。平瓦部凹面に「私」の刻印をおす例<sup>3)</sup>がある。平城宮での組合せは不明だ

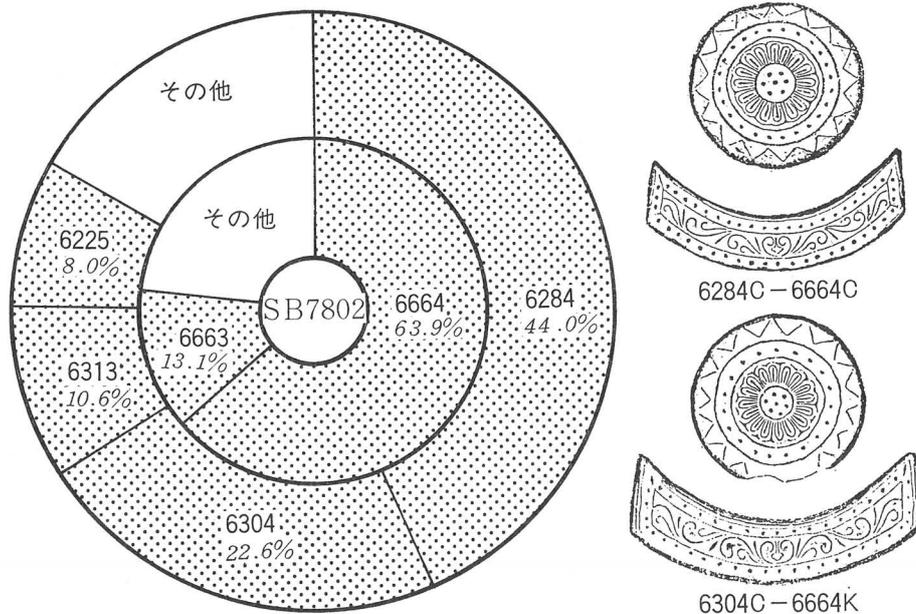


fig. 59 東楼地区出土軒瓦の比率<sup>4)</sup>

1) Fの同范瓦は遠く豊前椿市廃寺で出土している。行橋市教育委員会『椿市廃寺』1980, p.15  
2) 奈良国立文化財研究所『平城宮北辺地域発掘調査報告書』1981, p.15

3) 『基準資料V 瓦編5』1977

4) 東楼地区とした軒瓦は、6ABR・H地区の小地区割A~F・S・T、26~38の範囲から出土したものである。

が、恭仁宮では軒丸瓦6320Aaと組合い、法隆寺東院では6285Bと組合っている。顎は曲線顎。6721G・Hは中心飾の花頭が逆小字形を呈する5回反転均整唐草文瓦である。外区に細い珠文を密にめぐらしている。Gは内外区を画する界線が太い。Hは脇区に珠文を配さないa種と、珠文を配するb種に細分できるのが特徴である。いずれも曲線顎である。

以上のべてきた各型式の軒瓦は、SB7802の柱抜取痕跡から出土しており、この建物に葺いたとみてさしつかえない。ここでは南門地域よりも多様な軒瓦が用いられ、6284C-6664Cの比率がやや低下し、軒平瓦6663, 6685, 軒丸瓦6225, 6313の後出的な要素をもつ軒瓦の比率が高くなっている (fig. 59)。こうした瓦の様相は、SB7802が、造営当初の築地回廊 SC5600を改修して建設されたとする発掘所見を裏づけるものである。また、この建物の廃絶は柱抜取痕跡から出土した木簡によって天平勝宝5年(753)頃とみなされるが、軒瓦も瓦の編年でいう第三期以降のものはふくんでおらず、遺構の変遷と矛盾しない。なお、6304Cはこの地域の出土比率からみて、6664Kと組合い、平城宮創建瓦にぞくするのであろう。

### C SC5500の瓦 (PL. 107, PL. 109, PL. 110, PL. 111, PL. 114)

東面築地回廊地区からは、軒丸瓦6018C, 6130B, 6131A, 6133A・B・C・M・K, 6134A, 6135A・E, 6225A・C・L, 6227A, 6281A, 6282B・D・E・G・H・I, 6284A・B・C・E, 6285A・B, 6291A, 6296A・B, 6303B, 6304A・B・C, 6307A, 6308A・B・D, 6311A・B, 6313A・B・C, 6314A・B・C, 6316B・H, 6320A, 軒平瓦6641C, 6642A, 6643A・B・C, 6646E, 6663A・B・C・F, 6664B・C・D・F・G・I・K, 6665, 6666, 6671C, 6681A・B・C, 6685A・B・C・D, 6688A, 6689A, 6691, 6694A, 6721A・C・G・H・E, 6732A・Cの各型式が出土した。

軒丸瓦6018Cは重圏文で、蓮華文軒丸瓦の文様帯を消去し、界線だけをのこした斬新な文様構成である。中房部はやや突出し第1界線が二重になる。6130Bはやや小ぶり(径約13cm)で、中房が突出して中央の蓮子が大きい。単弁16弁を配し、各弁に界線をめぐらす。外区は珠文帯凸線鋸歯文縁である。6133M・Kは単弁16弁蓮華文瓦で、Kは外区内縁と外縁を画する界線をいれるが、Mにはない。6134Aは単弁12弁蓮華文瓦で、中房に1+8、外区に珠文帯鋸歯文をめぐらす平坦な瓦である。この型式は殿舎地域で多く出土し、軒平瓦6732と組合う。6135A・EのうちEが新出のものである。Aは1+5の蓮子を配した小さな中房から長い単弁12弁を配し、外区に細かな珠文帯凸線鋸歯文をめぐらす。繊細な文様をもつAにくらべてEは単弁13弁を配し、各弁の大きさが均等でなく、萎縮した蓮華文になっている。Aは軒平瓦6688と組合い、ともに丸瓦および平瓦部には、細かな格子目叩きがある。6303BはB系統の複弁8弁蓮華文瓦で弁区がわずかに盛りあがり6284Fに類似する。6285はB系統の複弁8弁蓮華文瓦で、中房に1+5の蓮子を配する。外区は珠文帯凸線鋸歯文縁。Aは内区がもりあがり、中房はやや半球状になる。Bは新出のもので、Aにくらべて凸線鋸歯文の数が少なく、中房も平坦になる。Aは法華寺や奈良市歌姫西瓦窯で6667Aと組合っている<sup>1)</sup>。Bは法隆寺東院で軒平瓦6691Aと組合うことが判明している<sup>2)</sup>。6291Aはやや小ぶりのB系統の複弁8弁蓮華文瓦で、外区に珠文帯凸線鋸歯

1) 奈良県教育委員会『奈良山I』1973, 第26図

2) 東京国立博物館『法隆寺東院に於ける発掘調査報告書』1948, 第188図

文を配し、外縁上端には凸線をめぐらす。6296Bは『平城宮報告Ⅳ』で6133Gとしたものであるが、今回の資料で凸線鋸歯文をもつことが判明したため、6296に変更した。

6304A・Bはよりもやや大きい。AとBは非常によくにているが、珠文数がことなり、Aの17にたいしてBが20となる<sup>1)</sup>。6316B・HはC系統の複弁8弁蓮華文瓦で、外区は珠文帯素文縁となる。HはC新出であり、丸瓦部凸面には縄叩きがのこり、瓦当直上まで施されている。6316は軒平瓦6710と組合う。6320AはC系統の複弁12弁蓮華文瓦で、今回範の彫り直しのあることがわかりAa・Abに細分できる。さきにわかっていたものは、外区が凸面鋸歯文縁になるAbであるが、凸線鋸歯文縁になるAaが出土し、凸線を凸面鋸歯文に彫り直したことが確認された。Aaは恭仁宮の創建瓦で、軒平瓦6691Aと組合って大極殿に葺いている。なお、Abは恭仁宮から出土しないので、恭仁宮で使用した箔を平城宮で彫り直して使用したことが想定できるのである。

軒平瓦6641C, 6642A, 6643A~C, 6646Eはいずれも藤原宮式。6663Fは唐草文が上下の 軒 平 瓦 界線からでて、中世の軒平瓦のような短かくかつ深い段顎となる。6664D・Fは中心飾りの花頭が上界線にとりつき、6664のなかでも新しい。G・Iは唐草文ものびやかに展開し、中心飾り花頭基部が開く古い要素がある。6671Cは興福寺式の一つで、中心飾りの中心葉が上から下へまきこむ。上外区脇区は杏葉珠文、下外区が鋸歯文となる。興福寺で出土するAよりもやや小ぶりである。6688Aは右第1単位の唐草が上外区からでているので、左右対称にはならない。曲線顎と段顎がある。軒丸瓦6135と組合う。6689Aは中心飾りが燕尾状を呈する3回反転均整唐草文瓦である。6694Aは6689と同じく中心飾りが燕尾状になり、各単位の唐草が上下の界線からでている。他の軒平瓦よりも弧が深いためか、使用時に両側を打ちかいた例が多い。6721A・Eはよくにているが、Eは新出である。

6732は東大寺式の軒瓦で、主葉の内側に4つの支葉のある唐草が反転する華麗な文様構成である。11種にわかれ、平城宮ではA~Dの4種が出土しているが、東大寺と共通して出土するのはDにかぎられる。なお、先にBとしたものはCと同範であることが判明している。今回はA・Cの2種が出土し、いずれも曲線顎である。

東面築地回廊地区からは、多種の型式の軒瓦が出土し、時期的にもばらつきがある。これは、 地区の細分 第Ⅰ期から第Ⅲ期までの長期間、同一位置での建替や修理が行なわれたことに起因するのであろう。そこで、東面築地回廊をつぎのように南北3区に区分して、瓦の出土比率をみることにした<sup>3)</sup>(fig. 60)。第Ⅰ区は第Ⅱ期築地回廊東南隅以南にのびる部分。第Ⅱ区は第Ⅰ期の築地回廊S C5500と重複する第Ⅱ期の築地回廊S C8600の南半分。第Ⅲ区は第Ⅰ期の築地回廊S C5500と重複する第Ⅱ期築地回廊S C8600の北半分。第Ⅰ区では軒丸瓦6313-30.1%, 6284-19.5%, 6225-17.8%, 軒平瓦6664-38.9%, 6685 26.7%, 6663-10.6%となり、第Ⅰ期の築地回廊が廃絶する天平勝宝年間以前の瓦が大半をしめている。それにくらべて第Ⅱ区では、軒丸瓦6133-

1) 6304型式は内裏東外郭で多量に出土しておりそこでは6664よりも後出的なD・Fと組合わされている。

2) 『平城宮報告Ⅱ』p. 62, PL. 43

3) fig. 60の東面築地回廊地区とした軒瓦は、6A BE-P・M・K, 6ABS-E, 6ABR-Q, 6AB

D-D 地区の小地区割10~24, 6ABD-C, 6A BC-V・U地区の小地区割4~16の範囲で出土したものをとりあげる。なお、それを3区に細分するのであるが、第Ⅰ区は6ABE-M 地区以南、第Ⅱ区は6ABE-K, 6ABD-C 地区、第Ⅲ区は6ABC-V・U 地区である。

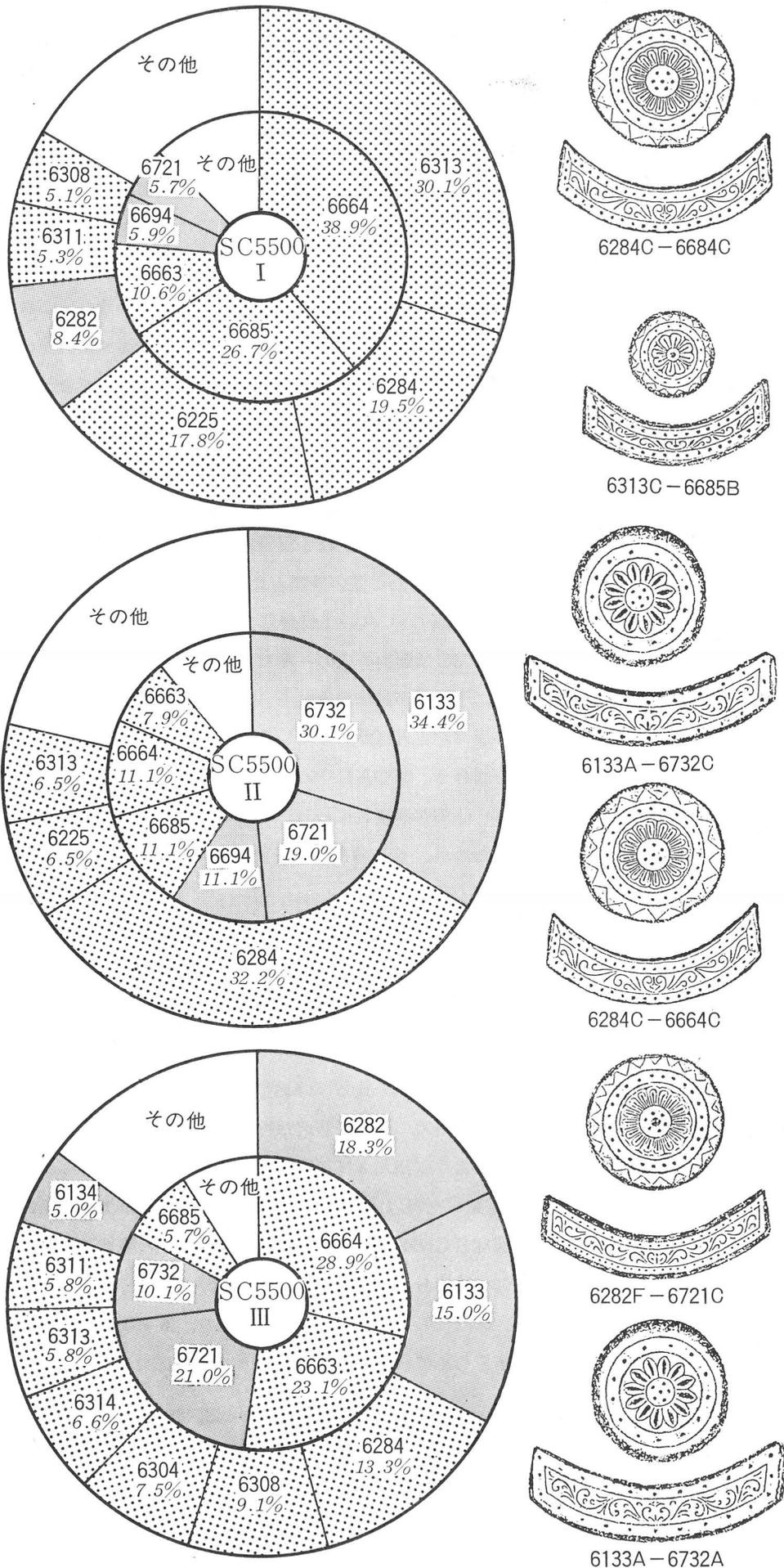


fig. 60 東面築地回廊地区出土軒瓦の比率<sup>3)</sup>

34.4%, 6284-32.2%, 6225-6.5%, 6313-6.5%, 軒平瓦6732-30.1%, 6721-19.0%, 6664-11.1%, 6685-11.1%, 6694-11.1%の比率をしめす。また殿舎地域に接する第Ⅲ区では、軒丸瓦6282-18.3%, 6133-15.0%, 6284-13.3%, 軒平瓦6664-28.9%, 6663-23.1%, 6721-21.0%とほぼ第Ⅱ区と同じような傾向をもつ。すなわち、SC8600の部分では第Ⅰ期の6284C-6664Cにかわり、天平17年以降の新しい組合せである6133-6732, 6282-6721が高い比率をしめし、これら新しい瓦で第Ⅱ期の築地回廊が葺かれたとみられる。なお、第Ⅰ区にも6133 (3.0%), 6282 (8.7%), 6721 (5.7%) がふくまれることから、第Ⅱ期の築地回廊と第1次朝堂院の間は第Ⅰ期の東面築地回廊を踏襲して、築地で接続されていたとかがえられる。

### D SC3810 と SB7750 の瓦 (PL. 108)

第Ⅱ期南面築地回廊・南門地区からは、軒丸瓦6133A・B・C, 6134A, 6135A, 6225A・C・L, 6241A, 6273, 6275D, 6282B・D・E・F・G, 6291A, 6296A, 6307A, 6304C, 6308A・B, 6311A・B, 6313A・C, 6316B, 軒平瓦6641C, 6663A・B・C, 6665A, 6682A, 6685A・B, 6691A, 6694A, 6221C・F6732Aが出土した。軒丸瓦6241Aは、突出した中房に1+5の蓮子を配したB系統の複弁8弁蓮華文瓦。外区は珠文帯素文縁、外縁の形態は幅広い直立縁で、それは中世の巴文瓦の外縁ににている。瓦当に接合する丸瓦部先端凹凸面にカキ篋によって格子状の刻みをいれる。概して赤褐色を呈し焼成が甘い。

この地区の様相は、第Ⅱ期の東面築地回廊や後述する殿舎地域と同様、軒丸瓦6282-19.1%, 6133-14.8%, 6313-14.8%, 軒平瓦6663-29.8%, 6685-21.0%, 6721-17.5%となり、天平末年を中心とした軒瓦が用いられている(fig. 61)。

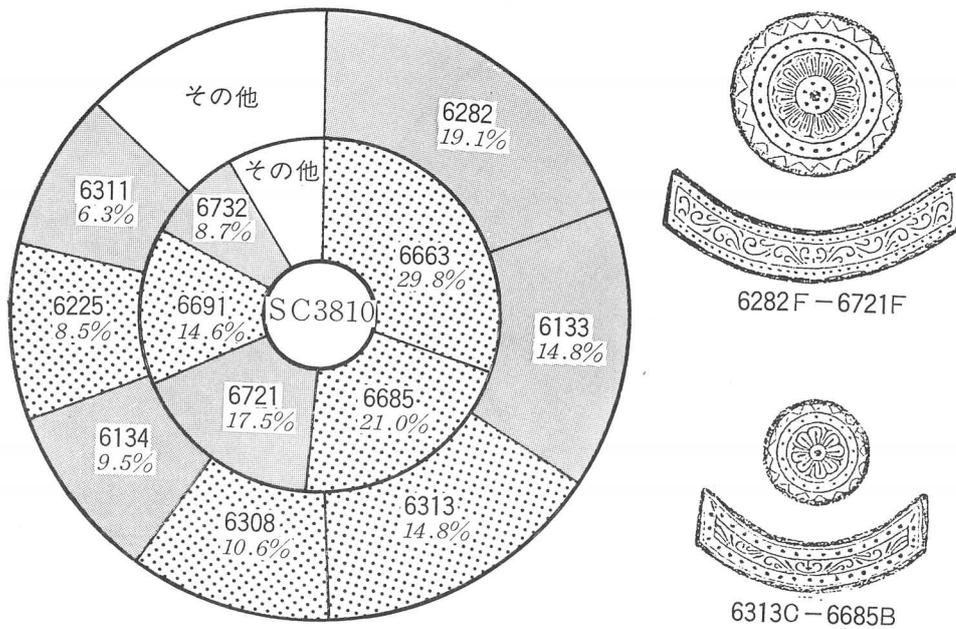


fig. 61 第Ⅱ期南面築地回廊地区出土軒瓦の比率<sup>1)</sup>

1) 第Ⅱ期南面築地回廊・南門地区とは、6ABR-G・6ABQ-D 地区をいう。

E 殿舎地区の瓦 (PL. 106, PL. 111, PL. 114)

殿舎地区から出土した軒瓦は、軒丸瓦6012A, 6130B, 6131A, 6133A・B・C・D, 6134A, 6225A, 6241A, 6282D・B・E, 6284A・B・C・E, 6296B, 6301C, 6308A, 6311A・B・E, 6313A, 6314A, 6321A, 軒平瓦6641, 6663A・F, 6664C・D・G・H・I・P, 6681B, 6682B, 6689, 6694, 6710, 6718, 6721A・C・E・F, 6726E, 6727A, 6732A・C, 6739A, 6810Aの各型式ほか、新型式がある<sup>1)</sup>。

軒丸瓦 軒丸瓦6301Cは興福寺式の一つである。間弁が独立するA系統の複弁8弁蓮華文瓦で、3種のうちで最も面径が小さい。6311EはA系統の複弁8弁蓮華文瓦で、外区は珠文帯凸線鋸歯文縁である。Eは今回新出のもので、鋸歯文が細い。またこの地区で出土した3型式はいずれも新型式である(6321A. PL.111-33, PL.111-37)。6321Aは複弁八弁蓮華文で、完形品は恭仁宮で出土している。33は小ぶりの瓦で、単弁蓮華文で外縁は珠文縁。37は6241Aと同じく外縁が直立し、かつその幅が広い。

軒平瓦 6664Pは殿舎地域の第II期の南に拡張した壇の埋土、すなわち、第I期の埴積擁壁SX6600前面の礫敷面から出土した新出の資料で、創建期の軒瓦の一つである。6718Aは5回反転均整唐草文瓦。中心飾の花頭を欠き、中心葉のみで構成し、第2単位唐草以下では主葉と支葉の2葉で反転する。6726Eは6725と同系統の三回反転均整唐草文瓦で、唐草は上下外区から発している。6227Aは中心飾に十字形の花頭を付す三回反転均整唐草文瓦。6739Aは中心飾が逆V字形となり、各単位の唐草は複雑に反転する。6801Aは中心飾に「修」の字をいれ、中心に向けて3単位の飛雲文を配する。修理司に関連する瓦である。

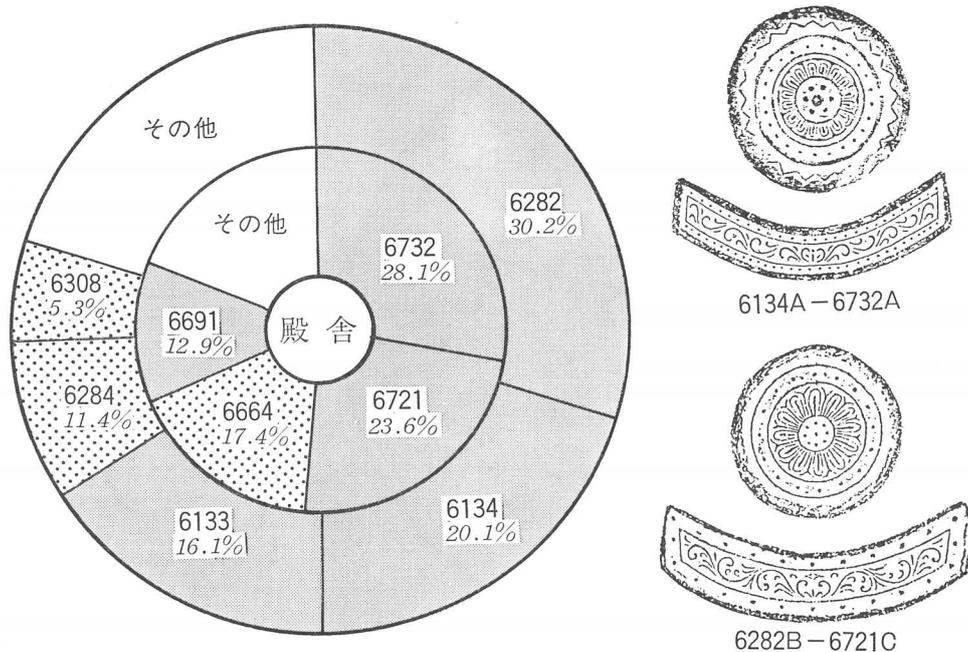


fig. 62 殿舎地区出土軒瓦の比率<sup>2)</sup>

1) 破片が小さいのであえて型式番号を付していない。

2) 殿舎地区の軒瓦出土比率は、中心部の6ABP-D・F地区の出土瓦で代表させた。

この地域の瓦の様相は軒丸瓦6282-30.2%, 6134-20.1%, 6133-16.1%, 軒平瓦6732-28.1%, 6721-23.6%, 6664-17.1%であり, 6282-6721, 6133・6134-6732の組合せが主体になっている(fig. 62)。これらの瓦は第Ⅱ期の殿舎を飾ったもので, 第Ⅰ期の大極殿SB7200および後殿SB8120に使用したであろう6284C-6664Cは, 5%前後の低い比率をしめしている。第Ⅰ期の瓦が少ない要因は, おそらく大極殿SB7200とともに恭仁宮に運ばれたためであろう。第Ⅱ期建物群のそれぞれの建物に用いた瓦を限定することはむずかしいが, SB6611, SB6610の柱穴抜取痕跡からは6134, 6133, 6732が出土している。

F SD3715の瓦 (PL. 112-1・3, PL. 114-24)

南北溝SD3715は, 第1次大極殿・朝堂院と第2次大極殿・朝堂院地域を区画する幹線水路である。ここからは, 軒丸瓦6131A, 6133A・B・D, 6134A, 6135A, 6225A・C・L, 6235B, 6241A, 6282B・D・E・F・G, 6284A・C・B・E, 6291A, 6296A, 6285A, 6304A・B・C・L, 6307, 6308B, 6311A・B, 6313A・B・C, 軒平瓦6641C・E, 6643B, 6663A・C, 6664B・C・D・F・K・H・I, 6665A, 6666A, 6669A, 6685A, 6681A, 6682A, 6689A, 6694A, 6704A, 6710A・C, 6721A・C・F・G・D・H, 6725B, 6732A・Cの各型式が出土した。

軒丸瓦6235Bは東大寺式的一种である。平城宮から出土するものはBのみで, これは東大寺軒丸瓦では発見されていない。内区に中房に1+5の蓮子を配する複弁8弁蓮華文瓦。

軒平瓦6669Aは緑釉軒平瓦であり, 今回はじめて出土した。平城宮の緑釉軒平瓦としてはすでに6760Aがあるが, この例をくわえて2型式になる。6704Aは中心飾りが中字形を呈し, 各単位の唐草は主葉と支葉とを区別せず, とびはねるように反転する曲線顎の瓦である。6725Bは第3単位主葉の先端に副支葉をもつ3回反転均整唐草文瓦。文樣的にみて長岡宮式につながる

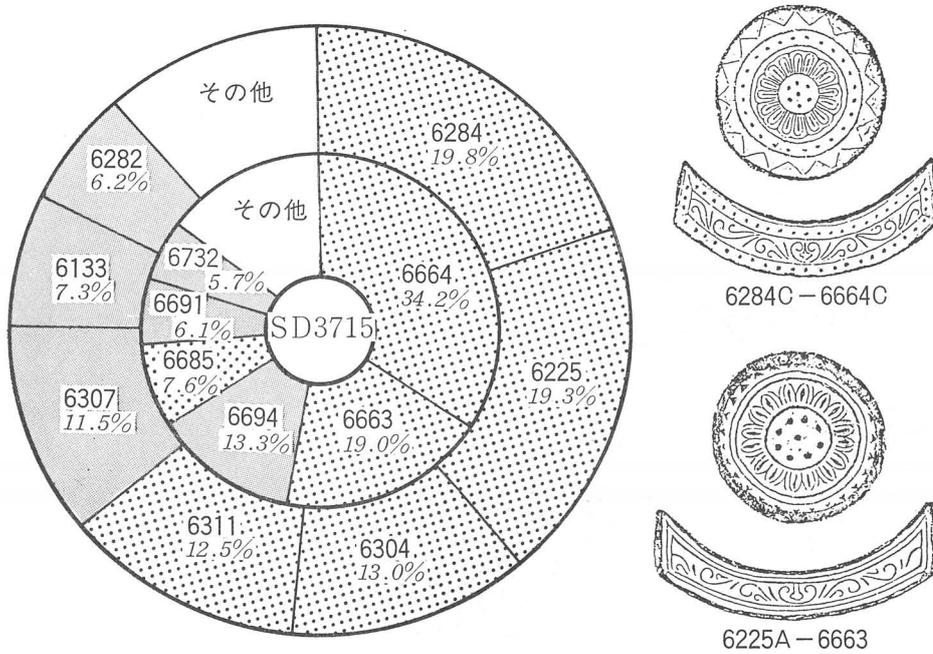


fig. 63 SD3715出土軒瓦の比率<sup>1)</sup>

1) 南北溝SD3715とした軒瓦は, 6ABD, 6ABE出土のものを代表させた。

る系統であり、8世紀末の瓦である。6710A・Cは中心飾が逆V字形を呈する3回反転均整唐草文瓦である。Aは外区の珠文間に×文をいれるが、Cにはない。

SD3715から出土した軒瓦の比率をみると、軒丸瓦6284-19.8%、6225-19.3%、6304-13.0%、軒平瓦6664-34.2%、6663-19.0%、6694-13.3%となり、6225-6664の組合せや、6311-6694(12.5%)などの比率がたかく、東方の内裏地域の出土傾向に類似している(fig. 63)。また、第II期に使用される6721(4.7%) -6282(6.2%)の組合せが低いことから、第2次大極殿地域の使用瓦が混在しているようである。しかしながら下流のSD3715(6ABF-B区)から出土した鬼瓦片とSB7802出土の鬼瓦とが接合した事実があり、第1次大極殿地域の瓦も相当ふくまれているとみなければならない。

溝の堆積層位は大まかに3層にわかれるが、軒瓦の顕著な時期差は見出しがたい。しいていえば第I期創建時に使用された6284C、6304A・C、6664Cが下層に多く、中層では6225-6311が、上層では6721-6282ほか8世紀後半に使用された瓦がみとめられる。

### G その他の瓦埴類 (PL. 115・116・fig. 64~67)

**道具瓦**(PL. 115・116) 鬼瓦3種と熨斗瓦・面戸瓦・隅木蓋瓦が出土した。平城宮から出土する鬼瓦は6型式に分類されるが、うち3種が出土した。1は三葉状の大きな鼻と耳をもつ平城宮IV式の鬼面文鬼瓦である。この文様の鬼瓦は大小2種(A・B)わかれており、小型(B)が東楼SB7802の柱抜取痕跡から出土したが、上述のようにSD3715から出土した向って右下縁の破片と接合し完形となる。眼球にそって朱塗彩で縁どりし、牙にも朱がのこっている(PL. 115)。裏面に「麻呂」・「豎子」・「真」などの習書のほか鳥が2羽描かれている。2・3・4は裸身の全身像をかたどる平城宮I式A鬼瓦の破片であり、5は鬼面をかたどる平城宮II式A2の頭髮部分の破片である(fig. 64)。

**熨斗瓦と面戸瓦** 熨斗瓦や面戸瓦は、大ぶりの藤原宮式の丸・平瓦を半截したり、両端を打欠いて利用したものと、平城宮式の丸・平瓦を利用した2種がある。面戸瓦はいずれも蟹面戸であり、ともにすでに報告したものと同じである<sup>2)</sup>。

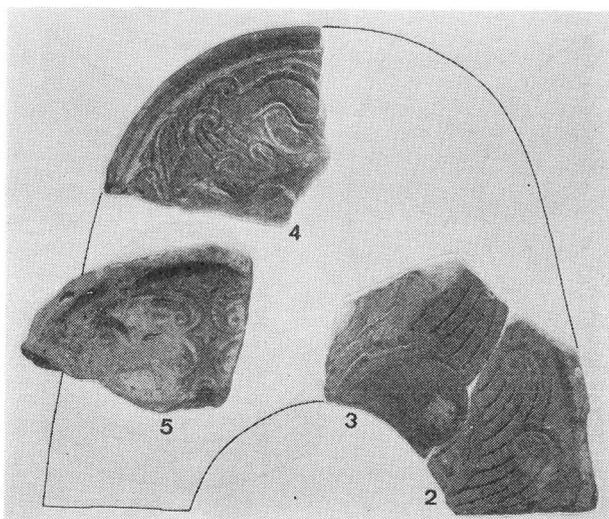


fig. 64 第1次大極殿地域出土の鬼瓦

1) 毛利光 俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦」『研究論集VI』奈良国立文化財研究所学報第38冊1980 p. 29, 『平城宮報告VII』 p. 72, いまのところ鬼

瓦の形式分類は毛利光論文にしたがっておく。  
2) 『平城宮報告IX』 p. 52

**隅木蓋瓦**(PL.116) 東楼 SB7802の柱抜取痕跡(6片4個体?)と北方のSA109付近から断片(1点)を発見した。全体の正確な寸法を決めがたいが、復原すれば長さ46.5cm内外、幅40cm内外、厚さ6.5cm内外となる。上面からみた全形は、長方形の短辺を先縁にあて、ほぼ中心から後方にかけて約80度角の削形をいれる。後部の燕尾状削形の頂点の左右に1.5cm角の釘穴一対をあける。先縁木口面には中心飾をはさんで、左右に四反転する花雲文を主文とし、その上下に珠文縁がめぐる。上端では外縁がつくが、下端には外縁がなく、顎がついていない。両側縁は隅木にかぶせるために、内側よりも約2cm程度高くしている。全体は型づくりで、表面に篋切りや篋削りののち指でなでた痕跡をとどめ、上面に丹土が付着する破片もある。なお、類似の文様をほどこしたものが薬師寺から出土しているが<sup>1)</sup>(fig. 66)、文様線は本例よりも流麗であり、あきらかに篋がことなる。また、薬師寺例では顎がつき、釘穴が1個である点もことなるところである (fig. 66)。

**丸・平瓦**(PL.116) 整理未完了であるが、出土例のうち特徴的なものについて記す。丸瓦のうち、第1次大極殿地域から多く出土したものに、凸線をめぐらす一群がある。軒丸瓦の丸瓦部の破片にもみられるが、軒瓦型式は不明。凸線は玉縁のほぼ中央に端部に平行してめぐらしており、水切りのためとかがえられる。一方、平瓦のうち凸面縄叩きの下半部を消す一群がある。こうした例は、恭仁宮、東大寺法華堂などでみられる平瓦の調整と類似するが、同じ手法をもつ人名平瓦とは胎土やつくりがことなり粗雑である。

**文字瓦**(fig. 65) 8種類出土した。「私」・「兵」・「理」・「修」・「目」・「田」など一字を記した刻印文字瓦と、人名を記した「真依」・「刑部」・「廣椅」・「日奉」・「宗我部」・「出雲」などの人名文字瓦である。他に「東」の字の篋書きした平瓦が出土している。「私」は軒平瓦 6691Aの凹面に押捺している。篋書の「東」も 6664Fの凹面に記しているが、同様のものが内裏北方官衙地域からも出土している<sup>2)</sup>。「廣椅」については『平城宮報告Ⅶ』で「廣□」としたものである。「真依」・「刑部」などの人名文字瓦は、東大寺法華堂<sup>3)</sup>および恭仁宮<sup>4)</sup>から出土し、瓦工名とかがえられている。この種瓦は、胎土、技法ともにすぐれており、8世紀を代表する平瓦である。上原真人の見解によれば、印文の裂目などからみて、平城宮出土のものがもっとも遅く製作されたことになる。

刻印と文字瓦

**埴**(PL.116) 多量の埴が出土したが、その多くは長方埴であり、他に散発的に方埴が出土している。それらはSX6600除くほかは、遺構から遊離したり、礎盤に用いたものである。

長方埴は長さ約30cm、幅15~16cm、厚さ7~8cm、重さ5~6kgである。長さに対して幅が1/2、幅に対して厚さが1/2となる。こうした規格は、積み方に多様性をもたせる寸法である。埴積擁壁 SX6600の壁面には長方埴を積上げているが、第Ⅱ期の拡張時に破壊され、下部の数段がのこるにすぎない。その積み方は長軸の側面を平積にした一丁一順積みである。推定によれば、約16,000個が必要であったとかがえられる (p. 33参照)。

長方埴

1) 奈良国立博物館監修『天平の地宝』1961 図版 277, p. 17。近年調査した薬師寺東僧房跡・南大門跡附近の発掘調査でも同様の隅木蓋瓦が出土している。

2) 『平城宮報告Ⅶ』p. 74

3) 奈良県教育委員会『国宝東大寺法華堂修理工

事報告書』1972

4) 京都府教育委員会「恭仁宮昭和51年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1976  
「恭仁宮昭和52年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1977

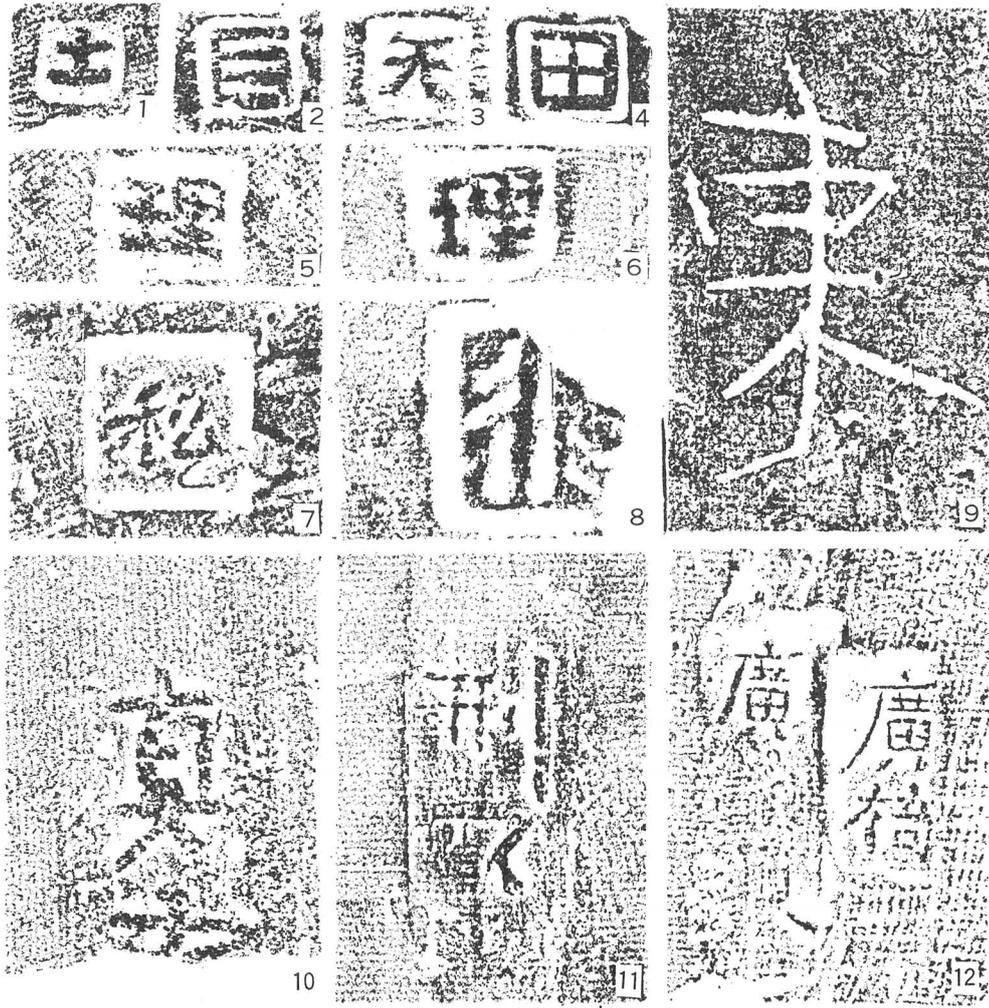


fig. 65 文字瓦 1:1

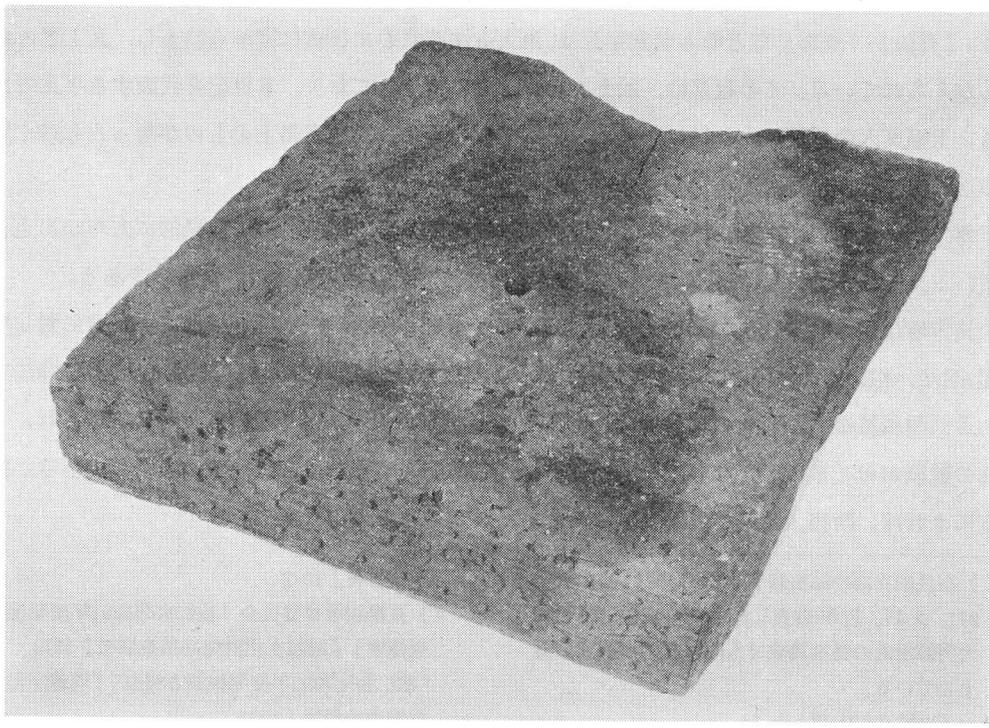


fig. 66 薬師寺出土隅木蓋瓦 約 1:4

方塼は厳密に言えば長方形を呈しており、一辺が30~29cm、もう一辺が26~27cmと辺によって寸法がことなっている。厚さは長方塼と同じで7~8cm、重さ10~11kg、長方塼・方塼ともに、各面を篋で調整している。一部に、上下面や側面に糸切りの痕跡をのこすものがある。また、塼の断面をみると粘土をブロック状にして成形するものと上下2層に板状に分かれるものがある。こうした状況は塼の製法のちがいを反映しているものとみられる。つまり、木枠の中に粘土をつめ込む型抜き法と、塼の大きさにあわせてつくった角柱状の“タタラ”を一定の厚さで切りとる切断法の二通りの存在したことがうかがえる。

**塼状飾板** 第I期塼積擁壁SX6600の直下から、全形は不明であるが、厚さ約3cmの粘土板に径15cmほど円板を貼りつけ、さらに径8cmほどの饅頭のような半球状の突起をつけた板状の土製品が2点出土している (fig. 67)。1は中心の突出部が饅頭形を呈し、2は截頭円錐形をつくっている。ともに色調は褐色を呈し、胎土には石英粒を多量にふくむ。類似品が内裏の東外郭外を流れる東大溝 SD2700 から出土している。塼積基壇の上端に積んだ装飾塼の一種であろうとかがえている。

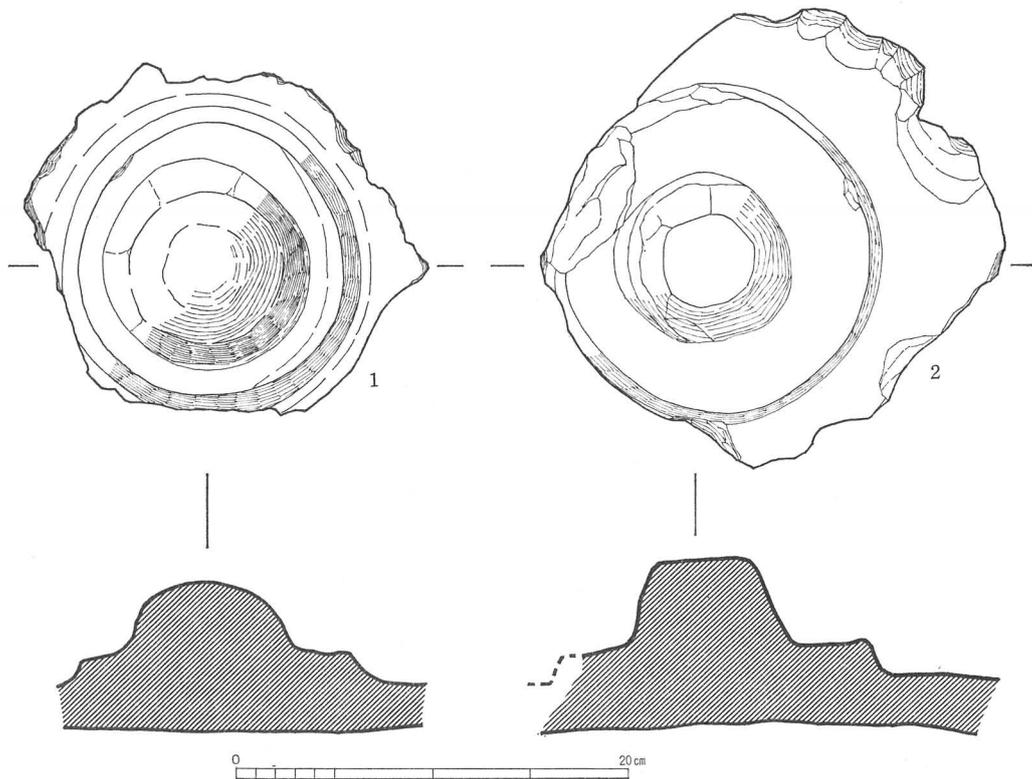


fig. 67 塼状飾板

### 3 部 材

第1次大極殿地域の調査では、掘立柱の柱根・木樋暗渠・井戸枠などの木材が出土している。なかには、2次的に転用されているものがあり、仕口痕跡を観察することによって本来の使用状況を復原しうるものもふくんでいる。東楼SB7802の柱抜取痕跡からは珍しい建築雛形の部材が発見されており、それについては一般の木製品からはずして、この項でのべることにした。また、礎石など各種の石材が遺構にともなって発見されており、それらの説明もこの項にふくんでいる。

#### A 柱根と礎盤 (PL. 117~125)

##### i SB7802の柱根 (PL. 117)

第I期の東楼SB7802の二四柱掘形内に、斜傾してあたかも引抜く途中で中止した状態で、  
最大の柱根 巨大な柱根(1-1)がのこっていた。ほかの柱はすべて完全に抜きさられているが、この1本だけがわずかにのこっており、建物の規模をかんがえるうえで貴重なものである。なお、この柱根は現在までに検出した平城宮出土柱根のうち、もっとも径が太いものである。心は空洞になっているが、推定樹齢500~600年のコウヤマキを用いたものである。

柱根の下底木口に溝(幅17.5cm, 深さ14cm)をほり、その上方に上下2段の貫穴をあけている。下段の貫穴(23×24.5cm)は下底木口の上方100cmのところであり、上段の貫穴(20.0×20.8cm)は170cmのところの下段貫穴と直交する方向に貫通させている。こうした貫穴に対して下底木口の溝は対角線上に位置することになる。下段貫穴には、両側から挿入した2本の角材(2.3)がのこっていた。これらの角材は、掘形に柱を据えつけるための縄掛けに利用したのち、不同沈下を防止するための根掘みとしてそのまま掘形内に埋め込んだものであろう。

他の柱掘形にも柱の貫穴に挿込んだとみられる角材片がのこっていたが、柱底の溝にかませた角材はどの柱掘形からも発見していない。こうしたことから、下底木口の溝は沈下防止のために掘形の底で角材をかませた溝としてはかんがえられない。この溝についてはつぎのように想定すればどうだろうか。柱を据えつけるとき中央に突起を作り出した長く丈夫なレールになる盤状の材を地上に敷き、これに柱木口の溝をかませ、すべらせて柱穴に納めたのではあるまいか。貫に縄をまいて吊上げ、所定の位置に柱を納めるための仕事であらう。

##### ii 小規模建物の柱根 (PL. 118)

いずれも東外郭SD3715の東岸で検出した第I期の小規模建物SB5510, SB5520, SB5490など  
雑舎の柱根 などで発見したものである(4~10)。直径15cm以下のモミ・サカキなどの心持丸太材で、表皮をとどめている。類似の柱根をとどめる小規模建物が、南方の6ABB<sup>1)</sup>区でも検出されているので、第1次大極殿地域を建設したときの仮設的な小屋であらう。

1) 第111次調査『年報1979』p. 23

3 部 材

(番号)	(種 類)	(遺構番号)	(柱位置)	(時期)	(地区)	(長さ)	(径)	(樹 種)	(木取り)	(図版)
1-1	柱 根	SB7802	ニ 四	第 I 期	回廊	282.0	72.5	コウヤマキ	丸 材	PL. 117
1-2	根がらみ	"	"	"	"	146.2	(20.8) 20.0	"	心持角材	"
1-3	"	"	"	"	"	104.0	(19.4) 19.5	"	"	"
2	"	"	"	"	"	31.5	(20.0) 16.0	"	"	"
4	柱 根	SB5495	ハ 四	"	東外郭	66.0	8.5	モ ミ	"	
5	"	SB5510	ハ 二	"	"	42.0	12.5	サカキ	心持丸材	
6	"	"	ロ 一	"	"	21.0	10.6	不 明		
7	"	SB5520	イ 四	"	"	50.0	24.0	モ ミ	心持丸材	
8	"	"	イ 二	"	"	42.0	9.5	アカガシ	"	
9	"	SB5495 付近柱穴	"	"	"	72.0	15.5	モ ミ	"	PL. 118
10	"	"	"	"	"	69.0	14.0	ヒノキ	"	
11	礎 盤	SB3746	イ 一	"	"	32.6	(30.0) 7.0	?	角 材	PL. 119
12	柱 根	SB3777	3	"	回廊	118.0	41.3	コウヤマキ	心持丸材	PL. 118
13	"	"	5	"	"	126.1	47.3	"	"	"
14	"	"	6	"	"	135.8	47.6	"	"	"
15	"	"	8	"	"	115.2	45.5	"	"	"
16	"	"	12	"	"	119.3	41.4	"	"	"
17	"	"	29	"	"	120.5	42.3	"	"	"
18	"	"	38	"	"	95.0	(42.3) 35.0	"	心持角材	
19	"	"	46	"	"	35.0	43.0	"	心持丸材	
20	"	"	47	"	"	40.0	25.0	"	"	
21	"	"	54	"	"	25.0	15.0	"	"	
22	"	SB6640	ハ 二	第 II 期	殿舎	39.2	32.6	ヒノキ	"	PL. 118
23	"	"	ロ 一	"	"	24.0	24.5	"	"	
24	"	"	ハ 三	"	"	33.0	17.0	"	"	
25	"	SB6650	イ 二	"	"	87.5	36.2	"	"	PL. 118
26	"	"	ロ 一	"	"	24.0	(24.5)	"	"	
27	"	"	"	"	"	33.0	(17.0)	"	"	
28	"	SB6660	ホ 一	"	"	45.0	33.0	"	"	PL. 118
29	"	"	へ 五	"	"	38.6	29.5	"	丸 材	
30	礎 盤	"	ハ 二	"	"	55.9	(27.0) 9.0	コウヤマキ	角 材	PL. 119
31	"	"	ホ 三	"	"	64.5	(24.4) 22.8	"	"	
32	"	"	ハ 一	"	"	60.0	14.8 9.5	ヒノキ	"	PC. 119
33	"	"	"	"	"	51.0	9.8 8.4	"	"	
34	柱 根	SB6663	へ 四	"	"	58.0	38.0	"	心持丸材	
35	"	SB6666	イ 三	"	"	59.0	33.0	コウヤマキ	"	PL. 118
36	"	SB7151A	ハ 十	"	"	69.0	38.8	ヒノキ	"	"
37	"	" B	イ 二	"	"	87.0	35.7	"	"	"
38	"	SB7151B	イ 一	"	"	60.5	38.9	"	"	"
39	"	SB7152	イ 七	"	"	111.7	40.7	"	"	"
40	礎 盤	SB3768	イ 二	第 III 期	東外郭	69.8	(19.0) 9.0	コウヤマキ	角 材	PL. 119

Tab. 6 柱根・礎盤の寸法と樹種

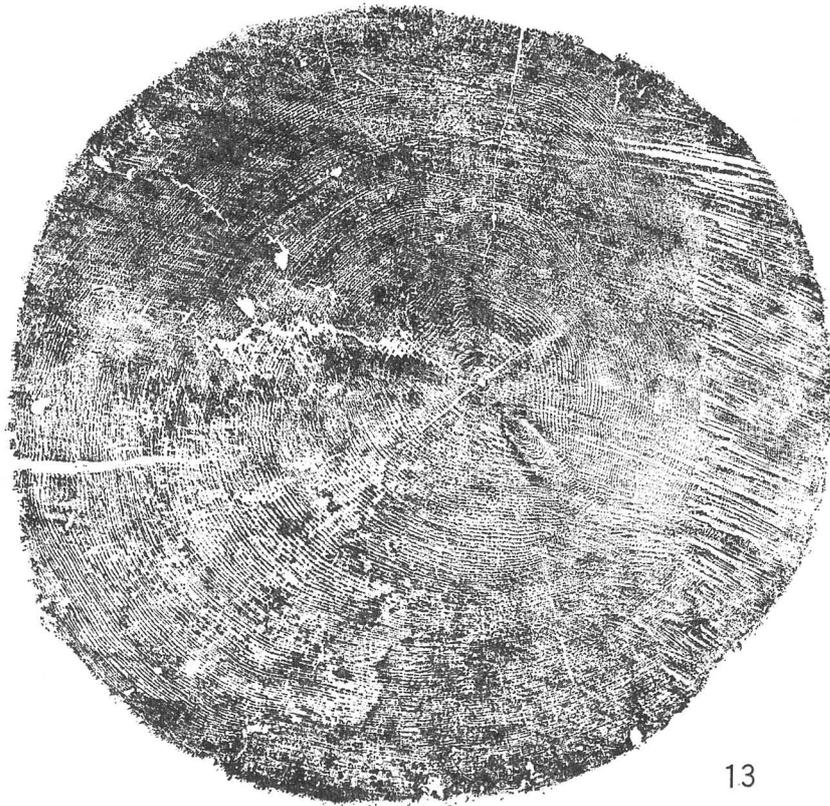
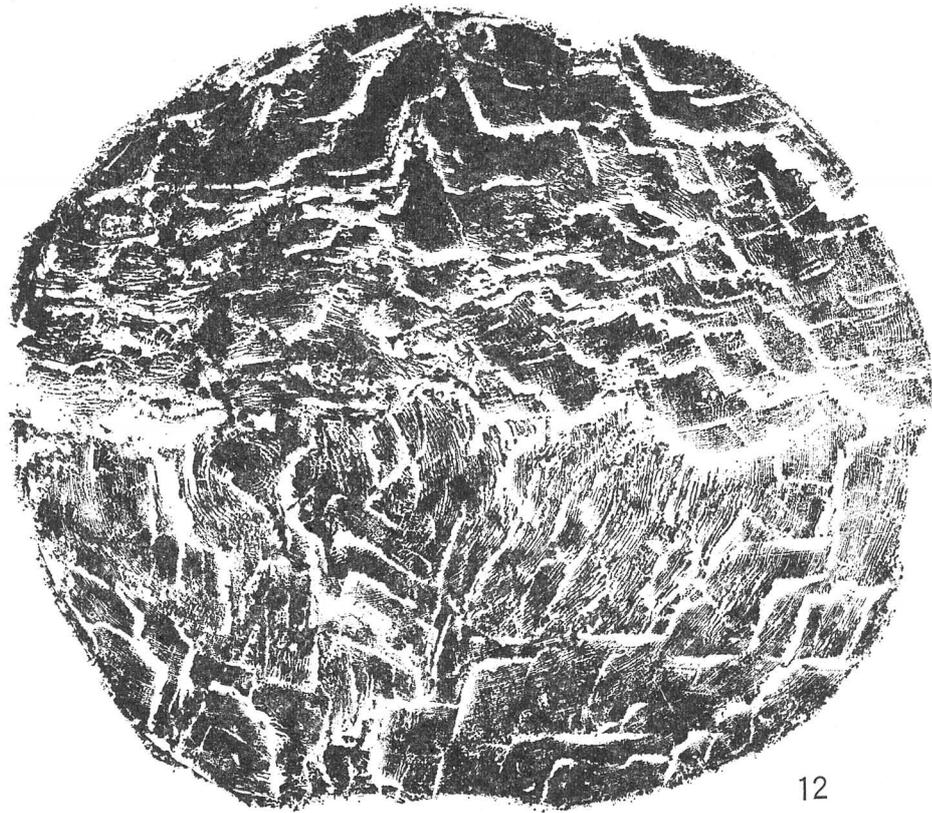


fig. 68 SA3777柱根の木口切断面 1:4.4

## iii SA3777の柱根 (PL. 118~121)

第I期東面築地回廊SC5500の東側柱列の柱筋にある南北塀SA3777からは、比較的保存のよい柱根が出土した。北方の高地(6ABC・6ABD区)では残存状況がわるく、痕跡程度の柱根しかのこっていないが、南方の低地(6ABE区)では非常にのこりがよい。いずれも径45cm内外の

コウヤマキ  
の柱

コウヤマキの心持材で、樹齢300年程度の木材である。18は角柱である。このほか柱根をとどめない柱痕跡にも方柱状を呈するものがあることから、SA3777には円柱と角柱とが混用されていたことがわかる。

下端木口の整形は手斧ハツリが一般的だが、13は鋸で切っている(fig. 68)。切断面の状況からみると大鋸で一気に入ききったのではなく、比較的小さな鋸で根気よく挽いたことがうかがえる。16・19の下部には筏穴があり、前者には斜上方に「六」の陰刻があり、下端木口面に割

墨 付 け

付けの墨線がある。それは木材の芯をはさんで11.9cm間隔で平行線をいれ、その一方の側面寄りに12.3cmの間隔をおいてもう1本の直線をいれる。さらに直交する3本の平行線をいれるが、中心寄りの2本は木材の芯をさけて3.5cmの間隔をおき、その1本の外側に15cmの間隔をおいてもう一線をいれている。14にも墨線がある。木口面のほぼ中央にひいた直線の左右に14.8cm, 14.3cmの間隔をおいてそれぞれ1本の直線を配し、これに直交する2本の平行線を木口の一方に扁して12cmの間隔でいれて、2個の長方形区画をつくっている。17は木口面の片側に9.4cmの間隔で2本の直線をいれ、それに直交する2本の平行線を11cmの間隔でいれている。この直交する2線の外側線上3個所に目盛がある。

このような割付けの墨付けは、柱の木作りとは無関係な位置であり、柱を円形ないしは多角形につくるための墨線ではない。おそらく材の芯を避けて、4寸×5寸の角材をとる予定で墨付けをしたものを丸柱として使用したとおもわれる。

## iv 殿舎地区第II期建物の柱根 (PL. 118)

殿舎地区第II期建物群のうち、8棟から17丁の柱根ないしは礎盤を採取した(22~39)。この地区は、高燥の地であるため、柱根の残存状況はきわめて悪い。比較的旧状を保っている39の例からみると、径40cm前後の心持ち丸太材で統一されているようである。大半はヒノキだが、コウヤマキを2本ふくんでおり、ヒノキとコウヤマキが混用されていたことがうかがわれる。礎盤は角材・板材・丸太材など規格性がなく、いろいろな形状をとっている。樹種はいずれもコウヤマキである。

## v 木樋暗渠 (PL. 122~125)

第I期の東面築地回廊を横断して東方に排水する木樋暗渠のうち、SD5561, SD5562, SD5563, SD3770では木樋が比較的良好な状態で保存されていた(1~10)。それらのうち、築地回廊を横断する部分の木樋に同種の痕跡のある柱転用材が用いられていることから、同時期の遺構にあてたことはすでにのべた。それらの多くは採取せずにそのまま現地にのこしたので、採取した木樋を中心にのべ、必要に応じて、現地にのこしてきたものについても説明をくわえるこ

木 樋

第IV章 遺 物

とする。なお、すべての木樋材の寸法をTab. 7に表示しておく。また、柱の転用材の説明に際しては、木樋として用いたときの仕口の説明は省略し、ここでは本来の柱に関するることについてのみのべる。(p. 47・48参照)

仕 口 16・17・23・24の4丁にはいずれも同種の仕口が残存するが、いずれも木樋として使用したときに埋木でふさいでいる。17は柱の全長をとどめているようである(長さ730.4cm, 本径44.0cm, 末径35cm)。下端に筏穴があり, 上方約2/3位置の両面に間渡穴が7個所(下から1~7とよぶ)にわたってほられている。最下部の間渡穴下端から柱の下端まで261.2cm, 柱の上端までは470.2cmである。間渡穴2は後にほられたらしく, これを除く他の間渡穴は, 心々で89cm(3尺)等間で5段に配されている。24も腐蝕が著しいがほぼ全長をのこしている。間渡穴の形状はせい9~11cm, 幅6~8cm, 深さ6~9cmで, 幅は穴の奥を広くして間渡材をやり返しに入れやすいようにしている。

番号	(遺 構)	(長さ)	(直径)	(棧)	(木取)	(図 版)
1	SD5560-1	520	35×20	5 対	角材	
2	2	465	"	3	"	
3	3	505	37×24	4	"	
4	4	507	35×24	4	"	
5	5	513	36×25	4	"	
6	SD5561-1	628	45.0	7	丸柱	
7	2	606	45.0	7	"	
8	SD5562-1	382	35×25	3	角材	
9	2	520	37×25	5	"	
10	3	509	35×25	4	"	
11	4	535	32×25	4	"	
12	5	515	35×25	4	"	
13	6	530	37×25	4	"	
14	7	620	45.0	8	丸柱	
15	8	617	46.0	7	"	
※16	SD5563-1	628	40.5	なし	"	PL. 122
※17	2	730.4	44.0	"	"	"
18	SD3770-1	437	29×?	?	角材	
19	2	394	32×?	"	"	
20	3	527	23×?	"	"	PL. 124
21	4	750	29×?	"	"	"
22	5	690	31×?	"	"	
※23	6	598	44.0	"	丸柱	PL. 123
※24	7	715	45.0	"	"	"

Tab. 7 木樋の寸法

※印は採取したもの, 他は現地で保存した。  
遺構ごとの番号は東から西に向けて数える。

間渡穴 1 と 2 の心々寸法は18cmで他の間隔よりもせまい。間渡穴 6 と 7 の間にこれと直交する大きな貫穴がある。これはせい37cm、幅10cmで縦に細長く、貫穴下端から柱の上端まで91cmである。間渡穴 1 の直下から下方50cmの間は著しく腐蝕している。これは柱の下部約210～250cmが地下に埋っていたことを物語る腐蝕痕跡である。以上のことから、この木樋が屋根の付いた掘立柱塀の柱材であったことがうかがえる。

16・23・24にも同様の間渡穴が残存するが、貫穴のない16・23は他に比べて短く、貫穴下端から先端が切断されたものとみられ、24は貫穴の一部が残存している。また取上げなかった6・7・14・15の木樋も同様のものとかがえることができる。

17と24は柱天に暗渠の杓を造出しているが、ほぼ全長をのこす。柱長さは天平尺25尺、最下段の間渡穴下端から柱天まで同16尺、間渡穴の割付けは3尺であり、腕木貫穴下端から柱天までも3尺にとるとかがえられる。間渡穴には太い間渡をやり返しにいれて土壁の下地をつくったとかがえられるが、最下段の間渡穴は他よりもやや小さい。各柱ともこのすぐ上に別の間渡穴がほられているが、この2番目の穴は割付けからみて、後からほったものとかがえられる。しかし土壁の足元が破損したためにほりかえたものか、工程の途中でほり直したものかはあきらかでない。掘立柱として再度使用していれば、他の間渡穴や貫穴にもほり直しやほりひろげの痕があるはずであるが、その形跡がみられないので、これらの柱は掘立柱としては1度しか使用されず、下方間渡穴のほり直しは立ったままの状態で行なわれたことになる。

上部の貫穴は間渡穴の面と直交し、貫穴の幅がせいにくらべてかなり小さく、繫梁尻の仕口ともかがえられるが、全体をほり抜いたとみられ、この貫穴から柱天までの長さが短いの、やはり出桁を受ける腕木を通したものとかがえるほうがよかろう。古代には頭貫のほかは仕口穴を抜通さないのが原則と考えられているが、この柱のような仕事も行われたことがわかる。

16・17には筏穴の痕跡があり、ともにその上方に「八十」と刻まれている。山作所で刻んだ番付とみるべきであろうが、建設現場(足庭)で刻んだものと考えられる。 刻 銘

16には間渡穴 4 と 5 の間に「卯五十七」という刻書がある。これは、建設時の位置を記した番付に想定することができ、東(卯)の58番目の柱ということになる。奈良時代の建物や井戸枠の番付けでは「東・西・南・北」によって方位を記すのが普通であり、十二支でしめす例としてははじめてである。

20は腐蝕が著しく進行しているが、全長527cm、幅32cm、せい18cm以上の角材である。材のほぼ中央に杓穴(16×11cm)1個があり、それを中心にして両端方向にそれぞれ2個所にエツリ穴をあけている。エツリ穴は現状では木樋使用時の下端から二枚杓をほったようにもみえるが、仕口穴の側面は斜にほられていて、中央にあぜをのこした剝抜き状のエツリ穴であったとみとめられる。この材が本来角材であり、杓穴には柱頭の角杓を差込んだものとすれば、建築物の桁・梁・棟木の類となる。上述の柱材との関連をかがえると、エツリ穴を土壁の木舞あみ付けのなわぐくりと見られるので棟木に比定することができよう。 棟 木

エツリ穴は古代の建造物では、頭貫や桁の下端、桁の上端、垂木の上端などにほられ、それぞれ壁の木舞のあみ付け、垂木のくくり付け、垂木上の木舞くくりつけなどに用いられた一般的な手法である。法隆寺東室の入側桁・大梁下端、同東院伝法堂前身建物の頭貫下端、唐招提寺講堂の頭貫・桁・繫虹梁下端、同経蔵に転用された桁下端、当麻寺本堂前身建物の頭貫下端、

第IV章 遺 物

同建物に転用された桁材の上下などにある。これらの諸例では柱間1間につき、2～3個所のエツリ穴エツリ穴をほる場合が多い。20のエツリ穴は腐蝕のためひろがっているにせよ、現存する古代建造物の諸例にくらべてかなり大きい。厚い土壁の木舞をあみつけるのに太い縄を用いたために大きくしたのであろう。この棟木の中央と両端に柱位置を想定すれば、エツリ穴は柱間に2個所ずつほったことになる。角枘穴とそれに近接するエツリ穴の心々寸法は両側とも72cmだが、両側のエツリ穴同志の心々寸法はそれぞれ103cmと144cmで差がある。このことからすれば、現状では両端が旧状をとどめていないとはいえ、両端のエツリ穴から外に、上記の枘穴からエツリ穴までの寸法72cmを加えると1方の柱間は2.47m、他方の柱間は2.88mとなる。エツリ穴の割付けは36cmが基準となっているようで、柱心からエツリ穴心まではその2倍、エツリ穴心々は広い方は144cmでその4倍、狭い方は103cmでその3倍に近い。従って柱間寸法は36cmを単位としてその7支と8支となり、高麗尺で7尺と8尺の完数值となる。このエツリ穴の面を上端として36cm割りの垂木をくり付けられた材とみられないこともない。

また、取上げなかった木樋のうちに、別のエツリ穴をほった材がある。20がそれで、現存長3.96m、幅34.5cm、現存せい14cm、1方寄りに角枘穴があり、片方に1個、他方に3個のエツリ穴がほられている。このエツリ穴は枘穴を中心として66cmに整然と割付けられている。エツリ穴が3個のこの方の木口は先端のエツリ穴心から68cmであり、恐らくここが継手で次の角枘穴すなわち柱心とかがえられるので、この柱間寸法は66cmの4倍、2.64mにあたることになる。これは天平尺の9尺、高麗尺の7.5尺に当る。エツリ穴の整然とした配置からみてもこのエツリ穴は、33cm割りの垂木を1本置きにくり付けたものとおもわれる。棟木上では垂木は前後の尻を組んで込栓差とすれば必ずしも垂木を止める必要はないが、桁では少くとも1部の垂木を止めるのが奈良時代の簡単な構造の建物の手法である。したがって繫梁の渡り腮の仕口がないが、桁材と見る方がよさそうである。そうすると、腕木で出桁を受ける掘立柱塀とは直接関連しないことになる。2丁の横架材は、柱の各部が天平尺で完数になるのはちがって、柱間寸法は高麗尺の方が完数になるようである。柱と直接組合っていたかどうかはあきらかではなく、別種の建物か塀の部材かもしれない。しかし掘立柱塀の上部構造を想定するうえに、重要な資料となることはいうまでもない。

以上のべたように16・17・23・24の柱材は同じ掘立柱塀の柱と認めてさしつかえなからう。

掘立柱塀 地下に約2mを埋めた棟高約5.5mの土壁つきの掘立柱塀を想定しうるのである。この柱列の上の棟木は20のような材であろう。こうした材を用いた掘立柱塀として fig. 69のような構造が想定できる。

この掘立柱が本来どこにたてられたかという点については、確定的なことはいえない。Tab. 9は飛鳥・藤原・平城で現在までに確認している大地域をかこう掘立柱塀である。そのなかでかなり可能性の高いものとしては、平城宮第1次朝堂院の東面掘立柱塀がある。

番号	(遺 構)	(長 さ)	(幅)	(厚さ)
		cm	cm	cm
25	SD5560-1	(255.0)	(24.2)	(3.5)
26	" 2	278.5	28.0	4.9
27	" 3	283.0	29.0	4.7
28	" 4	282.8	30.0	5.0
29	" 5	282.7	26.0	4.8
30	" 6	280.1	28.0	4.5
31	" 7	279.7	27.5	4.0
32	" 8	260.2	26.8	3.6
33	" 9	265.2	28.0	5.0

Tab. 8 木樋暗渠蓋の寸法

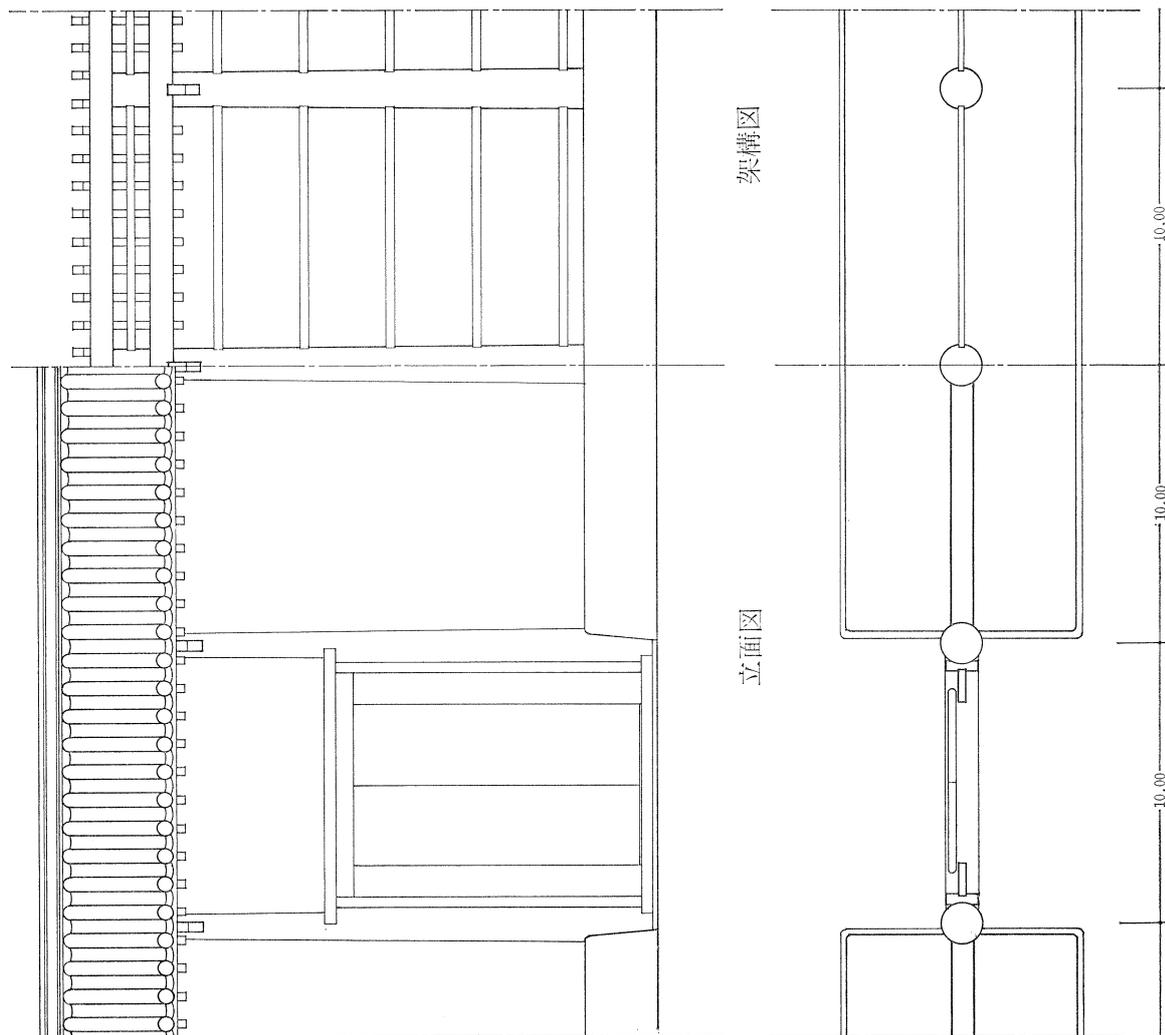
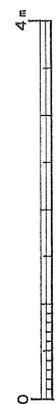
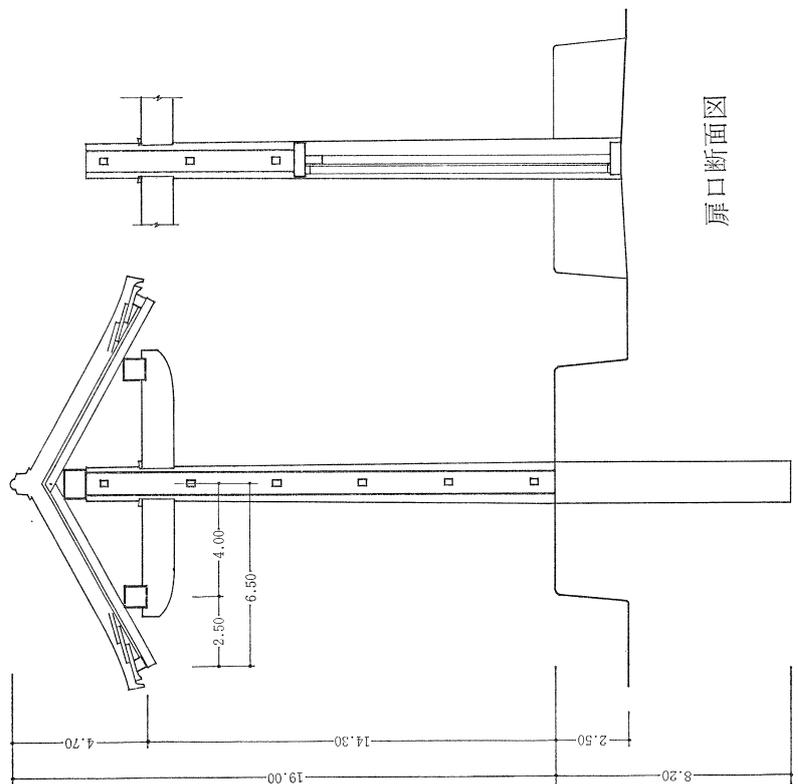


fig. 69 木樋材から想定される挿立柱塀



第IV章 遺 物

遺 跡	(掘 立 柱 塀)	(柱間m)	(柱 掘 形) (一辺m) (深さm)	(備 考)	
伝板蓋宮 <sup>1)</sup>	内郭東面SA6101	2.5~2.8	1.5	1.5	石敷雨落溝あり。幅5.16m。
	内郭北面SA5901	2.5~2.8	1.3		" 幅5.41m, 基壇あり。
	外郭東面SA7405	2.5	1×2	0.95	" 幅7m, 柱は抜取られる。
藤原宮 <sup>2)</sup>	大垣東面SA175	2.4~2.66	1.5~1.8	0.7~1.3	柱は抜取られている。
	大垣西面SA258				
	大垣南面SA2900				
	大垣北面SA140				
	内裏東外郭SA865				
平城宮 <sup>3)</sup>	大垣北面下層SA2330	3.0	2.1×2.4	1.1	同位置で築地に変える。
	第1次大極殿東面SA3777	4.6	1.2	1.4	柱は抜取らず, 同位置で築地に変える。
	第1次朝堂院東面SA5550-A	3.0	2.0	1.2~1.45	柱は抜取られている。基壇あり。同位置で築地に変える。
	第2次内裏東面SA6905	3.0	0.8×1.5	0.6	柱抜取痕跡あり。
	第2次内裏南面SA7592	3.0	0.8×1.5		柱抜取痕跡あり。
	第2次内裏北面SA486	2.95	2×1.5	0.4	柱は抜取られている。
平城京 <sup>4)</sup>	馬寮東面SA5950	2.6	0.9	1.1	一部は柱根残る。半数近く柱は抜取られる。
	馬寮西面SA3680	2.7	1.2	0.5	柱抜取痕跡なし。
飛鳥寺 <sup>5)</sup>	左京三条二坊十五坪SA871	2.1	1.0		
大宮大寺 <sup>6)</sup>	寺城北面SA500	2.66	1.2	0.6	柱痕跡あり。
久米寺 <sup>7)</sup>	寺城北面SA600	1.84	0.8×1	0.4	柱痕跡あり。
	寺城南面SA110	1.5	1.0	0.8	

Tab. 9 大地域を画する掘立柱塀

柱 番 付 その理由としては、「卯五十七」を柱番付とみるならば、57は柱数をあらわすことになり、かりに柱間3mとすれば171m以上の範囲をかこむ地域を想定せねばならないからである。平城宮で柱間寸法3mの掘立柱塀を設ける遺構としては、第1次朝堂院東面のSA5550Aと内裏創建時のSA6905・SA7592・SA486があるが、後者の一辺は171mに達せず、前者が合致するからである。後述するように木樋暗渠設置が第I—4期(平城宮遷都以後の天平末年)におかれ、第1次朝堂院がそのころに掘立柱塀から築地に改修されている可能性がよい。しかし、棟木・桁の転用材については問題がのこる。

25~33はSD5560から採集した木樋暗渠の蓋板である。それらは年輪にそって割りとった板目材であり、両端に相欠き仕口がある。仕口の幅は3.8~5cmで、各板の東端では下面から、西端では上面から欠きとっている。ただし、31は両端とも上面から欠いている。各蓋板には釘づけした痕跡がある(Tab. 8)。

- |   |  |
|---|--|
| 1) 奈良県教育委員会『飛鳥京跡一』1971 p. 185, 191, 同『飛鳥京跡』(昭和49年度発掘調査概報) 1974 p. 10  | 報1977』p. 23, 『年報1978』p. 19, 『年報1979』p. 23, 『年報1980』p. 23, 『平城宮報告VI』p. 28, 『平城宮報告IX』p. 32 |
| 2) 『年報1972』p. 41, 『年報1974』p. 34, 『年報1976』p. 42, 『年報1976』p. 29, 『年報1980』p. 36, 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報11』1981 p. 4, 奈良県教育委員会『藤原宮国道165号バイパスに伴う宮域調査』1969 p. 42 | 4) 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊』1975 p. 13   |
| 3) 『年報1971』p. 42, 『年報1972』p. 32, 『年報1977』p. 23, 『年報1978』p. 19, 『年報1979』p. 23, 『年報1980』p. 23, 『平城宮報告VI』p. 28, 『平城宮報告IX』p. 32                                 | 5) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報8』1978 p. 52   |
|   | 6) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報11』1981 p. 37  |
|   | 7) 『年報1978』p. 51   |

## vi 平城宮の柱根

平城宮跡ではこれまでに465本の柱根を確認している。今回の報告に関連して、その傾向を概観してみよう。それらの多くは採集しているが、なかには現地地にのこしてきたものもある。各種の柱根柱根をとどめた遺構は建物・塀などが主である。

柱根の下径によって分類すると、径21~30cmのものが全体の43.3%をしめる。径51cm以上のものはわずか4点にすぎない。また径10~20cmのものは雑舎や仮設建物に想定されるものである。主要な官衙建物や宮殿の柱には径40cm内外のものが用いられている。たとえば、すでにのべた殿舎地区第Ⅱ期の建物群がその例にあげられよう。ただし、それらは脇殿および雑舎の柱であり、中心のSB6610, SB6611, SB7150は柱痕跡からすれば、もう少し太かったかもしれない。一方第Ⅰ期の径45cm内外のSA3777の柱は太い部類にぞくしており、木樋暗渠転用柱もその類である。

奈良時代の柱は現存建物では最小径の例は法隆寺東大門の34.6cm, 最大径は唐招提寺金堂の58cmであり、概して太いが、その大小は建物の規模に相関している。平城宮跡においても、礎石に柱座をとどめるものでは50cm内外のものがある。そうしたなかで、SB7802の柱はとくに太い部類にぞくし、これに類するものとしてはかつて法華寺下層遺構で検出した径60~70cmの柱根をあげることができる(fig. 70)。

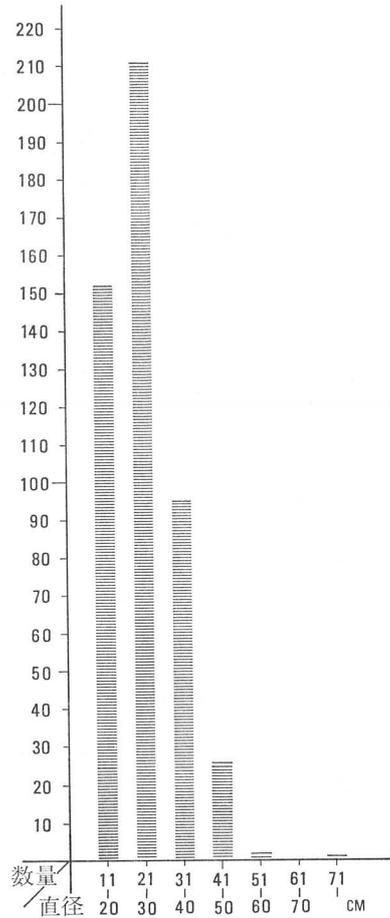


fig. 70 平城宮出土の柱根直径

## vii 柱根の樹齡 (PL. 120・121)

平城宮出土の柱根に用いた樹種については、かつて島地謙・伊東隆夫に依頼して調査したことがある。それによると調査した148点のうち、ヒノキが91点、コウヤマキが52点と2種類の樹種が絶対多数をしめていることがわかった。しかしながら、これらの柱材としてどれくらいの樹齡の材が用いられているかはあきらかでなく、今回この点について調査した。

ヒノキと  
コウヤマキ

**調査方法** SA3777出土の柱根から2本のコウヤマキ柱根をえらび、これと比較する良好なヒノキ柱根がこの地域にないため、6AAF区(東院)出土の柱根2本を比較資料に用いた。樹齡の測定方法としては、柱根の最下部から保存の良好とおもわれる16~30cmのあたりで切断しその木口面を観察することにした。木口面を研磨し、4方向について年輪を読みとったのであるが、年輪幅の狭いところや偽年輪か否かの判定については実体顕微鏡を使用した。

**調査結果** 4本の柱根から読みとった4方向の年輪数は、Tab. 10のとおりである。それぞれの最多年輪数はヒノキ材 No. 1—275年, No. 2—210年, コウヤマキ No. 3—271年, No. 4—251年である。しかし、これらの年輪数は決して実際の樹齡をしめすことにならない。つまりA:研

1) 島地謙・伊東隆夫「古代における建造物柱材の使用樹種」『木材研究資料』第14号 1979, p. 49~76

第IV章 遺 物

出土地	番 号	(樹 種)	(測 線 長 cm)				(年 輪 数)				(下底部から の切断位置) (想定樹齡)	
			1	2	3	4	1	2	3	4	cm	年
6AAF	No. 1	ヒノキ	16.0	18.2	17.2	16.3	226	<b>275</b>	231	235	31.0	325~335
6AAF	No. 2	〃	17.3	18.3	16.6	18.0	130	136	121	<b>210</b>	18.0	260~270
6ABR	No. 3	コウヤマキ	23.5	18.8	17.8	24.6	201	157	<b>271</b>	136	15.0	321~331
6ABR	No. 4	〃	26.6	16.5	20.3	23.2	<b>251</b>	205	230	251	15.0	301~311

Tab. 10 柱根の樹齡測定

磨した木口面の中心年輪が出来るまでに要した年数，B：加工の際に削り落した部分(主として辺材)に含まれる年数，このA・Bを上記の年輪数に加算したものが正しい樹令になる。しかしながら，資料としての柱根が地上からどの位の高さの位置で伐採したか決定しがたいので，Aについては不明である。Bについても原木の辺材をどのくらい削りとして柱材にするかという点についての判断は困難である。ヒノキの辺材部樹齡の割出法については，矢沢亀吉の研究がある<sup>1)</sup>。それによると，辺材幅が約3.5cmの場合に，それに含まれる年輪数は50~60年程度であるという。かりに，コウヤマキをもふくめて，3.5cmの辺材幅が削りとられているとみるならば，No.1—325~335年，No.2—260~270年，No.3—321~331年，No.4—301~311年となる。この場合，いずれも外周部が直に辺材となる場合であるが，実際には心材部も多少削りとられているとみなければならず，樹齡はさらに増加する。こうしたことから正確な樹齡を推算することはできないが，柱材がいずれも樹齡300年以上の木材であったことは確かである。

B SE9210の井戸枿 (PL.126~128)

6ABQ—A地区で検出した井戸SE9210には，井籠組の井戸枿が4段分(高さ約82cm)残存していた。一辺の長さは内法で約2.3mあり，平城宮跡内で発掘した井戸のうちでは最大級である。ヒノキ材で，最下段と三段目の枿板には厚板材を用い，二段目と四段目には三角形の角を面取りした断面不整六角形の材を用い，各段の内面をそろえて積み上げている (fig.71)。

不整六角形の井戸枿8丁は，形状や旧仕口から校倉の校木を転用したことがあきらかである。また井戸枿の西南と西北の隅には板材を据えて高さを調節しているが，この2丁の板材も校倉からの転用材と推定され，校倉の貴重な資料となるものである。はじめに井戸枿の現状について述べ，次いで校倉部材の復原を考察する。

i 井戸枿の現状

隅の仕口は3枚組とし，各段とも東西面の井戸枿を出納とする。仕口の長さは，第二段から第四段までは約15cmとし，部材全長は約2.6mほどである。最下段では約10cmほど短く，全長は約2.5mである。また最下段と三段目の枿板を比較すると，最下段は幅22cm，厚10cm，第三段目では幅24cm，厚7cmの材を用いている (fig.71)。

上下の井戸枿の接する面には，中央からほぼ振り分けに2個所に太枿を立てている。左右太枿穴心々距離は，最下段と二段目の間のみを約1.0mとし，他は0.8m前後でそろっている。太枿穴は長さ6cm，幅2cm，深さ4cmほどである。旧校木にはこのほかに使用されていない太枿穴が第2段上面と第4段上下面にある。校倉のときのもので，大きさは長さ4~5cmと小さい。

各井戸枿外面のほぼ中央部に墨書番付がある。番付は各面の方位と下からの段数を組合わせ

1) 矢沢亀吉「樹幹の心材形成及び心材率についての一考察」『岐阜大学農学部研究報告』第1号 1951

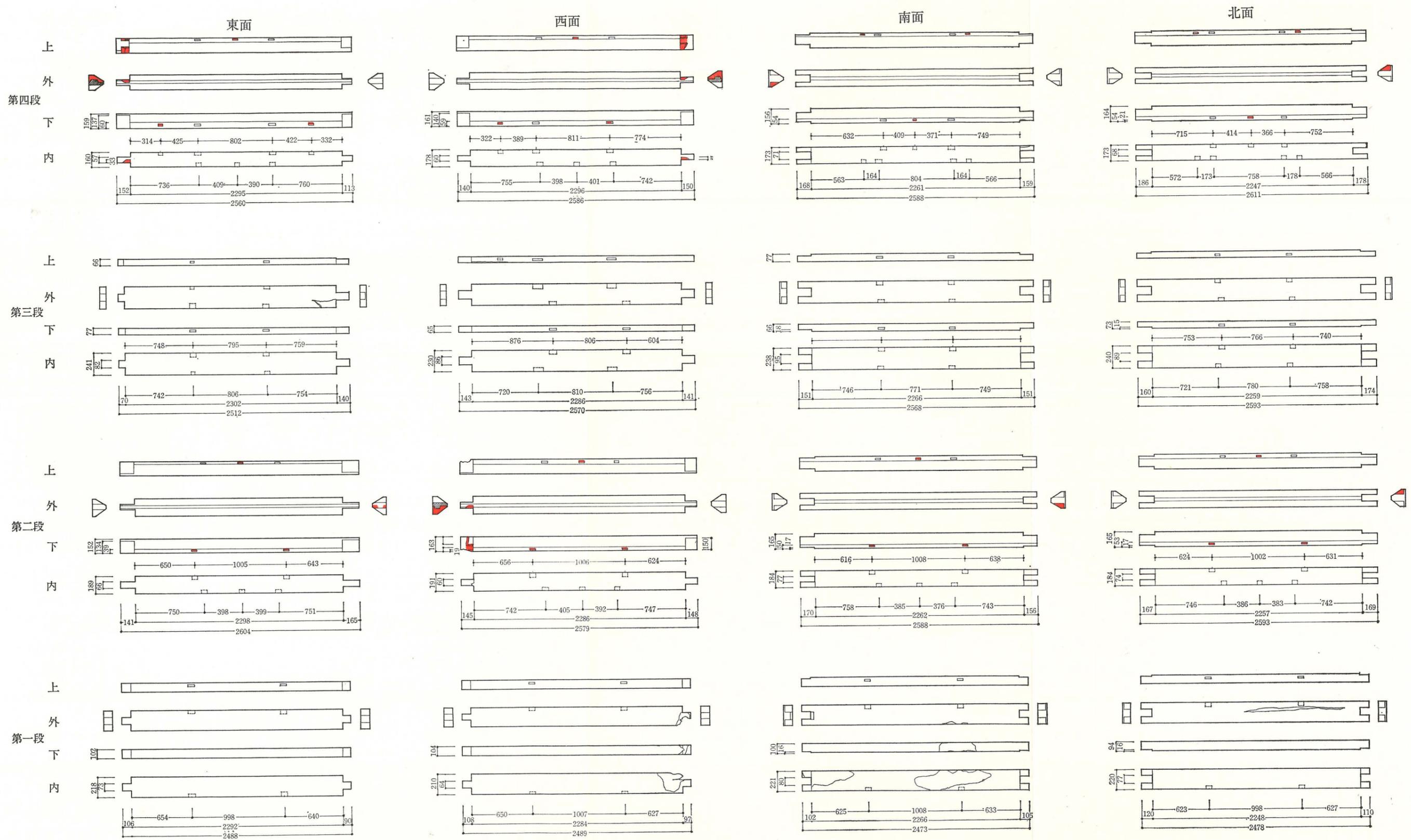


fig. 71 SE9210井戸枠実測図

校木仕口・太柄穴 単位mm

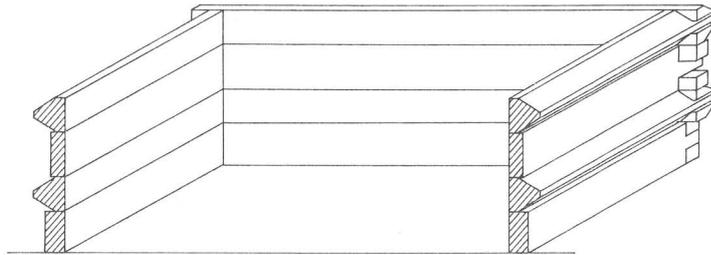


fig. 72 SE9210井戸枠の組上げ法

たもので、例えば東面では下から順に「東下一」・「東一」・「東二」・「東三」と記している。板 番 付  
 枠には全面にチョーナで削った加工痕が明瞭にのこるが、校木は外面が風蝕していたため、墨  
 書の部分だけを削りなおして墨書している。番付墨書は各面井戸枠とも外側から向って右側を  
 字頭として統一されており、仮組をしたときに記入したものとかがえられる。

二段目の番付を「一」とし、最下段を「下一」としているの、最下段は計画を変更して追加さ  
 れたものとかがえられる。二段目以上と最下段では組手仕口の長さがことなり、また最下段  
 と二段目の間に入れた太枘穴間隔が広いこともこれを裏づけている。二段目校木下面にはほか  
 のような未使用の太枘穴がないが、これは現在の二段目校木を最下段とする予定であったため  
 に井戸枠用の太枘穴をほらなかつたものを、下方へ一段追加することになったときに、新しく  
 太枘穴をほらずに旧太枘穴をやや彫り広げて使ったためとおもわれる。最下段が校木の転用で  
 は不安定であったのであろうか。下へ板材を追加するにあたり、三段目の板枠よりも厚手の材  
 を使用しているのも安定をはかるためであったとおもわれる (fig. 72)。

## ii 校木の復原

校木の外面の一部に焼痕がのこっているの、火災に遭った校倉の部材のうち、焼損の少な あ ぜ き  
 い部材を転用したものとかがえられる。以下の記述では、例えば東面下から二段目の井戸枠  
 として用いていた校木を東2ということにする。

8丁の校木の断面はせい16~19cm, 幅15~17cm とやや不揃いであるが、平均してせい18cm,  
 幅16cm ほどでやや縦長の断面を呈する。いずれも心去材で、西2を除く7本は木裏が外面に  
 なるように木取りしている。本来は一本のヒノキ丸太を四ツ割にし、4本の校木をえたものと  
 かがえられる。

各校木とも一端に旧仕口痕跡がのこり、井戸枠として切断加工された仕口面とは明瞭な仕事 仕 口  
 の差が認められる。東4・西2・西4では井戸枠出納に当初の仕口の一部がのこる。仕口を復  
 原すると、渡り腮で上木のせいの半分を大入れに落とし込み、中央にすべり止めの目違をつくっ  
 ており、唐招提寺経蔵の仕口に類似している。切断箇所は東4では向って左側の仕口外面で、  
 西2・西4では向って右側の仕口外面で切り、旧仕口部分の中央3分の1をのこして転用時の  
 出納につくっている。他の5本の校木は仕口の内面で切断し、その内方に井戸枠用の仕口をつ  
 くっており、材端の木口面に旧仕口の痕跡がみとめられる。東2は向って右の仕口内面で切断  
 して出納を、南2も同じ位置で切断して入納をつくったことがわかる。旧仕口の痕跡から東2  
 ・西2・南2・南4は転用のさいに校木のときとは上下を逆につかっている。

第二段校木上面と第四段校木上下面の旧太枘穴の間隔は東4が1.65mと広く、他は0.80mか

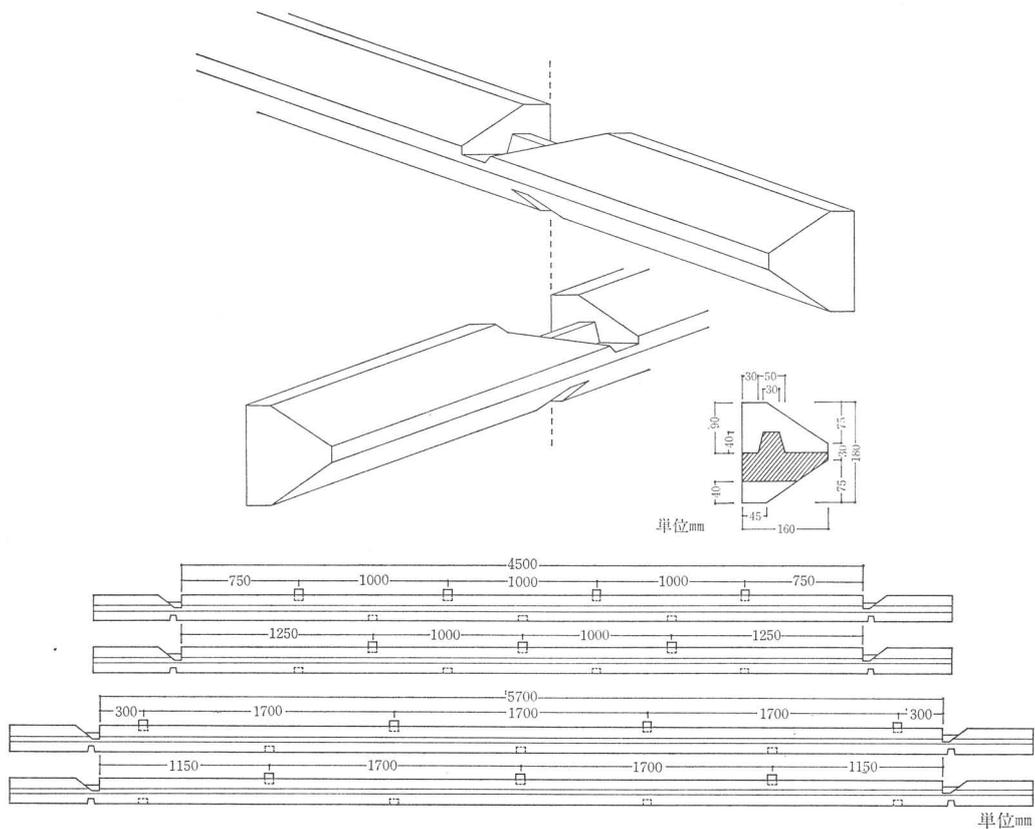


fig. 73 校木の復原図

ら1.11mの間である。第2段校木下面の太柄穴の間隔は後者に近く、すでにのべたように旧太柄穴が再利用されたとかんがえられる。太柄穴の間隔は厳密には不揃いであるが、間隔1m前後のものとは1.7m前後のものにわけられる。これは校倉の桁行と梁行の長さの相違にもとづくものとかんがえられる。校木は成6寸ほどであり、現存する奈良時代の校倉と比較すると東大寺法華堂経庫(せい5寸8分)、唐招提寺経蔵(せい6寸5分)にちかい。平面規模は東大寺法華堂経庫が桁行6.05m、梁間5.11m、唐招提寺経蔵が桁行5.57m、梁間4.67mであり、建物規模もこれらと大差ないものとおもわれる。校木にのこる旧太柄穴の間隔からみると、校木仕口の内法寸法は桁行5.7m(19尺)、梁間4.5m(15尺)程度に復原できる(fig. 73)。

### iii 台輪の復原

井戸枠の下の礎盤は、西南隅は長さ63cm、幅29.3cm、厚11.0cm、西北隅は長さ75.3cm、幅33.8cm、厚10.2cmである(fig. 74)。木裏を上面にしてすえており、井戸枠の当りが圧痕としてのこるが、井戸枠に関係のない圧痕や風蝕差が認められ、転用古材であることがわかる。西南隅礎盤は一端に当初の木口を残し、著しい風蝕がみられる。他端は転用時に鋸で切断されているが、木表は当初の木口から長さ約60cm間の風蝕が甚しい。

西北隅礎盤は転用時に両端が鋸で切断されている。木裏には一端に幅6cm程の圧痕がのこる。木表は長さ方向の片側幅20cm程の風蝕が大きい。2丁の礎盤はその断面形状からみても校倉の台輪(柱盤)と推定され、風蝕状況からみて西南隅礎盤は梁行の台輪先端の部分、西北隅礎盤は梁行台輪にのる桁行台輪で校木がのり、隅束柱に近い部分とかんがえられる。

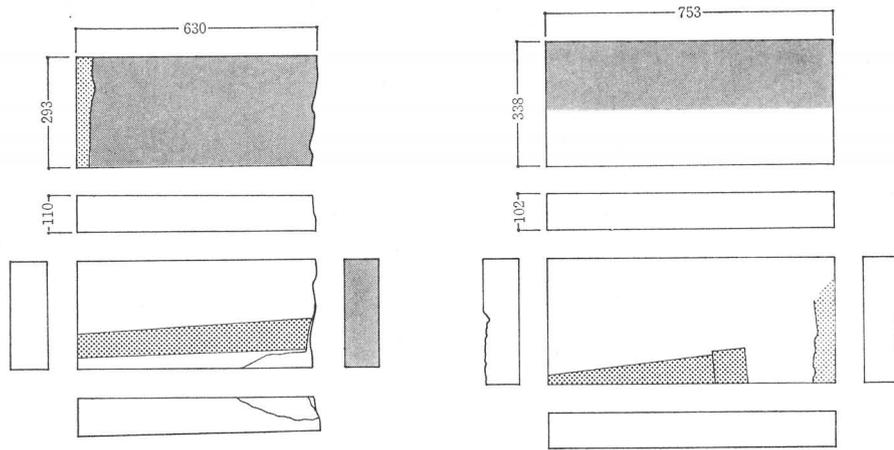


fig. 74 礎盤実測図

単位mm 井戸枠当り痕跡 旧当り痕跡 甚しい風蝕

iv ま と め

井戸SE9210は遺構の編年からすれば第Ⅱ期(天平勝宝5年~奈良時代末)とかがえられるもので、校倉の建立時期はこれ以前となり、甚しい風蝕の状況からみると奈良時代の初期を降らないものとなる。

奈良時代の建立の校倉は7棟が現存しているが、校木断面はせいと幅がほぼ同一か、あるいは幅がやや大きい。今回出土した校木はせい6寸、幅5寸3分ほどでやや縦長断面となる。このような校木の断面は中世以降の手法と考えられていたが、今回の校木の発見によって古代にも縦長の校木が使われていたことがあきらかとなった(Tab. 11, fig. 75)。

建物規模は桁行5.7m、梁間4.5mほどと推定され、唐招提寺経蔵とはほぼ同規模の小型の部類にぞくする。上下の校木の振れ止めのためには太納を用いている。桁行・梁間ともに3~4個所入れたものと推定されるが唐招提寺経蔵では太納を用いず、東大寺法華堂経庫でも各校木の中央部に1個所設けるにすぎないのとくらべると、この校倉の太納は丁寧な仕事といえよう。

	建 物	時代	規 模		校木断面	
			(現尺)	(現寸)	(現尺)	(現寸)
(現 存 遺 構)	唐招提寺宝蔵	奈良	桁行 25.2	梁間 20.0	せい 7.0	幅 8.2
	〃 経蔵	〃	18.5	15.5	6.5	7.2
	正倉院宝庫南北倉	〃	各34.2	30.8	9.8	9.0
	東大寺本坊経庫	〃	29.4	19.5	7.3	7.3
	〃 勸進所経庫	〃	21.9	17.1	5.1	5.1
	〃 法華堂経庫	〃	20.0	16.9	5.8	7.4
	手向山神社宝庫	〃	29.2	19.5	7.3	7.3
教王護国寺宝蔵	平安	22.4	19.5	7.4	8.0	
(転 用 古 材)	法隆寺東室	奈良			8.6	(8.3)
	〃 聖霊院	〃			—	8.0
	平城宮SE9210	〃			6.0	5.3

Tab. 11 校木断面寸法の比較

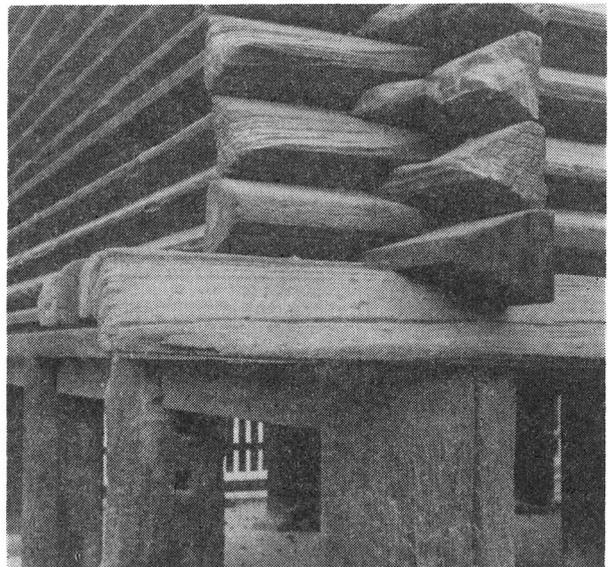


fig. 75 東大寺法華堂経庫

C 建築雛形部材 (PL. 129)

i 部材の現状

第1期の東楼SB7802の掘立柱抜取痕跡から出土した木片のなかに、15点の建築雛形の部材がふくまれていた。雛形部材はいずれも無節の木目のこまかいヒノキ材を柾目取りとしたものである。部材としては、枅肘木1丁、通肘木1丁、尾垂木受け通肘木2丁、方斗2個、入側東1丁、同断片1丁、天井組子と推定される断片1丁、飛檐垂木1丁、その他梁木口らしいものなど用途のはっきりしないものが5丁ある。

ひじき **枅肘木(1)** 隅柱上の大斗にのる肘木で相欠き上木の仕口をもつ。一方の木口内方に長い繋ぎをつくり出していて隅の肘木と確認される。現存長さ23.3cm、肘木部分の長さ14.7cm、せい3.0cm、幅2.5cm、上端に3個の巻斗をとめる丸太納穴がほられ、両端の丸太納穴心々間12.6cm、太納穴径1~1.2cmである。繋ぎはせい1.3cm、幅1.2cmで、壁板をうけるとともに組物を固定するものとかんがえられ、化粧ではない。繋ぎの長さからみて隅の間の柱間寸法は23.3cm以上である。

とおしひじき **通肘木(2)** 現存の長さ30.5cm、肘木部分の長さは相欠き仕口外面から11.7cm、せい3.1cm、幅2.3cmである。一方を肘木につくり、他方は長くのび、側通りの一段目通肘木と認められ、柱上の三斗でうける。相欠き仕口から内方は仕口底で割れているが、隅行肘木および他面の通肘木と組合って一番下木となる。仕口底に小木釘痕があり、方斗を通して下の枅肘木へとめている。先端に巻斗をうける丸太納穴があり、柱心からの出は12.0cmとなる。中間の一手先目の位置には巻斗の太納穴はなく、心から内方17.5cmの間には仕口がないらしい。

**尾垂木受け通肘木(3・4)** 2丁あり、隅力肘木および他面の通肘木と組合い、2丁とも下木で仕口底に木釘痕があるが、隅力肘木の仕口の方法は左右逆勝手である。先端は斜めに削って尾垂木をうけ、丸太納穴を垂直にほる。1丁には太納穴がのこる。木口の勾配は1丁は10分の5.2、1丁は10分の6でやや差があり、相欠き仕口外角から先端上端角までの出も8.0cmと8.4cmとなる。1丁は仕口の中間で折損するが、他方は下端の仕口底の部分が仕口心から内方に約18.0cm残存する。この部材はいずれも下段通肘木のうえに通る横架材の隅の部分で、他の奈良時代および平安時代初中期の三手先ではこの部材の内方を肘木につくるのにたいし、これは通肘木となっている。

ま **尾垂木上斗(5)** 長さ4.1cm、幅4.0cm、現存せい(敷面高)2.3cm、斗繰せい1.5cmで、上角の耳を欠損し、中央に丸太納穴が抜き通る。下端は後に圧縮されて変形しているが、木目の状況から見ではじめから隅行方向に斜に削られていたものとおもわれる。そうすれば、隅尾垂木のような隅行の斜材の上におかれたことがかんがえられる。この斗は他の斗と同方向に鬼斗風に用いられているので、隅尾垂木とは平行にならず、斗尻角が尾垂木からはみ出すことになる。斗繰も一般の斗と同手法である。本来は尾垂木上端に渡腰の仕口をつくり、斗尻の両脇は水平に納めるはずであるが、雛形のことであり、仕事を略したのかもしれない。太い丸太納を立てているので滑り出すおそれはない。巻斗もこれと同寸法とかんがえられる。

**尾垂木上斗(6)** 斗(5)より1まわり大きく長さ4.6cm、幅4.5cmで中央に丸太納が抜通り、

上端の一角にのみ耳がのこるが、この方斗で受けた材は角材でなく円形断面の材とみられるので、丸桁の隅の組手をうけたものとかがえられる。斗線はごく1部しかのこらず、下端を欠取り、さらに耳の反対側の半分は下端を斜にそいでいる。本来、三手先の隅では隅尾垂木上の三斗には方斗をおかず、二重尾垂木をいれて直接丸桁の組手をうけているが、この雛形では二重尾垂木上に斗線のほとんどつかない方斗をかいもののようにいれていたらしい。この斗も下の斗と同方向に鬼斗のように用いられている。

**入側束(7・8)** 完存するもの1丁と前角にあたる断片1丁がある。現状では肘木・通肘木よりもやや細い野材で、下端は水平に、上端は斜に削っていずれも長い丸柄をつくりだす。上端勾配は尾垂木受け通肘木の木口勾配とあい、力肘木の柱筋内方に立って、直接尾垂木下端をうけたものと認められる。束の断片(8)は前角の全長をのこし、下端は水平、上端は斜に削り、長さは完存する束とよく一致している。

**天井組子断片(9)** ごく小さい断片で、一端に近く相欠き仕口底らしい痕跡がかすかにのこる。小片のためもとの用途は確定できないが、軒天井の組入天井組子とみてもよからう。

**飛檐垂木(10)** 全長をのこし、尻の下端を斜に削り、上端もやや斜に削って地垂木にとめた木釘痕1個がある。長さ14.0cm、せい1.6cm、幅1.2cmの直材で、反り増しや幅の細まりもない。先端は1方を幅の3分の1ほど欠取り、欠取りの端は内方へ向けて斜になり、別の材に当たっていた可能性もあるが、飛檐垂木としてはかながえにくいことで後の傷とおもわれる。先端木口は破損していて茅負取付き痕跡は不明であり、止釘痕もない。木負の当り形も不明であるが、本負からの出は5～6cmと考えられる。形状や寸法からみて飛檐垂木と推定される。

**用途不明の断片(11・12)** 上記のほか用途の判然としないもので、建築雛形のものとおもわれる断片が5点ある。梁木口状のもの(11)は、幅3.3cm、せい4.0cmで現存長さ9.2cm、廃棄のときに切断されている。内面は割肌であるが、本来の木肌か廃棄の際に割られたのか判然としない。上下とも直で反りはないが、外面木口に垂木か尾垂木をうけたとかがえられる大きい斜の欠込みがあり、木口先端上端も同じ勾配に削られているが、止釘痕などはない。欠込みの勾配は10分の6で、尾垂木勾配ともほぼあう。尾垂木尻をうけるような内部の梁材断片とおもわれるが、相欠き仕口、束柄穴、落掛り仕口などがなくて詳細はわからない。欠込みを支外垂木のものとして入母屋造の妻梁(叉首台)の先端部とみることもできるかもしれない。両端に丸柄穴らしい痕跡をのこす盤状の部材(12)は、現存長さ14.5cm、幅3.6cmの野材で、両端は折損する。厚みは現存最大1.7cmであるが、1方で薄くなり、後に割られた可能性が大きい。これは幅広い面を柱目とし、両端の丸柄穴は変形欠損しているが、心々12cm程である。台輪・柱盤のような用途もかがえられるが野材であり、内部の束受け土居であったかもしれない。

**先端木口部を残す断片(13)** 現存長さ16.0cm、幅3.4cm、現存せい2cmで、木口から5.7cmに相欠き仕口があり、それより内方は仕口底から割れており、相欠仕口の深さからみると、もとのせいは2.5cm程あったとかがえられる。用途はあきらかでないが、(12)の野材のようにこれも柱盤、土台、束受け土居などの用途もかがえられる。

**その他(14・15)** このほか、小片のうちに、隅留と髪太を残す断片(14)がある。現存長さは6.6cmにすぎないが、一端に束か柱に長押か榫状に取付いたような仕口があり、留先の方向及び髪太内方の胴付きの傾きは45度よりも大きく、六角形の隅とした場合にあうようである。他

#### 第IV章 遺 物

端も逆の斜に切られ、その傾きもほぼ同様であるが、後の切断とおもわれる。留先の見付は垂直でなく投げ勾配になっていて、前方へ傾斜して使われたものかもしれないが、組物の部材とは別種のものらしい。雛形の中に置かれた宮殿風のもの断片と考えることも出来そうであるが、わずかに1小片のみであるため想定はむずかしい。端に隅留らしい仕口をもつ他の断片(15)は、現存長6.0cmの小片であるため用途は不明。

##### ii 三手先の復原

建築雛形の部材のうち最も多いのは組物の部材である。そのなかに二手先に延びる通肘木と、尾垂木を受ける通肘木があるので、この部材が三手先の組物を構成することはあきらかである。大斗・尾垂木・丸桁などはのこっていないが、不明の個所は天平2年(730)建立の薬師寺東塔、同末年頃とかんがえられる海龍王寺五重小塔などを参考にして、もとの構成をfig. 76の五重小塔のように復原した。奈良時代の建築雛形には国宝海龍王寺五重<sup>1)</sup>小塔と、奈良時代後半の製作とかんがえられる国宝元興寺極楽坊五重<sup>2)</sup>小塔がある。いずれも実際の塔の10分の1を意図してつくられ、ともに三手先である。正倉院紫檀塔残欠はやや小型の五重小塔の部材とかんがえられており、尾垂木のない二手先に復原されて<sup>3)</sup>いる。

現存する奈良時代ないしは平安時代前期の建造物のうち、三手先のものとして小塔のほかに薬師寺東塔、唐招提寺金堂、当麻寺東塔、室生寺五重塔、当麻寺西塔、醍醐寺五重塔がある。薬師寺東塔が最も古式の組み方で、海龍王寺五重小塔がこれにつぐ。唐招提寺金堂以下は支輪桁を入れて軒支輪が設けられ、丸桁下に実肘木が用いられる。

この建築雛形部材のうち、二手先まで延びる通肘木には先端にのみ巻斗の太柄穴があり、一手先目には太柄穴がない。薬師寺東塔も同じように隅行のほかは一手先目の通肘木上に巻斗を入れていない。海龍王寺五重小塔では中間に巻斗をおき、したがって一手先の上下に巻斗が並んでいる。

また、この雛形では尾垂木を受ける通肘木先端に肘木と組合う仕口がないので、二手先目の秤肘木と支輪桁はなく、一体に軒天井を張っていたことになる。

奈良時代及び平安時代の三手先では、側通りの大斗の上に三斗を組み、通肘木を1丁通したうえにさらにもう一段三斗をくむ。したがって、隅の尾垂木受けの材は内方が肘木の形につくられる。ここを通肘木とし、通肘木を柱通りに3段積み重ねる手法は、承安元年(1171)の一乗寺三重塔、同じ頃の浄瑠璃寺三重塔にはじめてみられる手法で、天喜元年(1053)の平等院鳳凰堂でも三斗を二段に重ねている。これらの古式の三手先にたいし、法隆寺金堂・五重塔・中門、法起寺三重塔の雲斗雲肘木では柱通りに3段の通肘木を重ねていれているが、この建築雛形は、これらと同じ手法をとっている。三手先としては、同時代に類例がない(fig. 76)。

1) 伊東忠太「南都海龍王寺に蔵する五層塔婆模  
型」『建築雑誌』132号 1897、『日本建築の研  
究下』龍吟社 昭11, 天沼俊一「海龍王寺五重  
小塔に就て」『建築雑誌』258号 1908, 岡田  
英男「五重小塔」『大和古寺大観第5巻 秋篠  
寺法華寺海龍王寺不退寺』岩波書店 1978

2) 奈良県教育委員会『国宝元興寺極楽坊五重小

塔修理工事報告書』1968, 鈴木嘉吉「五重小  
塔」『大和古寺大観第3巻 元興寺極楽坊元興  
寺大安寺般若寺十輪院』岩波書店 1977

3) 浅野清・木村良雄「正倉院紫檀塔の残欠に就  
いて」『美術史』8 1953, 浅野清『奈良時代  
建築の研究』中央公論美術出版 1969

3 部 材

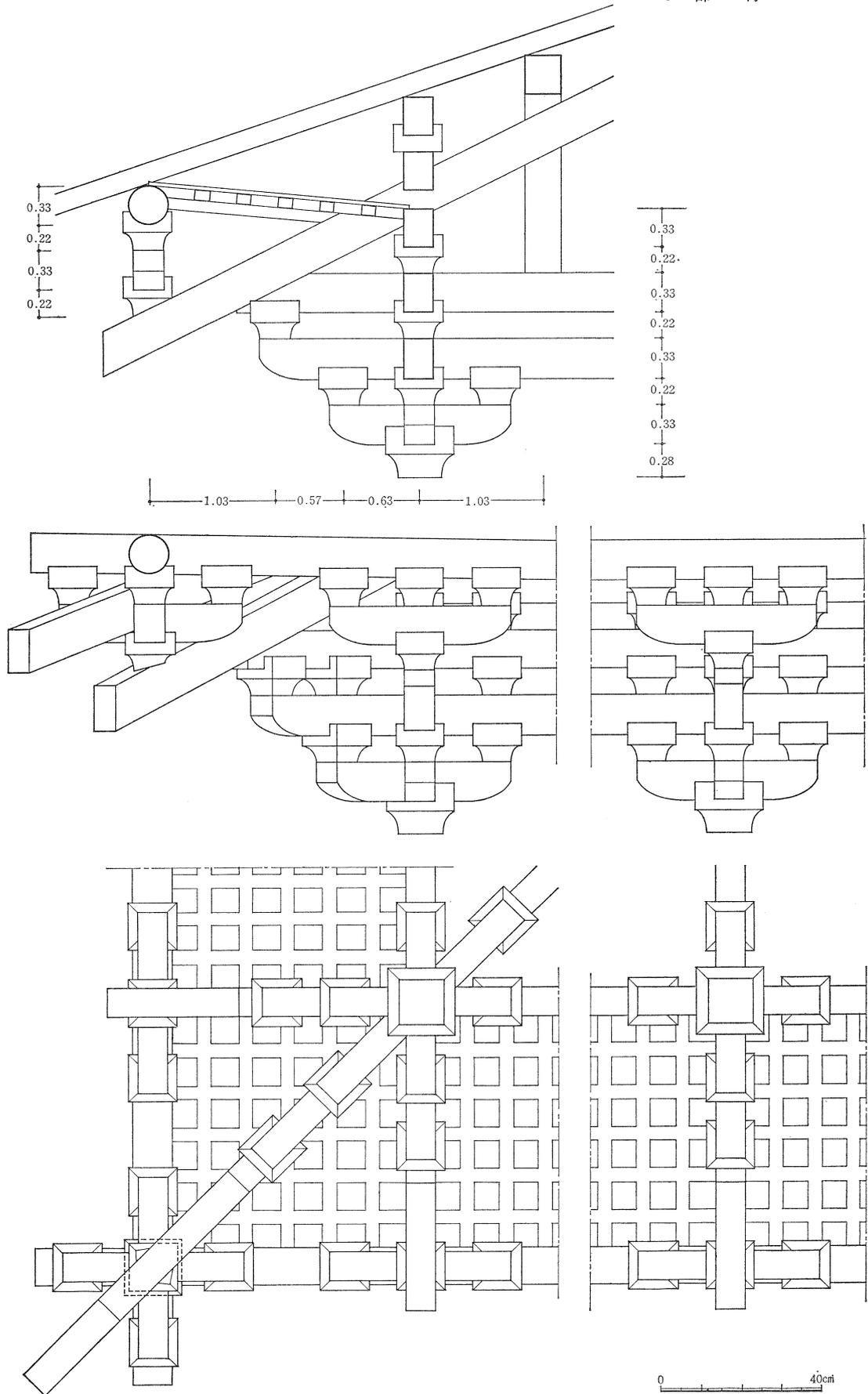


fig. 76 建築雛形三手先復原図

#### 第IV章 遺 物

隅の尾垂木上には一般の斗と同じ寸法・形式の斗をおき、二重尾垂木上に丸桁の組手をうけるために他の斗よりも一まわり大きい方斗をかい込んでいたとかがえられる。このような手法も他に例がない。二重尾垂木を出桁下肘木に深く切込んだために必要となったものであろうが、雛形であったからかもしれない。

#### iii ま と め

SB7802の掘立柱抜取痕跡から出土した建築雛形部材は、主として三手先の部材で、とくに隅の部材が多い。これから復原される三手先にはつぎのような特徴がある。

#### 細部の特徴

1. 支輪桁がなく、したがって軒支輪を設けず、一体の軒天井を張っている。 2. 二手先に延びる肘木の中に巻斗をいれず、一手先目に巻斗が上下にならばない。 3. 古代の三手先では柱通りに三斗を上下2段に組むが、この雛形では上段を三斗とせずに通肘木とし、通肘木が3段重ねになる。 4. 隅尾垂木上の斗は普通の斗と同じものを他の斗と同じ方向に鬼斗風にいれ、丸桁の隅の組手下に方斗をいれている。斗で直接丸桁をうけ、実肘木を用いない。 5. 肘木・通肘木などはせい3.3cm、幅2.5cmの材が多く、この寸法の部材が規格的なものとして各所に用いられた。

以上の特徴によると、薬師寺東塔、海龍王寺五重小塔と同系の古式の三手先であるが、隅尾垂木上の斗のあつかいは独特の手法をとり、柱通りの3段の通肘木も現存する古代遺構の三手先には類例がない。内部の入側束が野材となるので、内部は全体に天井を張ったか、あるいは化粧に仕上げなかったらしい。

#### 十分の一模型

海龍王寺五重小塔の初重肘木は長さ13.2cm、せい2.5cm、幅2.3cmでやや小さいが、元興寺極楽坊五重小塔の初重肘木は長さ14.2cm、巻斗太柄穴心々11.8cm、せい3cm、幅2.3cmで雛形部材とほぼ一致する。巻斗は海龍王寺五重小塔では長さ4.2cm、斗尻長さ2.1cm、せい3.3cm、斗繰せい1.4cm、元興寺極楽坊五重小塔では長さ4.3cm、斗尻長さ2.4cm、せい3.1cm、斗繰せい1.2cmで雛形と大差がなく、この雛形も実際の建物の10分の1を意識して製作されたことがわかる。

1) 玉山厨子の宮殿部も建築的手法で作られている。記録に見えるものでは、大安寺の宮殿像(『資財帳』)、西大寺四王堂八角五重塔(『資財帳』)、四天王寺金堂の六重小塔(白銅壺入り舍利安置、『古今目録抄』)、興福寺東院松皮葺後堂の立塔(『興福寺流記』)、薬師寺金堂の金銅五重塔(本薬師寺塔舍利安置、塔は片岡王寺より移す、『七大寺巡礼私記』)、東大寺戒壇院の六重金銅塔(『私記』、菅原本『諸寺縁記集』)などがあり、瓦製の小塔、小堂なども各地で発見されている。また、雛形は建築の試作(様、『令義解』の宮繕令では「タメシ」と傍訓)としても作られ、『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』にみえる「四口ノ工人并金堂ノ本様奉上」、思託の西大寺八角塔様(『延暦僧録』)、実忠の小塔(百万塔)安置の殿様(『東大寺権別当実忠二十九介条事』)などがそれにあたり、長門国駅館の造替も定様によるとされている(『日本後

記』大同元年 806)。

中国における雛形的な木造小建築の実例としては遼・慶陵の東陵〔聖宗、太平10年(1030)埋葬〕中室西副室、西陵〔道宗、乾統元年(1101)埋葬〕墓室から発見された小建築部材があり(田村実造・小林行雄『慶陵』京都大学文学部 1953)、最近では1973年出土の木亭模型(新疆ウイグル自治区博物館編『新疆出土文物』1975)、北斉庫狭廻洛墓発見の屋宇型木槨(王克林「北斉庫狭廻洛墓」『考古学報』1973—3)がある。山西省大同県城内の下華嚴寺薄伽教蔵〔遼・重熙7年(1038)〕経閣上の仏龕も建築的手法でつくられており、『营造法式』の仏道帳、転輪経蔵、壁蔵上部にのる天宮壁蔵にあたるものである(関野貞「大同大華嚴寺」『支那の建築と芸術』岩波書店1938、村田治郎『大同大華嚴寺』和楽路屋書店1936、竹島卓一『营造法式の研究二』中央公論美術出版1971)。

三手先組物は組物のなかで最も複雑な構造であり、寺院であれば金堂・塔・二重門などの最も重要な建物に用いられ、平城宮では大極殿や朱雀門などに用いられたとかがえられる。現存する奈良時代の小建築は塔に限定されており、この雛形が塔であった可能性もある。しかし、梁木口の断片らしいものが同じ雛形の妻梁とすると入母屋造であったことになり、殿堂や楼風のものにもかんがえられるが、部材が少数であり、これで決定することはむずかしい。

この部材を発見したSB7802は第Ⅰ期の建立で、天平勝宝5年頃に解体撤去されたとかんがえられるので、この雛形の廃棄も同時期である。廃棄にあたり、切断された痕跡をとどめるものもあり、破損材だけが捨てられたのかもしれない。このほかにも宮内では東院東南隅などで発見されているが、他には発見例はごく少なく、貴重な遺物である。この建築雛形はおそらくSB7802の楼内に安置され、納入品を収めていたと察せられるが、そうすれば、その製作年代も同様に神亀頃を余り降らないことになろう。

#### D 石材ほか (PL. 130)

遺構の各所から石材を検出している。溝・暗渠などでは原位置にとどまるものもあるが、多くは遺構から遊離したり、2次的に再利用したものである。第1次大極殿地域で確認した石材にはつぎのようなものがある (fig. 78)。

**両輝石安山岩** 奈良地方で俗に「カナンボウ」とよぶ岩石。大半は風化のため岩石の表面が灰白色を呈する。新鮮な割れ口は黒色、緻密で硬い安山岩で垂貝殻状断口をしめす。岩石の表面には凹凸のくぼみが多数みられる。石基は玻璃質～微晶質、斑晶には主として斜長石・斜方輝石・単斜輝石で、まれに角閃石・石英がふくまれる。平城宮でもっとも多くつかわれている石材で、人頭大前後の野面石を溝の護岸や敷石として用いる場合が多い。たとえば、第Ⅱ期殿舎地区の正殿東側を流れるSD6608や石積擁壁SX9230などはその好例である。遺構の報告でたんに安山岩とよぶのはこの種の石材である。

カナンボウ

**含松脂岩流紋岩質凝灰角礫岩** 黄～灰白色を呈する。比較的軟らかく加工が容易であり、磨けば表面に美しい文様があらわれる凝灰岩である。玻璃質集塊凝灰岩とか、たんに凝灰角礫岩とよぶこともある。火山岩層が火山灰で固結したもので、構成礫種は黒色の松脂岩・灰色の流紋岩・白色のパミスなどで、花崗岩礫やガーネット(石榴石)がふくまれたり、流紋岩礫をふくまないこともあり、若干岩質に変化がみられる。風化に対して抵抗力がよわい。

凝灰岩

平城宮では両輝石安山岩とならんで多用されている石材で、建物の基壇や溝などにつかわれており、礎石に用いる場合もある。風水に弱いため、粉末状に脆弱化した状態で発見される場合がしばしばある。板状や柱状に加工して利用するのがつねで、今回の報告では第Ⅲ期の築地を横断する石積暗渠SD3815などをあげることができる。また廃材を建物の礎盤などに転用する場合も少くない。遺構の報告ではたんに凝灰岩とよんでいる。

**角閃石一黒雲母花崗閃緑岩～石英閃緑岩** 中粒完晶質の中色岩、有色鉱物は花崗岩より多いのが特徴的である。主要な造岩鉱物は斜長石・アルカリ長石・石英・角閃石・黒雲母であり、弱片麻状構造をしめす。角閃石は6～7mm大におよび自形性の強い結晶が多数観察され、長

1) 平城宮東院東南隅の第99次調査で八角の建築雛形の斗1個、南面若犬養門の第133次調査で

巻斗1個が発見されている。いずれも箱状に作った軸部に貼付けた片蓋式のものである。

第IV章 遺 物

軸は一定方向に平行配列するものが多い。またレンズ状に引きのばされた暗黒～暗緑色の塩基性シュリーレ状の包有岩（数cm～30cm大以上におよぶものがある）が特徴である。

第I期遺構  
にともなう  
か

**礎石**(PL. 130, fig. 77) 今回の調査地域では原位置にのこる 礎石はなかった。第II期大膳職地域の南面を画するSA109南側溝の埋立層に角閃石黒雲母花崗閃緑岩～石英閃緑岩を加工した2個の礎石があった。その1は137.2×93.1cm, 高さ60.3cmのほぼ長方形の1短辺が斜めに欠けた平面形をとる大型礎石である。上面と側面の1部を平滑に加工する。柱座などはつくりだしていないが上面の加工は丁寧である。付近でこの礎石を用いた建物をさがすと、第I期殿舎地区の後殿SB8120を候補にあげることができる。その2は86.4×61cm, 高さ33.8cmの隅丸長方形の1短辺が斜めに欠けた平面形の小型礎石である。側面と上面が加工されているが、上面の加工が丁寧で平滑面を呈している。1と同様に第I期の北面築地回廊の礎石にあてることができよう。同種の石材を用いた礎石は第1次朝堂院南門に使用されている。一方、第1次大極殿を移建したものに想定されている恭仁宮大極殿に残存する礎石にもこの種の石材と流紋岩質凝灰岩がつかわれている。

**石材産地の推定** 石材の産地を推定するにあたって、岩体が露出して調査可能の地域をえらんだ。また、礫層中や河川の堆積物を採石した可能性もあるが、今回は推定産地から除外した。さらに同質の岩石が各地にある場合もあるが、ここでは石材使用地にもっとも近い距離に産出する類似・酷似する岩相を示す地域をえらんだ。

凝灰岩の産  
地

火山碎屑岩である凝灰岩は国内のいたるところで産出するが、奈良県下の遺跡で発見されるのは10種類にみえない。凝灰岩はその構成礫種、構成鉱物、およびそれらの粒度、構造に特徴が多く、産地の推定は他の岩石にくらべて容易である。含松脂岩流紋岩質凝灰角礫岩の特色である松脂岩礫をふくむものは、奈良～大阪の府県境にある二上山のドンズルポー・鹿谷寺付近の岩質に酷似し、産地にあてることができる。鹿谷寺跡付近に産出する凝灰岩は二上山南面・竹内街道からの登り口に分布する瀝青岩(松脂岩)の上層に産出するもので、灰色の流紋岩礫をふ

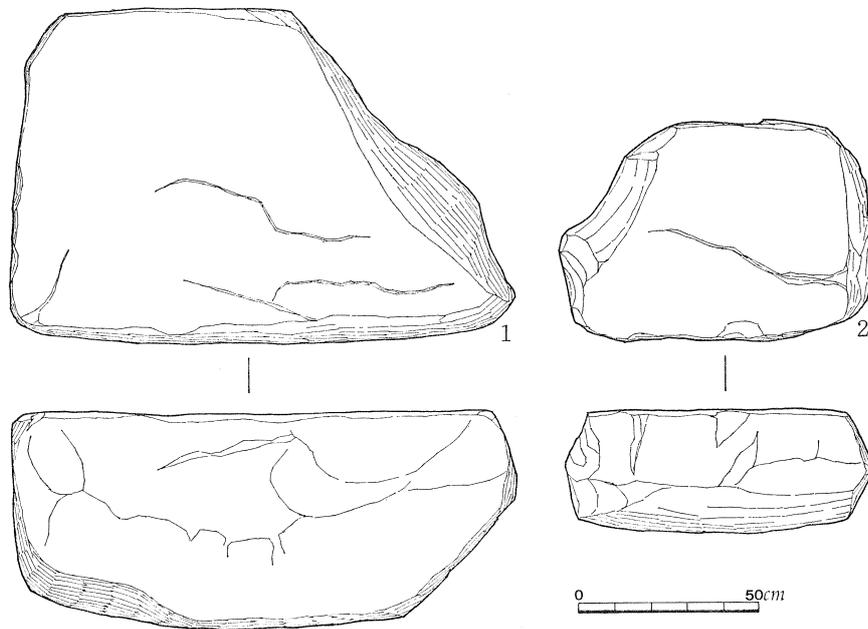


fig. 77 SD109南溝出土礎石

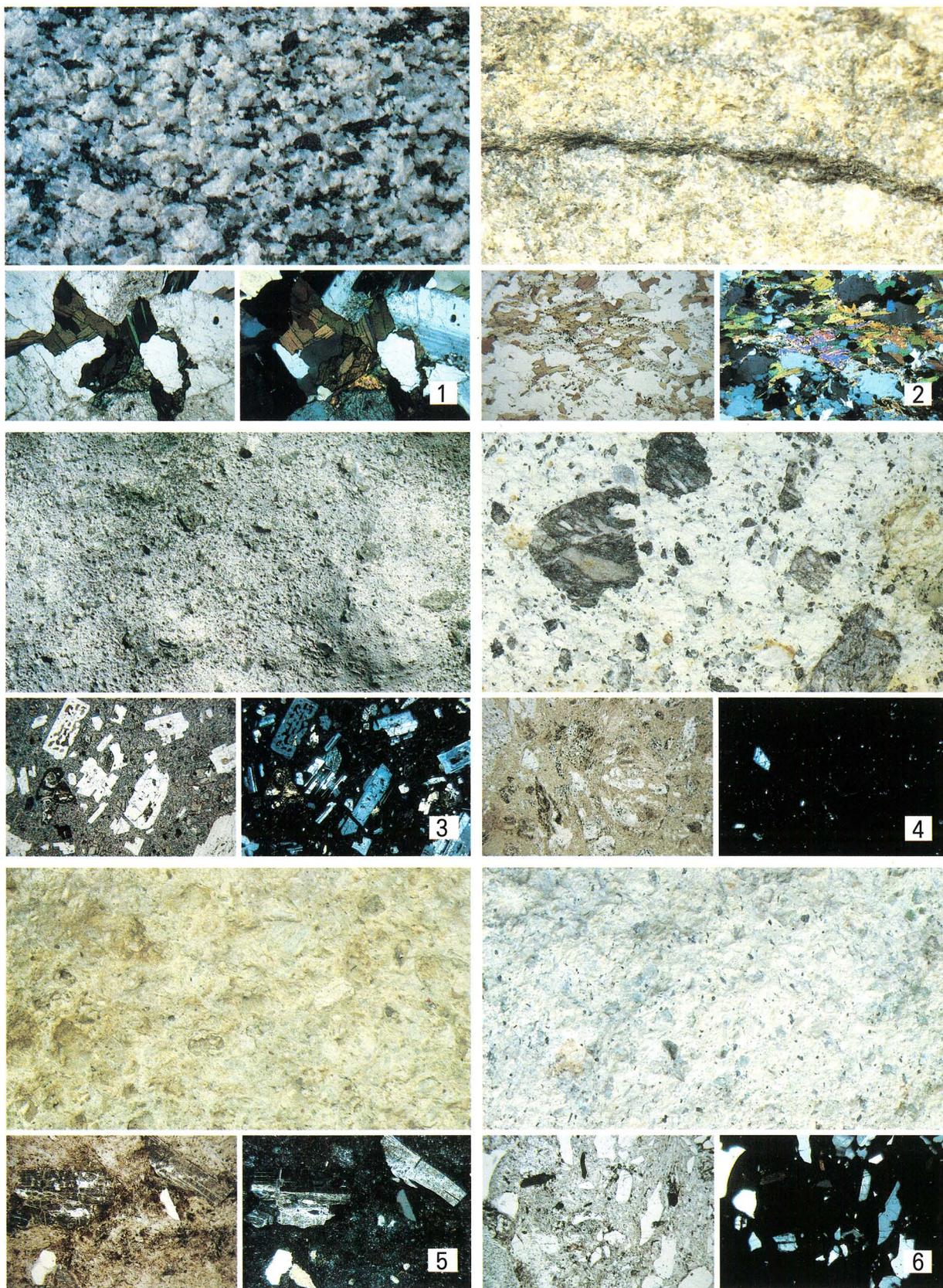


fig. 78 石材顕微鏡写真

1 角閃石黒雲母花崗閃緑岩 2 花崗片麻岩 3 兩輝石安山岩  
 4 含松脂石流紋岩質凝灰岩礫岩 5 流紋岩質凝灰岩 6 溶結凝灰岩  
 図中の上段は現寸大、下左-ニコル、下右+ニコル 倍率25

くまない。流紋岩礫をふくむ凝灰岩（部分的にふくまないこともある）は、二上山北西面にそって分布し、ドンズルポーに至る。なお、恭仁宮大極殿にある流紋岩質凝灰岩は平城京羅城門の礎石にも使用されており、姫路酸性岩に酷似している。そのことから、兵庫県高砂市宝殿（竜山）付近に産地を求めることができよう。

奈良県下における安山岩の主な分布は、室生火山区を除けば三笠山付近、二上山、生駒山地の宝山寺と信貴山、耳成山、畝傍山、大淀町六田～比曽付近である。両輝石安山岩は三笠山付近および生駒山地に産する（岩脈状）が、平城宮から発見されるものは、肉眼でも鏡下の観察でも三笠山付近のものに酷似している。

奈良県下における「花崗岩類」の分布はつぎのようである。吉野郡竜門地方を中央構造線が東西に貫通し、北部には領家帯変成岩類または領家花崗岩類とよばれる岩石が分布している。それは〔花崗岩類〕、〔堆積岩源変成岩—片麻岩類〕、〔選入岩源変成岩—塩基性岩類〕に大別されており、花崗岩類は分布がもっとも広く大和高原のいたるところでみられる。片麻岩類は、花崗岩類にともなって産出することが多く、代表的な分布地は奈良市東方の高円山付近、柳生南部、榛原町南方、竜王山、神野山西南一帯などである。塩基性岩類は、三輪山、香久

	岩 石 名	平 城 宮	山 田 寺	川 原 寺	本 薬 師 寺	桧 隈 寺	大 官 大 寺	薬 師 寺	唐 招 提 寺	恭 仁 宮	推 定 産 地
火山 碎屑 岩類	流紋岩質凝灰岩	○	(○)			○				○	兵庫県高砂市宝殿(竜山)附近
	含松脂岩流紋岩質凝灰岩礫岩	(○)	(○)	(○)	(○)			(○)			大阪～奈良府県境、二上山鹿谷寺～ドンズルポー
	流紋岩質溶結凝灰岩—A	(○)							○		奈良市 東部～東南部、地獄谷
	流紋岩質溶結凝灰岩—B		(○)								奈良県榛原町～室生寺附近
火山 岩類	両輝石安山岩	○						(○)			奈良市 東部三笠山附近
	シソ輝石安山岩			○							大阪府～奈良県 二上山雄岳 東北面
半岩 深類 成	石英斑岩	○									
領家 帯 変 成 岩 類	黒雲母花崗岩	○									奈良市 東南部～東部一帯
	黒雲母角閃石花崗岩	○									
	含石榴石両雲母花崗岩	○									
	斑状黒雲母角閃石花崗岩	○									
	ペグマタイト質花崗岩	○									
	ペグマタイト質含石榴石花崗岩	○									奈良盆地東南部～ 明日香地方一帯
	黒雲母ペグマタイト	○									
	角閃石黒雲母花崗閃緑岩～ 石英閃緑岩	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
閃緑岩～斑れい岩	○	○		○	○	○					
黒雲母(両雲母)花崗片麻岩	○							?	○	奈良市東南部、高円山	
変成 岩類	結晶質石灰岩(珪灰石を含む)			○							大津市石山寺境内
	結晶質石灰岩(方解石のみ)							(○)			

Tab. 12 奈良県下の寺院礎石の石材種 ( )は礎石以外の基壇石

#### 第IV章 遺 物

山、神野山一帯、榛原～初瀬の南部などである。SD190 南側溝 から出土した角閃石黒雲母花崗閃緑岩～石英閃緑岩の礎石は、選入岩源変成岩類の1種であり、奈良盆地の東南部一帯、飛鳥地方に産したものである。

遠方からの  
供給

以上が今回の調査地域および関連遺跡の石材に関する概要である。平城宮ではそれら以外の石材も少なくなく、現在までに調査しえた奈良県下の寺院をふくめて、岩種と推定産地を表示<sup>1)</sup>しておく。平城宮の石材が現在の奈良市およびその近隣から調達されているのは、当然のことである。兵庫県高砂市宝殿付近の流紋岩質凝灰岩が供給されていることについては、石棺の石材として5世紀以降畿内地方に移入されていること<sup>2)</sup>と共通しており、古くからの伝統にもとづくのであろう。飛鳥地方の産する岩石が平城宮の石材として用いられたことについては、二通りの解釈ができる。一つは平城宮造営のため、飛鳥地方で採石した石材を運んできた場合である。もう一つは、藤原宮の既存建物を解体して木材などとともに礎石も再利用した場合である。いまのところいずれとも判断しかねるが、第I期の大極殿の平面が藤原宮とややことなっていることからすれば、前者の可能性が大きい。恭仁宮大極殿の礎石に飛鳥地方の石材が用いられている点については、この大極殿が平城宮から移建したことを具体的にしめす重要な証拠になる。

**築地版築土** (PL. 130) 6ABE-K地区のSC5500の東方にひろがる整地土で採集したもの。平坦面をなす約30×20cm内外の粘土塊が多く検出され、発掘段階では莫然と壁土としたものである。しかし、壁土であることをしめす木舞痕跡や表面の白壁痕はのこっていない。断面を検討すると、厚さ3.5cm内外で砂や小礫をふくむ軟質の灰褐色土を、厚さ1cm内外の硬い黄白色粘土層が両側からはさんでいる状況であることがわかった。こうしたことから、確信はもてないが粘土層が縞状にはいった築地の版築塊にあてておく。

1) 奥田尚・秋山隆保「寺院礎石の岩質とその産地推定」『古代学研究』84 1977, p. 28～32  
2) 間壁忠彦・間壁葎子「石棺研究ノート(一)——石棺石材の同定と岡山県の石棺をめぐる問題」『倉敷考古館研究集報』9 1974, p. 1～23, 間壁忠彦・間壁葎子「石棺研究ノート(二)——

岡山県丸山古墳ほか長持形・古式冢形石棺の石材同定」『倉敷考古館研究集報』10 1974 p. 221～231, 間壁忠彦・間壁葎子「石棺研究ノート(三)——長持形石棺」『倉敷考古館研究集報』11 1975, p. 1～41

## 4 土 器

発掘区の全域から多量の土器類が出土した。ここでは、建物の柱掘形・柱拔取痕跡・溝・井戸・土壇などの遺構にともなって検出した遺物を主としてとりあげる。保存状況は概して悪く、細片が多い。土師器・須恵器・黒色土器のほか、施釉陶器・墨書土器・人面土器・刻印・篋書・刻線文土器・底部穿孔土器・陶硯・土馬・土錘などがある。時期的には奈良時代後半から平安時代初頭が中心になり、奈良時代前半のものは少ない。以下、土器の説明は、築地回廊地区・殿舎地区、東外郭地区の順で遺構ごとにのべる。施釉陶器などの特殊な遺物については種類別にまとめた。器種名・時代区分 (Tab. 13)・調整方法などの記述については、さきに報告した『平城宮報告Ⅶ』に原則的にしたがっている。器種の分類については、別表で表示することとし、個々の説明では特徴的なもののほかはふれない (別表4・5)。

大別名称	略年代
平城宮土器Ⅰ	A.D. 710
平城宮土器Ⅱ	725
平城宮土器Ⅲ	750
平城宮土器Ⅳ	765
平城宮土器Ⅴ	780
平城宮土器Ⅵ	800
平城宮土器Ⅶ	825

Tab. 13 平城宮土器の大別

土器の説明にさきだち、記述の煩雑をさけるため、若干の点についてあらかじめ概括しておくことにする。

1 土師器の杯・皿・碗などは、成形後に行なうよこなで・へら削りの調整状況によって、a・b・c・e・fの5種類の手法に区分している。a手法は口縁部をよこなでですが、底部外面は不調整。b手法は底部外面をへら削りし、c手法はへら削りが口縁部までおよぶ。a手法では底部外面に木ノ葉の圧痕をとどめるものが多く、b手法でもへら削りのおよばない部分に木ノ葉の圧痕がのこるものがある。この3手法は関連するもので、奈良時代の土器の主要な調整法である。長岡京時代から平安時代初期にかけては、c手法が主となりこれにf手法とe手法とがかわる。この時期のc手法には、これまでの手法をへら削りしたものと、後述のe手法でつくったものをへら削りするものがあり、後者が次第に多数をしめるようになる。f手法は口縁部をよこなでし、底部外面は未調整である。この点ではa手法と類似しているが、底部外面に木ノ葉の圧痕がまったくなく、口縁部外面のよこなでは末端が口縁部にひきあげられていない。口縁部のよこなでは強く段をなし、ロクロ回転を利用したこともかんがえられる。e手法は口縁部上端だけをよこなでし、それ以下は不調整である。奈良時代前半から碗cにみられるが、平安時代になると杯・皿・碗などにもこの手法が用いられている。強くよこなでするため、口縁部上端が外彎する。このため、e手法ののちに削ったc手法では外彎した部分までへら削りがおよんでいない。平安時代初頭には、e手法を削ったc手法が多いが、9世紀後半から10世紀にかけてはe手法が主流になっていく。

よこなで  
へら削り

2 よこなで・へら削りによる区分とはべつに、へら磨きの有無によって0～3手法を区別している。0手法はへら磨きを行なわない。1手法は口縁部外面、2手法は底部外面、3手法は口縁部と底部外面にへら磨きする。この3手法とさきのa～f手法とを組み合わせ調整手

へら磨き

1) 図版・挿図の土器には、特殊土器類を除いて  
1～200が土師器。

301～400が須恵器。500番代が黒色土器。600番代が瓦器。

法をあらわし、 $a_1 \cdot a_2 \cdot a_3$  のように表現している。

3 土師器杯・皿類の口縁部形態にはA・Bの2種類がある (fig. 79)。A形態は口縁部の断面

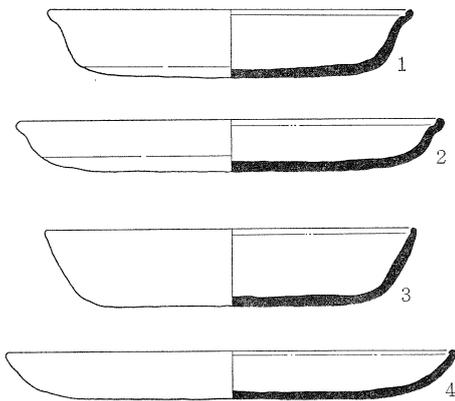


fig. 79 土師杯・皿の口縁部形態  
1・2：A形態，3・4：B形態

面形をみると下半が内湾し、上半がわずかに外反する弧を描く。そして、口縁端部は内側に丸く肥厚する。B形態は全体が内湾する弧を描く。本文中ではA形態・B形態といてこの違いを表現している。

4 須恵器杯B蓋・皿B蓋の形態にもA・Bの2種類がある (fig. 80)。A形態は平らな頂部および屈曲する縁部とからなる。B形態は頂部がまるい笠形を呈し、縁部は屈曲しない。

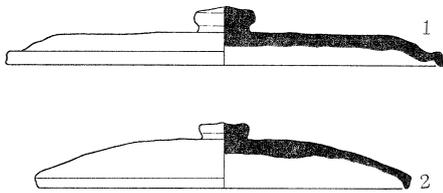


fig. 80 須恵器蓋の口縁部形態  
1：A形態，2：B形態

5 土師器は、色調や胎土などからいくつかの群に分類することができる。これまでの報告では遺構ごとに群別が問題にされてきたが、定期的な系統関係については不明な点が多い。今回の報告でも遺構ごとに分類したが、奈良時代と平安時代初期とでは群別の基準がことなるので、この点については胎土分析を行なった成果にもとずいて後述する (p. 253~258)。

群 別 6 須恵器については、食器類をI~IV群土器にわけている<sup>1)</sup>。量的には、I群土器が多数を占め、III・IV群の土器はきわめて少ない。群別の基本は調整手法にあり、これに色調・質・焼成・胎土などの要素を加味して区分した。今回報告する須恵器には、III・IV群土器<sup>2)</sup>がまったくなく、I群土器・II群土器とI~IV群のいずれにもぞくさない土器がある。

I群土器には、底部外面をロクロ削りする<sup>3)</sup>ものと、ヘラ切り痕をのこすもの<sup>4)</sup>とがあり、杯Aでは後者がほとんどをしめる。蓋はA形態が大部分である。青灰色で硬質のものがほとんどだが、焼成不良で灰白色を呈すものもある。火禿がある。胎土は砂粒が多く、黒色物質の小粒をふくむものが少数ある。

II群土器は、底部外面をロクロ削りし、杯ではロクロ削りが口縁部下半にまでおよぶ。蓋はB形態で、頂部外面は縁部近くまでロクロ削りである。青~淡灰色で、火禿をもつものが多い。胎土には砂粒が少なく、黒色物質の粒子を含むものが大部分をしめる。削った部分では黒色物質の粒子が移動してくずれるため、墨でぼかしたような状況を呈する。

1) 『平城宮報告VI』p. 39・『平城宮報告VII』p. 146~147。I群土器は和泉陶邑古窯址群の陶器山地区・高蔵地区、II群土器は同じく光明池地区の製品に類似している。

2) III群土器は杯Bの底部内面・蓋の頂部内面に同心円文の当板痕をのこすものが多い。灰白色できわめて硬質である。IV群土器は底部外面をロクロ削りとし、杯Aでは器高が高く、口縁部

の外傾度は小さい。灰白色の軟質で、器の表面は石膏のようである。

3) ロクロ回転を利用したヘラ削り、なでを「ロクロ削り」・「ロクロなで」という。

4) ロクロ台からの切り離しの際、ヘラをさしこんで行なう技法を「ヘラ切り」といい、ヘラ切りによってのこる底部外面の痕跡を「ヘラ切痕」という。

## 4 土 器

土 師 器	平城宮土器 IV		平城宮土器 V	
	(口 径)	(高 さ)	(口 径)	(高 さ)
杯A I	19.5~18.6cm	4.8~4.3cm	18.8~18.0cm	4.8~3.8cm
II	17.6~16.8	4.2~3.5	(17.3)	(4.0)
杯B I	21	5.5~5	24.8~22.4	8.8~6.8
II	(18.2)	(4.9)	19.8~18.4	5.5~4.9
III	(16.0)	(4.9)	13.2~12.0	3.8~3.4
皿A I	23.6~20.9	3.0~2.1	22.7~19.6	3.0~2.3
II	17.9~16.5	3.4~2.6	18.0~16.0	3.4~2.6
III			12.8~10.8	3.1
皿B I	(29.2)	(4.8)	20.4	3.8
II			13.0	3.2
椀A I	16.3~15.3	5.1	13.1~12.4	4.4~3.8
II	12.9~11.4	4.2	11.4~ 9.8	4.0~3.6
須 恵 器	平城宮土器 IV		平城宮土器 V	
	(口 径)	(高 さ)	(口 径)	(高 さ)
杯A I	19.4~18.0cm	5.5~3.5cm		
II	17.1	5.0	16.8cm	3.8cm
III	14.8~14	4.2~3.9	14.8~13.0	5.4~3.0
IV	12.0	4.7	10.2~10.0	3.4~2.9
V	10.8	3.9		
杯B I	19.6~18.6	6.5~5.7	18.6~17.9	6.4~5.5
II	17.8~17.4	5.2	16.8	5.8~5.2
III	14.6	4.2~3.6	14.4~13.4	4.0
IV	11.5~ 9.8	4.0~3.6	11.4~10.0	3.7~3.2
皿A I	(20.3)	(2.0)		
II	(17.6)	(3.1)		
III	(15.4)	(3.2)		
皿B I	32.0~25.7	5.6~4.9	(26.2)	(5.0)
II				
皿C I	(22.9)	(2.1)	22.0~18.0	2.4~1.8
II			15.2	1.2
杯C I			19.8	3.2
II			17.0~16.6	4.0~3.4

Tab. 14 平城宮土器IV・Vの法量

各遺構での平均値をもとにした数値，空欄は出土量が少なく統計処理に耐えないもの，( )は1遺構での数値

A SB7802 出土の土器

東楼 SB7802の柱拔取痕跡からは、土師器234個体以上<sup>1)</sup>、須恵器242個体以上におよぶ多量の土器が出土した。それらは平城宮土器IV<sup>2)</sup>にぞくするが、若干の平城宮土器II・IIIをもふくむ。土師器と須恵器のほか、墨書土器5点、刻印土器1点があり、特殊なものに14点の土錘があった。

i 土師器 (PL. 131)

平城宮土器IVにぞくする土師器には、杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿B・椀A・壺A・壺B・甕A・甕B・甕C・甕X・把手付大型蓋がある。これを食器・貯蔵器・煮炊具に大別すると、杯・皿・椀の食器が87.6%、壺類の貯蔵器は0.8%、甕類の煮炊具が10.7%となる。この土器構成は大膳職の土壙SK219<sup>3)</sup>とほぼ同じ傾向をしめし、他の官衙地区よりも煮炊具の比率が大きい。また、食器では高杯や鉢類を欠く単純な様相である。

土師器は胎土・色調・焼成から2群にわかれる。I群土器は胎土に砂粒が少なく、焼成がやや軟質で、灰白色・黄灰色・桃白色と全体に淡い色調を呈する。II群土器は胎土には砂粒が多く、焼成はI群土器よりかなり堅く焼きしまっており、色調は褐色・赤褐色・灰褐色を呈する。この2群は平城宮土器IV・Vを通じて存在している。

杯A(1~6) I群土器には杯A I<sup>4)</sup>(1~4)・A II, II群土器には杯A I(5・6)がある。II群土器の杯A IはI群土器よりも口径が0.8cm小さい。a<sub>0</sub>・b<sub>0</sub>・c<sub>0</sub>・c<sub>1</sub>手法がみとめられる。a手法が多く60.5%をしめ、b手法7.9%、c手法31.6%となる。平城宮土器IVのSK219のb手法が92.1%しめているのとは著しくことなり、むしろ平城宮土器IIIのSK820<sup>5)</sup>にちかい傾向をしめす。I群土器はa手法でA形態、II群土器はc・b手法でB形態がほとんどである。I群土器が約67%をしめている。ヘラ磨きを行なうもの2点、暗文を施すものは1点にとどまる。底部外面にハケメをいれるものが2点ある。

杯B(34) いずれも小片で観察にたえない。34は平城宮土器IIの杯B IIIで、a手法でつくり螺旋・斜放射・連弧暗文<sup>6)</sup>がある。

杯B蓋(33) 杯B IV蓋で、内外面ともに、右まわりによこなでし、ヘラ磨きを行なっている。II群土器である。

皿A(7~24) I群土器・II群土器ともに皿A I(I群土器:14~20, II群土器:21~23)・皿A II(I群土器:7~11, II群土器:12・24)がある。I群土器が約78%をしめる。皿A Iにはa<sub>0</sub>・a<sub>1</sub>・b<sub>0</sub>・c<sub>0</sub>・c<sub>3</sub>手法、皿A IIにはa<sub>0</sub>・b<sub>0</sub>・c<sub>0</sub>手法がある。皿A IIは口縁部端面が内傾するものが41点ある。I群土器はa手法だけで、II群土器にはc・b手法のほか、a手法のもの<sup>7)</sup>(21)もある。a手法の場合にはA形態、b・c手法の場合にはB形態となる。皿Aのうちa手

1) 器種がわかるものの数値。以下同じ。

2) 『平城宮報告VII』では、土器の時期区分を「平城宮I~VII」と表現したが、今回は遺構、他の遺物の時期区分との混乱をさけるため「平城宮土器I~VII」の表現を用いた。

3) 『平城宮報告II』p. 63~68

4) 平城宮土器IV・Vの土師器・須恵器食器類の

法量による分類はTab. 14にまとめ、本文では数値の記述を略している。

5) 『平城宮報告VII』p. 77~86

6) 暗文の記述は底部・口縁部の順で表現する。

7) 平城宮土器IIIまでの杯Cの口縁部形態をとどめるもの。『平城宮報告VII』p. 142~143

4 土 器

土 師 器		(個 体 数)	(比 率%)
(食 器)	杯 A I	27	81 } 34.6
	杯 A II	11	
	不明	43	
	杯 B I (身蓋)	0 1	4 } 1.3
	杯 B III (身蓋)	1 1 1	
	不明 (身蓋)	2 0 2	
	椀 A I	1	2 } 206 } 87.6
	椀 A II	1	
	椀 C	23 23	9.8
	椀 D	1 1	0.4
皿 A I	28	93 } 39.7	
皿 A II	31		
不明	34		
皿 B I	1	2 } 0.9	
不明	1		
(貯蔵器)	壺 A	1	2 } 0.8
	壺 B	1	
(煮炊具)	甕 A	13	25 } 10.7
	甕 C	8	
	甕 X	4	
(その他)	大型蓋	2 2	0.9 0.9
計		234	100%

杯B・皿B・壺Aは蓋と身からなっているので、集計にあたっては蓋と身の個体数を合計せずに、出土量の多い方の数をとった。

須 恵 器		(個 体 数)	(比 率%)
(食 器)	杯 A II	5	20 } 83
	杯 A III	3	
	杯 A IV	5	
	杯 A V	2	
	不明	5	
	杯 B I (身蓋)	9 23	133 } 55.0
	杯 B II (身蓋)	4 16	
	杯 B III (身蓋)	10 19	
	杯 B IV (身蓋)	19 22	
	不明 (身蓋)	27 53	208 } 86.0
不明 (蓋)	53		
杯 C	13 13	5.4	
椀 A	1 1	0.4	
(貯蔵器)	皿 A I	2	9 } 3.7
	皿 A II	2	
	皿 A III	1	
	不明	4	
	皿 B (身蓋)	6 14	14 } 5.8
皿 C I	9	15 } 6.2	
不明	1		
鉢 A	1	0.4	
鉢 F	1	0.4	
盤 A	1	0.4	
(貯蔵器)	壺 A (身蓋)	2 5	34 } 14.0
	壺 A (蓋)	5	
	壺 E	1	
	壺 K	2	
	壺 M	5	
	壺 N	1	
	平瓶	1	
水瓶	1		
(器)	甕 A	7	8 } 3.3
	甕 B	3	
	甕 C	8	
計		242	100%

	土 師 器	須 恵 器	計
	(個体数)(比率)	(個体数)(比率)	(個体数)(比率)
(食 器)	206 (49.6%) (88.4%)	208 (50.4%) (86.0%)	413 (87.1%)
(貯蔵器)	2 (5.6) (0.8)	34 (94.4) (14.0)	36 (7.6)
(煮炊具)	25 (100) (10.8)	0	25 (5.3)
計	233 (48.9)	242 (51.1)	474 (100%)

Tab. 15 SB7802出土土器の構成

#### 第IV章 遺物

法が85.9%をしめており、杯Aと同じくSK219とことなつた傾向をとる。皿AⅠに暗文を施すもの3点、皿AⅡに灯火器<sup>1)</sup>に使用したもの5点をふくむ。13は平城宮土器Ⅲにぞくする。

椀 B(35) 平城宮土器Ⅲにぞくする皿BⅠで、b<sub>0</sub>手法でつくり、螺旋・斜放射暗文がある。  
椀 A(26) 2点のみで、椀AⅠ(26)・AⅡがある。26はb<sub>0</sub>手法。いずれもⅡ群土器にぞくしている。

椀 C(27~32) e手法でつくる。灯火器が5点ある。Ⅰ群・Ⅱ群土器がともにある。

椀 D(25) 1点のみである。C<sub>0</sub>手法でⅡ群土器。灯火器に使用している。

壺 A・B とともに把手部の小破片である。

甕 A(37・38) 口径が20cm以上のもの、17cm前後のものにわかれる。口径20cm以上のものは、口縁部内外面と体部内面をよこなでし、体部外面には縦方向のハケメをいれる。体部内面に横方向ハケメをとどめるものが1点ある。Ⅰ群土器に近似するもの1点をのぞくほかは、Ⅱ群土器に近い胎土である。口径17cm前後のもの(37.39)は口縁部と体部の外面に縦方向のハケメをいれ、口縁部内面には横方向ハケメを行なう。体部の内面はよこなで。

甕 C 口径27cm前後で口縁部の内外面によこなでするものが多い。口縁部外面に縦方向のハケメをのこすものが2点ある。体部外面は縦方向のハケメを行ない、体部内面をよこなでするのが一般的である。ただし、横方向ハケメを体部内面に行うものが1点ある。口縁部の外面にハケメを行なうもの1点がⅠ群土器に近い胎土であるほかは、Ⅱ群土器の胎土にちかい。

甕 X(36) 底部に高台をつけた丸い体部と、わずかに外反する短い口縁部とからなる。壺Aに似るが、ハケメを行なうことや底部外面に炭化物が付着していることから、煮炊き用の甕に比定した。体部外面に縦方向ハケメを行ない、口縁部の内外面をよこなでする。体部内面は口縁部近くまでよこなでにするが、以下は不調整。体部内面から底部内面にかけてハケメをのこすものが1点ある。底部外面ではハケメ・よこなで・ヘラ削りの手法が各1点ずつある。胎土に砂粒を著しくふくむものと、比較的少ないものがある。36は口径14.0cm、復原高20.4cm。

把手付大型蓋 頂部外面は縦方向ハケメ、内面をよこなでする。口縁端部の外面は縦方向ハケメ、内面には横方向ハケメをとどめる。

#### ii 須恵器 (PL. 132)

須恵器の器種には、杯A・杯B・杯B蓋・杯C・皿A・皿B・皿B蓋・皿C・椀A・鉢A・鉢F・盤A・壺A・壺A蓋・壺E・壺K・壺N・水瓶・平瓶・甕A・甕B・甕Cがある。これを食器と貯蔵器に大別すると、前者が86%、後者が14%となる。土師器とことなり器種構成は多彩だが、数量的にみれば、食器類のうち杯Bが64%しめるなど単純な組成である。食器類の須恵器はⅠ・Ⅱ群・その他の土器群と3グループに分れるが、Ⅰ群土器が大部分をしめる。

杯 A(301・303~306) 杯AⅡ(306)・AⅢ(305)・AⅣ(303・304)・AⅤ(301)にわかれる。底部外面にロクロ削りするものは5点にすぎない。ロクロ回転はほとんど右回転で、左回転は1%前後にとどまる。これは他の器種の場合も同じである。杯AⅠにⅡ群土器が2点ある。

杯 B(309~312) 杯BⅠ(309)・BⅡ(310)・BⅢ(311)・BⅣ(312)にわかれる。底部外面をロクロ削りするものとヘラ切りのままのものとの比は、3:4である。杯BⅡにⅡ群土器1点を

1) 口縁端部に煤が付着していることから、灯明皿に推定できる土器。

ふくむ。杯BⅢには灯火器に用いたものが3点ある。墨書土器が1点あるほかに、墨痕の付着するものが3点ある。

杯B蓋(315~321) 杯BⅠ蓋(321)・BⅡ蓋(319・320)・BⅢ蓋(317・318)・BⅣ蓋(315・316)にわかれる。一方、A形態が全体の3/4をしめている。頂部外面をロクロ削りするものは50%で、うちA形態では35%、B形態では80%となり、ロクロ削りを行なうものでは圧倒的多数がB形態の蓋となる。Ⅱ群土器が3点、群別不明のものが5点ある。内面に墨が付着し、硯として使用したものが30点の多数をしめている。ほかに墨書土器1点、灯火器1点がある。

杯C(307~308) 底部外面にロクロ削りを行なうものが4点ある。内外面に火瘡をとどめるものが3点ある。

皿A(313・314) 皿AⅠ・AⅡ(314)・AⅢ(313)にわかれる。

皿B(324) 底部外面をロクロ削りする。皿BⅠにぞくし、内外面に火瘡をとどめる。

皿B蓋(322・323) 皿BⅠ蓋(322・323)・BⅡ蓋がある。A形態とB形態との比は3:2となる。頂部外面はロクロ削りである。Ⅱ群土器と群別不明のものが各1点ある。

皿C(325・326) 皿CⅠのみである。底部外面をロクロ削りするものは、1点にとどまる。灯火器に用いたものが1点みとめられる。

椀A(302) 底部外面はロクロ削りである。内面に漆が付着しており、漆をいれる容器として用いられている。口径12.2cm、高さ5.3cm。

鉢A・鉢F・盤A・水瓶 いずれも小片であり、全形をうかがうことができない。

平瓶 肩部から底部にかけての破片。底部外面にヘラ切り痕跡をとどめる。

壺A 肩部と底部の破片である。円板状の底部に粘土紐を巻き上げて体部をつくる。底部外面から体部下半にかけてロクロ削りしている。

壺A蓋 縁部が頂部から垂直に折れるもの(327)と、ややまろく折れ曲るものがある。前者の縁端部は内端を下方に突出させ、外側に段を生じている。後者の縁端部はまろくおわる。

壺E(330) 口縁部と体部の内外面をロクロなでするが、体部外面下半には、ロクロなでの前に施したロクロ削りがみとめられる。底部外面にヘラ切り痕跡をとどめている。内外面に火瘡がみとめられる。口径10cm、高さ6.5cm。

壺K(311) 口縁部から体部下半にかけてロクロなでし、体部外面の下半から底部外面にかけてロクロ削りを行なっている。口径7.4cm、高さ22.8cm。

壺M 底部の小破片である。

壺N(332) 肩部と体部下半に一個ずつの把手をとどめるが、本来の数は不明。たぶん、肩部に1対、下部に1個の把手がつく壘形の器になるのであろう。底部外面から体部外面の下半にかけてはロクロ削りである。口径約8.8cm、高さ約22cm。

甕A・B ともに口縁部の破片である。甕Bの1点には墨書で「主」とかく(PL. 138)。

甕C(328・329) 329は口縁部の内外面をロクロなでし、体部と底部の内面は当て板の同心円文、体部外面の上半は平行叩き目をのこす。底部外面から体部外面下半にかけては、ロクロ削りである。口径36.5cm、高さ29.4cm。328は体部外面の叩き目のうえをなでている。体部内面も同心円文のうえをなでている。底部外面には強いなでを行ない、底部外面の高台付近はロクロなどで調整している。口径33.3cm、高さ26.7cm。

蓋

皿

椀

壺

甕

B SA3777出土の土器 (fig. 81)

第I期の南北塀 SA3777 の柱痕跡からは、土師器63個体、須恵器82個体が確認され、須恵器が57.7%と多数をしめている。平城宮土器IVにぞくするものが多い。SA3777 の柱掘形には柱抜取痕跡がなく、本来は上部に堆積した土器が、柱根の腐蝕によって生じた空洞に落下したものとかがえられる。上述の SB7802 の土器と共通した様相をもち、第II期の東面築地回廊の改作に関連する遺物とみられよう。

**土師器** 杯A・皿A・皿B蓋・椀A・椀C (40)・高杯・甕・把手付大型蓋がある。器種構成は単純で、皿Aが食器類の67.3%をしめることになる。

杯A(47) は磨耗が著しく調整手法が不明である。杯A IでI群土器にぞくする。皿A(41~46)には、皿A I (44・45)・A II (42・43)・A III(46) がある。a<sub>0</sub>, b<sub>0</sub> 手法で調整し、暗文をつけ

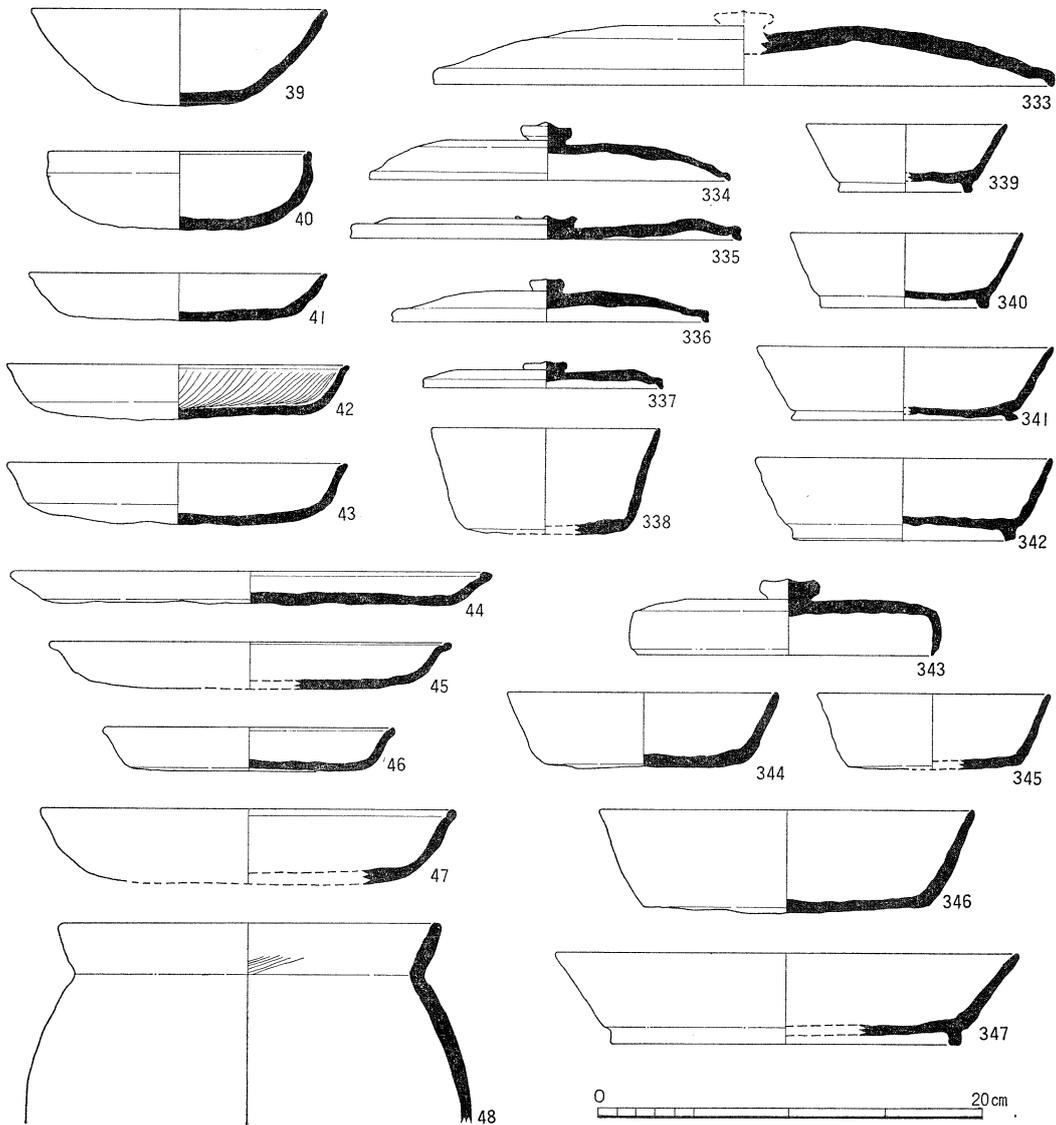


fig. 81 SA3777出土土器

4 土 器

るものが3点ある。2点のⅡ群土器は b<sub>0</sub>, c<sub>0</sub> 手法で調整する。椀Aには椀AⅠ(39)・AⅡがある。a<sub>0</sub>手法1点とc<sub>0</sub>手法が2点確認できるが、そのほかは磨耗のため不明である。甕Aは、口径で31.8cmのもの、25cmのもの、20cmのもの(48)がある。

須恵器 杯A・杯B・杯B蓋・皿B・皿B蓋・鉢F・盤A・壺A・壺A蓋・甕A・甕B・甕Cがある。杯AⅣの1点は底部外面をロクロ削りしている。杯B(339~342)は、杯BⅠ・BⅢ(341・342)・BⅣ(339・340)にわかれる。底部外面をロクロ削りするものは3点である。杯B蓋(334~337)は、杯BⅠ蓋・BⅡ蓋(334・335)・BⅢ蓋(336)・BⅣ蓋(337)がある。B形態の蓋は1点にすぎない。頂部外面にロクロ削りするもの(334)は10点で、さらにロクロなどをくわえるものが5点ある。硯に用いたものが1点みとめられる。皿B(347)は皿BⅡで、底部外面にロクロ削りを行なっている。皿B蓋(333)には、皿BⅠ蓋(333)とBⅡ蓋とがある。A形態の

土 師 器		(個 体 数)	(比 率)	須 恵 器		(個 体 数)	(比 率)	
(食 器)	杯 A	I	1	杯 A	I	1	61	
		不明	1		Ⅲ	2		
	皿 A	I	6	杯 B I	Ⅳ	3		43
		Ⅱ	12		不明	5		
		Ⅲ	3		身	2		
		不明	14		蓋	4		
	皿 B 蓋		3	Ⅱ	身	0		61
	椀 A	I	3	蓋	2			
		Ⅱ	1	Ⅲ	身	4		
		不明	5	蓋	11			
椀 C		2	Ⅳ	身	5	25.6		
高 杯		1	蓋	8				
(煮炊具)	甕		8	不明	身		7	
				蓋	18			
(その他)	大型 蓋		3	皿 B	身	1	5	
				蓋	5			
計		63	100%	鉢 F		1	1	
				盤 A		1		
(貯蔵器)	壺 A			壺 A		2	21	
				甕		19		
(煮炊具)	計			計		82	100%	
(食器)	土 師 器	須 恵 器	計					
	52(46.0%) (36.7%)	61(54.0%) (42.9%)	113 (79.6%)					
	0	21(100)	21 (14.8)					
	8(100) (5.6)	0(0)	8 (5.6)					
計	60(42.3)	82(57.7)	142(100)					

Tab. 16 SA3777出土土器の構成

蓋は1点, B形態が4点ある。B形態の蓋には群別不明のもの2点がふくまれる。椀A(338)は焼成が甘く, 調整手法が不明である。壺A蓋(343)は頂部をロクロ削りしている。口径15.4cm 高さ4.0cm。その他の器種はいずれも口縁の小片で全形をしりがたい。

### C SA109出土の土器

大膳職地区のSA109の南北2条の側溝からは相当量の土器が出土した。土師器・須恵器・黒色土器のほか, 緑釉陶器がある。量的には南側のほうが多数をしめている。

#### i 南側溝の土器 (fig. 82)

**土師器** 杯A・杯B(56)・杯B蓋(55)・皿A・皿B・皿B蓋・椀A・椀C(65)・高杯・甕A・甕B・竈があるが, ともに保存状況はよくない。いずれも平城宮土器IV~Vにぞくしている。杯A(57~59)には杯A I・杯A IIがある。調整手法では a<sub>0</sub>・b<sub>0</sub> 手法がみとめられる。皿A(49~54・60~63)は皿A I(49~52)と A II(53・54・60~63)にわかれる。a<sub>0</sub>・b<sub>0</sub>・c<sub>0</sub> 手法がみとめられる。椀A(64・66~69)には椀A I・A II・A IIIがある。

杯

**須恵器** 杯A・杯B・杯B蓋・杯E・皿B・皿B蓋・皿D・椀A・鉢A・鉢B・壺蓋・甕Aがある。杯B蓋がきわめて多数をしめていることが注目される。杯A(360・363・364)には杯A II・A IIIがある。後者は高さが5cm前後のもの, 3cm前後のものにわかれる。底部外面はロクロ削り。杯B(355~358)には杯B I・B III・B IVがある。底部外面にロクロ削りを行なうものは約30%である。杯B IVには灯火器として用いたもの2点をふくむ。杯B蓋(348~354)は杯B I・B II・B III・B IV蓋にわかれ, 完形品がもっとも多い器種である。頂部が半球状に彎曲しているものを少数ふくんでおり, この種のものでは頂部外面をロクロ削りしている。つまみの形状と調整手法などから極めて酷似しているものがあり, 10数種類でそれぞれ4~5点の同形品を抽出することができた。なかには同一人の製作かと疑われるものがあり, 群別とは別に注目される。杯E(361・362)は焼成がきわめて良好で淡い肌色を呈し, 火袴がある。底部外面はヘラ切りのままである。口径16.8cm, 高さ4.6cm。皿B蓋(370・371)は皿B蓋 Iであり,

杯 B 蓋

土師器	個体数	須恵器	個体数
杯A	6	杯A	3
(食) 杯B	身 1	(食) 杯B	身 15
	蓋 1		蓋 44
皿A	27	杯E	2
椀A	7	皿B蓋	2
計	41	皿D	3
		椀A	1
		(貯蔵器)	
		壺A蓋	2
		計	57

Tab. 17 SA109 南側溝出土土器の構成

1) SA109側溝出土土器のうち, 第2次調査分についてはすでに報告している。主として北溝の

頂部外面はヘラ切りの後はロクロなどでしている。371は内面カキメをとどめる。皿D(367~369)は, 底部外面をいずれもロクロ削りし, 口縁部の下半におよんでいる。369の高台は口縁部と底部の境からかなり内側につけられている。367・368はII群土器である。口径24.6~21.6cm, 高さ3.0~2.0cm。椀A(359)は底部外面から口縁部下半にかけてロクロ削りを行なっている。壺蓋には, 縁部が直角に折れまがり, 端部が外傾するもの(365)と縁部が外反気味に折れまがり, 端部がまるくおさまるもの(366)がある。

出土品である。『平城宮報告II』p. 72

4 土 器

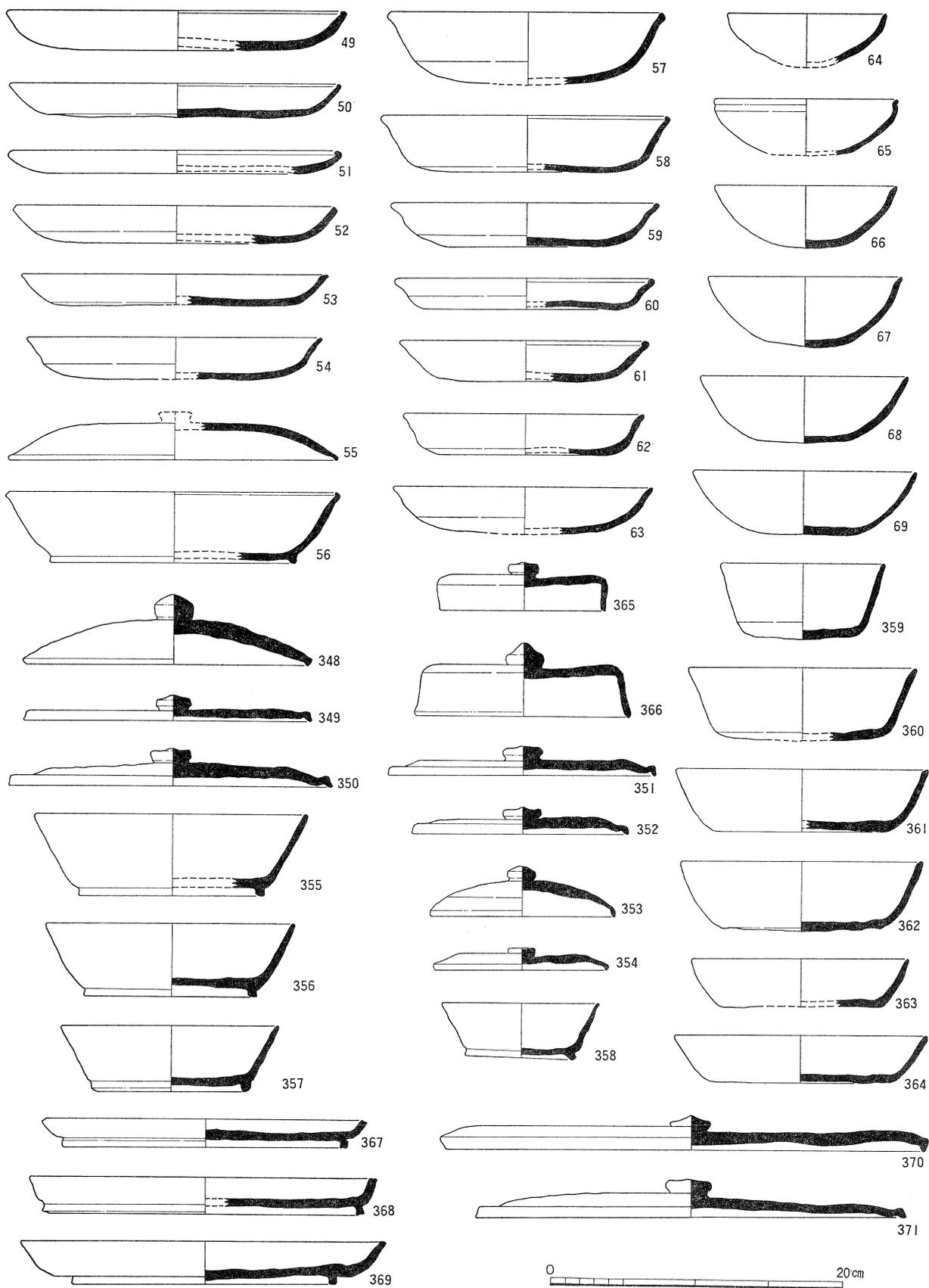


fig. 82 SD109南側溝出土の土器

第IV章 遺物

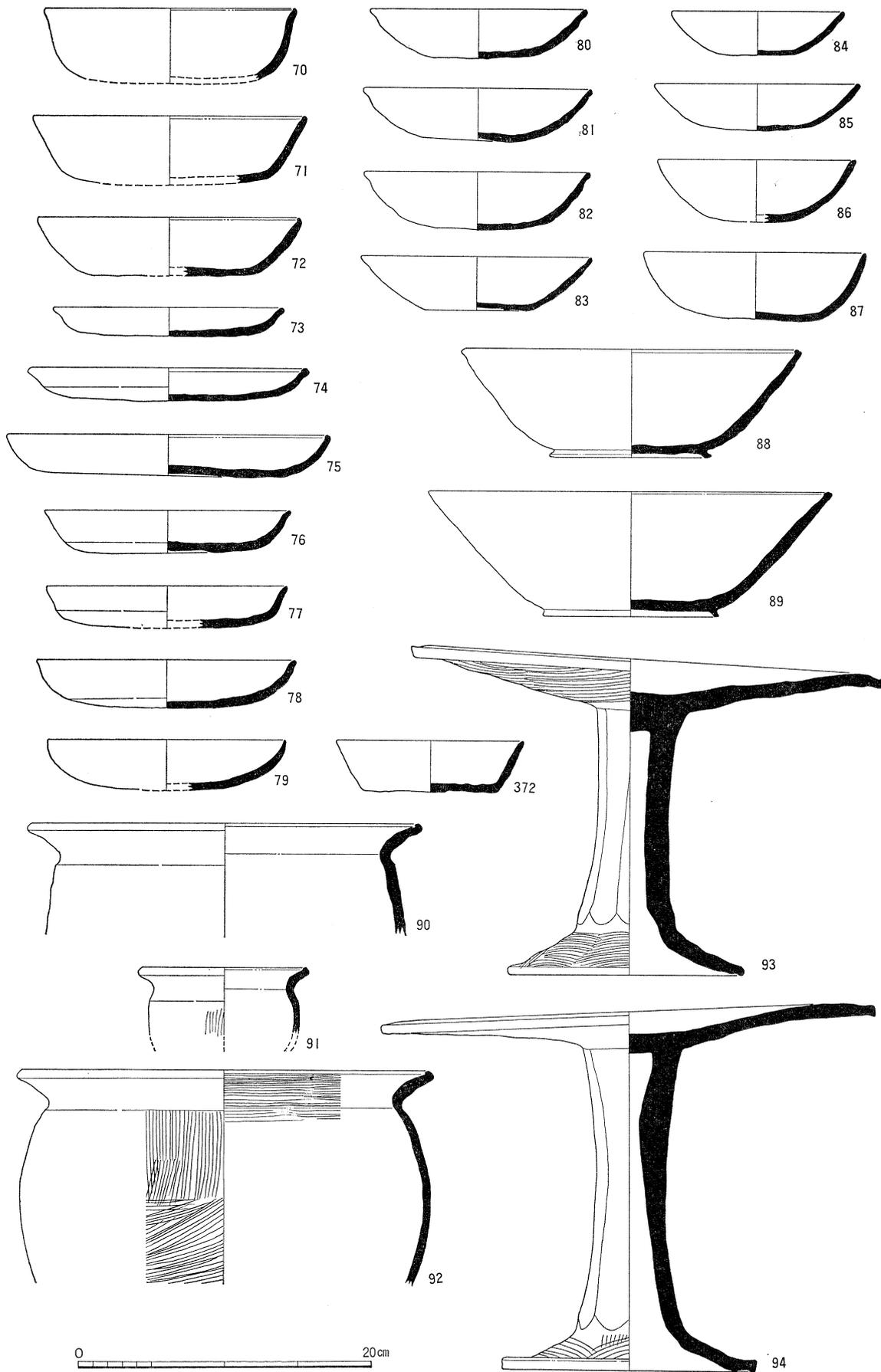


fig. 83 SD109北側溝出土の土器

## ii 北側溝の土器 (fig. 83)

南側溝に比して量は少ない。時期は平城宮土器IV~VIIにわたっている。

土師器には杯A・杯B・皿A・椀A・高杯・甕A・甕Cがある。杯A(70~72)はc<sub>0</sub>手法で調整している。杯B(88・89)にはe手法のうちへら削りするc手法のものがある。89は口縁部外面にへら磨きがあり、平城宮土器VIIにぞくする。皿A(73~79)には皿A I・A II・A IIIがある。椀A(80~87)にはc手法のもの(86・87)とe手法ののちへら削りするc手法のもの(80~85)とがある。80~85は平城宮土器VIIにぞくする。高杯(93・94)は、脚部と杯部の接合にa・bの2手法<sup>1)</sup>がある。b手法(94)の杯部外面は4区のへら磨きを行なうが、a手法(93)にはへら磨きを欠く。ともに平城宮土器VIIにぞくする。甕類は甕A(91・92)が多く、少量の甕C(90)がある。甕Aには縁部内にハケメをいれるものといれないものがある。

須恵器はごくわずかで、杯A(372)の他は蓋の小片である。

土 師 器		個 体 数	土 師 器
(食 器)	杯 A	5	
	杯 B	2	
	椀 A	8	
	皿 A	7	
	高 杯	2	
(煮 炊 具)	甕 A	2	
	甕 C	1	
計		27	

Tab. 18 SA109北側溝出土  
土器の構成  
ほかに須恵器杯A  
が1点ある

## D SX6600出土の土器 (fig. 84)

殿舎地区の第I期遺構では、第I期の存続期間を反映する遺物の出土例がきわめて少ない。第I期の遺物  
殿舎地区の旧地表面が第II期の改作時にかなり深く削平されていることにもよろうが、この地区が食器類を日常的に用いない使われ方をしてに帰因するのであろう。そうしたなか

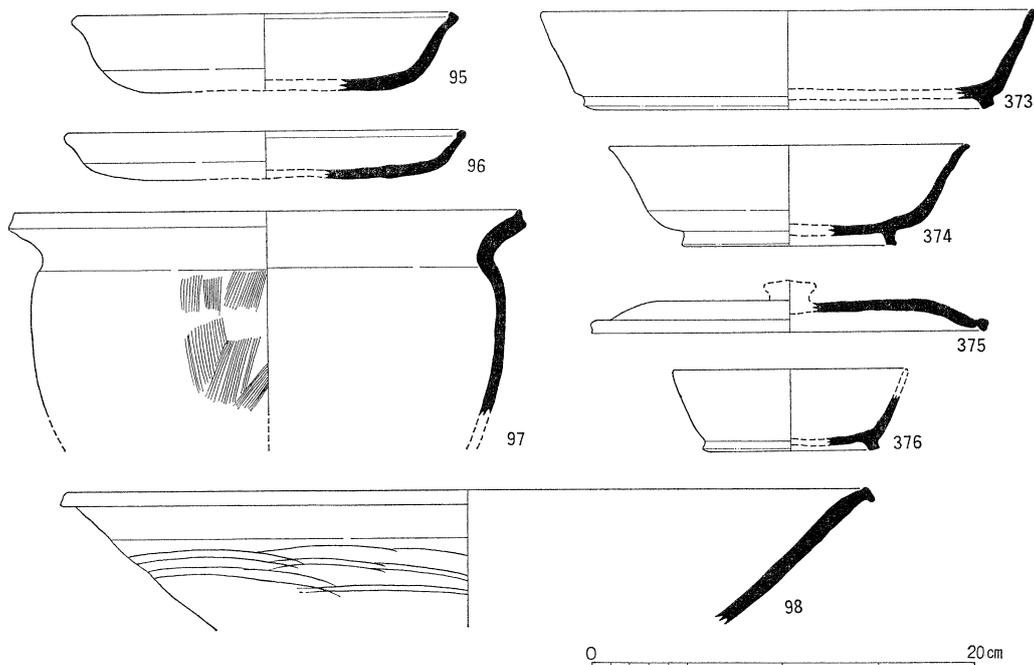


fig. 84 SX6600出土の土器

1) 『平城宮報告VI』p. 26, 『平城宮報告IV』  
p. 56。a手法は円筒状品を杯部に接合するもの  
で、接合時に円筒をしぼるため、縦方向のしわ

が内面にのこる。b手法は棒状品に粘土を円錐  
状にかぶせたものを芯とし、上部に粘土を厚く  
まいて杯部と接合するもの。

第IV章 遺物

で、第II期に殿舎地区を南方へ拡張したときに埋立てられた第I期の埴積擁壁 SX6600 の前面から若干の土器が出土した。SX6600の埋土から出土した土器は平城宮土器IVにぞくする土師器と須恵器であるが、いずれも少量で保存状態もよくない。

土師器には、杯A・皿A・椀A・盤・鍋・甕がある。杯A I (95)は a<sub>0</sub>手法のもので、A形態にぞくするI群土器である。盤A(98)も杯Aと同様の胎土である。口縁部の外面上部をよこなでし、それ以下をヘラ削りしたのち横方向の粗いヘラ磨きを行なっている。

須恵器には杯B・杯B I 蓋(375)・皿B I (373)・甕がある。杯Bは杯B I (374)・B III(376)がある。374は佐波理椀を模した形態をとり、底部外面から口縁部下半をていねいにロクロ削りしている。

E SB7150出土の土器 (PL. 133)

殿舎地区における第II期の正殿にあたる SB7150の柱抜取痕跡から、平城宮土器Vにぞくする土器が出土している。第II期の殿舎の廃絶時期をしる有力な手掛かりとなっている。土師器と須恵器のうち、前者が73%をしめており、土師器が多い点が注目される。

第II期の土器

土師器 杯A・杯B蓋・皿A・椀A・盤B・甕Aがある。杯A(99~101)は杯A Iで、a<sub>0</sub>・b<sub>0</sub>・c<sub>0</sub>・c<sub>2</sub>手法がある。a<sub>0</sub>・b<sub>0</sub>手法はI群土器(101), c手法はII群土器(99・100)である。杯B II 蓋(106)は頂部外面ヘラ削りした後、つまみに向けて頂部から縁部にかけて4区に分かつヘラ磨きを施す。II群土器。皿Aは皿A I(105)・A II(102~104)がある。a<sub>0</sub>・b<sub>0</sub>・c<sub>0</sub>手法があり、II群土器はc<sub>0</sub>手法の1例のみで他はI群土器である。

土師器	個体数	須恵器	個体数
杯 A	7	杯 A	2
杯 B 蓋	1	杯 B 身	1
皿 A	7	杯 B 蓋	3
椀 A	8	杯 C	1
盤 B	1	皿 C	3
甕 A	3	壺 蓋	1
計	27	計	10

Tab. 19 SB7150出土土器の構成

皿A IIの2例が灯火器として使用される(103)。椀A(107・108)は椀A Iで底部は平底に近い。c<sub>0</sub>手法のもの(107)とc<sub>1</sub>手法のもの(108)がある。II群土器が多く、I群土器は2例である。盤B(109)は大型品ではほぼ完形である。口縁部上端が強く外反する。口縁部外面はヘラ削りである。II群土器で、外面に黒斑がある。口径38.0cm, 高さ9.2cm。

須恵器 杯A III(380), 杯B, 杯B III・B IV蓋(377), 杯C, 皿C I(379), 壺蓋(378)がある。380は灯火器に使用される。皿Cは口縁部が外反するもの(379)と、まっすぐ外方に開くものがあり、後者の端部は小さく内側に折り返される。底部外面はヘラ切りのままである。

F SB6633など第II期建物出土の土器 (PL. 133)

殿舎地区第II期の遺構にぞくする建物 SB6633・SB6666・SB7151・SB7152は、正殿 SB7150にたいして、脇殿的に配置されている。これら建物の柱痕跡からは、平城宮土器VIIの土器が出土しており、SB7150よりも廃絶期が遅れることをしめす。ただし、これらの土器は同じ平城宮土器VIIであっても、後述の第III期建物 SB8224 の柱掘形から出土した土器よりも古く、長岡京の土器(平城宮土器VI相当)よりも若干新しい様相を呈している。各建物からの出土量は少なく、時期差がみとめられないので、ここでは一括してあつかうことにする。土師器・須恵器・黒

色土器からなるが、土師器が全体の77%と多数をしめている。

土師器には、杯A・杯B・杯B蓋・皿A・椀A・高杯・盤・壺E・甕Aがある。杯・皿・椀の食器類はすべてc<sub>0</sub>手法で、e手法のものはない。この時期の土師器は胎土・色調から、灰色～灰黄色で砂分の少ないもの(I'群土器)と、雲母・長石粒を多量に含み、茶褐色～赤褐色を呈するもの(II'群土器)とにわけられる<sup>1)</sup>。量的にはII'群土器が圧倒的に多い。II'群土器は平城宮土器IV・VのII群土器と類似する特徴をもつ。

杯A(110・111)は、口縁部B形態で平城宮土器Vに比べると外傾度が大きく、口縁端部の内側への巻き込みが小さくなっている。口径18.8cm、高さ4.1cm。皿A(112～114・118・119・121)

はB形態で、端部の巻き込みの大きいもの(114・121)、小さいもの(113・118)、巻き込みのないもの(119)がある。口径20.4cm～15.6cm。椀A(115～117・120)はいずれもc<sub>0</sub>手法である。口径15.4～12.4cm。高杯は脚柱部の破片のみであるが、1例には7面の面取りが認められる。壺E(122)は小型品で、胴部上半にヘラ磨きを施している。口径5.1cm、高さ5.0cm。

須恵器には杯B・杯B蓋・皿B蓋・鉢D・盤・平瓶・甕・甕Cがあるが、いずれも小片である。盤の底部内面には当て板の同心円文がのこる。

黒色土器には、黒色土器A・Bの両種<sup>2)</sup>があり、前者には杯B蓋・甕A(501)がある。

### G SD8211など第II期溝出土の土器 (PL. 134)

殿舎地区において第II期の建物をめぐる溝SD8211・SD8216・SD8246から、若干の土器が出土している。土師器・須恵器・黒色土器があり、平城宮土器Vにぞくする。

土師器には杯A・杯B・皿A・椀A(146・147)・高杯・甕がある。杯・皿類ではI群土器はa<sub>0</sub>・b<sub>0</sub>手法、II群土器はc<sub>0</sub>手法である。148・149は皿AIIである。

須恵器には杯A・杯BIV(403)・杯B蓋・皿A・皿B蓋・壺A蓋・壺E(404・405)・甕がある。杯B蓋(399～402)は杯B皿蓋(399・400)・BIV蓋(401・402)がある。B形態は2例だけである。皿B蓋にI～IV群にぞくさないものがある。

黒色土器には壺Aがあり、内外面とも黒色に処理されている。

1) 平城宮土器VIIのI'群・II'群は、それぞれ平城宮土器IV・VのI・II群に近い特徴をもつが、観察では同一産地と断定しえない。ここでは「I」を付してそのちがいをしめす。理化学的な

土 師 器		個体数	須 恵 器		個体数	土 師 器		
(食器)	杯 A	11	食器	杯B { 身	2	土 師 器		
	杯 B { 身	6			蓋		4	
		6		杯B蓋			1	
	皿 A	23		盤	1			
	椀 A	4		鉢 D	2			
	高杯	4		(貯蔵器)	平瓶		1	
	盤	1			甕 A		3	
	壺 E	1			甕 B		1	
	(煮炊具)	甕 A		1	計		13	
	計	51						

Tab. 20 SB6633・SB6666・SB7151・SB7152  
出土土器の構成

土 師 器		個体数	須 恵 器		個体数	
(食器)	杯A	4	(食器)	杯B { 身	1	
	杯B	2			蓋	9
	皿A	9		皿B蓋		3
	椀A	5		(貯蔵器)	壺 E	2
	高杯	1			壺 蓋	4
(煮炊具)	甕	2	計	18		
計	23					

Tab. 21 SD8211・SD8214・SD8216  
・SD8246出土土器の構成  
他に黒色土器壺A 1がある。

分析結果は p. 255～258を参照。

2) 『平城宮報告VI』p. 59。内面だけを黒色にするものをA、内外とも黒色になるものをBとする。

H SK8212出土の土器 (PL. 134)

土壌 SK8212 は第II期の北面築地回廊の南にあり、この土壌のうえに第III期建物SB8218がたてられており、この埋土から出土した土器は、第III期遺構の上限を決定する好資料といえよう。土師器50個体以上、須恵器76個体以上が確認されており、須恵器が多い。ほかに土馬が2点伴出している。大半の土器は平城宮土器Vにぞくする。

**土師器** 杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿B・椀A・椀C・高杯・盤・甕があるが、保存状態は悪い。甕類の割合が32%と大きい。食器では皿Aが41.2%をしめる。I群土器、II群土器の割合はさきのSB7150の場合とかなりことなっている。

杯Aは a<sub>0</sub>・b<sub>0</sub> 手法でI群土器だけである。杯B II(142)は b<sub>0</sub> 手法でI群土器である。他に  
**杯 A** c<sub>1</sub> 手法でII群土器のものが1例ある。杯B蓋はII群土器のものがある。皿A(143~145)は皿A I・A IIがある。I群土器は4点と少ない。I群土器は a<sub>0</sub>・b<sub>0</sub> 手法でA形態である。143は皿Iで螺旋・斜放射暗文があり平城宮土器IIIにぞくする。II群土器は c<sub>0</sub> 手法でB形態である。I群土器の皿A IIはいずれも口縁端部が内傾し、II群土器の皿A IIは口縁端部が小さく肥厚する。椀AはすべてI群土器であるが、椀CではI群土器は1例(141)である。椀Cはe手法でつくる。高杯にはI群土器の杯部片がある。甕類はほとんど甕Aで、I群土器にちかい胎土のものとII群土器にちかい胎土のものがあり、後者が圧倒的に多い。

**須恵器** 杯A・杯B・杯B蓋・皿B・皿B蓋・皿C・鉢A・鉢F・盤A・平瓶・壺蓋・甕Aがある。杯B蓋が総数の65.1%をしめる。

杯A(392)は2例ともI~IV群土器にぞくさない。392は杯A IIIで、器高が低い。

杯B(389~391)には杯B II(390)・B III(391)・B IV(391)がある。底部外面はへら切りのうえ  
**杯 B** をなでるものがある。杯B蓋(384~388)は杯B I・B II・B IV蓋がある。II群土器は3例にすぎない。I群土器は高さ2cm未満の扁平なものが多く、頂部外面はへら切り状態のものが5例にすぎずロクロ削りの割合が高い。ロクロ削りのうえをさらにロクロなでるものが多い。皿B

	土師器	須恵器	(計)	土師器	(個体数)(比率)	須恵器	(個体数)比率)
食器	34 (32.1%) (27.0%)	72 (67.9%) (57.1%)	106 (84.1%)	杯 A	6	杯 A	2
貯蔵器	0	4 (100) (3.2)	4 (3.2)	(食) 杯B { 身 2 蓋 1	2	(食) 杯B { 身 9 蓋 56	56
煮炊具	16 (100) (12.7)	0	16 (12.7)	皿 A	14	皿B { 身 1 蓋 5	5
計	50 (39.7)	76 (60.3)	126	皿 B	2	72	94.7
				椀 A	4	皿 C	4
				(器) 椀 C	4	盤 A	2
				盤	1	鉢 A	1
				高杯	1	鉢 F	2
				(煮炊具) 甕 A	16 32.0	(貯蔵器) 壺蓋	1
				計	50 100%	平瓶	1
						(器) 甕 A	2
						計	76 100%

Tab. 22 SK8212出土土器の構成

I 蓋(393~395)はI群土器であるが、頂部外面は縁部近くまでロクロ削りを施す。鉢F(398)は口縁端部近くまでロクロ削りし、体部内面はロクロなでを施す。底部外面はヘラ切りのままである。口径19.7cm、高さ16.2cm。盤A(396)はわずかに外反気味に開く口縁部で、口縁部端面は凹み、外傾する。底部外面から口縁部下半までロクロ削りを施す。口径38.5cm、高さ19.4cm。壺蓋(383)は頂部外面をロクロ削りする。口径8.7cm、高さ2.0cm。甕A(397)は肩部内外面は当て板痕跡・叩き目をロクロなでで調整する。接合しないが同一個体とおもわれる胴部片があり、叩き目を消去した後、ロクロ回転を利用しないカキメを施している。

### I SE9210出土の土器 (fig. 85)

広場地区にある井戸 SE9210 および井戸枠を抜き取ったあと凹みとして長く残存した SK73 16から少量の土器が出土している。SE9210は第II期の遺構として位置づけられるが、井戸枠内の下層堆積から出土した土器は、さきに報告したSD650B並行の時期にぞくする<sup>1)</sup>。このことは第II期から何回となく井戸さらえが行なわれ、第III期から10世紀初頭までの長期にわたって存続したことを物語っている。

井戸枠内から出土した少量の土器はいずれも土師器で、杯A 1個体・杯B蓋 1個体・甕 2個体がある。杯A(166)はB形態で外傾度が大きく、口縁端部は小さく肥厚する。e手法でつくったものをヘラ削りするc手法である。杯B蓋(165)は頂部外面をヘラ削りしたのち、縁部は左まわりのヘラ削りを4回にわけて行なう。口径21.6cm。甕A(167)はほぼ完形である。外面の全面に煤が付着する。体部外面は、底部から頸部にかけて横方向あるいは斜方向の平行叩き目を施す。内面はなでの調整である。口縁部端面には1本の沈線をいれるが一周していない。

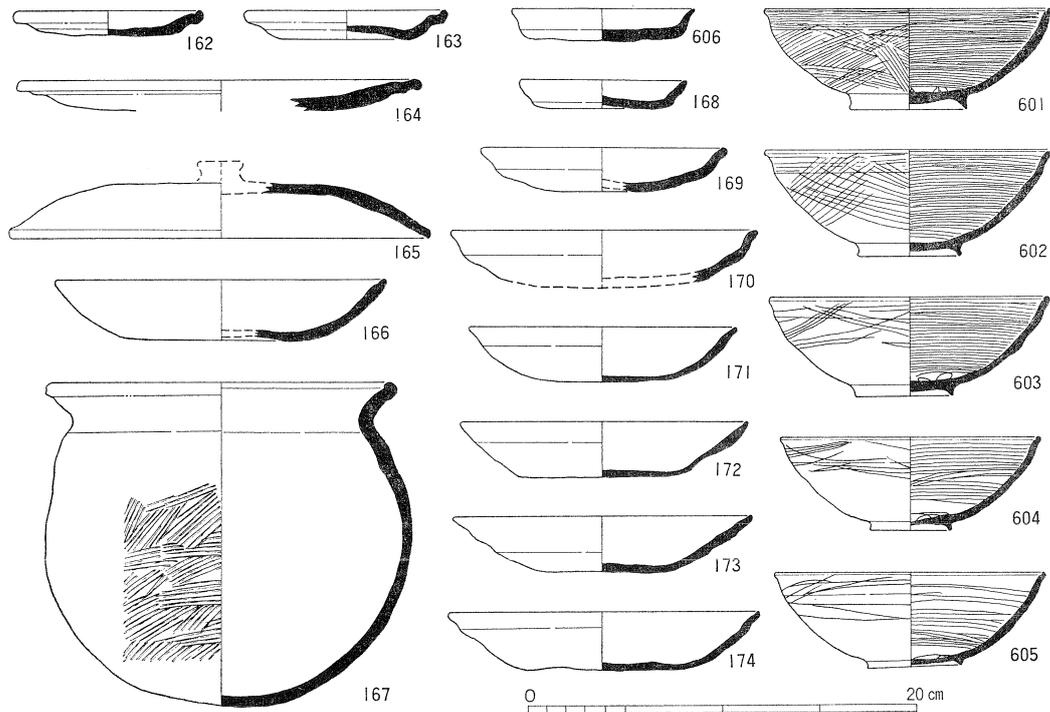


fig. 85 SE9210出土の土器

1) 『平城宮報告VI』p. 64~74

第IV章 遺物

SK7316からは、奈良時代の須恵器とともに、SD650Bよりも少し時期が下る土師器の杯・土師器皿、瓦器の椀・小皿、そのほか東播磨系の須恵器片や中国製の青磁椀が出土した。

SD650Bよりも時期の下る土師器の杯類(171~174)はいずれもe手法である。口縁部の形態には、内彎気味の口縁部が端部よりやや下位で外反するもの(171・174)、口縁下半が外彎気味で上半は内彎し口縁部の中程が肥厚するもの(172)、まっすぐ外方に大きく開くもの(173)がある。いずれも口縁端部を小さく内側に折りかえしている。前の2者にはよこなでが1段あるが、後者では2段である。口径15.8~13.6cm。高さ3.1~2.9cm。

土師器の皿Aには、皿A I (169・170：口径15.8~12.6cm, 高さ3.0~2.4cm)、皿A II (162・163・168：口径10.6~8.6cm, 高さ1.5~1.3cm)がある。いずれもe手法。皿A Iは口縁部上半が外反するもので、端部は丸くおさまる。皿A IIは口縁部が外反し、端部は内側に大きく巻きこむもの(162・163)と、まっすぐ外方に開くもの(168)とがある。土師器としてはこのほかに、口縁部を2段なでするe手法の高杯、または高台付皿らしきものが1点ある(164)。

瓦器 瓦器椀は11個体出土した。口径14.8cm~13.4cm, 高さ5.6~4.9cmで、口縁部は内彎し、いずれも口縁端部内面に沈線がある。高台は断面が逆三角形を呈するものがほとんどだが、低く平坦な例もある。口縁部内外面とも密にへら磨きを行なうもの(601・602)と、外面が粗で、内面が密なもの(603・604)、内外面とも比較的粗いもの(605)がある。底部内面の暗文は螺旋暗文とジグザグ暗文とがあり、後者は3例である。内外面のへら磨きが密なものにジグザグ暗文がみられる。瓦器小皿(606)は2例ある。口縁部は短く外反気味にひらく。口縁部はよこなで、底部外面は不調整で底部内面にジグザグ暗文を施す。

J SB8224出土の土器 (PL. 133)

殿舎地区における第Ⅲ期の建物SB8224の柱掘形から、比較的まとまりのある土器が出土している。平城上皇が平城宮に還都した当時の土器として注目される。平城宮土器Ⅶにぞくしているが、先に報告したSE311Bとは若干様相をことにし、長岡京の土器(平城宮土器Ⅵ)とSE311Bとの中間に位置するものとおもわれる。出土した土器の大半は土師器で、ほかに少量の須恵器や緑釉陶器皿がある。

土師器の器種には、杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿B・椀A・高杯・盤B・壺A・甕Aがある。Ⅱ'群土器が圧倒的に多く、杯・皿・椀はすべてc手法である。Ⅰ'群土器のものはf手法である。e手法でつくり、へら削りするc手法のものはない。

杯A(123~126)にはf手法のもの(126)が1点ある。口径19.0~16.2cm, 高さ3.3cm~3.7cm。杯B(137~139)は大型品で、c<sub>1</sub>手法のもの(138)がある。へら磨きは粗く、沈線状にくぼむ。杯B蓋(136)は磨滅が著しいが、頂部外面には、へら磨きがみとめられる。皿A(127~132)にはⅡ'群土器でf手法のもの(132)がある。口径23.0~18.2cmのもの、口径16.6

土師器		個体数
杯 A		9
(食) 杯 B	身	5
	蓋	5
皿 A		17
皿 B		1
(器) 椀 A		4
	高杯	2
盤 B		1
(貯蔵器) 壺 E		1
	甕 A	1
計		41

Tab. 23 SB8224出土土器の構成

ほかに須恵器杯B 2, 杯A・杯B蓋・鉢F・盤・壺M・甕Aの小片がある

1) 明石市魚住古窯址群の土器と同じ形態をとる。

～14.5cmの大小2種があるようである。皿B(135)は口径10.5cm,高さ2.0cmの小型品である。椀A(133・134)は杯Aを小型にした形態で、口縁端部を小さく内側に折りかえしている。口径14.3cm,高さ3.1cm。壺E(140)は小型品で胴部には粗いヘラ磨きを施す。口径4.6cm,高さ5.2cm。

須恵器には、杯B(381・382)の他に、杯A・杯B蓋・鉢F・盤・壺M・甕Aの細片がある。

K SD6631・SD6633・SD7175出土の土器 (PL. 134)

殿舎地区における第Ⅲ期の排水溝は、流路系統から、北東部系統 (SD6631・SD6632・SD6633・SD7175・SD7152), 北西部系統(SD7189・SD7197), 南部系統(SD6644・SD6667)の3系統にわかれている。南部と北西部系統からは少量の土器しか出土していないのにたいし、北東部系統の溝から比較的多くの土器が出土したので、ここでは3条の溝から出土した土器を一括してとりあつかうことにする。土師器 134 個体以上で、須恵器は極く少量の杯A・杯B・杯B蓋・鉢D・壺L・甕の小片が認められるにすぎない。ほかに少量の黒色土器がある。それらは平城宮土器Ⅶにぞくし、平城上皇の平城宮が終る時期に想定される。

**土師器** 杯A・杯B蓋・皿A・椀A・高杯・盤・壺E・甕がある。食器類では杯Aが30.6%, 土師器 杯Bが14.1%をしめるなど、食器のなかでしめる割合がたかい。Ⅱ'群土器が殆んどで、c<sub>0</sub>手法であるが、e手法でつくったものをヘラ削りしたc手法のものが、杯・椀では多くをしめている。e手法のものは杯Aに1点みられる。

杯A(151)は口径17.5～16.0cmのものが多く、18cm以上は少ない。高さの4.0cmをこえるものはない。杯B(157・160・161)には口径24.8～21.8cm,高さ8.7～7.8cmの大型品(160・161)と口径17.2cm,高さ4.1cmの小型品(157)がある。c<sub>0</sub>,c<sub>1</sub>手法がある。皿A(152～154・158・159)には口径21.4～18.2cmのものと口径16.6～14.4cmの大小2種がある。後者にはf手法が1例(152)ある。e手法を削ったc手法のものは口縁端部が小さく内側に巻き込んでいる。

椀A(150・155・156)には口径15.9～13.6cmのもの(155・156)と口径10.1cmの小型のもの(156)とがある。高杯には脚部片と杯部片とがあり、脚柱部はb手法のつくりで杯部は外面に粗いヘラ磨きを施している。壺Eは先述のSB8224出土品と同様の小型品である。

**黒色土器** 杯B・椀A・托・高杯がある。いずれも内黒の黒色土器Aである。杯B(502)は緑釉陶器の椀の形態に酷似する。c<sub>0</sub>手法。椀A(503)はc<sub>0</sub>手法で、口縁部内面に横方向の密なヘラ磨きを施す。底部内面は一方向のヘラ磨きである。托(504)は高台付の皿状の器に、まっすぐ立ち上る口縁部のつく形態で、内面及び受部上面が黒色で、横方向のヘラ磨きをほどこしている。高杯は形態・手法とも土師器と同じである。脚柱部はb手法のつくり方で、7面の面取りをする。杯部内面を黒色処理し、螺旋暗文を施す。

土 師 器	(個体数)	(比率)
杯 A	37	} 121 90.3
(食) 杯 B	17	
	8	
皿 A	48	
皿 B	2	
椀 A	9	
高 杯	7	
盤	1	
(貯蔵器)		
壺 E	1	0.7
(煮炊具)		
甕	12	9.0
計	134	100%

黒色土器

Tab. 24 SD6631・SD6633・SD7175出土土器の構成

ほかに須恵器杯A・杯B・杯B蓋・鉢D・壺L・甕の小片, 黒色土器杯B 2・椀A 1・托 1・高杯 1がある

### L SD3765出土の土器 (fig. 86)

東外郭の東面築地回廊寄りで南北に流れるSD3765は平城宮造営当初(第I-1期)の基幹排水溝であり、ここから平城宮土器I・IIにぞくする土器のほか、埴輪片が出土している。

土師器には、杯CⅢ1個体・盤1個体の他、甕の小片がある。杯CⅢ(175)はa<sub>0</sub>手法で、螺旋・斜放射暗文がある。盤は外面にヘラ磨きを施している。

須恵器には杯A1個体・杯B2個体・杯B蓋2個体・壺B1個体の他、甕片がある。杯B(407)は低い高台が外方にふんばり、底部は厚い。底部外面はロクロ削りするものとヘラ切りのままのものがある。壺(408)は短い口縁部がほぼ垂直に立ち、肩が張る。蓋とともに焼成された痕跡をとどめる。口径8.4cm。

### M SD5505出土の土器 (fig. 86)

東外郭にある基幹排水溝SD3715に、東方の第2次大極殿地域から注ぐ東西溝SD5505から少量ながら平城宮土器Ⅲにぞくする土器が発見された。

土師器には、杯A1個体・杯CⅢ2個体・皿AⅠ1個体・甕A1個体がある。杯Aは螺旋・斜放射・連弧暗文がある。杯CⅢ(176)はa<sub>0</sub>・a<sub>1</sub>手法で、螺旋・斜放射暗文がある。皿AⅠ(177)はa<sub>0</sub>手法で、螺旋・斜放射暗文がある。

須恵器には、杯B3個体・杯B蓋1個体・鉢A1個体の他、壺の小片がある。杯Bはいずれも底部外面ヘラ切りのままである。底部内面に墨の付着するものが1例ある。鉢A(409)は体部下半をロクロ削りする。口径19cm。甕には胴部片内面に墨の付着するものがある。

### N SD3715出土の土器 (PL. 135・136)

第1次大極殿地域と内裏・第2次大極殿地域とを画する南北溝SD3715から出土した土器は、量的に多いが保存状態が悪い。完掘していない北方の6ABB・6ABC区での出土量は少なく、ほとんどは南方の6ABE区から出土したものである。平城宮土器Ⅱ～Ⅶまでを含むが、平城宮土器Ⅳ・Ⅴがそのほとんどをしめ、神護景雲2年、宝亀元年(768～770)の紀年木簡が出土していることと矛盾しない<sup>1)</sup>。溝の層位は上下2層にわかれるが、その間に遺物の時期差をみとめがたい。水流によって層位が攪乱されているのであろう。土器の接合状況からすると、須恵器壺Aや横瓶に約78m離れて接合したものがあり、これら土器の使用地を近接地に必ずしも比定できない。以下、土器の記述は器種ごとに時期をわけてのべるが、時期別の不確定な土師器の一部と、須恵器については平城宮土器Ⅳ・Ⅴを一括してあつかった。出土土器には土師器・須恵器・黒色土器、ほかに二彩陶器1点、墨書土器35点、人面土器1点、刻線文土器1点、陶硯7点がある。

平城宮土器  
Ⅳ・Ⅴ

土師器(PL.135) 杯A・杯B・杯B蓋・杯X・皿A・皿B・皿B蓋・椀A・椀C・椀X・高杯・盤・壺A・壺E・甕C・竈がある。食器の杯A・皿A・椀Aが相互に近い割合をもっている。煮炊具の割合も大きく、竈の存在も注目される。杯A・皿A・椀AではI群土器とII群土器とはほぼ同量である。

1) SD3715出土の木簡 (p. 98) 参照

4 土 器

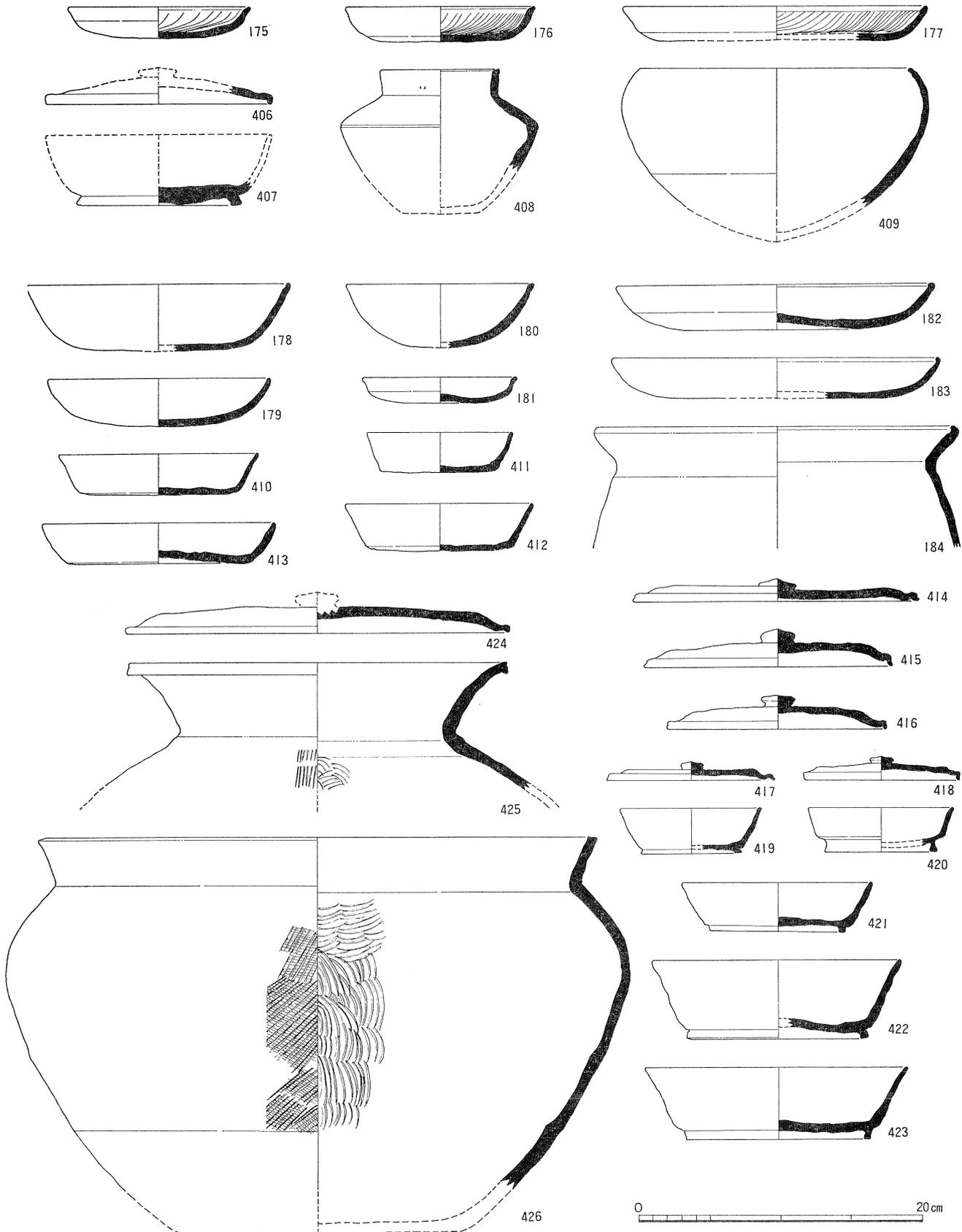


fig. 86 SD5505, SD3765, SK8316・SK8317・SK8233出土の土器

第IV章 遺物

土師器		(個体数)	(比率)	須恵器		(個体数)	(比率)	
(食器)	杯 A	29	} 120	} 82.8	杯 A	6	} 66	} 49.6
	杯 B	{ 身 4			{ 身 22	} 25		
		{ 蓋 6			{ 蓋 25			
	杯 X	1			杯 C	6		
	皿 A	39			皿 A	4		
	皿 B	{ 身 1			{ 身 3	} 3		
		{ 蓋 1			{ 蓋 3			
	碗 A	22			皿 C	8		
	碗 C	6			碗 A	2		
	碗 X	1			碗 B	1		
高杯	11	高杯	4					
盤	4	鉢 A	5					
(貯蔵器)	壺 A	1	} 3	} 2.1	鉢 D	1		
	壺 E	2			鉢 F	1		
(煮炊具)	甕 C	18	} 22	} 15.1	壺A蓋	15		
	竈	4			} 2	} 2		
計	145	100%	(貯蔵器)	壺 B			1	} 67
			壺 E	1				
			壺 G	1				
			壺 K	2				
			壺 L	1				
			壺 N	1				
			横瓶	1				
			平瓶	1				
			甕 A	17				
			甕 B	10				
			甕 C	15				
			計	133	100%			

	土師器	須恵器	計
(食器)	120 (64.5%) (40.5%)	66 (35.5%) (29.5%)	186 (67.0)
(貯蔵器)	3 (4.3%) (1.1)	67 (95.7%) (24.1)	70 (25.2)
(煮炊具)	22 (100%) (7.0)	0	22 (7.3)
(計)	145 (52.2)	133 (47.8)	278 (100%)

Tab. 25 SD3715出土土器の構成

ほかに黒色土器がある

杯A(185~192) 平城宮土器Ⅲにぞくするものには杯AⅢ(191)がある。a<sub>0</sub>手法で、螺旋・斜放射暗文がある。平城宮土器ⅣのⅠ群土器には杯AⅠ(185)・AⅡ(190)があり、a<sub>0</sub>手法のみである。Ⅱ群土器の杯AⅠ(187)・AⅡ(188)はいずれもc<sub>3</sub>手法である。平城宮土器ⅤのⅠ群土器杯AⅠ(186)はb<sub>0</sub>手法、Ⅱ群土器杯AⅠ・AⅡ(189)はいずれもc<sub>0</sub>手法である。192は平城宮土器Ⅵにぞくする。c<sub>0</sub>手法で調整するⅡ群土器である。

杯B(200・201) 平城宮土器Ⅳで、杯BⅡ(200)・BⅢ(201)がある。c<sub>1</sub>手法で、Ⅱ群土器。

杯B蓋(198・199) 杯BⅣ蓋で上面がわずかに凹む扁平なつまみがつく。頂部外面は4回、縁部は6~7回にわけてヘラ磨きを施す。198は内面とつまみ上面に螺旋暗文がのこる。

杯X(207) 口縁部は内彎気味で、上端がわずかに外反する。口縁端部の巻き込みは小さい。口縁部上半をよこなでし、それ以下はヘラ削りし、ヘラ磨きを施す。Ⅰ群土器。口径21.0cm。

皿A(193~196・202~206) 平城宮土器Ⅱにぞくするものには皿AⅠ(202)がある。a<sub>0</sub>手法で、斜放射暗文が残る。平城宮土器ⅣにぞくするⅠ群土器には、皿AⅠ(203)・AⅡ(193・194)がある。a<sub>0</sub>・b<sub>0</sub>手法で、皿AⅡは口縁部に内傾する面をもつ。Ⅱ群土器には皿AⅠ(204)がありc<sub>0</sub>手法である。平城宮土器ⅤのⅠ群土器にも皿AⅠ(206)・AⅡ(196)があり、a<sub>0</sub>・b<sub>0</sub>・b<sub>2</sub>手法がある。196は口縁端部がわずかに外反し、端部は巻き込まない。Ⅱ群土器にも皿AⅠ(205)・AⅡ(195)がある。c<sub>0</sub>手法で、皿AⅡの口縁端部は巻きこまない。

皿

皿B蓋(197) 皿BⅠ蓋で、保存状態は悪いが、外面にヘラ磨きがのこる。

椀A(209~212) 平城宮土器Ⅴで椀AⅠ(209・210)・AⅡ(211・212)がある。c<sub>3</sub>手法がほとんどだがc<sub>0</sub>手法もみられる。口縁部外面のヘラ磨きは4回わけに施す。灯火器使用(212)が3例ある。Ⅰ群土器が多い。

椀

椀C(213・214) すべてe手法でつくる。平城宮土器Ⅲにぞくするもの(214)は体部外面に粘土紐の痕跡をのこす。平城宮土器Ⅴのもの(213)はⅠ群土器である。

椀X(215) ややくぼむ大きい平底で、口縁端部が強く外反する。a<sub>0</sub>手法でⅠ群土器である。口径13.2cm、高さ3.6cm。

高杯(216・217) 杯部と脚柱部とがつながるものはない。杯部には螺旋・斜放射暗文を施すものと、暗文のないものがある。後者には粘土紐の痕跡が残る。脚柱部には裾部径15.6cm、高さ20.0cmの大型のもの(217)と、裾部径11.1cm、高さ14.9cmの小型のもの(216)とがある。両者ともb手法のつくり方で、7~8面の面取りを施す。後者は裾部外面に5~6回わけのヘラ磨きを施す。

高 杯

盤(221) 口縁部外面上部をよこなでし、これ以下は縦方向のハケメを施す。口径34.8cm。他に高台がつく盤Bの破片もある。

壺E(208) 口縁部はよこなでし、体部外面は丁寧な横方向のヘラ磨きを施す。口径8.6cm。

甕C(218~220) 口縁部外面はハケメをよこなでで消す。内面は横方向のハケメを施すものが多い。体部外面は縦方向のハケメを施すが、ハケメの後、上部をヘラで削るものもある。体部内面はよこなでするものと不調整のものがある。外面に煤の付着しているものがある。口径29.0~26.0cm。

甕

竈 小片が4点ある。

須恵器(PL. 136) 杯A・杯B・杯B蓋・杯C・皿A・皿B・皿B蓋・皿C・椀A・椀B・高杯・鉢A・鉢D・鉢F・壺A蓋・壺B・壺B蓋・壺E・壺G・壺K・壺L・壺N・平瓶・横瓶・甕A・甕B・甕Cがある。構成器種は多様であり、特に壺類の種類が多い。食器では杯Bのほかは量的に少ない。

杯A(427~429) 杯AⅠ・AⅢ・AⅣがある。428は底部外面ロクロ削りで、Ⅰ~Ⅳ群土器にぞくしていない。

杯

杯B(437~440) 杯BⅠ・BⅡ・BⅢ・BⅣがある。口径8.9cmの小型のもの(440)もあり、灯火器として使用している。

杯B蓋(433~436) 杯BⅠ・BⅡ・BⅢ・BⅣ蓋がある。B形態のものが3例あり、Ⅱ群土器とⅠ~Ⅳ群にぞくさないもの(434)とがともに存在している。内面に墨の付着するものが2例ある。

#### 第IV章 遺物

杯C(430) 口径20.0~17.4cmで、焼成が悪く、灰白色を呈する。

皿

皿A(441) 口径18.2~15.6cm で底部外面はヘラ切りの上をかかくなでるものがある。

皿B(445) 法量のわかるものは1例のみである。皿B Iで、口縁部外面下半から底部外面にかけてロクロ削りする。底部内面は平滑で墨が付着する。I~IV群土器にぞくさず、灰色で磁器質に近く焼きくまっている。

皿B蓋(443・444) 皿B II蓋で443は頂部外面をロクロ削りする。皿B(445)と同じくI~IV群にぞくさない一群である。

皿C(442) 皿C I(442)・C IIがある。底部外面をヘラ切りの上をかかくなでるものがある。

椀A(447) 底部外面はロクロ削りする。ほかに高台をもつ椀Bの小片もある。

高杯 いずれも脚部の小片であるが、三方透しをあけるものが1例ある。

鉢A(446) 口縁端部は外傾する面をもつ。外面は幅の粗い横方向のロクロ削りを行なう。口径23.2cm。このほかに口径31.0cmの大型のものがある。

鉢D(454) 体部外面はロクロ削りする。口径17.8cm。

鉢F(452) 口縁部下半から底部にかけての破片である。底部外面に焼成前の小さな刺突痕が、目立っている。

壺

壺蓋(431・432) 壺A蓋(432)には頂部ヘラ切りのままで縁部との境をロクロ削りするもの、ロクロ削りしてなでを加えるものがある。口径17.6~15.8cm、高さ3.7cm。壺N(双耳壺)蓋(431)は口径7.3cmで、縁部が約3.5cmと長い。縁端の部分は丸くおさめている。外面には自然釉がかかっている。

壺B(455) 体部は丸く、肩は張らない。外面には暗緑色の自然釉がかかる。口径12.0cm。

壺E(450) 底部はヘラ切りのままである。口径10.8cm、高さ6.1cm。

壺G(448) 体部下半はロクロ削り。底部外面は磨滅で不明。口径5.4cm、高さ18.0cm。

壺K(451) 体部外面はロクロ削りしたのち、ロクロなです。肩部には自然釉がかかる。

壺N(456) 体部外面下半部と耳下方部分とはロクロ削りする。

平行瓶(449) 口部と把手を欠いている。肩の径7.7cm、復原高4.9cmの小型品である。水滴に用いたものか(PL. 137)。

横瓶 体部外面は平行叩き目、内面には当て板の同心円文がのこる。長径35.0cm。

甕A(453) 丸い体部外面は平行叩き目を施す。内面には当て板の同心円文をとどめる。口径21.0cm。甕B、甕Cは小片である。

黒色土器(PL. 135) 甕A(508)がある。508は黒色土器Bで短く外反する口縁部と丸い体部とからなる。体部外面は丁寧なヘラ磨きを施し、内面はヘラ削りする。外面のヘラ磨きが口縁部の一部におよんでいる。口径18.2cm。

### ○ SK3784出土の土器 (fig. 87)

第II期の南面築地回廊の南に位置する東西に長い不整形な土壇 SK3784は、築地回廊の築成土を採るために掘ったものようである。その埋土から出土した土器は第II期遺構の開始時期をあらわしているものとみられる。

土師器28個体以上、須恵器30個体以上で、量的には等量の傾向をしめす。土器の年代は平城宮土器IVにぞくし、平城宮土器IIIの特徴をもつ少量の土器をまじえている。

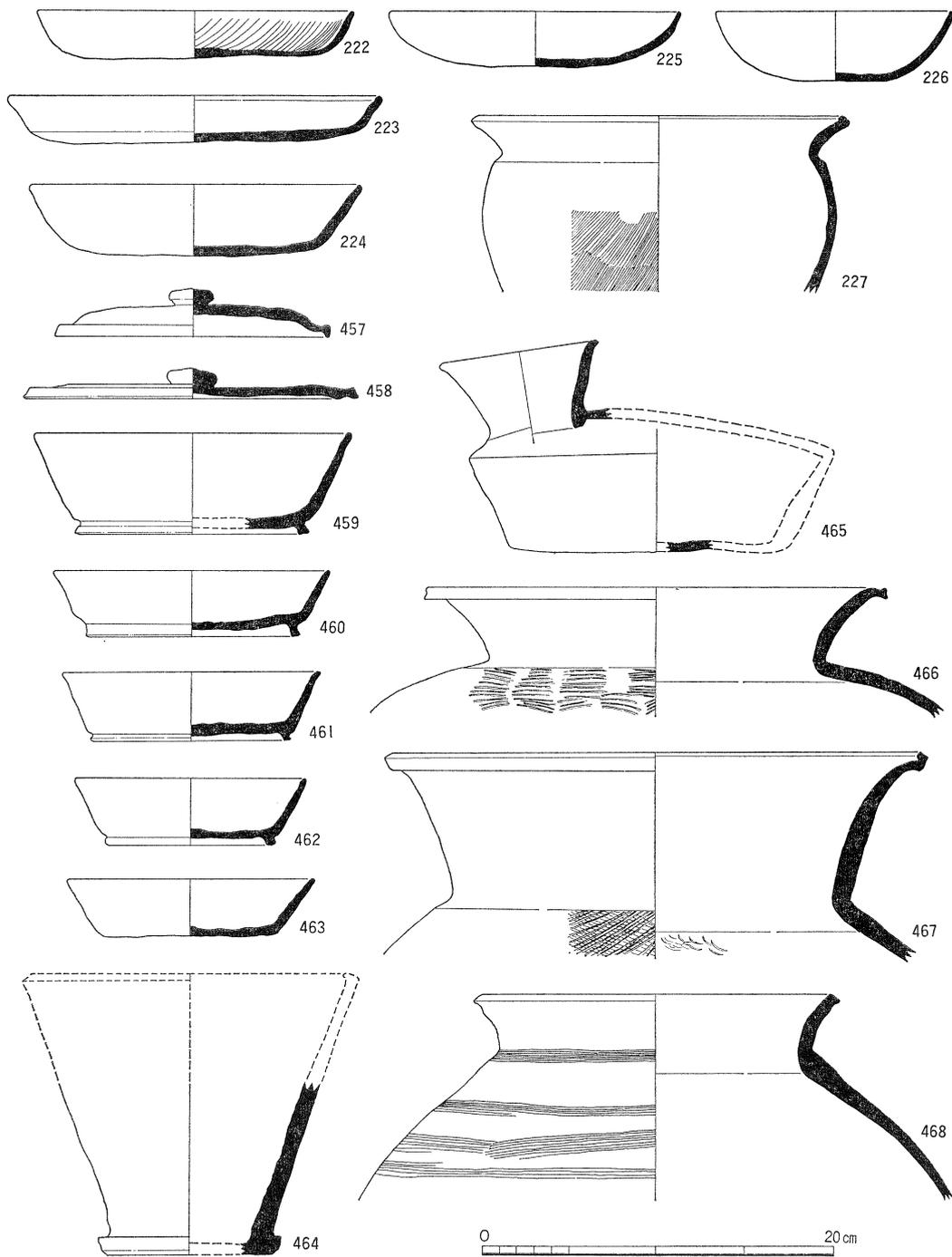


fig. 87 SK3784出土の土器

土師器には杯A I (224)・杯B蓋・皿A・椀A II (226)・椀C・高杯・盤・甕A (227)・取手付 土 師 器 大型蓋・竈がある。皿A (222・223・225)には皿A I (223)・A II (225)がある。222は平城宮土器 IIIにぞくし、a<sub>0</sub>手法で斜放射暗文がのこる。灯火器として使用したものが、皿A IIのうち2例、椀A IIのうち2例ある。

須恵器には杯A・杯B・杯B蓋・鉢A・鉢F (464)・盤・壺A蓋・壺L・平瓶・甕A・甕X 須 恵 器 がある。杯Aには杯A IIIで灯火器として使用したものの1例(463)がある。杯B (459~462)には、杯B II (459)・B III (460~462)がある。B IIはやや口径にばらつきがある。杯B IIの底部外面に

第IV章 遺物

墨の付着するもの1例(460)がある。

杯 B 蓋 杯B蓋(457・458)には杯B I～IV蓋がある。B形態は1例である。内面に墨の付着するものは3例である。平瓶(465)は、高台をとまなうものともなわれないものがある。465は頸部から頂部にかけて自然釉がかかる。甕A(466～468)には外方に開く長い頸部が口縁端部で強く外反し、端部が内側に折り返されたもの(466・467)と、短い頸部が外反気味に開き口縁部端面が外傾するもの(468)とがある。466は体部外面に横位平行叩き目、内面は当て板痕跡を

んで消している。468は外面に自然釉がかかり、頸部以下胴部にかけてロクロ回転を利用しない楕円描き平行線が施されている。甕にはこのほか、平底になる形態の甕Xが1例ある。

土師器		個体数	比率	須恵器		個体数	比率	
(食器)	杯 A	3	21	75.0	(食器)	杯 A	4	
	杯B蓋	2				18	60.0	
	皿 A	7						
	碗 A	4						
	碗 C	2				鉢 A	1	
高杯	1	鉢 F	1					
(煮炊具)	甕 A	5	6	21.4	(貯蔵器)	壺A蓋	2	
	甕	1				壺 L	1	
(その他)	大型蓋	1	0.6	平瓶		2	12	40.0
	計	28	100%	甕 A		6		
						甕 X	1	
					計	30	100%	

Tab. 26 SK3784出土土器の構成

P SK8316・SK8317・SK8233出土の土器 (fig. 86)

東外郭の北部(6ABC区)には、第II期建物SB8240・SB8320, 第III期建物SB8234・SB8315・SB8325などがあり、周辺にいくつかの土壌がある。出土した土器は少く、保存状態もよくない。ここでとりあげる土壌 SK8316・SK8317・SK8233 から出土した土器は、いずれも平城宮土器Vにぞくしており、第II期の遺構であることが推測される。これらの土壌からは、土師器286個体、須恵器211個体が出土している。食器類では土師器皿Aと須恵器杯Bのしめる割合が大きい。土師器にはI群土器とII群土器があり、前者が多い。

**SK8317** 土師器187個体以上、須恵器119個体以上が出土した。

土師器には杯A・杯B・杯B蓋・皿A・碗A(180)・高杯・盤・甕A・甕B・甕C(184)がある。杯A(178)は杯A IでI群土器はb<sub>0</sub>手法、II群土器(179)はc<sub>0</sub>手法である。皿A(181～183)は皿A I(182・183)・A III・A III(181)がある。I群土器にはa<sub>0</sub>・b<sub>0</sub>手法がある。181は灯火器に用いたものである。碗Aにも灯火器が1例ある。

須恵器には杯A・杯B・杯B蓋・杯C・皿A・皿B・皿B蓋・皿C・盤・壺E・浄瓶・甕A・甕B・甕Cがある。杯A(410・411)には杯A III(410)・A IV(411)がある。底部外面をロクロ削りするものは1例である。杯B蓋(414・415・417)には杯B I・B II・B III・B IV蓋がある。頂部外面をロクロ削りするものは3例である。甕C(426)は体部外面に平行叩き目を施し、内面には当て板同心円文がのこる。体部外面下半はロクロ削りを施す。

**SK8316** 土師器70個体以上・須恵器73個体以上が出土した。

土師器には、杯A・杯B・皿A・碗A I(179)・高杯・盤・甕Aがある。

須恵器には、杯A・杯B・杯B蓋・皿B・皿C・盤・壺E・壺G・壺L・壺M・甕A・甕Cがある。杯B(419～423)には杯B I(422・423)・B III(421)・B IV(419・420)がある。419・

4 土 器

土 師 器	(個 体 数)	(比 率)
(食 器)	杯 A	53 } 75.7
	杯 B	
	杯 C	
	皿 A	
	椀 A	
	高 杯	
(煮炊具)	甕 A	17 } 24.3
	計	

	土 師 器	須 恵 器	計
(食 器)	53 (45.3%) (37.1%)	64 (54.7%) (44.8%)	117 (81.9%)
(貯蔵器)	0	9 (6.3)	9 (6.3)
(煮炊具)	17 (11.9)	0	17 (11.9)
計	70 (49.0)	73 (51.0)	143(100%)

須 恵 器	(個 体 数)	(比 率)
(食 器)	杯 A	64 } 37.6
	杯 B	
	杯B蓋	
	皿 B	
	皿 C	
	盤	
(貯蔵器)	壺 E	5 } 6.9
	壺 G	
	壺 L	
	壺 M	
甕 A	3 } 4 } 5.5	4.1
計	73	100%

Tab. 28 SK8316出土土器の構成

土 師 器	(個 体 数)	(比 率)
(食 器)	杯 A	159 } 85.0
	杯 B	
	杯B蓋	
	杯 C	
	皿 A	
	椀 A	
(煮炊具)	甕 A	28 } 15.0
	甕 B	
甕 C	25	
計	187	100%

	土 師 器	須 恵 器	計
食 器	159(85.5%) (52.1%)	113 (41.5%) (36.9%)	272 (89.0%)
貯蔵器	0	6 (1.9)	6 (1.9)
煮炊具	28 (9.1)	0	28 (9.1)
計	187 (61.2)	119 (38.8)	306 (100%)

須 恵 器	(個 体 数)	(比 率)
(食 器)	杯 A	113 } 95.0
	杯 B	
	杯B蓋	
	杯 C	
	皿 A	
	皿 B	
(煮炊具)	皿B蓋	6 } 5.0
	皿 C	
	盤	
(貯蔵器)	壺 E	6 } 5.0
	浄 瓶	
	甕 A	
	甕 B	
甕 C	1	
計	119	100%

Tab. 28 SK8317出土土器の構成

第IV章 遺物

422は底部外面にロクロなでを施す。杯B蓋(416・418)には杯BⅢ・BⅣ蓋がある。416は頂部外面にロクロなでを施す。

**SK8233** 土師器29個体・須恵器19個体以上が出土した。土師器には杯A・皿A・椀A・高杯・甕があり、須恵器には杯A・杯B・杯B蓋・皿B蓋(424)・壺蓋・甕A(425)がある。

土師器		個体数	須恵器		個体数
(食器)	杯 A	5	杯 A	身 1 蓋 13	2
	杯 C	1	杯 B		13
	皿 A	14	皿 B 蓋	1	
	椀 A	4	貯壺 蓋	1	
	高杯	1	甕 A	2	
(煮炊具)	甕	4	計		19
	計	29			

Q SK3730出土の土器 (fig. 88)

Tab. 29 SK8233出土土器の構成

東外郭の6ABE-K 地区にある方形土壙 SK3730 から、土師器39個体以上、須恵器34個体以上が出土した。平城宮土器Ⅴにぞくするが、一部に平城宮土器Ⅳをふくむ。

土師器には杯A・杯B蓋・皿A・椀A・椀C・高杯・甕A・甕B・鍔釜がある。杯A(228)は土師器杯AⅠで  $b_0$  手法、皿A (230・231) は皿AⅠで  $a_0 \cdot b_0 \cdot c_0$  がある。椀Aには平城宮土器Ⅳの椀AⅠ(229)・AⅡ、平城宮土器Ⅴの椀AⅡ(232)がある。いずれもⅠ群土器で  $c_3$  手法である。椀C (233) はⅡ群土器である。甕A(234)は体部外面に縦方向、口縁部内面には横位のハケメを施す。口径28.6cm。甕B(235)の小さい三角形の把手上端は体部に接している。体部外面に斜方向のハケメ・口縁部内面に横方向のハケメを施す。鍔釜は鍔部片がのこる。鍔の幅6.2cmで、上面にはハケメを施し、下面はなでる。粘土紐の接合痕跡がのこる。煤の付着はない。

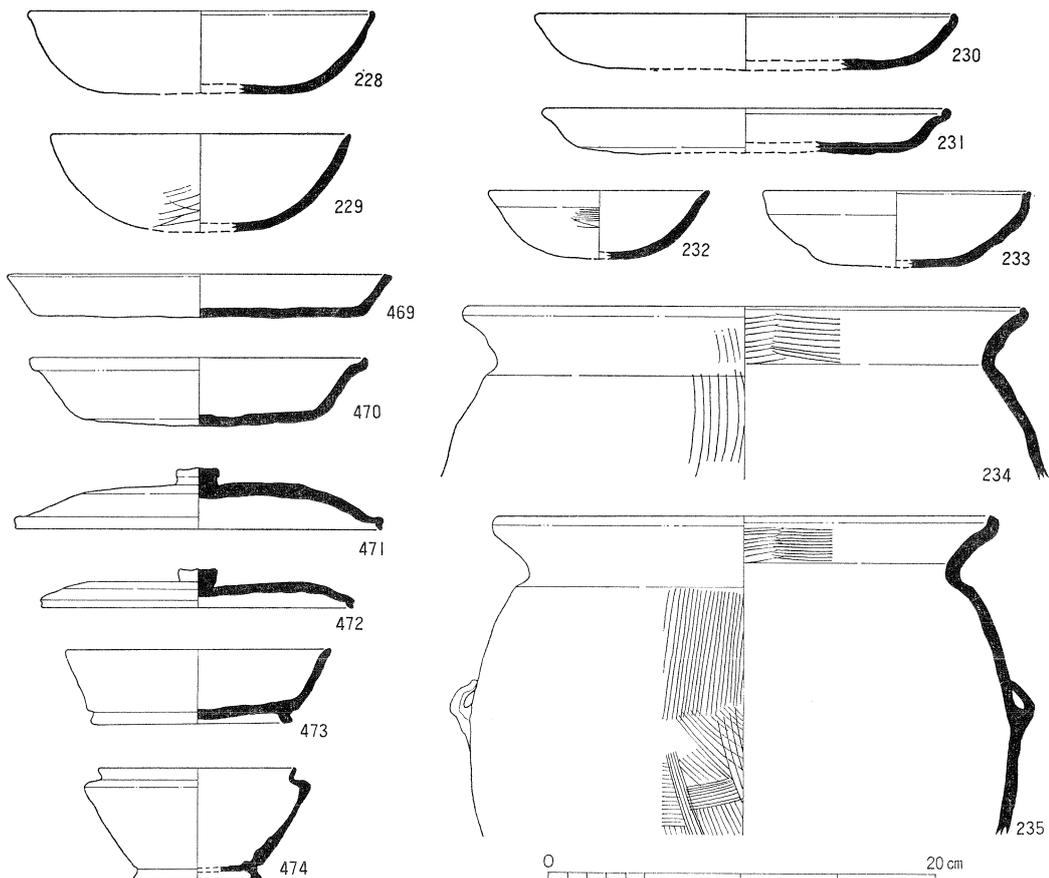


fig. 88 SK3730出土土器

4 土 器

須恵器には杯A・杯B(473)・杯B蓋・杯C・皿C・壺E・甕がある。杯Bは、杯BⅢ・BⅤがある。杯B蓋(471・472)には杯BⅡ・BⅢ・BⅣ蓋がある。内面に墨の付着するもの(472)が3例ある。B形態で、I～IV群土器にぞくさないものもある。杯C(470)は焼成が悪いものが多い。底部外面はヘラ切りあと、ナデをくわえている。皿C(469)は皿CⅠで焼成が悪い。壺E(474)は口径10.2cm、高さ5.9cm。

土師器	個体数	須恵器	個体数
杯 A	4	杯 A	2
(食) 杯B蓋	1	(食) 杯B { 身 6 } { 蓋 17 }	17
皿 A	7		
(器) 椀 A	14	(器) 杯 C	9
	椀 C	2	皿 C
高 杯	3		
(煮炊具) 甕 A	7	(貯蔵器) 壺 E	2
罏 釜	1	甕	2
計	39	計	34

R 特殊土器類

Tab. 30 SK3730出土土器の構成

i 施釉陶器 (PL. 137, fig. 89)

三彩陶器・二彩陶器・緑釉陶器・灰釉陶器・褐釉陶器が少量ながら出土した。これらの出土地点をみると、三彩・二彩陶器は7点のうち5点が回廊内で発見され、そのほかはSD3715とその周辺の包含層からの出土である。前者のうち3点は殿舎地区から出土した。緑釉陶器はSA109周辺の回廊地区で10点、回廊内で4点・回廊外で5点出土した(Tab. 31)。

**三彩陶器** 鉢Aが4点ある。遺構ともなうものはSK3787・SB8245各1点である。いずれも三彩鉢胎土は軟質で黄灰色を呈する。外面・口縁部内面には緑・褐・白釉、体部内面には白色釉を施す。6ABP—B地区出土例(PL. 137)は、比較的保存状況が良い。口縁端部の内傾する面は緑釉である。褐釉は線状にかかり、下方にたれてわずかにもりあがる。体部内面は白釉だが、緑色と褐色がまざっている。全面に細かい貫入がある。体部下半にはロクロ削りがみとめられる。正倉院にこれと類似した彩色構成のものがある。口径27.4cm。

**二彩陶器** 3点あるがいずれも小片で器種は不明である。1点はSD3715から出土、外面に緑・白釉を施している。

**緑釉陶器** 19点あるが小片が多い。椀・耳皿・蓋がある。遺構ともなうものとしてはSA緑釉椀109から5点、SK8079から3点、SB8224・SK3756・SD5530・SK8084から各1点出土した。焼成が軟質で黄褐色を呈するもの(軟陶)と、硬質で灰色のもの(硬陶)とがあり、後者がほとんどで前者は4例である。椀・皿には高台を削り出したものと、付高台のものがある。28は輪花がつく皿で、口縁端部は強く外反し、断面台形の付高台をもつ。口縁部内面下半には5個所に隆起する穀粒形の輪花をつけ、その延長上の口縁端部にも小さい輪花をきざみこむ。口縁部外面には、内面の輪花の位置にヘラで縦方向の刻み目をつけている。底部内面には釉の下に重ね焼の痕跡があり、二度焼きをしたことがわかる。口径17cm、高さ2.1cm。11は口縁部外面上部に稜があり、底部が厚い皿である。口径14.3cm、高さ1.9cm。耳皿13は胎土軟質で赤味がかかった褐色である。

**灰釉陶器** 遺物包含層から出土した椀(29)と浄瓶の小片がある。

**褐釉陶器** 22は口縁部はやや内彎気味に垂直に近く立ち、底部は高台がつくとおもわれる椀である。内面及び口縁部外面下半まで暗褐色の釉がかかる。胎土は褐灰色で硬質である。中国製陶器の可能性が有る。時期は奈良時代よりも下る。口径10.8cm。SB7802付近出土。

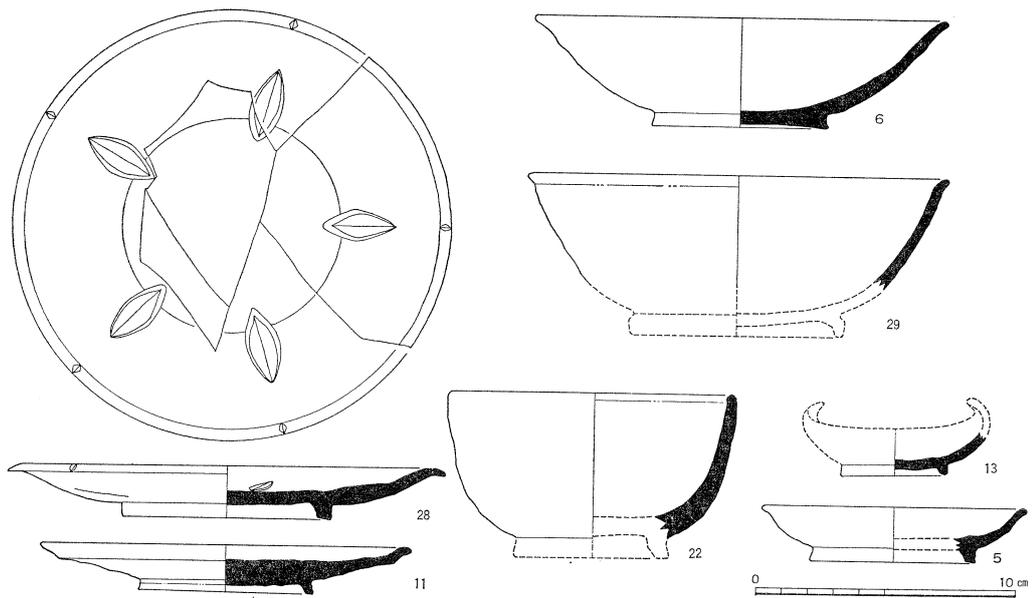


fig. 89 施釉陶器実測図

番号	(出土遺構)	(種類)	(器種)	番号	(出土地点)	(種類)	(器種)
1	SB8224	緑釉(硬)	皿	16	6ABE-K	二彩	不明
2	SB8245	三彩	鉢 A	17	"	緑釉(軟)	"
3	SA109	緑釉(硬)	椀	18	6ABE-M	灰釉	浄瓶
4	"	"	"	19	6ABD-D	緑釉(硬)	椀
5	"	"	杯 B	20	6ABO-P	"	皿
6	"	"	椀	21	6ABR-G	三彩	鉢 A
7	"	"	椀	22	6ABR-H	褐釉	椀
8	SK3756	緑釉(軟)	蓋	23	6ABP-A	二彩	不明
9	SK3787	三彩	鉢 A	24	"	緑釉(硬)	椀
10	SK8084	緑釉(硬)	椀	25	"	緑釉(軟)	"
11	SK8079	"	皿	26	6ABP-B	三彩	鉢 A
12	"	"	椀	27	6ABC-U	緑釉(硬)	椀
13	"	緑釉(軟)	耳皿	28	"	"	輪花皿
14	SD3715	二彩	不明	29	"	灰釉	椀
15	SD5530	緑釉(硬)	皿				

Tab. 31 施釉陶器の出土地点 地区名で出土地点を表すものは遺物包含層からの出土である

ii 墨書土器・墨画土器 (PL. 138・Tab. 32)

**墨書土器** 50点あるが、そのうち遺構にともなうものはSD3715から35点・SB7802から5点、SD5505, SD5564, SD6667, SK8317, SK3730から各1点がある。これらのうち判読できるものは24点である。

**墨画土器** 22は土師器皿A Iの底部外面に、細い線で鳥を描く。首の長い水鳥で水面にうかぶ構図である。この上方に空を飛ぶ一羽の尾部がのこる。

## 4 土 器

(番号)	(遺構出土地点)	(記 事)	(書 法)	(器 種 と 部 位)			(時 期)
1	SB7802	□□所 易カ	墨 書	須恵器	杯 I 蓋	頂外	平城宮土器 IV
2	"	主	"	"	甕 B	体外	"
3	"	□城□	"	"	杯	底外	"
4	"	□東□□	"	"	杯 B I	"	"
5	"	内	刻 印	"	皿 C I	口外	"
6	SK8317	大膳	墨 書	"	杯 A III	底外	V
7	SK3730	□月 切	"	土師器	杯か皿	"	"
8	SD3715	山	"	須恵器	杯 B II	"	"
9	"	考	"	"	杯 A III	"	V
10	"	少将	"	"	杯 B II 蓋	頂内	"
11	"	二	"	"	杯 A	底外	"
12	"	嶋子	"	"	杯 B III	"	"
13	"	大□	"	"	杯 B III 蓋	頂内	"
14	"	出□ 雲カ	"	"	杯 B 蓋	頂外	"
15	"	□若 カ	"	"	杯 B III 蓋	"	"
16	"	□山 カ	"	"	杯 A	底外	"
17	"	□	"	"	杯 B IV 蓋	頂外	"
18	"	五月	"	土師器	杯か皿	底外	"
19	"	園	"	"	"	"	"
20	"	気□自 カカ	"	"	椀 A	口外	V
21	"	□桑 カ	"	"	皿 A II	底外	"
22	"	鳥の絵	墨 画	"	皿 A I	"	IV
23	"	×	刻線文	"	椀 A II	"	V
24	SD5505	三月十□	墨 書	"	甕	体外	"
25	SD6667	記号カ	"	須恵器	杯 A III	口内外	"
26	SD5564	雨	"	土師器	杯 B 蓋	頂内	"
27	6ABE-K区	□一令	"	須恵器	杯 B IV 蓋	頂外	"
28	6ABP-A区	キ	篋描き	"	杯 B II 蓋	頂内	"
29	6ABE-K区	井	刻線文	"	杯 B I	底外	"
30	SK8118	菜	墨 書	土師器	杯か皿	底外	"

Tab. 32 墨書・墨画・篋書・刻線文・刻印土器一覧

## iii. 篋書・刻線文土器・刻印土器 (PL. 138・Tab. 32)

篋描きの28「キ」は土器焼成前に刻んだもので、刻線文29「井」・23「×」は焼成後に針のようなもので刻む。

5の刻印「内」は縦1.2cm, 1.8cmの印面に、約3mm幅で内を書く。類例は6ALR区SD 刻 印 9620(第128次調査)にある。その場合は土師器盤の口縁部に押捺され、5の書体ときわめてよくにている。他の例は「内」印の焼印であり、6ALG区SD5788(第44次調査)から出土した曲物底板におされている。

平城宮出土の刻印土器としては、上記の例をのぞくほかはすべて須恵器で、3種11例が判明

#### 第IV章 遺物

している。「内」のほかには「宮」・「美濃」があり、それらはともに生乾き段階で押捺したものである。「美濃」は岐阜市芥見老洞1号窯から出土した土器に印されており、窯元を示すことが判明している。それに対し、「内」・「宮」は使用場所をしめすらしい。というのは、刻印のほかに一字の墨書も存在するからである。それらの分布状況を見ると、SB7802の「内」と6ADC-L区(第52次調査, 馬寮推定地)から出土した墨書「宮」をのぞくほかは、すべて東院地区に集中している。つまり「内」を仮りに官司名とすれば、東院にあった可能性が高いのである。

内のつく官司はいろいろあるが、食器の官とすれば「内膳司」に比定するのが無難であろう。宮については莫然としているため、特定官司名をきめがたい。刻印が産地で押捺されている点については、一種の注文生産品として生産したことをしめしている。

6の「大膳」は大膳職の意味であろう。第II期に北面築地回廊外に成立する大膳職から運ばれてきたものとかんがえたい。

#### iv. 人面土器 (PL. 138)

土師器甕A(口径27.2cm)の体部外面に大きく顔面を描く。目、鼻、口の部分が欠けているが、目の一部、眉、額のしわ、耳、口ひげ、もみあげがのびのびと描かれている。SD3715出土。

人面専用土器

一般的にみて、人面土器の器形は、奈良時代には壺Bの形態をとる。壺Bは人面を描くためにつくられた土師器である。すなわち、椀形ないしは皿形の型に内側から粘土をつめて底部をつくり、型をつけたままそのうえに粘土紐を巻上げて体部をつくる。調整は口縁部内外だけをヨコナデとし、胴部には粗雑なナデを行なうにとどまる例が多い。このような人面土器用土器の出現は平城宮土器Ⅲの段階に想定されている<sup>2)</sup>。人面土器祭祀の定形化と普遍化に対応しているのであろう。

SD3715出土の本例は、日常用の甕と器形・調整手法とも変らない。また、平城宮土器Ⅱに通ずるところがあるので、人面土器祭祀の定式化する以前のものであろう。

#### v 底部穿孔土器 (PL. 137)

土師器皿A(Co手法)の底部に直径5mmの円孔を多数、焼成前に外面からあけたものである。穿孔は11列で、約1.5~2cmの間隔である。1列の数は直径部分10個、側端で6個で、総数85前後で、甑に敷くすのこの可能性がある。口径19.4cm、高さ2.3cm。SD7177出土。

#### vi 陶 硯 (PL. 137, fig. 90)

台付円面硯19点、風字硯1点がある。このうちSD3715から7点、SB7802, SD5607, SD667から各1点が出土した。台付円面硯には圈足硯と蹄脚硯とがある。圈足硯には硯部の径が7.6cmのものから18.6cmのものまで各種ある。陸と海との区別が明確で、高い外堤をめぐらし、脚部に長方形の透しを多数もつものが多い。外堤外面下端には一条の突帯がある。陸の周囲に内堤をもつものもある。また外堤外面に波状文をめぐらせるものもある(Tab. 33)。

1) 岐阜市教育委員会『老洞古窯群発掘調査報告書』1981

2) 平城京左京八条三坊 SD1155, 九条大路北側溝 SD01で確認されている。前者については、

奈良国立文化財研究所編『平城京左京八条三坊発掘調査概報』1976 p.36, 後者については同研究所編『平城京九路一県道城廻り線予定地発掘調査概報1一』1981 p.24。

(番号)	(種類)	(口径)	(高さ)	(出土地点)
1	蹄脚硯	28.8cm	8.1cm	SB7802
2	圈足硯	—	—	SD3715
3	〃	16.8	—	〃
4	〃	—	—	〃
5	〃	(29.6)	11cm 以上	〃
6	〃	—	—	〃
7	〃	—	—	〃
8	蹄脚硯	(30.0)	—	〃
9	圈足硯	—	—	SD5607
10	蹄脚硯	—	—	SD6667
11	圈足硯	14.8cm	—	6ABE-K
12	〃	18.6cm	8.2cm	〃
13	〃	17.0cm	—	〃
14	蹄脚硯	—	—	〃
15	〃	—	—	〃
16	圈足硯	13.0	—	6ABE-M
17	〃	14.4	—	6ABO-E
18	〃	7.6	—	6ABO-P
19	風字硯	—	—	6ABO-E
20	圈足硯	—	—	6ABC-U

Tab. 33 陶硯の出土地点 ( )は底径

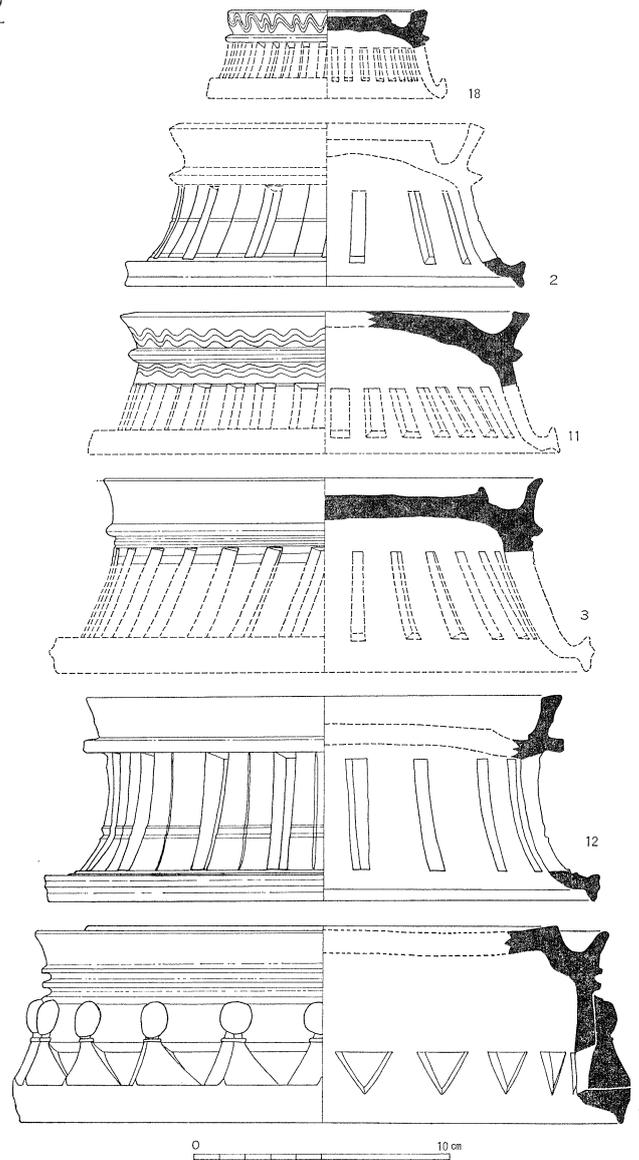


fig. 90 陶硯実測図

蹄脚硯は、硯部と脚部、台部基底を別個につくって接合するもの(蹄脚硯A)と、硯部と脚部とを連続してつくるもの(蹄脚硯B)の2種がある。うち、1は口径が30cmに近い大型に復原でき、内裏北方官衙出土のもの<sup>1)</sup>と類似している。

風字硯は小片であるが、中央に縦方向の堤をつくり、二面硯に分かっている。

#### vii 土 馬 (PL.137)

6ABP区から5点出土したが、いずれも小片である。G区の土壙から出土した土馬は、胴部と頸部に竹管文を施す珍しい例(1)。SK8212からは大量の土器に混って脚部の破片が2点出土した。他の2点はA区の包含層から出土したもので、頭部片(2)と脚部片である。頭部と足部の状況からすれば、いずれも奈良時代後半の形式にぞくしている<sup>2)</sup>。

1) 『平城宮報告VII』p. 101

2) 小笠原好彦「土馬考」『物質文化』25

viii 土 錘 (PL. 137)

SB7802 から14点の土錘が出土した。いずれも紡錘形であるが、断面は正円でなく、やや平らな一面をもつ。長さ5.1~6.6cm 最大径1.8~2.3cm で、中心に5mm 前後の円孔が通る。胎土は軟質で赤褐色を呈する。外面は磨滅が著しい。この他、SD5530, 6ABO-P 地区, 6ABP-B地区, 6ABE-K地区から各1点が出土している。

S SX7800出土の埴輪ほか (PL. 139)

SX7800 から形象埴輪・円筒埴輪が出土した。本来の位置で検出したものではなく、周溝上層の整地および古墳周辺の整地土から出土したものである。周溝内から出土した埴輪の大半は胎土・焼成・調整手法のうえで共通性を持ち、同一時期に当該古墳に使用されたものとみられる。しかし、円筒埴輪のなかには法量・胎土・焼成・調整のうえで明らかに異質の小片が少量ふくまれており、造営時の整地土とともに他地域から混入したものとおもわれる。それらについては、小片であることから説明をはぶく<sup>1)</sup>。

**蓋形埴輪**(4・5・6) 3個体出土。笠部、四方飾板の破片である。6は笠部の縁辺部の破片で側縁をヘラ描きによって縁取りし、3条1組の縦線で区画する。4は同一個体と想定される破片から復原したもの。受皿の中心に小粘塊を団子状に積み重ねて芯にし、そこに翼状の飾板を十字形に貼りつけている。四方飾板の上下には小粘土帯を貼りつけ、鱗状の飾りをつくる。板の各面をヘラ削りで調整したのち、ヘラ描き文様をいれる。すなわち、弧線で縁取りし、中央部に曲長方形を描き、2条1組の縦線で3分割し、外側の2区画に長方形の透孔をあける。胎土は黄白色で砂をほとんどふくまず、黒斑をとどめるものはない。全面に赤色顔料をぬっている。5も同様の四方飾板だが、飾板の両面と受皿の口縁部外面をハケで調整したのちに、ヘラ描き文様をいれる点となる。全面に赤色顔料をぬったあとがある。

**盾形埴輪**(7) 同一個体とおもわれる破片から合成した<sup>2)</sup>。円筒部の前面に板状の盾の形をあらわす。円筒部と左右側板の間に粘土をつめ、さらに側縁を補強するために横位の粘土紐を貼りたしている。円筒部はほとんど欠損して全容をうかがえないが、この粘土紐が円筒部の突帯につらなるとおもわれることから、盾部の背面の円筒部には2条の突帯がめぐっていたらしい。盾部前面および側端面はヘラ削りで調整し、背面は指でナデている。前面にヘラ描き文様をいれる。周縁部上面・側面を2条1組のヘラ描沈線で、下面は3本線で縁取りし、横位の線で上・中・下に区画し中央画はさらに縦線で3区画にわける。上・下の区画にはそれぞれ5個の複合鋸歯文をいれ、中央区画の左右脇区に3個の綾杉文を配する。明黄灰色で砂の少ない胎土であり、黒斑はなく、外面に赤色顔料をぬっている。

**円筒埴輪**(1) 全体を復原しうるものはない。胎土には明黄灰色で砂の少ない粘土を用い、黒斑はない。口縁部と最上段の突帯近くの破片で、突帯直下に円形の透孔をあけている。口縁端部はわずかに外反する。突帯の断面は矩形を呈する。口縁部付近はヨコナデ調整。外面は縦

1) 円筒埴輪・朝顔形埴輪の部分名称は『平城宮報告VI』p.114注にしたがう。

2) 平城宮東朝集殿下層出土の盾形埴輪を参考にして復原した。

方向のハケ目ののち、B種のヨコハケをほどこす<sup>1)</sup>。内面はヨコハケ目である。

朝顔形埴輪(2・3) 2は口縁部を欠損するが基底部から頸部まで残存する。3段からなる円筒部と狭く曲率の強い肩部とそこから立上る頸部とからなる。肩部と頸部との境には突帯がめぐる。円筒部第3段目には、斜め方向のヘラ描き沈線文が施され、第3突帯直下に2個の不整形の円形透孔をあけている。巻上げ成形で、第2段・第3段・肩部と円筒部の境、肩部と頸部との境に巻上げの単位がみとめられる。円筒部および肩部の外表面はタテハケ目ののち、B種ヨコハケで調整している。このヨコハケの工具は突帯間隔よりもせまいものである。頸部外面はタテハケ目である。内面は頸部近辺までハケ目であるが、それ以下は指でナデの調整を行っている。外面の調整後に突帯を貼りつけ、ヨコナデで調整する。第1突帯は断面を矩形にするが、他は端面がわずかにくぼんでいる。

3は2と同様の胎土だが、頸部の径が大きく大型品である口縁部および頸部内面はヨコナデし、それ以下は指でナデる。口縁部外面は斜め方向のハケ目で調整。

SX8700出土の埴輪は、B種ヨコハケで調整し、黒斑がみられないことから、窖窯で焼成したものとみられる。近辺で類似の埴輪を樹立した古墳を求めると、平塚2号墳がある<sup>2)</sup>。

須恵器 6ABR-H区の小ピットから完形の須恵器の杯身2点が出土している 須 恵 器 (fig. 91)。1は、口径10.0cm、器高4.8cm、2は、口径10.1cm、器高4.9cmを測る。いずれも底部をロクロヘラ削りで調整する。2の底部から体部には、焼成後に施された数条の細い沈線が認められる。

このほかに古墳時代の遺物として、6ABC-V区から、馬形の顔面とおもわれる形象埴輪の破片が1点出土している。

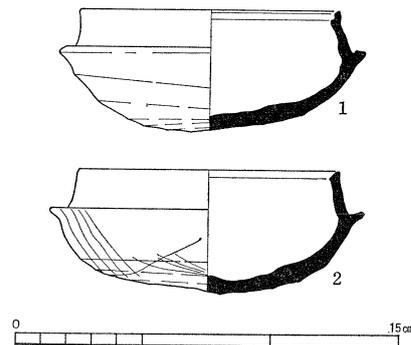


fig. 91 古墳時代須恵器

1) 川西宏幸のヨコハケ手法の分類によっている。川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』

64-2 p. 77・98

2) 『平城宮報告VI』p. 123~125, PL. 109

## 5 木製品

木製品は溝SD3715(6ABS, 6ABD区), SD3765(6ABS-E地区), SD3784(6ABR-P地区), SD5505(6ABE-M地区), SD5564(6ABE-M地区), 土壙SK3730(6ABE-K地区), SK5535(6ABE-P地区), 塀SA3777の柱堀形(6ABE-K地区), 建物SB7802の柱抜取痕跡(6ABR-H地区), 井戸SE9210(6ABQ-A地区)から出土した。そのうちSB7802とSD3715からは多数の木製品を検出したが、他の遺構では数点の出土にとどまる。以下遺構ごとに木製品をのべよう<sup>1)</sup>。

### A SB7802出土の木製品 (PL. 140~143)

東楼SB7802の柱抜取痕跡の埋土から92点あまりの木製品が発見された。それらには祭祀具、服飾具、食膳具、工具などに分類できるもののほか、種々の加工をほどこした木製品をふくむ。ほかに建築雛形部材があるが、それについては部材の項でふれた。木製品は16個の柱抜取痕跡のうち、11個から出土したもののだが、柱穴によって出土量の多寡がある。

#### i 祭祀具 (PL. 140)

a 人形(1・2) 1は切り込みをいれて頭・胴・腕・脚をあらわすが、表裏に墨描きした痕跡はない。両面に削りの調整を行ない、頭部を圭頭にかたどり、腕を削り込み股のえぐりをいれる。ただし、いまは胴以下の半身と刀身状の脚部の先端を欠いている。ヒノキ板目材。長さ17.5cm, 幅2.2cm, 厚さ0.3cm。2も同じような形をとるほぼ完形品である。頭部に被り物と両耳を切りぬく点が1とことなる。頭部に幞頭・耳・眉・眼・鼻・顎髭を墨で描き、胴と腕との間に左右とも3~4本の墨線をひき、その下部に臍と陰毛を描く。両脚にまたがる部分に文字の痕跡がある。これは股を切りぬくまえに書いたもので、欠失部があるが、「複」の異体字である「禰」に読めなくもない。反対の面には幞頭の後姿を墨描きするにとどまる。ヒノキ板目材。長さ15.7cm, 幅2.7cm, 頭部の厚さ0.5~0.4cm, 胴部の厚さ0.3cm。2の頭部が写実的であるのに対して、胴以下の描写が簡略なことからすれば裸形をあらわすものとみられる。使用時には紙や布の衣服をきせたのであろうか。

b 鳥形(3・4) 3は小さな薄板で鳥の頭をかたどったもの。両面に嘴・目・頸部の羽毛を墨描きする。猛禽の類であろう。長方形の頸以下に墨痕を欠くので、この部分を、別材でつくる胴体に差込むのであろう。ヒノキ斜柱材。長さ5.8cm, 幅1.4cm, 厚さ0.2~0.1cm。4は鳥の側面形をかたどる。尾部は欠損している。小片で必ずしも鳥とはいえないかもしれないが、一応この項にいれておく。ヒノキ板目材。長さ4.8cm, 幅1.1cm, 厚さ0.2~0.1cm。

c 刀形(5~8) 5は細板の一端を刀形につくる。柄と刀身の区別は不明瞭で、刃先は両面から削り込んで鋭利である。ヒノキ柱目材。長さ13.1cm, 幅0.9cm, 厚さ0.3~0.2cm。6は柄と刀身を区別する。刀身部は柄よりも薄く、切先に向って先細りとなり鉄刀子の形を忠実に

1) 木製品の寸法はとくに説明しない限り、( ) らわす。材種の同定は光谷拓実の鑑定によった。  
は破損状態での残存値, [ ]は推定復原値をあ

## 5 木製品

模している。ヒノキ板目材。長さ12.8cm, 幅1.0cm, 柄の厚さ0.2cm。7は割り裂き面をとどめる粗製品で, 柄と刀身の区別もなく刃の削りかたも粗い。スギ柁目材。長さ13.1cm, 幅1.2cm, 厚さ0.3cm。8も粗製品で, 片面から削って刃をつけたもの。柄と刀身の区別がなく, 両端を欠損している。ヒノキ柁目材。長さ(12.8cm), 幅1.4cm, 厚さ0.5cm。

d 鎌形(9) 9は断面が凸レンズ状の先細りの身部に断面半円形の細長い茎を削りだしたもので, 両端を欠いている。鎌をかたどったものかとおもわれる。ヒノキ柁目材。長さ(10.1cm), 幅1.1cm。 やじりがた

### ii 服飾具 (PL. 140)

a 桧扇(10, 11) 10は薄割り板で仕上げた白木の桧扇。4枚分の骨がある。先端を斜めに ひおうぎ 截ちおとし, 4枚をならべると先縁はほぼ弧形に連続する。下半部は撓状に幅を狭め, 下端を直線に截ち両角をおとし, その上方に要孔をあける。4枚とも下端から同じ長さの上半部に1対の小円孔をあけ綴目とする。ヒノキ糸柁材。長さ30.4cm~24.8cm, 上部幅30cm, 下部幅1.8cm, 厚さ0.16~0.11cm。さき出土したSK820の完形品<sup>1)</sup>によると, 桧扇は中央の一枚をはさんで左右に長さを減じる5枚の骨をおくが, 綴目からすると最短の一枚は端骨にあたり, SK820の例のように11枚の骨を想定することが可能である。11は要孔をとどめる桧扇下半部の残欠。10よりも厚手である。長さ11.6cm, 幅2.1cm, 厚さ0.18cm。

b 横櫛 小片が腐蝕が著しく, 歯を欠落している。背は直線を呈し, 断面はわずかに丸味をおびた平面に近い形態をとる。カナメモチ板目材。長さ(6.5cm), 幅(1.7cm), 厚さ0.7cm。

### iii 食膳具 (PL. 141)

a 匙(12) 細い丸棒状の柄と中央の窪んだ楕円形の身からなり, スプーン形になる。身の さじ 先縁部を欠損するが, 全形をうかがうことは可能である。ヒノキ板目材。長さ(12.3cm), 柄の長さ6.0cm, 同径0.5cm, 身の幅3.5cm。

b 匙形木製品(13~17) 身の先端を直線にするA型式が2点(13, 14)ある。13は身の先端付近を薄く削り, 一面がわずかに弧面をなす。柄を厚くし, 先端を不整円形にかたどる。ヒノキ柁目材。長さ12.0cm, 身の長さ26.0cm, 身幅2.5cm, 同厚さ0.2~0.1cm, 柄幅0.7cm, 同厚0.4cm。14は身が長く柄幅が広い。身の先縁は片側からそぎおとす。ヒノキ柁目材。長さ11.6cm, 身の長さ3.4cm, 同幅1.9cm, 同厚さ0.2cm, 柄の幅0.7cm, 同厚さ0.2cm。身の先縁を半円にするB型式は1点(15)あり, 柄の大半を折損している。ヒノキ柁目材。長さ(8.1cm), 身の長さ3.9cm, 同幅3.0cm, 同厚さ0.3~0.2cm。身の先縁が剣先状に尖るC型式が2点(16, 17)ある。16は粗雑なつくりで, 柄が短く端を斜めに截ちおとす。スギ板目材。長さ10.8cm, 身幅3.2cm, 同厚さ0.2cm, 柄幅1.4cm, 同厚さ0.6cm。17は全体を厚手につくるが身の先縁をうすくし, 柄端を欠く。ヒノキ柁目材。長さ12.0cm, 身幅2.6cm, 同厚さ0.5~0.2cm, 柄幅1.2cm, 同厚さ0.6cm。

c 杓子形木製品(18~25) 扁平な板材から杓子の形をかたどったもので, 8点出土している。

1) 『平城宮報告Ⅶ』p. 112, PL. 63

しやもじ 身部の形状によって3型式に区分する。A型式は身の幅と身の長さ(柄から身に移行する折曲点から先縁までの長さ)が1:2~1:1.5前後のもの。18~21がこの型式にぞくする。18は完形品で幅広の柄と長方形にちかい身を削りだす。身の木表面を平滑にととのえ、木裏面では両側縁をうすくし、表裏を区別している。先縁は直線を呈し刃のように鋭くする。ヒキノ板目材。19は柄の下部から身部の部分を欠くがこの型式とみられる。ヒノキ板目材。20は身の先縁の角に丸味をもたせたもの。柄と身の一部が損傷しているが、この型式とみられる。スギ板目材。21は身と柄の折曲点で左右でことなり、柄を欠くが、この型式にぞくする。厚手で、直線の先縁を鋭くする。スギ板目材。B型式は身の幅が広いもので、長さとの割合が1:1前後のものである。22・23がこの型式にぞくする。22は完形品で、方形にちかい身部に短い柄をつくりだす。先縁は直線を呈し刃のように鋭くする。ヒノキ板目材。23は先縁を弧形につくったもの。身の一面が焦げており、柄端を欠いている。ヒノキ板目材。C型式は身の幅の狭いもので、長さとの割合が1:3前後のものである。24・25がこの型式にぞくする。24は先縁を半円形にかたどり、左右の縁とともに刃状に薄くする。柄は欠損している。スギ板目材。25は身の一辺を欠くが、削りなおして再利用したもの。先縁は本来直線であったのが、使用によって角がとれている。ヒノキ板目材。

型式	番号	(全長)	(身長)	(身幅)	(身厚)	(柄幅)	(柄厚)
		cm	cm	cm	cm	cm	cm
A	18	31.6	11.2	5.8	0.5	2.6	0.5
	19	(24.1)	—	[6.2]	0.4	2.4	0.6
	20	(58.5)	21.3	[14.5]	0.6	5.0	0.5
	21	(18.3)	11.2	7.5	0.8	3.7	(0.7)
B	22	51.0	29.1	25.2	1.0	4.2	0.6
	23	(32.5)	16.1	[17.4]	0.5	3.3	0.5
C	24	(17.8)	12.2	3.6~ 2.8	0.8~ 0.3	1.3	0.8
	25	(23.1)	14.8	(2.6)	1.3	1.4	0.5

Tab. 34 SB7802出土杓子形木製品の寸法

d 箸(26) 断面が4角形あるいは円形にちかい細棒が10数点出土した。従来から箸とかんがえているものである。完形品が7点あるが、径0.6~0.3cm、長さ22.2~13.7cmと不ぞろいである。ヒノキ材(PL. 142)。

iv 容器 (PL. 142, fig. 92)

a 蓋形木板(27) 不整円形の板状品で、一面の周縁に面取りをほどこす。現状では約半分を失うが、土器などの蓋に用いたものであろう。ヒノキ板目材。径(10.2cm)、厚さ0.7cm。

b 曲物容器(28~34) 完形品はなく、蓋板1点、底板6点とともに側板の破片があった。

まげもの 底板(28~33)はヒノキの板目材を円形にかたどったもので、周側面に側板を接合した木釘あるいは木釘孔をとどめる。完形品2点と破片が4点だが、さきに分類した型式にしたがうと、直径18.0~19.0cmのA型式2点(28・29)、直径16.6cm~17.3cmのB型式2点(30・31)、直径12.0~14.2cmのC型式1点(32)となる。直径8.1cmに復原できる33はC型式になる可能性もあるが、ここでは型式分類を保留しておく。

蓋板(34)は一部を欠き腐蝕がすすむが、全形をうかがうことは可能である。上面を木表とする木取りで、側板をとめる一対の綴孔を4個所にとどめるが、本来は5個所であろう。綴孔位置に円形の刻線が引かれている。C型式にぞくする。ヒノキ板目材。外径21.9cm、内径(側板位置の直径)19.0cm、厚さ0.7cm。

1) 『平城宮報告Ⅶ』p. 121

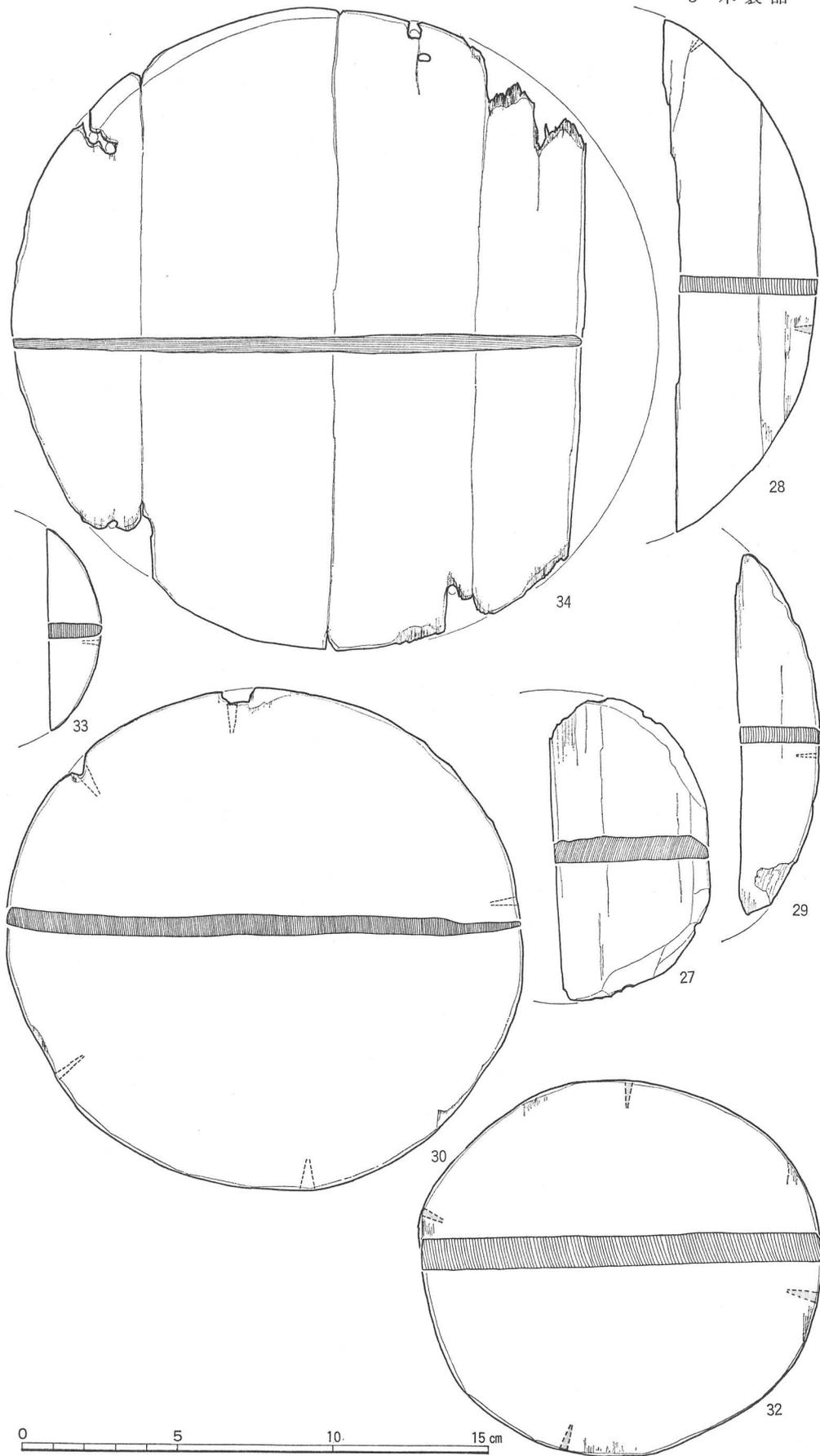


fig. 92 SB7802出土の曲物底板

第IV章 遺物

型式	(番号)	(直径)	(厚さ)	(釘穴数)	(材質)	(木取)
A	28	[19.6]	0.5	(2)	ヒノキ	柁目
	29	[18.0]	0.5	(2)	ヒノキ	柁目
B	30	16.7	0.6	4	ヒノキ	柁目
	31	16.5	0.7	(2)	ヒノキ	柁目
C	32	12.6	1.0	4	ヒノキ	柁目
	33	[8.1]	0.5	(1)	ヒノキ	柁目

Tab. 35 SB7802出土曲物底板の寸法

側板は多数の小片であり、もとの高さがわかる破片はない。厚さ0.5~0.3cmのヒノキ板(板目, 柁目ともに存在)で、内面に縦方向や斜方向の刻線(シラビキ)をきざんでいる。また、曲物をとじた樺皮紐の断片も少量あった。C折敷(35・36) 方形, 長方形, 楕円形などの底板に丈の低い側板を綴じつけたもの。しかし、側板が高ければ折櫃になるので、底板だ

おしき けでは折敷に限定できない。ここではそれを承知のうえ一応折敷に分類する。35は底板の残片である。木口部分を弧形に削り、1対の綴孔と樺皮紐をとどめる。紐の残存状況から木表を上面に使ったことがわかる。ヒノキ板目材。長さ(22.0cm), 幅(3.3cm), 厚さ0.8cm。36は側板の破片である。底板に固定した綴孔が下辺寄りにのこる。1個には樺皮紐がのこり、もう1個にはV字形のくぼみを彫りこんだのち穿孔した痕跡がある。2孔の間隔は24cmで、そのほぼ中央で側板を綴合せ。綴じ合せには円孔を縦列にいくつかがち、樺皮をくぐらせて縫いつけるが、いまは樺皮の残片をとどめるのみである。ヒノキ板目材。長さ(31.9cm), 高さ(3.0~2.5cm), 厚さ0.4~0.3cm。

d 盤(37) 剝物盤の破片である。底部にくらべて口縁部が厚く、その端面が幅広の平坦面を呈する。腐蝕が著しく加工痕跡をとどめないが、口縁端の幅が不均一なのでロクロ挽きでないことがわかる。残存の円弧からすると、直径30cm程度の盤が想定できる。スギ柁目材。長さ(20.7cm), 幅(5.6cm), 器高1.7cm。

角 鉢 e 角鉢(38) 剝物鉢の破片である。断面が梯形を呈する方形の浅鉢で、木裏を上面にする横木取りでつくる。外面の口縁部はやや垂直に立上ったのち、斜めに底部に移行する。内面は器壁を斜めに削り込み、底は平坦である。全体に粗い加工で、内面には鑿の刃痕をとどめる。木口方向の一角に突起をのこし、その上面から孔をあけ、なかに樺皮の残片がのこる。樺皮を巻いた把手をつけたものとおもわれる。一般的に長方形の器を削りぬく場合、長辺を木理方向にあてることからすれば、この器の失われた木口の辺は木理方向の長さを超えることはない。そして、うしなわれたもう一方の木口角に突起を想定するならば、対角線の位置に把手がついていたことになる。ヒノキ材。全長19.0cm, 幅(8.0cm), 高さ4.4cm, 把手突起の長さ2.9cm, 同幅3.2cm, 同厚さ1.3cm。

v 工 具 (PL. 142, 143)

39は工具鞘の断片とおもわれるものである。断面が弧形を呈する板状品で、外面の一端を削って丸味をもたす。内面には断面弧形の袂りがみとめられる。こうしたことから、刀子などの合鞘に推測するのであるが、二次的な押圧のためかなり変形しており、断言はできない。スギ板目材。長さ(10.8cm), 幅1.8cm, 厚さ0.3cm。40は楔である。樹皮のついた丸木の一端を直截し、他端は両側から斜めに削って斧頭形につくる。先端は欠損し、基端の周縁には小刻みの面取りがあり平坦面には磨滅痕跡がある。アカガシ亜属材。長さ15.8cm, 径4.0cm。41は小札形で一方を薄くする。小型の楔か。ヒノキ柁目板。長さ5.1cm, 幅3.3cm, 厚さ0.9cm。

## vi その他の木製品 (PL. 143, fig. 93)

a 有孔小円板(45) 板を円形にかたどり、刃物によって中心に孔をあける。木裏面には削り調整があるが、木表面は割り面のままである。紡錘車として使用することは可能であろう。ヒノキ板目材。径4.1cm, 厚さ0.5cm。

b 刻みのある木製品(46・47) 46・47は細板の両面中央を鎚状に厚くし、両側縁に連続する鋸歯状の刻みをいれたものの断片である。46はヒノキ材。長さ(14.2cm), 幅1.8cm, 厚さ0.6cm。細板の一端もしくは両側縁に鋸歯状の連続刻み目をいれたものは、古墳時代以降の遺跡からしばしば発見される。いまのところ用途不明。

鋸歯状の刻み

c フォーク形木製品(48) 48は断面不整形の丸棒の先端を太くし、先縁をU字状に挟んで2本の歯をつくる。この部分は下面を先端に向けて斜めに削り、歯先を細く鋭くしあげる。ヒノキ材。長さ13.2cm, 径1.3~0.9cm, 歯の長さ1.5cm, 同間隔0.9cm。

d 柄状木製品(49・50) 49は棒材の両端を断面長方形に、中央部分の幅を狭くして断面円形にしたもの。一端から1.9cmに径0.5cmの円孔をあけ、他端は欠失するが、折損面の中央とやや片寄った位置に径0.2cm前後の貫通孔の痕跡をとどめる。柄の断片であろうか。スギ材。長さ(12.2cm), 径2.3cm。50は板目材を加工した太い丸材で、木口の両端は鋸で截ちおとし、木口面の周縁に粗い面取りがある。木口面に茎孔がないが、鑿などの工具の柄の未製品かもしれない。ヒノキ材。長さ8.8cm, 直径3.8cm。

e 板状木製品(43・51~57) 51は薄い細板の両端を針状に削ったもの。単なる削り屑かもしれない。スギ板目材。長さ6.9cm, 幅0.8cm, 厚さ0.3cm。52・53は細板に梯形の切り欠きをいれたものである。52はヒノキ板目材。長さ(15.6cm), 幅3.9cm, 厚さ0.9cm。53はスギ板目材。長さ(28.4cm), 幅(3.8cm), 厚さ, 0.8cm。54・55は孔をあけた板。54は一端を円弧状に削り、他端に弧形の挟りをいれた板片である。この円弧線の内側に小孔を錐であけている。ヒノキ板目材。長さ(15.2cm), 幅(2.4cm), 厚さ0.8cm, 孔径0.3cm。55は凸レンズ状にちかい断面をもつ板材に大きい孔をあけている。全体に腐蝕が進んでいるが、孔は刃物で挟ったようである。スギ板目材。長さ(17.9cm), 幅6.3cm, 厚さ0.8cm, 孔径(2.3cm)。

板状木製品

56・57は長方形の板である。56は木口にあたる一方の短辺に出柄のような突起をつくっている。ヒノキ板目材。長さ10.6cm, 幅8.8cm, 厚さ0.9cm。57は中央部分を厚くし、両木口を弧形に削る。一木口に向って両面から斜めにそぎおとし、断面が三角形を呈する部分がある。ヒノキ板目材。長さ9.5cm, 幅3.3cm, 厚さ0.9cm。43は切込みのある板片で、割り裂き面のままである。

f 棒状木製品(58~81) ヒノキ, スギの割材を細い棒状に加工したものが24点ある。58~68はいずれも断面が方形あるいはそれに近い角棒の先端を串状に尖らせたものである。大小さまざまな大きさで、先端も針形、篋形を呈するもののほか鋭利にしないものもふくむ。69は面取りのある角棒の半分を扁平にしたものである。70~74は棒の一端に切欠きなどの加工をとどめるものである。70は一端を楕円形、他端を円形断面とする丸棒で、楕円形の方の一端に両側から切込をいれたもの。71は丸棒を四ツ割りにした棒の一端にV字形の挟りをいれたもの。他端は刃物で切込みをいれて折取っているので、本来は丸棒にいれた挟りとおもわれる。72は丸棒

棒状木製品

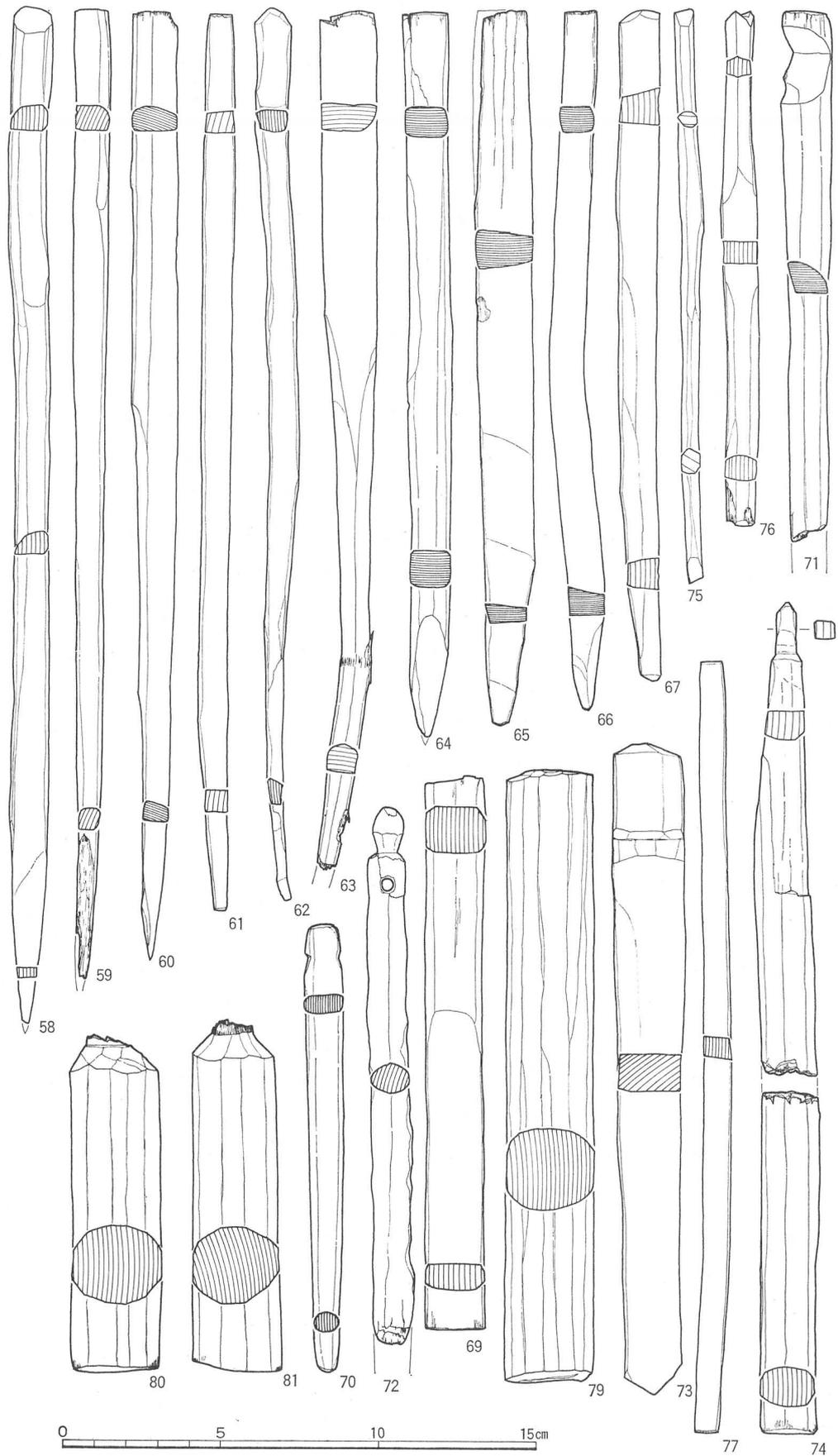


fig. 93 SB7802出土の棒状木製品

5 木製品

の先端を乳頭状に削りだし、その下部に孔をあけている。73は角棒の一端にV字形の袢りをいれる。74は不整形の角棒の一方を次第に細くし、先端に小さな角柱を削りだしたものの。なお角柱の頭は三角形を呈する。

75~78は顕著な加工をほどこさない棒。75は周囲を粗く削って丸棒風に仕上げ、両端は斜めに削りおとす。76は中央部を断面四角に残し、その両端に向けて削り込んで細くしている。一方の先端にはV字状の袢り込みがある。77はただの角棒。78は俵箸のように中央部を太く、両端に向けて次第に細くする大型の丸棒。79~81は割材の表面をていねいに削ってつくる棒状品の切屑。79には鋸で切断した木口面が一端にのこる。80・81は木口いずれもの一端を直截し、他端にはV字状溝をいれて折取った痕跡がある。

g 木製ヒゴ(82) 割材を削って断面方形のヒゴ状にととのえたもの。20数点出土しているが、大半は折損した小片で完形品は4点にすぎない。ヒノキ材。長さ18.6~18.1cm, 径0.25~0.15cm。

番号	(長さ) (最大幅) (材質)	
	cm	cm
58	33.3	1.2 スギ
59	(30.1)	1.1 スギ
60	30.2	1.9 スギ
61	28.0	1.0 ヒノキ
62	28.4	1.0 ヒノキ
63	(27.3)	1.7 スギ
64	23.1	1.4 スギ
65	22.6	1.8 ヒノキ
66	22.2	0.8 ヒノキ
67	21.3	1.3 ヒノキ
68	(19.2)	1.5 スギ
69	17.6	1.9 スギ
70	14.2	1.2 ヒノキ
71	(16.9)	(1.6) ヒノキ
72	(17.0)	1.3 ヒノキ
73	20.7	2.2 スギ
74	(25.9)	1.8 スギ
75	18.2	0.8 ヒノキ
76	16.3	1.1 ヒノキ
77	24.5	1.3 ヒノキ
78	(51.2)	1.9 ヒノキ
79	19.5	2.7 ヒノキ
80	11.1	2.7~2.4 スギ
81	10.7	2.8~2.5 ヒノキ

木のヒゴ

Tab. 36

SB7802出土棒状木製品の寸法

B SD3715出土の木製品 (PL. 144~146)

南北溝SD3715からは祭祀具、紡織具、食膳具、工具などのほか、種々の加工をほどこした木製品が56点出土した。

i 祭祀具 (PL. 145)

a 人形(1・2) 1は非常にうすい板でつくった人形。頭頂部は直線状で両角をおとす。頭部は上方から大きく削りこみ、両肩は水平に近くつくる、いわゆる怒り肩を呈す。半身を欠くため全容をしりえないが、眉・目・鼻・口髭・口をそれぞれ短い墨線で表現している。ヒノキ板目材。長さ16.8cm, 幅(1.4cm), 厚さ0.13cm。2は横向の人形。片面にはていねいな削り調整を施すが、一方の面は割り面をとどめる。頭部は後頭部側辺を2段に削って尖らせている。この部分には墨痕が表裏両面にうすくのこっており、被り物を表わしていたことがわかる。顔面の前面にあたる側辺は鼻から口にかけての部分が梯形に突出する。背部側辺をゆるやかなV字形に袢り、下端は両側から斜めに削りおとして尖らせる。ヒノキ板目材。長さ14.9cm, 幅2.0cm, 厚さ0.5cm。

ひとがた

b 刀形(3・4) 3は刀子をかたどったもので、木理に影響されて中央で屈曲している。刀身と柄はほぼ同長で、刀身の先端寄り2分の1の両側縁を削って刃をつくる。ヒノキ板目材。長さ15.1cm, 幅1.2cm, 柄の厚さ0.5cm, 刀身の厚さ0.4cm。4は刀身の先端を剣先状につ

かたながた

#### 第IV章 遺物

くり、両側縁とも鋭利にする。柄は全長の約3分の1で、柄端は片面から斜めにそぎおとす。ヒノキ柀目材。長さ15.6cm、幅1.1cm、柄の厚さ0.5cm、刀身の厚さ0.3~0.1cm。

#### ii 服飾具 (PL. 144)

a 堅櫛(5) 縦長の板材の木口の両端に鋸で歯を挽きだし、中央の両側辺を弧状に扶ってたてぐし握り部分とした両歯の櫛である。両歯のうち一方を太く長く、他方をうすく短くつくる。歯の切通し線は両方とも直径9.4cmの正円弧を刻んでおり、歯の先端は両端とも剣先状に尖る。短い歯の方は先端を一直線にそろえており、一部欠失するが幅6.8cmに復原でき、3cm幅につき18本の歯を挽きだしている。歯の長さは中央で2.2cm、両端で1.4cmである。長い方の歯は左右とも両端を欠き、現状では10本の歯がのこるが、本来は13本あったと推測される。中央7本は先端をそろえ、両端各3本は順次長さを減じていたとかがえられる。歯の長さは中央のもので7.7cmある。歯の密度は3cmにつき6本で、鋸で挽きだしたのち削りをくわえて稜をおとしている。細い歯の切通し線から1.8cm握りよりの中央に直径0.5cmの円孔をあけている。モツコク斜柀材。長さ20.4cm、握り部分中央の幅3.8cm、厚さ1.1cm。このような堅櫛の出土例はほかになく、きわめて珍しいものである。

b 横櫛(6) ツゲの板目材に鋸で細い歯を挽きだした横櫛の小片。背はなだらかな円弧をえがき、断面は半円形を呈する。歯の切通し線は背にそろえた曲線をえがく。歯の密度は3cmにつき17本(推定)である。長さ(3.2cm)、幅(3.3cm)、厚さ0.7cm。

#### iii 紡織具 (PL. 145)

紡織具には糸柀(糸巻)の部品がある。横木は2点で、柀木は1点である。7・8は4本の柀木いとわくで構成するA型式の糸柀の横木であるが、一個体の製品ではない。中央に幅1.9cmの十字合欠きの仕口をつくり、合欠き部分の中心に糸柀の軸棒を通す径0.6cmの円孔をあける。両端に向けて撓状に削り、先端付近を丸棒状に削りだして柀木と接合する柄とする。7・8ともにヒノキ柀目材。7は長さ9.3cm、幅1.8cm、厚さ0.6cm。8は長さ8.1cm幅2.1cm、厚さ0.8cm。9は糸柀の柀木。腐蝕が著しく、中央で折れて2分している。断面は半截楕円形で、片側2個所を梯形に広くし、横木を受ける柄穴をあける。柄穴は13.3cmの間隔をおき直径0.7cm、深さ1.1cm。ヒノキ材。現存長24.8cmなので、長さ24cm前後の糸柀A<sub>2</sub>型式にあたる。柄穴部分の幅1.4cm。厚さ1.1cm。

#### iv 食膳具 (PL. 146)

食膳具には杓子形木製品(10)がある。身の長さ<sup>1)</sup>と身の幅の比がおよそ2:1であり、さきにしやくしのべた分類のA型式にあたる。身はやや先細りで、先端を半円形にかたどる。柄元から身の先端に向けて片面を削りこんで次第にうすくしており、身はわずかに内反りする。柄の断面は長方形で稜角を丸くおとしている。ヒノキ柀目材。長さ31.0cm、身の長さ9.7cm、同最大幅4.3cm、同厚さ0.8~0.2cm、柄の幅2.1cm、同幅0.8cm。

1) さきに、柀木を支える横木が十字形に組合せ分類とした。『平城宮報告Ⅶ』p. 116  
るものをA型式、一枚板の横木のことをB型式

## v 容器 (PL. 145, fig. 94)

a 蓋形木板 (11) 円形の板状品で、一面の周縁を斜めに削りおとして縁端を鋭くする。容器の蓋に用いたものであろう。スギ板目材。直径〔17.8cm〕、厚さ0.6cm。

b 曲物容器 (12~16) 身の完形品1点と底板4点がある。12は直径16.4cmの円形の底板に高さ5.9cmの側板をつける。側板をつけた容器の外径は17.5cmである。底板の周側面の5ヶ所に木釘を打ち込んで側板を固定する。側板

の樺皮縫いは、側板の上端を小さく切り欠いて、3段くぐり1列で縫いつけ、さらに横へ一段引きだして縫いおわる。樺皮の幅は0.3cm。側板は両端の厚さ・幅を次第に減じ、

番号	(直径)	(厚さ)	(釘穴数)	(材質)	(木取)
12	16.4 <sup>cm</sup>	0.7 <sup>cm</sup>	5	ヒノキ	柾目
13	[25.6]	0.8	(2)	ヒノキ	板目
14	[9.9]	0.5	(0)	ヒノキ	柾目
15	[15.2]	0.6	(0)	ヒノキ	板目
16	[23.8]	0.6	(0)	ヒノキ	板目

Tab. 37 SD3715出土曲物底板の寸法

端部であるマチの幅は5.0cmである。底板は柾目材で厚さ0.7cm。側板は厚さ0.4cmの板

目薄板で、内面に斜格子状の刻線(シラビキ)をほどこす。ヒノキ材。

13は直径25.6cmの底板の一部で、垂直に截った周側面の2ヶ所に木釘痕をとどめている。

14~16は円形板の断片で、周側面は垂直に削りおとしている。小片のため木釘痕をのこさないが、曲物の底板であらう。

c 折敷 (17) 長円形の折敷床板の残欠。表面は削って平滑にしあげており、側板を固定するための綴じ孔が2ヶ所にのこる。その間隔は28cmあり、うち1ヶ所は2孔を1対としたもので、他の1ヶ所は折損しているため1孔のみをとどめる。ヒノキ板目材。長さ(31.9cm)、同幅(3.0cm)、厚さ0.8cm。

d 盤 (18) スギ柾目材を加工した刳物の盤。表面の保存状態はきわめて良く、およそ半分を欠失するが、直径26cm前後の円形に復原できる。しかし正円ではなく多少不整形である。全面を鉋様の刃物で削りあるいは削って成形している。削りの幅は最大3cmをはかり、底部外面では年輪方向に一気に削っている。底部に比べて口縁部は厚く、口縁端部は幅広の水平面につくる。この平坦面の幅は一樣でなく、2.0~0.9cmの変化がある。底部内面は使用のために成形痕が磨滅しており、表面には鋭利な刃先による直線状の使用痕が無数に残る。底部外面には全面に墨書がみられる。口径25.2~25.5cm、器高1.5cm、底部外径約23.3cm。墨書については木簡の項でのべた(p. 104)。

## vi 工具 (PL. 146)

a 錐柄 (19) 柄元の一部を欠くのみではほぼ完存しているが、錐先はのこっていない<sup>1)</sup>。割きりのえ材を丸棒状につくり、木口の両端は鋸で直截している。柄元の木口面に茎の孔があり、一辺0.3cmの不整形を呈し、深さは2.7cmである。

茎孔の内面は炭化しており、鉄錐の茎を焼き込んで挿入したことがわかる。ヒノキ材。長さ29.6cm、直径は柄元で1.2cm、柄尻で1.0cm。

1) 錐柄などの工具柄については『平城宮報告IX』p.72~73を参照。

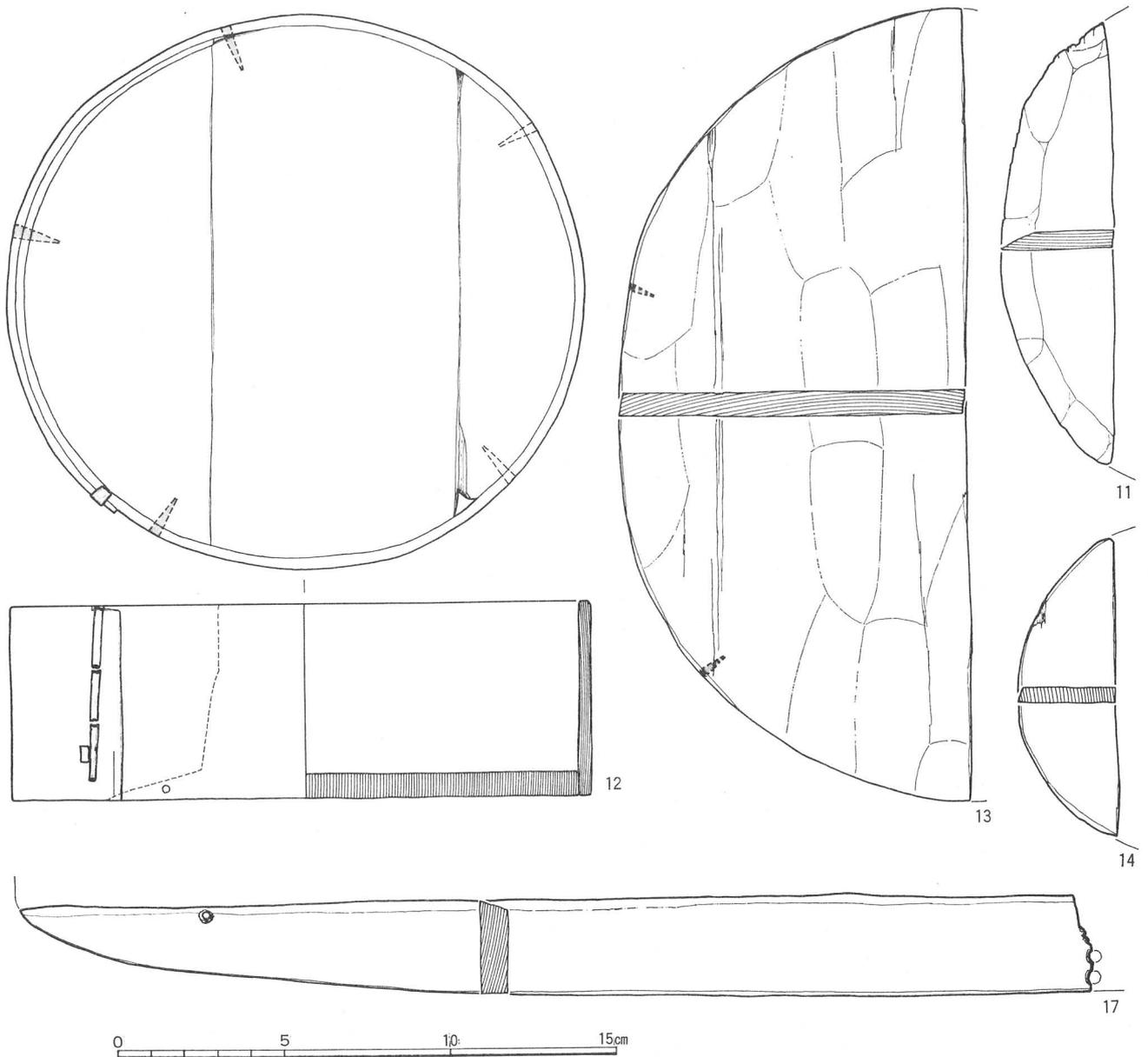


fig. 94 SD3715出土の曲物・折敷

b 楔 (20・21) 20は心持の細い丸材を加工したもので一部に樹皮をとどめている。一部のくさび木口の周縁は斜めに削っており、木口面は磨滅して丸味をおびる。他端は斜めに削りこみうすくつくる。先端は折損し、損傷面は磨滅している。材を大割りにするときの割楔に使用したものであろう。ミズキ科材?。長さ22.4cm, 径3.1×2.4cm, 先端の幅2.5cm, 同厚さ0.8cm。21は小札状の楔で、一端をうすく狭くつくったものである。スギ板目材。長さ8.8cm, 幅3.1cm, 厚さ0.8cm。

vii その他の木製品 (PL. 146, fig. 95)

a 横槌 (22) 直径7cm程の心持丸太材を加工したものの。材の半分を削り残して頭部とよこづちし、以下の部分を削って柄にする。頭部の先端は周縁を粗く削りおとして円頭ぎみにつくる。

5 木製品

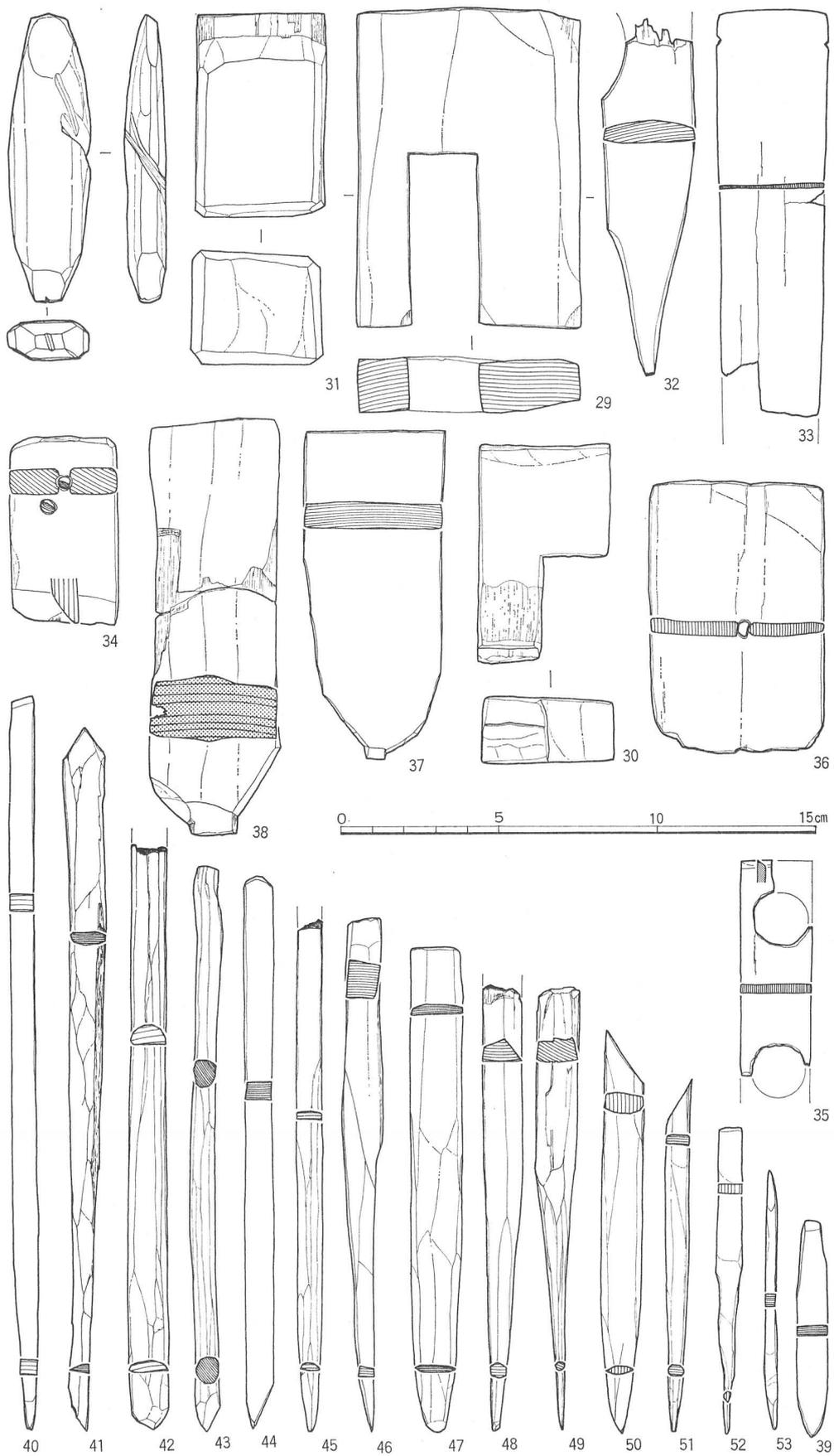


fig. 95 SD3715出土の木製品

#### 第IV章 遺 物

表面が著しく腐蝕しているため使用痕跡は明瞭でないが、頭部側面が若干くぼんでいることから横槌として使用したことがわかる。柄は柄元をのこす。モミ材。長さ(17.5cm)、頭部の長さ14.5cm、同径7.0~6.0cm、柄の径2.4cm。

b 有孔小円板(23・24) 板材を円形にかたどり中央に円孔をあけたもの。表面は平滑に削るが、周側面の削りは粗い。ヒノキ板目材。23・24ともに半割の材からつくり、円板の直径6.2cm、円孔の直径1.3cmに復原できる。厚さは23が0.6cm、24が0.7cm。

c 栓形木製品(25・26) やや下すばまりの短い円柱形の材で、一端の木口面にロクロ加工痕をとどめる。木心を避けた広葉樹材を用い、側面を縦方向に細く削る。狭い方の木口は鋸で切断している。他方の木口はロクロ回転により切断しており、凸面状の旋削面にはピッチ約1mmの縞状刃痕がみられ、中央に臍状突起がのこる。25はサクラ属材。高さ4.2cm、上端径4.0cm、下端3.6cm、突起の高さ0.5cm、同径0.7cm。26はサカキ材。高さ4.2cm、上端4.0cm、下端径3.4cm、突起は基部をのこすのみで径0.8cm。これらはロクロ旋削工程で生じた残材とするよりも、須恵器の壺の栓として使用したものとおもわれる。

d 柄のある部材(27・28) 27は断面が六角形を呈する、先細りに加工した角材で、両端に柄状突起がつく。板目材を用いており、木表側を断面梯形に、木裏側を凹面につくる。一端の柄は根元の3方に平面をつくる三方胴付柄で、他端は木表側を半欠きにする片柄であるが、柄ではなく、合い欠き仕口の可能性もある。両端とも先端を欠く。アカガシ亜属材。長さ(23.5cm)、幅と厚さは最大部分で5.0×4.4cm、最小部分で3.3×2.7cm、柄の出を除いた部分の長さ19.2cm。28は板材を釣鐘形にかたどったもので、狭い方の木口面に柄を削りだす。柄は根元の2方に平面をつくる二方胴付柄。他方の木口端は欠失しているが、材の中程から先端にかけて、材の厚さの半分を欠き取り、合い欠きの仕口をつくる。仕口の中央には直径2.7cmの円孔があく。長さ(17.2cm)、幅6.3~4.1cm、厚さ1.9cm、柄の出2.8cm、同幅1.4cm。

e 切り欠きのある部材(29・30) 29は長方形の板材の木口の一端を切り欠いて凹形にかたどる。表面は鉋で削っている。ヒノキ板目材。長さ10.1cm、幅7.1cm、厚さ1.7~1.0cm。30は直方体の材の一角を切り欠いてL字形につくったもの。ヒノキ板目材。長さ6.9cm、幅4.1cm、厚さ2.0cm。

f その他の部材(31) 直方体の角材で表面は平滑に削り、稜に面取を施す。一方の木口面の一辺に小さな段がある。ヒノキ材。長さ6.4cm、幅4.0cm、厚さ3.4cm。

g 板状木製品(32~39) 32は断面が凸レンズ形の薄板材の一端を尖らせたもの。側辺の一方に孤状の削り形をいれるが、折損しているため全形は不明である。ヒノキ板目材。長さ11.2cm、最大幅2.9cm、厚さ0.7cm。33は薄い短冊状のへぎ板の一端から0.9cmの両側辺にV字形の小さな切込みをいれたもの。先端はゆるやかな孤をえがく。下半部は欠失。長さ13.0cm、幅3.5~3.1cm、厚さ0.2~0.1cm。34は小札状の板材の木口の一端を斜めに削りおとしたもので、他端は刃物で切り込みをいれて折り取る。一對の円孔があり、中に樺皮が残存している。曲物等の底板を再利用して楔に転用したものか。ヒノキ板目材。長さ5.1cm、幅3.4cm、厚さ0.8cm。35は短冊状の薄板に3.2cmの間隔をおいて2つの円孔をあける。一端を

1) 類似品は平城宮土壌SK820(『平城宮報告Ⅶ』  
p. 131)や長岡京の溝SD1301(向日市教委『向

日市埋蔵文化財調査報告書第4集』1978, p. 17)  
にみられる。

欠失し、他の木口端は斜めにそいでいる。ヒノキ柁目材。長さ6.9cm, 幅1.3cm, 厚さ0.3cm, 円孔の直径1.7cm。36は長方形の薄板材で中央に小孔をあける。両端は鋸で切断している。ヒノキ柁目材。長さ8.5cm, 幅5.5cm, 厚さ0.6cm。37・38は縦長の板材の一端を周囲にV字状の切り込みをいれて折り取ったもの。37はスギ板目材。長さ10.3cm, 幅4.3cm, 厚さ0.8cm。38はアカガシ亜属板目材。長さ13.2cm, 幅4.1cm, 厚さ2.0cm。39は薄い細板の一端を剣先状に尖らせ、他端を撓形につくったもの。鋸形を呈するが刃はあらわされていない。ヒノキ板目材。長さ6.8cm, 幅0.9cm, 厚さ0.3cm。

番号	(長さ)(最大幅)(材質)		
	cm	cm	
40	23.4	0.7	スギ
41	22.4	1.3	ヒノキ
42	(18.5)	1.1	ヒノキ
43	17.8	1.0	ヒノキ
44	17.4	0.9	スギ
45	(16.2)	0.7	スギ
46	16.2	1.1	ヒノキ
47	15.2	1.6	ヒノキ
48	(14.1)	1.2	スギ
49	14.1	1.3	ヒノキ
50	12.8	1.2	ヒノキ
51	11.2	0.7	ヒノキ
52	9.8	0.8	ヒノキ
53	8.2	0.4	ヒノキ

Tab. 38

SD3715出土棒状木製品の寸法

h 棒状木製品(40~53) ヒノキあるいはスギ材でつくろ細長い棒状製品が14点ある。用途は不明。いずれも断面が方形ないし不整円形の棒材の先端を尖らせたもの。大きさはさまざまで、先端の形状にも一端を尖らせるもののほか、一端を篋状につくろもの(42・47・50)や両端を尖らせるもの(35)がある(Tab. 39)。

棒状木製品

i その他の木製品(54~56) 54は板材を杓子形にかたどったものだが、全体に厚さが一様で、先端を大きくU字形に刳り込み二股につくろ。柄元付近には片面に浅い溝状の押圧痕がのこっている。身の側辺と先端を欠失する。スギ板目材。長さ(3.14cm), 身の幅〔8.3cm〕, 柄の幅2.8cm, 厚さ0.9~0.8cm。55は板材を加工して長楕円形の両端を截ちおとした形につくろ。両側辺をうすく削り、一方の側辺に斜め方向の溝を鋸でひきこむ。木口の一端は両面から削りおとして先端を鋭くし、他端の木口面は直截し、周縁を面取る。この直截面には断面V字形の浅い溝を刻む。長さ9.1cm, ヒノキ柁目材。最大幅2.6cm, 厚さ1.3cm。56は心持丸太材を加工したもので、一端の4分の1を削りのこして、先端を円錐状につくろ。他の部分は細い柄状に削る。加工は粗略で、現状は約4分の1に分割しており、柄状部の先端は分割ののちに焼けている。ヒノキ材。長さ(31.7cm), 柄状部の長さ22.7cm, 材の直径〔約8.5cm〕。

## C その他の木製品

### i SD3765出土木製品 (PL. 147・148)

a 人形(1) うすい細板の側辺に削りを加えて人形につくろったもの。表裏両面とも割り裂き面をとどめ、墨痕はみとめられない。頭頂部は尖りぎみの半円形にかたどり、頸部の切りこみは小さい。全体に粗雑なつくりである。ヒノキ柁目材。長さ14.6cm, 幅2.5cm, 厚さ0.3~0.2cm。平城宮出土人形のなかで古い時期にぞくするものである。

ひとがた

b 曲物底板(2) 板材を円形にかたどったもの。両面とも平滑に削り、縁辺は垂直に截ちおとす。断片であるため、側板を固定する木釘痕はないが、曲物容器の底板とみられる。ヒノキ板目材。直径〔19.0cm〕, 厚さ0.5cm。

#### 第IV章 遺物

か ま c 鎌柄(3) 鎌の柄の断片で、先端を幅広くする頭部の破片<sup>1)</sup>。心持板材を入念に加工したもので、先端は半円形を呈し、縁辺の稜角を面取る。両側辺とも縁辺の稜角を削って丸味をもたせ、一方の側辺は内湾する。先端から約3cmの位置に鎌身を装着するための縦長の茎孔がある。これは両側辺から切り込むようにしてあけたもので、幅は0.25cmである。先端近くには茎孔をさけた位置に2本の木釘が打込んでおり、下端の折損面にも2本の木釘痕がのこる。これらの木釘は柄頭の割裂を防ぐためのものだろう。コナラ亜属材。長さ(8.3cm)、幅4.7~2.6cm、厚さ1.9cm。破片ではあるが、平城宮出土鎌柄のうち、SD1900出土の鎌柄につぐ古い時期のものである<sup>2)</sup>。

す き d 鋤(4) 全長90.4cmの完形品で、柄と身を1本でつくる。身部は両側辺の上端の一部分をのこしてそれ以下を一段削りおとし、U字形に成形する。U字形部分の縁辺は、両面から斜めに刃先状に削って、鉄製鋤先の着装部とする。鋤身部の木表側は平坦面であるが、木裏側は先端に向けてやや削り込み、身部にわずかな反りをもたせる。この身部の両面は削り痕跡が消えるほどに磨耗している。柄は断面が隅丸方形に近い丸棒状に削りこみとし、直線につくる。柄頭にはU字形の環状把手がつく。把手の握り部分および柄の周側面は磨耗している。アカガシ亜属材。身部の長さ27.7cm、同幅18.2cm、同厚さ3.1~1.2cm、鋤先着装部の長さ20.7cm、同最大幅18.5cm、柄の長さ(把手部を含まない)46.5cm、同径3.3×3.0cm、把手部の長さ16.2cm、同幅13.5cm、同径3.6×3.0cm。

e 用途不明木製品(5) 小さな方形の身に太くて長い柄のつくもの。方形の身は木裏側を先端に向けて削り込み反りぎみにつくる。この面はとくに磨耗が著しい。柄は断面が角を丸くとした扁平な方形を呈する。スギ板目材。長さ37.6cm、身の長さ9.1cm、同幅8.8cm、同厚さ2.5~1.4cm、柄の幅4.6cm、同厚さ2.6cm

#### ii SK3730出土の木製品 (PL. 148)

やじりがた a 鉄形木製品(6) 細長い身に、側辺の一方を削りこんで茎をつくりだし片関式の鉄鋸をかたどる。身の縁辺をうすく削って刃をつけ、茎は先細りの丸棒状につくる。木理は緻密で、表面をよく研磨している。祭祀具として使われた木製模造品であろう。ヒノキ板目材。長さ15.1cm、身の長さ9.3cm、同幅0.8cm、同厚さ0.2cm、茎の長さ5.8cm、同径0.7~0.4cm。

b 方柱形錘状木製品(7~9) 断面が方形を呈し、先細りの細長い棒材の上端近くの周囲に切りこみをいれたもの。3点とも上端から約2cmの位置の側面ないし稜角にV字形の切り欠きをいれる。この切り欠き部位には横方向の押圧痕跡があり、紐状のものを縛っていたことがわかる。いずれもスギ材である。7は長さ28.3cm、太さ2.4cm~1.4cm。8は長さ26.7cm、太さ1.8~1.3cm。9は長さ25.2cm、太さ2.9~1.5cm。

c 楔(10) 断面方形の粗い割板材の一端を斜めに削りおとしたもの。先端は厚くのこす。材を大割りする際の割楔として使われたものか。ヒノキ材。長さ14.0cm。幅3.5×2.8cm。

1) これはかつて「鋸柄」として紹介したことがあるが(西谷正「平城宮出土の土工具」『大和文化研究』第13巻4号, 1968, p. 32), ここで訂正しておく。

2) SD1900の例では頭部が円形にならず(『平城宮報告IX』p. 69), 形態としては奈良時代後半のSE272B出土の例に通じる(『平城宮報告IV』p. 37)。

## iii SK3784出土の木製品 (PL. 148)

a 匙形木製品(11) 細長い身と柄からなる粗製の匙とみられる。身の上面に浅い溝を抉っている。先端は裏面から斜めに削り、端部を鋭くする。柄の断面形は柄元では隅丸方形を呈し、先細りにつくった柄尻近くでは楕円形とする。スギ材。長さ24.0cm、身の長さ7.8cm、同幅2.7cm、同厚さ1.4cm、柄の径1.6×1.2~0.8×0.5cm。

## iv SA5535出土の木製品 (PL. 148)

a 棒状木製品(12) 板材を削って丸棒につくったもので、側面には縦方向の細い削りをほどこす。木口の一端は鋸で切断し、他端は四方からV字状の切りこみをいれて折り取る。加工屑である。ヒノキ材。長さ10.3cm、直径2.5cm。

## v SA3777出土の木製品 (PL. 148)

a 合子蓋(13) 柱痕跡から検出した小断片。直立する側面とゆるやかな曲面につくられた合子蓋上面との境は稜をなす。器表面の腐蝕が著しいため、成形がロクロ削りによるのか削りによるのか不明。全形の復原は難しいが、口径13cm前後、高さ3cm前後の寸法と推測される。頂部の厚さ0.4~0.2cm。ヒノキ材。板目材を横木取したもの。木理は緻密であるが波状で、器表に小さい節目がいくつかみられる。

## vi SD5505出土の木製品 (PL. 148)

a 桧扇(14) 白木の桧扇の断片。2枚分の骨がのこる。上端は圭頭形で、下端に向けて幅を狭くし、下端から0.2cmには要孔があく。側辺の一方に弧状の削り形をいれ、さらに弧形の頂部をV字形に切り欠く。ヒノキ板目材。2枚を同大として復原すると長さ17.1cm、上端幅3.4~3.0cm、下端幅1.8cm、厚さ0.13cmとなる。要孔が下端に接することになり、また綴目を欠くことから二次的に上下が切断された可能性がある。

b 小円板(15) 薄い板材を正円形に切り取ったもので半分がのこる。両面とも平滑に削り、周側面は垂直に截つ。小型曲物容器の底板か。ヒノキ板目材。直径5.4cm、厚さ0.3cm。

## vii SD5564出土の木製品 (PL. 148)

a 鳥形(14) うすい板材の側辺を削って頭部と頸部をつくったもので、頭部の一端を欠失する。頭部前側辺は丸味をもたせて斜めに削り、頸部上側辺は頭部より一段おとして直線につくる。下辺はゆるやかなV字状に切り欠き、頸部下側辺のほぼ中央に木質の細棒が残存している。頸部の端部は直線状に截ちおとしているが、切断はやや粗雑である。ヒノキ板目材。長さ8.6cm、幅3.2~1.8cm、厚さ0.5cm。これは鳥の上半身を表現した鳥形とみられるが、形代の一つである馬形の形態に通じる面もあり、いずれとも判断しがたい。

b 曲物容器(17・18) 底板が2点がある。17は完形で、表面の腐蝕が著しい。周側面の4個所に、ほぼ等間隔に木釘孔と木釘をとどめる。C型式にぞくする。ヒノキ板目材。直径13.3cm、厚さ0.5cm。18は約1/4の破片で、2個所に木釘孔がのこる。ヒノキ板目材。直径[17.3cm]、厚さ0.5cm。

viii SE9210出土の木製品 (PL. 148)

a 横櫛 (19) 歯の大部分を欠く。イスノキの板目材に細い鋸で歯を挽きだし、表面を平滑に研磨する。脊はゆるやかな円弧をえがき、肩は角ばっている。櫛歯の切り通し線は刻線を引いて脊にそろえる。歯の密度は3cmにつき17本。長さ11.4cm、同幅1.5cm、脊の厚さ0.7cm。井戸埋土から出土した。

b 曲物容器 (20~22, 25~27) 曲物容器には身の完  
まげもの 形品1点(20)と、底板5点がある。20は直径14.8cmの  
底板に高さ10.6cmの側板をつける。側板をつけた状  
態での外径は15.3cm、側板の下端外面には幅2.5cm  
の箍をまわした痕跡がのこり、側板と箍を底板に固定  
する木釘を5個所に打つ。側板の樺皮の縫合せは上半  
部を欠いているが、5段潜り1列で縫いつけたものと  
みられる。樺皮の幅は0.7cm。底板には木理のきわめ  
て緻密なヒノキ板目材を用い、側面の上方がにわずか

番号	(直径)(厚さ)		(釘穴数)	(材質)	(木取)
	cm	cm			
20	14.8	0.9	5	ヒノキ	板目
21	14.2	0.5	(3)	ヒノキ	柾目
22	15.1	0.5	5	ヒノキ	柾目
25	[14.4]	0.6	(1)	ヒノキ	板目
26	[24.3]	1.1	(2)	ヒノキ	板目
27	[21.7]	0.6	(1)	ヒノキ	板目

Tab. 39 SE9210出土 曲物底板の寸法

に内傾する。側板は厚さ0.4cmのヒノキ板目材で、内面には縦方向の刻線(シラビキ)が部分的にほどこされる。なお、木釘もヒノキ材である。21・22はほぼ完形の底板で、ヒノキ柾目板を用いている。25~27は底板の小片で、側面に木釘孔をのこす。26・27がA型式の大型品であるのに対し、他はC型式の小型品である。小型品は飯盒のようなものだろうか。いずれも井戸埋土から出土した。

c 独楽形木製品 (23) アカガシ亜属の心持材を加工したもの。現在身の一部と下端が欠損  
こま しているが、全形をうかがうことは可能である。側面を縦方向に細かく削って円柱状にし、一端を粗く削り円錐状につくる。上端はやや凸面をなす。砲弾形を呈する本例は、鞭につけた紐をまいて回転させるいわゆる「バイゴマ」の類である。長さ6.5cm、直径4.1cm。この種の木製品は各地でいくつかの出土例をしているが、円錐状の下端に軸部を削りだすものや、軸を打ちこんだ孔がのこるものなど各種の形態をとっているが、遊戯用の独楽とかがえている。井戸埋土から出土した。

d 用途不明木製品 (24) 細長い板材を加工したもので、両端の幅を狭くし、端部に方形の突出部をつくる。木表面は削り調整をほどこして平滑にしあげ、わずかな凸面をなすが、木裏面には割り裂き面をとどめる。両端に何物かを垂下する把手の可能性もある。スギ板目材。長さ52.0cm、幅8.0cm、両端のくびれ部分の幅4.0cm・3.4cm、方形突出部の幅5.9cm・5.4cm。厚さ1.3cm~1.1cm。井戸梓抜き痕跡埋土から出土したもので、伴出の土器から11世紀のものであることがわかる。

1) 独楽の出土例は各地で報告されている。奈良県内では5例の出土品があり、いずれも7世紀末から8世紀全般にわたる時期にぞくする。1. 平城宮溝SD2700(『年報1965』p. 35) 2. 平城京左京三条四坊七坪井戸SE1810(奈文研『平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報』p. 22) 3. 平

城京左京五条二坊十四坪井戸SE03(奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書一昭和54年度』1980, p. 32) 4. 藤原宮井戸SE1205(『飛鳥藤原宮報告II』1978, p. 73) 5. 藤原宮外濠SD145(『年報1976』p. 42~44)。

## D 木製品の樹種 (PL. 149~152)

第1次大極殿地域から出土した木製品については、個々の説明のなかでふれてきた。ここではそれらを樹種ごとに再編成して Tab. 40 にまとめた。なお、柱・井戸枠・木樋などについては、それぞれの項でのべているので表にはいれていない。しかし、顕微鏡写真は一括して PL. 149~PL. 152におさめている。

判明した木製品の樹種は、針葉樹3種類、広葉樹10種類である。木製品と利用樹種との関係を見るために櫛材を例にとり上げてみると先に35点の木櫛について樹種名が調べられている<sup>1)</sup>。

前回と今回の調査とで39点の木櫛につき行なったことになる。樹種別にはイスノキ材が最も多く35点、ツゲ材2点、カナメモチ材1点、モッコク材1点という結果をえた。

これら4樹種につき共通している材質上の特徴は、いずれも散孔材で道管の配列はほぼ均等に分布し、その径はきわめて小さく、緻密で割れにくく、硬くつよい。例えば、イスノキの気乾比重は0.75~1.02で日本産の有用樹種の中で最も重く硬いものであり、ツゲも0.75~0.95とイスノキと同様な数値をしめす。これらの材は切削その他の加工は困難で割れにくく、耐久に富む性質をもっており、櫛材に最も適している。モッコク材・カナメモチ材とも櫛材に使われていた出土例は少なく、イスノキに樹肌、材質等がにているところから、イスノキ材の代用として使われたものとかんがえられる。このように奈良時代ではすでに木材利用に対してきわめて適確な樹種選択が行なわれ、用途に応じて樹種を使いわけていたことがこの例からわかる。

さらに今回の調査結果を見ると、ヒノキ材が圧倒的に多くあらわれ、多種類の木製品に使われていたことがわかった。ヒノキ材は構造材としての優秀さを備えているばかりでなく、切削その他の加工や乾燥も容易で、割裂性が大きい。心材部の保存性はきわめて高く、狂いが少ないといった性質もっている。当時の人々はすでにこのようなヒノキの材質を熟知しており、建築材、祭祀具、服飾具、食膳具、容器、工具、紡織具、木簡、その他広く用いたのであろう。

樹種鑑別用試料のサンプリングは、木製品の原形をそこなわないことを意図し、ブロック状に採取することをさけた。遺物の目立たない部分で必要最少限の大きさをえらび、両刃の安全カミソリで木口・柾目・板目の切片をとり、生物顕微鏡で各断面の組織を観察し同定した<sup>2)</sup>。

樹種鑑別にあって、針葉樹ではつぎの諸点にポイントをおいた。1 木口面の観察では、垂直樹脂道の有無、樹脂細胞の有無、早・晩材部の移行の仕方。2 柾目面では、分野膜孔の形状、螺旋肥厚の有無、放射仮道管の有無、放射仮道管内壁の螺旋肥厚の有無、膜壁にあらわれる鋸歯状突起の有無、樹脂細胞の有無。3 板目面では、水平樹脂道の有無、螺旋肥厚の有無、放射組織の細胞高および細胞幅。つぎに、広葉樹ではつぎの諸点を調べた。1 木口面では道管・小道管の配列形式、チロースの有無、柔細胞の分布状態、放射組織の幅。2 柾目面では、1 道管、小道管の穿孔形状、螺旋肥厚の有無、放射組織の構成細胞の判定。3 板目面では、放射組織の細胞高と細胞幅。そして最終的には現生木の対照標本と照合し樹種を決定した。だが、組織の変質が著るしくて、組織上の特徴が確認できず、かつ同定しえないものについては、最も可能性の高い樹種名を暫定的に与え、?を付した。さらに、まったく同定のしようのないものについては不明とした。

1) 『平城宮報告IV』p. 34

2) 島地謙・伊藤隆夫氏の指導をうけた。

第IV章 遺物

(地区)	(遺構)	(樹種名)	(木製品)	
6ABR-H	SB7802	ヒノキ	人形(1, 2) 鳥形(3, 4) 刀形(5, 6, 8) 鏃形(9) 桧扇(10, 11) 匙(12) 匙形木製品(13, 14, 15, 17) 杓子形木製品(18, 19, 22, 23, 25) 箸(26) 蓋形木板(27) 曲物容器底板(28, 29, 30, 31, 32, 33) 曲物容器蓋板(33) 折敷(35, 36) 方形鉢(38) 工具(楔?)(41) 有孔小円板(45) 刻みのある木製品(46) フォーク形木製品(48) 柄状木製品(50) 板状木製品(52, 54, 56, 57) 棒状木製品(61, 62, 65, 66, 67, 70, 71, 72, 75, 76, 77, 78, 79, 81) 木製ヒゴ(82)	
		スギ	刀形(7) 匙形木製品(16) 杓子形木製品(20, 21, 24) 盤(37) 工具(刀子などの合鞘か)(39) 板状木製品(51, 53, 55) 棒状木製品(58, 59, 60, 63, 64, 68, 69, 73, 74, 80)	
		カナメモチ	横櫛	
		アカガシ亜属	楔(40)	
		カエデ属	刻みのある木製品(47)	
		ヒノキ	人形(1, 2) 刀形(3, 4) 糸梓の横木(7, 8) 糸梓の梓木(9) 杓子形木製品(10) 曲物容器(12, 13, 14, 15, 16) 折敷(17) 錐柄(19) 有孔小円板(23, 24) 柄のある部材(28) 切り欠きのある部材(29, 30) その他の部材(31) 柄状木製品(32, 33, 34, 35, 36, 39) 棒状木製品(41, 42, 43, 46, 47, 49, 50, 51, 52, 53)	
		スギ	蓋形木板(11) 盤(18) 楔(21) 板状木製品(37) 棒状木製品(40, 44, 45, 48) その他の木製品(54)	
		モミ	横櫛(22)	
		モッコク	縦櫛(5)	
		ツゲ	横櫛(6)	
ミズキ科?	楔(20)			
サクラ属	栓形木製品(25)			
サカキ	栓形木製品(26)			
アカガシ亜属	柄のある部材(27) 板状木製品(38)			
6ABS・6ABD	SD3715	ヒノキ	人形(1, 2) 刀形(3, 4) 糸梓の横木(7, 8) 糸梓の梓木(9) 杓子形木製品(10) 曲物容器(12, 13, 14, 15, 16) 折敷(17) 錐柄(19) 有孔小円板(23, 24) 柄のある部材(28) 切り欠きのある部材(29, 30) その他の部材(31) 柄状木製品(32, 33, 34, 35, 36, 39) 棒状木製品(41, 42, 43, 46, 47, 49, 50, 51, 52, 53)	
		スギ	蓋形木板(11) 盤(18) 楔(21) 板状木製品(37) 棒状木製品(40, 44, 45, 48) その他の木製品(54)	
		モミ	横櫛(22)	
		モッコク	縦櫛(5)	
6ABS-E	SD3765	ヒノキ	人形(1) 曲物底板(2)	
		スギ	用途不明木製品(5)	
		コナラ亜属	鎌柄(3)	
		アカガシ亜属	鋤(4)	
6ABE-P	SK3730	ヒノキ	鏃形木製品(6) 楔(10)	
		スギ	方柱形錘状木製品(7, 8, 9)	
6ABR-P	SK3784	ヒノキ	匙(11)	
6ABE-K	SK5535	ヒノキ	棒状木製品(12)	
		SA3777	ヒノキ	合子蓋(13)
		SD5505	ヒノキ	桧扇(14) 小円板(15)
6ABE-M	SD5564	ヒノキ	鳥形(16) 曲物容器(17, 18)	
6ABE-K	SE9210	ヒノキ	曲物容器(20, 21, 22)	
		スギ	用途不明木製品(24)	
		イスノキ	横櫛(19)	
		アカガシ亜属	独楽形木製品(23)	

Tab. 40 第1次大極殿地域出土木製品の樹種

## 6 金属製品・石製品 (PL. 153)

今回報告する地域から出土した金属製品・石製品は少量である。金属製品には帯金具・銅製飾鉾、刀子、鉄釘、鉄製鎌先などがあり、石製品には石銚がある。以下、種類ごとに述べることにする。

1 銅帯金具(1) 官人の朝服などにもなう銚帯に装着する帯金具。本例はそのうちの丸帯金具の表金具にあたる。楕円形の下辺を直截した形をとり、下寄りの位置に2.2×0.3cmの長方形の垂孔をあけている鑄造品で、断面は扁平な台形状を呈する甲高につくり、高さは0.48cmをはかる。裏面には頂部と下辺の両端との3個所に鉾足を鑄出している。表面は腐蝕しており漆塗りなどの痕跡はない。透孔の上辺の一部を欠失している。縦幅2.06cm、横幅3.23cm、厚さは1.3mmで、銅銚帯AⅢに相当する<sup>1)</sup>。SD3715から出土した。

2 鉄刀子(2・3) 2は鉄製刀子で、柄尻を折損しているものの、木質の柄がのこっており、保存状態は良好である。刀身は平造りで、表面に銹が付着しているが、刃部は鋭利にとがれ、かつよく使いこんでいる。茎は身とほぼ同じ長さで、上辺は身の棟と直線に続け、刃先の側を一段おとして刃闕(はまち)とする。柄はヒノキ板材を加工したもので、断面は楕円形を呈する。柄元の木口周囲には幅0.2cmの銅製貴金具がのこり、周縁を一段削って装着している。長さ(13.3cm)、刀身の長さ6.5cm、同最大幅0.8cm、同棟の厚さ0.25cm、茎の長さ6.2cm、同幅および厚さは柄元で0.7×0.3cm、末茎で0.2×0.2cm、柄の径は柄元で1.4×0.9cm折損部分で1.8×1.2cm。SD3765出土。

3はほぼ完形の鉄製刀子の刀身。平造りで、わずかに刃こぼれしているが鋭利な刃先をとどめる。茎は脊と刃部の双方を一段おとし、末端を欠くが、身と長さがほぼ等しくなる。長さ(13.2cm)、身の長さ6.9cm、同最大幅1.2cm、脊の厚さ0.3cm、茎の幅・厚さは基部で0.7×0.3cm、末端で0.2×0.3cm。SE7145出土。

3 鉄鑿状工具(4) 棒状の身部(穂)に短い茎(コミ)のつくもので、穂は先端を折損しており、残存部分も銹化が著しく表面が剝落しているため全形は知りがたい。穂はコミに接する胴付部分では断面が径1.1cmの円形を呈しており、やや先細りの形につくり、折損箇所では断面は長方形に移行している。コミは断面長方形で、先端は尖る。おそらく鑿の刃物部分の断片ではないかとおもわれる。長さ(11.1cm)、コミの長さ3.3cm、同幅・厚さは胴付で0.8×0.6cm。SK8212出土。

4 銅飾鉾(5・6) 5は鑄造品で鉾足は根元で折損している。鉾頭は二重花卉頭につくり、上段に8花卉、下段に12花卉を鑄出し、鑄造後に鑪で整形している。鉾頭の直径1.62cm、同高さ0.54cm。SD3715出土。6は円頭鉾の一種で、鉾頭は縦に細長く、下面はやや斜めになる。鉾足は鉾頭下面の、中心より片寄った位置につき、断面は円形を呈する。いま下端を欠いている。長さ(4.1cm)、鉾頭の径0.9cm、同高さ1.2cm。SD8237出土。

1) 銅帯金具については、さきに銅銚帯A・B・Cに細分した『平城宮報告Ⅵ』p. 157。の3種にわけ、それぞれを大小によってⅠ～Ⅵ

#### 第IV章 遺物

5 銅筒状金具(7) 銅製の薄板を円筒形に曲げてつくったもの。小型品で、一端の周縁を外側に折り曲げて外反させる。板金の厚さ0.09cm, 上端径1.0cm, 下端径1.4cm, 高さ0.9cm。SD3715出土。

ク 6 鉄釘(8~16) 調査区内のいくつかの遺構から合計32点の鉄釘が出土した。その大半は断片である。第I期東楼SB7802の柱拔取痕跡からは19点出土している(9~13)。いずれも鍛造の角釘で、方形の釘頭がつく、9は完形品で、長さ21.1cmをはかる。断面は釘頭の直下で1辺1.2cmの方形を呈し、やや先細りにつくる。側面に横走る木質の痕跡がみられる。11の釘頭部分にも斜め方向の木質痕跡が錆化してのこる。

第II期後殿SB7150の柱拔取痕跡からは7点出土しているが、うち6点は建物のへ八柱拔取痕跡からまとめて検出した(14~16)。いずれも角釘で、完形品(16)では長さ22.1cmをはかり、断面は1辺0.9cmの方形を呈する。SB7802, SB7150の鉄釘はそれぞれの建物にともなうもので、ほぼ同類の釘である。法隆寺五重塔の釘は最大2尺5分(61.5cm)から最小1寸1分6厘(3.5cm)までの27種、3類に分類されている<sup>1)</sup>。本例は法隆寺五重塔で1~11に分類されている角釘のうち7, 8(7寸9分~7寸5分)に相当している。一般に釘は取付材の厚みの2.5倍程度の長さであり、本例は厚さ9cm内外の材を取付けたことになり、軒まわりの取付材を打ちつけたものとおもわれる。

SD5564から出土した角釘(8)は、先端を欠くが現存長26.7cmの細長いもの。その他、SB6662, SB6663, SB7175の柱拔取痕跡から各1点, SD3715, SK8093からも大型の角釘が各1点出土している。

カ 7 鉄製鍔(17) 材と材を継ぎとめる際に用いるコ字型のカスガイで、SD7189から2点出土。17は断面方形の鉄製角棒の両端を折り曲げたもので、端部はうすくつくられている。錆化が著しく、一端を欠失する。横幅〔19.2cm〕, 縦幅7.3cm, 断面の一边は1.5cm。

8 鉄製鎌先(18) 井戸SE9210の井戸枠拔取り痕跡から出土したもので、共伴した土器からすれば11世紀代のものになる。刃部の先端を欠くが、保存状態は良好である。茎は真直ぐで、刃部は内側に彎曲する。最大幅は刃部中央にあり、茎はやや先細りにつくる。茎の末端を折り曲げており、その状態から、当初は柄に対して150度の角度で装着していたと推定される<sup>2)</sup>。長さ〔19.3cm〕, 最大幅3.1cm, 厚さ0.3cm。

9 石鍔(19) 腰帯に装着する帯飾具の巡方である。やや横長の方形の石板で、各面とも平滑に研磨する。側面はわずかに上方に内傾し、断面は台形を呈する。裏面の四隅に2孔を1対とする小孔をあける。これは錐で斜めに穿って連絡させており、帯に綴じ付けるための潜り孔である。石質は緑色岩類で石鍔帯分類のb IVに相当する<sup>3)</sup>。縦幅2.24cm, 横幅1.90cm, 厚さ0.55cm。6ABO区SA109の北側溝出土。

1) 法隆寺国宝保存委員会『国宝法隆寺保存工事報告書 第13冊 五重塔』1955 p.249

2) 茎末端部分の折返しの角度と装着の方向は必ずしも対応しないが(浜松市教育委員会『伊場遺跡遺物編 1』別冊図版 1978 図版第3-

4・5), とりあえず折返し角で装着を想定しておく。

3) 石鍔帯については、さきにa, b 2種にわけそれぞれに大小の別があったろうことを提唱した(『平城宮報告VI』p.160)

## 7 銭 貨 (PL. 154・155)

今回報告する地域から合わせて19種63点の銅銭が出土した。そのうち遺構から出土したものは和同開珎、萬年通寶の2種27点である。それ以外は遺構面上の遺物包含層で検出したものであり、埋没年代を決めがたいものである<sup>1)</sup>。1点の隆平永寶ほかは唐・宋・明代の中国銭15種27点と寛永通寶8点がある。個々の計測値については Tab. 41・42 にまとめた。

1 和同開珎(1~23・28) 和同開珎は24点ある。うち23点は開渠SD5558に一まとまりになって埋没していた(1~23)。保存状態は良く、銹化していないものも少なくない。23点のうち22点は字画が比較的細く、簡明で、銭の铸上りもよい。和同開珎Aで「普通和同」とよばれるものである。23は銭文、铸上りとも和同開珎Aに在るが、「珎」字の末画を跳ねており、「跳和同」とよばれるものである。28はSB7802の柱抜取痕跡から出土したもので、「珎」字部分の小片である。

2 萬年通寶(24~26) 24は表面の銹化が著しく、銭文もきわめて不明瞭である。25は外縁が幅広く、外周仕上げは粗雑であり不整円形を呈する。内郭の孔の仕上げも粗略で、表面は銹化している。萬年通寶Bで「闊縁萬年」と呼ばれるもの。26は「年」字の第4画が第5画に接しないで横から上にはね上げる書体を示す。萬年通寶Fで「横点萬年」にぞくする。24はSD5530、25・26はSD3715から出土した。

3 隆平永寶(27) 外縁が厚く、内郭が大きい。銭文は「平」字の第1画と第4画の間隔がせまく、末画が長い。また「永」・「寶」字が比較的小さいなど、「中様長年小字」の特徴をよくしめす。6ABE-K地区の遺構面上の堆積土から出土。

なお、中国銭および寛永通寶は計測値・出土地区等を表示するにとどめる。

1) 皇朝十二銭の分類および材質については、『平城宮報告IV』p. 97~103参照

第IV章 遺物

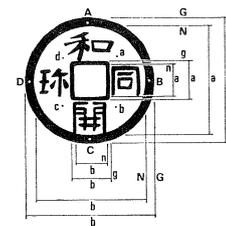
番号	錢貨名	(W)	(G)	(N)	(g)	(n)	(T)	(t)	(出土地点)	備考
		g	mm	mm	mm	mm	mm	mm		
1	和同開珎	2.186	24.12	20.88	7.85	6.43	1.07	0.47	SD5558	和同開珎A
2	〃	2.632	24.52	20.95	7.88	6.10	1.36	0.44	〃	〃
3	〃	2.064	24.05	21.00	7.80	6.25	1.10	0.39	〃	〃
4	〃	2.488	24.83	20.80	7.83	6.20	1.12	0.46	〃	〃
5	〃	2.563	24.48	20.50	7.75	6.13	1.24	0.41	〃	〃
6	〃	2.600	24.70	21.00	7.88	6.48	1.39	0.52	〃	〃
7	〃	2.009	24.38	20.95	7.65	6.53	1.37	0.43	〃	〃
8	〃	2.871	24.78	21.10	7.80	6.25	1.20	0.50	〃	〃
9	〃	2.499	24.83	20.98	7.63	6.20	1.17	0.31	〃	〃
10	〃	3.171	24.18	20.28	7.78	6.48	1.32	0.67	〃	〃
11	〃	2.562	24.55	21.10	7.78	6.28	1.33	0.45	〃	〃
12	〃	3.495	24.68	20.83	7.90	6.63	1.52	0.60	〃	〃
13	〃	2.517	24.73	21.33	7.83	6.28	1.11	0.48	〃	〃
14	〃	2.825	24.68	21.03	7.85	6.20	1.36	0.40	〃	〃
15	〃	2.857	24.90	21.23	7.98	6.18	1.31	0.40	〃	〃
16	〃	2.337	24.28	20.93	7.78	6.15	1.39	0.49	〃	〃
17	〃	2.326	24.35	20.88	7.80	6.18	1.49	0.70	〃	〃
18	〃	2.931	24.48	20.68	7.88	6.18	1.26	0.64	〃	〃
19	〃	2.945	24.48	20.98	8.08	6.23	1.18	0.62	〃	〃
20	〃	2.281	24.13	20.93	7.78	6.28	1.22	0.36	〃	〃
21	〃	2.689	24.25	20.25	7.73	6.53	1.18	0.72	〃	〃
22	〃	2.342	24.25	20.75	7.78	6.23	1.43	0.37	〃	〃
23	〃	2.356	24.23	20.58	7.65	6.40	1.24	0.53	〃	一跳和同
24	萬年通寶	2.443	25.80	22.55	8.85	7.63	1.40	0.90	SD5530	
25	〃	3.870	26.30	21.75	8.45	6.53	1.70	0.59	SD3715	萬年通寶B
26	〃	2.825	25.53	21.10	7.73	6.33	1.52	0.50	SD3715	〃 F
27	隆平永寶	3.588	25.53	21.53	8.97	6.63	2.15	0.85	6ABE-K	中様長年小字
28	和同開珎	—	—	—	—	—	—	—	SB7802	小片

※錢貨の各部測点については下のとおりである。

$$\text{外縁外径 } G = \frac{Ga + Gb}{2}, \text{ 外縁内径 } N = \frac{Na + Nb}{2}, \text{ 内郭外径 } g = \frac{ga + gb}{2},$$

$$\text{内郭内径 } n = \frac{na + nb}{2}$$

$$\text{外縁厚 } T = \frac{A + B + C + D}{5}, \text{ 文字面厚 } t = \frac{a + b + c + d}{4}$$



重量は電子天秤 (SHIMADZU, DIGIBALANCE D-1003 H 0.1mg) を使用し, 下二桁を四捨五入した数値を表記した。厚味はマイクロメーター (N・S・K : 0.01mm) を使用し, 下一桁を四捨五入した。

Tab. 41 錢貨の計測値(1)

第IV章 遺 物

番号	銭貨名	W	G	N	g	n	T	t	出土地	初鑄年	備 考
29	開元通寶	3.357	24.45	20.65	7.90	6.38	0.98	0.55	6ABE-K	AD 621	背面内郭の上に月文
30	〃	2.327	25.00	20.38	7.85	6.63	1.22	0.75	6ABE-M	〃	背面無文
31	太平通寶	—	—	—	—	—	—	—	6ABQ-C	976	
32	至道元寶	—	24.78	17.35	7.20	5.55	1.45	0.82	6ABQ-B	995	行書体
33	景德元寶	—	24.18	20.15	7.10	5.85	1.15	0.72	6ABE-M	1004	真書体
34	祥符元寶	—	—	—	—	—	—	—	6ABP-G	1008	
35	天聖元寶	3.123	24.88	20.38	8.13	6.70	1.20	0.69	6ABE-K	1023	真書体
36	〃	—	—	—	—	—	—	—	6ABR-H	1023	〃
37	皇宋通寶	—	—	—	—	—	—	—	6ABR-P	1037	〃
38	〃	—	—	—	—	—	—	—	6ABR-H	〃	〃
39	嘉祐通寶	2.604	24.18	19.30	7.95	7.90	1.08	0.71	6ABE-M	1056	篆書体
40	熙寧元寶	—	—	—	—	—	—	—	6ABQ-C	1068	真書体
41	〃	2.530	24.43	19.98	8.30	5.85	1.38	0.81	6ABQ-B	〃	〃
42	〃	—	—	—	—	—	—	—	6ABR-H	〃	〃
43	〃	—	24.03	18.75	7.90	6.00	1.56	0.12	6ABE-Z	〃	篆書体
44	元祐通寶	—	24.23	19.98	8.40	6.85	1.51	0.84	6ABR-Z	1086	〃
45	〃	—	24.45	19.15	7.90	6.25	1.23	0.71	6ABE-M	〃	真書体
46	元符通寶	—	—	—	—	—	—	—	6ABQ-Z	1098	〃
47	〃	—	—	—	—	—	—	—	6ABR-H	〃	〃
48	聖宋元寶	—	—	—	—	—	—	—	6ABQ-C	1101	篆書体
49	大觀通寶	3.372	24.43	21.43	7.28	6.03	1.68	0.86	6ABE-K	1107	
50	政和通寶	—	—	—	—	—	—	—	6ABR-Q	1111	真書体
51	〃	—	25.08	21.15	8.40	6.68	1.44	0.90	6ABE-M	〃	〃
52	永樂通寶	3.303	25.55	20.93	7.33	5.65	1.60	0.58	6ABC-U	1408	
53	〃	3.451	25.05	20.73	6.88	5.68	1.41	0.73	6ABQ-B	〃	
54	〃	—	24.90	20.90	6.90	5.04	1.62	0.67	6ABQ-B	〃	
55	〃	—	25.40	20.63	6.63	5.13	1.53	0.45	6ABQ-B	〃	
56	寛永通寶	3.337	25.03	19.65	7.18	5.03	1.52	0.75	6ABE-M	1626	
57	〃	2.638	25.18	20.50	7.35	5.83	1.20	0.66	6ABR-A	〃	
58	〃	2.445	24.53	19.43	7.03	5.68	1.00	0.47	6ABR-H	〃	
59	〃	2.032	23.78	19.98	7.60	6.15	1.28	0.64	6ABR-H	〃	
60	〃	3.310	23.43	19.40	7.20	5.60	1.34	0.91	6ABS-E	〃	
61	〃	1.988	21.95	17.43	7.33	5.93	0.82	0.59	6ABR-P	〃	
62	〃	—	24.65	19.45	7.05	5.85	1.37	0.52	6ABQ-C	〃	
63	〃	—	23.95	18.60	7.70	5.60	1.20	0.79	6ABR-L	〃	

Tab. 42 銭貨の計測値(2)



# 第V章 考察

## 1 第1次大極殿地域の変遷

平城宮の中枢部に位置する第1次大極殿地域の遺構が、第I期・第II期・第III期に大別できることは、すでにのべたところである。ここでは各時期がさらに小期に細分しうること、および各時期の遺構にみられる配置計画などについて考察する。

### A 平城宮造営以前および造営時の遺構

広場地区で検出した古墳SX7800は5世紀後半にぞくする。宮内にかつて存在した古墳が平城宮造営時に破壊されたことは、市庭古墳や神明野古墳の大型前方後円墳の痕跡をすでに発見していることによって、歴然としている。SX7800は大型前方後円墳とはことなる小方墳であるが、類似の古墳は6ALR区(第43次調査)においても検出されている。こうした小古墳の発見と宮内の各所で発見される埴輪や土器の存在によって、いまではみられない多くの古墳が存在したことがうかがわれるのである(fig. 96)。

広場地区の溝SD3772は浅い溝であり、東北方から西南方に流れる。地形的には丘陵縁端の低地にあたり、付近から古墳時代の遺物が発見されていることなどから、古墳時代にぞくする可能性が強い。この溝に近接する2棟の建物SB3773、SB3774も時期を決める手掛りを欠くが、西南に向いているので溝と同時存在の遺構とした。宮内の佐紀池や第2次東朝集殿下層に古墳時代の大溝があり、木製農具や土器などが発見されている。この地域は位置的に両者の中間点にあり、これらの遺構も古墳時代にぞくするものとおもわれる。

広場地区を南北に貫通するSD7787は下ツ道東側溝にあたる。平城宮内では朱雀門、第1次朝堂院南門で検出しており、幅約20m内外の道路敷が、奈良盆地の北辺におよんでいることがわかる。今回検出した東側溝の遺存状況は必ずしも良好でないが、東側溝の北端は広場地区の北辺でとどまり、もとの丘陵上では検出していない。さきに大膳職地域第I期の建物として報告したSB167、SB176は、北面築地回廊の建設以前にぞくすることになった。ともに平城宮の方位にくらべて北で西にふれている。また、比較的規模の大きい建物であり、SB167には建替えもみとめられるので、平

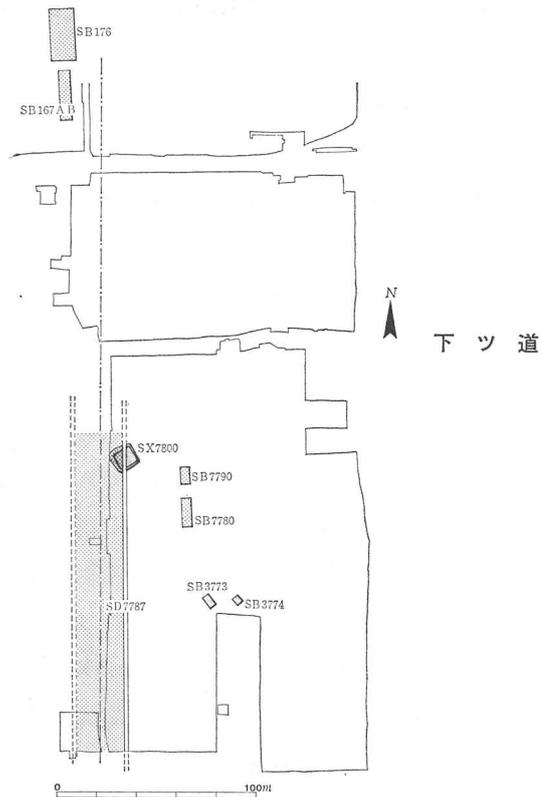


fig. 96 造営前の遺構

## 第V章 考 察

城宮造営にともなう仮設建物とはしがたい。だとすれば、下ツ道が存在した頃の建物であろうか。広場地区で検出した2棟の建物 SB7780, SB7790も同様の遺構である。ただし、一般の住宅ともかんがえられず、それら建物の性格についてはいまのところ不明である。しかし、想像をたくましくすれば、さきに朱雀門付近6ABY区の西側溝(SD1900)から出土した木簡に「過奈羅関所」ふくまれていたことからすると、SB176・SB167あるいはSB7780・SB7790などは奈羅関に関係する官衙の建物であった可能性もある。

広場地区のSB7816, SB7817, SB7824はいずれも地山面で検出した小規模建物であり、時期を決める手掛りを欠く。ここでは平城宮造営当初における仮設小屋にあてておく。広場地区の建物SB7765, 殿舎地区と大膳職地区の建物SB7164, SB8117などは、第I期の遺構として説明してきた。それらは層位的に第I期の遺構と同じ状況で検出されたが、柱掘形が小さく柱間が不揃いであることなどから、造営時の仮設小屋にあてた。

### B 第I期の遺構

第I期は4小期に細分することができる。それは創建, 増築, 解体, 再建という第1次大極殿の創建から機能停止にいたる変遷である。

**第I-1期**(fig. 97) 南門SB7801から四周をめぐって築地回廊SC5600, SC7820, SC5500, 築地回廊 SC8098が続き, 回廊内の北側に一段高い壇をもうけ, その前面に埴積擁壁SX6600を築く。SX6600の左右には斜道SF9232Aがつき, 中央に木造の階段SX6601がある。擁壁の南は広々とした礫敷の広場で, 中軸線上に南北溝SD7142を東側溝とする約40m幅の南北通路が存在したことになる。広場における施設としては井戸SE7145が唯一である。回廊内からの排水は南面築地回廊SC5600に付設された各種の盲暗渠や玉石敷の雨落溝によっている。

壇上(殿舎地区)では正殿SB7200と後殿SB8120が確認されているにすぎない。左右にも建物が存在しうる余地をのこしているが, 遺構として残存しない。正殿SB7200の前には仮設的な小規模建物が3回にわたって建替えられており, そのうちもっとも古いSB6680をこの時期にあてた。この建物はSB7200の北面階段と同位置に想定しうる南面階段位置をさけており, 本来は南面にも3個の階段が存在したことをしめしている。

東外郭には南北溝SD3765を掘り, それに築地回廊内からの排水をうけている。SD3765の北端は不明瞭だが, 北部では後の南北溝SD3715と同位置にあり, それが西に直角に折れてSD3765に連ったのではあるまいか。東外郭の北部に3棟の小規模建物SB8330, SB8315, SB8234がある。建設時の雑舎にも比定しえようが, その位置が築地回廊の東面北門位置に接していることから, 警固の衛士などの詰所とかんがえられよう。なお, 後の調査によって, 第1次朝堂地域ではSD3765の約18m東で古い南北塀SA8410が確認されているが, この南北塀が東外郭でどのように展開するかあきらかでない。

北外郭の状況は以前に報告した考察とはかなりことなるところとなった。すなわち, 第I期の官衙建物から2棟の建物がへり, 西方に想定した園池SG149は旧地形を造営時に埋立てたものであり, また後にも若干の攪乱をうけているものと理解せざるをえなくなった。したがってこの時期の建物は宮の中軸線をはきんで, 東にSB317, 西にSB170を配し, 後方に東西溝SD

1) 『平城宮報告II』p. 34

1 第1次大極殿地域の変遷

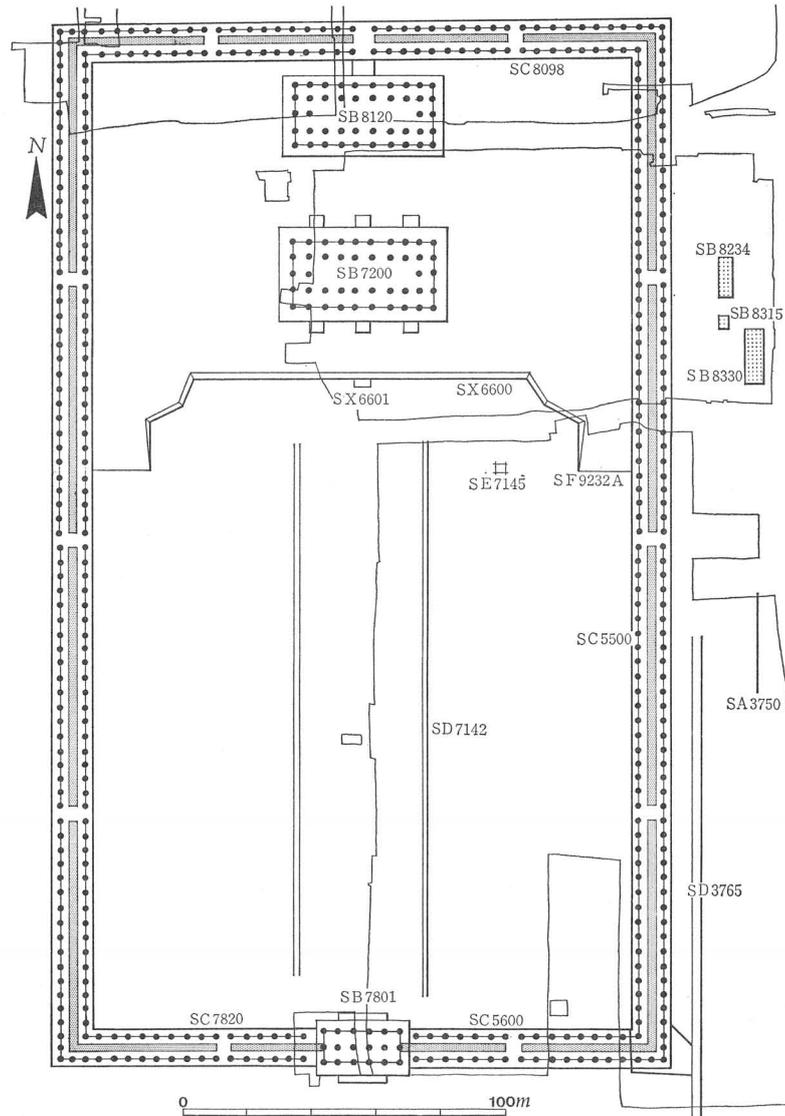


fig. 97  
第I-1期の主要遺構

141が流れるという簡単な建物配置をとる (fig. 50)。

第I-2期(fig. 98) 南面築地回廊SC5600に東楼SB7802を増築した時期である。広場の礫 東楼の増築  
は敷きなおし、南北通路の幅が約14mに狭くなったことが東側溝SD7760によってわかる。同  
時に雨落溝などが部分的に改修されるが、回廊内は基本的に変化しない。

殿舎地区では正殿SB7200の前面左右にたつ方形の小建物SB6636, SB6643をこの時期にあて  
たが、それはさきのSB6680よりも新しいというほどの意味である。また建物SB6605も方形建  
物ののち仮設的にたてられたものとかんがえる。ともかく、2棟の小建物はさきに想定した左  
右の階段位置にあたっており、この時期の南面階段は中央のみの1個に減少したことがわかる。  
東外郭では南北溝SD3765が埋立てられ、築地回廊の東南隅に朝堂院の塀SA5551A, SA5550A 朝堂院  
がとりつけられた。つまり、この時期を特徴づける点は朝堂院がとりつけられたことであり、  
SB7802の建設も朝堂院からの偉観を配慮したもののようである。しかし、SB7802とSA5551A  
・SA5550Aを同時につくった証拠はなく、朝堂のほうがさきに成立している可能性もある。  
後述するように『続日本紀』によれば霊亀元年には朝堂院が確実に存在している。SD3765の  
廃止にともなって、内裏・第2次大極殿地域との境界に新しい南北溝SD3715がつくられた。

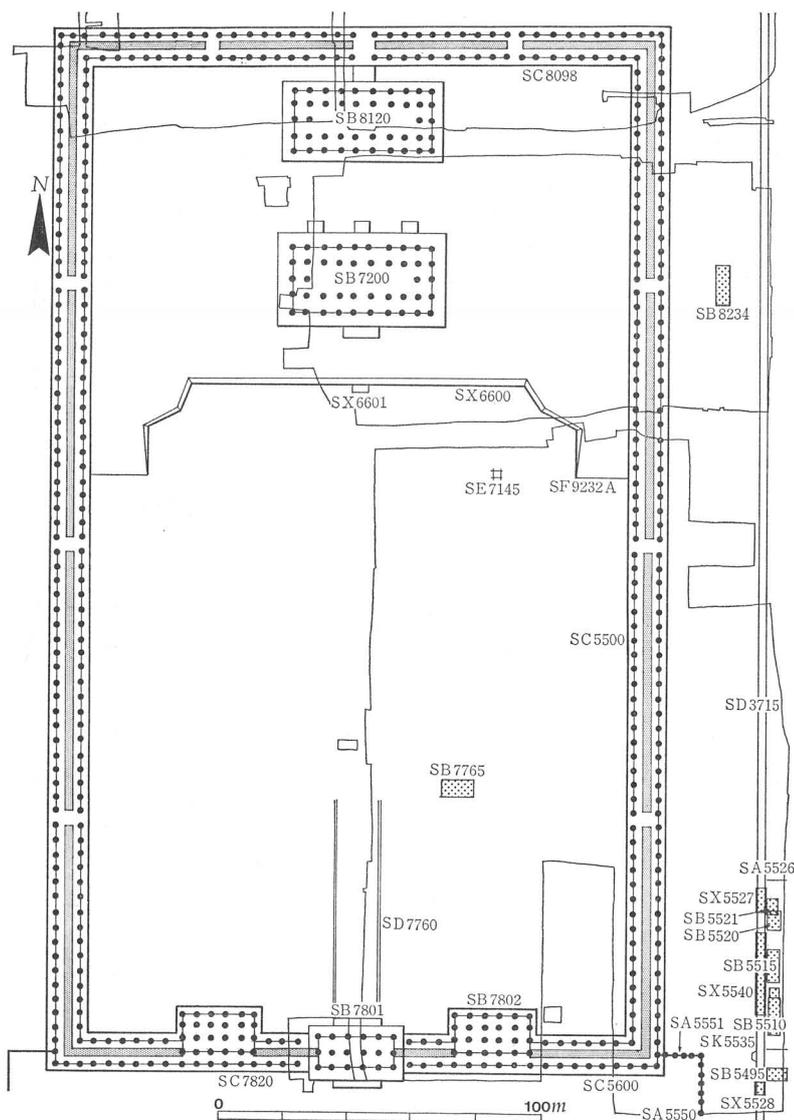


fig. 98  
第I-2期の主要遺構

このSD3715と第2次大極殿西外郭とはさまれる幅のせまい地帯にSB5495をはじめとする小規模建物が南北につらなり、溝上には橋状の施設SX5527, SX5540, SX5528がつくられる。こうした小建物がさらに南にのびていることが、後の調査で判明しているのので、朝堂院の建設にともなう仮設小屋に比定しておく。

北外郭については、第I-1期と大きな変化がないものとかんがえる。

**第I-3期**(fig. 99) 東面築地回廊SC5500が撤去され、南北塀SA3777に変えられる時期である。殿舎地区の正殿SB7200もこの時期に撤去されたものとする。これは後述のように恭仁京遷都に際して大極殿と歩廊を移建したことにあてているからである。この地域の第I-4期の使用状況をしめすSB7802出土木簡によれば、殿舎地区の建物がすべて消失したとはかんがえられないので、後殿SB8120については残存したものと推定する。東外郭、北外郭については大きな変化がなかったようである。広場の井戸SB7145については一応この時期まで存続するものとしたが、SB7200などとともに撤去されて存在していないかもしれない。

**第I-4期**(fig. 100) 第1次大極殿地域が復興する時期である。正殿SB7200は再建されなかったが、東面築地回廊SC5500が再建された。同時に、回廊内からの排水を南北溝SD3715に導

東面築地回廊の再建

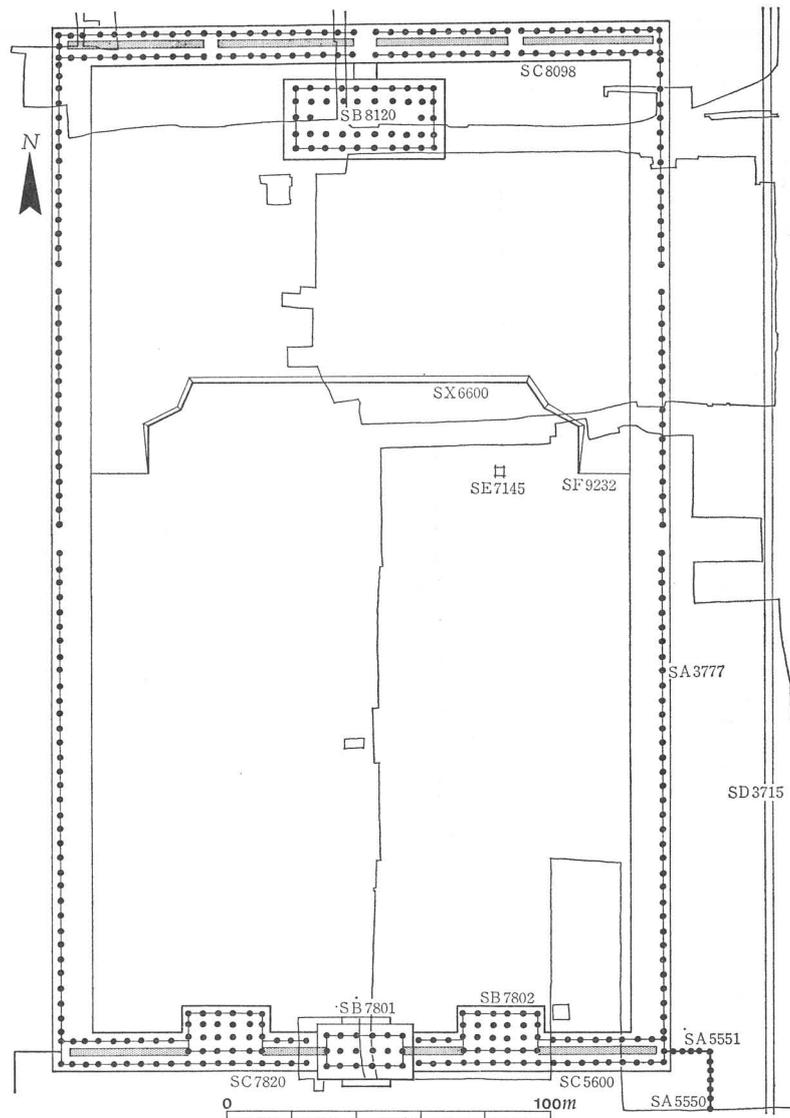


fig. 99

第I-3期の主要遺構

く数条の木樋暗渠や開渠がつけられた。南面築地回廊 SC5600の北側に東西溝SD5590を掘り、北方からの雨水などをここに集め、南東隅の木樋暗渠で回廊外に排水するように改めた。第I-1・2期の広場南部には多量の砂質土が堆積しており、この地区の滞水状況を物語っている。そこで、郭内の排水に留意した結果、排水施設がSC5500の南部に集中することになったものとおもわれる。また、第I-1期に設置した回廊基壇縁の盲暗渠が、このころには目詰りして機能が失われたことによるのであろう。回廊の雨落溝も改修されている。

東外郭では、南寄りのところで東西堀 SA3780と東西溝 SD3775とで遮蔽し、門SB3746を通過して往来するようにした。北外郭には中軸線をはさんで東西にわかれる建物群が存在するが、北辺に東西溝SD126をめぐる程度で、とくに建物を圍繞する施設をつくっていない。

第I期の地割り(fig. 101) はじめに第1期の第1次大極殿地域が平城宮全体のなかで、どの宮内地割りように設定されているかという点についてのべよう。大極殿南門(SB7801)と朱雀門心々距離は  $533.04\text{m} \div 0.296 = 1800\text{尺}$  (大宝大尺1500尺、以下大宝大尺は大と略する)。この長さは平城京地割り

1) さきにのべたように平城遷都初期に想定される遺構の基準尺は0.294~0.296と短い。ここで

はその大きいほうの数値をとった(『平城宮報告 IX』p. 86)。

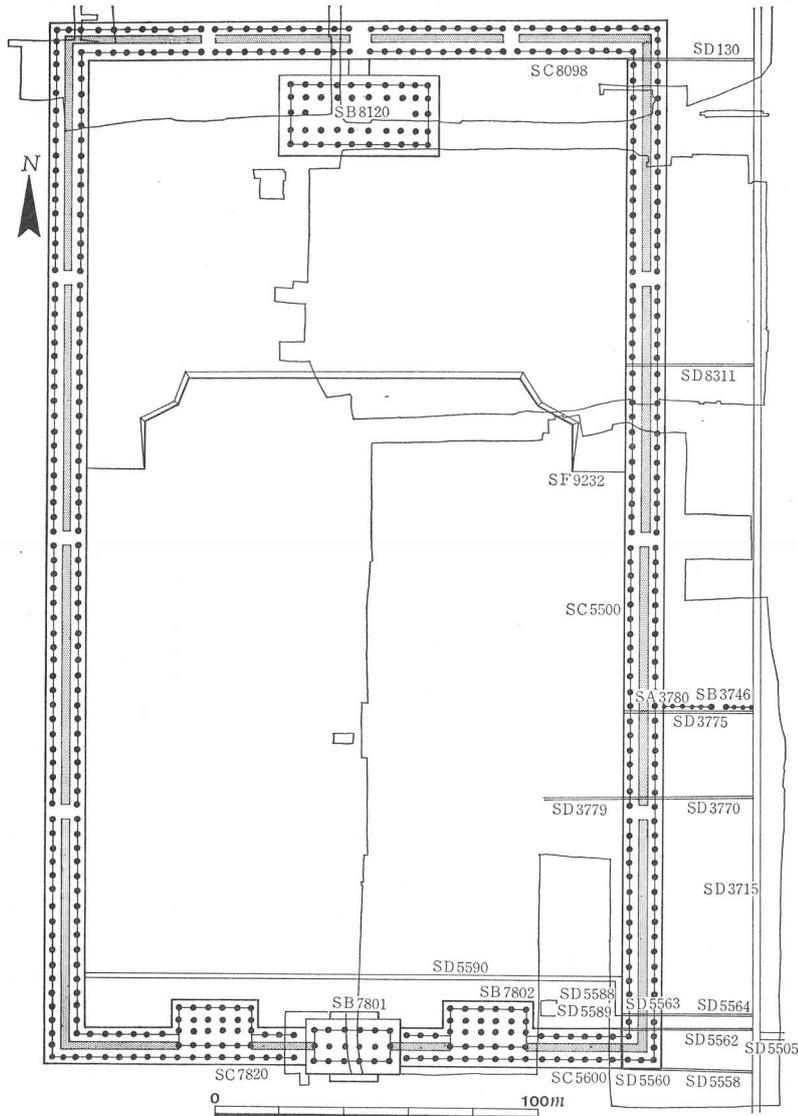


fig. 100  
第I—4期の主要遺構

計画の1坊分の長さと同じく、平城宮の南北長さが2条分の長さを基準にしていることからすれば、朱雀門から1条分の長さをへだてた平城宮の北半に第1次大極殿を割りつけたことを意味する。平城宮の宮城諸門は条坊地割り計画にもとづくものであるから、西面の佐伯門からの南北方向の道路よりも大極殿南門が若干北に寄っていることになる。ちなみに、南に位置する第1次朝堂院南門と朱雀門心々距離は  $248.84\text{m} \div 0.296 = 840.4\text{尺} (\approx 840\text{尺}, \text{大}700\text{尺})$  となり、第1次朝堂院の南北長は  $284.2\text{m} \div 0.296 = 959.8\text{尺} (\approx 960\text{尺}, \text{大}800\text{尺})$  である。

第1次大極殿北面築地回廊と南門との心々距離は  $317.7\text{m} \div 0.296 = 1072.9\text{尺} (\approx 1080\text{尺}, \text{大}800\text{尺})$  である。それに対して北面築地回廊と北面大垣との心々距離は  $170.1\text{m} \div 0.296 = 575\text{尺} (\approx 580\text{尺}, \text{大}483\text{尺})$  と端数を生じることになる。こうしたことから、南北方向の地割りは朱雀門を起点とし、大宝大尺100尺単位のラウンドナンバーで朝堂院と大極殿の位置を決め、端数が後方にあつめられたことを意味する。

第1次大極殿地域の中軸線と東面築地回廊との心々距離は  $88.3\text{m} \div 0.296 = 297.3\text{尺} (\approx 300\text{尺}, \text{大}250\text{尺})$  であり、全体の東西幅を  $176.6\text{m}$  (600尺, 大500尺) に復原しうる。一方、内裏地域の北面塀SA486は総長  $177\text{m}$  (600尺, 大500尺) であり、第1次大極殿回廊との間に300尺 (大250尺)

1 第1次大極殿地域の変遷

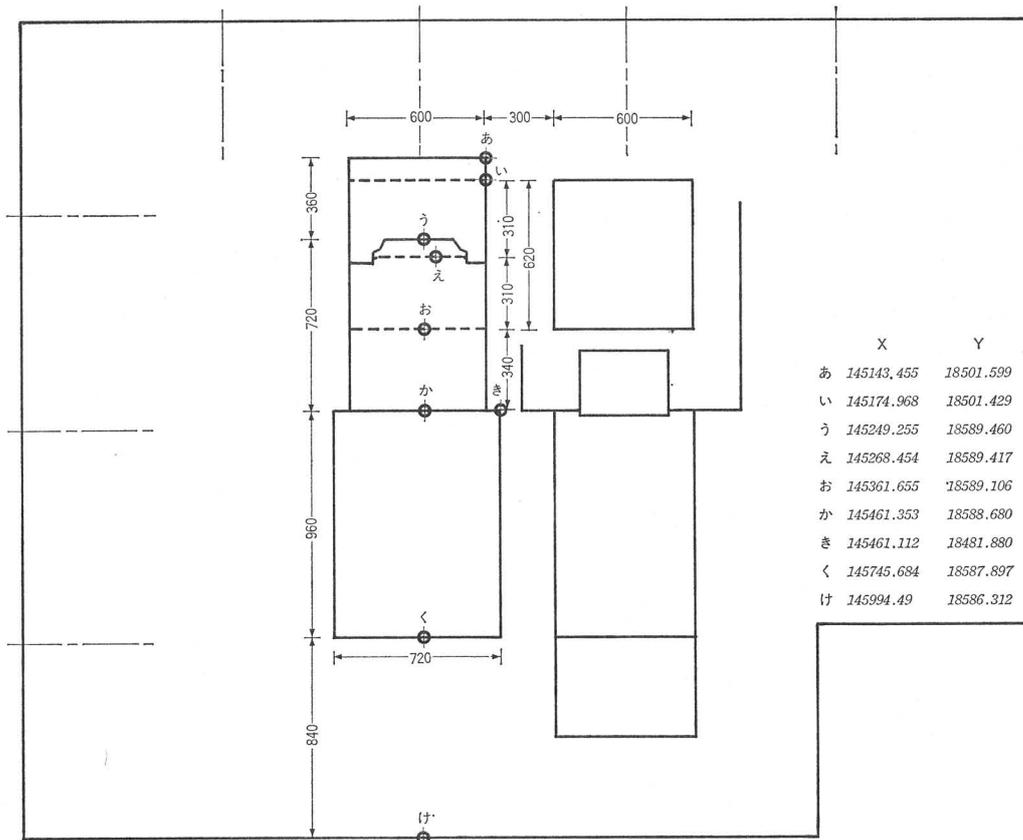


fig. 101 平城宮内における第1次大極殿地域の地割り  
 数字は天平尺, x.y.の値は平面直角座標系  
 第6系, 単位m, 値は負数である。

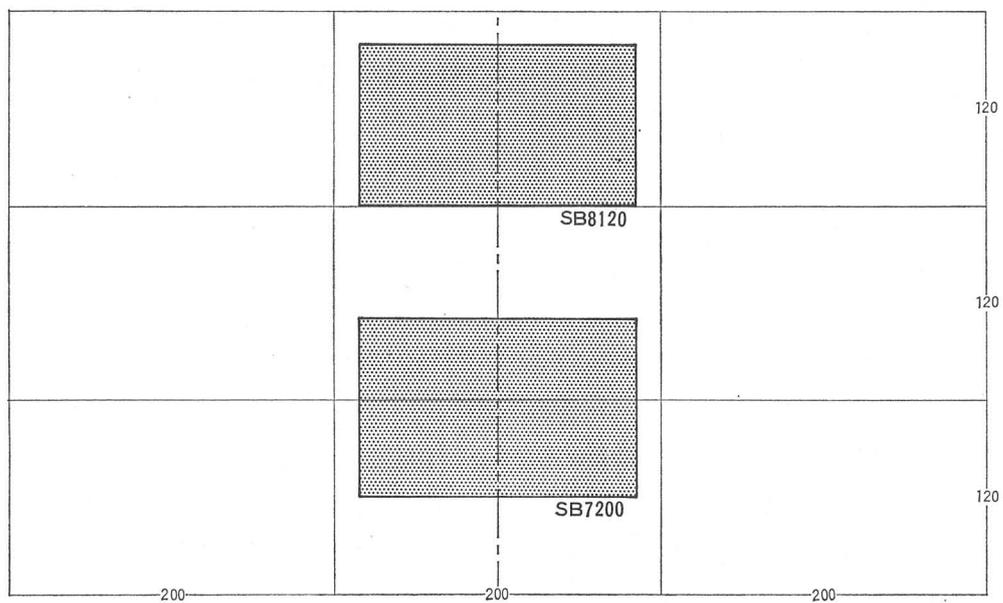


fig. 102 第I期建物の配置計画

## 第V章 考 察

の間隔をおくことが判明している。すなわち、南面宮城門である西の若犬養門と東に位置する壬生門との心々距離1800尺を3分し、その中央部分を第1次大極殿地域にあてたのである。なお、内裏地域と第1次大極殿地域との中間点はほぼ南北溝 SD3715 にあたり、若犬養門中軸延長線と第1次大極殿地域との中間点は佐紀池からの水を導く南北溝 SD3825 とほぼ等しい。

このようなことから、第1次大極殿地域と外周の大垣および宮城諸門とが密接な位置関係にあることが判明した。しかしながら、それは計画上のことであり、実際の施工では大垣などは別個に建設されたであろう。このことを裏付ける資料が、中軸線の振れである。朱雀門心と朝堂院南門心とを結ぶ中軸線は平城宮方位に対して西へ  $0^{\circ}32'5''$  振れており、朝堂院南門の中心は朱雀門の中心にくらべて1.06m西に偏していることになる。つぎに朝堂院南門心と大極殿南門心とを結ぶ中軸線は平城宮方位に対して  $0^{\circ}01'13''$  西へ振れ、大極殿南門の心が0.1m西に寄っていることになる。大極殿南門心と大極殿北面築地回廊心とを結ぶ中軸線は  $0^{\circ}04'33''$  西へ振れ、北面築地回廊心が0.3m西によっていることになる。つまり、朝堂院、大極殿地域における中軸線の振れは小さく、施工誤差として看過できる数値であるのに対し、朱雀門と朝堂院南門に存する中軸線の振れは大きく、両者の間に測定基準に違いがあることをしめしている。

この時期の地割りを特徴づけるもう一つのことは、( )内で示したように大宝大尺によれば、大 宝 大 尺 ラウンドナンバーをえられる点である。このことについては、藤原宮、難波宮などとの比較が必要であろうが、第1次大極殿地域が藤原宮からの遷都当初から存在したことを裏付ける有力な手掛りとなる。

**第I期の建物配置** (fig. 102) 殿舎地区における復原した2棟の建物はともに中軸線上にある。正殿 SB7200の心(N196)は、埴積擁壁 SX6600(N163)から北面築地回廊心までの距離106.5m(360尺、大300尺)の南1/3地点とほぼひとしく、後殿 SB8120の推定基壇前縁(N232.2)が北1/3地点とほぼ一致する。一方SX6600とSB7200基壇前縁との距離は18.22m(≒60尺)であり、SB7200とSB8120との基壇間隔は21.4m(約70尺)になる。2棟の建物はともに東西の築地回廊心々距離を3分した中央におさまっている。以上のようなことから殿舎地区の地割りは、殿舎地区を9等分したのち、中心部の南2画を正殿、北1画を後殿にあてたものと推測される。

第I—2期に増築したSB7802の東西心(W225.15)は築地回廊基壇の東入隅部(W184.5)から南門の中軸線までの距離を2等分した地点とほぼ等しいところにあり、南面築地回廊の内法を4等分した地点に東西建物の心をおいたことが想定できる。

### C 第II期の遺構

第II期の遺構では、殿舎地区東第1群建物のSB6660とSB6655に、或いはSB7151増改築が認められる程度であり、建物の重複関係によって小期にわけることができない。しかし、中央建物群のSB7150の柱抜取痕跡からは、他の建物の場合よりも若干古い平城宮土器Vが出土している。後述するようにSB7150を西宮寝殿にあてると、宝亀元年(770)に称徳天皇はここで崩御したことになる。平安時代の例では天皇の没後その寝殿をとりこわした慣例があるので、SB7150は称徳天皇崩御後にとり壊した可能性が強い。第1次朝堂院を画する塀SB5551A、SB5550Aはこの時期に築地に改められた。ただし、今回の調査地ではそれを裏付ける資料を発見しておらず、後の朝堂院地域の調査成果にもとずいている。

1 第1次大極殿地域の変遷

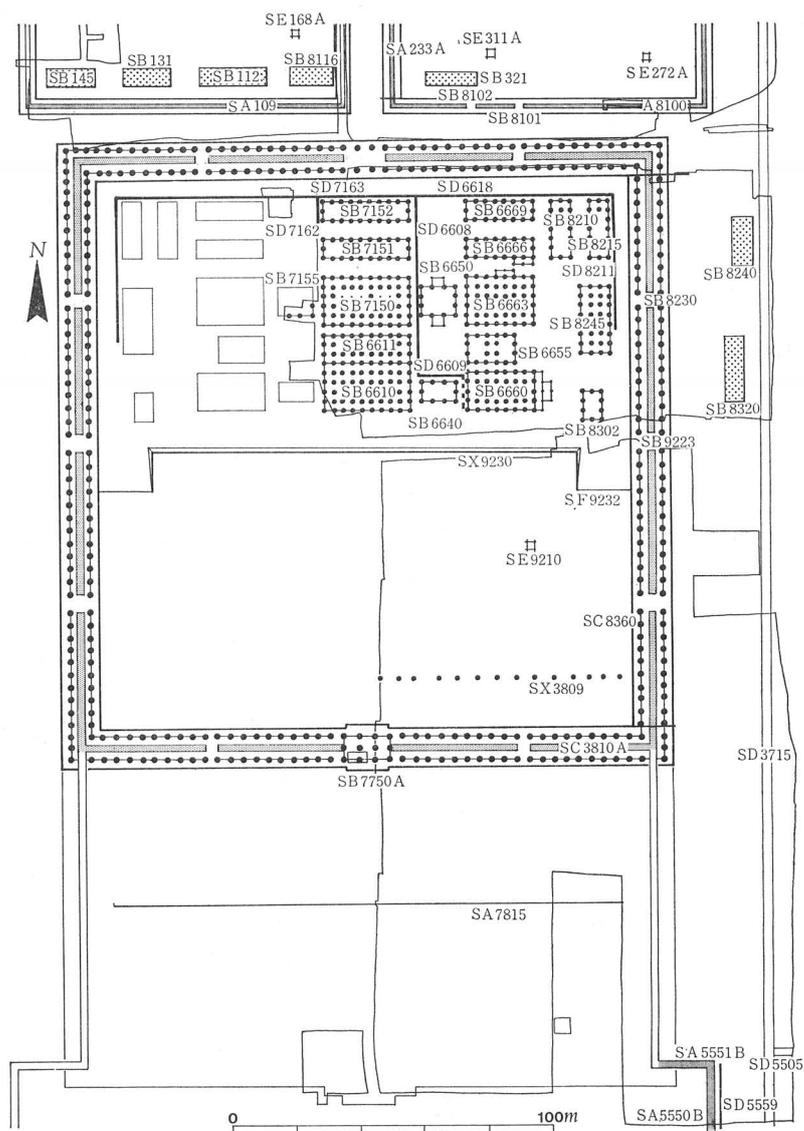


fig. 103  
第II期の主要遺構

この時期に南面と北面の築地回廊を内側によせるのであるが、その際、6 ABE—K・M地区における第I期東面築地回廊南部の状態が問題となる。この場合つぎのような状況が想定できるであろう。1 SC5500がなお築地回廊として存続する。2 SC5500の築地のみ存続して朝堂院の築地と連結する。3 SC5500を完全に撤去して、どのような遮蔽物も設けなかった。

築地回廊の縮小

遺構としてはなにも存在しないのであるが、ここでは第1次大極殿地域と第1次朝堂院地域との連続性と、第1次朝堂院の北面築地が北面の全域を遮蔽した痕跡がないことから、2の立場をとり、この時期の東面築地回廊 SC3810Aと朝堂院築地 SA5551Bを結ぶ築地が存在したものとかがえる。傍証ではあるが、この時期の南面築地回廊外の東西塀SA7815の東端が、かつての回廊基壇付近で停止しており、基壇とともに築地が存在したことが想定できる。ただし、第1次朝堂院の詳細な時期区分や終末年代については、現在進行している同地域の発掘調査成果にもとずいて後考したい。広場地区の礎敷も整備されるのであるが、井戸SE9210を新設するほかは建物などを建てた痕跡はない。

1) もし築地を設けていたらSB7802南側柱掘形の埋土に土層変化が生じているはずである。

第V章 考 察

東外郭では依然として南北溝 SB3715 が中央幹線水路としての機能を維持する。回廊の東面北門外に2棟の建物がたつ。第I期の場合のように衛士などの詰所にあてておく。北外郭の大膳職としての官衙はこの時期に成立する。この地域は3小期にわかれるが、すでにふれたのでここでは再論しないことにする (p. 94参照)。

**第II期の地割り** すでにのべてきたように、この時期の築地回廊は第I期のそれを縮小したものである。東西幅は第I期の規模を踏襲し、南北の長さが縮まるのである。すなわち、南面築地回廊 SC3810A は第I期の南面築地回廊位置から北へ99.85m(333尺)移動し、北面築地回廊 SC6670 は第I期の北面築地回廊位置から南へ31.52m(105尺)移しているのである。したがって、南北の長さは186.08m(620尺)となり、東方の内裏地域とほぼ等しい方形に近い平面形をとっている。第I期から第II期の間には基準尺の変化がある。この時期の殿舎地区における建物の基準尺が29.9に復原できることからすると、東西幅は590尺、南北長620尺となる。また、この時期に改修された石積擁壁 SX9230 は南北2分の1地点で東西にのび、この地域を南北にわけている。そして、南半分は依然として広場である。

**第II期の建物配置** (fig. 104) 殿舎地区の中央と東半分とで15棟の建物を検出したのだが、建物配置を左右対称にかんがえると全体で27棟の建物が林立することになり、回廊をくわえらんと敷地面積に対する柱心での建築面積の比は約37%となり、内裏地域の盛時における建物の棟数に比肩している。しばしばのべてきたように建物配置はすこぶる計画的であり、殿舎地区全域を10尺(2.99m)方眼に割り、個々の建物を配している。建物群は石積擁壁と北面回廊心からそれぞれ内側に45尺へだたり、東西回廊心からそれぞれ40尺内側に位置し、東西510尺、南北220尺の長方形区画内におさまる。その内部に原則として柱間寸法を10尺とする建物を中心部と外縁部とに大別して配置したようである。すなわち、中心部は南北140尺、東西350尺の長方形区画であり、中心に間口9間の3棟を南北に並列する正殿(SB6610, SB6611, SB7150)をおき、廂のある脇殿を四隅におき、その間に主殿と脇殿、脇殿と脇殿とを結ぶやや小さい建物を介在させる。外縁部は、中心部である長方形区画の外側をめぐる幅80尺のコ字形の部分であり、中

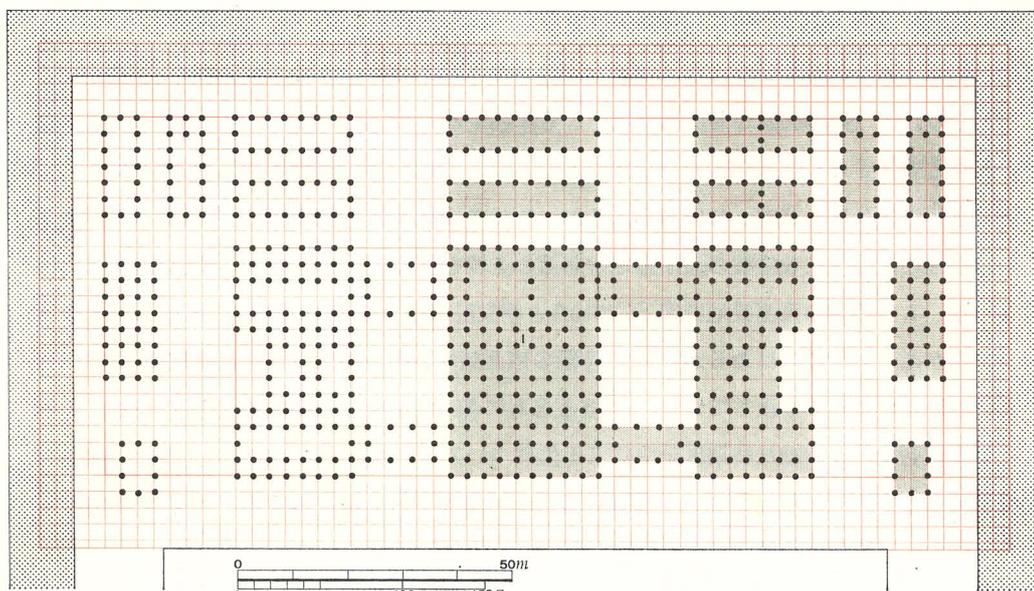


fig. 104 第II期建物の配置計画

心部の後方には東西棟、側面には南北棟の建物を配している。復元的にいうならば、この正殿と脇殿の後方に計6棟を配し、脇殿の左右にそれぞれ4棟、合計14棟の付属建物を配置していることになる。

## D 第Ⅲ期の遺構

第Ⅲ期の遺構については、2小期に区分した。たとえば東北隅のSB8219・SB8218に建替えがみられるものの、全体として建物配置に大きな変更がない。一方、正殿SB6620の後身建物とみられるものがあるが、規模が格段に小さく、他の建物群と併存したとはかんがえられない。こうしたことから、後述のように第Ⅲ-1期を平城上皇の内裏にあて、第Ⅲ-2期をそれ以後のものともみなしている(fig. 105)。

**第Ⅲ期の建物配置**(fig. 106) ここでは第Ⅲ期当初の建物配置について検討しよう。この時期の建物は第Ⅱ期とことなり、廂を広くとることを特色とし、すべての建物が10尺の柱間寸法でないため、第Ⅱ期のように単純な方法では解決しない。殿舎地区は第Ⅱ期と同様に南北は北面築地心から石積擁壁まで310尺、東西は築地心々距離590尺の長方形区画をもつ。この区画内を東西・南北に画する塀は、中軸線および北面築地・石積擁壁を基準とした10尺方眼で計画的に配置されているようである。 10 尺 方 眼

中軸線上にある正殿SB6620の棟通りは石積擁壁SX9230の北110尺、北面築地の南200尺のところであり、殿舎地区南北長さをほぼ3分した南3分の1線上に位置する。同じく中軸線上にある後殿SB7170の棟通りは北面築地の南80尺にあり、SB6620との心々距離は200尺である。脇殿の位置は、正殿と後殿によって規制されているようである。南に位置するSB6622の棟通りは中軸線の東110尺にあり、それは正殿と石積擁壁との距離にひとしい。また、北妻柱列は正殿の南廂にそろえている。SB6622の東にあるSB8300の棟通りは中軸線の東190尺に位置し、南妻柱列をSB6622にそろえているようである。北に位置するSB6621は棟通りを後殿のそれにそろえ、桁行の心は中軸線の東100尺にあたる。もう1つの脇殿SB7173は、周囲の正殿、後殿、脇殿SB6621との関係で位置が決められたようである。すなわち、東側柱筋をSB6621の西妻柱筋に、西側柱筋を後殿の東妻柱筋にそろえており、結果的には棟通りが中軸線の東55尺となる。また桁行の心は正殿の北廂と後殿の南廂の間にある。このようにして主要建物の配置がきまり、それを塀でかこんでいる。

北面築地心から160尺、殿舎地区南北長310尺のほぼ中間にあたる地点に東西塀SA6624をもうけ、また北面築地心から40尺南に後殿を画するSA6626を、80尺南に北東隅の附属屋区域を 塀 の 区 画 2分するSA8217がもうけられている。東西を画する塀としては、中軸線から150尺東にSA6625をもうけ後殿SB7170、脇殿SB7173、SB6621、SB7172、SB7209をかこむ区画をつくり、さらにその東に30尺の通路をおいて付属屋区域をかこむSA6629を設けている。また中軸線の東110尺のところSA6623をつくり、正殿の東面を画している。以上の塀はすべて整然として10尺方眼にのる。そして、塀でかこんだ東北隅の区画のなかにはそれぞれの中心に1棟ずつ建物を配置している。なお、広場地区のSB7141、SB92220については第Ⅲ期におく絶対的な根拠がなく、第Ⅱ期に遡る可能性もあることはすでにのべた。

第V章 考察

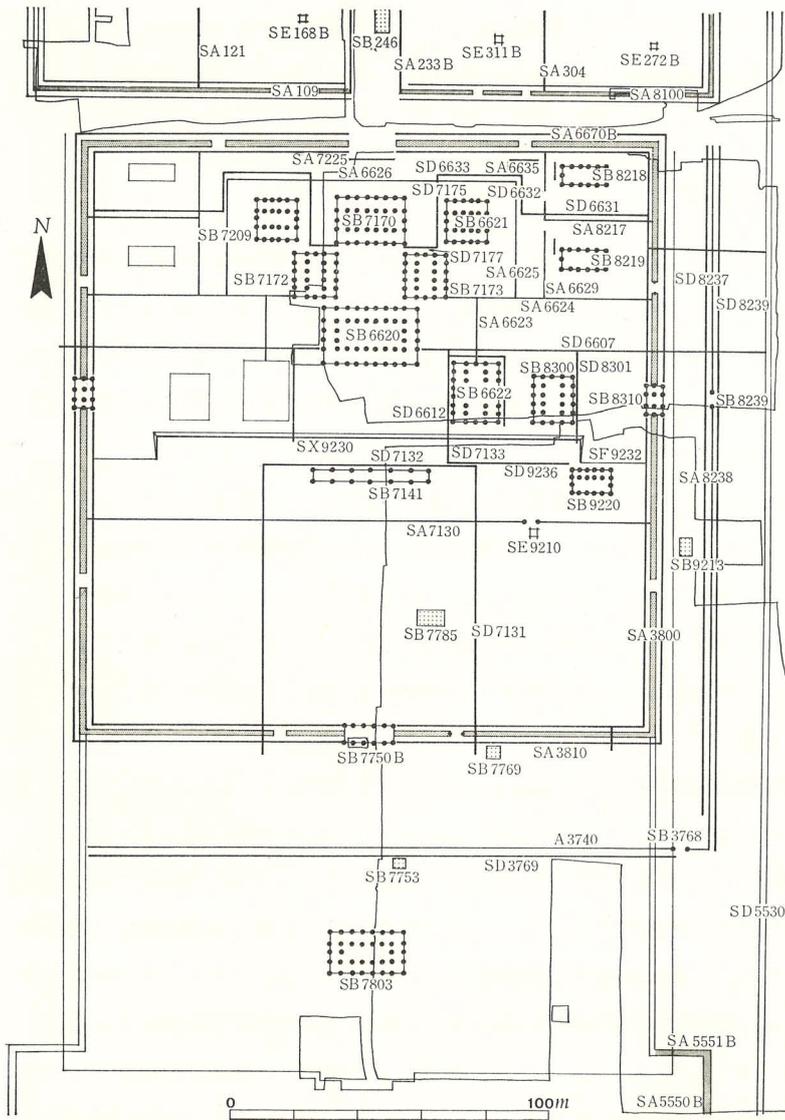


fig. 105  
第Ⅲ-1期の主要遺構

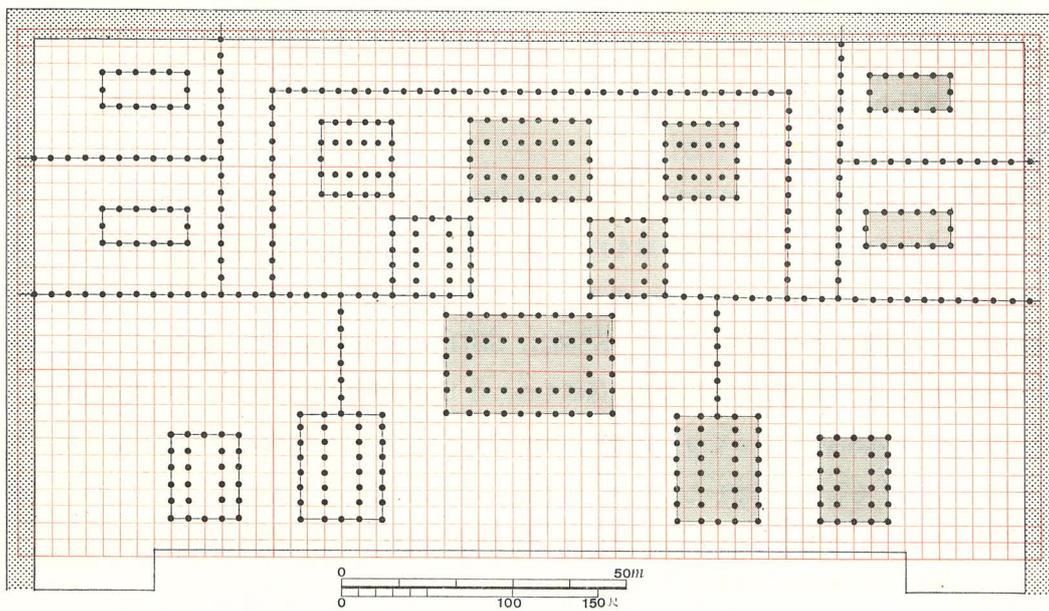


fig. 106 第Ⅲ-1期建物の配置計画

## 2 第1次大極殿地域の性格

四周に長方形の築地回廊をめぐる第1次大極殿の区画は、平城宮でもっとも重要な区画の一つである。ところでこの区画には、すでに述べてきたように第Ⅰ期から第Ⅲ期に至る変遷がみとめられる。この3時期にわかれる各時期の遺構がどのような性格のものであり、『続日本紀』をはじめとする文献史料にみられる宮殿名称にどのように対応するのであるか。この点について、従来から蓄積されてきた先行学説に対する検討をふまえながら、若干の考察をこころみしてみよう。

### A 諸説の検討

この区画についての最初のもともった見解は、関野貞の『平城京及大内裏考』である。関野はこの区画を内裏とかんがえ、その南につづく朝堂院風の南北に長い地域を南苑に比定し、さらに東方で大極殿や十二堂などの土壇の一部が残存するところを朝堂院にあてた。また、後に問題にする西宮の所在地を平城宮西辺に位置する「大りの宮」という小字名のあるところとし、東宮は朝堂院の北、内裏の東に推定した。一方、『続日本紀』にしばしばあらわれる中宮については、その機能が内裏とほぼ同じであることから、内裏の別称とかんがえたのである。

関野説

関野貞のつぎに提起された説は、『平城宮報告Ⅰ』<sup>1)</sup>で提起し、『平城宮報告Ⅱ』で補足した説である。そこでは、平城宮造営当初には宮の中央に第1次内裏、第1次朝堂院がつくられ、天平12年(740)の恭仁京遷都ののち、天平17年(745)の平城遷都を上限とし、宝字年間の平城宮改作を下限とするいずれかの時期に東方に第2次内裏、第2次朝堂院を新設したとかんがえた。関野が地上にのこる土壇や畦畔あるいは字名によって宮殿名を比定せざるをえなかったのに対して、この新しい見解は第2次の大極殿と内裏の1郭を発掘調査した成果を加味しているところに基本的な相違がある。すなわち関野が比定した内裏の東部、つまり東宮比定地の発掘調査によって、大規模な区画をもち、平安宮内裏にきわめて類似する遺構の存在があきらかになったことによる。以後、この仮説は当研究所の発掘調査を進める過程のなかで継承されることになる。しかしながら、発掘調査が本格的に進むと予期せぬ事実が次第に浮び上ってきた。すなわち、その後第1次内裏と第2次内裏とを平行して調査する過程において、すくなくとも、両地域の創建時期には、30年におよぶ時間的なへだたりはないことがあきらかになった。つまり、第2次内裏の遺構もおそくとも神亀年間頃に造営されていることがあきらかになったのである。さらに、関野貞説以来、方八町と想定されてきた平城宮が、1964～1967年にかけての調査によって、東方に約250mほど拡大していることが判明し、この地域を東宮ないしは東院に比定するのが望ましいとかんがえるにいたった。このようにして、発掘初期に確立した第1次内裏・第1次朝堂院、第2次内裏・第2次朝堂院という仮説に対して、修正をくわえざるを得ない事態が生じてきたのである。

発掘調査による改訂

第1次、第2次の内裏の発掘がともに進行し、両地域の遺構に対する比較検討が容易になっ

1) 『平城宮報告Ⅰ』p. 16

2) 『平城宮報告Ⅱ』p. 111～112

阿部説 た時期に、新しい見解を示したのが阿部義平の「平城宮の内裏・中宮・西宮考」である。阿部は文献史料にみえる中宮・西宮・東宮の三宮をそれぞれ時代によりことなる宮殿の固有名称とんかがえ、一つ一つの名称について、対応する遺構を探しだすという手順をふんだ<sup>1)</sup>。その結果、奈良時代当初には第1次内裏を中宮、第2次内裏を西宮、東拡張地域を東宮とし、それぞれの宮殿が時代とともに変化する過程を想定した。このことから、西宮と内裏とは同じ性格であり、西宮を内裏の別称とみた。阿部説のなかで、もっとも根拠が明白な部分は、天平18・19年(746・747)頃には第2次内裏が西宮とよばれたこと、および平城上皇期の西宮が第1次内裏にあたるかとするところである。前者の根拠は内裏北外郭にある土壙SK820から出土した天平18・19年頃の西宮兵衛についての木簡であって、この付近に兵衛の警護する西宮があったことを推定させるものである。後者の根拠は『類聚符宣抄』にみえる天長2年(825)の平城宮西宮に関する官符であり、平城上皇の宮が西宮とよばれたことをしめしている。また、発掘調査で検出した遺構によると、第1次大極殿地域ではあきらかに平城上皇時代の宮殿が存在しているが、内裏地域ではその時期の遺構がない。このようなことから、第1次大極殿地域の平安時代遺構を平城上皇の西宮にあてたのである。

その他の説 阿部の説は、第1次大極殿地域の発掘調査がなお進行中に提起されたものであり、その後の発掘経過からみると、なお検討の余地をのこした。その後、狩野久<sup>2)</sup>、鬼頭清明<sup>3)</sup>は、第1次大極殿地域の創建遺構が、和銅遷都時における大極殿であり、そこには前期難波宮、藤原宮、平城宮第2次大極殿などとはことなる殿舎配置がみられることから、唐長安大明宮の含元殿を模倣した当時としては斬新な立案計画のもとに建設されたものであるとした。今泉隆雄<sup>4)</sup>は第1次大極殿地域のほほととのった発掘成果と内裏地域、第2次大極殿地域の発掘成果を斟酌して、平城宮の主要宮殿の比定を行なった。今泉は和銅創建の大極殿と朝堂を第1次大極殿地域とその南に展開する第1次朝堂院地域にあてた。養老5年以降、大極殿と朝堂院は東の第2次大極殿、第2次朝堂院地域にうつされ、旧地には中宮・朝堂の呼称があたえられたとする。内裏地域については阿部の説を支持して西宮にあて、東院についても同様に東張出し部をあてるのである。その後、恭仁宮大極殿および平城宮第2次大極殿の発掘調査が行なわれるに至って、これも再考をよぎなくされた。以上のような諸説を尊重しながら、いま一度第1次大極殿地域の変遷をふりかえてみよう。

## B 第I期遺構の年代

開始と終末 この時期の遺構が和銅創建時にさかのぼることは、短期間のうちに消滅する東外郭の南北溝SD3765から和銅の年紀をもつ木簡が出土していることや、全体のプランが大室大尺に準拠していることによってあきらかである。南面築地回廊に付設された東棧SB7802の柱抜取痕跡から天平勝宝5年の年紀がある木簡が出土しており、伴出の土器が平城宮土器IVにぞくし、それと同型式の土器が、埴積擁壁SX6600を埋立てた埋土下部などから発見されていることはす

1) 阿部義平「平城宮の内裏・中宮・西宮考」『研究論集II』奈文研学報第23冊 1973, p. 71~91  
2) 狩野久「律令国家と都市」『大系日本国家史I 古代』東京大学出版会 1975, p. 219~254

3) 鬼頭清明「日本における大極殿の成立」『古代史論叢』中 吉川弘文館 1978, p. 47~74  
4) 今泉隆雄「平城宮大極殿朝堂考」『関見先生還暦記念日本古代史研究』吉川弘文館 1980

でのべたところである。このようなことから、終末については天平勝宝5年(753)が一応の目安となることについては問題ない(fig.97~100参照)。

第I期は4小期に細分されるが、第I-1期を和銅創建時にあてることはいうまでもない。第I-2期の年代については資料を欠くが、南北溝SD3765を東方に移動したものと想定される南北溝SD3715が、霊亀元年(715)の年記をもつ木簡をふくむ土壙SK5535を破壊していることから、霊亀年間を遡ることはない。一方、SD3715の下流に位置する堰SX8411から、神亀~天平初年の造作を物語る木簡が出土しており<sup>1)</sup>、なかに「西高殿」・「東高殿」・「高殿料」など高殿の建物名称を記すものがあり、『続日本紀』にも南楼・南高殿として出現している<sup>2)</sup>。この高殿をSB7802に比定するならば、第I-2期を神亀~天平初年の時期にあてることができる。朝堂院の出現については、和銅6年のこととして、『三代実録』元慶8年5月29日条に朝堂への出入のことをのべた部分がある。しかし、これは第1次大極殿地域内でも想定しうる。ところが、霊亀元年正月の新羅使接待の記事では、中門(朝堂院南門)で諸方の楽を奏し、南闈(大極殿南門)で大射しており、大極殿と朝堂院が別々の区画であったことをしめしている。このことから和銅末年頃に朝堂院が形成されたものとかがえる。

後述するようにこの地域の正殿を創建時の大極殿に比定するのだが、『続日本紀』天平15年11月条に「初て平城の大極殿并に歩廊を壊して、恭仁宮に遷し造ることここに四年、その功纔かに畢りぬ」とのべられている大極殿をそれにあてるならば、第I-2期の終末は天平12年(740)頃になる。第I-3期、第I-4期の年代を探る直接の手掛りはないが、第I-3期を恭仁宮時代にあて、第I-4期の始まりを天平17年(745)の平城遷都後にあてておく。その終末についてはすでにのべた。

『続日本紀』にのべる恭仁宮へ移建した平城宮大極殿が、今回報告する第1次大極殿なのか大極殿東方の第2次大極殿なのかを検討する必要がある。幸いここ数年の間に恭仁宮大極殿<sup>3)</sup>、平城宮第2次大極殿の発掘調査が完了しており<sup>4)</sup>、さらにかつて調査された藤原宮大極殿も比較対象になしうる<sup>5)</sup>。結論的にいえば山背国分寺金堂を旧恭仁宮大極殿とすれば、SB7200をその前身建物にあてるのがもっともふさわしい。SB7200はわずかにのこった基壇の地覆石抜取痕跡から、53.1m(180尺)×29.5m(100尺)の基壇に、桁行9間(45.1m)、梁間4間(20.7m)、柱間寸法は桁行17尺(5.0m)等間、身舎梁間18尺(5.3m)に廂17尺(5.0m)を想定した。恭仁宮大極殿では53.1m×恭仁大極殿28.2mの基壇に礎石および根固め石が残存しており、桁行9間(44.7m、基準尺30cm、以下同じ)、梁間4間(19.8m)の四面廂建物が復原されている。その柱間寸法は桁行の両端間15尺(4.5m)、中の7間を17尺(5.1m)等間とする。梁間では身舎を18尺(5.4m)とし、廂を15尺(4.5m)とする。平城宮第2次大極殿は、46.0m(155尺)×23.8m(80尺)の基壇をもち、桁行9間(129尺)、梁間4間(54尺)の四面廂建物である。柱間寸法は身舎の桁行・梁間とも15尺(4.46m)等間とし、廂の出12尺(3.57m)、基壇の出13尺(3.87m)となる。これによって、同じ9間4面建物であって

1) 加藤優「1976年発見の平城宮木簡」『年報1977』p. 38

2) 国史大系『続日本紀』天平8年正月の条の南殿は金沢文庫本では南楼となっており、天平20年正月にあらわれる南殿について紀略では「南高殿」としている。遺構に即してかがえるとSB7802が当時南楼・南高殿とよばれたことになる。

3) 中谷雅治ほか「恭仁宮跡昭和52年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会1978, p. 24

4) 井上和人「平城京大極殿の調査」『年報1979』p. 1

5) 足立康・岸熊吉『藤原宮伝説地高殿の調査二』日本古文化研究所1936, p. 48

## 第V章 考 察

も、平城宮第2次大極殿は一廻り小さく、恭仁宮大極殿になりえないことはあきらかである。なお、平城宮第2次大極殿の下層に7間×4間の掘立柱建物が存在したが、基壇上の建物に建替えを行なった痕跡はない。つぎに藤原宮大極殿についてのべると、かつての発掘調査では基壇は約40m×30mで、7間(114尺, 34.2m)×4間(60尺, 18m)の四面廂建物とされた。この場合の柱間寸法は桁行の両端間を15尺(4.5m)とし、内の5間を18尺(5.4m)とし、梁間は15尺(4.5m)等間である。しかしながら、近年に行われた藤原宮大極殿周辺の発掘によれば、桁行を9間に想定しうる可能性が生じている。この場合の柱間寸法は、身舎桁行・梁間とも17尺等間、廂を15尺にかんがえている<sup>1)</sup>。

以上のようなことから、恭仁宮大極殿の前身建物としてSB7200をあてることは妥当であり、平面プランは恭仁宮大極殿と類似していることになる。殿舎地区から発見される平城宮瓦Ⅰが恭仁宮大極殿からも出土していることも有力な根拠になろう。藤原宮大極殿もSB7200と似た規模であり、藤原宮から移建した可能性がなくはない。しかし、身舎梁間の寸法が短いことは移建の可能性を少なくしている。また、和銅3年正月に藤原宮で行なわれた儀式に大極殿と重閣門が使用された可能性があり、同年3月の遷都時には平城宮大極殿が存在したとすればSB7200は藤原宮から移建したのではなく、平城宮で新築した大極殿とみなしうる。

SB7200を和銅創建の大極殿にあてるならば、7～9世紀の他宮にくらべて大極殿と朝堂院との関係、あるいは内裏と大極殿の位置関係において、かなりことなつた様相を呈していることになる。しかし、大極殿が内裏の南に位置していない宮城プランは長岡宮、平安宮など平城宮以降の諸宮にみられる。大極殿の前面を閣門と回廊で囲わず前面を広場とする点は竜尾壇を設け、平安宮の場合と共通するのである。したがって、内裏とSB7200の位置関係からSB7200を大極殿でないとする意見は成立しない。

一見変則的にもみえる第1次大極殿の形態が、なぜ平城宮創建時に採用されたのであろうか。大極殿の前面を一段低い広場にする宮殿配置という類似性からすれば、唐長安大明宮の含元殿に近い形態といえよう。それは壇の中央に含元殿をおき、左に翔鸞閣、右に棲鳳閣を配し、閣下の広場と竜尾道でむすぶ。一方、本来の長安太極宮では、大極殿前面に殿門を廊で囲む形態が想定されている。しいていえば藤原宮、後期難波宮、平城宮第2次大極殿は、太極宮のパターンにぞくするのである。そして、第1次大極殿は長安城大明宮の新しい宮殿プランにもとづいているようである。しかし、太極宮では大極殿の後に両儀殿を、大明宮では含元殿の後に宣政殿・紫宸殿を配し、日本の内裏的な機能をもつ宮殿をとまなっているため、第1次大極殿のプランがまったくの模倣ともいえない。

四周を築地回廊でとりかこみ、前の2/3を石敷広場とし、後の1/3に殿舎をたてる第1次大極殿は、計画段階において朝堂院を南につくすることを予定しなかった形跡がある。すなわち、早くに埋立てられる南北溝SD3765が朝堂院内の東辺部を貫通しているからである。この溝については、宮造営時の排水溝であり宮殿の完成後には埋立てられるべき一時的な溝とする見方もある。だが、回廊内の暗渠排水がこの溝に注いでいるので、少くとも開鑿当初においては、永続的な施設として掘鑿したとみるべきである。しばしばのべてきたように、大極殿の前面に展開する広大な広場をもつ配置が、第1次大極殿のもっとも大きな特色になっているのである

1) 山崎信二・松本修自「飛鳥・藤原宮跡の発掘調査」『年報1978』p. 44

## 2 第1次大極殿地域の性格

が、朝堂院の設置が考慮されなかったとすれば、回廊域には大極殿と朝堂の機能がかねそねえられていたのではないかと思いたるのである。中国では漢から唐にいたるまで、朝堂は東西二つもうけられるだけで、日本のような十二堂をもうけないといわれる。朝堂は長安太極宮では承天門前の東西にあり、大明宮では左右閣のそれぞれ東西ないしは東南・西南に想定されている<sup>1)</sup>。このようにかんがえてみると、いまはまったく痕跡をとどめないが、SB7200の東西にそれぞれ1棟の朝堂があり、殿下の朝庭とともに各種の朝儀に対応したとする見方も、無稽のことではあるまい。広場地区における第I期の朝堂相当建物遺構の有無については、この地域では礫敷を除去し、地山面まで掘下げているので、もし存在すれば、基壇の掘込地業や地覆石採取痕跡などの片鱗でも検出できるはずである。遺構が存在しないことから、広場地区に朝堂相当の建物がなかったとかがえざるをえない。この場合、やや時期が遅れて建設される南接する朝堂院との関係が問題になる。すなわち、本来は第1次大極殿地域のみで完結すべきなのになぜ朝堂院が設けられたのであろうかという疑問である。いまのところ確固たる解答はもちえないが、一つの見透しを提示しておこう。岸俊男の見解によれば、日本の朝堂院には朝儀・朝参・朝政の三機能をそなえているという<sup>2)</sup>。遷都の当初、藤原宮のように朝堂のような施設が計画されていないことは朝堂院の機能のうち朝儀のみをとりあげ、大極殿の機能と併合したため、大極殿の前に広大な礫敷広場を確保することになったのであろう。この場合、さきののべたように殿舎地区の東西にそれぞれ1棟の朝堂があったものとかがえる。前期難波宮の大極殿相当建物の斜前方に位置する左右の南北棟建物がその存在を示唆する。つまり、唐制にならって儀式を主とする朝堂と大極殿を合体させたのである。さらにいえば、本来は大極殿南門と朱雀門の間に長安城皇城のような曹司の配置を計画したのではあるまいか。第1次朝堂院地域の創設を和銅末年ごろおくことについてはすでにのべた。しかし、計画に反して旧来通りの朝堂院がつけ加えられたことは、再び朝儀・朝参・朝政の機能がこの地域に課せられたことを意味している。つまり、再度藤原宮のような大極殿と朝堂院の関係が復興されたのである。

第1次大極殿地域の正殿を大極殿にあてるならば、阿部らがこの地域を中宮に比定する見方は困難になる。中宮は『平城宮報告Ⅱ』での検討によれば、宮子皇太夫人の御所とする説もあるが、内裏と同一機能を有する殿舎であり、恭仁遷都以前にこの呼称が多く用いられ、授位・賜宴・蕃客献物・読経などの行事が行なわれている。一方、中宮の供養院(天平9年10月20日条)があったり、中宮宮子が崩じていたりするのは(天平勝宝6年7月19日条)、そこが公的儀式や宴会に使用されたとしても、一方には起居の便をもつ居住空間をそなえ、院といわれる小区画に分割されていたことを意味している。第I期の第1次大極殿にはそうした居住空間を想定しえないのであるから、中宮とするわけにはいかない。消去法的ないい方であるが、この点からするならば、中宮は内裏地域の別称とかがえるのが無難である。

この地域が大極殿としての機能をそなえていたのは第I-1、I-2期であり、恭仁遷都以降の使用法については判然としない。大極殿は恭仁宮へ移建されたとはいえ、その後殿は残存したとおもわれる。SB7802出土木簡によるかぎり、天平勝宝5年段階においては南門が衛門府

朝堂

中宮の居住性

1) 佐藤武敏「唐の朝堂について」『難波宮と日本古代国家』塙書房 1977, p. 183~212

2) 岸俊男「朝堂の初歩的考察」『橿原考古学研

究所論集 創立三十五周年記念』吉川弘文館

1975, p. 509~541

大 殿 に警護され、内に「大殿」とよばれる建物が存在しているからである。養老令によれば衛門府の管掌するのは閤門ではなく、宮門である。閤門は大極殿ないしは内裏の諸門にあてられており、したがって大極殿が恭仁宮に移建された後は、大極殿のあつかいをうけていないのである。

### C 第Ⅱ期遺構の宮殿比定

第Ⅱ期は小期に細分されることなく、多少の変更はあるにせよ天平勝宝5年以降に建設がはじまり、長岡遷都まで30年余り存続したとかがえる。終末の年代は、この時期の建物の柱痕跡ないしは柱抜取痕跡から平城宮土器Ⅴが出土していることから決定した(fig. 103参照)。

三殿連続の正殿 この時期、築地回廊は方形に近い平面形に縮少し、後方の殿舎地区に多数の掘立柱建物が林立する。中軸線上に位置するSB6610, SB6611, SB7150は棟をことにするが、連続する建物であり、その面積1,134m<sup>2</sup>に比肩する建物は、他に例をみない。正殿を中心にして左右に計4棟の脇殿をおき、それぞれ廊状建物でむすんで床をひとつながりにしている。このような状況からすれば、その利用形態として大極殿は考慮外であり、居住空間が要請される宮殿をかんがえなければならぬ。とはいえ、殿舎地区の前は一面の広場であり、公的儀場としての使用も可能である。居住性のある生活空間を具備する宮殿としては、この時期の中宮・中宮院ないしは内裏であり、西宮もそれにふくめてよからう。

平安宮内裏 平安宮古図によれば、内裏南半の中心は南殿(紫宸殿)であり、その東に南から春興・宜陽の2殿をおき、西に南から安福・校書の2殿をおき、建物がコ字形にめぐり内側は公的な空間となる。北半は天皇の私的生活の場である常寧殿を中心とした区画である。平安宮内裏に類似する建物配置をとるのは、奈良時代の平城宮では内裏地域であり、それが奈良時代の全期間にわたって存続したことは、発掘調査によってあきらかになっている。だから、内裏の位置についての異論は存在しない。内裏北方の官衙地区にある土壙SK820から出土した木簡によれば、天平西宮 18・19年段階では内裏地域を「西宮」とよんだことがわかる。つまり、その時点では西宮は内裏の別称であった。

中宮院 中宮の呼称は天平勝宝6年以後にあらわれることはない。中宮院は天平17年にあらわれるが、これは居住空間をもつ内裏地域にあてはまる。つぎに中宮院があらわれるのは淳仁朝である。中宮院の位置をしめす史料はのこっていない。ただ、『続日本紀』天平宝字8年10月9日条にあらわれるつぎの記述は、ある程度、中宮・中宮院の位置決定に役立つであろう。

高野天皇遣兵部卿和氣王，左兵衛督山村王，外衛大將百濟王敬福等，率兵數百圍中宮院，時帝遽而未及衣履，使者促之，數輩侍衛奔散無人可從，僅與母家三兩人，步到圖書寮西北之地，立地山村王宣詔曰，(中略) 事畢，將公及其母，到小子門，虜道路鞍馬騎之，(下略)

この記事は仲麻呂の乱に際して、高野天皇が淳仁天皇を淡路国へ配流する部分であるが、注目すべきは淳仁天皇が辿った宮内から宮外へ出る道筋である。中宮院・図書寮・小子門があらわれているが、そのうち小子門の位置がほぼ推定される。小子門を記す木簡が、平城宮東拡張部で南に開く宮城門SB5000付近の溝から発見されているからである。このことから一応SB5000を小子門に比定しているのであるが、たとえそれに当否があるにせよ、小子門が平城宮

の東方に位置する門であることは否定しえないであろう<sup>1)</sup>。したがって、淳仁天皇は中宮院から出て東南の方向へ裸足で歩いたことになり、図書寮の西北の地で詔をうけたのである。図書寮の所在地はまだ明らかでないが、中宮院からさほど遠方にあるとはおもえない。和氣王らは中宮院をかこんで近くに待機していたはずであるから、当然、図書寮の西北の地は中宮院の東南のあたりに接していたとおもわれる。このようにかんがえるならば、中宮院の位置は第1次大極殿地域よりは、内裏地域にかんがえるほうが至当である。これより先、天平宝字6年5月に保良宮から帰ったのちは、淳仁帝が中宮院におり、高野天皇が法華寺に住む状況がつづいていた。それでは第Ⅱ期の広大な遺構に対して、どのような宮殿名をあてたらよいのであろうか。それについては第Ⅲ期の遺構をのべたあとでふれることにしたい。

## D 平城上皇の宮殿

第Ⅲ期の年代は遺構にともなって平城宮土器Ⅵが発見されていることから、平城上皇がこの地に再興した平城宮の遺構にあてることができ、大同4年(809)からおよそ15年間存続したことになる<sup>2)</sup>。第Ⅲ期は第Ⅲ-1期と第Ⅲ-2期に細分でき、第Ⅲ-1期は平城上皇の時代に比定できる。第Ⅲ-2期は1期の遺構をとどめているとはいえ、建物配置のバランスが崩れており、平城西宮が平城上皇の親王に賜与された天長2年(825)以降の遺構とおもわれる。『文徳実録』天安元年(857)3月乙卯条にある「遣六衛府舍人等於平城」という記事は当時なお平城京が都市機能を維持したことをしめし、第Ⅲ-2期が存在した間接的な証左となる。

第Ⅲ-1期の建物配置は前殿と後殿を中軸線上におき、それぞれの左右に脇殿を配する。そのような建物配置からすれば、内裏的であり、さきにもべたように平城西宮というのは第Ⅲ-1期の遺構のことであることはほぼ間違いのないところである。つまり、築地にかこまれる方格の区域が内裏であり、その南に少しく離れて位置する建物SB7803を大極殿相当の建物に比定しうるのである。第Ⅲ期の建物配置が内裏的である点についてはすでにふれたところであるが、それは概観的な印象であって、平城宮内裏地区あるいは平安宮古図と比較するならば、細部においてかなりの相違点を見出すことができる。ここでは他の内裏との比較を試みながら、平城上皇の内裏の検討を進めてみよう (fig. 105参照)。

第Ⅲ期における築地でかこむ方形区画は第Ⅱ期の築地回廊域を踏襲し、石積擁壁SX9230以北の殿舎地域と以南の広場地域をそのまま残させたため、特異な宮殿配置となった。ほぼ同敷地面積をもつ平城宮内裏ではこの広場地域の中央に回廊ないしは塀をコ形にめぐらして内裏正殿を閣門中心線上におき、左右にそれぞれ1棟ないしは2棟の建物を配し、それは平安宮の紫宸殿と宜陽・春興殿、校書・安福殿に相当するものとされている。しかし上皇内裏にお

1) 『平城宮木簡Ⅲ』解説p.48。なお、1981年の第133次調査では若犬養門(南面西門)付近の二条大路北側溝から内膳司から小子部門へあてた文書木簡が出土している『平城宮木簡概報16』。この結果、小子門は正確には「小子部門」といい、他の宮城十二門とともに氏の名をもち、十二門相当の門であることが確認され、解説Ⅲの説を補強した。位置についても出土地が二条大

路側溝であることからみて解説Ⅲと矛盾していない。

2) 平安時代になって平城上皇が再興した平城宮が正式にどのようによばれたかについてはあきらかでない。実際は御在所などとよぶべきであろうが、ここでは便宜的に上皇の居住空間をかりに上皇内裏とよぶことにする。

## 第V章 考 察

この部分は原則的には広場であり、小規模な3棟の建物SB7141、SB9220、SB7785と井戸SE9210が1基あるにすぎない。広場の北寄りに東西塀SA7130を設けるのは、もとのままの広場は不用となり、改めて遮蔽したのであろうか。SB7141は建物ではなく、棧敷のようなもの、というよりほかに、SB9220は床がもうけられない土間、平安宮古図での朱器殿の位置に相当するかのようにも見受けられるが、平安宮朱器殿の柱間数は不明である。一方、この建物が井戸と接していることは注目すべきである。

殿舎地区の建物は広廂で平安時代の特色をよくそなえている。正殿がSB6620であることは中央南寄りに位置するもっとも大きな建物であることから了解されるであろう。これを平安宮の紫宸殿にあてはめると、東脇殿ともいべきSB6622は宜陽殿の位置にあり、この点では平安宮内裏とも共通している。上皇内裏のSB8300は平安宮の春興殿に相当する。これがSB6622と東西に平行しているのは、南北にせまいこの地域の特殊現象であろう。平安宮古図では紫宸殿の後方に仁寿殿と常寧殿があり、それぞれ左右と後方に脇殿をおいて院を形成している。

平城宮内裏の正殿後方の建物配置は、時期によってことなるが、奈良時代を通じて塀でかこむ1院であった<sup>1)</sup>。しかし、奈良時代後期のある時期になって、SB452を中心とする南域とSB4705を中心とする北域にわかれた。しかし、両区域の間には塀などはない。つまり、SB452を仁寿殿、SB4705を常寧殿に比定することができ、これを平安宮内裏の前駆形態とみなすことができる。それは平安宮仁寿殿後方の承香殿が弘仁年間以後に建てられたと記録されていることからもうざげられるであろう。平城宮内裏ではSB482、SB4705の左右に脇殿を配するが、それは身舎のみの建物で、平安宮の清涼・綾綺殿、弘徽・麗景殿などのように廂をもつ建物ではない。平城宮内裏正殿以北をかりに後宮域というならば、SB4705の建物は一貫して後宮域の中心であった。すなわち、奈良時代当初ではSB4700が内裏の中心殿舎となり、その後内裏正殿が建設されたのちはSB4703A・B、SB4704と建てかえられるが、どの時期にも後宮域の正殿をなし、左右と後方に脇殿をともなっている。SB4705が後宮域の中心をなし、正殿域を縮小して建設しているSB452は奈良時代後期になってつけくわえられたものとみなされよう。

上皇内裏のSB7170は平城宮内裏のSB4705、平安宮の常寧殿に相当する遺構とみなしてさしつかえなからう。つまり、ここが天皇が日常的起居する後宮の殿舎にあたるのである。平安宮内裏では常寧殿をコ字形にめぐるように、常寧殿の東側に麗景・宣耀殿をおき、西側に弘徽・登華殿をおき、北側に貞観殿をおく。建物の規模がことなるが平城宮内裏においても同様の建物配置がみられる。上皇内裏における左右各2棟の脇殿SB7173、SB6621、SB7172、SB7209は平安宮の麗景、宣耀、弘徽、登華の4殿に相当するものとみられよう。

上皇内裏の東北隅に位置するSB8219、SB8224、SB8218A・B、SB8222は塀でかこまれ、2区の独立した区画を形成している。類似の区画は平城宮内裏東北区や平安宮古図東北隅にも存在している。平城宮内裏では1区画であるが、平安宮古図では上皇内裏と同じく南北2区画にわかれ、南を昭陽舎、北を淑景舎とよび、それぞれに付属屋をともない2棟で1組をなしている。昭陽舎、淑景舎は平安宮では梨壺、桐壺ともよばれ、西方の対象位置にある飛香舎(藤壺)、凝華舎(梅壺)、襲芳舎(雷鳴壺)とともに大内の五舎とよばれる殿舎である。使用法は必ずしもあきらかでないが、平安時代では東宮や親王たちの居所として用いられているようであ

1) 『年報1974』p. 22~26

る。上皇内裏のSB8219などが機能上平安宮内裏のそれと同一とはいいがたいが、平城上皇の親王たちが居住した可能性がある。この2区画内の建物に2～3回の建替がみとめられることは、上皇内裏の諸殿のなかでもっとも使用頻度の高かったことをしめしている(fig. 107)。

以上の検討を通じて、上皇内裏が平安宮古図ときわめて類似していることがわかるであろう。しかし、両者の間には決定的な差異がある。それは平安宮内裏における仁寿殿およびそれに付属する脇殿の区画が、上皇内裏では欠落している点である。すでにのべたように仁寿殿相当の建物は平城宮内裏にも存在しており、上皇内裏の建物配置から平安時代初頭には仁寿殿が存在しなかったというわけにはいかない。むしろ、平安宮内裏の省略形態とみなしたほうがよい。上皇内裏の殿舎地区の南北長が短いことが大きな理由になるだろうが、それよりも、平安宮内裏の機能の大きさにくらべて上皇内裏の機能が格段に小さかったことを表明しているにほかならない。このことはこの場所が天皇の内裏でなく、上皇の御在所にすぎないことをしめしているのだろう。

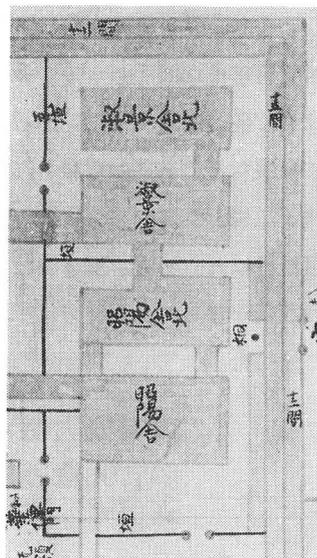


fig. 107 平安宮古図にみえる内裏東北隅

平城上皇の大極殿として、東方の第2次大極殿と位置をそろえて建つSB7803を想定してきた。それは上皇内裏の南方に展開する広場中央に孤立し、周辺に閤門や回廊を欠いている。また桁行7間で規模がはるかに小さい。他方では、内裏外郭ともいべき堀SA3740と溝SD3769とが内裏と大極殿との間に介在し、一応別区を形成している。しかし大極殿院としての体裁をととのえているとはいいがたい。このようなことから、平城上皇の平城西宮の再建は内裏において完成するが、大極殿院は建設半ばにして終わったことが想定できる。

## E 西宮の再検討

以上、第Iから第III期に至る宮殿の比定を行ない、それとともに西宮・中宮・内裏の位置を時期別検討してきたが、これまでのところ確認できるのは以下の通りである。1 第I期遺構は和銅3年から天平12年までの大極殿であり、中宮ではない。2 中宮は内裏の別称であり、内裏地域の遺構がもっともふさわしい。3 平城還都から天平勝宝5年まで、第I—4期遺構は衛門府が警護する宮殿であり、兵衛が警護すべき内裏・大極殿に相当する宮殿ではない。4 第I—4期のころ、内裏を西宮とよんだことがある。5 第III期遺構は平城上皇の離宮である平城西宮にあたり、検出した遺構は大極殿と内裏相当建物に比定することができる。

ところで、西宮の呼称は平城宮の東宮・東院に対してのいい方である。平城上皇の時代には東院地域に存したであろう東宮はなくなっているにもかかわらず、平城上皇時代の内裏を西宮とよぶのは、すでに奈良時代からこの地が西宮とよばれてきたとかんえるのが自然である。

『続日本紀』での西宮は称徳朝にかぎってあらわれる宮殿名であるが、さかのぼって第II期の第1次大極殿地域が整備される天平勝宝5年以降、この地域を西宮とよび、内裏＝中宮と東院＝東宮などと区別した可能性がある。西宮寝殿、西宮前殿と記録されている殿舎をSB6610、SB6611、SB7150にあてるとは妥当なところであり、神護景雲元年8月8日に「僧六百口を

第V章 考 察

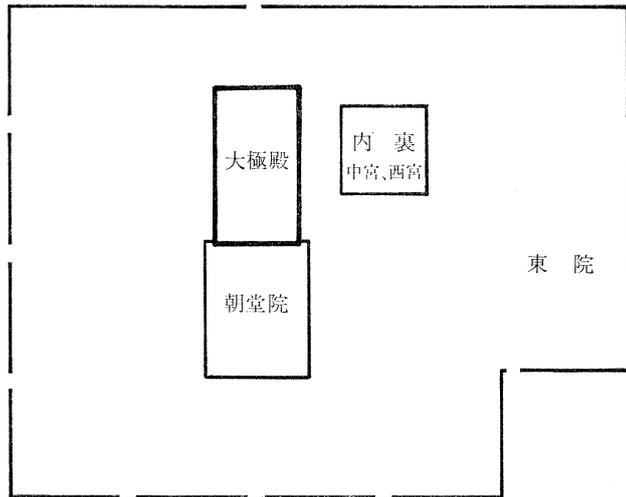
屈して西宮寝殿に於て齋を設く、慶雲の見われたるをもってなり」と記録されているように、これらは多数の人員を容易に収容する空間をもっている。また、西宮前殿では受朝、新嘗の饗宴などの儀式が行なわれ、法王道鏡がここで大臣以下の拝賀をうけた。一方、西宮寝殿では設齋がなされ、称徳帝はここで崩じた。<sup>1)</sup>

F 唐長安大明宮の含元殿と麟徳殿

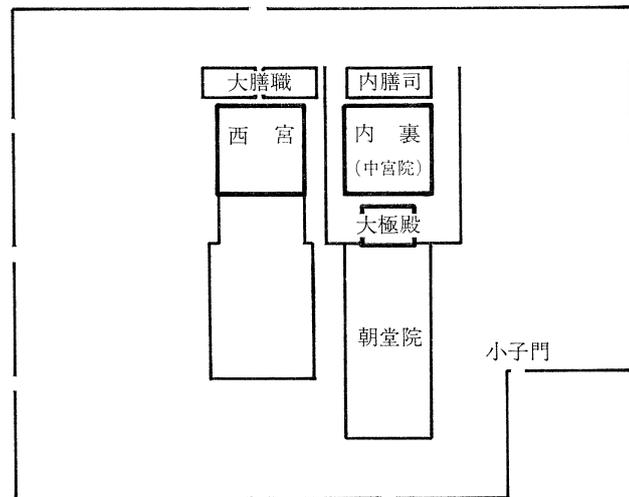
発掘調査の過程で第Ⅱ期の正殿が大明宮の麟徳殿ときわめて類似していることが指摘されており、ここで若干の比較を行なうとともに、大明宮の正殿である含元殿についても比較することにする。

含元殿は大明宮の中心宮殿であり、太極宮の太極殿に相当する。高宗が竜朔2年(662)に大明宮に遷った頃には完成していたのであろう。1959~1960年に発掘調査がなされ、その調査概要<sup>2)</sup>と1973年に発表された傅熹年の復原案<sup>3)</sup>によって概略をのべる。

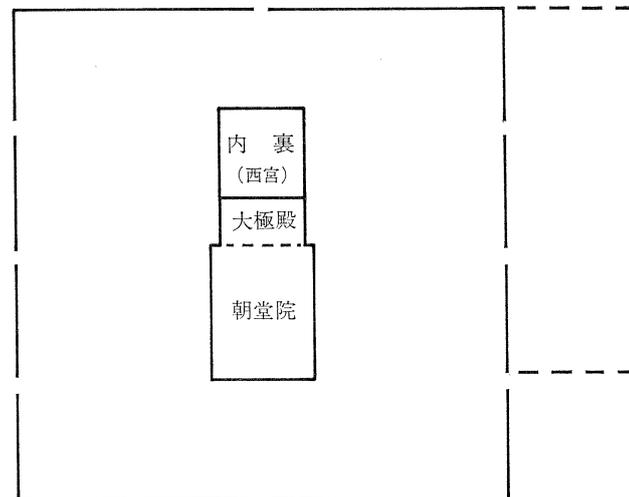
- 1) 宝亀7・8年には単に「前殿」と称する宮殿が出現する。これについては『平城宮学報Ⅲ』p.48では、平安宮内裏正殿との関係で内裏正殿に比定している。ここではそれらが西宮前殿であった可能性があることを指摘しておく。
- 2) 馬得志「1959~1960年唐大明宮発掘簡報」『考古』1961-7, p.341~344
- 3) 傅熹年「唐長安大明宮含元殿原状的探討」『文物』1973-7, p.30~48



1 和銅~天平勝宝5年(710~753)



2 天平勝宝5年以降~天応1年(754~781)



3 大同4年~天長1年(809~824)

fig. 108 第1次太極殿地域の変遷

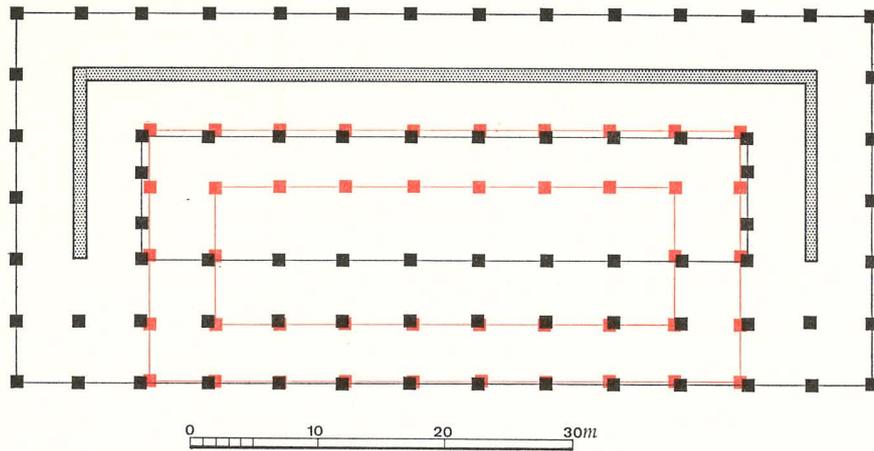


fig. 109 大明宮含元殿とSB7200の比較

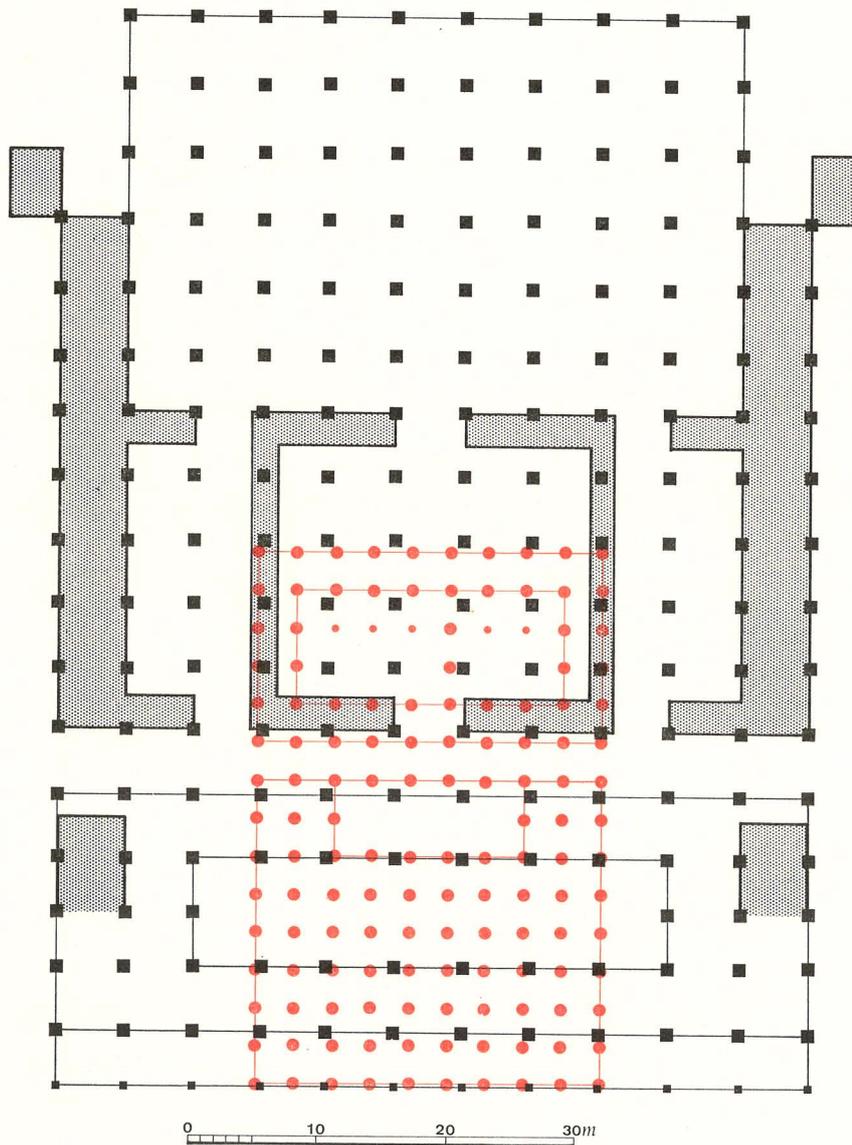


fig. 110 大明宮麟德殿と第二期中央建物の比較

## 2 第1次大極殿地域の性格

基壇は75.9m×42.3mの2重基壇で、礎石および抜取痕跡によって礎石建物であることがわかる。身舎桁行11間(内の9間は18尺等間, 端間は16.5尺), 梁間2間(9.8m)の4面に廂(4.85m)がつく。ただし、東西と北の3面には柱がなく、版築塼がコ字形にかこむ。廂の外側に裳階(4.85m)がめぐり、結局桁行13間(228尺, 67.33m), 梁間6間(100尺, 29.2m)の平面プランとなる。両脇から廊がでて、左右前面の翔鸞閣, 棲鳳閣になつがる。また、殿の基壇前面には3条の竜尾道が長くのびている。

含元殿と平城宮 SB7200 の平面積をくらべると、前者の平面積1,966m<sup>2</sup>に対して後者のそれは934m<sup>2</sup>, 約1/2の大きさであることがわかる。殿閣下の広場と壇で隔絶する点は共通するが、平城宮では左右の閣にかえて朝堂が想定され、後殿をともなっていることなど、必ずしも同じでない (fig. 109)。

麟徳殿は初唐から晩唐まで、唐代を通じて使用された宮殿。宴会や蕃臣の謁見などの典礼に用いられたことが記録されている。大明宮西辺の台地に位置しており、1957~1959年に発掘調査された<sup>1)</sup>。南北約213m, 東西約125mの範囲に回廊が想定され、そのなかに主殿をかこんで鬱儀楼・結鄰楼, 東亭・西亭などの殿舎がある。主殿の基壇は130.41m×77.55m, 高さ1.4mの下成基壇と約95m×65.15m, 高さ1.1mの上成基壇からなる。礎石および据付痕跡によって平面プランがわかる。間口11間(58.3m), 奥行16間(79.4m)にわたって柱がならび、その建坪は4,629.02m<sup>2</sup>である。報告では3殿にわけてのべている。

中殿は11間×5間(25.5m)の総柱建物で、柱間寸法は桁行5.3m等間(以下桁行寸法はみな同じ)、中 殿  
梁間5.0m等間。両端間には後殿につながる柱間の幅の版築塼をつくり、南北の側柱1間に半間分の幅で版築塼をつなぐ。内の5間部分にも南北の入口をのこして左右からコ字形に囲う版築塼をつくる。

前殿は11間×4間(18.5m), 身舎の梁間は4.25mとし、廂(5m)をつける。東西の端間には前 殿  
南へのびる版築塼をつける。中殿との間隔は5mである。

後殿は9間×5間(26.6m)の総柱建物で梁間は5.3mの等間である。中殿の版築塼が南から後 殿  
2間までのびている。中殿との間隔は4.4mである。

復原案では4殿を連続させた構造を想定する<sup>3)</sup>。その場合には前殿の前に1間の裳階をつけ中殿を2層とし、後殿を2棟にわけその南側の棟を中殿にあわせて2層にしている。つまり中心を高くし、前後の建物が低いプロポーションをかんがえている。

SB6610, SB6611, SB7150をあわずと間口9間(27m)×奥行14間(41.5m)で、建坪は1,120.5m<sup>2</sup>となり、麟徳殿(3,834m<sup>2</sup>)の約1/3の広さとなる。総柱建物をふくむ3棟の建物を連結する状況が、麟徳殿ともっとも類似するところである。だが、掘立柱の床張り、中心部分が前面に出ること、楼閣を付設せず左右に脇殿を配し、その脇に楼閣を設けること、殿の前面に広場を設けることなど相違するところのほうが多い。これは使用上にかかわる問題であり、文献でいう西宮に比定する現状では、総柱建物のSB6610を西宮前殿にあて、後のSB7150を西宮寝殿に想定することができよう (fig. 110)。

1) 中国科学院考古研究所『唐長安大明宮』1959, p. 33~40

『考古』1963—7, p. 385~402の図10平面による。

2) 劉致平・傅傳年「麟徳殿復原的初步研究」

3) 注2に同じ。

### 3 建築遺構の復原

第1次大極殿地域における遺構の時期別、遺構の性格、出土遺物などの検討を基礎にし、現存する古代建造物およびその前身建物の調査研究成果などによって、主要な建物の構造形式を推定し、復原図を作成した。なお検討を要する事項も多いが、復原的考察の要点をのべる。

#### A 第I期建物の復原 (PLAN 36~40)

**規模** 大極殿 (SB7200) 基壇の地覆石抜取痕跡によって、基壇の規模 (奥行) と正背面に石階がそれぞれ3個所取付いていることが判明した。石階の幅によって、桁行中央5間の柱間寸法が推定でき、桁行9間、梁間4間となり、大官大寺金堂と同規模に想定できる<sup>1)</sup>。

**基壇** 基壇は高い壇正積にかんがえられるが、細部の形式は不明。平城薬師寺金堂・同西塔では東石を用いないが、SB7200の基壇はとくに高く復原され、羽目石だけでは不安定におもえるので束をたてた。平城宮第2次大極殿では、正面3個所、背面両脇2個所、側面各1個所に石階がつき、背面中央に軒廊がつく。SB7200には軒廊がなく、正背面各3個所、側面各1個所に石階を配した。基壇上面は、『年中行事絵巻』の大極殿では四半敷に描き、基壇端に高欄をおく。SB7200では切石布敷とし、石階以外の基壇端に高欄をめぐるしてみた。

**重層** 一重と二重のいずれに想定するかは、もっとも重大な問題である。『年中行事絵巻』に描かれた平安時代後期の太極殿は一重とみられる。しかし、奈良時代の太極殿の金堂では二重のものが多いことや、この地域では太極殿が引立つように計画されているから、二重に想定した。周囲の廂を裳階風にあつかう場合もあるが、SB7200では基壇の出が大きいので、初重の組物を三手先とし、初重の隅木・垂木尻に柱盤をおいて二重の柱をたて、身舎柱通より1尺外を二重の柱通りにした。SB7200のような巨大な建物では、側・入側通の中間あたりに柱盤をおくと、初重垂木に大きな荷重がかかり構造上に無理を生じよう。

**屋根形式** 唐代の建築では寄棟造が多い。したがって、寄棟造の復原図も作成してみた (fig. 111)。わが国では真屋 (切妻造) が東屋 (寄棟造) よりも尊ばれたらしく、平城京でも元興寺の金堂は入母屋造であった<sup>2)</sup>。また『年中行事絵巻』の大極殿も入母屋造である。中国でも北魏や隋代の壁画・陶屋・石槨などには入母屋造が多く、このようなことから、第1次大極殿には入母屋造の復原を採用した。

**鴟尾** 大棟には当然鴟尾がのっていただろうが、平城宮内から瓦製鴟尾は発見されていない。平安宮の大極殿鴟尾はしばしば文献にあらわれる<sup>3)</sup>。法華寺阿弥陀浄土院の沓形 (鴟尾) は鋳銅鍍金であり、平城宮でも鴟尾は金銅製ではなかったかとかんがえている。大棟中央には棟飾を想定した。西大寺薬師金堂の華麗な棟飾は『資財帳』にみえ、中国の建築図にもしばしばあらわれるからである。降棟に宝珠などをおいたかもしれないが、棟飾のほかは図示しなかった。

1) 『年報1975』

2) 長元8年 (1035) の「堂舎損式検録帳」

3) 貞観18年 (876) 火災後、元慶3年 (879) 復興した第2期大極殿の鴟尾は、『三代実録』、元慶7年 (883)、『日本紀略』承平7年 (937)、『扶

桑略記』、『百鍊抄』天喜5年 (1057) などに見えている。福山敏男編『大極殿の研究』平安神宮1955

4) 福山敏男「奈良時代に於ける法華寺の造営」『日本建築史の研究』1943

初重の柱間は正面を吹放しとし、そのほかは石階位置を扉口、他を土壁にした。『貞観儀式』 柱間装置  
にあらわれる平安宮大極殿では東西の壁や戸がみえ、側面に扉口と壁がある。『年中行事絵巻』  
の大極殿は、正面の各間を吹放し、側面第3の間を扉口にしている。二重の柱間は各間とも連  
子窓にし、高欄の架木上に宝珠飾をならべた。これは伊勢神宮の居玉や新羅感恩寺舍利容器の  
例にならったのである、組物は当然三手先で、薬師寺東塔の形式にならい、軒支輪のない古い  
形式にし、中備えは間斗束にした。軒は二軒、地垂木は丸垂木とした。

後 殿 (SB8120) 大極殿の後方にSB 8120がある。遺構としては、北面築地回廊につづく 大型の後殿  
基壇中央入隅部の矩折りの雨落溝を検出したにすぎない。大極殿が恭仁宮へ移転したのちもSB  
8120が残存したものと想定している。SB8120は桁行9間、梁間4間、大極殿と同規模に想定  
したが、<sup>1)</sup> 梁間は発掘調査では直接確認していない。一重、入母屋造とし、構架は二重虹梁蟄  
股、組物は平三斗にし、蟄股は法隆寺東大門にならった。SB8120と北面築地回廊の間は基壇  
でつながるが、幅が狭い。ここに軒廊を復原すれば梁間が狭くて低いものになるので、軒廊の建  
物は想定していない。

南門 (SB7801) と築地回廊 (SC5600・SC8098) 築地回廊の正門に開くSB7801の上層の基壇 一重の南門  
規模は28m(94尺)×15.6m(52尺)で、石階の痕跡から5間×2間にかんがえた。背面石階の  
幅約15mを桁行中央3間にあてると、両脇間を狭くしても両脇の基壇の出が小さくなる。した  
がって、切妻造にして一重門か楼門を想定せざるをえないが、ここでは5間3戸の一重門を想  
定した。切妻造ならば、東大寺転害門でも当初は平三斗であり、平三斗ならば軒の出もそれほ  
ど大きくとれないので、梁間を桁行よりも広くかんがえた。南面のSC5500に梁間24尺の礎石  
据付痕跡があり、棟通りに柱位置の痕跡がないので、中央に築地を築く築地回廊に想定した。

東楼 (SB7802) SB7802は築地回廊の築地を撤去し、棟通りから内庭側に建設している。 高い楼造  
側柱は1本をのぞいて掘立柱である。その巨大で深い柱根からみて、高い楼造で前面に回廊南  
半部が廂状に取付いていたことが推測できる。

柱底の溝や足元の貫穴などは柱立に当たっての工作があり、地中に深く掘立てるばかりでな  
く、長大な柱であったはずで、柱は上までのぼし、中間に床・縁を取り付けたものとかんがえ  
ている。梁間は3間であり、桁行と梁間の隅の間の寸法が違うが、掘立柱抜取痕跡から大型の  
隅木蓋瓦が発見されて、入母屋造であった。初重正面中央3間を扉口に想定した。

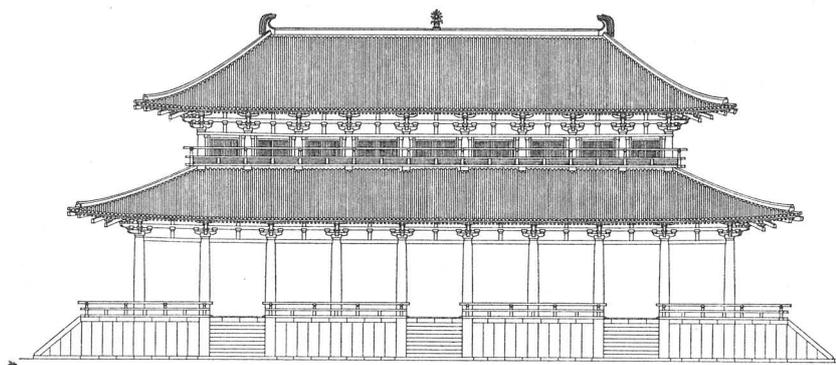


fig. 111 SB7200寄棟造復原案

1) 恭仁遷都後も大殿と呼ぶ建物が残り、大官大  
寺講堂が金堂と同じ柱間寸法であり、後殿を同

様に想定した(『年報1980』)。

## B 第二期建物の復原 (PLAN 36・41~43)

南面と北面の築地回廊を第I期よりも内方によせてほぼ正方形に築地回廊をめぐらし、第I期の埴積擁壁を南へ拡張して野面積の石積擁壁を築く。回廊内をほぼ2分して南を広場に、北方を建物敷とし、建物敷には10尺(3m)方眼にあわせて多数の建物を規則的に配置している。とくに中央のSB6610・SB6611・SB7150は軒を接して3棟連続するならび堂となり、きわめて特色のある建物に想定されるばかりでなく、東脇にならぶ東南脇殿SB6660、東北脇殿SB6663、正殿と脇殿の中間にあって渡廊をも兼ねたとかんがえられるSB6640、SB6655、SB6650もゆかや木階で接続し、中庭をかこんで一体となって機能し、大小の屋根が変化のある外観をつくっていたとかんがえられる。その他、SB8245は総柱で楼か高床造、北側にならぶ建物群は付属的な殿舎で、うちSB7151は後殿的な役割りをもっていたと思われる。

**正殿**(SB6610, 6611, 7150) 正殿のうち前殿SB6610は梁間4間の後方に孫廂がつく総柱建物  
**総柱の前殿** で、楼造とかんがえられる。柱径は約40cmととくに太いものでないので、第I期の東楼SB7802のように太い柱が上まで1本で延るのではなく、法隆寺経蔵のように下階の柱上に三斗をくみ、上階の柱を別にたて、全体の建物のなかでとくに床を高く想定した。北面の孫廂に中殿へおりの木階3箇所を設け、上部構造は内部二重虹梁<sup>1)</sup>、入母屋造、妻飾は杈首組とし、繫虹梁上にも<sup>1)</sup> 蟄股をおいて中桁をまわし、もっともにぎやかに扱った。中殿SB6611は梁間2間で両脇内部にも柱がたつが、間仕切柱とかんがえて桁行9間の切妻造とし、前殿孫廂と柱天端をそろえ、取合わせの間に繫貫を渡し樋をおいて、雨水をうけるようにした。このためにも、中殿は両脇を妻廂葺き降しとみるよりも切妻造とするほうが有利である。後殿(寢殿)SB7150  
**切妻造の中殿** は桁行7間、梁間3間の身舎の4方に廂をめぐらし、ここでも廂柱と中殿の柱天をそろえて前面の中殿との取合わせの間を前と同様にあつかって樋をかけた。後殿は身舎内部に間仕切の柱が2本たって東方4間と西方5間にわかれ、居住空間的な性格をもっていたとかんがえられる。北側には木階のささら桁受木とかんがえられる小掘立柱<sup>1)</sup>が<sup>1)</sup>あって3箇所に木階がつくものとかんがえた。前殿よりはやや簡素な構造をかんがえ、この建物と同様に身舎梁間を10尺3間とする新薬師寺本堂の構架になら<sup>1)</sup>い、柱上に大斗<sup>1)</sup>肘木、中備え間斗束とし、大虹梁上は合掌をくみ中桁をとおし、入母屋造、妻飾は杈首組とした。身舎梁間が3間であるために棟の高さは前殿とほぼそろい、中殿の棟が一段低くなり、中殿は前殿と後殿をつなぐとともに、後殿の細殿的な役割りをはたす。掘立柱であるが、この時期の瓦が発見されているので瓦葺と認められ、前殿と後殿に鴟尾をおいてみた。

**脇殿**(SB6660, 6655, 6663) 東南の脇殿SB6660は身舎桁行7間、2面廂、切妻造、東端に広縁と木階とみられる小掘立柱穴があり、高床を張って東妻から昇殿したことがわかる。東北の脇殿SB6663は身舎7間、2面廂で、背面にさらに孫廂と木階が取り付け、身舎を4間と3間に仕切る。南北脇殿の中間に桁行5間、梁間3間、廂なしの脇中殿SB6655が西妻を南北の脇殿とそろえてたつ。この中殿は中央1間通り両脇に間仕切柱があり、中央間を馬道として南北の脇殿との連絡通路とし、左右各2間ずつを部屋とする。屋根は前殿・中殿・後殿と同様に、前後

**三殿接続の脇殿**

1) 新薬師寺本堂は奈良末ないしは平安初とかんがえられる桁行7間、梁間5間の仏堂で、身舎

梁間はこの後殿同様10尺3間とする。桁行は中央間のみ14尺、脇の間と廂は各10尺。

### 3 建築遺構の復原

とも脇殿と軒が向いあって谷となり、樋をいれてならび堂風に扱ったとかんがえられる。脇殿の構造は正面にたつSB6660を後のSB6663より一段にぎやかなものとかんがえて三斗組、二重虹梁臺股とし、繫虹梁上にも臺股をおいて中桁をとおした。SB6663は大斗肘木、合掌組、妻飾は杈首組として中桁はいれていないが、同一構造形式の2棟を前後に置いたこともかんがえられる。中殿は大斗肘木、合掌組、中桁入り、妻飾と馬道脇を杈首組とし、軒先を脇殿とあわせ、馬道と樋下の床高は長押せいだけ低くした。

**渡廊**(SB6640, 6650) 前殿と東脇殿の間には渡廊様の桁行3間、梁間2間のSB6640が棟通りを合わせてたつ。東脇殿と前殿をつなぐ役割りをかんがえ、脇殿よりは一段床を上げて木階で上り、さらに前殿側面へ木階で登るものとし、前殿には直接地上から昇降する木階を想定していない。前殿が入母屋造で側面へも軒がまわるので、渡廊の屋根は低いものでなければならず、組物をもうける余裕はなく、柱上に直接大梁をのせて、簡単な合掌・杈首組とした。後殿と北脇殿の間には桁行3間、梁間3間のSB6650がある。この建物も渡廊の役をもつものよう

正殿と脇殿  
の渡廊

で、前後の中央間に木階があって、中庭へはここから降りたらしい。梁間3間であるので棟は高くなり、後殿の屋根とつながって谷を作ったと考えられる。

この一郭の建物はそれぞれ渡廊風の建物が間に建てられて、正殿と脇殿とが有機的なつながりをもつ。この時期の軒瓦に朱塗の痕がのこっている

有機的のつながり  
の殿舎

ので、塗装していたことがわかる。柱足元に根巻石をまいていた可能性もあるが、この地区で根巻石は発見されていない。とくに華麗な変化のある宮殿群が想定される。すでにのべてきたように、3殿が前後に軒を接してならば、唐長安の大明宮麟徳殿に類似する。ただ、これは掘立柱であり、柱径も太くないので、組物も三斗か大斗肘木程度とかんがえられ、高い床を張った手法などに和風的な色彩がつよい。麟徳殿では中央部が高く復原されているが、第Ⅱ期の正殿は中殿の棟が逆に低く想定され麟徳殿に範をとりながらも、独自の構成を案出したものとおもわれる。

**東楼**(SB8245) 東面中央にたつSB8245は桁行7間、梁間3間の総柱建物である。高床造の蔵とみるよりも二階楼とするほうがよさそうである。組物は上下階とも三斗程度とかんがえ、切妻造として三重虹梁臺股の構架に復原したが、入母屋造、妻飾は杈首組、内部は合掌組に想定することも出来よう。下階は法隆寺経蔵のように側柱筋に柱間装置を取付けたが、袴腰風に扱うことも可能であろう。

二層楼

**その他の建物** 東面にたつSB8302は桁行3間、梁間2間の南北棟で、平安宮内裏の朱器殿とほぼ同じ位置にあたるが、吹放し土間の建物にかんがえた。北方の付属屋6棟はいずれも身舎梁間が2間、廂はなく、いずれも簡単な構造で、組物は大斗肘木程度か、柱上に直接大梁を置いたのであろう。

付属屋

寝殿の北にたつSB7151は後殿にあたる建物であり、その北にあるSB7152とともに土間に想定した。脇殿の北に並ぶSB6666とSB6667は東3間と西4間を仕切り、東北隅のSB8210とSB8215は北1間に間仕切がある。この4棟は床張りとかんがえられる。築地回廊に開く南門SB7750Aは正背面石階幅を柱間寸法と合わせると3間3戸の八脚門に想定され、基壇間口から見て桁行5間にとる余地はない。

八脚門

1) 桁行柱間が梁間よりもかなり長くなり、二重とすれば楼門になるが、平安宮内裏の築地回廊

に開く承明門も一重であり、八脚門に想定した。

C 第三期建物の復原 (PLAN 36・44~46)

平城上皇が大同四年(809)に造営を始められた平城宮の宮殿がこの期に当る。翌弘仁元年九月上皇は東国に走ろうとして敗れて出家し、天長元年(824)崩御までの間ここを御在所とした。周囲を築地で囲み、四方(西側は未調査)中央に門を開き、南門の東には脇門があった。この時期の石積擁壁SX 9230以北には多数の建物が配列されるので、復原図作成に際しては次のような基本方針によった。即ち建物群を(ア)、中心的建物(SB6620)、(イ)、(ア)の前後の広場をとり囲む副次的建物(SB6622, SB8300, SB7170, SB7173)、(ウ)周囲に配される建物(SB6621, SB8218, SB8219, SB9220)の三群に分類した。さらに各々の性格に対応して、構造・意匠を、(ア)は組物を大斗肘木、梁は虹梁、棟は瓦積、(イ)は組物を用いず、桁が柱に天乗り、梁は虹梁、棟は瓦積(ただし熨斗瓦のみ)、(ウ)は組物を用いず桁天乗り、陸梁、棟は箱棟の三種に変化させることとした。

四隅を欠く  
正殿

正殿(SB6620) 桁行7間、梁間3間の身舎の四面に廂が付く。廂の隅柱の柱穴は小さく浅いので、当初は四隅の間を欠いた平面で、後に隅にも廂屋根をかけたらしい。平安宮紫宸殿においても四隅は四面の廂とは別の階廂(階隠)で、木階が設けられていたと考定され、現在の京都御所紫宸殿も、隅の間を木階とし、正面葺降しの屋根と側面の屋根の面に段を設けている。身舎の10尺等間に対し、廂の出は四面とも14尺あり、廂を広くとる。この期の他の建物も同様に廂を特に広く取るのが特色である。内裏正殿に当るので床を高く張り、身舎は東から二列目に内部の間仕切柱があって、東端一間通りを別室とし塗籠に考えた。四方の廂のうち、正面と側面は吹放しとして床高を縁長押一段分下げたが、蔀戸のような建具を入れていたかもしれない。背面は身舎と床を同高にして一室に取り込んだ。四周に簀の子敷の布縁を廻し、側面と背面には宝珠柱とかんがえられる小掘立柱穴があるので木階を想定した。

組物は大斗肘木、身舎の架構は新薬師寺本堂にならい、大虹梁上に合掌を組み、妻飾は椀首組とし中桁を通した。廂は出が大きいので、繫虹梁上に墓股を置いて中桁を通した。墓股は唐招提寺金堂にならい、桁はいつでも丸桁とした。軒は二軒、化粧屋根裏とした。屋根は廂の四隅を欠くので特異な形となる。身舎と正背面廂の屋根は葺き降して切妻造とし、破風を全体に通し、側面廂の屋根は、身舎の妻から葺き降し、両端の破風は大屋根の切妻破風に縫破風状に取り付けた。この手法は、正規の春日造の向拝、日吉造の背面等と共通するものである<sup>3)</sup>。

平城宮ではこの平城上皇の時期に当る瓦は発見されていない。古い瓦を再用する場合もかんがえられるが、この正殿を中心とする一郭は桧皮葺とかんがえ、瓦棟として図示した。奈良時代の桧皮葺の技法は、現在の杉皮葺のように桧皮の上に押え木を並べ黒葛を用いる手法である<sup>4)</sup>が、復原図では一重軒付を付けて一般的な桧皮葺に図示してある。

1) 『大内裏図考証』

2) 縁の構造は、法隆寺東院伝法堂では前身建物の簀の子敷の棧敷が復原されており(浅野清『奈良時代建築の研究』など)、奈良時代の伊勢神宮本殿では、主として鋳金物に依って復原されているが(福山敏男『伊勢神宮の建築と歴史』)、ここでは簡略な縁を想定して図示した。

3) 法隆寺聖霊院広廂、宇治上神社拝殿側面廂、は縫破風で納める。絵巻物に描かれる寝殿造や、中世の住宅などにおいても廂を縫破風とする例がしばしばみられる。

4) 永井規男「古代の桧皮葺技法に関する考察」『日本古文化論攷』榎原考古学研究所編 1970

### 3 建築遺構の復原

後殿 (SB7170) 後殿に当る建物 SB7170 は桁行七間、梁間二間、10尺等間の身舎の前後に14尺の廂のつく切妻造の掘立柱建物であるが、内部は特殊な構成となる。身舎は両側面から3列目に間仕切柱と考えられる小掘立柱穴があって、中央三間と両脇二間が仕切られる。またこの建物の西脇室に丁度納まるように細長い土壇 SK 7193 があり、北から素掘りの南北溝 SD 7188 がこの土壇につながり、さらに西へ石組の溝 SD 7189 が流出する。土壇は給水施設とかんがえられ、溝は導水溝と排水溝に当る。特殊な施設であるが、この建物に丁度うまく納まり、この一郭は土間であったとかんがえられる。

特殊な平面構成

軸部の構造は柱の上に直接桁を置いて組物を用いず、身舎内部の梁は虹梁、両側面は陸梁、身舎は内部は合掌、妻飾は杈首組、軒は一軒、椽皮葺とした。当麻寺前身曼荼羅堂に転用された古材により復原される建物の構造と大差ない簡素な建物に想定した。

正殿東南建物 (SB6622) 正殿東南の南北棟 SB6622は桁行五間以上(7間に復原)、二面庇で廂の間が広い。後殿と同様の構造、全体を床張り、正面の廂を吹放しと想定した。

正殿東北建物 (SB7173) 正殿・後殿中間の南北棟 SB7173は、廂は掘立柱、身舎は礎石立の混用であるが、これも後殿と同じ構造を想定している。

礎石・掘立柱の混用

広場の建物 (SB9220) 斜道の登り口に建つ桁行5間、梁間2間の北面に廂がつき、流造風の屋根となる。土間で、組物がなく、陸梁、合掌、妻は杈首組の簡単な構造にした。

後殿東脇建物 (SB6621) これも身舎は礎石立、廂は掘立柱であるが、SB7173とともに、柱長さの取合せの都合で長尺の柱を必要とする身舎の柱を礎石立としたのであろう。

棧敷風施設 (SB7141) 石積擁壁の前に立つ細長い梁間1門の掘立柱施設 SB7141 の性格は不明であるが、柱は太く、桁行柱間が特に広いので、棧敷風のを想定し、柱上に台輪をおいて、厚板簀の子敷き、高欄付きに想定した。

南門 (SB7750B) 五間門で、棟通りに掘立柱穴あるいは礎石据付痕跡がなく、柱がたたないので、前面に扉を設けた。二重虹梁墓股の構造を想定したが、棟通りに柱がないので三棟造ではなかった。この南門東方には一間の掘立柱の棟門が開く。

東門 (SB8310) 八脚門であるが、南門が三棟造でないので、これも三棟造とはせずに、簡素な合掌構造を想定した。

築地は第Ⅱ期の SC 3810 A を踏襲したものであるが、この時期の瓦がまったく発見されなかったから、古瓦の再用の可能性もかんがえられるが、復原図では、築土の上に板を重ねて土を置く上土形式に想定した。

大極殿相当建物 (SB7803) 南門の南に立つ SB7803 は廂12尺、その他は10尺等間、桁行7間の礎石建物で、その位置からみても大極殿に当る建物であるが、基壇はそれ程高くなかったろう。第一次・第二次大極殿よりはかなり小さいので、組物は平三斗程度、合掌組、妻飾は杈首組と想定し、この一棟は瓦葺に復原した。

1) 法隆寺東院中門の遺構は、掘立柱、7間2間で棟通り内部に柱がない、(国立博物館『法隆寺東院に於ける発掘調査報告書』。唐招提寺講堂

地下の前身遺構も5間2間の門で棟通り内部に柱がないが(『修理工事報告書』)、この門のように棟通りの妻にもないのは特に珍しい。

## 4 屋 瓦

### A 軒瓦編年の改訂

平城宮出土の軒瓦にたいする全般的な時期区分については、さき『基準資料瓦編Ⅱ』の解説で提示した。そこでは奈良時代から平安時代までをⅠ～Ⅴにわけ、つぎのような時期区分を行ったのである。

平城宮瓦Ⅰ：和銅元年～養老5年

平城宮瓦Ⅱ：養老5年～天平17年

平城宮瓦Ⅲ：天平17年～天平勝宝年間

平城宮瓦Ⅳ：天平宝字元年～神護景雲年間

平城宮瓦Ⅴ：宝亀元年～延暦3年

今回の報告も原則的にこの編年に準拠するのだが、若干の改訂を加えざるをえなくなった。以下、改訂を要する軒瓦をとりあげ、その理由をのべる。

**6225A—6663C** とともに平城宮瓦Ⅱに位置づけた軒瓦である。それらは、第2次大極殿・朝堂院の主な軒瓦であり、第1次大極殿・朝堂院の年代が確定するにしがって、変更せざるをえなくなった。第2次大極殿・朝堂院の造営年代については、『平城宮報告Ⅳ』を出版した1966年段階まで、聖武天皇が恭仁宮から遷都した天平17年(745)以降に比定してきた。一方、内裏地域の年代についても、第1次大極殿地域に第1次内裏を想定し、第2次内裏の年代を天平17年以降にあてたのである。

1964年に行なった内裏北方官衙地域(第20次調査)の土壌SK2102から検出した軒瓦は、年代決定の有力な拠り所となった。すなわち、神亀5年(728)と天平元年(729)の紀年木簡とともに、軒丸瓦6311A・6313C、軒平瓦6664F・6666A・6685Bが出土したからである。これらの軒瓦がいずれも内裏地域で使われていることから、内裏が神亀年間にはすでに存在したことがあきらかになった。この成果を<sup>1)</sup>発展させ、内裏地域の前面に展開する第2次大極殿地域・朝堂院地域

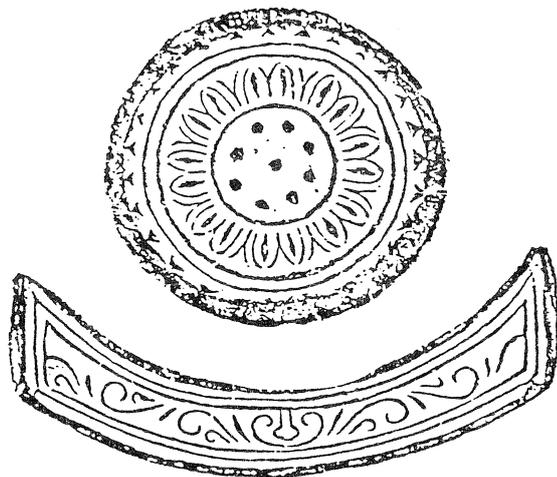


fig. 112 第2次大極殿・朝堂院の軒瓦

も一連の造営とし、第2次大極殿・朝堂院を代表する軒丸瓦6225A—軒平瓦6663Cの年代を神亀年間に繰上げる機運が生じた。その後、他地域の調査結果をも勘案して、第2次大極殿・朝堂院は聖武天皇即位の神亀元年(724)を目標にして造営したとする仮説が一般化し、『基準資料瓦編Ⅱ』の解説にいたったのである。

すでにのべてきたように、第1次大極殿SB7200が天平12年(740)に恭

1) 『平城宮報告Ⅶ』p. 138

仁宮へ移建した大極殿に相当することはほぼ確かなこととなった。そして、天平12年段階に平城宮に2棟の大極殿が存在しないかぎり、第2次大極殿 SB9150は還都後に新造したものとかんがえざるをえない。このことから、第2次大極殿・朝堂院の軒丸瓦6225—軒平瓦6663の年代も平城宮瓦Ⅲに下げざるをえなくなったのである。いまのところ、紀年木簡など絶対年代をうかがいうる遺物との伴出例がなく、状況証拠からの帰結であることは否めない。しかし、この観点からすると、軒平瓦6663の大半が曲線型であること、同じ組合せ関係の軒瓦が美作国分寺、上総国分寺など諸国の国分寺に分布していることなどと矛盾しない<sup>1)</sup>。

**6668A** この軒瓦はさきに平城宮瓦Ⅱとしたが、第Ⅰ期の南門で軒丸瓦6282Aに、第1次朝堂院南門地区では6284Cに組合わさる状況からして、平城宮瓦Ⅰに位置づける。

**6691A** さきに平城宮Ⅲとした軒瓦である。しかし、恭仁宮・法隆寺東院では天平17年以前に使われており、平城宮Ⅱに繰上げる。ただし、平城宮での使用は、還都後の時期からである。この点については後述する。

また、従来空白であった平城宮瓦Ⅴの瓦として、長岡京創建時の軒瓦文様につながる軒平瓦6725・6726をくわえた。

## B 軒瓦の組合せ関係

平城宮における軒丸瓦と軒平瓦との組合せ関係は、現在までに16組があきらかになっている。組合せを決定する方法としては、原則的に一定地域内における出土頻度の高いものをえらんで判断している。それと同時に、文様構成の共通性(たとえば6225—6663はともに圏線縁をめぐらす)、造瓦技法の共通性(たとえば6135—6688は丸瓦部と平瓦部に同一の格子叩き目がある)などを抽出して組合せ関係の復原をすすめている。しかながら、その組合せ関係は絶対的でなく、新しい遺構の検出によって変更したりバラエティをかんがえねばならぬ事態も生じてくる。遺構ごとの軒瓦型式の特色については、すでにのべた。ここでは、同一型式の軒瓦が第1次大極殿地域でどのように分布し、どのような組合せ関係を呈しているかという観点にたつて再度の分析をこころみてみよう。

すでにのべてきたように、第Ⅰ期南門地区、東面築地回廊第Ⅰ～Ⅲ区、殿舎地区、第Ⅱ期南面回廊地区の間に特色のある軒瓦の分布がみられる。ここでは、それらの地区に大膳職東区・大膳職西区をくわえてこの地域をのべることにする。それぞれの地区内で全体の10%以上出土した軒瓦を表示したのが Tab. 43 である。以下、この表からよみとれる傾向をみてみよう<sup>2)</sup>。

**6284—6664** 第1次大極殿地域を代表する軒瓦であることはいままでもない。第Ⅰ期南門地区では、6284E—6664Cが6282A—6668Aとともに全体の70%をしめている。東楼地区では、6284Eの占有率が下がってはいるが、6284Cは、第Ⅰ期南門地区とさして変化がない。6664はCとKとが折半する形をとり、Kは6304Cと組合うことになる。占有率は格段に下がるが、この傾向は東面築地回廊地区・殿舎地区にみられ、第Ⅰ期遺構の名残りともみることができる。東面築地回廊地区で軒丸瓦と軒平瓦のバランスが崩れているのは、この地区で幾度も改修がなさ

1) 森郁夫「平城宮系 軒瓦と 国分寺造営」『古代研究3』1974, p. 8~19

式のもののをぞいているため、型式全体の%とはかならずしも一致しない。

2) Tab. 43 にしめした細分型式の%は、不明型

第V章 考 察

軒瓦	(第I期南門地区)	(東楼地区)	(東面築地 回廊I区)	(東面築地 回廊II区)	(東面築地 回廊III区)			
6284A	5.9	11.0	4.1	2.3	4.9			
" B	77.7%	1.9	2.1	28.6	8.4			
" C		25.9	13.0			32.2%		
" E		44.6					0.3	
" G		3.7						19.5%
" G								
6282A	11.1%	44.0%	13.0	28.6	8.4			
6282B	3.7%				4.8			
" D					3.9			
" E					2.4			
" F					4.8			
" G					1.6			
" H					18.3%			
" I								
6304C		18.2			1.2			
" L		4.5						
6225A			13.1					
" B			3.1					
" C				17.8%				
" L					1.0			
" L								
6133A				17.2				
" B				6.8	34.4%			
" C				6.8				
" D								
" HM				3.4				
" HM								
6134A								
6308A								
" B								
6311A								
" B								
" C								
6313A		1.3	4.0		9.3			
" B		10.6%	0.7	25.4	1.8			
" C	9.3		30.1%		3.9			
" D								
" G								
" M								
" M								
軒平瓦	(第I期南門地区)	(東楼地区)	(東面築地 回廊I区)	(東面築地 回廊II区)	(東面築地 回廊III区)			
6664B	2.0	7.5	0.6	5.6	6.9			
" C	67.9%	28.1	31.3	2.8	10.4			
" K		61.9	63.9%			38.9%		
" G		4.0					3.7	
" H								0.3
" I								
" D		2.6	2.8					
" F								
6668A	24.5%							
6663A		4.3	2.0	7.9%	13.8			
" B		2.1	3.5		10.6%	6.9		
" C		6.5	4.5			23.1%		
" F			0.5				1.2	
" G								
6721A				6.4	1.7			
" B				12.6	14.5			
" C						19.0%		
" E								
" F								
" G								
" H				4.8				
6732A				2.8	7.8			
" B				27.3	2.1			
" C								
6691A								
6685A			3.7	3.7				
" B			22.6	5.6	11.1%			
" C			0.4	1.8				
" D						26.7%		
" G								

Tab. 43 第1次大極殿地域の軒瓦組合せ

4 屋 瓦

(第Ⅱ期南面築地回廊地区)	(殿舎地区)	(大膳職西区)	(大膳職東区)	(内裏地域)	(内裏北方官衙地区)
	2.5 } 1.7 } 11.9% 7.7 }	3.4 } 3.5 } 13.8% 6.9 }	8.5 } 2.4 } 14.5% 3.6 }		
		0.9%		0.2%	
6.7 } 2.2 } 19.1% 4.5 } 4.5 }	27.8 } 1.5 } 30.2% 0.8 }	21.1%	24.3 } 6.5 } 34.4% 3.2 } 0.4 }	5.7 } 1.1 } 15.1% 1.4 } 3.7 } 2.7 } 0.2 } 0.2 }	
				12.8 } 0.5 } 13.3%	10.6 } 0.3 } 11.3% 0.2 } 0.1 }
4.9 } 4.9 } 14.8% 4.9 }	2.9 } 1.4 } 16.1% 8.8 } 2.9 }	10.7 } 3.0 } 23.6% 9.9 }	6.9 } 1.2 } 12.1% 2.0 } 1.2 } 0.8 }		
	20.1%				
2.1 } 8.5 }	10.6%				
				14.2 } 9.9 } 24.1%	11.0 } 13.0 } 24.1% 0.1 }
7.4 } 7.4 }	14.8%			7.2 } 1.4 } 28.6% 19.4 } 0.5 } 0.1 }	3.9 } 2.1 } 13.2% 7.0 } 0.2 }
(第Ⅱ期南面築地回廊地区)	(殿舎地区)	(大膳職西区)	(大膳職東区)	(内 裏)	(内裏北方官衙地区)
	4.7 } 6.0 } 17.4% 2.0 } 2.6 } 2.0 }	21.0 } 0.3 } 27.1% 0.3 } 1.3 } 1.6 } 2.0 } 他 1.6 }	0.8 } 1.2 } 11.8% 0.8 } 0.8 } 1.4 } 4.7 } 他 2.1 }	3.0 } 0.2 } 26.7% 8.2 } 15.3 }	1.3 } 1.0 } 28.2% 0.2 } 0.4 } 9.5 } 15.0 } 他 0.8 }
14.9 } 2.5 } 29.8% 12.4 }		3.3 } 6.9 } 11.8% 1.3 } H0.3 }	3.3 } 6.3 } 12.3% 2.4 } H0.6 }	2.2 } 0.6 } 16.2% 13.4 }	3.2 } 2.3 } 13.9% 8.2 } 8.2 }
4.4 } 17.5% 13.1 }	1.3 } 21.1 } 23.6% 1.3 }	3.6 } 1.9 } 21.1% 7.9 } 3.4 } 1.5 } 1.9 } 1.3 }	2.4 } 10.5 } 23.4% 2.4 } 3.9 } 3.0 } 0.6 } D0.6 }	7.4 } 4.9 } 12.4% 0.1 }	
	22.7 } 5.4 } 28.1%	14.4 } 1.3 } 16.8% 1.2 }	6.6 } 1.2 } 9.0% 1.2 }		
	14.6%	12.9%			
4.7 } 16.3 }	21.0%			6.1 } 18.0 } 29.0% 4.8 } 0.1 }	4.1 } 8.2 } 15.1% 0.1 } 2.8 }

## 第V章 考 察

れた間に、当初の瓦組合せの関係が乱れてしまったのだろう。

**6282A—6668A** 構成比に多少の違いがあるが、第Ⅰ期南門地区で6284—6664を補完する形で存在する。6282AはSD3765から出土した和銅創建瓦の一つ。なお、第1次朝堂院南門SB9205では、6284C—6668Aの組合せがみとめられており、この組合せが絶対的ではない。

**6304C—6664K** 東楼地区だけに集中し、6284について多い。SB7802を増築した第Ⅰ—Ⅱ期東楼の軒瓦の軒丸瓦に想定できる。構成比からすれば6664Kと組合うことになり、6664Kが6664Cよりも時期的に遅れる可能性をふくんでいる。

**6225—6663** 上述したように第2次大極殿・朝堂院を代表する瓦の組合せだが、第1次大極殿地域にもある。この軒瓦は東楼・東面築地回廊区、第Ⅱ期南面築地回廊地区にみられるが、多くない。概していえば6663のほうが多くのこり、6225のほうが少ない。この場合、たとえば第Ⅱ期南面築地回廊地区では6225(8.5%)—6663(29.8%)、東面築地回廊第Ⅲ区では6225(4%)—6663(23.1%)というように、バランスが崩れている。このような点からすると、第Ⅱ期のSC3810AやSC8360の主要瓦にはなりえない。一方、東楼地区では6225(8.0%)—6663(13.1%)とほぼ等率でのこっており、第Ⅰ—Ⅳ期に修理用瓦として用いたことが想定できる。

**6313—6685** 小型の瓦で築地回廊地区に限って集中している。さきはこの種の軒瓦が築地の棟瓦に用いられたであろうことを想定したが、第1次大極殿地域でも同様のことがいいうる。

**6282 (A以外のもの) —6721** 第Ⅱ期南面築地回廊以北にはっきりとまとまり、それが第Ⅱ期遺構の主要瓦であったことが歴然としている。殿舎地区では6282B—6721Cとの組合せが成立し、同様な傾向を大膳職西区にもみとめられる。

**6134A—6732A** さきの6282—6721とともに殿舎地区の軒瓦の主要瓦である。少数ではあるが6732Aが東西築地回廊第Ⅱ・Ⅲ区にみられるのに対して、6134Aは殿舎地区に限定されている。6133A—6732Cは東面築地回廊での組合せである。一方、大膳職西区では6133A・G—6732Aの組合せを生じている。軒平瓦の文様が同じ系統であるのに対して、軒丸瓦の文様がまったくことなっているのである。もしかすると、殿舎地区の建設と築地回廊の建設の時間的なズレによって生じた現象かもしれない。

**6691A** 第Ⅱ期南面築地回廊地区と殿舎地区に主としてのこる。後述するように6691Aは恭仁宮大極殿のためにつくられた軒瓦で、遷都後に平城宮で用いられるようになった。

以上、第1次大極殿地域の軒瓦についてみてきたが、つぎに隣接地域との比較を若干こころ  
大膳職 みる。大膳職地域については、瓦構成でみるかぎり東区と西区とはことなった様相を呈する。たとえば、6664Bが西区で顕著にみられるのに対し、西区ではほとんどない状況、西区に多い6133が東区で少ない状況などがそれである。一方、両区をあわせると、殿舎地区とほぼ同じ傾向をとり、この地域の建設が第Ⅱ期にあることを軒瓦の面からも裏づけている。

内裏地域 については未整理の段階で正確な比較はなしえず、大雑把な傾向をたどるしかない  
内裏地域 が、出土量の多い順に第1次大極殿地域と比較してみよう。

**6313—6685** 小型軒瓦は両地域とも共通して存在している。それは両地域ともに築地回廊でかこまれていたからである。

**6311A・B—6664D・F** 6311A・Bは第1次大極殿地域には出土しない軒丸瓦である。それに組合う6664D・Fもきわめて少ない。また、第1次大極殿地域で6664に組合う6284は内裏地

域にあらわれていない。6664D・Fが6664C・Kにくらべて新しいタイプの軒瓦であることからすれば、6664C・K→6664D・Fと変化する間に、6284→6311A・Bへと変化したのでであろうとおもわれる。

**6282—6721** この組合せの占有率は殿舎地区と類似している。つまり、内裏地域の軒瓦の多数をしめる小型瓦の6313—6685を除くと、構成比が浮上するからである。殿舎地区では6282B—6721Cとの組合せがはっきりと成立しており、同様の傾向が内裏地区にもみられそうだが、それほど顕著でない。

**6225—6663** 内裏での占有率は低くない。殿舎地区であらわれてこないのと対照的である。これは内裏地域が第2次大極殿地域に近接しているためであり、同時の改修工事を行なったことを暗示している。

これらの組合せから判断すると、内裏地域の造営は第1次大極殿地域に後続するかたちで、**内裏の造営**着手されたとかんがえられる。その時期は平城宮瓦Ⅱ期である。また、平城宮瓦Ⅲ期の存在は、第2次大極殿地域の造営にともなって改築されたことを意味するであろう。

### C 軒瓦の同範関係

同一の範型でつくられた軒瓦を同範瓦といい、同範瓦が地域をへだてて発見される場合を、同範関係という。この同範関係が起る可能性を想定すると、つぎのような場合がある。

同範の認定

- 1 A地点の瓦工房で製作した瓦が、B地点に運ばれて使った場合。
- 2 同一瓦工房(産)の瓦を、A地点とB地点に運んで使われた場合。
- 3 同じ瓦の範型を、A地点とB地点の瓦工房でともに使った場合。
- 4 A地点の建物が廃され、B地点の建物に再利用した場合。

このように、同範関係は瓦工房を軸にして発生するのが原則的であり、消費地間で起るのは副次的である。1・2・4の場合は瓦自体が移動しており、胎土や製作技法が共通する可能性が高い。3の場合は範型の移動のみならば、胎土や製作技法に違いがでてくる可能性がある。瓦が移動する場合、たとえば東大寺造営に際して摂津国梶原寺<sup>1)</sup>に瓦を発注している例からみられるように、比較的至近距離間におこる現象である。それに対して範型が移動するときには、遠隔地間に同範関係を生ずることになる。たとえば、播磨国溝口廃寺と下野国薬師寺<sup>2)</sup>との間に存在する6682、今回報告した平城宮と豊前国椿市廃寺との間に存在する6284Fのような例である<sup>3)</sup>。

4の場合は都城の遷都によって生じる同範関係が好例

- 1) 「天平勝宝九歳 三月十六 撰津職解」『大日本古文書』第4巻 p. 224～225
- 2) 岡本東三「同範軒平瓦について」『考古学雑誌』60—1, 1974
- 3) 行橋市教育委員会『椿市廃寺』1980

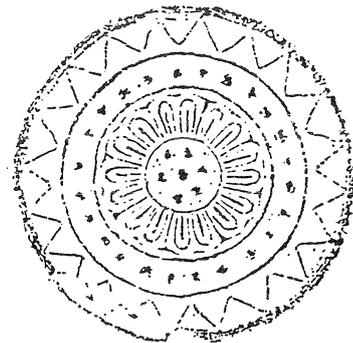
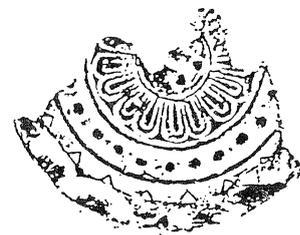


fig. 113 6284Fの同範  
上・椿市廃寺 下・平城宮跡

第V章 考 察

である。藤原宮と平城宮、平城宮と長岡宮、長岡宮と平安宮、さらには右の諸宮と難波宮などの間には同範関係があり、従来からもしばしば指摘されている。ここでは第1次大極殿地域と恭仁宮との間に存在する同範関係について検討してみよう。

すでにのべてきたように、『続日本紀』天平15年11月条に「初壞平城大極殿并歩廊、遷造於恭仁宮四年於茲」という大極殿と歩廊は、SB7200とSC5500である蓋然性がきわめて強い。だとすれば、当然瓦も恭仁宮へ移動していることになる。恭仁宮の発掘調査では、現在までに軒丸瓦22種427点、軒平瓦22種355点が報告されている<sup>1)</sup>。うち、8世紀代の軒丸瓦の内訳は、平城宮と同範例13種、うち第1次大極殿地域出土瓦と同範のもの12種(Tab.44)、同範ではないが同型式のもの1種(6133[KM14])、信香楽宮と同範のもの1種(KM05)、山背国分寺独自のもの1種(KM06)となる。軒平瓦では、平城宮と同範例12種のうち第1次大極殿地域出土瓦と同範のもの10種(Tab.44)、同範ではないが同型式のもの2種(6663[KH06B]・6721[KH04C])、信香楽宮と同範のもの2種(KH08・KH05)、恭仁宮独自のもの2種(KH03・KH02)、東大寺式と同系のもの1種(KM15)となる。こうした8世紀の軒瓦は、恭仁宮造営時およびそれ以前の瓦<sup>2)</sup>(和銅3年～天平17年)と山背国分寺への施入(天平17年)以降に大別できる。前者が平城宮瓦Ⅰ・Ⅱ、後者が平城宮瓦Ⅲ以降に相当していることはいままでの図(fig. 114)。

	平城宮 編年	軒 丸 瓦	軒 平 瓦
恭仁宮期	I	6284A・6284C・6284E	6664C・6664K
	II	6285A・6285B・6308・6311A・6301B ・6291A・6320A・6282Ha・6130A・ 6321A	6685B・6691A・6682A・6664F・6671B 6663(KH06B)6721A・6721C・6721(KH 04C)・6663B
国分寺期	III	KM05・KM06	KH05・KH03・KH02・KH03・6732

Tab. 44 恭仁宮軒瓦の分類

恭仁宮と平城宮との間に存在する同範関係軒瓦の大半は、恭仁宮遷都にともなって平城宮から運んだものとみてさしつかえなからう。そして、軒瓦からも、『続日本紀』の記事が傍証されることになる。ただし、恭仁宮大極殿に葺いたものと想定されている6320Aaについては問題がある。つまり、同範であっても、平城宮では外縁の凸線鋸歯文を凸面鋸歯文に彫りなおしたAbが多く存在しているからである。このことは、同範であっても、恭仁宮の6320Aaが古く、平城宮の6320Abが新しいものであることを物語っている。一方、恭仁宮で6320Aaと組合さる6691Aは、南面築地回廊地区と殿舎地区に集中するが、6320Aとは組合わず対応する軒丸瓦も見出しがたい。平城遷都後の第Ⅱ期建物造営にともなう補助瓦として用いられているらしいのである。

法隆寺東院では、天平10年代の創建瓦として6691Aが6285Bと組合って用いられている。ともに恭仁宮に存在するが、組合せ関係はことになっており、法隆寺東院の6691Aには凸面に格子目叩きの調整を施すなどの、他にみられない独自の技法がある。一方、平城宮のものは6285A・Bであり、少しく形がことなり、それも主要な瓦にはなっていない。このことからすると、法隆寺東院と恭仁宮・平城宮のあいだに存在する同範関係は、範型の移動による可能性があ

1) 京都府教育委員会「恭仁宮跡昭和53年発掘調査概要」1979, p. 1~63

2) 平城宮と同範の瓦には、6282Ha・6721A・C

のように平城宮瓦Ⅲ期に位置づけるものもふくまれるが、今回は、恭仁宮造営期のものとして取り扱った。

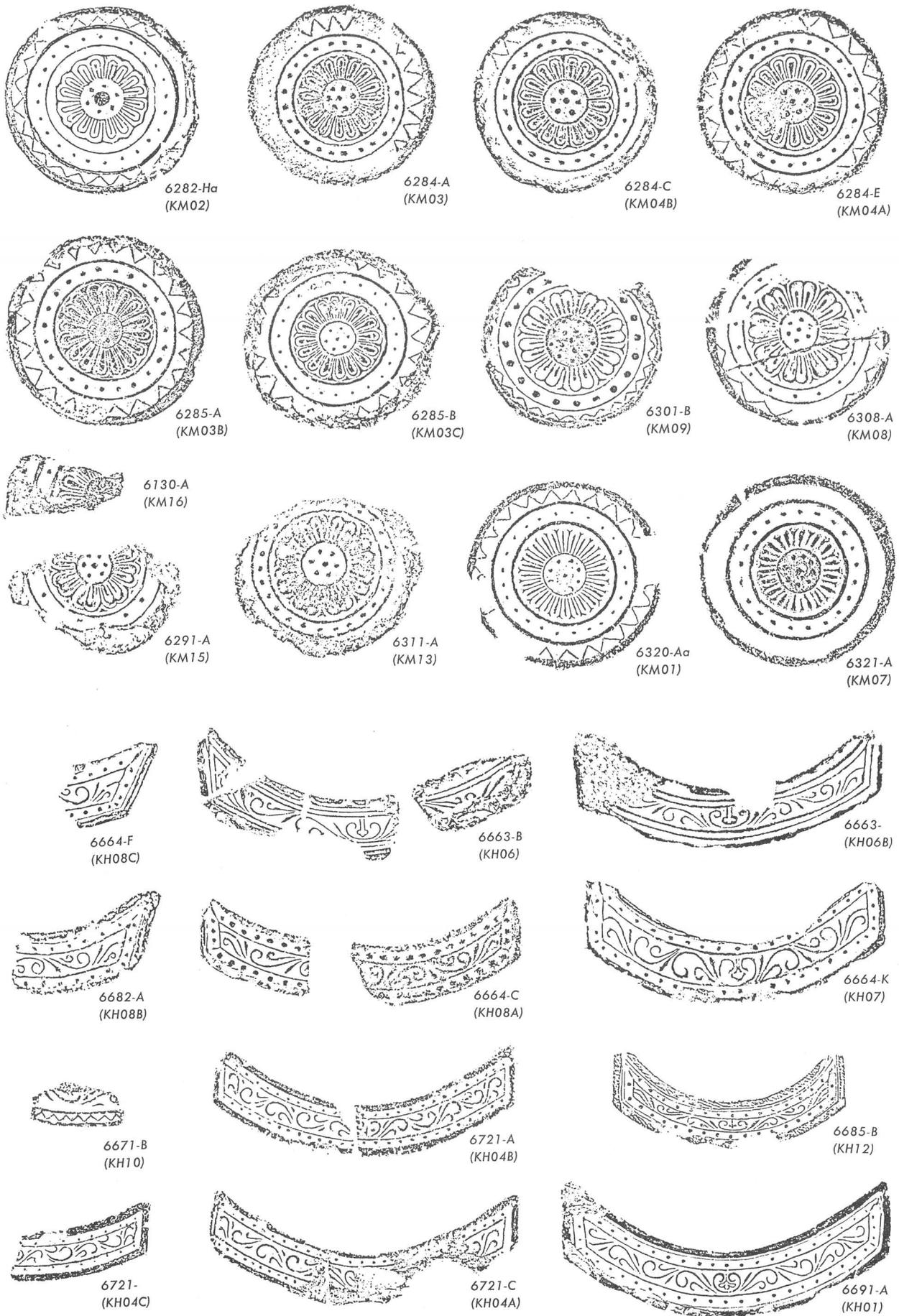


fig. 114 平城宮と恭仁宮の同範軒瓦

るとみななければならない。

しかし、恭仁宮と平城宮の同範関係は、瓦工房内の問題である可能性が大きい。その手掛りとして第1次大極殿地域から出土した人名刻印瓦<sup>1)</sup>がある。人名刻印は丸・平瓦にみられ、恭仁宮で多量に用いられているとともに、東大寺の前身である金鐘寺の金堂とされる

法華堂 法華堂の所用瓦でもある。それらは人名が共通するばかりではなく、瓦の製作技法も共通しており、同一工房の製品であることについては衆目の一致するところである。さらに、印形の磨耗状況からすれば、恭仁宮・法華堂よりも平城宮のものの方が後につくられたものと推測されている。また、法華堂付近から6691A—6285A<sup>2)</sup>が出土しており、それらが人名刻印瓦と一連のものであることがうかがわれる。このようなことから、恭仁宮・法華堂の瓦がほぼ時期を同じくして造られ、その範型が法隆寺東院の創建時にも用いられたことが想定できる。一方、平城宮では、平城遷都後の修理に際して用いられたであろうことが類推できること

になる。つまり、天平10年代前半の主要な軒瓦文様であった6691A、6285A・B、6320Aおよび人名刻印瓦は、天平17年以降の平城宮では残影として存在し、第1次大極殿地域の6134A—6732A・6282B—6271C、第2次大極殿地域の6225—6663の軒瓦文様が主流になって変化していくという見透しがたつのである。

瓦工房と宮城や寺院の造宮長官とを直結させるのは危険であろうが、うえのような瓦製作が共通する事情を裏付けるような人事に注目したい。巨勢朝臣奈氏麻呂と智努王が、天平13年(741)に恭仁宮の造宮卿に任命されている。『法隆寺東院縁起』によれば、天平19年段階の造院司長官は巨勢朝臣奈氏麻呂<sup>3)</sup>であり、智努王は神亀5年(728)に東大寺の前身である金鐘寺の造宮にかかわる造山房司長官に任命されたことが記録されている<sup>4)</sup>。

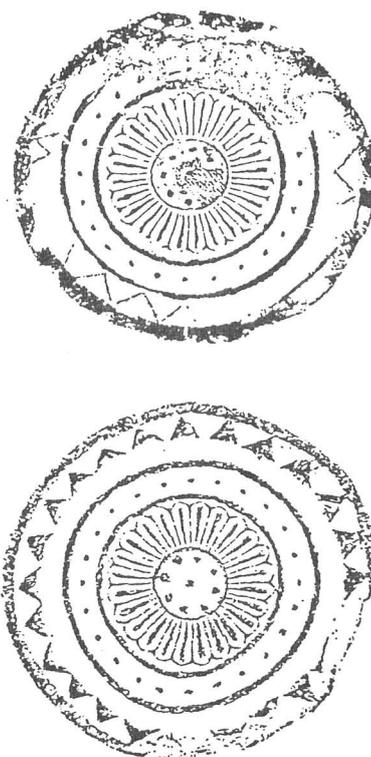


fig. 115 6320Aの二種  
上a(恭仁宮) 下b(平城宮)

1) 人名刻印瓦については、その人名が、造東大寺司の瓦工名と一致するという藤沢一夫の見解がある。藤沢一夫「造瓦技術の進展」『日本の考古学VI』1967, p. 293

2) 奈良県教育委員会『国宝東大寺開山堂修理工事報告書』1971, 第113図

3) 巨勢朝臣奈氏麻呂は、天平勝宝5年(753)3

月、造宮卿のまま薨じていることから、遷都後の平城宮の造宮にも係っていたと推定される。

4) 恭仁宮と法華堂の人名刻印瓦については、智努王が介在したとする森郁夫の見解がある。森郁夫「東大寺法華堂の瓦」『南都佛教』第43・44号 1980, p. 140~p. 148

## 5 土 器

## A 平城宮土器Ⅳ・Ⅶの再検討

今回報告した土器のなかで、編年上問題になる東楼 SB7802 出土土器および第Ⅲ期遺構から出土した土器について、主として土師器食器類製作の調整手法を中心にして検討をこころみしてみよう。

## i 東楼 SB7802 出土の土器

SB7802 の柱抜取痕跡から出土した土器は短期間のうちに投棄されたもので、平城宮土器Ⅳにぞくする。しかしながら、これまで平城宮土器Ⅳの代表例としてきたSK219の土師器調整手法<sup>1)</sup>とは様相がいささかことなる。

SK219出土土師器の調整手法の割合をみると、杯Aでは a手法5.3%， b手法92.1%， c手法2.6%， 皿Aでは a手法7.5%， b手法65.3%， c手法27.2%であり、 b手法が圧倒的多数をしめている。また、暗文をもつものはまれであった。これにたいし、平城宮土器Ⅲの代表例になっているSK820では a手法が圧倒的多数をしめ、杯Aでは66.3%， 皿Aでは78%にたっしている。c手法がこの時期に出現するが、ごく少量にすぎない。また、暗文をもつものが多数をしめているのである。

SK219・  
SK820の  
土 器

平城宮土器ⅠのSD1900<sup>2)</sup>、平城宮土器ⅡのSD485<sup>3)</sup>、平城宮土器ⅤのSK2113<sup>4)</sup>の様相をくわえ、平城宮出土土師器の調整手法の流れをたどってつぎのような結果がでている。つまり、平城宮土器Ⅰ・Ⅱでは a， b両手法、Ⅲでは a手法、Ⅳでは b手法、Ⅳ以降 c手法が主体となるという変化で理解されてきたのである<sup>5)</sup>。

ところでSB7802出土土器をみると、杯Aのうち a手法60.5%， b手法7.9%， c手法31.6%であり、皿Aでは a手法85.9%， b手法5.1%， c手法9.0%となる。一方、暗文をほどこすものはまれである。こうしたSB7802の状況をSK820、SK219と比較するとどうだろうか。SB7802土器の3手法の比率は、SK820土器とくらべると、a手法が主体をになっていることは共通するが、c手法の割合がSK820土器よりもかなり大きい。また、SK219土器と比較すれば a手法と b手法との割合が逆転していることになる。c手法はSK219では皿Aに顕著にあらわれており、SB7802では杯Aに多いというちがいがあがある。また、暗文がSB7802にまれであることはSK219と共通する特徴といえよう。このような調整手法からみるとSB7802土器は、平城宮土器ⅢのSK820よりも新しく、これまで平城宮土器ⅣとしてきたSK219よりも古い様相をもつことになる。

平城宮土器  
Ⅳの古い  
タイプ

SB7802土器はしばしばのべてきたように、天平勝宝5年の紀年木簡と伴出したもので年代

1) 『平城宮報告Ⅰ』 p. 63～68

4) 『平城宮報告Ⅶ』 p. 90～94, PL. 51・52

2) 『平城宮報告Ⅸ』 p. 54～60

5) 『平城宮報告Ⅶ』 p. 143・144

3) 『平城宮報告Ⅵ』 p. 38～50, PL. 55～64

## 第V章 考 察

の1点がきまっている。平城宮土器ⅢのなかでSK820土器よりも若干新しい段階のものとして、SK2101土器<sup>1)</sup>がある。この土壌から出土した木簡の年紀でもっとも新しいのは天平勝宝2年であり、SB7802出土木簡よりもわずか3年早い。しかしながら、調整手法はSK820と同様の傾向をしめし、暗文をもつものも多数をしめる。

以上のような検討をつうじてSB7802土器は、SK820・SK2101土器とSK219土器との中間に位置する土器群ということになる。手法的には平城宮土器Ⅲにはぞくさず、今回の報告では平城宮土器Ⅳのなかにふくめた。その実年代は平城宮土器ⅢのSK2101に連続するものであり、平城宮土器Ⅳの前半期におくことができる。SB7802土器によって、平城宮土器Ⅳの上限の1点が天平勝宝5年(753)に定まったことになる。したがって、共伴の紀年木簡から天平宝字6年(762)を中心とする年代を与えてきたSK219土器は、平城宮土器Ⅳの後半を代表することになった。

### ii 第Ⅲ期遺構出土の土器

第Ⅲ期の殿舎地区の建物SB8224、溝SD6631、SD6633、SD7175から出土した土器は、平城宮土器Ⅶにぞくするものとかがえている。しかし、さきに平城宮土器Ⅶの代表例として報告したSE311B土器<sup>2)</sup>とは若干様相をことにしているので、以下において平安時代初期の土師器食器類についての調整手法を比較検討してみよう。

長岡京の土器  
平城宮土器Ⅵ、すなわち長岡京時代の土器は、平城宮跡からは好資料が発見されていない<sup>3)</sup>ので、長岡京SD51<sup>4)</sup>・SD1301<sup>5)</sup>出土の土師器を資料にして、8世紀末葉の土師器をのべる。SD51は、長岡京廃都時(延暦13年,793)に埋められた溝であり、SD1301からは延暦6・8・9年(786~790)の紀年木簡が出土している。この2条の溝の土師器食器類の調整手法には、杯・皿にb手法・c手法・f手法がみられる。e手法は皿の法量の小さい一群(口径11.6cm・高さ2.8cm)と椀cにみられるにすぎない。食器類のc手法には、後述のSE311Bでみられるようにe手法で調整したのちに全面へら削りするc手法はみられない。こうした調整手法すると、長岡京SD51・SD1301土器は平城宮土器Ⅴに連続する様相をしめしていることになる。

SE311Bの土器  
平城宮土器Ⅶの代表例としてきたSE311Bについてはどうであろう。杯Aではc手法83.7%、e手法2.3%、f手法14.0%、皿Aではc手法94.6%、e手法5.4%、椀Aではc手法73.9%、e手法19.5%、f手法6.6%となっている。c手法が盛行しているが、とくに杯、椀にはe手法ののち全面をへら削りしたc手法が多い傾向が顕著にみられる。SE311B土器に後続するも

1) 『平城宮報告Ⅶ』p. 87~90, PL. 60

2) 『平城宮報告Ⅳ』p. 24~28

3) 『平城宮報告Ⅶ』で6ABO区の建物SB116の雨落溝出土の土器群(『平城宮報告Ⅱ』p. 70・71参照)を長岡京併行とかがえていたが、その後の長岡京の調査の進展にともない、長岡京時代の土器の様相があきらかになり、SB116の土器群は、長岡京の土器群より後出的な型式で平城宮土器Ⅶにぞくすることがあきらかになったので、修正する。

4) 京都府教育委員会「長岡京左京三条一坊第2

次発掘調査概要』『埋蔵文化財発掘概報(1975)』1978, p. 34~39

5) 向日市教育委員会「長岡京左京13次(7ANE SH地区)発掘調査報告』『向日市埋蔵文化財報告第4集』1977, p. 1~39

百瀬ちどり「長岡京の供膳形態の土師器について』『長岡京ニュース』第11号 1979

この論文では、長岡京の土師器と平城宮土器Ⅴ・Ⅶの土師器が対比され、長岡時代の土師器の様相がくわしくのべられている。

のとして、かつて報告したSD650A・B土器<sup>1)</sup>があり、ここではe手法が増加する傾向がみられる。全体としてはc手法が依然としてe手法をうまわまっているが、c手法の多くはe手法ののち全面へら削りしたものである。10世紀後半にぞくする薬師寺西僧房跡出土土器<sup>2)</sup>は、そのほとんどがe手法であり、e手法ののちへら削りするc手法はすでに消失しているとみてよい。

以上のように、平安時代初期の土師器食器類の調整手法の変化をたどっていくと、c手法からe手法へという調整手法の時代的な変化が濃厚に浮びあがってくる。かさねていうが、この時期のc手法のうち、e手法ののち全面へら削りするものが主体をしめていることに注目しなければならない。したがって、奈良時代初頭からの調整手法の流れとして概括的にみれば、a手法ののちへら削りするものから、e手法ののちへら削りするものに変化し、さらにへら削りを省略するという状況がうかがわれるのである。e手法はすでに奈良時代前半から椀cにみられるがそれ以外の器種になく、食器類全般にわたってこの手法がとり入れられるのは平城宮土器Ⅶからのことである。

つぎに、平城宮土器Ⅶに比定した第Ⅲ期の遺構から発見された土器を再度検討してみよう。

SB8224土器にはb手法が姿を消し、c手法とf手法で、前者が多数をしめる。くわえて、杯では口縁端部の巻込みが小さく、口縁部の外傾度が大きいこと、椀Aの形態が杯Aの小型の形に変化することなどは新しい要素といえよう。他方、c手法のなかにe手法ののち全面へら削りするc手法を欠いていることは、長岡京SD51、SD1301土器の延長線上にあることをしめす。

SB 8224 の  
土 器

SD6631、SD6633、SD7175土器のうち、皿では皿AⅡにf手法がわずか1個体みとめられるほかはc手法である。杯Aではe手法ののち全面へら削りするc手法が大多数をしめている。このようにc手法が盛行するのはSE311Bと共通しており、両者の時期にあまりへだたりのないことをしめしている。一方、SE311Bにくらべてe手法の割合が少ないのは古い要素をなおとどめていることになる。

うえのことから平城宮土器ⅦはSB8224→SB6631等→SE311Bの順にならぶ。しかしながら、SB8224土器は平城上皇時代(809～824年)当初のものではない。すなわち、SB8224は前身建物SB8219を建替えたのちの建物であり、土器はその建築時の柱掘形から検出したものである。いま、建替えの時期をきめる手立てはないが、平城上皇時代の半ばとすれば、SB8224土器の年代は815年前後となり、これから推測すればSD6631等土器は平城上皇時代後半、SE311B土器は824年以後余り時のへだたらない頃ということになる。

	b手法	c手法	e-c	e手法	f手法
長岡京 SD1301	1.0%	9.5%	×		3.6%
平城宮 SB8224		70.8	×		29.2
SD6631等		99.0	○	0.5%	0.5
SE311B		89.9	○	4.0	6.1
平城京 SD650A		77.0	○	23.0	
SD650B		55.0	○	45.0	

Tab. 45 土師器杯A・皿Aの調整手法

1) 『平城宮報告Ⅵ』p. 54～74, PL. 66～79

2) 『平城宮跡発掘調査概報』1975, p. 37～43

『奈文研年報1975』p. 28～32, 吉田恵二「薬師

寺出土の施釉陶器」『日本美術工芸』1975年11月, p. 15～23

## iii 土師器の胎土分析

**奈良時代土師器の群別** 目的 第1次大極殿地域から出土した土器の大部分は、奈良時代後半から平安時代前半のうちでも初期までに位置付けられる。奈良時代後半の供膳形態の土師器は、形態・調整手法・胎土から、大きく二つのグループ ( $N_1$ 群・ $N_2$ 群) にわけることができる。このほか、両群のいずれにもぞくさないものも認められるが、少量であり、今回の分析対象からはずした。 $N_1$ 群土師器は灰白色を呈し、砂分をほとんど含まない緻密な胎土で、その多くはa・b手法で調整され、c手法で調整されているものは少ない。それに対し  $N_2$  群土師器は、赤褐色から暗褐色に発色し、雲母・長石粒を多量に含む砂分の多い胎土で、多くはc手法で調整されている。

**平安時代土師器の群別** 平安時代の土師器は、奈良時代後半の $N_1$ 群と共通性をもつものと、 $N_2$ 群とよく似た発色で、砂分を多量に含むものがある。仮に前者を $H_1$ 群・後者を $H_2$ 群とする。 $H_2$ 群はc手法で調整されるものが大半であるが、e手法による土師器も少数例ある。平安時代初期(9世紀初頭)では、 $H_1$ 群が少量ながら存在するが、9世紀中頃には姿を消し、 $H_2$ 群のみとなる。

理化学的な分析を導入した主な理由は、第1に、考古学的操作で分類した奈良時代後半の土師器(平城宮土器Ⅳ・Ⅴ)の $N_1$ 群と $N_2$ 群との間における微量元素や鉱物組成上の差異を検討することであり、第2には、奈良時代後半の土師器と平城上皇時代の土師器を比較検討することである。すなわち、 $N_1$ 、 $N_2$ 群と $H_1$ 、 $H_2$ 群との差異を確認することである。第2点については、奈良時代の宮廷土師器(貢進土師器)と平安京遷都後の旧平城京地域で使用された在地消費土師器の産地は、おそらくことなるであろうとの見通しに立脚している。ただ第1次大極殿地域から出土する平安時代の土師器は、平城上皇の平城宮にともなう遺構から出土しており、多分に貢進土器的な可能性があるため、平安遷都後、旧平城京で生活していた人々が使用したとおもわれる土師器をも試料に供した。東三坊大路東側溝出土の土師器(SD650A・B)と薬師寺西僧房出土の土師器である。今回の分析した資料とその年代はTab.46・47のとおりである。

**方 法** 分析試料となる土師器の大半は完形品、もしくはそれに近いものが多く、本報告では原則として非破壊的手法によることにした。同手法として最もよく知られている蛍光X線分析をおこなった。蛍光X線分析法では、土師器に含まれる組成元素を定量的に測定することが可能である。分析の対象となる元素は、土師器を相互に比較するために最も有効なものでなければならず、本報告ではストロンチウム(Sr)、ルビジウム(Rb)、そしてジルコニウム(Zr)を定量的に測定することにした。また、胎土に含まれる鉱物片や岩石礫種の判定とその集合状態については、薄片を作成し偏光顕微鏡下で観察を行なった。さらに、一部の試料については鉱物同定のためにX線回折分析を並行した。

蛍光X線分析に際しては、土師器表面を十分に洗浄し(一部の試料は表面を研磨して平滑にした)、X線照射面積を直径30mmの円形範囲に定めて測定を行なった。Sr $K\alpha$  ( $2\theta$  25.16), Rb $K\alpha$  ( $2\theta$  26.64), およびZr $K\alpha$  ( $2\theta$  22.58) 線のピーク強度から Rb $K\alpha$ /Sr $K\alpha$ , Zr $K\alpha$ /Sr $K\alpha$  の相対強度比を求め、fig.118のように図示した。

**結 果** 蛍光X線分析の結果、奈良時代後半の平城宮土器Ⅳ・Ⅴの土師器は、二つのグループに分かれ、考古学的な観察結果と一致する。fig.118 は平城宮土器Ⅴの試料をRb $K\alpha$ /Sr $K\alpha$ , Zr $K\alpha$ /Sr $K\alpha$ の測定値をもとにプロットした分布図である。 $N_1$ 群土師器は、X値(Zr $K\alpha$ /Sr $K\alpha$ )

(器種)	(時期区分)	(器種形式)	(出土遺構)	(肉眼観察)	(試料数)	(器種)	(時期区分)	(器種形式)	(出土遺構)	(肉眼観察)	(試料数)		
杯	IV	A	SB7802	N <sub>1</sub>	14	皿	IV	A	SB7802	N <sub>1</sub>	17		
				N <sub>2</sub>	13					N <sub>2</sub>	9		
		C	SB7802	N <sub>1</sub>	7			V	A	SB7150	N <sub>1</sub>	4	
				N <sub>2</sub>	5						N <sub>2</sub>	1	
	V	A	SB7150	N <sub>1</sub>	5		SA109		N <sub>1</sub>	10			
				N <sub>2</sub>	2				N <sub>2</sub>	15			
			SA 109	N <sub>1</sub>	10		SK8316・17		N <sub>1</sub>	5			
				N <sub>2</sub>	3				N <sub>2</sub>	3			
			VII	A	SB8224		H <sub>1</sub>		6	A	SB8224	H <sub>2</sub>	10
							H <sub>2</sub>		4			SD7175	H <sub>1</sub>
	SD7175	H <sub>2</sub>			12		SE311B		H <sub>2</sub>		9		
		H <sub>2</sub>			6				SE311B		H <sub>2</sub>	6	
	B	SE311B	不明	3	A I		SE311B	H <sub>2</sub>		4			
			H <sub>2</sub>	2				A II	SE311B	H <sub>2</sub>	6		
東三坊大路 東側溝	A	SD650A	—	8	A I	SD650A	—			6			
			A (e)	SD650B			—	4	A II	SD650A	—	7	
							B (e)	SD650B			—	2	A (e)
薬師寺西僧坊床面				—	9	薬師寺西僧坊床面				—	5		
				—	4					—	4		

(計 322)

( ) : 調整手法

A I, A II は便宜上分類

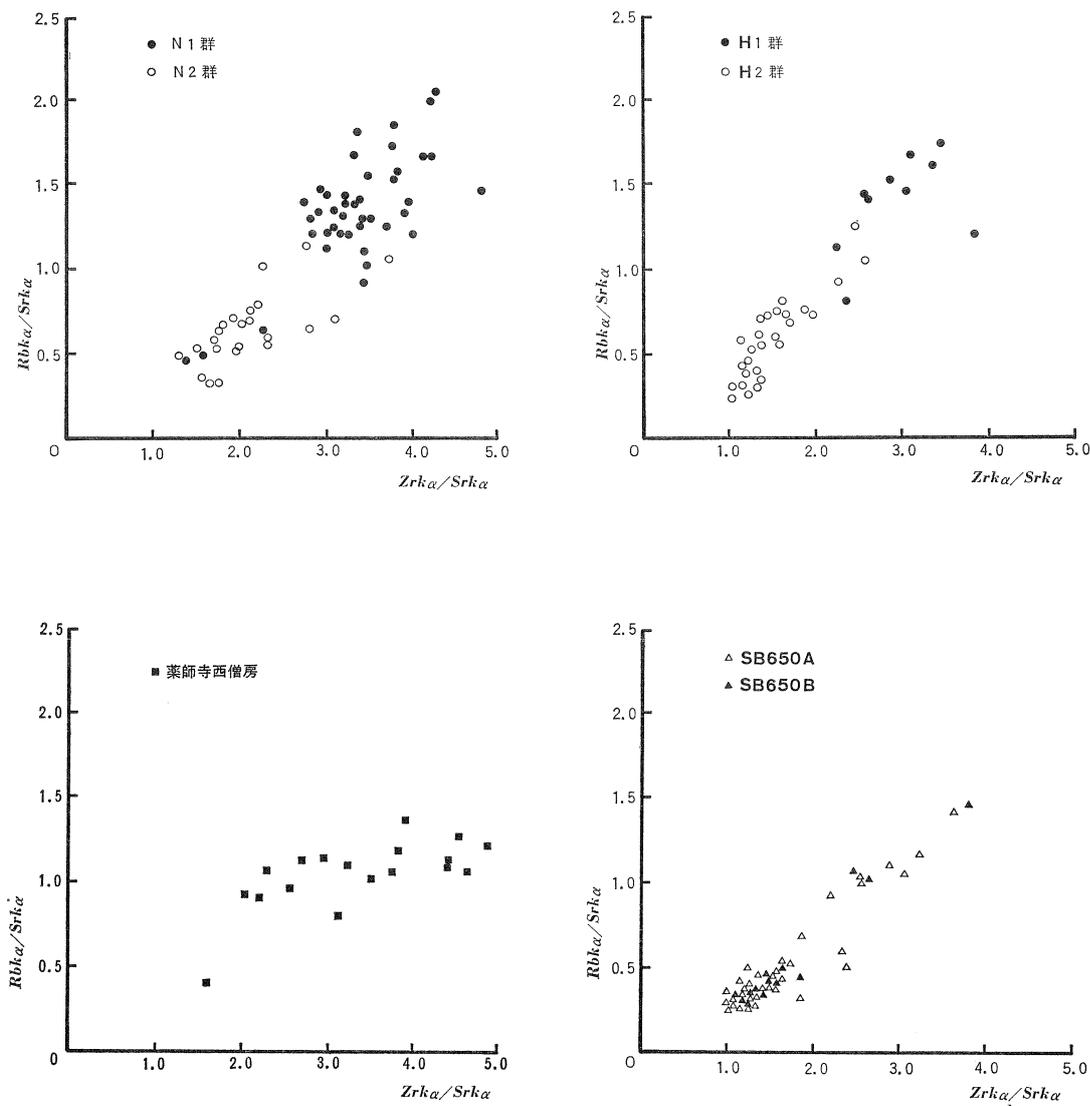
Tab. 46 分析試料一覧

椀	IV	A	SB7802	N <sub>2</sub>	3		
				C	SB7802	N <sub>1</sub>	8
		N <sub>2</sub>	12				
			V	A	SB7150	N <sub>1</sub>	2
	N <sub>2</sub>	3					
	SA 109	N <sub>1</sub>			7		
		N <sub>2</sub>			4		
	VII	A			SE311B	H <sub>2</sub>	5
						A (c)	SD650A
			A (e)	SD650A			
						A (e)	SD650B
	A (c)	SD650B	—	5			

Tab. 47 胎土分析試料の時期

(形 式)	(遺 構)	(時 期)
平城宮土器IV	SB7802	8世紀中頃
〃	V SA109・SK8316	8世紀後半
平城宮土器VII	SB8224・SD7175 SE311B・SB116	9世紀初頭
東三坊大路東側溝	SD650A	9世紀前半
〃	SD650B	9世紀後半~10世紀初
薬師寺西僧坊	西僧坊	10世紀後半

第V章 考 察



測定条件

X線管球: Cr(クロム)  
 電圧電流: 40kV-20mA  
 分光結晶: LiF(フッ化リチウム)  
 検出器: シンチレーションカウンター  
 走査速度: 1/1 (°/min)

fig. 118 土器の蛍光X線分析

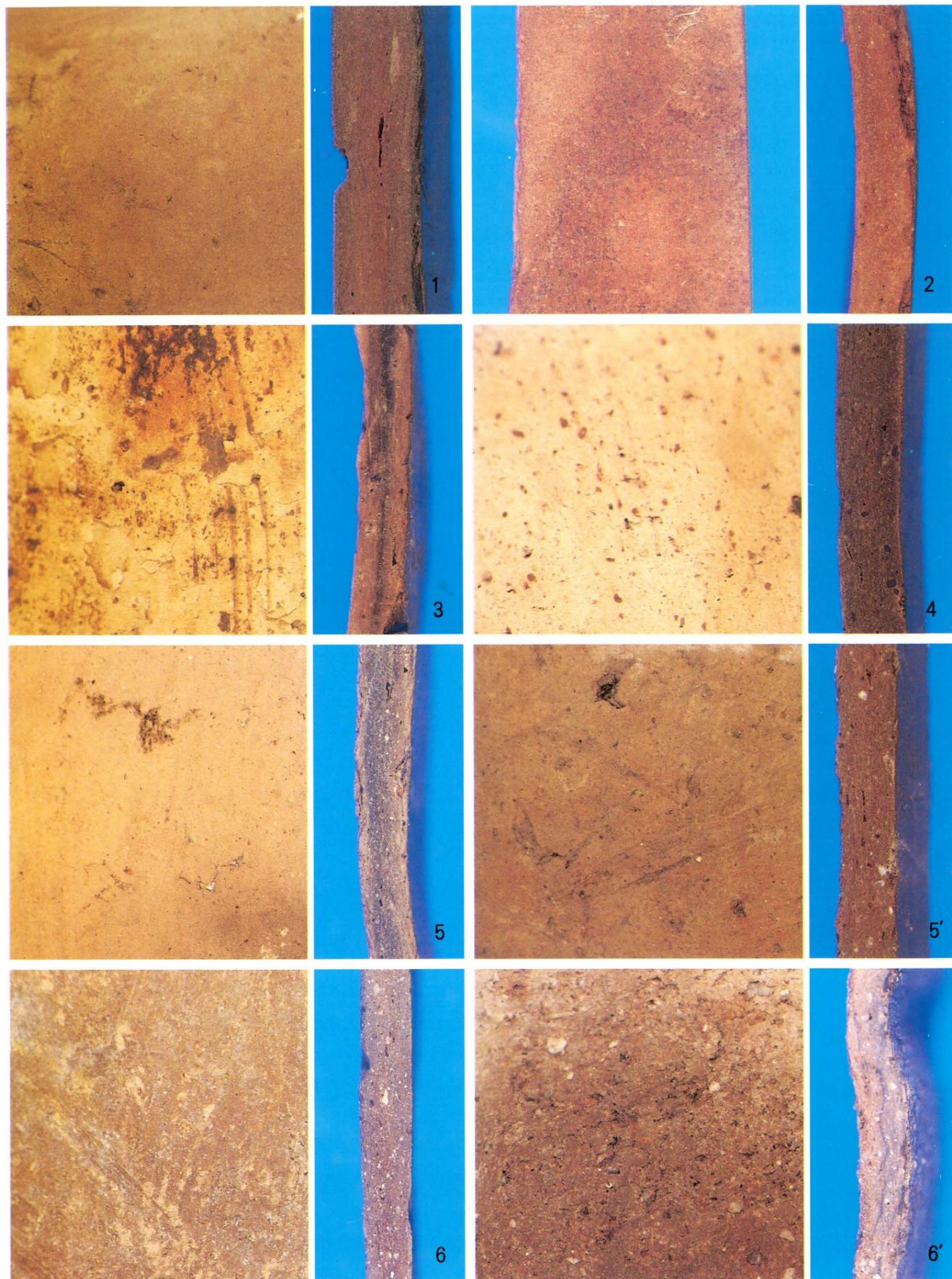


fig. 116 平城宮土器表面・断面拡大写真

1 : 平城宮土器IV 2 : 平城宮土器V 3 : 平城宮土器VII1群  
 4 : 平城宮土器VII2群 5・5' : 東三坊大路測溝SD650 A  
 6・6' : 東三坊大路測溝SD650 B (倍率3)

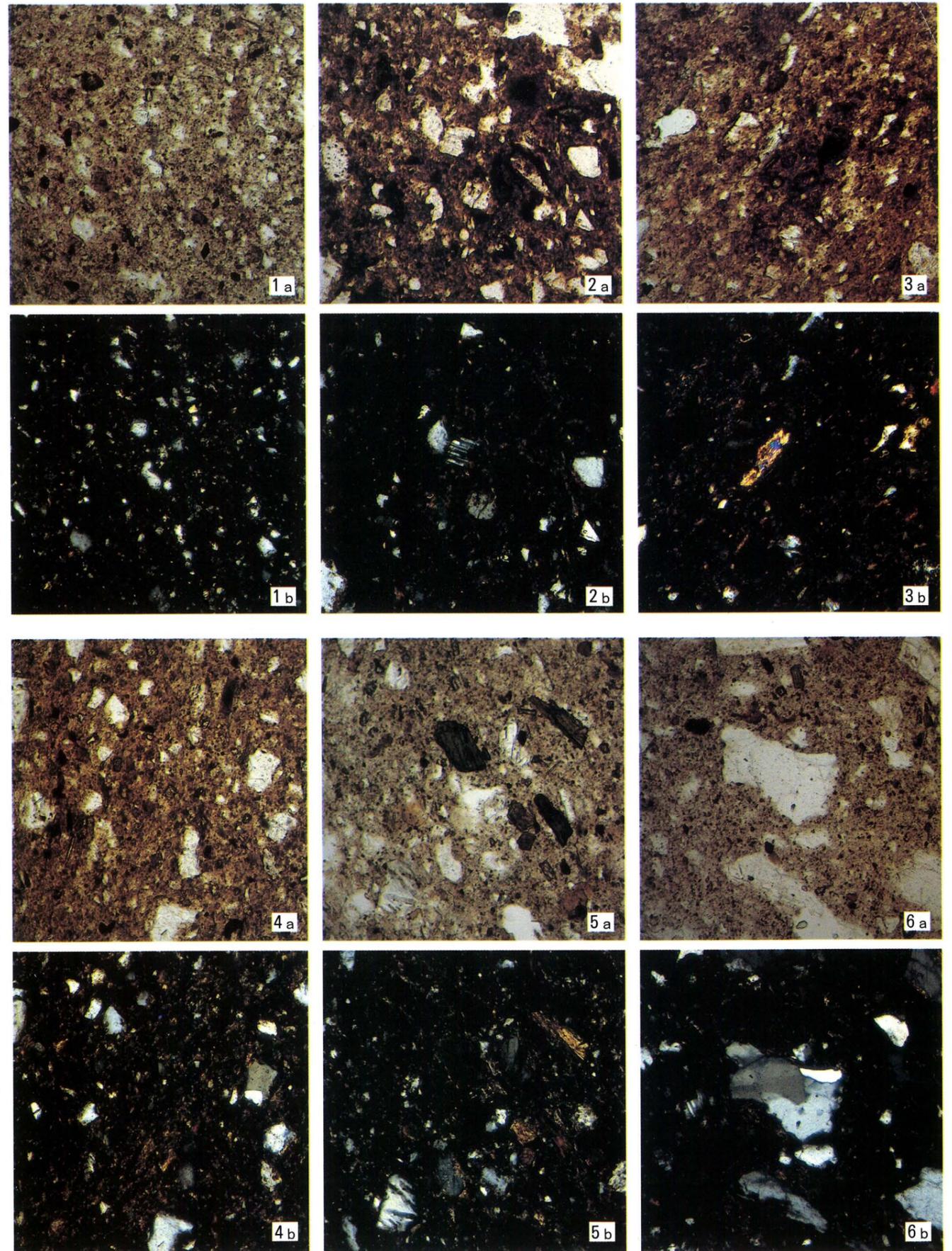


fig. 117 平城宮土器の偏光顕微鏡写真

1 : 平城宮土器IV、2 : 平城宮土器V、3・4 : 平城宮土器VI~VII  
 5・6 : 東三坊大路東測溝SD650 A・B 上段 : -ニコル 下段 : +ニコル (倍率60)

2.0~4.9, Y値(RbK $\alpha$ /SrK $\alpha$ )0.7~2.1の範囲に分布するのに対し, N<sub>2</sub>群土師器は, N<sub>1</sub>群に比較し座標位置がやや低く, X値1.4~4.7, Y値0.3~2.1に分布する。平城宮土器Ⅶの資料も, 大きく二つにわかれ, H<sub>1</sub>群は平城宮土器Ⅳ・ⅤのN<sub>2</sub>群分布範囲に, H<sub>2</sub>群も平城宮土器Ⅳ・ⅤのN<sub>2</sub>群の分布範囲に対応している。蛍光X線分析の結果からすれば, 平城上皇時代の土師器も奈良時代後半のそれと同じく二個所の産地からもたされた可能性が指摘されよう。

蛍光 X 線  
分 析

SD650A・B地区出土の資料は互いによく似た傾向をしめし, かつ平城宮土器ⅦのH<sub>2</sub>群の分布に近い座標位置にプロットされる。薬師寺西僧房の資料は, 肉眼的観察ではH<sub>2</sub>群系統の土師器とよくにているが, H<sub>2</sub>群とはまったく違った分布傾向をしめす。ともに, 前述のN<sub>1</sub>・N<sub>2</sub>, H<sub>1</sub>・H<sub>2</sub>群とは異なる可能性が高い(fig. 118)。

偏光顕微鏡観察では, できるかぎり蛍光X線分析に使った資料を対象にしたが, 完形品及びそれに近いものについては薄片をつくることはさけ, 同一遺構出土の別個の土師器片を試料にした。平城宮土器ⅣのN<sub>1</sub>群は, 胎土が粘土鉱物と粒径10~100 $\mu$ の鉱物片の細粒の集合からなる。鉱物片の粒径から判断すれば, 最も粘土に近い材料を選んで採集したか, もしくは人工的に精選した可能性がある。含有する鉱物は, 石英が最も多く, アルカリ長石, 斜長石は少ない。黒雲母・角閃石等の有色鉱物は極めて少ない。平城宮土器ⅣのN<sub>2</sub>群の胎土は, N<sub>1</sub>群に比べ粗く, 粘土鉱物の他は粒径20~300 $\mu$ の鉱物片の集合であり, 含有する鉱物は石英が最も多く, アルカリ長石, 黒雲母はN<sub>1</sub>群よりは多い。斜長石・角閃石はN<sub>1</sub>群同様少ないが, 鉄鉱物はN<sub>1</sub>群に比べ多く含まれている。平城宮土器ⅤのN<sub>1</sub>・N<sub>2</sub>群については, 平城宮土器Ⅳとほぼ同じ組成が認められる(fig. 116・117)。

偏光顕微鏡

含有 鉱物

平城宮土器ⅦのH<sub>1</sub>群は, 平城宮土器Ⅳ・ⅤのN<sub>1</sub>群に比べやや粗粒(20~200 $\mu$ )の集合からなっており, 黒雲母が多くなる点以外は共通した特徴をもつ。H<sub>2</sub>群も平城宮土器Ⅳ・ⅤのN<sub>2</sub>群の胎土と相似た組成をしめした。

H<sub>1</sub> 群

SD650Aの資料は, 鉱物片等の粒度からみれば, 平城宮土器ⅦのH<sub>2</sub>群と似た鉱物片の集合状態を示すが, 2mm大のチャート礫・花崗岩礫を少量含み, 鉱物種では斜長石・アルカリ長石・角閃石・黒雲母が多く含有する。

SD650

SD650Bの資料は, もっとも粗雑で, 鉱物片は粒径20~400 $\mu$ 大の集合状態を示す。しかし, 含有する岩石礫種・鉱物種の種類や量は, SD650Aのグループに最も近いものである。

蛍光X線分析, 顕微鏡観察を総合すれば, 平城宮土器Ⅳ・Ⅴ・Ⅶの資料は大きく二つに分れ, この群は考古学的な観察結果とよく一致し, しかも二つのN<sub>1</sub>・H<sub>1</sub>, N<sub>2</sub>・H<sub>2</sub>グループは, 時期をとわずそれぞれ同じような傾向をしめす。奈良時代後半から平城上皇の時代は, 胎土原料の採取地や生産地が二つのことなる地域から搬入された蓋然性が高いといえよう。

二つの産地

SD650A・Bの両試料は, 含有する鉱物種にN<sub>2</sub>群とは若干の差異が認められる。かつ岩石礫もかなり混入がしているなど全体に粗粒になっている点で, あきらかに平城宮土器Ⅳ・ⅤのN<sub>2</sub>群とはことなる。また, 平城宮土器ⅦのH<sub>2</sub>群とはその原料採取地, あるいは生産地がことなる可能性がある。しかし, 蛍光X線分析値が, 平城宮土器Ⅳ・Ⅴ・Ⅶの土師器とさほどことならない点を加味すれば, SD650A・Bの産地は, 前述のものとはあまり遠く離れた地域とはかんがえられず, 粘土の精製の差, ひいては貢進土器と在地消費の土器の製作技法の差が成分のうえにあらわれている可能性も否定できない。

## B 食膳形態土器の構成

第1次大極殿地域における土器などの遺物出土状況によって、遺構の性格を一層具体的にたどりうる場合がある。すでにのべてきたように、遺物と遺構とがもっとも密着し、遺物の出土量が比較的多く、量的な処理が可能なのは、東楼 SB7802 の柱抜取痕跡から出土した遺物である。というのは、これからの遺物は長期間にわたって径年的にすてられたものでなく、建物の解体時における短期間に廃棄されたものであり、南門を守備した衛門府の門部・衛士らの遺物とみなすことができるからである。

SB7802の土器にくらべると、必ずしも好条件をそなえているとはいえないが、第I期の東面築地回廊上に建設された南北塀 SA3777の柱痕跡から出土した土器は、この地域の建設にたずさわった工人達の食事にかかわる土器に比定することができる。一方、殿舎地区の柱抜取痕跡や溝などから出土した土器類は、この地域で宴会などを行なった時の遺物であろう。このようなことから、ここではそれらの遺構から出土した土器を中心にしてそれぞれの食膳形態を推測し、その差異を検討してみよう。

### i SB7802の場合

SB7802から出土した土器の87.1%が食器である。その大多数は食膳にのる銘々器で、鉢・盤など共用器は少なく、高杯をかいている。残りの7.6%が水・食物などを貯える貯蔵器であり、5.3%が煮炊具である。土師器と須恵器の割合は、土師器48.1%、須恵器51.1%で、両者はほぼ折半している。

さきに西弘海が、正倉院文書に散見する椀・片椀・片杯・塩杯・片盤などの食器と平城宮出土土器とを対比して、考察した<sup>1)</sup>。かれの成果にもとづいて、SB7802出土食器の構成をみてみよう。食器名比定の根拠についてはここで改めてのべることはせず、西論文にしたがう。

大 筒 曲物の底板が6点あるが、そのうち飯を盛る大筒に比定できるものに、側板の高さが底径をこえないと仮定してA・B型式(径19~16.6cm)のもの4点をあてる。

塩 杯 西は椀として須恵器杯Bのうち、BI・BIIをあてた。それよりも法量の小さいBIII・BIVがどの器種に入るか確証はない。しかし、塩杯あるいは窪杯が法量的に近いことから、ここでは塩杯に入れておく。

杯 B 蓋 杯Bは身と蓋とが一組として製作され、また消費されるものである。ところがSB7802では身に対して蓋の数が2.5倍である。この傾向はSA3777・SA109南溝、またSK219にもあらわれている。一方、SK820、SK2113、SD1900、宮外のSD485などでは逆に身のほうが多い。この場合は実際には蓋がなくても身だけで使用できるから問題はない。それでは蓋の多い状況はどのように理解すべきであろうか。SB7802土器の杯B蓋のなかで、内面が平滑になっていたり、墨が付着したりするものが30例あり、硯として用いたことがうかがえる。多数の木簡が出土しているのに対して、蹄脚硯が1点しか発見されていないことから、杯蓋硯が多く使用されたとみてよい。この杯蓋硯を蓋から除いてもなお蓋の量が多いが、これは身をうまわる蓋の破

1) 西弘海「奈良時代の食器類の器名とその用途」『研究論集V』奈文研学報第35冊, 1979, p. 59~88

(文献上の器種名)	(整理上の器種名)	(個体数)	(碗を1としたときの比率)	
碗	土師器杯B I	1	27	1
	須恵器杯B I・B II	13+(13)		
片碗	土師器杯A I	27+(30)	70	2.6
	須恵器杯C	13		
片杯	土師器皿A II	31+(17)-灯5	70	2.6
	” 杯A III	11+(10)		
	須恵器 杯A II	5+(1)		
塩杯	土師器 碗A	2	61	2.3
	” 碗C	23-灯5		
	” 杯B III	2		
	須恵器 杯A III 杯A V	10+(4)		
	杯B III・B IV	14+(14)-灯3		
片盤 (佐良)	土師器 皿A I	28+(17)	75	2.8
	須恵器 皿A	9		
	” 皿B	6		
	” 皿C	15		

Tab. 48 SB7802の食器構成

損率をしめすのかもしれない。また、SA109南溝では完形品が数多くあり、これは組合う身が欠損した場合、蓋を同時に廃棄したこともかんがえられる。これに蓋の破損数がくわるから、身より多量の蓋数となる。このような状況から、杯Bの食器数としては身の数をとるほうが妥当である。杯Bでは法量不明のものが、47%をしめているが、杯B I・IIとB III・B IVとの数量比によって法量不明のものを配分した。土師器杯A・皿Aについても同様の操作を行なった。また、土師器皿A・碗C、須恵器杯Bなどで、灯火器として用いられたものがあり、これは食器から除外した。また西が片杯に比定している杯Cは、ここで皿A IIとしているものほとんどしめている。

このようにして数値をととのえたのが、Tab. 48である。各器種の割合は碗が最も少なく、配膳の推測これを1とすると、塩杯が若干少ないが、他はほぼ3倍の数値に近い。東大寺の写経事業に要する資材・食料の見積書である「奉写二部般若経用度解率」や「造東寺司解案奉写大般若経一部用度」などの分析により、職掌の身分によって使用できた食器の種類の数がことなっていたことが指摘されている。また、支給される食料品にも差があり、食品の種類とその量がことなる。例えば「造東寺司解案」では主食である米の支給量をみると、経師・題師・装潢が1日2升、校生が1升6合、膳部・雑使が1升2合、駆使が黒米2升である。SB7802出土木簡56によれば、殿守には2升支給されており、写経所の経師・題



fig. 119 SB7802の食器組合せ

## 第V章 考 察

師・装潢と同じ待遇であったことがわかる。このような写経所例からSB7802の食器類をみると、椀・片椀・片杯・塩杯・佐良ないしは片盤の5点の組合せと椀を欠いた4点の組合せが想定できる。すなわち、出土食器のすべて5点を用いるグループと1点を欠く4点を用いたグループが、1:2の関係で存在しているのである。上述した木簡の記事からするとSB7802を守る守衛の殿守は4~5人を1単位としており、かれらを5点組合せの食器を用いるグループに想定しうる。大筒に比定できる曲物4点もかれらが用いたものとするなれば、6点組合せの食器をもつ殿守4~5人に対して、8~10人の下屬がつくことになる。いま積極的な論拠を欠くが、それが衛門府の門部と衛士との関係をしすのであろう。つぎに、殿守の1班が12~15人によって構成されているとすれば、出土の食器類はそれを上回る数量である。何班の構成であったかを想定するのは危険だが、少くとも数班が交代で、警固につき、班ごとの食器がSB7802に保管されていたことは確かであろう。木簡にある人名の付札にはこうした食器類の所有をあらわすものもあっただろう。

木製の食器 土器に対応する量の木製食膳具は出土していない。匙1、匙形木製品5、箸10、折敷2、杓子8、および筒杓(曲物底の径8cm以下のもの)1、壺の蓋、曲物盤1がそのすべてである。木製品は土器にくらべて耐久性があり、また破損しても他の器物に転用する場合があるため、多くのこらなかつたとかんがえるほかない。そのうち8点の杓子は、身と幅の比率にまとまった傾向のあることから、A・B・Cの3型式にわけたが、その他の身の大小、先端の形状も変化し、A・B・Cの3型式に対応している。うちA型式が半数以上をしめ、B型式は少ない。それぞれに大型品と小型品があり、大型品のほとんどの先端は直線状で、小型品の大半が弧状を呈している。細身のC型式は食物をすくいとるには不適當であり、攪拌などに用いられたのであろう。大型の杓子はいまのところ宮内の遺構からしか発見されておらず、大量の炊事を前提とする。またもっとも多いA型式の小型杓子は飯を銘々の器につきわける用具であろう。

貯蔵器と煮炊具 次に食器以外の貯蔵器、煮炊具をみてみよう。須恵器の甕は18点ある。これらは主に常備用の水甕などとして用いられたものであろう。ほぼ完形に近い高台付の形態の甕Cの存在もこれをしめしている。煮炊具の甕は、土師器のなかでしめる割合が10.7%と大きい。しかし、SK219、SD1900などでは甕類とともにカマドが存在するのに対して、SB7802では出土していない。このことからすれば、本格的な調理がSB7802周辺でおこなわれたことはかんがえにくい。厨で煮炊きしたものをそのまま運搬してきたものであろうか。

以上、SB7802付近に駐在した門部、衛士らの食生活およびその構成の一斑をたどったが、彼らののこした土器類には、殿舎の宴会では必ず用いられたとおもわれる高杯(菓子、果物などを盛ったものか)が存在せず、また酒をいれる壺類が少ないことなどから、かなり厳格な警備体制が組まれていたことがうかがえる。

### ii SA3777 出土の場合

SA3777の土器は、主として南半部・第II期の南辺築地回廊より南側の柱穴の柱痕跡から出土したものである。第I期の東面築地回廊を解体し、築地に変更した際にまぎれ込んだ遺物とみられる。SB7802出土土器と同じく、平城宮土器IVにぞくする。これらの土器を再分類すると

(文献上の器種名)	(整理上の器種名)	(個体数)		(文献上の器種名)	(整理上の器種名)	(個体数)
椀	須恵器杯B I	1 + (1)	2	椀	土師器杯B	17
片椀	土師器杯A I	1	1	片杯	土師器杯A	22
片杯	{ 土師器皿A II } " 皿A III }	15 + (10)	25	塩杯	{ 土師器椀A 23 } " 黒色土器杯B 2 }	25
塩杯	{ 土師器 椀A 9 } " 椀C 2 } 須恵器 杯A III } " 杯A IV }	5 + (4)	35	片盤 (佐良)	土師器皿A	48
	" 杯B III } " 杯B IV }	9 + (6)		高杯	{ 土師器高杯 7 } " 黒色土器 " 1 }	8
	{ 土師器 皿A I 6 + (4) } 須恵器 皿B 3 }	13		<b>Tab. 50</b> SD6631などの食器構成		
	土師器高杯	1		1		

Tab. 49 SA3777の食器構成

Tab. 49のようになる。杯B蓋は43点と身の2倍以上ある。内面に墨が付着したり、磨滅したものは3点にとどまる。一方、完形品が5点あり、SA109と同様、身と合わなくなった蓋を廃棄したことがかんがえられる。ここでも杯Bの食器としての数は身の数をとるのが妥当であろう。

SA3777では片杯・塩杯・片盤の3種が主な構成器種となり、きわめて単純な様相を呈する。出土地点がかぎられていることなども含めて、この土器の様相は、築地回廊を解体する作業にあたった工人達の使用した遺物として理解できる。

### iii 殿舎地区の場合

第Ⅲ期の殿舎地区の溝SD6631・SD6633・SD7175出土した土器をみてみよう (Tab. 50)。土師器杯Aは、口径の17.5~16cmのものほとんどが片杯にあてられる。椀・片杯・塩杯がほぼ同数となり、それらにたいして片盤が約2倍の量である。片盤にあてた皿Aには大小2種があり、副食物の品目がことなるのであろう。高杯は椀・片椀・塩杯などの約1/3である。こうしたことから、一膳あたり5点の食器がならび、2~3人に1脚の高杯が配られたことになる。一方、土師器を基本にして若干の黒色土器を混えるのが、この地区の特色である。それらは饗宴用の食器であり、一回限りの使用ののちに廃棄される種類のものであったろう。さきに報告したSK820, SK219, SK2113など、平城宮の大膳職あるいは内膳司に比定される地区の遺構で、土師器のしめる割合が7~8割であったことと呼応している。つまり、饗宴用の土器では時期が下るにしたがって須恵器が減少する傾向<sup>1)</sup>にあり、ここでとりあげた第Ⅲ期の平城上皇の内裏では土師器が主体になり、黒色土器が次第に増加する状況<sup>1)</sup>がうかがえるのである。

1) これは必ずしも須恵器生産の限少をしめさない。土器全体からすれば、奈良時代と平安時代前半における土師器と須恵器の割合は、ほとんど変化しない。平安時代では、須恵器と土師器

の間で器種別の分業が大きく進行し、食器類として土師器・黒色土器が大量生産される一方、須恵器は貯蔵器を量産するようになる。

## 6 結 語

平城宮の中心部分に位置する第1次大極殿地域に対して、発掘調査の所見およびそれから導かれる各種の問題について報告した。ここで、その主な点を要約しておく。

**遺 構** 第1次大極殿地域の遺構は、奈良時代初期から平安時代初期までを3期に区分でき、時期ごとに特色のある宮殿の建物配置や構造をとっている。

**第 I 期** 第I期では東西600尺、南北1,080尺の区域を築地回廊でかこみ、南面中央に正門を開く。北方の約1/3を一段高くし、ここに大極殿とその後殿をおく。南の約2/3区域は一面の礫敷広場となり、建物はまったくない。これが和銅3年に藤原宮から遷都したときの状況である(第I-1期)。その後、南方に朝堂院が建設され、神亀・天平初年ごろには南門の両側に楼閣がつけかわえられた(第I-2期)。楼閣の付設は朝堂院とともに、この地域の壮麗な景観を一層高めたはずである。恭仁遷都に際して、大極殿と東面築地回廊が恭仁宮へ移建された。天平12年から天平17年の間には、東面築地回廊の跡地は木塀によって遮蔽されることになる(I-3期)。未掘の西面築地回廊についても同様の措置がとられたであろう。天平17年の平城遷都後、東面築地回廊は復興するが大極殿を再建した痕跡はない。ただし、第I期の遺構が完全に廃絶する天平勝宝5年ころ、木簡によれば、大殿とよばれる建物がこの地域に存在しており、後殿がこの時期まで存続するものとかがえた(第I-4期)。また、木簡によれば、この時期の南門は衛門府の守衛下にあり、大極殿や内裏などの閤門よりも一段格の低い宮門なみの扱いをうけていることになる。第I-1・2期の遺構を奈良時代初期の大極殿にあてるわけであるが、第1次大極殿地域の平面形は、藤原宮・平城宮第2次・後期難波宮の大極殿とは著しく様相をことにしており、従来の見解では理解できないところがある。とりあえずは、唐長安大明宮含元殿の影響下で成立したものとかがえておく。

**第 II 期** 第II期の遺構は、天平勝宝5年以降まもなく建設がはじまり、奈良時代の後半を通じて存続する。この時期、築地回廊を東西600尺、南北620尺の範囲に縮小するのであるが、東方の内裏地域に南限と北限をそろえ、意識的に内裏に対置させていることが注目される。北方の高台を少し南によせて建物敷を拡張する。そこに主殿・脇殿・付属屋からなる27棟の建物を配置したことになる。主殿を中央におきその両側に脇殿をおき、それらを付属屋がかこむ建物配置は他に類例がなく、とくに主殿は3棟の建物を南北に並立させるという特異な構造をとる。このような遺構に対して、奈良時代後半の「西宮」をあてた。その建設時期は藤原仲麻呂の抬頭期にあたる。これまでの内裏・大極殿とはまったくことなる機能が課せられた宮殿であろう。

**第 III 期** 第III期は、第II期の地割りを踏襲して、平城上皇が建設した平城宮である。高台には14棟の建物がたつが、建物配置は平城宮内裏・平安宮内裏と共通するところが多い。隅欠きの建物あるいは広廂など平安初期の建物構造をそなえている。しかし、平城宮内裏・平安宮内裏とことなるところも少くない。それは敷地の限界にもよろうが、平城上皇時代の平城宮はもはや正都の宮室ではなく離宮にすぎなかったことによるのだろう。内裏は完成しているが、大極殿は未完成であった。というのは、大極殿自体は完成していても、それをとりかこむ回廊や門の痕跡を欠いているからである。

第1次大極殿地域があきらかになるにしたがって、さきに報告した北方の大膳職地域の再検討がよぎなくされた。その決定的な理由は、第I期北面築地回廊の存在をさきには想定しえなかったからである。一応、改訂の試案を示した。

第1次大極殿地域の遺構から推定される建物の上部構造を復原した。時期によってかなりの相違があることがわかるであろう。しかし、それらはあくまでも一応の試案であり、大方の叱正をおおぎたい。

**遺物** 出土遺物のうち、東楼の柱抜取痕跡から出土した一括遺物は、この地域を復原するうえで重要な役割りをはたした。木簡によれば天平勝宝5年段階にこの地域を守備した衛門府の門部・衛士の詰所であり、かれらの勤務状況がうかがわれる。一方、土器や木製品の分析を通じてかれらの日常的な食事形態をたどる手掛りをえた。また、建築雛形部品の出土は、楼上に1/10の建築雛型が安置されていたことをしめしている。土器については、とくに胎土の分析を行ない、産地のちがいのあることを立証した。

屋瓦は全域から多数発見されており、遺構の前後関係と瓦編年とを操作し、部分的に編年を改めるとともに、建物ごとの軒瓦の組合せ状況を推定した。今回の報告では建物関係の遺物が比較的多い。木樋に転用した柱材の検討を通じて、これまで柵とか木塀とかよんできた掘立柱塀の実態を把握できた。井戸枠に転用した校倉の旧仕口から校倉の復原も行なっている。同時に、石材や柱材の種別を鑑定し、石材の産地や柱材の樹齢を推定してみた。

平城宮の朱雀門内に展開する第1次大極殿地域に関する理解は、今回の報告でしめすように、一段と豊かになってきた。しかし、解決しえない問題も少なくなく、推測によって補完した部分も多い。将来の発掘成果に期待するとともに、諸賢の叱正をこうむりながら、さらに密度の高いものに仕上げるべきであろうとかがえる。一方、宮内の他地域との比較検討については、必要以外には論及しない方針をとった。たとえば、南方の第1次朝堂院や東方の内裏・第2次朝堂院・大極殿との比較がそれである。その重要性はいうまでもないが、それらの地域に対する定見をえていない現状ではいたずらに混乱をまねくおそれがあるからである。



# 別 表

- 1 主要建物一覽表 ……………266
- 2 軒丸瓦分類表 ……………268
- 3 軒平瓦分類表 ……………272
- 4 平城宮土師器器種表……276
- 5 平城宮須惠器器種表……278

別表1 主要建物一覧表

(時期)	(地区)	(建物)	(規模)	(棟方向)	(廂)	(桁行)	(梁間)	(廂)	(柱穴)	(備考)		
I期	回廊	* S B 7801	推定 5 × 2 間	WE		推定 23.8m(81尺)	推定 11.8m(40尺)					
		* S B 7802	5 × 3	WE		22.9 (77.5)	11.52 (39)		3.5 × 2.5 m	総柱・側柱掘立		
	殿舎	S B 7200	推定 9 × 4	WE	N・S W・E	推定 45.1 (153)	推定 20.7 (70)	推定 5 (17)				
		S B 8120	推定 9 × 4	WE	N・S W・E	推定 45.1 (153)	推定 20.7 (70)	推定 5 (17)				
	東外郭	S B 5595	3 × 2	WE		5.85 (19.5)	3.9 (13)		方 0.6			
		S B 5510	6 × 2	NS		11.4 (39)	4.2 (14)		方 0.6	北側に小室がつく		
		S B 5515	5 × 2	NS		10.7 (13)	3.9 (13)					
		S B 5520	3 × 2	NS		6.24 (21)	4.16 (14)		方 0.5			
		S B 5521	2 × 2	NS		5.1 (17)	3.6 (12)					
		S B 8330	6 × 2	NS		17.54 (60)	5.26 (18)		方 0.6~1			
		S B 8315	3 × 2	NS		4.6 (15)	3.1 (10)		方 0.4~0.8			
		S B 8234	6 × 2	NS		12.5 (42)	4.16 (14)		0.5 × 0.8			
		II期	回廊	S B 7750	推定 3 × 2	WE		推定 13.44 (45)	推定 7.2 (24)			
				殿舎	S B 6610	9 × 4	WE		26.85 (90)	11.95 (40)	桁行 2.99(10) 梁間 2.98(10)	方 1.5
S B 6611	9 × 3		WE		W・E S	26.85 (90)	8.95 (30)	方 1.5				
S B 7150	9 × 5		WE		W・E N・S	26.8 (90)	15 (50)	桁行 2.98(10) 梁間 3.0 (10)	方 1.5	足場あり		
S B 7151 A	9 × 2		WE			26.9 (90)	5.9 (20)		方 1.5	〃		
S B 7151 B	9 × 2		WE			26.9 (90)	5.9 (20)		方 1.5	〃		
S B 7152	9 × 2		WE			26.7 (90)	5.94 (20)		方 1.4	〃		
S B 6640	3 × 2		WE			10.8 (36)	6 (20)		方 1.2			
S B 6650	3 × 3		WE			10.8 (36)	9 (30)		方 1.4			
S B 6660 A	7 × 4		WE		N・S	21 (70)	12 (40)	3.0 (10)	方 1.5~1.7	足場あり		
S B 6660 B	7 × 5		WE		N・S	21 (70)	15 (50)	3.0 (10)	〃	〃		
S B 6655	5 × 3		WE			15 (50)	9 (30)		方 1.3			
S B 6663	7 × 5		WE		N・S	20.9 (70)	15.3 (50)	3.06(10)	方 1.6	足場あり		
S B 6666	7 × 2		WE		20.8 (70)	5.9 (20)		方 1.4				
S B 6669	7 × 2	WE		20.8 (70)	6 (20)		方 1.4					
S B 8302	2以上 × 2	NS		5.8 (20)	6 (20)		方 1					
S B 8245	7 × 3	NS		20.86 (70)	9 (30)		方 1.2	足場あり、総柱				

(時期)	(地区)	(建 物)	(規 模)	(棟方向)	(廂)	(桁 行)	(梁 間)	(廂)	(柱 穴)	(備 考)
		S B 8210	6 × 2間	NS		17.9m(60尺)	5.9m(20尺)		方 1.2m	
		S B 8215	6 × 2	NS		17.9 (60)	5.9 (20)		方 1.2	
Ⅱ期	東外郭	S B 8320	7 × 2	NS		20.85 (70)	5.95 (20)		方 1~1.2	
		S B 8240	5 × 2	NS		15 (50)	6 (20)		方 1.5	
	大膳職	S B 116	5 × 3	WE	S	13.37 (45)	8.61(29)	2.7m(9尺)	方 0.8	
		S B 8116	5 × 2	WE		13.5 (45)	6.0 (20)		方 1	
Ⅲ期	回 廊	S B 7750 B	5 × 1	WE		14.7 (49)	5.4 (18)		方 1	
		S B 8310	推定 3 × 2	NS		推定 8.7 (29)	5.4 (18)		方 1	
	殿 舎	S B 6620	9 × 5	WE	W・E N・S	29.2 (98)	17.4 (58)	4.2(14)	方 1.6	足場あり
		S B 7170	7 × 4	WE	N・S	20.98 (70)	14.4 (48)	4.2(14)	方 1.3	〃
		S B 7173	※ 5 × 4	NS	W・E	13.5 (45)	13.2 (34)	3.9(13)		〃 身舎礎石
		S B 6622	5以上 × 4	NS	W・E	13.3 (45)	14.4 (48)	4.2(14)	方 1.3	足場あり
		S B 8300	3以上 × 4	NS	W・E	9 (30)	12 (40)	3 (10)	方 1.5	〃
		S B 8305	7 × 2	WE		18.94 (63)	4.8 (16)		方 0.5	
		S B 6621	※ 5 × 4	WE	N・S	12.6 (42)	12.45 (40)	3.42(11)		足場あり、 身舎礎石
		S B 8219	5 × 2	WE		15 (50)	6 (20)		方 0.8~1.5	
		S B 8224	7 × 4	WE	N・S W・E	22.2 (74)	13.2 (44)	3.6(12)	方 1	足場あり、 隅欠き
		S B 8218 A	5 × 2	WE		14.1 (47)	6 (20)		方 1.2	
		S B 8218 B	5 × 2	WE		14.1 (47)	6 (20)		方 1.2	
		S B 8222	5 × 4	WE	N・S	14.1 (47)	12.98 (42)	{N3.32(11) S3.62(12)}	方 1	
	広 場	S B 7803	※ 推定 7 × 4	WE	N・S W・E	推定 22.5 (74)	13.2 (44)	3.6(12)		足場あり
		S B 9220	5 × 3	WE	N	12 (40)	7.2 (24)	2.1(7)		
		S B 7141	推定 6 × 1	WE		推定 36 (120)	3.6 (12)		3 × 1	
	東外郭	S B 8325	5 × 2	NS	N・S	12.64((43)	4.12 (14)	3.23(11)	方 0.4~0.6	
奈良 以前	広 場	S B 3773	4 × 3	NS		8.3	5.2		方 0.5	
		S B 3774	2 × 2	NS		4.2	3.2		方 0.5	
		S B 7780	5 × 2	NS		14.6 (50)	4.8 (16)		方 1	
		S B 7790	3 × 2	NS		8.7 (30)	4.6 (14)		方 1	

※印は礎石建物

別表 2 軒丸瓦分類表

型	式	直 径	内 区				外 区 広	外 区				全 長	玉 縁 長	6 A B C	6 A B D	6 A B E	6 A B O	6 A B P	6 A B Q	6 A B R	6 A B S	計	%						
			中 房 径	蓮 子 数	弁 区 径	弁 幅		弁 数	内 縁 幅	外 縁 幅	高													文 様					
																									区 幅	文 様			
6012	B	157						11	4						1		1				2	0.08							
6018	C	150						15	12										1		3	0.1							
6030	B	135	30	1+8	79	15	T16	28	16	S24	12	10	LV		3			4			7	0.3							
6131	A	166	40	1+8	124	21	T16	21	8	S22	13	11	RV23			8		3		3	14	0.6							
	B	152	35	1+8	104	12	T16	24	10	S24	14	11	RV24				1		1		2	0.08							
6133	A	168	34	1+5	96	17	T12	36	19	S13	17	9	/	400	50	4	10	6	4	1	1	26	1.1						
	B	160	36	1+6	90	17	T12	35	17	S15	18	9	/	406	58		3	3	3	2	1	12	0.5						
	C	159	40	1+6	101	17	T13	29	16	S18	13	8	/		1	3	2	3	7	1	1	1	19	0.8					
	D	157	40	1+6	111	17	T16	23	14	S24	9	8	/			5 (9)	17 (25)	13 (3)	6 (13)	2 (24)	15 (5)	2 (15)	4 (15)	1	2	63 94	0.08		
	K	161	35	1+5	106	18	T16	275	14.5	S27	13	6	/							1		1	0.04						
	L				23			27	14	S	13	12	/				1					1	0.04						
	M	168	37	1+6	112	16	T	28	16	S16	12		/			1						1	0.04						
	O	176	38	1+?	110	21	T	33	18	S	15	9	/				1					1	0.04						
6134	A	161	36	1+8	96	11	T12	32	19	S16	13	13	LV16	400	59	6	2	8	6	31		53	2.2						
6135	A	168	28	1+6	112	21	T12	28	14	S25	14	4	LV46	389	37		1	3				4	0.2						
	E	155	27	1+5	83	11	T13	36	16	S23	22	9	LV			1						1	0.2						
6138	B	157	38	1+5	97	32	T12	30	18	S24	12	10	LV	402	60				2			2	0.08						
6225	A	166	68	1+8	116	36	F 8	25	12	K	13	8	RV24	373	48	4	5	93	1	5		14	122	5.1					
	B	174	68	1+8	128	32	F 8	23	6	K	17	7	RV								1	1	0.04						
	C	155	62	1+8	111	29	F 8	22	7	K	15	7	RV32			4 (4)	1	8	139 (60)	1	5 (1)	1	3	17 (3)	1	46	176 (68)	1.9	7.3 (10.3)
	L	254	93	1+8	204	51	F 8	25	8	K	17	6	RV40	422	52		2	5					7	0.3					

型	式	直 径	内 区					外 区 広	外 区				全 長	玉 縁 長	6 A B C	6 A B D	6 A B E	6 A B O	6 A B P	6 A B Q	6 A B R	6 A B S	計	%	
			中 房 径	蓮 子 数	弁 区 径	弁 幅	弁 数		幅	文 様	幅	高													文 様
6227	A	157	61	1+8	119	28	F 8	19	9	K	10	7	／	1									1	0.04	
6231	B	210	61	1+6	140	34	F 8	35	20	S34	15	12	／		1								1	0.04	
6235	B	168	56	1+5	112	29	F 8	28	17	S17	9		／			1							1	0.04	
6241	A	148	39	1+5	88	24	F 8	30	15	S20	15	5	／		1		1	5		1			8	0.3	
6273	A	197	71	1+5+9	143	32	F 8	27	13	S40	14	10	RV64	447	62								1	0.04	
	B	180	64	1+5+9	128	32	F 8	26	13	S40	13	12	RV64			1	1						2	0.08	
6274	A	177	61	1+5+9	127	34	F 8	25	12	S40	13	13	LV42	404	68			1					1	0.08	
6275	A	182	57	1+4+12	116	29	F 8	33	12	S43	21	11	LV32				1						3	0.1	
	D	196	54	1+4+8	108	28	F 8	44	13	S36	31	14	LV21	464	44							1	1	0.1	
	E	177	55	1+8+10	112	29	F 8	34	12	S43	20	11	LV									1	1	0.04	
6279	A	176	47	1+8	104	26	F 8	36	12	S31	24	13	LV27	431	59			1					1	0.04	
	B	175	46	1+6	107	27	F 8	34	17	S28	17	8	LV									1	1	0.04	
6281	A	164	57	1+4+8	102	26	F 8	31	14	S32	17	10	LV46	490	80	1	2			1	1	1	5	0.2	
	B	184	62	1+8+8	120	29	F 8	32	13	S32	19	11	LV37			1	4	1		1		7	7	0.3	
6282	A	157	53	1+8	87	31	F 8	35	20	S24	15	9	LV24					2		1			7	0.3	
	B	162	45	1+6	86	31	F 8	38	20	S24	15	9	LV24	361	53	5	1	15	21	40	2	9	93	3.9	
	D	132	27	1+6	64	24	F 8	34	20	S24	14	9	LV24	341	39	2	2	6	4	3		1	18	0.7	
	E	160	34	1+6	76	26	F 8	42	24	S24	18	13	LV24	387	37	1		6	1	3		1	12	0.5	
	F	158	40	1+6	92	32	F 8	33	20	S24	13	14	LV24	360	42	4	4	12	4	4		4	24	1.0	
	G	160	46	1+6	90	24	F 8	35	17	S24	18	11	LV			2	1	4				5	12	0.5	
	H	174	40	1+6	96	23	F 8	39	23	S24	16	16	LV22					1					1	0.04	
	I	160	41	1+8	90	20	F 8	35	16	S20	19	14	LV			1							1	0.04	



型	式	直 径	内 区					外 区					全 長	玉 長	6 A B C	6 A B D	6 A B E	6 A B O	6 A B P	6 A B Q	6 A B R	6 A B S	計	%	
			中 房 径	蓮 子 数	弁 区 径	弁 幅	弁 数	区 広	内 縁		外 縁														
									幅	文 様	幅	高													文 様
6308	C	174	40	1+6	100	24	F 8	37	16	S16	21	4	LV16	405	55	4 (4)	2 (3)	27 (3)	8	9 (13)	7 (12)	2	60 (34)	2.5 (3.9)	
	D	163	36	1+6	92	25	F 8	32	15	S22	13	5	LV16									3	0.1		
6311	A	161	40	1+6	96	26	F 8	32	15	S26	17	11	LV23	395	56	3	3	30	3	8	8	47	2.0		
	B	162	43	1+6	92	27	F 8	33	13	S26	20	13	LV23	376	58	3	3	27	1	5	15	54	2.2		
	D	38	1+6	96	21	F 8		15	S26				LV			1	1	58 (24)	2 (3)	8 (2)	23 (2)	2	104 (31)	4.3 (5.8)	
6311	E		1+6				27	12	S	15	6	LV										1	0.04		
6313	A	123	24	1	71	32	F 4	26	16	S16	10	8	LV16	312	42	2	1	31			1	1	36	1.5	
	B	116	17	1	70	32	F 4	23	10	S16	13	8	LV16	257	43			6				6	0.2		
	C	95	15	1	57	29	F 4	18	8	S16	9	6	LV16	333	38	4	1	3	1	1	3	2	15	146	6.1
	D	124	26	1	74	44	F 4	25	13	S16	12	6	LV	286	46	1	1	120	157 (19)	1 (1)		1	1	189 (21)	7.8 (8.7)
6314	A	140	30	1+6	80	36	F 4	30	15	S16	15	6	LV16	364	52			3		1		4	0.2		
	B	121	23	1+5	67	32	F 4	27	15	S19	12	10	LV			3		1			2	6	0.2		
	C	118	26	1+5	78	30	F 4	20	11	S16	9	13	LV			1	7 (2)	4 (1)				1	14 (3)	0.6 (0.7)	
	D	116	24	1+5	64	29	F 4	26	12	S14	14	12	LV			3						3	0.1		
6316	A	150	36	1+7	98	31	F 8	26	13	S16	13	6	LV20					2				2	0.08		
	B	142	31	1+8	88	31	F 8	27	14	S24	16	10	LV27	300	33			2				2	5	0.08	
	H	178	36	1+6	116	31	F 8	31	15	S16	16	7	/								1	1	0.04		
6320	A	166	38	1+8	88	9	T24	39	23	S24	16	14	RV24					7			1	8	0.3		
6321	A	43	1+6	95	27		33	1.5	S	1.8	12	/								2		2	0.08		
9111-33							13	8	S	5	3	/								1		1	0.04		
9111-37			1+6				29	14	S	15	10	RV							1		1	1	0.04		
不明型式															52	26	257	34	83	6	105	11	574	23.9	
總 計															171	161	1173	159	304	27	380	28	2403	81.4 (100)	

別表3 軒平瓦分類表

型 式	瓦 当 面											全 長	類の形態			6 A B C	6 A B D	6 A B E	6 A B O	6 A B P	6 A B Q	6 A B R	6 A B S	計	%		
	上 弦 巾	弧 深	下 弦 巾	厚 さ	内 区 厚 さ	内 区 文 様	上 外 区 厚 さ	上 外 区 文 様	下 外 区 厚 さ	下 外 区 文 様	脇 巾		脇 区 文 様	文 様 の 深 さ	直											曲	段
6640 A				52	30	HK	10	S	12	LV	65	LV3	2		○	1						2	0.09				
6641 A				46	21	HK	12	S23	12	LV		LV4	3		○							2	0.09				
C	284	56	325	52	24	HK	13	S23	15	LV19	59	LV4	2	397	○	1	8	1	1	1	2	14	0.6				
E	314	63	306	50	24	HK	15	S21	12	LV26	72	LV	2		○							3	0.1				
F	324	77	324	50	20	HK	16	S24	14	LV26	70	LV5	2.5	371	○							1	0.05				
6642 A				46	21	HK	12	S20	13	S19		S5	2		○							1	0.05				
B			305	46	22	HK	13	S22	11	S	58	S4	3	366	○							1	0.05				
6643 A	299	78	294	45	23	HK	11	S22	11	S23	65	S4	2	343	○							2	0.09				
C	305	78	309	51	25	HK	13	S22	13	S23	68	S4	5	383	○							7	0.35				
D		69		46	19	HK	14	S	13	S	61	S4	2		○							2	0.09				
6646 A	311	63	317	56	27	HN	14	S30	15	LV24	59	/	2	473	○							1	0.05				
B	327	64	325	53	24	HN	16	S16	13	LV24	63	/	2	431	○							3	0.1				
E	313		55	27	HN	17	S27	11	LV	/		/	4		○	1						1	0.05				
6647 A	335		332	64	35	HN	15	S	14	LV	64	/	3		○							1	0.05				
6663 A	284	77	286	57	27	KK	15	K	15	K	62	K	2		○	○	10					45	2.1				
B	301	66	308	59	23	KK	18	K	18	K	64	K	2	353	○	○	3					20	0.9				
C	270	72	282	53	26	KK	14	K	13	K	73	K	3	376	○	○	1	15	7	93	113	117	185	5.3			
E	282	69	297	67	28	KK	21	K	18	K	81	K	3		○							1	0.05				
F			55	30	KK	13	K	12	K		K		3		○	○	1					2	0.09				
6664 B	245	61	269	54	24	KK	15	S21	15	S21	71	S3	4		○							9	0.4				
C	240	62	252	51	24	KK	14	S21	13	S21	62	S3	4	376	○	6	32	153	26	12	5	76	2	312	14.3		
D	240	60	269	60	22	KK	20	S17	18	S19	74	S3	5	358	○	3	1	28		4		6		42	1.9		
F	245	61	275	58	27	KK	14	S21	17	S21	78	S3	5	375	○	2		28		2	1			32	1.6		



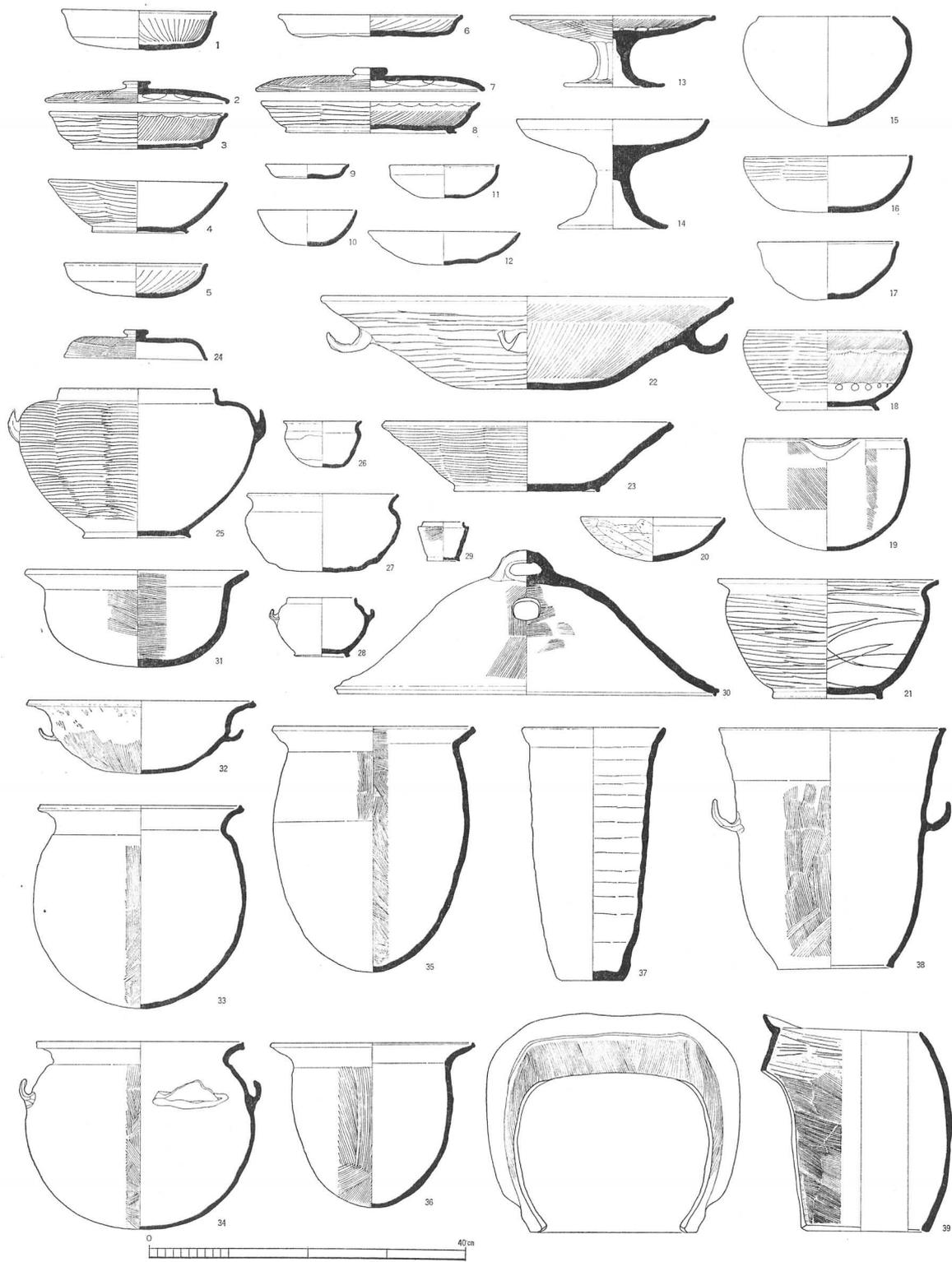
型 式	瓦 当 面											全 長	顎の形態			6 A B C	6 A B D	6 A B E	6 A B O	6 A B P	6 A B Q	6 A B R	6 A B S	計	%			
	上弦巾	弧 深	下弦巾	厚 さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	脇 巾		脇区文様	文様の深さ	直											曲	段	
6691 A		270	55	293	55	25	KK	14	S21	16	S21	58	S3	4	345	○		6	5	50	6	24	2	13	1	107	4.9	
6694 A		235	67	275	60	32	KK	17	S15	11	S14	70	S3	4	395	○	1	34	91	2	1	1	8	2	140	6.4		
6704 A					66	28	KK	20	S13	18	S13		S	3		○		1								1	0.05	
6710 A		264	55	270	56	22	KK	15	S13×4	19	S11×4	57	S3	4	347	○			2		2					4	0.2	
C					55	25	KK	14	S12	16	S13		S3	5	355	○		1			2				3	0.1		
6718 A					56	24	KK	16	S20	16	S		S	5		○					7					7	0.3	
6719 A		287	49	280	32	22	KK	0.5	/	0.5	/	33	/	2	370	○		1								1	0.5	
6721 A		260	54	268	45	21	KK	12	S26	12	S27	53	/	3	365	○			4		2				6	0.3		
C		265	49	280	53	25	KK	15	S26	13	S32	60	/	3	359	○	8		7	6	20	1	1		43	2.0		
D		272	54	277	53	22	KK	14	S26	17	S32	55	/	3		○			2	1					3	0.1		
E					42	22	KK	10	S	10	S	5	/	2		○		15 (17)	2 (11)	4 (11)	28 (28)	7 (21)	24 (35)	1 (1)	6 (8)	2	85 (121)	0.09 (9.4)
F		289	65	297	52	26	KK	13	S33	13	S34	65	/	3		○	1		1		1				3	0.1		
G		260	60	280	47	24	KK	11	S34	12	S35	52	/	3	368	○	6	2	10		1			5	24	1.1		
H		285	69	293	51	21	KK	14	S33	16	S34	57	S3	3		○			4						4	0.2		
6725 B		275	41	263	57	31	KK	14	S14	12	S14	58	S3	2		○			1						1	0.05		
6726 E		242	69	288	59	31	KK	14	S17	14	S17	58	S2	3		○			1						1	0.05		
6727 A				271	54	23	KK	15	S14	16	S17	74	S3	4		○								1	1	0.05		
6732 A		285	47	305	69	36	KK	15	S9	18	S9	75	S3	4	382	○	9	2	4	2	17				34	1.6		
C		305	44	307	60	30	KK	14	S9	16	S9	65	S3	3	397	○	1	10 (12)	14 (9)	13 (10)	3 (17)	23 (32)	(7)		29	63 (87)	1.3	
6739 A				284	62	27	KK	14	S15	21	S13	65	S3	3		○				1					1	0.05		
6801 A		269	60	292	62	35	U	14	/	13	/	68	/	4		○			1						1	0.05		
													不明型式	24	14	73	20	30	3	51	2	217	9.9					
総 計													170	181	1014	160	286	27	325	25	2188	77.5 (99.8)						

別表 4・5 土師器・須恵器器種表

別表4 土師器器種表

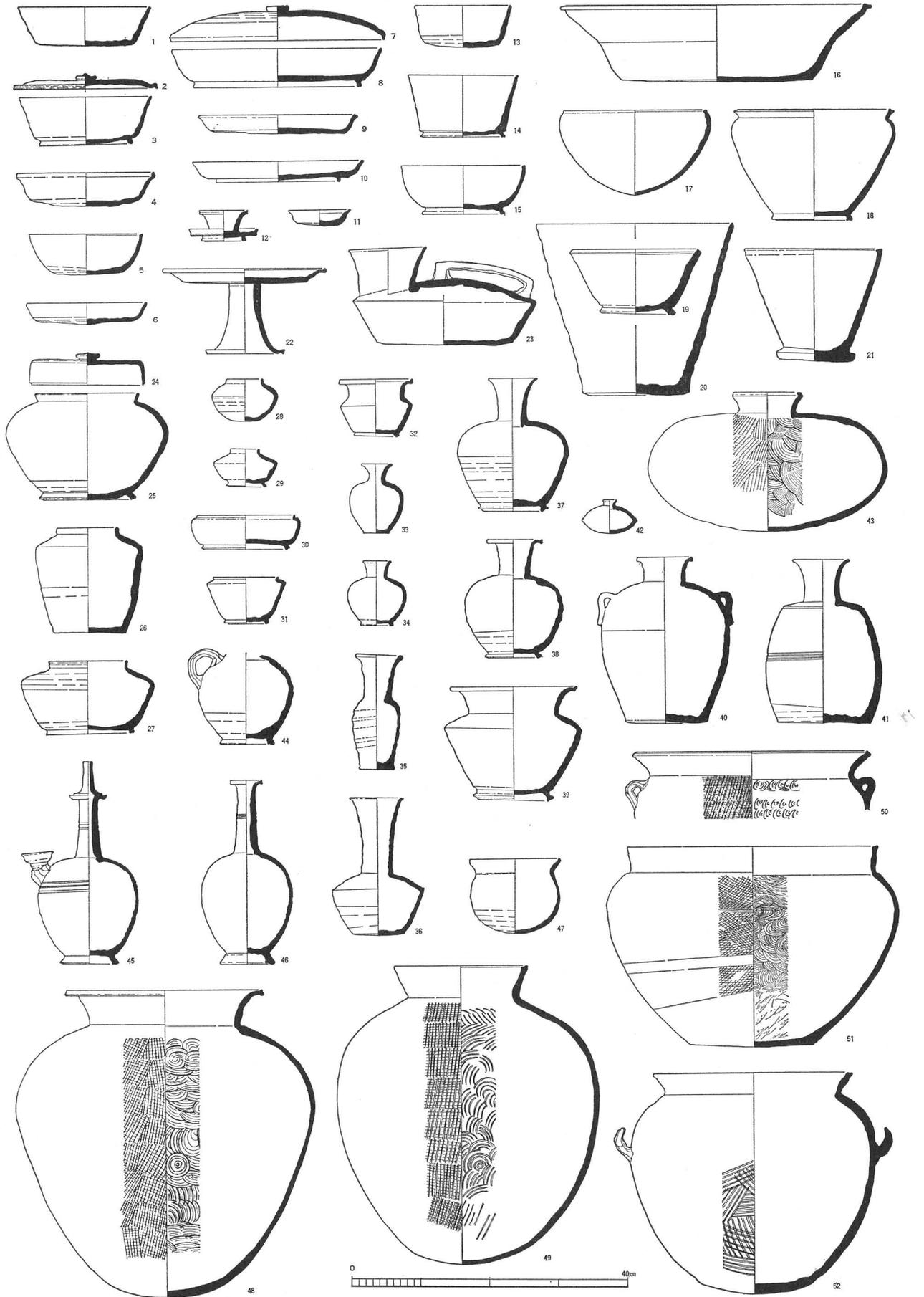
器種名	番号	器種説明	備考
杯	A 1	広く平らな底部と斜め上にひろく口縁部からなる。口縁部の形態は、A・B形態に区別できる。A形態は、口縁部下半が内彎、上半がわずかに外彎する弧をえがき、口縁端部が内側にまるく肥厚。B形態は、全体が内彎する弧をえがき、口縁端部の肥厚が小さい。B形態は主として奈良時代後半以降のC手法の杯に見られる。	
杯同蓋	B 2 3 4	外傾する口縁部をもつ平底の器で、低短な高台がつく。口縁部と底部の境は、丸みをおびるのが普通で、屈折して稜をなすものは少ない。平城Ⅳ以降、口径25cm、器高10cmを越えるものが出現する。蓋はボタン状のつまみが付く平坦な頂部となだらかに彎曲する縁部からなる	Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ一蓋A
杯椀	C 5 A 10	小さな平底ないし丸底と斜め上にひろく口縁部からなる。口縁部端面が内傾するのが特徴である。丸底に近い小さな平底と内彎する弧をえがいて、斜め上に大きく開く口縁部からなり、底部から口縁部への移行は漸進的である。	Ⅱ・Ⅵ一皿A
椀	C 11	丸底に近い平底から屈曲しながら外反し、口縁部の上半部が垂直に立ち上り、端部近くで小さく外反する。口縁部のよこなで以下には成形時の凸凹をとどめ、外面に粘土紐の痕跡を残すものが多い。	
椀	D 12	椀Aをやや浅くした形態で、口縁端部がまるくおわるものと、内傾するものがある。椀Cと同様にe手法を特徴とし、幅のせまいよこなでの下を不調整のまま残すもの、へら削りするもの、へら削りの後へら磨きを加えるものがある。	Ⅵ一鉢C
皿	A 6	広く平らな底部と斜め上にひろく短い口縁部からなる。口縁部には杯Aと同様にA・B両形態がある。手法と口縁部形態は関連をもたない。	
皿同蓋	B 7 8	皿Aに高台を付けた器種で蓋と対になる。口縁部の形態には、A・B両形態があるが、B形態のものは少数である。口縁部の形態と手法とは関連性はない。蓋は、平らな頂部となだらかに彎曲する縁部からなり、奈良時代全期を通じて外面にはへら磨きが見られる。	Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ一蓋A
皿	C 9	皿Aに似るが、一般に小型（口径10cm未満・器高2cm未満）で手づくねで厚手につくられている。e手法で調整され、口縁部上部が外反するものとしなものがある。	Ⅱ一皿B, Ⅳ一皿A, Ⅵ一皿C
鉢	A 15	丸底ないし尖底に近い丸底から外彎気味に開く口縁部が端部近くで内傾するいわゆる鉄鉢形である。	
鉢	B 16 17	平底に近い底部と、外傾ないし直立する口縁部からなる。口縁端部が内側にかかる巻き込むものと内傾するものがある。	Ⅵ一鉢A
鉢	C 18	鉢Bに高台をつけた器種	Ⅵ一鉢B
鉢	D 19	口縁部が内彎する半球形の形態で、口縁部の一部を外に折りまげて片口とする。体部はハケメで調整、その後上から下へへらで削るものもある。	Ⅳ・Ⅸ一鉢B
鉢	E 20	底部は平底に近い丸底で、口縁部との境は不明瞭で外彎気味に外傾し、口縁部上端がやや外傾する。粗製で厚手のものが多い。	Ⅱ一鉢A
鉢	F 21	高台のつく平底の器で、わずかに肩の張る体部にやや外反する短い口縁部がつく。須恵器・墨色土器に同形態のものがある。	
高杯	A 13	ラッパ状に開く裾部と、へらで多面体に面取りした脚部に大きく外方に開く浅い杯部を付す脚部と杯部の接合法には、杯部外面に直接、粘土紐巻き上げないし輪積により脚部を作る方法（円筒手法）と、芯棒の上に粘土紐を巻きあげて脚部を作る方法（芯棒接合法）がある。	
高杯	B 14	口縁部が内彎する杯部と面取りのない脚部からなる。	
盤	A 22	低い底部と斜め上に大きく開く口縁部からなる。口縁部には把手がつく例もある	
盤	B 24	盤Aに高台をつけたもの。Aと同じく口縁部に把手がつく例もある。	
壺同蓋	A 24 25 28	高台を付した平底と肩の張ったイチジク形の胴部と直立する短い口縁部からなる。肩部に上方に強く折り曲げた三角形把手を付す。蓋は、ボタン状のつまみを付した平坦な頂部と内側に折れ込む縁部からなる。	Ⅱ・Ⅵ一蓋B
壺	B 26 27	平底に近い丸底と球形に近い胴部と外反する短かい口縁部からなる広口の器である。肩部近辺に上向きの把手ないしボタン状をした粘土を貼りつける例もある。胴部には、ハケメ調整を行わず、粘土紐の痕跡を残す例が多い。貯蔵器というよりも、人面を描き、まじないに使用するための器である。	Ⅵ一鉢C Ⅵ一小型壺(S D485) Ⅵ一鉢C(S D650)
壺	E 29	蓋受けのような短かく内側に屈曲する口縁部と低い高台をつけた広口の壺。	Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ一壺B
甕	A 33 35	半球に近い胴部とつよく外反する口縁部からなる広口の甕。	
甕	B 34	甕Aとほぼ同じ形態で、相対する二方の肩に把手を付したもの。	
甕	C 36	頸部でややすぼまる長手丸底の器体に斜め上にひろく口縁部をつける。	
甕	X 37	わずかに上にひろがる器体に、斜め上にひろく口縁部をつけたもの。出土例は少ない。	
把手付	30	深い笠形大型土器で、頂部に半環状の把手をつけ、把手の軸に直交する二方向の頂部中央からやや下ったところに円孔をあける。用途については定かでないが火舎の蓋とするのも一案である。	
双孔大型			
鍋	A 31	半球形に近い体部に外傾する口縁部のつくもの。	
鍋	B 32	鍋Aの体部の両側に把手を付すもの。	
甑	38	底部のすばまった円筒形の体部の両側に把手のつくもので底を大きくあけている。	
甗	39	截頭放弾形の一側面を大きく切りとり、その切開部の周辺に庇をつけるもの。	

1. 本報告書における土師器の器種の呼称は、基本的には『平城宮報告Ⅶ』で用いたものをうけついでている。
2. 本表は、主として奈良時代の代表的な器種をとり上げ、従来刊行した報告書で用いた旧称と対称することを目的としたものである。新呼称と旧呼称の対称は、備考欄にかかげた。備考欄のローマ数字は、『平城宮発掘調査報告』の号数を示す。従来から一貫して同一の呼称で呼んでいるもの、および今回始めてとり上げる器種は、備考欄を空白のままとした。
3. 実測図（縮尺1/2）は、平城宮および平城京内の遺跡から出土したものである。ただし、破片は復原して図示した。
4. 表に示した以外にも、奈良時代の器種はあるが、現状では出土例が少なく、細別名を決定していない。今回Xとしたものは、類例の少ないもので、出土例の増加を待って細目名を決定する予定である。



別表5 須恵器器種表

器種名	番号	器種説明	備考
杯 杯 同 蓋	A 1	平坦な底部と斜め上にまっすぐのびる口縁部からなり、口縁端部は丸くおさまる。	Ⅱ一蓋A・B・C, Ⅳ・Ⅵ一蓋A
	B 2	杯Aに高台をつけた形態をそなえ、蓋と一組になる。高台端面には、内傾・水平・外傾の三種がある。	
	3	杯Bの蓋には、平らな頂部と屈曲する縁部から成るA形態のもと、頂部が丸く笠形を呈し、縁部が屈曲せず彎曲気味に端部にいたるB形態のものがある。	
杯	C 4	平底と斜め上に開く口縁部からなる。口縁端部は内側に巻き込む。土師器杯A形態の口縁部をそなえる杯である。	
杯 皿	E 5	平底と内湾する口縁部からなる銅鉢形の形態である。口縁端部は内傾する。	Ⅵ一椀A
	A 6	扁平な底部に短い口縁部をそなえた形態で、他の皿類にくらべて器高は、比較的高い。口縁端部がまるくおさまるのが特徴である。	
皿 同 皿	B 7	皿Aに高台をつけた形態で蓋と組み合う。高台端部は、杯Bと同様、三形態がみられる。蓋も杯Bと同様A・B両形態がある。	Ⅱ一蓋A・B, Ⅵ一蓋B(S D485)
	8		
	C 9	広く平坦な底部と斜め上に開く短い口縁部からなる。口縁端部は、内側に巻き込み肥厚するものと、平坦で外傾するものがある。	
皿 皿	D 10	皿Cに高台を付した形態。皿部が浅いのが特徴。	
	E 11	平底と斜め上に開く短い口縁部からなる小型の皿で、口縁端部が外方に薄く引き出されるのが特徴である。灯明器として使用。	
椀 椀 椀 鉢	A 13	杯Aをさらに深い形態にしたもので、杯Aに比べ口縁部の外傾度は低く、ほぼ真直ぐに立ち上がる。	Ⅵ一杯A
	B 14	椀Aに高台を付した形態。	Ⅵ一椀B
	C 15	杯Eの形態に高台を付したものの。	
鉢 鉢 鉢	A 17	内彎して立つ口縁部と尖底ないし、丸味を帯びた尖底からなる。いわゆる鉄鉢形である。口縁端部が丸くおさまるものと、ヘラで平坦に面取りするものがある。体部外面をヘラ磨きする例が圧倒的に多い。	Ⅱ一壺A, Ⅵ一鉢A
	D 18	外反する短い口縁部と上位で肩の張る体部からなる。高台を付すものと付さないもの二種がある。	Ⅱ一鉢C
	E 20	平底で、長い口縁部が真直ぐ外方に開くバケツ状の器。	
鉢 鉢	F 21	円盤状を呈す底部と斜上に開く口縁部からなる。口縁部の一部を外方にひねり出し片口とした例もある。底部外面には、焼成前に先の尖ったもので、突き刺した多数の孔が見られるものもある。	Ⅱ一鉢A, Ⅱ一摺鉢
	X 19	高台を付す底部と外方に大きく開く口縁部からなる。	
托 高 杯	12	筒状の受部と高台の付く皿部からなる。	
	22	須恵器の高杯の出土例は稀で、奈良時代後半代に少数知られているにすぎない。ラッパ状に開く脚柱部と、外反する口縁部をもつ平坦な杯部からなる。	
盤	A 16	平底に強く外傾する長い口縁部を付した洗面器状の形態。口縁部中程に一对の三角形曲折把手や半環状把手を付すものもある。底部内面には、円心円の当て板痕跡をとどめるものもある。	Ⅵ一盤A
壺 同 蓋	A 24 27	肩の張ったイチジク形の器体に直立する短い口縁部と高台を付す。肩部直下に角状の把手を付ける例や、肩に耳状の把手を付す例がある。蓋は平坦な頂部と直角に折れ曲る縁部からなる。頂部には、宝珠あるいは扁平ボタン状のつまみがつく。	Ⅱ一蓋D, Ⅵ一蓋C(S D485)・ 蓋B(S D650)
	26		
壺	B 26	平底で斜め上に立ち上る体部と、比較的に平坦な肩と短い直立する口縁部からなる。肩と体部の境は、にぶい稜となり、底部に高台を付す例がある。肩に耳状のつまみを付す例もある。	Ⅵ一壺D・F
壺 壺 壺	C 28 29	肩部が稜角をなす胴長の体部に、直立する短い口縁部をつけた平底の器。高台を付す例もある。	Ⅵ一壺A Ⅳ一壺G
	D 30	直立する短い口縁部をもつ扁平な体部に高台をつけたもの。	
	E 31	内彎気味に斜め上に開く胴部と、狭い肩部に外傾する短い口縁部を付した広口の壺。高台を付すものと付さないものがある。	
壺 壺	G 35	縦長の胴部に太くて長い口頸部をのせた形態で、ロクロ水挽成形で作られている。	
	H 32	巾の狭い肩に稜をもつ扁平な体部に、直立する比較的に長い頸部と大きく外反する広口の口縁部からなる小型の器である。底部には低短な高台を付す。	
壺	K 36	細長い口頸部と肩が張り稜角を呈する体部からなる長頸壺である。平底で高台をつけるものにつけないものがある。	Ⅵ一壺B
壺	L 37 38	卵形の体部に口縁部が外反する口頸部をつける。口縁端部をまるくおさめるものと、屈曲してやや幅広の凹帯をなすもの、高台を付すものと付さないなどの差がある。	Ⅱ一瓶, Ⅵ一壺E・F, Ⅵ一壺H
	33 34		
壺	M 33 34	平底のイチジク形の体部に、外反する口頸部をつける小型の器である。口縁端部は丸くおさまる。高台を付すものもある。ロクロ水挽成形。	Ⅳ一壺E
壺	N 40	平底で卵形の体部に直立する口頸部を付す。肩部の相対する位置に耳状の把手を付す。さらに胴部下半部の相対する位置にも同様な耳状の把手を付したものもある。	
壺	P 41	底部の大きい筒形の体部に外反する口縁部のつく、いわゆる徳利形態であり、肩に稜をもつものと、もないものがある。	
壺 壺 平 瓶	Q 39	肩部が稜角をなす胴長の体部に、大きく外反する広口の口頸部と外傾する高台を付す。	Ⅳ一壺D, Ⅵ一壺C
	X 44	口縁部の形態は不明であるが、肩部の片側に半環状の把手を付したものの。	
水 浄 横 瓶	23	平底で扁平な体部の背面に広口の口頸部と逆U字形の把手を付す。把手を持たないもの、高台を付すもの付さないもの、体部が稜角をなすもの、丸味を持つものがある。	
	46	銅製品を模したもので、卵形の器体に細長い口頸部をのせたもの。頸部、胴部に沈線を施す。	
	45	銅製品を模したものの。	
甕 甕	42 43	横に長い俵形の体部上面中央に外反する口縁部をつけたもの。両側面が尖る体部を持つ小型製品もある。水摘として使用されたもの。	{ Ⅱ一甕A・C, Ⅵ一甕A(S D485)・甕B(SD650)
	A 48	卵形の体部に外反する口縁部をつけたもので、口縁部は把厚し外傾する面をなすものを言う。	
甕 甕	B 49 52	卵形の体部に内彎気味の口縁部をつけたもので、口縁端部はまるくおさまるもの、内傾するものがある。肩部に耳を付けた例もある。	Ⅱ一甕B, Ⅵ一甕B・C(S D485)
	C 51	肩の張った広口短頸の器。肩幅は器高をしのぐ例が多く、高台を付すものと付さないものがある。肩部に四耳を付した例もある。	
甕 甕	E 50	甕A形態で肩部に耳を付したものの。	Ⅱ一甕B, Ⅵ一甕D・E
	X 47	土師器の甕Aの形態をもつ小型の甕。類例は少ない。	





PUBLICATIONS OF NARA NATIONAL CULTURAL  
PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE, NO. 40  
Thirtieth year memorial volume

# **NARA PALACE SITE EXCAVATION REPORT**

**XI**

Investigation of the location of the  
First Imperial Audience Hall (Daigokuden)  
carried out between 1965 and 1979

ENGLISH SUMMARY

**NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES  
RESEARCH INSTITUTE  
1981**



# NARA PALACE SITE EXCAVATION REPORT XI

Investigation of the location of the  
First Imperial Audience Hall (Daigokuden)  
carried out between 1965 and 1976

## CONTENTS

CHAPTER I	Introduction .....	1
	1. Progress of recent excavations .....	1
	2. Preservation and maintenance .....	3
	3. Publication of the report .....	4
CHAPTER II	Outline of excavation .....	5
	1. Excavation areas .....	5
	2. Order of excavations .....	7
	A. Excavation No. 27 .....	7
	B. Excavation No. 41 .....	8
	C. Excavation No. 69 .....	8
	D. Excavation No. 72 .....	9
	E. Excavation No. 75 .....	10
	F. Excavation No. 77 .....	11
	G. Excavation No. 81 .....	12
	H. Excavation No. 87 .....	12
	I. Excavation No.117 .....	13
	J. Imperial Residence Compound (Dairi) Investigatory Committee Meeting .....	14
	3. Excavation diary .....	15
	A. Excavation No. 27 .....	15
	B. Excavation No. 41 .....	17
	C. Excavation No. 69 .....	18
	D. Excavation No. 72, north .....	20
	E. Excavation No. 72, south .....	21
	F. Excavation No. 75 .....	21
	G. Excavation No. 77 .....	22
	H. Excavation No. 81, east .....	24
	I. Excavation No. 81, west .....	24
	J. Excavation No. 81, central .....	25
	K. Excavation No. 87, north .....	25
	L. Excavation No. 87, south .....	26
	M. Excavation No.117 .....	27

CHAPTER III	The site .....	29
	1. Constitution of the site .....	29
	A. Topography prior to excavation .....	30
	B. Ancient topography .....	31
	2. Features .....	33
	A. Gate and corridor location .....	34
	B. Palace buildings location .....	56
	C. Plaza location .....	76
	D. Eastern palace precincts location .....	84
	E. Imperial Food Servery location .....	92
CHAPTER IV	Artifacts .....	97
	1. Wooden tablets .....	98
	A. from ditch SD3715 .....	98
	B. from ditch SD5564 .....	105
	C. from pit SK5535 .....	105
	D. from ditch SD5490 .....	106
	E. from ditch SD3765 .....	106
	F. from pit SK3730 .....	107
	G. from building SB7802 .....	107
	H. summary .....	112
	2. Roof tiles .....	115
	A. from ditch SD3765 .....	117
	B. from buildings SB7801 and SB7802 .....	117
	C. from corridor SC5500 .....	120
	D. from corridor SC3810 and building SB7750 ..	123
	E. from the palace buildings location .....	124
	F. from ditch SD3715 .....	125
	G. from other features .....	126
	3. Building material .....	130
	A. Pillar bases and foundation board .....	130
	B. Framework of well SE9210 .....	140
	C. Materials of a scale-model building .....	144
	D. Stone, etc .....	149
	4. Pottery .....	153
	A. from building SB7802 .....	156
	B. from compound wall SA3777 .....	160
	C. from compound wall SA109 .....	162
	D. from feature SX6600 .....	165
	E. from building SB7150 .....	166
	F. from Phase II buildings such as SB6633 ...	166
	G. from Phase II ditches such as SD8211 .....	167
	H. from pit SK8212 .....	168
	I. from well SE9210 .....	169

J.	from building SB8224	170
K.	from ditches SD6631, SD6633, SD7175	171
L.	from ditch SD3765	172
M.	from ditch SD5505	172
N.	from ditch SD3715	172
O.	from pit SK3784	176
P.	from pits SK8316, SK8317, SK8233	178
Q.	from pit SK3730	180
R.	unusual kinds of pottery	181
S.	<i>haniwa</i> from square mounded tomb SX7800, etc	186
5.	Wooden objects	188
A.	from building SB7802	188
B.	from ditch SD3715	195
C.	other wooden objects	201
D.	identification of tree species	205
6.	Metal and stone objects	207
7.	Coins	209
CHAPTER V	Articles	213
1.	Changing configurations at the location of the First Imperial Audience Hall (Daigokuden)	213
A.	Features dating to the periods prior to and period of palace construction	213
B.	Phase I features	214
C.	Phase II features	220
D.	Phase III features	223
2.	The nature of the location of the First Imperial Audience Hall	225
A.	Examination of various hypotheses	225
B.	The dating of phase I features	226
C.	Palace buildings discerned from Phase II features	230
D.	The residence of Retired Emperor Heizei	231
E.	Reexamination of the Saigû (‘western palace’)	233
F.	The Hanyuan-tien and Linte-tien of the Daming Palace	234
3.	Reconstruction of the architectural composition by phase	236
A.	Phase I buildings	236
B.	Phase II buildings	238
C.	Phase III buildings	240
4.	Roof tiles	242

A.	Revision of the eaves-tile chronology . . . . .	242
B.	The relationships between eaves-tile combinations . . . . .	243
C.	Relationships between same-mold eaves-tiles . . . . .	247
5.	Pottery . . . . .	251
A.	Reconsideration of Nara palace IV and VII pottery types . . . . .	251
B.	The construction of dining-tray shaped pottery . . . . .	258
6.	Conclusions . . . . .	262
	Supplementary Tables . . . . .	265
	English summary . . . . .	281

## FRONTISPIECE

The location of the First Imperial Audience Hall (Daigokuden)  
from the east

## SUPPLEMENTARY TABLES

1	Tabulation of the important buildings .....	266
2	Classification of rounded eaves-tiles .....	268
3	Classification of flat eaves-tiles .....	272
4	<i>Haji</i> ware shape-types at the Nara palace .....	276
5	<i>Sue</i> ware shape-types at the Nara palace .....	278

## ILLUSTRATIONS

1.	Areal divisions of the excavated area .....	6
2.	Major features of excavation no. 27 .....	15
3.	Major features of excavation no. 41 .....	17
4.	Major features of excavation nos. 69 and 72 .....	19
5.	Major features of excavation no. 75 .....	22
6.	Major features of excavation no. 77 .....	23
7.	Major features of excavation no. 81, east .....	24
8.	Major features of excavation no. 81, central and west .....	24
9.	Major features of excavation no. 87 .....	25
10.	Major features of excavation no. 117 .....	27
11.	Present topography and boring investigation .....	29
12.	Topographical changes at the location of the First Imperial Audience Hall (1) .....	30
13.	Topographical changes at the location of the First Imperial Audience Hall (2) .....	31
14.	Stratigraphic profile of the earthen foundation platform for building SB7801 .....	35
15.	Gravel pavement around the northern stairs of building SB7801 .....	37
16.	Foundation stone installation for corridor SC5600 and blind ditch .....	38
17.	Stratigraphic profile of the earthen platform foundation for corridor SC5600 .....	39
18.	Stratigraphic imposition of building SB7802 and corridor SC5600 .....	42

19. Posthole shapes for building SB7802 .....	43
20. Remains of foundation stone setting for corridors SC5500 and SC5600 .....	44
21. Stratigraphic profile of earthen foundation platform for corridor SC5500 .....	45
22. Pillar bases for compound wall SA3777 .....	46
23. The consolidation of SD5560 and SD5561 ditches .....	46
24. Ditches SD5562 and SD5563 connecting to SD5588 .....	48
25. Ditches SD3790 and SD3770 .....	49
26. Ditch SD3775 and building SB3746 .....	49
27. Stratigraphic profile of earthen foundation for building SB7750A and corridors SC3810A, SC3810B .....	51
28. Remains of foundation stone settings for corridor SC8360; posthole shapes for building SB8230 .....	52
29. Remains of foundation stone settings for corridor SC6670 .....	53
30. Scale drawing of ditch SD3815 .....	54
31. Covering stone for compound wall SA3800 .....	55
32. Scale drawing of ditch SD8227 .....	55
33. Scale drawing of feature SX8332 .....	55
34. Stratigraphic imposition of features SX6600 and SX9230 .....	57
35. The conditions of the filling in of features SX6600 and SX6601 .....	59
36. Stratigraphic profile of ditch SD7165 .....	60
37. Superimposition of posthole shapes of building SB6630, SB6611 and SB6620 .....	62
38. Posthole superimposition of buildings SB7151A · B .....	63
39. Superimposition of postholes of building SB6655 .....	66
40. Posthole superimposition of buildings SB6622 and SB6660 .....	71
41. Superimposition of postholes of buildings SB8218A · B .....	74
42. Stratigraphic profile in the vicinity of ditch SD5590 .....	77
43. Stratigraphic profile of well SE7145 .....	78
44. Scale drawing of well SE9210 .....	80
45. Stratigraphic profile of moat SX7800 .....	83
46. Stratigraphic profile of deposits east so west in the eastern palace precincts .....	86
47. Posthole plans of small-scale buildings .....	88
48. Scale drawing of feature SX3720 .....	89
49. Small bridge SX5543 over ditch SD5530 .....	91
50. Revision in the succession of features at the Imperial Food Servery location .....	93
51. Revision of feature map in <i>Nara Palace Site Report IV</i> .....	93
52. Stratigraphic profile of compound wall SA109 .....	95
53. Scale drawing of ditch SD8077 .....	96

54. Wooden tabs excavated from ditch SD3715 .....	104
55. Wooden tabs excavated from building SB7802 .....	112
56. Percentages of eaves-tiles excavated from the location of the First Imperial Audience Hall .....	115
57. Distribution of eaves-tiles at the location of the First Imperial Audience Hall .....	116
58. Percentages of eaves-tiles excavated in the South Gate area ...	118
59. Percentages of eaves-tiles excavated in the Eastern Tower location .....	119
60. Percentages of eaves-tiles excavated in the area of the compound wall facing east .....	122
61. Percentages of eaves-tiles excavated from the area of the Phase II compound wall facing east .....	123
62. Percentages of eaves-tiles excavated from the Palace buildings location .....	124
63. Percentages of eaves-tiles excavated from ditch SD3715 .....	125
64. Demon-faced roof tiles excavated from the First Imperial Audience Hall location .....	126
65. Roof tile with written character impression .....	128
66. Cover tile of hip rafter excavated from the Yakushiji temple ...	128
67. Plaque-shaped decorative board .....	129
68. Section through wood of pillar base from compound wall SA3777 .....	132
69. Pillared fence postulated from wooden conduit facilities .....	137
70. Diameters of pillar bases excated at Nara palace .....	139
71. Scale drawing of frame of well SE9210 .....	140
72. Construction method of frame of well SE9210 .....	141
73. Reconstruction of <i>azeki</i> .....	142
74. Scale drawing of foundation boards .....	143
75. Sutra store of Hokkedô, Tôdaiji temple .....	143
76. Illustrative reconstruction of model building <i>mitesaki</i> .....	147
77. Foundation stones excavated at the southern ditch SD109 .....	150
78. Composition of stone materials (microscopic photo) .....	150, 151
79. Rim types of <i>Haji</i> ware bowls and plates .....	154
80. Rim types of <i>Sue</i> ware .....	154
81. Pottery from compound wall SA3777 .....	160
82. Pottery excated from the southern side of ditch SD109 .....	163
83. Pottery from the northern side of ditch SD109 .....	164
84. Pottery excavated from feature SX6600 .....	165
85. Pottrey excavated from well SE9210 .....	165
86. Pottery excavated from ditches SD5505 and SD3765; and from pits SK8316, SK8317, and SK8233 .....	173
87. Pottery from pit SK3784 .....	177

88. Pottery from pit SK3730 .....	180
89. Scale drawing of green-glazed vessels .....	182
90. Scale drawing of an inkstone .....	185
91. Kofun period <i>Sue</i> ware .....	187
92. Bottom board of wooden tub excavated from building SB7802 .....	191
93. Pole-shaped wooden objects excavated from building SB7802 ...	194
94. Wooden trays and tubs from ditch SD3715 .....	198
95. Wooden objects excavated from SD3715 .....	198
96. Features pre-dating palace construction .....	213
97. Major features of Phase I-1 .....	214
98. Major features of Phase I-2 .....	215
99. Major features of Phase I-3 .....	216
100. Major features of Phase I-4 .....	217
101. Divisioning of space in the First Imperial Audience Hall within the Nara palace .....	218
102. Plan of building placement in Phase I .....	219
103. Major features of Phase II .....	221
104. Plan of building placement in Phase II .....	222
105. Major features of Phase III .....	223
106. Plan of building placement in Phase III .....	223
107. The northwestern corner of the Imperial Residence Compound seen in an old map of the Heian Palace .....	232
108. Transformation of the locus of the First Imperial Audience Hall .....	232
109. Comparison of building SB7200 with the Hanyuan-tien at the Daming palace .....	235
110. Comparison of the central building of Phase II with the Linte-tien at the Daming palace .....	235
111. Reconstruction of the hip roof construction on building SB7200 .....	237
112. Eaves-tiles from the Second Imperial Audience Hall and the Halls of States (Chôdoin) .....	243
113. A tile of the same mold as 6284F .....	248
114. Same-mold eaves-tiles from Nara palace and Kuni palace .....	250
115. Two varieties of 6320A tiles .....	251
116. Body paste of different groups of pottery (enlarged photo) .....	254-255
117. Ceramic body taken by polarized light .....	254-255
118. Florescent X-ray analysis of pottery .....	257
119. Sets of dishes from building SB7802 .....	260

## TABLES

1. Duration of excavations and excavated area quantifications . . . .	5
2. Amount of Construction postulated for the eastern half of the First Imperial Audience Hall location . . . . .	33
3. Measurements of the wooden tabs excavated from ditch SD3715 . . . . .	104
4. Measurements of wooden tabs excavated from ditch SD7802 . . . .	112
5. List of wooden tablets with inscribed dates . . . . .	113
6. Measurements and tree species identification of pillar bases and foundation boards . . . . .	131
7. Measurements of wooden conduits . . . . .	134
8. Measurements of the covered drain lid . . . . .	136
9. Line of pillars demarcating a large area . . . . .	138
10. Calculation of the tree age of pillar bases . . . . .	140
11. Comparison of profile measurements of <i>azeki</i> . . . . .	143
12. Types of stone among the foundation stones of temples in Nara Prefecture . . . . .	151
13. Phase divisions of pottery from Nara palace . . . . .	153
14. Quantities of pottery IV and V from Nara palace . . . . .	155
15. Composition of pottery excavated from building SB7802 . . . . .	157
16. Composition of pottery excavated from compound wall SA3777 . . . . .	161
17. Composition of pottery from the ditch on the south side of SA109 . . . . .	162
18. Composition of pottery from the ditch on the north side of SA109 . . . . .	165
19. Composition of pottery from building SB7150 . . . . .	166
20. Composition of pottery from buildings SB6666, SB7151, and SB7152 . . . . .	167
21. Composition of pottery from ditches SD8211, SD8216 and SD8246 . . . . .	167
22. Composition of pottery from pit SK8212 . . . . .	168
23. Composition of pottery from building SB8224 . . . . .	170
24. Composition of pottery from ditches SD6631, SD6633, SD7175 . . . . .	171
25. Composition of pottery from ditch SD3715 . . . . .	174
26. Composition of pottery from pit SK3784 . . . . .	178
27. Composition of pottery from pit SK8316 . . . . .	179
28. Composition of pottery from pit SK8317 . . . . .	179
29. Composition of pottery from pit SK8233 . . . . .	180
30. Composition of pottery from pit SK3730 . . . . .	181

31. Provenience of green-glazed ceramics .....	182
32. List of pottery with brush writing, brush pictures, stiletto writing, incised designs and stamped characters .....	183
33. Provenience of ceramic inkstone .....	185
34. Measurements of ladle-shaped wooden implement from building SB7802 .....	190
35. Measurements of bottom board of tub from building SB7802 ...	192
36. Measurements of pole-shaped wooden object from building SB7802 .....	195
37. Measurements of bottom board of tub from ditch SD3715 .....	197
38. Measurements of pole-shaped wooden object from ditch SD3715 .....	201
39. Measurements of bottom board of tub from ditch SD9210 .....	204
40. Tree species of wooden objects excavated from the location of the First Imperial Audience Hall .....	206
41. Measurements of coin (1) .....	210
42. Measurements of coin (2) .....	210
43. Sets of eaves-tiles from the location of the First Imperial Audience Hall .....	245
44. Classification of eaves-tiles at the Kuni palace .....	249
45. Methods of manufacture of <i>Haji</i> ware bowl A and plate A ...	254
46. List of analytical materials .....	256
47. Phases of materials to be analysed for body paste composition .....	256
48. Composition of serving dishes from building SB7902 .....	260
49. Composition of serving dishes from compound wall SA3777 ...	262

## ENGLISH SUMMARY

1. The investigation area dealt with in this report is the locus of the First Imperial Audience Hall (Daigokuden), located 500 meters north of the main entrance to the Nara palace at the Suzaku gate. The existence of the palace compound, measuring 180 meters east to west and 300 meters north to south, was previously known from the paddy field and path layouts in that area. Ômiya ('great palace') and Higashi Ômiya ('eastern great palace') occurred also as paddy placenames. According to these place names and land divisions, Sekino Tadashi determined that that area was the Imperial Residence Compound (Dairi), and he speculated that south of there was the Southern Garden (Nan'en). Based on Sekino's treatise, the area designated in the Taisho era (1912-26) as a historical site included the region of the eastern gate on the southern side of the Government Office Compound (Chôdôin), the Imperial Audience Hall and the Imperial Residence Compound.

After this Institute began serious excavation of this site in 1955, the ground plans of the architectural structures were gradually clarified. By 1962, a palace compound equivalent to that in size behind the Mibu gate was postulated to have existed also behind the Suzaku gate. Based on these expectations, the structures behind the Suzaku gate were thought to be the first manifestations of the Imperial Audience Hall, the Imperial Residence Compound and the Government Office Compound—dating to the Nara palace of 710—while the structures beyond the Mibu gate were the second constructions of those building complexes; the latter constructions represented the shifting of the palace during Emperor Shômu's reign in 745.

However, as the excavation of the area of the First Imperial Audience Hall progressed, it became apparent that there was something strange about the positioning of the buildings in the Second Imperial Audience Hall and Imperial Residence Compound to the east. The opinion was formed that in the period of the construction of the initial Nara palace, the Imperial Residence Compound was not located in this area. In this report, the Imperial Audience Hall of the period of palace construction is postulated to have been in this area and therefore the name 'First Imperial Audience Hall' is employed.

Topographically, the northern one-third of this area lies on the tip of a terrace (73 m. msl) extending from the Nara-yama Hills; and the remaining two-thirds lie on the alluvial apron of the Nara Basin lowlands (68.5 m. msl at the southern edge of the First Imperial Audience Hall location). Excavations of this location were carried out in 1958 at two places on the south side of First Street (Ichijô dôri) in the Nara capital grid plan of streets. Nothing more was done than these small excavations until 1965 when serious excavation was undertaken. From then until 1979, twelve separate investigations were carried out, earth being removed over 383.3 ares and almost all of the features in the eastern half of the area were exposed. Places yet uninvestigated are the northernmost part of the First Street thoroughfare and one portion of the southern extremity. The former is a very important locus, but there are no immediate plans for its excavation. For the 1,600 square meters area of the latter, its situation can be analogized from

the features nearby.

2. The features in the area of the First Imperial Audience Hall can be assigned to three phases between 710 and 835, that is from the beginning of the Nara period to the early Heian period. They represent the construction and layout of palace compounds with special characteristics for each phase. Phase I, an area 600 *shaku* (176.6 meters) east to west and 1,080 *shaku* (317.7 meters) north to south was enclosed by a corridor opening in the center of the southern side for the main gate. The northern third of the compound was raised about two meters to form a platform which supported the Imperial Audience Hall and the rear palace (*kôden*). The southern two thirds formed a gravel-paved courtyard with no architectural structures whatsoever. This was the situation when the capital was removed from the Fujiwara palace in the southern part of the Nara Basin (Phase I-1) to the Nara palace in the northern basin. Subsequently, the Government Office Compound was built in the southern portion of the palace, and in the 720's, towers were added on both sides of the southern gate (Phase I-2). The construction of the towers, together with the Government Office Compound, was designed to enhance the grandeur of the vista in this area. At the time of moving the capital to Kuni, the Imperial Audience Hall and the corridor along the eastern side of the compound were moved to the Kuni palace, which was within present-day Kyoto Prefecture. Between the years 739 and 745, the site of the corridor on the eastern side came to be sheltered by a wooden fence (Phase I-3). The same kind of activity was probably carried out in the as-yet unexcavated western portion as well. After the capital was moved back to Nara in 745, the eastern corridor was rebuilt, but there is no trace that the Imperial Audience Hall was reconstructed. Nevertheless, according to a wooden tablet inscribed in 753 when all Phase I structures were supposed to have been completely extinct, a building called the Great Hall (*Ôdono*) existed there, and the rear palace (*kôden*) is thought to have lasted into this latter phase (Phase I-4). Again, according to wooden tablets, the South gate at this time was below the garrison of the Headquarters of the Palace Gate Guards (*Emonfu*), and it was treated as one of a lesser line of gates than the gates leading into the Imperial Audience Hall and Imperial Residence Compound.

Features of Phases I-1 and 2 encompassed the Imperial Audience Hall of the early Nara period, and the compound layout of this First Hall area was drastically different from that of the preceding Fujiwara palace, from the Second Hall construction at Nara palace and to the later Naniwa palace. This is something that cannot be comprehended from previous conceptualizations of the palace grounds but is known only through excavation. It is now thought that the First Imperial Audience Hall was built on the model of the Hanyuan-tien at the Chang-an capital of the T'ang Dynasty in China.

Features of Phase II began to be constructed just after 753 and continued through the latter half of the Nara period. During this time, the corridor was reduced to a size of 600 *shaku* (176.6 m.) east to west and 620 *shaku* (186.08 m.) north to south. Lining up the northern boundary and the southern boundary with the Imperial Residence Compound on the east, it is obvious that the Imperial Audience Hall was consciously established in contrast to the Residence Compound. The

earthen platform was leveled in the north and earth mounded in the south to form a base for constructing the buildings. In all, 27 structures were regularly laid out on a grid of 3 meter basic units; these buildings included the main audience hall placed in the center, auxiliary halls on either side, and various associated outbuildings surrounding these main structures in a manner not seen elsewhere. A special characteristic of the main audience hall was that it consisted of three separate buildings on north to south axes lined up in a row. These features can be equated with the Saigû ('western palace') where important ceremonies were conducted in the latter half of the Nara period; its function can be envisioned to have been similar to that of the Imperial Residence Compound. The phase which these buildings belong to was also the period in which one famous political figure of the Nara period, Fujiwara Nakamaro, was influential. The palace appears to have been assigned a very different function (under his direction) than the Imperial Audience Hall and Residence Compound had up until then it was in the Western Palace that Dôkyô, a priest who had reached the highest rank, received the greetings of officials of lesser rank than Ô'omi. It was also here that the Empress Shôtoku died.

Features of Phase III followed the same layout as those of Phase II; they comprised the Heizei palace built by the Retired Emperor Heizei as separate from the main palace at the Heian capital in Kyoto. 14 buildings stood on the foundation platform, and their placement had many things in common with the Imperial Residence Compounds of both the previous Nara palace and the Heian palace in Kyoto. The ground plans of these buildings indicate they were built with some early 9th century architectural characteristics such as broad eaves and modified corners. However, there are not a few aspects in which this palace differed from the Nara and Heian Imperial Residence Compounds. It probably employed the same spatial boundaries as those, but this Heizei palace built by the Retired Emperor Heizei was not a central palace of the capital but merely a detached palace. Although the Imperial Residence Compound was constructed *en toto*, the Imperial Audience Hall remained unfinished; that is, the main audience hall was completed, but no traces exist of any corridors or gates built to surround it.

In consequence of clarifying the nature of the First Imperial Audience Hall, it was necessary to re-analyze the Imperial Food Servery location in the north which has been previously published. The immediate reason for the review was that previously, the corridor of the First Imperial Audience Hall was not recognized to have extended into the northern area. At this point, a revised draft is tentatively presented.

Based on the features in the area of the First Imperial Audience Hall, the superstructures of some of the buildings have been reconstructed. It is understood that there were probably many differences in architectural features between the various phases. These are tentative drafts, however, and general corrections will be sought.

3. Among the artifacts, the group of materials excavated from the foundation board remains of building SB7802 plays a very important role in reconstructing the use of this area. According to the wooden tablets, the building was station for the Imperial Gate Guards (Kadobe) and Imperial Palace Guards (Eji) under the Emonfu which protected

this area, and their working conditions can be inferred from the material remains. On one hand, clues to the form of their daily meals can be had through analysis of the ceramic and wooden objects. On the other hand, the excavation of parts of a model building indicates that this model 1/10th lifesize was installed at the site. As for the pottery, analysis of the body past was carried out, demonstrating differences in location of manufacture.

Roof tiles were discovered throughout the area in great numbers; from these, the relations between features and the roof tiles' chronology was managed; and while in part modifying this chronology, the combinations of eaves-tiles could be postulated for each building. In this site report, artifacts associated with architectural features are relatively numerous. Furthermore, through the analysis of the raw materials used to construct the wooden conduits, the nature of pillared fences—what heretofore had been called palisades or wood fences—was grasped. From a servants entryway in a log storehouse, reused as a well lining, the original shape of the storehouse was also reconstructed. At the same time, the varieties of stone and wood materials were determined, and the source of the stone as well as the age of the wood could be postulated.

4. As indicated in this site report, there has been a dramatic increase in our understanding of the area of the First Imperial Audience Hall which unfolded behind the main Suzaku gate entryway to the Nara palace. However, there are not a few unsolved problems, and parts of the interpretation rest on supposition. With the results of future excavations, we should be able to produce an even more detailed picture while having essential facts corrected. Here we have adopted the policy of not making comparisons between the First Imperial Audience Hall and other areas of the palace—such as the First Government Office Compound in the south or the Imperial Residence Compound, the Second Government Office Compound and Second Imperial Audience Hall in the east—any more than necessary. Nevertheless, it hardly needs saying that these areas are important, and the present situation where definitive comparisons with these areas have not been made merely invites misunderstanding.

## PLANS

1. Topographic map of entire Nara palace site
2. Distribution of features in the First Imperial Audience Hall location

### *Location*

3. 6ABP; 6ABQ; 6ABC; 6ABD  
Distribution of features in palace buildings area
4. 6ABE-M·P  
Plan of Eastern palace precincts
5. 6ABR-Q; 6ABS-E  
Corridor and Eastern palace precincts
6. 6ABR-Q; 6ABE-M  
Corridor and Eastern palace precincts
7. 6ABR-P; 6ABE-K  
Plaza, corridor and Eastern palace precincts
8. 6ABQ-B; 6ABD-D  
Plaza, corridor and Eastern palace precincts
9. ABD-C; 6ABQ-A  
Plaza, corridor and Eastern palace precincts
10. 6ABP-B; 6ABQ-A  
Corridor location
11. 6ABR-H  
Corridor location
12. 6ABR-J·H  
Corridor
13. 6ABR-G·H  
Plaza location
14. 6ABR-G  
Phase II corridor and plaza location
15. 6ABQ-D  
Plaza location
16. 6ABQ-A·C  
Plaza location
17. 6ABP-B; 6ABQ-A  
Palace buildings and plaza location
18. 6ABC-U·V  
Eastern palace precincts
19. 6ABC-U  
Eastern palace precincts
20. 6ABP-B  
Palace buildings location

21. 6ABP-A·B  
Palace buildings location
22. 6ABP-A  
Palace buildings location
23. 6ABP-A  
Palace buildings location
24. 6ABO-P; 6ABP-A  
Location of palace buildings, Phase II corridor and  
Imperial Food Servery
25. 6ABP-B·D  
Palace buildings location
26. 6ABP-A·F  
Palace buildings location
27. 6ABP-A  
Location of palace buildings and Phase II corridor
28. 6ABP-A·F  
Palace buildings location
29. 6ABP-D  
Palace buildings location
30. 6ABP-D·F  
Palace buildings location
31. 6ABP-F·G  
Palace buildings location
32. 6ABP-G  
Palace buildings location
33. 6ABO-D·E·F  
Imperial Food Servery
34. 6ABO-E·H·G·J·L  
Imperial Food Servery
35. 6ABO-L·N·O·P  
Imperial Food Servery
36. Reconstruction of the buildings
  1. Front elevation of Phase I building
  2. Front elevation of Phase II building
  3. Front elevation of Phase III building
37. Reconstruction of Phase I building SB7200
38. Reconstruction of Phase I buildings SB7200
  1. SB7200 2. SB8120·SC8098
39. Reconstruction of Phase I buildings
  1. SB7200·SB8120·SC5500 from east
  2. SB7801·SC5600·SC7820
40. Reconstruction of Phase I buildings SB7802·SC5500
41. Reconstruction of Phase II buildings SB7802·SC5500

1. SB6610·SB6611·SB7150·SB7152·SB6640·SB6650
2. SB6610·SB6640·SB6660
42. Reconstruction of Phase II buildings
  1. SB6660·SB6655·SB6663·SB6666·SB6669
  2. SB8210·SB8215
  3. SB6640·SB6650
  4. SB6650
43. Reconstructon of Phase I buildings
  1. SB8245      2. SB8302
  3. SB7750A·SC3810A
44. Reconstructon of Phase III buildings
  1. SB6620      2. SB7170      3. SB7173
45. Reconstructon of Phase III buildings
  1. SB6622      2. SB9300      3. SB8218·SB8219
  4. SB7141      5. SB9220      6. SB7803
46. Recontsion of Phase III buildings
  1. SB7750B      2. SB8310      3. SB7770

## PLATES

1. Nara Palace site
2. First Imperial Audience Hall location

### *Location*

3. 6ABR-G·H·J (Corridor)
  1. overview from west
  2. overview from east
4. 6ABR-H·J (Corridor)
  1. South gate SB7801 from west
  2. South gate SB7801, ditch SD7805, SD7760 from south
  3. South gate SB7801 stairs, middle stratum  
gravel pavement from south
5. 6ABR-H·J (Corridor)
  1. South gate SB7801 edge of earthen foundation  
platform from west
  2. same from east
  3. South gate SB7801 and corridor SC5600 roof tile  
accumulations from east
  4. same after semoving tiles
6. 6ABR-H·J (Corridor)
  1. South gate SB7801 pounded earth platform
  2. blind ditch SD7807 and ditch SD5565 from south

3. blind ditch SD7810 from north
4. South gate SB7801 stones piled in eastern section of subterranean substructure
7. 6ABR-H (Corridor)
  1. Corridor SC5600 and Eastern Tower SB7802 from east
  2. same
  3. same after discovery of blind ditch SD5557 and rain gutter SD7813A
8. 6ABR-H (Corridor)
  1. Eastern tower SB7802 row of pillars on south side from south
  2. Eastern tower SB7802 and corridor SC5600 from east
9. 6ABR-H (Corridor)
 

Posthole shapes and the remains of foundation stone settings

  1. building SB7802(ni)4
  2. building SB7802(i)3
  3. building SB7802(ni)3
  4. building SB7802(i)5
  5. building SB7802(ro)3
  6. corridor SC5600(i)12
10. 6ABR-H (Corridor)
  1. blind ditch SD5557 and rain gutter SD7813A from east
  2. blind ditch SD5557 from north
11. 6ABR-H (Corridor)
  1. Eastern Tower SB7802 and middle stratum gravel pavement from north
  2. same, the northwestern corner
  3. ditch SD5590 from west
12. 6ABR-H (Plaza)
  1. building SB7803 from east
  2. building SB7803 and ditch SD7760 from north
  3. Shimotsu-michi road SD7787 and ditch SD7760 from north
13. 6ABE-M·P ; 6ABS-E ; 6ABR-Q
  1. overview from west
  2. overview from south
  3. overview from northeast
14. 6ABE-M ; 6ABR-Q ; 6ABS-E (Corridor)
  1. corridor SC5500 and fence SA3777 from north
  2. corridor southeastern corner, from south
15. 6ABE-M ; 6ABR-Q (Corridor)

Remains of foundation stone settings and posthole shapes

1. corridor SC5500(ha)4
  2. corridor SC5600(ha)4
  3. fence SA3777 pillar #12
  4. fence SA3777 pillar #6
  5. fence SA3777 pillar #3
  6. fence SA3777 pillar #5
16. 6ABE-M ; 6ABR-Q ; 6ABS-E (Corridor)
1. blind ditch SD5555 and wooden conduit SD5560 from west
  2. wooden conduit SD5561, SD5560, SD5526, Halls of State fence SA5550, SA5551 from west
  3. ditch SD3715, wooden conduit SD5562, SD5564 from east
17. 6ABS-E (Corridor)
1. wooden conduit SD5561, SD5560 juncture from south
  2. same after removal of lid
18. 6ABE-M (Eastern precincts)
1. wooden conduit SD5562 from east
  2. same after removal of cover
  3. same, junctre
  4. wooden conduit SD5563 aperture closure from west
19. 6ABE-M·P ; 6ABS-E(Eastern precincts)
1. ditch SD3765 from north
  2. ditch SD3765 ; Halls of State fence SA5550 from south
20. 6ABE-M·P (Eastern precincts)
1. ditch SD3715, SD5530 from south
  2. building SB5510 from south
  3. ditch SD3715, building SB5521, SB5520 from north
21. 6ABD-D ; 6ABE-K ; 6ABQ-B ; 6ABR-P
1. overview from east
  2. same from west
22. 6ABR-P (Corridor)
1. corridor SC5500 from south
  2. fence SA3777, corridor SC5500, compound wall SA3800 from northeast
  3. compound wall SA3800, corridor SC5500 from north
23. 6ABQ-B ; 6ABR-P (Corridor)
1. fence SA3777, scaffold SS3795 from north
  2. same
24. 6ABQ-B ; 6ABR-P (Corridor)
1. rain gutter SD3790, III compound wall SA3810A

- from north
  - 2. rain gutter SD3790, wooden conduit SD3770
  - from south
  - 3. same, detail
- 25. 6ABR-P (Corridor)
  - 1. wooden conduit SD3770 from west
  - 2. same, juncture
- 26. 6ABG-B ; 6ABR-P (Phase II corridor)
  - 1. corridor SC3810A from east
  - 2. same from west
  - 3. pit SK3784, scaffold SS3818 from west
- 27. 6ABQ-B (Phase II corridor)
  - 1. corridor SC3810A overlapping rain gutter SD3790
  - from north
  - 2. stone-lined conduit SD3815 from south
  - 3. same
- 28. 6ABD-D (Eastern precincts)
  - 1. ditch SD3775, fence SA3780 from east
  - 2. gate SB3746 from north
  - 3. ditch SD3775 (stone-lined section) from west
- 29. 6ABD-D ; 6ABE-K (Eastern precincts)
  - 1. ditch SD3715, fence SA3750 from north
  - 2. ditch SD3775 emptying into ditch SD3715
  - from east
  - 3. bridge SX3720 from south
- 30. 6ABD-D ; 6ABE-K ; 6ABR-P (Eastern precincts, plaza)
  - 1. ditch SD8237, SD8239 from east
  - 2. ditch SD3765 from south
  - 3. fence SA3740 from west
- 31. 6ABR-P (Plaza)
  - 1. wheel rut SX3773 from southwest
  - 2. building SB3773 from southwest
  - 3. building SB3774 from southwest
- 32. 6ABQ-C·D ; 6ABR-G
  - 1. overview from south
  - 2. same from north
  - 3. same from west
- 33. 6ABR-G (Phase II corridor)
  - 1. gate SB7750 from east
  - 2. same from south
  - 3. same from west
- 34. 6ABQ-D ; 6ABR-G (Phase II corridor)
  - 1. corridor SC8310A·B from west

2. rain gutter SD7779, building SB7769, pit SK3784 from east
3. rain gutter SD7796, SD3778 from east
35. 6ABR-G (Phase II corridor)
  1. gate SB7770 from south
  2. stone-lined conduit SD7799 from south
  3. compound wall SA3810B, cross-section, from east
36. 6ABR-G (Plaza)
  1. plaza south of corridor, from northeast
  2. building SB7765 from east
  3. fence SA3740 from west
37. 6ABQ-C·D (Plaza)
  1. building SB7780 from south
  2. building SB7790 from north
  3. square mounded tomb SX7800, Shimotsu-michi road gutter SD7787 from north
38. 6ABQ-C (Plaza)
  1. overview from south
  2. same from north
39. 6ABQ-C (Plaza)
  1. ditch SD7132, building SB7141 from north
  2. building SB7141, SB7140, SB7134 from east
  3. building SB7141 from east
40. 6ABQ-C (Plaza)
  1. ditch SD7142 from east
  2. ditch SD7133 from south
  3. pile of volcanic tuff SX7138 from south
  4. fence SA7130 from west
41. 6ABD-C ; 6ABQ-A
 

overview from west
42. 6ABQ-A (Corridor, plaza)
  1. plaza, corridor from south
  2. same from southeast
  3. sloping path SF9232, buildig SB9220 from norh
43. 6ABQ-A (Plaza)
  1. sloping path SF9232, gravel pavement from west
  2. sloping path SF9232, its protecting wall of piled bricks
  3. protecting wall of piled stone SX9230 from west
44. 6ABQ-A (Plaza)
  1. upper stratum gravel pavement, near sloping path, from south
  2. lower stratum gravel pavement, near sloping path,

- from south
  - 3. piled brick protecting wall SX6600, piled stone protecting wall SX9230 from west
- 45. 6ABQ-A (Plaza)
  - 1. building SB9220 from south
  - 2. same from east
  - 3. ditch SD9236 from west
- 46. 6ABQ-A (Plaza)
  - 1. well SE9210 from southeast
  - 2. same from east
  - 3. same, the well frame
- 47. 6ABD-C ; 6ABQ-A (Corridor)
  - 1. fence SA3777, compound wall SA3800 from north
  - 2. corridor SC5500, SC8360, fence SA3777, compound wall SA3800 from south
- 48. 6ABD-C ; 6ABQ-A (Corridor)
  - 1. rain gutter SD5575, scaffold SS3795 from south
  - 2. rain gutter SD3790, scaffold SS3795 from north
  - 3. building SB9213 from north
  - 4. rain gutter SD8226 from south
- 49. 6ABQ-A (Corridor)
  - 1. remains of pounded earth platform SS9218, SD9219 from south
  - 2. gate SB9217 from south
  - 3. compound wall SA3800 cross-section from south
- 50. 6ABP-A·B·D (Palace buildings) overview from south
- 51. 6ABP-A·B·D (Palace buildings)
  - 1. overview from northeast
  - 2. same
- 52. 6ABP-D (Palace buildings)
  - 1. building SB6610, SB6611, SB6620 from south
  - 2. same from west
  - 3. same, part, from south
- 53. 6ABP-D (Palace buildings)
  - 1. building SB6611, SB6620 where they overlap, from east
  - 2. posthole ro-7 of building SB6620, from south
  - 3. posthole ro-5 of same, from south
- 54. 6ABP-D (Palace buildings)
  - 1. building SB6640, SB6610 from east
  - 2. ditch SD6612 from north
  - 3. ditch SD6609, SD6608 from south
- 55. 6ABP-D (Palace buildings)

- buildings SB6660A·B, SB6655, SB6622 from east
56. 6ABP-B (Palace buildings)
    1. building SB6622, SB6660A·B ditch SD6612 from west
    2. building SB6655, fence SA6623 from north
    3. same from west
  57. 6ABP-A (Palace buildings)
    1. building SB6663, fence SA6624 from east
    2. same from north
    3. building SB6650 from east
  58. 6ABP-A (Palace buildings)
    1. building SB6666, fence SA6625 from east
    2. building SB6669, fence SA6625, ditch SD6618, SD6632, SD6631 from east
  59. 6ABP-A (Palace buildings)
    1. posthole ni-5 of building SB6660
    2. // i-3 // SB6666
    3. // ho-8 // SB6660
    4. // he-4 // SB6663
    5. // i-3 // SB6640
    6. // ha-3 // SB6640
  60. 6ABP-A (Corridor)
    1. building SB6669 and Phase II corridor SC6670 from south
    2. Phase II corridor SC6670 and fence SA6635 from west
    3. remains of foundation stone setting i-12
    4. same, i-14
    5. same, i-15
    6. same, i-16
  61. 6ABP-B·D(Palace buildings)
 

piled brick protecting wall SX6600 and gravel pavement
  62. 6ABP-D (Palace buildings)
    1. piled brick protecting wall SX6600
    2. same, detail
  63. 6ABP-D (Palace buildings)
    1. stairway SX6601 from southwest
    2. same from east
  64. 6ABP-D (Palace buildings)
    1. stairway SX6601 from south
    2. same from north
    3. row of pillars SX6604 from north
  65. 6ABP-F·G (Palace buildings)

1. overview from south
  2. same from east
  3. same from northeast
66. 6ABP-F·G (Palace buildings)
1. building SB7151A·B, SB7150 from north
  2. building SB7150, SB6650 from east
67. 6ABP-G (Palace buildings)
1. building SB7170, SB7151A·B, SB7152, SB6621, ditch SD7175 from east
  2. building SB7170, SB7151A·B from south
  3. building SB7170 from west
68. 6ABP-G (Palade buildings)
1. remains of end foundation stone hole SD7165 from east
  2. same, central stairway from south
  3. remains of end foundation stone hole SD7167
69. 6ABP-G (Palace buildings)
1. building SB7151A·B, SB7152, SB7170 from east
  2. building SB7170 from west
  3. building SB7152, ditch SD7163, fence SA6626 from west
70. 6ABP-F (Palace buildings)
1. building SB6650, SB7173, ditch SD6608, SD7177, SD7175 from south
  2. building SB6621, ditch SD7175 from west
71. 6ABC-U·V ; 6ABP-A·B  
overview from west
72. 6ABP-B (Palace buildings)
1. building SB8300, SB6660 from south
  2. building SB8300 from west
  3. building SB8302 from south
73. 6ABP-B (Palace buildings)
1. building SB8245, SB8305 from northeast
  2. same from north
  3. ditch SD6607, corridor SC8360 from east
74. 6ABP-B (Palace buildings)
1. posthole ho-2 of building SB8300
  2. posthole ni-1 of SB8200 (right) and posthole ha-1 of SB6660 (left)
  3. posthole ha-1 of SB8300
  4. posthole ro-1 of SB8300
75. 6ABP-B (Palace buildings)
1. piled brick protecting wall SX6600 and building SB8300

- from south
  - 2. piled brick protecting wall SX6600 from southeast
  - 3. same, corner from south
  - 4. same, restored
- 76. 6ABP-B ; 6ABC-V (Corridor)
  - 1. corridor SC5500, SC8360, fence SA3777 from south
  - 2. same from north
- 77. 6ABP-B ; 6ABC-V (Corridor)
  - 1. gate SB8310 from east
  - 2. same from north
  - 3. overlapping postholes ; from left : SA3777, SC8360, SB8310
- 78. 6ABP-B (Corridor)
  - 1. tile conduit SD8332, rain gutter SD8246 from north
  - 2. conduit SD8311, corridor SC8360 overlapping, from west
  - 3. ditch SD6607 from west
- 79. 6ABC-V (Easern precincts)
  - 1. building SB8320, SB8325 from south
  - 2. fence SA8238, gate SB8335, ditch SD8237, SB8339 from south
  - 3. ditch SD3715 from south
- 80. 6ABP-A ; 6ABC-U
  - 1. overview from east
  - 2. same from west
- 81. 6ABP-A (Palace buildings)
  - 1. building SB8219, SB8224 from north
  - 2. building SB8224, SB8219, SB8245 from north
  - 3. building SB8245, fence SA6624 from west
- 82. 6ABP-A (Palace buildings)
  - 1. building SB8219, SB8224, fence SB6629 from west .....
  - 2. same from east
- 83. 6ABP-A (Palace buildings)
  - 1. building SB8210, fence SA6629, SA8217 from west
  - 2. building SB8215, fence SA8217, ditch SD6631 from east
  - 3. fence SA6629, SA6629, SA8223, building SB8218A•B, SB8222 from west
- 84. 6ABC-U ; 6ABP-A (Corridor)
  - 1. corridor SC5500, SC8360, gate SB8230, fence SA3777 from south
  - 2. fence SA3777, corridor SC8360 from north

85. 6ABP-A (Corridor)
  1. end foundation-stone of compound wall, hitching post remains from south
  2. stone-lined conduit SD8227 from north
  3. remains ha-40 of foundation-stone setting for corridor SC8360
  4. he-43 of same
  5. remains i-10 of same for SC6670
  6. foundation stone ha-2 of building SB8224
86. 6ABC-V (Eastern precincts)
  1. building SB8234, ditch SD8240, fence SA8237, SD8239 from south
  2. ditch SD3715 from south
  3. fence SA8238, ditch SD8237, SD8239 from south
87. 6ABC-U (Eastern precincts)
  1. building SB8240 from north
  2. building SB8240, ditch SD8227 from south
  3. building SB8234 from north
88. 6ABO-E (Imperial Food Servery)
  1. overview from west
  2. same from east
89. 6ABO-E (Imperial Food Servery)
  1. compound wall SA8100, scaffold SS8096 from west
  2. pit SK8080, building SB321 from east
  3. gate SB8101A•B from south
90. 6ABO-E (Imperial Food Servery)
  1. rain gutter SD130, building SB321 from west
  2. pit SK8079, stone-lined conduit SD8077 from west
91. 6ABO-E (Imperial Food Servery)
  1. stone-lined conduit SD8077 from south
  2. rain gutter SD8103 from north
  3. rain gutter SD244 from north
92. 6ABO-L (Imperial Food Servery)
  1. overview from west
  2. same from east
  3. same
93. 6ABO-L (Imperial Food Servery)
  1. building SB167, SB166, SB166, SB8116, rain gutter SD130 from north
  2. part of same, from south
  3. same after removal of gravel paving, from south
94. 6ABO-L (Imperial Food Servery)
  1. rain gutter SD130 from east

2. corridor SA109 from east
3. fill from ditch on northern side, seen from east
95. 6ABO-P (Imperial Food Servery)
  1. overview from east
  2. same from west
  3. compound wall SA109 from east
96. Wooden tablets from ditch SD3715
97. Wooden tablets from ditch SD3715 and pit SK5535
98. Wooden tablets from ditches SD3715, SD5564 and SD3765
99. Wooden tablets from ditches SD3715 and SD5564
100. Wooden tablets from ditches SD3715 and SD5490
101. Wooden tablets from ditches SD3715 and SD5490
102. Wooden tablets from building SB7802
103. Wooden tablets from building SB7802
104. Wooden tablets from building SB7802
105. Wooden tablets from building SB7802
106. Rounded eaves-tiles and flat eaves-tiles
107. Rounded eaves-tiles
108. Rounded eaves-tiles
109. Rounded eaves-tiles
110. Rounded eaves-tiles
111. Rounded eaves-tiles
112. Flat eaves-tiles
113. Flat eaves-tiles
114. Flat eaves-tiles
115. Demon-faced roof tiles
116. Other miscellaneous kinds of rooftiles
117. Pillar base
118. Pillar base
119. Pillar base and foundation board
120. Section through pillar base
121. Section through pillar base
122. Wooden water pipe of SD5563
123. Wooden water pipe of SD5563
124. Detail of wooden water pipe
125. Rim of wooden water pipe
126. Wooden frame of well SE9210
127. Wooden frame of well SE9210
128. Detail of wooden frame
129. Scale-model building
130. Foundation stones
131. *Haji* ware from building SB7802
132. *Sue* ware from building SB7802

133. Pottery from buildings SB6663, SB6666, SB7150, SB7152  
and SB8224
134. Pottery from ditches SD6631, SD7175, SD8214, SD8216  
and pit SK8212
135. *Haji* ware from ditch SD3715
136. *Sue* ware from ditch SD3715
137. Glazed pottery
138. Pottery with written character
139. *Haniwa* from tumulus mound SX7800
140. Wooden objects from building SB7802
141. Wooden objects from building SB7802
142. Wooden objects from building SB7802
143. Wooden objects from building SB7802
144. Wooden objects from ditch SD3715
145. Wooden objects from ditch SD3715
146. Wooden objects from ditch SD3715
147. Wooden objects from ditch SD3715
148. Wooden objects from ditch SD3765, pits SK3730, SK3784  
and well SE9210
149. Cellular tissue of wood
150. Cellular tissue of wood
151. Cellular tissue of wood
152. Cellular tissue of wood
153. Metal and stone objects
154. Coins
155. Coins

---

昭和57年1月20日 印刷

昭和57年1月30日 発行

奈良国立文化財研究所 30周年記念学報 (学報第40冊)

## 平城宮発掘調査報告 XI

第1次大極殿地域の調査

著作権  
所有者 奈良国立文化財研究所

発行者 奈良国立文化財研究所

印刷者 株式会社 奈良明新社

---

